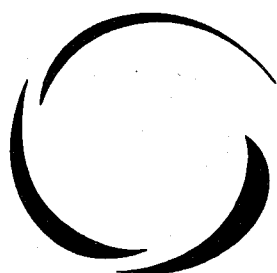


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

吉元 政矩

オーラルヒストリー

元沖縄県副知事



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

吉元政矩 オーラルヒストリー

目次

略歴	4	村山・大田会談	80
第1回	7	橋本政権	81
吉元家のルーツ	7	第3回	87
台湾時代	10	橋本政権(続)	87
組合活動時代	10	李登輝	91
復帰協	13	中国・福建省との交流	94
復帰前後	17	中国、北朝鮮を訪問	96
西銘県政	24	普天間移設	98
西銘県政の限界と大田県政誕生	29	政府の安全保障政策と国際情勢の見方	103
第2回	35	県民投票	106
大田県政誕生の背景	35	普天間移設に対する県政の考え方	107
大田県政での役割	39	県議会との関係	109
一期目の特命事項	47	全県フリー・ゾーン	110
政権交代の影響	50	副知事再任の否決の背景	111
副知事の選任案件	53	那覇軍港移設問題	116
県政と沖縄選出・国会議員との関係	56	大田三選敗北の背景	117
国際都市形成構想と基地返還アクションプログラム	57	フリー・ゾーン構想	124
大田県政の二期目	59	稲嶺県政への不安	129
二つの構想の位置づけ	61	第4回	140
梶山静六氏	65	出身地・与那国	140
基地返還アクションプログラムの背景分析	69	西銘県政下——那覇空港拡張構想	146
代理署名拒否	74	米側からの代替基地案	150
一〇・二一県民大会	77	本土との系列化問題	153

企画調整室時代	155
特別県制構想の背景	157
振計策定の考え方	160
大田県政と沖縄開発庁	162
シンクタンクを積極活用	167
代理署名拒否の背景	170
村山内閣との折衝	172
苦東問題	178
基地返還アクションプログラム	179

第5回

県内の労働組合事情	187
野中氏と移設問題	188
特別自治県構想の考え方	192
全県フリー・ゾーン構想と大田三期目	194
国際都市形成構想の合意形成	197
SACOの感想	210
橋本政権の誕生	211
特別調整費五十億円	218
海上基地を巡る住民投票	220
島田懇談会設置の経緯	223
副知事再任否決と官邸	224
与党・共産党の思惑	229

第6回

県内革新政党的の相関図	235
大田県政の総括	237
再任否決後の吉元氏の去就	239
九八年県知事選の背景	241
県民的なリーダー	244
沖縄の「夜の部」	246
県知事としての大田氏	248

議会対策	251
産業政策批判への反論	254
副知事退任後の県政との関係	257
稲嶺県政	259
小泉政権の沖縄政策	263
沖縄を取り巻く国際情勢	267
沖縄の将来に対する期待と現状の不安	272
次代を担う人材	275
県内政党的の今後	277

第7回

「沖縄21戦略フォーラム」設立の背景	281
知事選の枠組み——公明党の位置づけ	284
二〇〇二年知事選に立候補	289
労組、運動力の低下	294
吉元塾	296
○五年以降の国政、県政の展望	300

第8回

難しい市町村合併	307
「琉球諸島自治政府」構想	310
与那国「島ごと特区」構想	317
基地問題で問われた市町村長のあり方	322
沖縄駐留にこだわらないアメリカ軍	325
アメリカ軍再編で大きく変化する沖縄の兵力配置	327
自衛隊再配備の問題	328
基地問題に影響を与える台湾—中国関係	330
沖縄の「いま」そして「将来」	330
あとがき	377

吉元政矩 経歴

年 月	略歴	
1936年11月	日本最西端の島、与那国町で出生	
1963年	沖縄県祖国復帰協議会・事務局長	
1969年	琉球政府職員で組織する沖縄官公庁労働組合書記長	
1972年10月	沖縄県職員労働組合副委員長	
1974年	同書記長	
1974年	同執行委員長	
1978年11月	沖縄県企画調整部・企画調整室へ職場復帰	※県立芸術大学、沖縄コンベンションセンター、人材育成財団等の企画を担当。
1983年 5月	沖縄県庁を退職、沖縄県労働組合協議会・事務局長に就任	※米軍用地20年強制使用反対東京行動・訪米直訴行動、嘉手納基地包囲行動等を企画
1990年12月	大田昌秀知事就任に伴い、政策調整監に就任	
1993年10月	沖縄県副知事に就任	※政策調整監・副知事として、国際都市形成構想・基地返還アクションプログラムの策定・経済特別区の導入、また雇用開発推進機構の設立等の政策を立案。村山政権で「沖縄米軍基地問題協議会」を閣議決定で設置させ、さらに橋本政権では全閣僚と県知事で構成する「沖縄政策協議会」の設置に尽力。
1997年10月	沖縄県副知事を退任	
1998年 9月	沖縄県地方自治研究センター理事長に就任	
2000年 9月	沖縄県地方自治研究センター顧問に就任	
2001年 5月	沖縄21戦略フォーラム代表就任	

※「沖縄21戦略フォーラム」ホームページより作成

吉元政矩 オーラルヒストリー

第1回

日 時：1999年11月15日（2時間）
場 所：沖縄県地方自治研究センター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

■吉元家のルーツ

佐道 ……副知事になられてからの後の問題は非常に複雑で、しかもいろいろ細かいこともございますので、年表等を参照しながら随時お聞きしていきたいと考えています。今日はそこまで行かないと思いますが、こちらで作りました年表がございますので、ご参照いただければと思います。

今日は伊藤教授からお話がありましたように、先生のバックグラウンドをまずお伺いしたいと思います。私どものオーラルヒストリーは、生まれたときからのお話を伺うということでやっておりますので、まさにお生まれになった頃からお聞きしたいと思います。

先生のご略歴等々を拝見しますと、昭和十一年与那国のお生まれで、台湾に近いところですね。ご講演のときなどに、先祖のルーツは福建にあるというようなことをおっしゃっておられると伺ったんですが、もともとご親戚はみなさんあちらの方だったのかとか、家族構成ですとか、そのあたりからお話を伺いたいです。

吉元 私の家は与那国でも少し古い方に入ります。おふくろの方も、相当長いこと与那国にいるわけです。もともとどこがルーツかというのは、実は私自身つい最近、周囲の人から教えられることになるんです。

そういうことからいうと、私のじいさんあたりですが、与那国の行政とは別に、住民自体で作った自治組織みたいなもの、いわゆる同志会というものがあって、そこで与那国にかかってくる苦しい課題、例えば納税の問題とか、村に関わる重要な事業を決めていたんです。本来なら行政、議会、役場がやるべき課題なんです。そういうことがまだ歴史的に馴染めなかった時代だと思えます。たぶん家のじいさんが、村全体を集めて、直接的に

話し合いを持ち、そういうところで物事の方向を決めていくという役割を持っていたようです。ですからそういう意味で、私のじいさんあたりは、地域の政治的な力を持っていたし、そういうまじめ方をしていたようです。それでいて、議会の議長とか議員とか、あるいは役場の町長とか村長というポジションはやっていない。そういう意味では大変珍しい存在だったんですね。

それには一つルーツがあるような気がして、それ以前は、おやじもじいさんも私に言わなかったことだが、なんとなく与那国の吉元家というのは、男一人ですと続いてきた家なんです。不思議な存在なんです。たまたま複数の男性が生まれると、一人はいなくなるというようなやり方をする。しかし私のおやじの時代になりますと、それは戦時の話ですが、不幸にして弟になる人が太平洋戦争時にフィリピンで亡くなったということで、親父が一人で続く。そういう意味で、たしかに親父の時代までは、吉元家は分家されていないんですね。戸籍上、吉元家は一つなんです。私の時代になって、男二人で、結婚の時に弟が戸籍を分けたというので、初めて民主主義の世の中になったとみんな笑うぐらいなんです。

そういう流れからすると、はっきりはしていないんだけど、わが家は、与那国の一番大きい集落である、いまは祖納の一部ですが、浦野というところがあるんです。その浦野の按司だったという話ですね。按司というのは、琉球国時代に地方を治めるために首里から派遣された役人だと言われているんです。それもはっきりしたルーツが見えない中で、じいさんがそういう仕事をやっていたという言い伝えを、私は親父から聞かされた経緯があるんです。

伊藤 アジというのは漢字があるんですか。

吉元 「按司」ですね。それも、事実関係はわからないんです。そう言われているだけの話です。そういう意味で吉元家は、祖父

の時代に、戦前戦後を通じて、与那国のいくつかの大きな課題をまとめてきた、あるいはそういう役割を負っていたけれど、親父の時代になって、それがいやだった。親父は、与那国で生まれて、那覇に来て、那覇の商業学校を特待生で卒業した。その道を選んだのは、祖父の政治的な仕事で、いつも田や畑などの財産をなくしていたことに対する抵抗と、それを買い戻すということとで商売人になったと聞いているんです。これは親父の口癖ですが、「おまえは政治の道に走るな」ということです。そういう意味で、私が生まれたときから、親父は地域との関係をあまり強くしないよいうな関わりをしていた感じですよ。

ですから（私が）生まれてすぐ、親父は西表で炭坑を経営していた、野田炭坑というのがあるんですが、その会計事務を担当するために、那覇商業を出た後、家族ぐるみで西表に移るということもあった。ですから、祖父の家庭とは違う形の生き方をずつとした。その後、親父の仕事が台湾に移りました。台湾もかつては日本の植民地で日本が支配していたわけですから、そこに西表の石炭を売るための支店ができて、そこに移ったので、私は物心ついたときから台湾の基隆で育っているんです。そういう意味では、私と与那国との関係は、実はそれほど地元には長くないなかった。生まれてすぐ移っていますからね。たぶん、三つぐらいの時に移ったと言われています。

それで戦後、敗戦によって台湾から引き揚げた。文字通り与那国に帰ってきたけれど、それでも一年半ぐらしか与那国にいないんです。そこでは食えないわけですから。海外に行っていた者が全部帰ってきたわけですからね。一時期、一万七千近くに人口が増えた時期があるんです。その時に与那国町になったということです。今は人口千八百人ぐらいの町ですけれどね。

そういうとき、親父は石垣島・石垣市に移るということで、そこで（私は）小学校卒業、中学校卒業、高校卒業というところま

でつながるんです。そういう意味では、私自身の与那国との関わり、実際に与那国で生活したのは、生まれた時期と、戦後帰ってきた一年半ぐらいいだけで、あとは西表であり、台湾であり、石垣市であり、那覇である、ということになる。

ただ与那国に対する思いというのはある。祖父のこともあって、特に親父が政治には手を着けるなどということもあって、私は、高校を卒業して琉球政府時代に職場に入ったのが、今は気象台ですが前の石垣島測候所です。そこで当初六ヶ月近く、賃金がない中で仕事をさせられたということがあったりしました。

伊藤 賃金がないというのはどういうことですか。

吉元 賃金の支払いがない。つまり正式採用ではなかったけれど、職場では正式採用した上で仕事をしながら、実は辞令が六ヶ月後に出るといふ形だったんです。そういう勤務形態は、当時の事情からすると当たり前だったんです。ですからそういう仕組みがどうにも我慢できなかった。しかも、気象台に入った時期、沖縄全体では琉球政府の職場で労働組合を作り始めた時期です。ですから石垣にいた一番最後の段階、つまり一九五八、五九年あたりは、琉球政府の八重山郡に勤務している職員をまとめた労働組合の結成に参加し、そこで執行役員になった。

伊藤 どのぐらいの数がいたんですか。

吉元 あの時は四百人ぐらいたったと思います。その後、労働組合の役員を担当するようになって、なぜか知らないけれど、私は那覇に転勤を命じられるんです。ふつうは、地方から本庁に来るといふのは一種の栄転の取り扱いをするんだけど、私の場合はどうもそうではなかったようです。つまり八重山における労働組合の中心メンバーとして動き始めた時期ですから、そういう意味では煙たがられた。労働組合を結成していなかった那覇の琉球気象台の方に移された、ということですね。

そういう意味で、幼いときから与那国に十分に関われなかった

ということ、その後仕事に入った中で労働組合に目覚めたというか、自分の賃金がないことに対して怒りを覚えて、労働組合結成に参加したこと。そのことが、石垣から那覇の方に転動させられることに、どうもつながった。那覇では琉球気象台に労働組合がつくられていなかったもので、直ちに労働組合をつくる運動をやった、という流れなんです。

伊藤 虎を放ったような感じですね。

吉元 僕がルーツとして福建省との関係に気づく、あるいは周辺から言われたのは、実は大田県政をつくって、同時に私が県庁に入って政策調整監をやった時期なんです。それは福建省との間で経済交流をやるうじゃないかということで、これは私の発案でした。大田県政ができたのは一九九〇年ですが、沖縄が北、つまり日本ばかり見ていたのではどうしても追いつけない。所得は少し低くても、地理的・地政的な条件を頭に置いて、アジア・太平洋のAPEC、ASEANの動きなどを見ながら、今後はきわめて近いところである台湾、六百年の交流の歴史がある福建省・中国との経済交流、文化の交流をもう一度やり直すことによつて三角貿易をしたい。つまり「蓬莱経済圏」をつくらうという政策を大田の一期目の選挙の時から掲げていたものですから、その実践のために福建省との交流を始めた。

その時に福建省の方から、どうも「吉元さんのルーツ」は、という声が出たりした。それを聞きながら、私、本当かな、という感じで、県の教育庁文化課に何かあるのかと調べさせたりした。そうこうしているうちに、どうもルーツはそこらしいということ、かつての中国から琉球に入った家系図がいくつか残っているということも言われて、その中の一つにどうも吉元という名前があるようだ、ということだった。そこで早急に確認したわけではなくて、ただ沖縄でまとめられた、中国福建省から来たいくつかの姓の一つに、「阮」と書いた人がいる。その人の二代目あたり

から、吉元家が出て来たということまではつきりしています。福建省では、彼らも知っているけれど、私もどうもルーツは福建省だということがわかってきたけれど、まだそこに行ったことはな

いんです。しかしそうは言っても、与那国の私の親戚は、全くそれを信用しない。もともとから与那国だと言っている。吉元家に中国とのつながりがあるはずがないと、今でも否定しています。

伊藤 吉元という姓は、先生のところしかないんですか。

吉元 そうじゃないんです。これがさっきのルーツとの関係なんです。この那覇にも吉元家があるんですね。もうひとつは沖縄本島の北の方に名護というところがありますけれど、そこで市町村合併がされたけれど、屋部というところがあって、そこに吉元がいる。それから奄美にはいないですね。鹿児島にはいるんです。それから長崎にあるんです。博多にもあるんです。同時に、沖縄本島の東海岸にひとつあるんです。それからもうひとつ、那覇から出て中国に行く一日の行程で久米島というのがあるんですが、そこに吉元があるんです。あとは与那国の吉元。それから、波照間島、琉球の一番南ですが、ここにも吉元がいるんです。これを全部つないでみると、どうも関連がありそうだという話になって、そこから私の疑問も解けた。何か関係があるはずだと。

県庁に入った後、大田県政の下で福建省とのつながりをつくりながら、そのことをあちこちから言われた。つまり私が中国と六〇〇年の交流の歴史を再度二十一世紀に向けて作り直したいという申し入れを中国にする。そうすると沖縄の経済界が、本当に中国との経済交流ができるのかと興味を持つ。その中心で旗を振っているのが吉元だ、あいつはなんだ、という話が広がるんですよ。結局、沖縄の中でもそういう関係を調べている連中が、どうもあいつは中国との関係があるようだ。この話がだんだん高まっていったら、私がそれに気づくということになった感じがしま

すね。

先月でしたか、沖縄で中国福建省と沖縄の交流のいわゆるサミットがあつたんですが、これに中国福建省からたくさん人が来て、その団長がここにも来ていました。こんにちまでこの交流をつくらせてきた僕に対してお礼と、もうひとつ、「早く来てください、連れて行きますから」と言っていました。

■台湾時代

佐道 私の質問項目に書いておいたんですが、沖縄戦自体は経験されていないんですね。

吉元 私は、敗戦の時は台湾にいたんです。台湾の基隆にいましたので、たいへん厳しい中で山の中に疎開をして、敗戦と同時に台北に出てきました。親父が台北にあった日本軍の司令部におりましたのでね。親父は除隊して、そこで合流し台湾の東海岸にある蘇澳（スーアオ）というところに行き、蘇澳から与那国まで、百十キロ、真東に船を走らせれば与那国ですから、それで帰ってきました。

伊藤 その船は何なんですか。

吉元 与那国の漁船です。カツオ船です。台湾にいた与那国の出身者を与那国に連れ戻すためにその港に来ていて、それに乗ってきました。

佐道 吉元先生はいま李登輝さんとも親しいと伺っていますが、台湾との関係は幼少の頃からあつたんですね。

吉元 そうなんです。結果として、台湾の方と会うことになって、「吉元さん、台湾におつたらしいね。与那国らしいね」ということを、向こうが事前に調べていたんでしようが、そういう話が出る。そういう意味では、ある種親しみを感じて話してもらった経緯があります。もちろん僕自身は、台湾というのは自分が育ったところでもありますから、違和感はほとんどないですね。

また与那国からしますと、たくさんの方が台湾で生活したからね。今でも与那国町と、台湾の東海岸にあります花蓮（カレン）とは友好都市です。それから石垣市と蘇澳というところは同じように友好都市です。そういう意味では特に八重山と台湾との関係は、あの時代から台湾は働く場所であつたし、勉強に行くところ、学校に行くところだったんです。

伊藤 台湾時代はまだ子どもですか。

吉元 そうですね、小学校の三年です。

伊藤 それは日本語の学校ですね。

吉元 台湾にはいくつもありまして、変な話ですが、一等国民が日本人なんです（笑）。それから二等国民が琉球なんです。

伊藤 琉球は別なんですか。

吉元 そう言われていたんですね。それで三等国民というのが台湾人なんです。私たちはどちらかというと、住んでいるところもそうですが、それほど台湾の人とは違和感がないし、基隆でも隣が憲兵隊であつただけに、日本人とも違和感がなかった。僕は小学生でしたが、学校に行くときも、台湾人学校とは別の日本人学校で、沖縄も入っている学校でした。そこで学校に行つたわけです。学校そのものは、文字通り日本人だけの学校でした。

伊藤 言語として、向こうの言葉を覚えるというチャンスはないわけですね。

吉元 チャンスと言うより、それは否定されてきました。植民地時代で、むしろ日本語を向こうの人にも使わせるといふ形で徹底していた時代ですからね。私自身は沖縄に住んでいたわけですから、それ以前から日本語を使っているんで、違和感はありませんでした。

■組合活動時代

佐道 その頃の話もたいへん面白いんですが、組合の活動をされ

るといふ話ですね。直接的に米軍統治下での組合活動というものは公式的には認められていなかった時代で、そのころから組合活動をされていたわけですね。

吉元 労働組合を結成する根拠法としては、琉球政府職員の場合は、琉球政府公務員法というのが唯一あったんです。市町村には、地方公務員法というのはない。つまり文字通り、琉球立法院でつくる労働三法以前は、労働組合をつくるというと、民間も含めていわゆる布令によって資格が認可されたんです。布令一四五号だったか、労働組合の認可というのがありました。そういう時代です。ただ私たちの場合は、私自身が働いている職場は琉球政府ですから、琉球政府公務員法で職員団体をつくっていいというのがあったわけです。で私たちは合法的につくりました。

そうは言っても、組合の役員になるとかそういう活動をするというのは、地域社会から見れば大変なことで、あの頃はアメリカが言っていたいわゆるアカ、共産党というレッテルが貼られるのは当然でしたね。だから私たちが琉球政府の労働組合を作ったときに意識したのは、政党の支持協力関係は取らないという形で、純粋に琉球政府の労働組合であるということ、沖繩官公庁労働組合は特定の政党との関係はつくらなかったんです。これは復帰まで、沖繩官公庁は、革新運動と一緒にやってはいるけれど、特定の革新政党とは支持協力関係はつくっていませんでした。これはある種、あの時代における私たち公務員労働者の生き方です。

しかも公務員労働者であった私たちが、民間の職場の劣悪な状況を改善させるために、いわゆるオルグをして労働組合をつくっていくんです。こういうことを私たちはやっていました。労働組合の仲間意識ですね。私たちが特定の政党と関係がないという安心感が、対企業との関係、対労働者との関係で、私たちの戦略的な意義が理解されたという気がしますけれどね。しかしそうは言っても、民間の労働組合は当時、民政府つまりアメリカとの関係

では、布令一四五号によって労働組合の設立について役員名簿をつけて届出をしなければならぬわけです。それで役員名簿がチェックされて、労働組合として認めないという事例がたくさん出たんですね。ですから文字通り、あの時代に民間で労働組合をつくっていくにあたっては、アメリカの許容する人を役員として選ぶか、組合が自主的に役員を選出するのか、これが非常に問われた時期だったんですね。

そういう中で、たぶんアメリカの理解を得て労働組合として民間の企業の中で頑張っていくという組合もあったし、いや認可されなければそれでもいいと、「違法な状態」だけれど労働運動をやるといつてやった労働組合もあった。その労働組合運動の中で、大々的にその布令の不当性を追及した。布令一四五号の「死文化闘争」といったんですが、結果的にその布令は廃止されなかったけれど、事実上発動もしないという状態になるんです。そのあと、琉球立法院が労働三法をつくって、労働委員会に労働組合の届けをすれば、そこで労働組合の法的な身分がとれるという状況が出てくるんです。

ですから沖繩の労働運動の場合、最初から労働者の保護のための法律があつたわけではなく、むしろそういう布令を持ちながら、運動をしていた。アメリカの布令が優先的に支配していた。そういう情勢から、琉球立法院が労働三法をつくって、労働組合が大つぴらにまかり通るようになって、文字通り、琉球政府の労働組合の役割が大きかったということでしょうね。

一方、米軍基地で働いている基地労働者に対しては、布令一六号というのがあって、これは完全な許認可権をアメリカが持っているという形で、労働組合を認めたとしても、いちいち介入していくということがありました。ですから、当時、基地の中で働いている労働者の組織、労働組合をつくっていくというのは相当時間がかかりましたね。大手を振って、基地の労働者が労働組

合全体と一緒に共闘するようになったのは六〇年代、六四、六五年からですね。それまでは内々で運動しているというだけでした。

当時の労働組合をつくるにあたって、支配者側であったアメリカは、共産党の指導という点にのみ目を向けていた。それ一色でものを見ていたということがありましたね。当時、沖縄の政党は日本共産党と組織上のつながりはなかった。沖縄には沖縄人民党というのがあって、これが比較的、日本共産党とひとつだと見られていた政党で、それに対する攻撃は非常にシビアでした。ですから私たちは琉球政府の労働組合をつくって、特定の政党との協力関係を持たなかった意味も、むしろそこにあつたと思えますね。佐道 ということは、本土の労働組合、労働運動との関係も、なるべく。

吉元 その通りです。まずひとつは、日本の労働者が関わっている法律は、日本国憲法から労働法、公務員法と、いろいろなものがある。これは日本国憲法が適用される範囲の話ですね。沖縄の場合、日本国憲法が適用されていない。これを、同じ組合を一つ作るということがどういう意味を持つのか。実効性がないわけですね。友好関係はつくれたとしても、労働組合の支部組織を作るという話は法律的に関わりないわけです。日本がもし一体的な労働組合をつくって、もし沖縄が一つの支部だとしても、沖縄で労働事件があつた場合、それを救済するための法律は日本にはないわけですね。治外法権ですから。そういう意味で私たちの労働運動は、文字通り自前で、沖縄の中で労働運動を作りあげていくのが最大の目標だったわけです。

しかしそうは言っても、労働問題にはインターナショナルな課題もあります。港湾での労働争議はハワイにも影響する、日本にも影響するわけですから、そういう意味を含めて、沖縄の労働組合は友好関係として、類似する本土の労働組合とのつながりは持っていたんです。組織的上下の関係はないけれど、友好関係はず

つとあつた。その頂点にあつたのが総評ですね。総評と、沖縄の労働組合のセンターである沖縄県労働組合協議会（沖縄県労協）がつながっていたわけです。

沖縄官公労が大胆な方針を出したんです。つまり総評に直接加盟を決めた。これが一九六一年です。総評直接加盟を琉球政府の労働組合が申請する。大会に代表者が呼ばれる。結果としては、総評加盟になりました。だけど、運動的な意味では全く違うわけですから独立した運動をしていたけれど、少なくとも総評が沖縄問題を取り上げるきっかけはできてきた。沖縄の労働者が劣悪な条件に置かれている、労働組合さえアメリカの布令によって許認可される、ということを通して問題にし、国際自由労連に問題を提起する。それで国際自由労連が調査団をつくって沖縄に乗り込んでくるという形を取らせましたね。そのためには、沖縄官公労が総評に加盟すると同時に、沖縄官公労として単独で国際自由労連に加盟したわけです。

これは果たしてうまく行くのかという問題がありました。一団一団、ナショナルセンターが入るところですからね。しかしそれはアジアの労働組合、自由労連加盟の労働組合、とりわけインド、シンガポールの皆さんが相当バックアップしてくれて、沖縄官公労の国際自由労連加盟ということが実現するんですね。

伊藤 かなり例外的な単位なんですか。

吉元 まさにそうですね。沖縄の労働運動には二つの視点があるわけです。ひとつは総評、日本全体の中から沖縄の労働者に対する支援、もうひとつは国際的な環境の中でアメリカによる沖縄の労働政策に対するチェック、という二つを入れた。そこで沖縄の労働者は、国際自由労連に加盟した沖縄官公労を通じて、国際自由労連の沖縄事務所をつくらせるんです。これが相当大きな意味を持ちましたね。ですから、国際自由労連の初代の所長は、米国人でダニエルという人がおりましたが、彼がものすごく活動し、

沖縄の労働組合を国際的な監視によって守った。アメリカもそれは直接的な介入はできなくなったという状況をつくりあげた。先ほど言った基地に働いている労働者を本格的に組織化していくきっかけも、それによってできたんです。

佐道 先生ご自身も、総評単独加盟とか、一連の活動に関わっておられたんですか。

吉元 そうですね。私は、八重山地区の琉球政府の公務員労働組合の結成に参加し、その後執行部に入り、活動を本格的にやる時期に那覇に飛ばされた。那覇で琉球気象台で労働組合がつくられていなかったで、そこで労働組合を組織化して、琉球政府の一つの局の労働組合に加盟した。その組合の役員をしながら、沖縄官公労の中の役割を果たしていくんですね。そういう意味では六〇年代の初めの頃は、私も国際自由労連の労働講座などを希望しました。インドのカルカッタであったんですが、私は行けませんでした。沖縄からは三、四名行っています。そういう交流を通じて沖縄の問題を訴えるとか、あるいは国際的な労働条件を学ぶということもやりました。

そういう意味では総評加盟にも積極的でしたし、同時に国際自由労連加盟にも積極的にしました。国際自由労連を通じて、沖縄の異常なアメリカの支配の実態と、それを踏まえて日本復帰、沖縄返還についての国際自由労連の取り扱いを求めたり、それはいろいろやりました。国際自由労連という場合は、日本復帰を決議する場ではありませんが、少なくとも当時の日本の国際自由労連に加盟している産別労働組合の皆さんの熱い支援、沖縄に対する大きなテコ入れがあったのは事実です。

伊藤 どの段階から専従になるわけですか。

吉元 那覇に出て来たのが「六〇年安保の年」ですね。そしてアイゼンハワー大統領が来た年ですね。それから組合を作って、たぶん六二年あたりから私は、琉球政府の一つの局であった工務交

通局労働組合の副委員長に入っています。そして書記長として専従をやったのが、六三年です。その直後に、沖縄県祖国復帰協議会、これは県民組織ですが、その事務局長を担当し、六三、六四、六五年と足かけ三年間、復帰運動を直接指導しました。これは事務局長としてですが、兼務です。

伊藤 身分は一応公務員だったわけでしょう。

吉元 もちろん在籍専従制度がありましたからね。ですから気象台の気象職という技術職でもあるので、休職をして組合の専従役員をした。官公労の専従役員をやりながら、同時に復帰運動の県民組織の事務局長を兼務していたとはいえ、もっぱら復帰協の仕事が中心になりました。

佐道 事務局長になられてからは特に、ということですね。二十四、五歳の頃ですか。

■ 復帰協

吉元 復帰協をやったのが、二十七、二十八、二十九歳の三年間だったと思います。私にとってはいちばん苦しい時期だったかもしれないですね。労働運動を那覇でやり始めて、軌道に乗り始めて、同時に復帰協の仕事をやって、全県を走り回りましたからね。

労働組合の本来の仕事というのは、組合員の権利、あるいは生活を守るということであるし、家族の福祉をどうするかという問題ですから、ある程度見えるんですね。活動の計画もつくれるんです。一方、復帰運動というのは県民運動で、文字通りいろいろな意見があるわけですから。PTA連合会から遺族連まで復帰協に入っていたわけですからね。もちろん政党も入っているし、労働組合も入っている。そこで一つの方向をつくらなければいけない。その場合、目標はただ一つ。一日も早く祖国復帰することですね、日本に復帰するために何をするか。アメリカ支配から脱却するために、例えば「沖縄県」という言葉を使おうとかですね。

当時はアメリカが「琉球」という言葉を使わせようとした時代です。だから琉球人だということ。

私たちが沖縄から本土に行く場合にパスポートが要るんですが、このパスポートには、国籍は「琉球」で、「琉球人」と書いてあるんですね。そして私がソ連に行ったときには、沖縄から出るときには琉球人、東京で住民登録を行ない、戸籍を作った形にし、それで外務省にビザの申請をする。それで「日本人」として行くわけです。

伊藤 今度は日本のパスポートになるわけですか。

吉元 そうなんです。それは日本発でモスクワをずっと回って帰ってきたら、それで終わりですね。また沖縄から持っていたパスポートで帰ってくる。ですから二つのパスポートがあったわけですね。そういう時代で、アメリカ自体が琉球人だ、琉球だ、おまえたちは日本とはちよつと違うよ、ということを経後の一時期に県民に対してものすごく宣伝したんですね。

そういう時代の流れの中で復帰運動を一体どうつくっていくのかということ。一つは教育問題です。子どもにどういう教育をするのか。学校の先生が立ち上がった。ですから、琉球立法院で、教育基本法を作らせようではないかという運動が起こるんです。これは屋良朝苗さんが先頭に立ったが、不発に終わったりもするんですが、最終的にはできたんです。ですから日本人としての教育というのが、あの時県民が抱えていた最大の課題だったんです。同時に、もちろん日本語の教育ですし、日本の教科書を使いたいということですね。ただ残念なことには、日本の教科書は、円で書かれているけれど、沖縄はドルでしたからね。そういう意味での違いはあったにせよ、少なくとも日本人として教育しているんだというふうに県民的な意識は変わっていった。だから復帰運動というのはそういう意味では必然的で、県民に行動を共に呼びかけられる内容だったんでしょね。しかしそれでも、初期の

頃はアメリカによって相当嫌がらせがありましたし、それは辛いものがありましたね。

伊藤 具体的に、その嫌がらせというのはどんなことをやるわけですか。

吉元 例えば学校の先生は、学校で歌う文部省唱歌みたいなものをまとめて、——学校で正式にまだ認められない時代に教職員が中心になって——愛唱歌集というのをつくるんです。これがアメリカから否定されて、これをつくった当時の沖縄教職員会の会長だった屋良さんがマークされるといふようなことが起こるんです。ですから学校の先生たちが日本の教育を志向すればするほど、アメリカとの溝は深くなっていた。それを県民がアメリカに対して、なぜ日本人としての教育が悪いのかという形で対峙する。だから初期の頃は、君が代は別ですが、日の丸を掲げた運動なんです。私自身が復帰協の時代に、文字通り日の丸の掲揚を認めるという運動をしたんです。それはまさに日の丸というのが復帰運動のシンボル化したわけですね。それには政党からの批判もあったけれど、県民の一つの方向をつくるには最大の効果があったわけですね。

しかしこの日の丸運動も、復帰が現実化する一九六九年あたりからは否定されて、むしろ単なる日の丸運動ではなくて、どういう中味の復帰をするのかというふうに変わっていくんです。しかし私が関わった六三〜六五年は、まさに日の丸をどう掲げさせるかということでした。それはわれわれの日本人としての復帰運動としては当然のことで、日本国憲法の下に復帰するんだという象徴として使ったというのが事実でしょうね。

ですからアメリカからの圧力というのは相当厳しいものがありましたね。例えば正月に日の丸を掲げる運動をすると、それをアメリカの兵隊が破って捨てるということがたくさん出ました。これがまた社会問題になった。アメリカもベトナム戦争に入り込む

時期ですから、兵隊一人ひとり、若いG Iの皆さんもモヤモヤがあったんでしょうね。

佐道 ベトナム戦争は六五年以降ひどくなりますからね。その復帰協の過程で、先生ご自身も東京に頻繁にいらしていたんですか。

吉元 いやあまり行っていないんです。あまりパスポートが下りていないんですね。しかし実際に申請して拒否された事例はないですね。私は復帰前に二回しか行っていません。ひとつは復帰協事務局長時代で、これはたいへんきつい交渉をしながらパスポートをとったんです。総評労働講座というのをつくらせて、沖縄から二十名ほどを毎年本土の各地に呼んで、総評が集中的に労働運動のイロハを講義するんですね。そういうものを通じて本土の労働組合との仲間意識をつくってきたんです。

その第五回だったと思うんですが、私が団長で行くときにパスポートを取ったときには、復帰協の事務局長をやっていただけに、出るかでないか、ぎりぎりまで厳しい状況がありましたね。結果としては、アメリカとしても出した方が得だったんでしょう。拒否すると大変なことになりますから、団長が行かないことになりましたからね。

それからもうひとつは一九六七年ですか、私がソ連に行くときです。その時はソ連に行くという名目でパスポートの申請はできませんから、総評との事務協議ということで、沖縄官公労の役員として申請したんです。これは案外すんなり行きました。ですから一役員程度だったかどうかということはないけれど、復帰協の事務局長みたいなことになること少し厳しい捉え方をしたんでしょうね。

佐道 まず第一回目に事務局長時代にいらっしゃったときは、どういう方にお会いになりましたか。

吉元 もちろん、総評の労働講座ですから、熱海でやった労働講座で総評の岩井章事務局長とか、総評のメンバーが中心ですね。

伊藤 それは幹部の人たちですか。

吉元 そうですね。私はその後、観光という名目でメンバーの半分ぐらいを連れて東京に残ったんです。そして私自身は、当時沖縄の復帰協の大会で決議された復帰に関する決議文の手交のために、総評を通じて当時の社会党、たしかあの時は全通出身の方でしたが、その人を通じて、外務省、——いま考えると北米局でしょうが、——に行くんです。結果的には、係の一人が出て来て、廊下でしか受け取らなかつた。そういうことがありました。ですから、沖縄県から県民の意志を代表して復帰協で決議文を手交するというのは、当時はなかなかできることではなくて、こういう機会でなければ渡せなかつたということなんですよ。

佐道 お会いになる場合は、どうしても社会党系の議員の方になるわけですか。

吉元 それが多かったですね。社会党系の議員というのは、労働組合出身の議員が多かつたということでしょうね。民間だろうが、官公労であろうが、もちろん教組も含めて。ですからそこで会うと、常日頃国会の場にあつて沖縄の動きを見ているから、ある程度の共通認識があるだけに、各組合の沖縄から連れて行ったメンバーが、産別の出身の社会党議員に会うというのは、いろいろな形で相当大きな力を発揮したと思いますよ。それはずっと後まで続きました。復帰まで続いた。

伊藤 さつきから産別とおっしゃっているのは、総評のことですか。

吉元 そうです。総評の中で産業別共闘として組織化された労働組合ですね。国家公務員は国家公務員なり、民間は民間なり、全通もあるだろうし、港湾もあるだろうし、それぞれたくさん組合がありましたからね。そういう、つながりのある部分は全部つながりだということですから、それから、それがきっかけか、その後何年かで、ほとんどの沖縄の労働組合が、自分のつながりがある、自

分と関わりがありそうな本土の労働組合と、抱えている仕事に似ているとか、企業が似ているとか、そういうところであつたりをつくつていったんですね。それがまた、本土における労働組合が沖縄返還闘争に関わるきっかけになるんですね。

そういう意味では表向きパイプは、労働組合としては総評、沖縄には沖縄県労協というセンターがありました。一方、社会党沖縄県本部があり、ここが社会党とつながりを持つ。この二つです。なぜそういう二つに限られたかというと、ひとつは、沖縄における労働運動の在り方をめぐつて、沖縄人民党との意見の対立が、私たち労働組合と出るんです。それは労働組合運動の見方、あるいは在り方を巡つての本質的な違いなんです。つまり政党と労働組合の関係をどう見るとかという問題です。もつとわかりやすくいえば、政党の指導の下に労働運動というものがあつたのかどうかという問題をめぐつての争いがありましたからね。労働組合自体が分裂するという一面もありました。

そういう意味では当時一つの社会現象としてあつたのは、日本の原水禁運動の分裂がありましたね。そういうものが持ち込まれるんです。沖縄でも原水協が分裂するということがありました。ましてや復帰運動でさえ、四月二十八日を沖縄分断の日だと県民は規定して、その日に行動を集中する、アピールするという運動をずっとつづけてきた。北緯二七度線で海上大会までやつたんだけれど、ある日突然東京サイドから声がかかつて、八月十五日を復帰運動は正しい位置づけをすべきだということを言ってきたりね。そうすると、それを持ち出してくる沖縄人民党との関係でまた私たちは対決して、県民運動が割れてしまうというような問題をいくつか経験しました。

ですからそういう意味では、労働組合と政党との関係という問題がいろいろな分野に波及してしまつた。日本における運動の違いが出てくると、必ず沖縄に現れてくる。これは今でも変わりま

せんけれどね。そういうものがもろに出て来た。これをどう取り直していくかということ、労働の現場ではできません。原水協運動でもできません。分裂していますから。唯一復帰協の場でその統一を守つていた。これは分裂しないでおこうと云つて、最後まで分裂させないできた。

伊藤 人民党も含めて、ですか。

吉元 含めてです。最終段階で、一九七〇年でしたか、六九年の日米共同声明、佐藤・ニクソン会談の翌年ですが、日本でいえば、同盟系の労働組合が日米安保反対・基地の全面撤去という復帰協の運動方針をめぐつて退場、脱退するという事態が生まれましたけれどね。このあたりからは、両三年ということ、復帰のめどがついていくわけですから。それに向けて、復帰はどうあるべきという問題で、沖縄の中で違いが表面化するというきつかけなんでしょうね。ですから、それ以外は復帰協を二分するような分裂は最後までなかつた。

伊藤 沖縄社会大衆党はどういう位置づけなんでしょうか。

吉元 沖縄社会大衆党という政党は、戦後のある時期、沖縄における政治活動の中心部隊としていち早く旗揚げするんです。ここに参加していた一部党員を含め、日本社会党沖縄県本部をつくるんです。形の上では先ほど言つた仕組みを頭に置いて、沖縄社会大衆党を軸に、その頃アメリカと県民ががっぷり四つに組んで、沖縄の自治の在り方をめぐつた争いに入つたんです。

当初アメリカは沖縄を意のままにしていくような政治の仕組みを作らせたいと思つたでしょう。そのためには、ということ、奄美大島をひとつの郡として、沖縄本島をひとつ、宮古、八重山というように、当時の琉球を四つに分けて、群馬政府をつくらせたいですね。そして「自治政府」をつくらせる。もちろん自治といつてもアメリカの許容の範囲です。そこで知事の選挙をさせるんです。群馬政府知事選挙です。その結果は共通して、議会も首

長も日本復帰を要求するんです。そこで対平和条約発効の際、強権的に「この仕組み」をつぶすんです。そして一九五二年四月に四群島を全琉で統一させて作り直したのが琉球政府なんです。

そういう流れの中で、絶えず中心的なメンバーをなしたのが社会大衆党です。つまりそれは、戦前、戦中、戦後を通じて、沖縄の指導的なリーダーだった人々です。この方々が、復帰ということもひとつ頭に置きながら、しかし沖縄をもう少し良くしていこうじゃないかという気持ちを持ちながら、復帰までの間にきちんとした自治権を確立した沖縄の行政体をつくりたいという希望を持ちながら、アメリカとの間でかなり衝突しながら、許容できる範囲では合意していこうという柔軟さがあつた。それに飽き足りない部分が飛び出して、日本社会大衆党の支部をつくつた。ですから今の沖縄の自由民主党の指導者の一部もそこから出ているんです。あの西銘順治さんも、もともと社会大衆党の青年部長までやっています。

伊藤 全部の母体になっているわけですね。

吉元 そうです。ですからそれがひとつの沖縄の良識みたいな形で今日まで続いているんですね。この政党と沖縄人民党は二つとも復帰までの政党なんです。綱領にそう書いてあるんです。だから沖縄人民党は復帰段階で解散して、丸抱えで日本共産党に移つていった。社会大衆党は、解散するかどうか相当採めるんです。しかし復帰後も、県民が求めていた沖縄には戻っていない、まだ問題がある、基地問題を含めて復帰したとはいえまだ問題を抱えている、ということ、この政党を続けさせていこうという形になったんです。それで今日まであるんです。

伊藤 社会党と別にあるんですね。すみません。復帰運動はそうなんです。同時に、戦後ある時期、沖縄独立論というのがかなり盛り上がったと思いますが、独立論と復帰問題というのはどういう関わりになるんでしょうか。

吉元 もともと独立論の出発は、廃藩置県の段階に遡るんですね。つまり、徳川幕府が終わる。もつというのと、一六〇九年の薩摩の琉球支配に始まり、その傀儡でやってきた琉球国が、それでもひとつの国家としての形を取っていた。一方では薩摩に支配され取奪されながらひとつの国をつくっていた。その中で、徳川幕府が解体して、明治に移っていく。その時、沖縄をどうするかという問題が起こったんですね。中国側は、沖縄は日本ではないよ、というメッセージを出すんです。日本は併合しよう。その時に初めて明治政府がやったやり方が、廃藩置県の段階だけれど、琉球藩を一度つくらせるんですね。それは文字通り日本という国の一つだという形にするんです。その上に立って、次は県に移すんですね。その段階で中国から非常に厳しい追及が出て、それを中に立ったアメリカの大統領のメッセージが届いたりして、結果的に一時アメリカから提示があつたと言われている分割論が出るんですね。北と南に琉球を分けて、北の方は日本に、南の方は中国にと。それは沖縄の中で大反対があつたんです。結局沖縄は一つだという形になって、結局そのまま日本になった。そういう経過がひとつあつた。

もうひとつ、日本の皇民化教育がそれから続くんだけど、とりわけ昭和に入つて、ものすごい皇民化教育が始まる。沖縄の方言を使うと方言札を首にかけられるという事態まであつた。文化・言葉まで圧殺する日本という国に対する批判。そして戦争では、その延長線上で沖縄を切り捨てた、「捨て石」にしたという批判。さらに復帰段階まで、二十七年間放り出した。日本は独立しておいて、アメリカの意のままに使わせて、なぜいまさら復帰なのか。だから四つか五つ、つながっているんです。そのなかから出て来た根強い独立論が一つあります。

もうひとつ、独立論とはいわないけれど、きわめてそれに近い「自治政府」構想等がある。復帰段階でこういうものがたくさん

出るんです。だいたい四つか五つ出ています。それは独立論とは違う形のもので、だから今日の段階でいうと、独立論も残っているけれど、自治州構想、自治政府構想も集約されている。私が中心になって自治労が運動している、沖繩を一つのブロックとして、しかも憲法の許容する範囲で、一国二制度的な意味で沖繩に自治政府をつくったかどうかという意見に集約されてきているんです。

これは、大田県政がもし三期目に入っていたとすれば、ちよつと大きな話題になって、それがテーマになったでしょうね。つまり沖繩の九〇年代、去年までの八年間は、ひとつはアメリカの支配から完全に脱却したいという、「米軍基地の全面返還」を二〇一五年においた二十年計画。その間、日本という国がアジア太平洋の中の一国で、投資の自由化、貿易の自由化が成し遂げられる二〇一〇年に向けて、沖繩は一つ早めに全県フリーゾーンを中心とした一国二制度をとつていこうじゃないかという「国際都市形成」。将来日本という国が、今のままで道州制問題を含めて分権の論議はもう一つ進むであろう。その場合、鹿児島とか九州と一本になるはずがない。陸続きではないから。琉球諸島でひとつ自治政府をつくったかどうか。そういう形に今は収斂されてきていますね。ですから「独立論」。これは将来いつまでも続く話題でしょうね。

伊藤 今でも独立論というのは強いことは強いわけですか。

吉元 強いですね。有力な政治家であるコザ市長をやりました大山朝常さんの本『沖繩独立宣言』現代書林』も最近また脚光を浴びましたからね。日本の中で地方分権の論議が起こるたびに、沖繩の独立論が出てくるんです。沖繩にはこういう意見があるじゃないか、ということ。それはしかし日本全体の中では、九州までは、沖繩の流れと違うわけですからね。ですからイコールではないんですが、象徴的な意味なんでしょうね。

佐道 その話は、国際都市構想の話などに関連してまたお聞きしたいんですが、一国二制度は大田県政が三期目になれば、とおっしゃいましたけれど、私からすると、吉元副知事が続いているば続いたと思うんですが。

それはそれとして、六五、六六年ぐらいに戻したいんですが、佐藤さんが沖繩にいらつしやいますね。それで革新の方々がそれを囲むということがありましたね。あのとき、佐藤訪沖のときの、組合あるいは復帰協の考え方をお聞きしたいと思います。

吉元 私が復帰協をやめた直後なんです。私は六五年一月末で復帰協の事務局長をやめていますから。

伊藤 やめた経緯は何ですか。

吉元 別にありません。本務である労働組合の方がおろそかになっていましたから。なんで手を引くかといわれて（笑）。私は二股かけていたわけですから、本職の方に戻ったという話です。もつとも、私が復帰協に行ったのも、おまえは一番若いし、一番ひまのようだから、おまえやれ、と言われたんですね。それだけの話なんです。そういう意味で、六五年一月に復帰協を降りました。それは本体である官公労の仕事が忙しくなったからということがひとつあります。

その直後に佐藤さんが来ました。たしか八月でしたか、那覇空港に来た。その時に佐藤さんが来るのはどういう意味か、ということが問われたんですね。日本の総理が入るのは初めてです。もちろん戦後はそうですね。ですからそれは当然のこととして、沖繩返還を明確に約束すべきだという県民の期待と、いやいやそうは言うけれど、という意見ですね。ベトナム戦争が非常に厳しくなる時期ですから、それとの関連で、沖繩の基地を固定化するのではないかという県民の懸念が真正面から出たんです。だから佐藤さんは、当時のブレーンであった沖繩出身の何名かの方々、大浜信泉（早大総長）さんなんかもそうなんだけれど、いろいろな

知恵をつけられたらしくて、彼が来たときの言葉が県民の間で話題になったんです。「沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらん」という発言をしたんです。

にもかかわらず、その発言の内容に中味がないということに対して、沖縄県民は怒ったのです。だから復帰を実現させるために、私たちのデモを見て欲しい、憤りを見て欲しいというのが、佐藤さんが宿泊予定していた東急ホテルまで県民大会から流れたデモだったんですね。そこでトラブルが起こっちゃって、結果としては佐藤さんがホテルに帰れずに、基地の中の迎賓館で一泊するという事態になった。

そこで問題になったのは、復帰協が運動を計画していながら、どうして大衆運動、デモの統制がとれずに暴発させたのか、ということ、これは後々まで問題になりました。私がやめた直後でしたが、結局復帰協の指導体制がその直後、事務局長人事をめぐって、うまく継承できなかった。その指導性が十分発揮されずに、琉大の学生会を抑えることができず、機動隊との衝突がきっかけになって、あれだけの県民が機動隊に追われたという事件につながったんですね。その結果として、刑事事件というか、警察で事件にされたのは、琉球大学の学生会のメンバーだけでしたけれどね。それ以外にはなかったんですが、佐藤訪沖デモは、ある意味で沖縄の中で日本政府にはつきり要求するきっかけをつくった。つまり日本政府のトップが沖縄県民のデモをどういう受け止め方をして帰ったかということで、その後、佐藤さんが沖縄返還をどうしてもやり逃げなければいかんという自分の宿命みたいな形で担ぎ込んだ出発ではなかったかと私たちは思いますね。これは結果論ですが。

■ 復帰前後

佐道 その一方で、返還交渉は具体化していった、それこそ「両

三年」という形で具体的なスケジュールにも乗るという段階になるんですが、返還の中味の問題がありますね。「核抜き本土並み」という形にはなりますが、基地は依然として残る。一方で復帰協の方は、本土並みというか基地は即時完全撤去というような方針で進められるわけですね。かなり方針は違いますね。

吉元 六五年の佐藤訪沖以降、六九年の日米共同声明、つまり両三年以内という返還のめどづけをした間に何が起こったかということ、一つはベトナム戦争が無差別に行なわれたということですね。沖縄が自由に使われた。そのこととの関連で、復帰は、即時無条件全面返還という運動課題が浮かび上がった。これがひとつ。

もうひとつは、その間に県民的な大きな運動の中心であった教職員に対して特別法を作ろうとしたんですね。政治活動の禁止を狙った。今日では当たり前なだけけれども、沖縄には琉球政府公務員法以外に公務員を縛る法律はなかったんです。だから教育公務員法もなかった、市町村の地方公務員法もなかったんです。それを縛ろうということ、ひとつは、いま言った教職員に対する教育公務員二法を琉球立法院でどうしてもつくれというアメリカの指示で、琉球政府が動き出すんですね。当時は任命主席ですから。それに対する大きな闘いがあった。

これは一九六〇年より前、五〇年代後半からこの動きはあるんです。いつも止めてきたんです。それがもうどうにもならなかった。つまりあの佐藤訪米の問題、そしてベトナム戦争に沖縄がなくてはならないところから来る反戦運動、復帰運動に対する弾圧という意味で教職員の政治活動を禁止する名目で教育公務員法を入れる。これが立法院の段階で議題になり、すったもんだするんです。その時に大衆が琉球立法院を取り囲んで、警察機動隊を排除した形になって、議会が孤立する状態になるんです。そういうことにまでなると、教育公務員法は廃案、つまり直接立法院の議

長と一方の大衆運動のリーダーであった教職員の会長である屋良さんが、「立法化しません、廃案にします」ということで署名捺印するんです。それで終わるんです。

つまり沖繩が、あの廃案協定がなかったらどうなったかわからないぐらいのところまで突き進んでいたんです。ですからアメリカの思惑があったでしょう、日本政府の思惑もあったでしょう、しかし沖繩県から見れば、教職員を復帰運動から排除する、それによって沖繩返還をさせないということに持ち込まれるだろう。六七年二月二十四日です。そのことでアメリカと日本政府が一定の反省をしたと思います。そのあと、六八年に琉球政府主席の公選を認めるんですね。そういう意味ではずいぶん変化がありましたね。

つまり六九年までの間にいまの教育公務員二法の廃案闘争があったことと、もうひとつは六八年十二月に琉球政府主席に屋良さんが当選し、任命主席はいなくなつたということです。この二つのことがあつて、はじめて六九年の返還協定が出てくる。ベトナム戦争が続いていますからね。あれはたしか七五年まで続いたと思います。復帰は七二年ですからね。だから沖繩をどうするかということさえ決めれば、アメリカ政府としては沖繩を維持できない、抑えきれないというところから手を引くんでしょう。そこで、いま言われた返還の段階で、沖繩の米軍基地問題をどうするかという問題についての日米間の密約とも言われた問題も最近明らかになりました。私たちはベトナム戦争との関係も頭に置きながら、基地のない復帰を要求したんですが、しかしそうはならなかった。その段階で最後の問題になつたのは、毒ガス、細菌兵器の撤去運動でした。これは実現したと思つています。もうおそらくないでしょう。もう一つは「核抜き」です。核抜き本土並み返還、つまり即時無条件全面返還という運動が、最終段階では、毒ガス移送の問題に端を發して、最後に核抜き本土並みということを突き

つけた。これがその通りなつたのかどうかということは、今もつて問われている。核抜きではなかつたことは、秘密協定を含めて明らかになつた。それは核が存在しているという意味ではなくて、いつでも持ち込めるという意味で、原潜その他が入るときに核兵器があるのかどうかチェックされていないということを含めて、事実上持ち込まれているという意味ですね。

そういう意味で、沖繩返還で最後に残つたのは基地問題、在沖米軍基地。九〇年代に入つて大田県政をつくつて私たちが日本政府にさかんに言つたのは、沖繩返還の時に沖繩の基地を整理縮小するという日米間の約束はどうなつたんですか、という質問なんです。それを無視して、関東平野にあつた米軍基地の六割が撤去されています。つまり沖繩返還を梃子に、首都圏の米軍基地を六割減らした。これが沖繩返還の日本にとつてのメリットだったんです。私たちが、日本は沖繩を切り捨てた、だから沖繩復帰は「第三の琉球処分」だ、と言つている意味はそこにあるんです。

この問題はずっと今まで続いています。沖繩基地の返還がほとんどなく今日まで続いている。やつと今度出て来たけれど、これも県内移設が中心だっただけに、また問題だったんです。そういう意味で、あの段階でベトナム戦争が続いていなかつたとすれば、あるいはベトナム戦争がなかつたとすれば、という話をした方がいいかな、復帰段階での沖繩基地の対応というのは、もっぱらソ連との対応、冷戦構造でしょうね。今日のような複雑なことをやらなかつたでしょう。

ベトナム戦争との関係で言うなら、アメリカはASEANの中で、不安をまだ抱えています。ですからフィリピン、あるいは今日ではベトナムに基地を置きたいぐらいですからね。そういう意味では、南の方の安定も、沖繩の基地のもう一つの役割になっています。

佐道 基地の問題で、特に反基地運動がどんどん高まつて、コザ

の騒動とか、朝日新聞が六八年にレポートを出したり、いろいろなことがあります、たとえば本土のベトナム反戦運動の人とか、市民団体とか、そういうところとの連携もありましたか。

吉元 ありました。ベトナム反戦、一〇・二一を中心とする世界的な運動まで広がったベトナム反戦運動は、沖縄的に言うところと日常的な復帰運動、反基地闘争の中に吸収されていますね。しかし特徴的に言うなら、沖縄では一〇・二一国際反戦デーをどの県よりも力を入れましたね。それは沖縄問題がそれにかかっているからです。それを日本全体の中で意識してもらおう。沖縄から出撃しているという出撃基地沖縄を全国に知ってもらおう。そして復帰運動を理解してもらおう。一緒に闘ってもらおうという意味では、沖縄は相当力を入れた方でしょうね。

伊藤 その運動の中で、アメリカ軍の側は相当いろいろなことをやっただろうと思いますが、先生ご自身は投獄されたりとか、そういうことはなかったんですか。

吉元 復帰運動という流れで言いますと、さっき言いました教職員の政治活動を禁止するための教育公務員法を立法化しようとしていた教育二法闘争のときに、私は刑事被告人になりました。二十四名が刑事事件で起訴されたんです。その団長として、十年間、復帰後まで裁判を闘いました。しかし私は無罪でした。当時の私の起訴理由は、「不法侵入」でした。つまり琉球立法院に許可なく入ったということですね。それからもうひとつは「公務執行妨害」、これは機動隊二人を取って投げたという話です。その本人を裁判所で見たんですが、あまりにも大きいやつで、裁判ではみんな笑っていましたけれどね（笑）。

これには伏線があります、実は復帰運動の中で、私は二回この種の当事者になっているんですね。もうひとつは一九六四年です。復帰運動、沖縄闘争の県民運動の文字通りの出発点と言われているのが、この六四年十月の自治権獲得闘争なんです。これは

当時の高等弁務官であったキャラウェイが、「沖縄の県民が自治を要求するが、沖縄では自治は神話だ」という発言をするんです。戦後はアメリカへの留学という形で沖縄からたくさん留学生が行っていましたから、帰ってきた連中が一つのクラブ組織を作っているんですね。「金門クラブ」というんです。いまでもあります。これは大田昌秀さんもメンバーです。この金門クラブの総会で、キャラウェイ高等弁務官がこの発言をするんです。

その発言をしたきっかけは、沖縄の経済界にも関わるし、行政にも関わる。経済界というのは例えば琉球食糧という食糧会社、これは米を輸入して県民に売っている会社です。アメリカの許可で独占的にそれを扱っている。そこでの不正経理の問題があった。それから琉球銀行の運営をめぐる問題、それから農協の運営をめぐる問題などがいくつか出てくるんです。これは県民からも指摘されていたけれど、高等弁務官が強権発動するんですね。監査をしたり、です。それでそういうことが暴かれていくんです。加えて政治的に、琉球政府主席は県民の投票で選ばせる、これが自治の出発点だ、という要求をしていたんです。それに対して、お前さんたち本当にその能力があるのか、ということがベースになっているんです。

ですからこの発言そのものだけが問題というより、むしろ背景にも問題がある。そのことを承知しても、結局は独占的に支配し、しかも「軍事的植民地」と僕らは表現していたんですが、そういう中で、軍の最高責任者が「自治は神話なり」という表現をして、県民の自治意識を圧殺する。そうすると、おれたちはアメリカの言いなりにしかならないのか、という言葉が出ますね。これが裁判にも現れたりして、琉球の裁判所の裁判に対して弁務官の指令が出て、裁判が無効になったりするんですね。

これは「サンマ裁判」というものがあります。琉球政府の税に関わることで、サンマに税金がつくのかつかないのかという議論

なんです。それは琉球政府の税法の中に制限列挙されて品目が書かれているけれど、それにあるかないかという問題との関係ですが、そういう問題が出て、結局司法が問われ、行政がさつき言ったように、いろいろところで腐敗を起こした企業を監視しきれない。そして経済界、民間も問われるということ、その上に自治を要求する政治的な運動に対する高等弁務官の発言につながった。

その時に、それはけしからんということで、私は復婦協の事務局長ですから、その当時の社会大衆党委員長の安里積千代さん、社会党委員長の宮良寛才さん、それから沖縄人民党委員長の瀬長亀次郎さん、この三名を副委員長にして、闘争委員長に喜屋武真栄（きやんしんえい）復婦協会長を担いで、——復婦協という名前を使わないで、——別組織をつくって、私が事務局長となり、県民運動をつくるんです。主席公選要求・自治権獲得闘争です。これで立法院を二回休会に追い込みました。ちょうど琉球政府の主席の任期が切れる時期でしたから、その主席の公選を求める私たちの自治権獲得運動と関連させて、主席をどう出していくか、そのグループが推薦するかという問題を保守政党は直面していた。一方的に任命していた高等弁務官は、任命方式はあまり批判が強いものだから、琉球立法院で指名しなさい、これを自動的に琉球政府主席にするという指名に変えたんです。

これに応じるか応じないかで自民党が分裂したんです。その時の一方を担いで、わが味方に入れて、県民大会を持ちながら闘争をやったんですね。結果として、議会が空転する、麻痺するという事態でした。ちょうど東京オリンピックの直後でしたから、私は物理的な行動はここまで、しかし実質的に議会をストップさせたい、成立させないようにしたいということで、琉球立法院の議事課、速記の職員を「全部拉致」するんです。出勤途上でね。これがゼロになれば、成立しませんからね。ところが課長が残っち

やって、課長一人が本会議に出席、本会議が成立して終わり、ということになったんです。そういう県民運動をやった。

その時に七名の刑事被告人を出したんです。「琉球立法院乱入事件」とされた。大衆が本会議場に入っていて、これが十余名逮捕されて、裁判になったんです。その時には私が事務局長で、私自身が直接指導をしているんです。それが問題になって、同じように被告として準備されていた節があるんですね。しかしあの時私をやれば、復婦協の事務局長ですから、それはただでは収まらなかったでしょうね。ですから私は外されたということです。それが回り回って、六七年の教公二法のときに、おまえもだ、と言わんばかりで、多くの団体が関わって二十四名ピックアップされて刑事事件になったんです。これは復婦後まで十年間争って、私は無罪になりましたが、有罪になった者もおります。

伊藤 復婦後まで続いたということは。

吉元 琉球政府の裁判所ですが、復婦段階で行政の継続という形で国会で特別法ができました。沖縄復婦に関する特別措置法の中で、裁判の継承ということが謳われているんです。そういう意味で継承されたんです。日本の裁判所で、それがそのまま継承されたんです。

伊藤 その場合、裁判の判決の元になるのは、その当時の法律とということですか。

吉元 そうです。そこが問題になって、一体この裁判は正当かと。日本という国の憲法が適用されない、刑事訴訟法が適用されていない時代の刑事事件が継承されるのはどうということかと、違憲訴訟とまでいいましたけれどね。しかし国会はそのことを正当と認めた。当時、日本政府、アメリカ政府、琉球政府の三者で構成した復婦のための特別措置を作るチーム、これは三つの政府が認めているわけですが、そこでつくられたものをベースに法律ができて、権利義務が継承される、県民の生活が継承される、という

ことになり、その中でこれも継承されたんです。

佐道 七二年に復帰しますね。その前から屋良主席、その後、屋良知事、平良知事と革新県政がしばらく続くんですが、復帰されてしばらくは、先生は組合の方にいらっしやっただけですか。

吉元 私は復帰の二年前に家庭の都合で沖縄官公労の書記長をやめて、七〇年から七一年は職場復帰するんです。

伊藤 そうすると職場はどこなんですか。

吉元 私は本職は気象台・気象職ですが、当時は琉球政府ですから、どこに行ってもいいわけですよ。組合の専従にしていたから、私は当時の総務局職員厚生課というところ、仕事が一番ないところらしいんだけど、そこに仮に移っていたんです。どっちみち復帰段階の仕事をするために組合に戻ることが予定になっていました。その後、七一年の暮れの大会でまた組合の専従に戻って、公務員の身分引継をはじめ、県民のドルから円への切り替えの問題を含めてあの闘争に関わっていくんです。

琉球政府主席であった屋良さんのときに、一定程度仕事が軌道に乗りましたので、屋良さんが復帰後の一期目の知事ということだけを約束して知事選に出るんです。当選しました。屋良さん時代に、いま考えてもそうだと思うんだけど、今回のこの八年間の大田県政も全く同じだと思うけれど、あの復帰前後には、屋良さんでなかったら収まっただろうかな、と思います。つまり、復帰運動の質をめぐって、あるいは基地の形態をめぐって大変対立し、日米政府に抗議している県民運動、政党や労働組合、県民が、もしあのときに自民党の主席だったらどういう対応をしたか、対応できたか。復帰の節々でストライキを打たれたんじゃないですか。というほど、当時、屋良さんを琉球政府主席、知事に担いで復帰前後の数年間があったことは、文字通り日米政府にとって結果として良かったかもしれません。

このことはいつも言われるんです。ちょっと話は飛ぶんですが、

一九九〇年に大田昌秀さんが当選し、九八年まで続く。その中で基地問題が再燃してくるわけですね。そのとき同様に、基地を全部撤去させろという意見から、自民党を含めて県民の中には基地があってもいいじゃないか、しかし減らせ、という問題が雑居して出てくる。しかも重要なときに少女暴行事件が起こり、県民がこれではいかん、ということでも怒り心頭に発するわけでしょう。これが大田ではなくて、保守の誰かが知事になっていたら対応できたかな、ということでしょうね。私たちは沖縄の中ではこんな話はしないんですが、東京サイドからはいつもそれが出るんですね。

そういう意味で、復帰の前後が屋良さんであったということでは、日米政府にとっても沖縄県民にとっても、ひとつの節目を乗り越えるための重要な要素であったかもしれないですね。しかし屋良さんは、いつも本人が言っているとおおり、自分がいつまでも続けていくわけには行きませんよ、ということでも、一期で降りられるんです。その時は、政党の皆さんや、多くの団体の代表が、屋良さんをもう一期させようと強いアクションを起こしていたんです。私は直接屋良さんと話し合っただけですが、屋良さん自身から、無理ですよ、これこれの理由のために、ということが出ました。私も沖縄県庁の労働組合の委員長をしていましたので、それはわかりましたということでも、頭を切り換えるんです。

その時に、当時の県議会の議長であった社会大衆党の平良幸市さんに当たって、OKをとるために自宅に行つて説得する、奥さんを説得する、社会大衆党の執行委員会に乗り込んで説得する、ということを繰り返して、とうとう本人に出してもらいました。その時の選挙は、県職労の委員長でした。

当選したときに、実は将来のために、あるいはいまの県庁の仕事を進めるために、本人が知事選に出る条件として二つ挙げられたんです。ひとつは、沖縄県庁の職員でありましたが、沖縄県労

協の議長をしていた仲吉良新さんを副知事に出してくれと。もし

仲吉良新が副知事に出なければ、当時私は県職労の委員長ですから、県職労の委員長をやめて、吉元が入ってこいと。これを条件に本人は知事に出るんです。当選したときに、私は仲吉良新さんを出そうということで説得し、本人も了解して、自治労という組織もOKした。しかし県労協という場では駄目だという。彼がいなくなるのと沖繩の労働運動は大変なことになるという理由で、必ずしもそれだけではないんですが、足を引く張る部分も政治的に若干あつて、結果として彼が出ない。ついに私に降りかかってくる、私も県庁の労働組合の執行委員会で大論争をした。結果として、県庁の労働組合の委員長をやめて明日から副知事に入るということは、どう考えても県民は納得しないという私の考えで、断つたんです。その時は相当怒られました。一時期二人の副知事の一人が欠員ができました。四年任期のうちの二年、無理がたたつて平良幸市さん倒れるんです。それで復帰前の琉球政府の屋良主席誕生から続いた革新体制が終わるんですね。

そういう意味では、復帰段階で積み残した基地問題、県民生活のいろいろな問題、こういうものが本格的に取り組まれる状況がない。つまり戦後処理、復帰処理がたくさん残っていた。それが、中断してしまった。そのあと、西銘順治さんという保守側の知事になって十二年間、このあいだは基地問題は触らないと言わんばかりの形で、ほとんど動かなかったという状態が続くんですね。大田知事誕生まで。そういう意味では復帰まで県民が要求した課題を、その後継承しきれなかったという点では、やはり、平良幸市さんが倒れたというところで、その後のつながりがなかったという影響は否定できないでしょうね。

■西銘県政

佐道 平良さんが当選された後、一時組合を離れて、職場に戻ら

れたというのは。

吉元 復帰後は地方公務員法になった。前は琉球政府公務員法ですから、休職専従の期間は制限がないんです。ところが復帰後は五年というのが在職専従期間で、これは特別措置として、復帰のどきくさがあつたから六年となっていたんですが、ちょうどその六年が終わつたんです。私は自動的に降りた。喘息も抱えていたので、後輩に譲つて、職場に復帰したんです。その時の私の身分は、復帰前は气象台でしたけれど、復帰後は立場上県庁に移っていましたから、県庁の職場に戻つたわけです。

伊藤 それはどういってお仕事に戻られたわけですか。

吉元 戻つたところは、沖繩県の、いまは企画開発部ですが、企画調整室、つまり県の計画をつくるところです。そこに席があつたものですから、その職場に戻りました。

伊藤 元々あつたんですか。

吉元 いやなかったです。元々は専従ですから、どこに席があるかわからない。ポストを置いていただけです。復帰する段階で、どこに回した方がいいのかというのは、当局が考えるんでしょうね。たまたま私の場合は、企画調整室に回されたということです。

伊藤 それは平良さんのときですか。

吉元 いや、それはもう西銘さんになつてからです。いや、西銘さんが七八年に当選していますね。選挙前ですかね。選挙直前かもしれない。

佐道 七八年に企画調整室に入られるんですね。

吉元 戻つたのは七八年です。

佐道 県政の企画立案をすることですが、まさに保守県政の企画立案ということになるんですね。

吉元 そうなんです。だから皮肉な状態ですが、ちょうど沖繩の第二次振興開発計画を、この室が担当していたんですね。私はそこに入ったが、そういうラインの仕事はさせてもらえなかった。

したがって、きちんとしたラインの仕事とは違う、積み残してきた仕事、つまりほぼ十年間でやらなかった沖縄振興開発計画のあの課題を担当せよ、ということになって、最初に担当したのが、沖縄の国際交流拠点形成事業です。だから誰もこんな仕事はやらない。こんな仕事をやるやつは普通いらないですね。将来どうなるかわからないから。これを担がされた。それが、私が大田県政に入って、国際都市形成構想をつくっていく重要なきっかけになったのでしょね。

あのときは、「日本・中国・東南アジア交流センター構想」というのをまとめたんです。つまり沖縄が復帰段階で位置づけられた新全総の位置づけ、それから沖縄振興開発計画という「国の計画」の中で位置づけられた国際交流拠点形成が、復帰後の十年間やられていない、誰がそれを担当するか、ということ担当させられた。これが一つです。これは西銘知事の好きな領域なんですね。

もうひとつは、西銘さんの緊急課題であった国際観光都市沖縄をつくるプロジェクトとしてのコンベンションセンターです。いま宜野湾にありますね。これは当時コンベンションホールという名前をつけていたんですが、これも担当しました。それから、沖縄の人材育成を長期的にきちんとしたものをつくっていくというところで、復帰からやってきた育英会レベルの「人材育成」などの仕組みを全部変えて、いまの沖縄県の人材育成財団をつくっていくんですね。そういう意味では、国際交流、人材育成、観光の拠点形成としての国際コンベンションセンターづくりなど、言ってみれば、今日にもつながっているでしょね。

佐道 そうですね。国際都市構想のルーツがあるという感じがしますね。

吉元 それで、県庁をやめる直前は、沖縄県立芸術大学設置業務を担当させられて、芸術大学の開学に力を入れた経緯もあります。

ですから、こんにちこれからという部分で、そういう視点をもって、そういうプロジェクトを積極的に提起してきた当時の知事は、そういう意味ではちよつと面白いというのかな。

伊藤 西銘さんですか。

吉元 西銘さんは、先見性のある人だったと言ってもいいのかもしれないですね。

佐道 保守の側の方ではありますけれど、西銘さんとは前々から接触はあったんですか。

吉元 実は西銘さんは、西銘さんのお父さんが、沖縄の南の方の離島の久高島の出身で、若い頃与那国に来ていたんです。与那国で漁業をしていたんです。その時に与那国の人と結婚した。したがって、与那国の出身者の中では、実は私の親父が人材育成の中ではトップで、次に公認会計士がおりますが、この人はまだ生きています。その間に、西銘さんがいるんです。つまりうちの親父に言わせれば、与那国から、西銘のことは面倒見る、と言う立場なんですね。

そうこうしているうちに、僕が労働組合運動をしているときに、西銘さんは那覇市の市長なんです。そのときに私が復帰協の事務局長を終えて結婚したときに、沖縄では珍しい会費制で、一人一人の会費を集めて結婚式を挙げたんですが、その場に那覇市長だった西銘さんも来て、激励してくれたという経緯があります。つまり個人的には、西銘さんは親父との関係が非常に強くて、親父から言われていたらしくて、西銘さん自体は僕を知っていたし、気にかけていたんじゃないですか。

政治的にはずっと「対立」しているんですね。屋良さんが琉球政府主席に出馬したとき、相手は西銘さんが出ていて、僕は西銘さんを応援していないから、そういう意味ではずっと対決している。職場復帰をして、西銘さんが当選して知事になった。私は職場にいる。ときどき難しい問題が出ると県議会用の知事答弁を書

かされたりしました。例えば尖閣諸島の領有権問題について、という質問が出ると、なぜか知らんけれど、僕に回ってくるんですね。私はそれは知っているし、むかし勉強しているし、琉球のことだから、それを書いて調整に持たせると、フリーパスで通るということが何回かあったりしました。それ以来、県政で西銘さんが出してきたプロジェクトはなぜか私に回ってきているということとです。

その最後が芸術大学です。ほとんど文部省のOKまでとった段階で私が退職して、要請された沖縄県労働組合協議会の事務局長に入るんです。退職後に、県労協の事務局長とに新しい三役と一緒に西銘知事に挨拶に行っただけです。これは慣例です。そうしたら、西銘さんが、「いつまで事務局長をやるつもりか、いつ帰ってくるか」という言い方をするんですね。私はびっくりして、「俺は退職したんだよ」というと、「まさか、自分は退職を認めていない」というんですね。「あなたの名前で退職辞令をもらったよ」と笑ったことがある。

佐道 西銘県政のプロジェクト担当のような感じですね。

吉元 そうですね、結果としてはそういう仕事をしましたね。だからいつも珍しがられるのは、なぜ西銘県政で、西銘のそういう重要なプロジェクトを担当したか、と言われるが、僕が選んで担当したんじゃないかと、手が空いているやつに回ってくるだけだから。しかも第二次振興開発計画というでかい十年計画をつくっている中で、僕はそれをやっていないわけだから。私の方に回ってくるのは必然だったかもしれないですね。

佐道 県の仕事をされているときには、組合との関係はどうなっているんですか。

吉元 もちろん、組合の役員には全然関わっていません。

佐道 でも情報とかは入ってくるんですか。

吉元 それはもちろん先輩としてときどき呼ばれますからね。団

体交渉が行き詰まると、呼ばれてアドバイザーを頼まれたりしますから、それはきちんと組合の三役や執行委員会にアドバイザーをする。それはずっと続けていました。私自身は県庁の職員である以上、県の仕事を真面目にやりますが、同時に組合員でもあるんですね。私は復帰前に基地問題専門官というポストにあっただけです。復帰前に琉球政府で初めてつくったポストです。先ほど言いました、復帰前に私が一年間職場復帰をしたと言いましたが、その時は私は職場に帰った。当時は琉球政府ですから、琉球政府の総務部職員厚生課というところに帰って、公務員の福利厚生関係の仕事をやっていたんです。その時に実は沖縄の毒ガス・細菌兵器で問題が起こった。知花にある嘉手納弾薬庫から毒ガス、VXが漏れて、その周辺に配置していた山羊（ヤギ）が死ぬという事件があった。それを契機に、沖縄に毒ガスがあるということが公然化して、その毒ガスを県民運動として撤去させるという厳しい運動が起こるんです。そのときに、毒ガスを撤去させるためのチームが緊急につくられるんです。

伊藤 それは県庁の中に、ですか。

吉元 琉球政府の中にです。七一年ですからね。その時に私は職場復帰していたけれど、緊急に集められて、私を中心に四名ぐらいのチームができた。屋良さん時代ですが、急遽毒ガスを撤去させるための計画策定に入ります。これを日米政府で詰めるんですね。もちろん首脳部が詰める。その時に初めて基地専門官という職名ができるんです。私のために。私はそのとき係長クラスになっただけです。それで毒ガスの撤去を、何ヶ月間かかかって取り組むんです。移送コースを決めたり道路を新設させたり、事故が起こった場合の毒ガスの拡散、風向き、どこまで避難させるかということ全部シミュレーションした。気象台に昔いましたから、気象台の課長を集めて、琉大の学者を集めて、コンピュータでかいやつが初めて琉球政府に来たときですから、それでシミ

ユレーションをさせたりして、避難コースなどを決めるんです。こういう仕事を、一年近くやりました。なぜか知らないけれど、そういうことにおつかったこともあるんですね。

伊藤 なぜか職場復帰されると、必ずそういう特任事項といいま
すか、そういうことにおつかるんですね。

吉元 これが不思議なことですね。逆に言えば、そういう仕事を
東ねて持つていくような人が行政の中に少ないのかな。知らない
けれど。つくづくそう思いますね。副知事時代も、たくさんの部
課長、係長まで仕事をしているのを見ながら、誰が適任かとい
うのは、体験があるだけにわかりますね。決して課長が適任とい
えないですね。ですから私なんか大胆に、その課長には、「お前
さんは責任者だ、実務にタッチするな」ということでチーム作り
のアドバイスをしたりするんですけれどね。いいやり方ではない
けれど、行政というのは得てして組織の序列でものごとを処理す
る癖があるが、本当にそれが行政の効果を出しているかという
と、そうでもない。そこを見極めた上で、適切なプロジェクト・チ
ームをつくってそこに仕事を委ねていく。そして責任をとる体制だ
けは管理者が持つ。これは大田県政をつくったときに、その仕組
みを最大に活用した経緯があります。僕自身が毒ガスの時はそれ
をさせられたわけです。

佐道 先生が西銘さんのところにいらつしやったときにまとめら
れた構想ですが、国際交流とか、そういうものは書き物になって
いるんですね。

吉元 なっています。冊子があります。県の企画調整室あるいは、
県の資料室に行ったらあると思います。先ほど言った「日本・中
国・東南アジア交流センター」という調査物、もうひとつ、「沖
縄コンベンションセンター基本構想」。芸術大学の場合は、そう
いうものは自分でやりましたからね。教授陣をどう集めるかとい
うことで、全国の教員リストの中から適任者を選び出すという作

業を本土のある業者に頼んだりしたデータはあると思いますけれ
ど。しかし例えば、先ほどもいった人材育成もレポートという形
ではまとまっていなくてもいいかもしれません。直接みずからやっ
た仕事ですからね。それから「沖縄県総合交通体系基本計画」と
いうのを初めて沖縄でつくった。全国でも初めてかもしれません。
伊藤 それは西銘さんのときですか。

吉元 そうです。まさに第二次振興計画をつくる際ですね。海陸
空の三つの交通網をどう作り上げるかということです。沖縄は離
島ですから、そういう意味では陸上交通だけをやるわけにはいか
ないということ、この三つを有機的にどう噛み合わせて、効率
的な県民の利用ができるシステムを作り上げるかということ、つ
くったものです。もちろんその基本は陸上交通ではありませんけれ
ど。それは第二回目のものがもうできてきているんですが、そうい
う意味では、それがちよつと大きな仕事でしたね。

伊藤 その当初案というのは文書になっているわけですね。
吉元 冊子があります。

佐道 そういふものをつくるときに意見を聴かれた方とか、一緒
にやられた方というのはいらつしやいますか。

吉元 国際交流センターの話、それからコンベンション基本構想
は、私の記憶が間違っていないければ、いま琉球大学の真栄城（守
定）教授と高良倉吉教授です。いま二人は稲嶺さんのブレーションだ
けれどね。真栄城さんが県出資のシンクタンクにおりましたので、
かれのところ、この調査をさせた経緯がありますね。調査報告
書というのは、文字通り委託したシンクタンクがチームを作っ
てやって、その成果物が上がってくるんですが、その中味そのもの
は一緒に論議したものです。当時あの構想の報告書をつくること
に、彼らはマラッカ海峡まで行ったはずですよ。琉球の交易船。
つまり文字通り武器のない琉球が船を走らせて、南から北まで交
易をしながら国をつくっていた。その頃をどう今日に移し替えて

いくのか。その時に私の関わり方が、大田県政になって、もう少し大きな形で、単なる交流センターではなくて、沖縄そのものをそういう場にしていこうという国際都市形成構想につながるんです。

佐道 最初の段階で、高良さんのような歴史家が関わっているというのは非常に面白いことですね。

吉元 県庁、教育庁の職員なんです。博物館の職員だったと思います。と同時に、彼自身はあちこちに、マスコミ等を通じて自分の考え方を書いていましたからね。ですから非常にユニークな発想を持っていた。つまり、ものの方から考え方が、沖縄だけにこだわらない形で、もう少し大きなところから沖縄を見るところから法をとつていた若手でしたね。そういう意味では、酒を飲みながら議論したという経緯もひとつありますね。

伊藤 これまでのご経歴で、あまりプランニングというお仕事はなさっていませんが、どう思っていますか。

吉元 それ以前はプランニングという仕事はないですね。

伊藤 それが与えられたらすぐできたということは、組合の活動が。

吉元 労働組合の活動というのは、与えられたテーマに基づいて当たり前日程をつくって運動をつくるということは何もありません。

伊藤 まあ、そういう組合もあると思うんですが。

吉元 たぶんね（笑）。でも、沖縄の労働組合というのは賃金闘争にしても、当時アメリカの高等弁務官がいて、私たちが労使間で確認した賃上げの幅を、弁務官が書簡という形で削るという時代があったぐらいです。これが法律的な効果をもつんですね。無視したらいいのに、紙が一枚来たら終わりです。そういう時代に運動をやるというのは何だったかということですね。ですから職場闘争、賃金闘争、労使間交渉だけではなくて、文字通りアメリカ

カとの関わり、日本におけるその種の問題をどうするのかという問題、それから一番大きなものだったのは、復帰運動で得た僕の体験でしょうね。それは地域を隔々まで回りましたし、演説もしましたし、一緒にものを考えましたからね。

その時に得た教訓は、復帰後もそうですが、沖縄の場合は、絶えず周辺の動き、日本だけではなくてアメリカも東南アジアも中国も、これを全体的に捉えていく運動が復帰運動の中にもありましたし、労働運動の中にもありました。だから国際自由労連に加盟して、積極的にそこを利用したという経緯もあります。つまり組み立て方が、調査をし、データを並べて、それからどういう方向を定めるのか。定めたら、どういう効果的な運動をつくるのか。そういう沖縄の労働運動は私の当時の仲間にとっては、当たり前的手法でした。

伊藤 いわば戦略的な思考と言っていると思いますが。

吉元 戦略思考がなければ、沖縄のこの種の運動は展開できなかったと思います。そこが今でもあるんでしょうね。ですからこれが共通するのは、行政の中における新しい課題に対してどう取り組んでいくかという場合、ただ単にコンベンションセンターといつても箱物をつつくるという発想ではないはずなんです。つくった場合、どういう効果を生み出し、そのためにはどういう呼び込みをするのか。そういうことが問われるし、一つ一つくれば、同時通訳のグループをどうつくるか、弁当をつくるのはどうするか、印刷所をどうするか、全部関わるでしょう。つまり一つの産業なんです。行政がつくる仕事というのは箱物にみえるけれど、それに取り巻く課題というのは地域社会を動かすんですね。そこまで見通した上で作りあげられるのが、行政でやる箱物行政だと思ふ。そのところがうまく行っていないから、首長は好きな箱物の話が出ると、つくっちゃって終わりでしょう。つまり管理・運営と地域経済に与える効果を見ないでつくっちゃおうという

とところに問題があるのではないのでしょうか。

コンベンションホールを造ったときも、モノだという批判がたぐさんありました。こんなにでかいモノをつくってどうするのか、人が入らなかつたらどうするかとか、県の持ち込みで大変なことになるよと言われたけれど、現実には今はそうでもない。これが必要ならば、あれだけの会議が来なかつたでしょうね。むしろこれでも足りないという状況がいま出ていますからね。

ですから、そういうものが必要だと発想した知事がまずはずさずいんでしょね。先を見ていたんでしょね。西銘さんという人はそういう人だったかもしれない。その上に担当させられた私たちが、そのことを積極的に使った、ということでしょうね。ですから先ほど言った、沖縄の交流センター構想で、高良倉吉さんなどに関わってもらった。あの時はすごい議論をしながら創造していったと思いますね。

実はその構想は、鈴木善幸さんが総理の時に、東南アジアに行ってお土産にしたんです。その前に、田中（角栄）さんが卵を投げられた経緯がありましたね。たしかそのあと鈴木善幸さんが東南アジアに行くということ、ASEAN回りの時に、お土産がないと騒いだんです。外務省が。それで沖縄県でこういう仕事をやっているといるということで、「日本・中国・東南アジア交流センター」から中国を抜いちゃって、日本政府がつまみ食いをしたんです。それで「日本・東南アジア交流センター」、これがASEANセンター、人づくりセンターで、このメインが沖縄です。いまの沖縄国際センターというのは、それが原点になっているんです。そのときは開発庁から電話があつて、いいよ使いなさい、私は使つていいと思うけれど、沖縄につくる場合は、国であろうが、民間であろうが、県であろうが、市町村であろうが沖縄のものだから、設置主体を問わない、中味について物をいわせてくれ。それをやるなら、知事の了解さえ取れば、中味は協力しましょうと

いうことで、あれは短期間でまとまって、鈴木総理が東南アジアを回つて、五ヶ国にASEAN人材センターを設置して、そのメインを沖縄にしたんです。それが今日ここまで発展したんですね。伊藤 いや、お話を伺つて、たしかに組合運動の特異な状況から生まれてきた戦略的発想というのが、その後々ずっと続いているんだな、ということが非常によくわかりました。でも労働組合運動をやつたすべての人がそうであつたわけではないですね。

■西銘県政の限界と大田県政誕生

吉元 むしろ僕は自分でも思うんだけど、稀な方でしょうね。希少な価値でしょう、いい意味か悪い意味か。

話は最近になってくるんだが、私が県庁を辞めて県労協の事務局長をやつた理由ですが、やめて将来どうなるかという計算をすることもできるでしょう。うちの人はしたんですね。年金どうなるのか、退職金の差額をどうするかとか、いろいろな問題が出るさるんだけれど、結果としてうちの人から「好きだからやつたらどうか、好きでしょう」と言われたんですね。やつぱり好きなんでしょね。それは何かということですよ。何もなくて、それに飛び込んだのではなくて、何かをしたかった。

西銘さんの十二年間の県政は、私たち県民にとつては居たたまれなかつた。西銘さんは早く本土と一体化しようとして、目の前にある基地問題とは真つ正面から対応しようとしなかつた。とにかく予算をとつて、県民所得をどう上げるか、こういう事業をやるか。これは必要なことではあるけれど、沖縄県民の最も懸念している将来の不安、つまり基地問題に食い込まなかつたということがひとつあつて、このまま続くと沖縄はどうなるのかという危機感がありました。八〇年代の中頃から動き出したゴルバチョフの動き、冷戦がどうなるかという形で動き出す初期ですね。そこがいちばん、僕たち沖縄は危機感を感じたんですね。これをそ

のままにしておく、沖縄はそのままになるのではないか。つまり西銘体制を変えて、基地問題、沖縄の生き方に対応できる人をつくらなければいかん、ということがひとつありましたね。ですから私は、八五年に県庁をやめて、そこに行くんですね。

伊藤 やはり状況の変化を考えて、ですか。

吉元 それは沖縄だから感じるんですね。そこからそれではという事で、もう一回沖縄闘争、「沖縄闘争」という言葉を敢えて使ったが、それを再構築しようという気で――。

伊藤 逆に言うと、東西冷戦が崩壊すれば、基地問題解決の可能性も出てくるわけですね。

吉元 そういふ感じがした。しかしアメリカの体質からするとそうはならない。だから県政を変えておかないと、これは対応できない。つまりアメリカ並みになっていく。一番の問題は、復帰の時も復帰後もそうだけれど、沖縄問題に対する日米政府の対応が変わらないということです。沖縄から問題を提起しないと変わらないんです。沖縄から提起しても日本政府は知らん顔、アメリカ政府は基地を目の前に行っているからなんとかしなければいかんということをするけれど、これは小手先。この構図がずっと続いて、西銘県政の十二年間にはもつと強まったわけですね。

伊藤 この西銘県政の間というのは、まったく基地縮小というのはなかったわけですか。

吉元 なかったですね。

伊藤 一坪たりとも、ですか。

吉元 一坪たりともはいけません。その間に話し合ったものもあります。だけれど、私たち沖縄県が使いたい、地域が使いたいという部分はなかったです。そこに問題があったんですね。つまり形の上では不要な部分を返すということはありました。いくつかの話もありました。それはそこだけで終わりました。一番問題なのは、基地の問題、アメリカ軍がもういらんよ、と言って返され

た後どうするかという問題です。これが、那覇の中心部とつながっている天久住宅地というところの広大な部分を、準備できない段階で返してきた。しかも返し方が一括でなく、利用できなかったんです。こういうことが二度続いたら終わりだという危機感があったし、そういう意味で県政をどう変えていくか。

私は県庁を辞めて、最初に大田さんを説得したが、これは失敗するんです。西銘さんの三期目の選挙の時に大田さんを説得して駄目だということになった。しかし次は逃がさんよという話になって、その後九〇年の選挙には出てもらったんですね。

ですからの間に、沖縄闘争をもう一回つくろうということ、何が一番いい運動かということを考える。復帰段階に関わっていない若い連中が職場におりますからね。その人たちと沖縄問題をもう一回話し合っていく場合は、言葉ではないと思った。それで嘉手納基地包囲行動をやったんです。「赤ちゃんからお年寄り」という言葉で取り組みました。

伊藤 これは県労協の事務局長として組織なされたということですか。

吉元 そうです。これは非常にきつい仕事でした。いまは全く身体に障害が残っていないけれど、途中で私は一回倒れました。

伊藤 過労ですか。

吉元 過労というか、飲み過ぎだろうな、わからないけれど(笑)。それ以後は血圧がどうにもコントロールとれなくなりました。そういう意味では県庁を辞めるときは決意は、やはり沖縄を変えなければいかん、変えるためにはどうしたらいいか、やっぱ西銘さんでは駄目だなということでした。

もう一つあったのは、基地問題をもう一回県民が目の前に提示すること。それにはどういう行動があるのか、それは県庁にいて私が何をやっていけないから、そういうローカルセンターの中心メンバーとして要請されるなら出てみようかと。それができな

かつたらどうなるかということとは考えきれないですね。しかしその通りにしてきたんです。

伊藤 しかしこの時にお辞めにならないで、県庁にそのままおられたらどうということになったと思いますか。

吉元 おそらく課長にもなれなかったでしょうね。それは西銘さん時代は大変ですよ。私自身は復帰前の係長、専門官ですが、職場に戻ったときもそのまま、職場から出て芸術大学に行ったときに室長補佐、だから課長補佐です。僕の仲間は全部課長以上です。それから、それは、なれないです。それは沖縄の行政の場で、この種の問題というのはつきり自覚しないと運動できません。

伊藤 駄目なんですか。

吉元 駄目です。それは全く駄目です。厳しいけれど、これが当

たり前になっていきますね。だから言うところの官僚組織と沖縄の場合ちよつと違うんですね。もちろん公務員試験で全部入って来るんだけど、やっぱり自分の生き方が、沖縄の中でつくられていくでしょうね。だからとどのつまりは、行政をするために妥協するのは仕事であつて、それ以上はやらないです。いやなのは選挙をやらぬしね。それは革新も保守も同じことです。職場ではみんなわかつていますからね。あれが上がるのは当たり前だと思ふし、これ以上がらないのはそうだろうな、と思ふしね。それはかなり割り切った考え方を沖縄では持っていますよ。県だけではなくて市町村でもそうです。

佐道 お約束した時間をオーバーしてしまいました。どうもありがとうございました。

(終了)

吉元政矩 オーラルヒストリー

第2回

日 時：1999年11月17日（4時間）
場 所：沖縄県地方自治研究センター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

■大田県政誕生の背景

伊藤 今日は大田知事のところから始めさせていただきたいと思
います。

吉元 シャベりにくい話ですね(笑)。

伊藤 お答えできないことは、できないとおっしゃっていただけ
ればと思います。なぜ、大田さんなのかというところからお伺い
したいと思いますが、前からご存知でいらつしやったんですか。

吉元 復帰前から知ってはいました。ただ、個人的にはそう親し
い間柄ではなかったんです。労働組合運動あるいは復帰運動のい
ろいろな段階で私たちが労働講座を計画したときに、講師として
来てもらったりしたんですね。そういう活動は大田さん自体が幅
広くやられていたので、人となりというのも十分知っていますし、
また書いた本によって、啓発された部分もわれわれにはあります
ので、そういう点ではかねてから知っているつもりです。

大田さんに絞って込んだというのは理由があります。復帰直後の
知事というのは、復帰前の琉球政府の最後の主席でありました屋
良さんですが、一期目で終わりました。健康上の問題が主要な理
由でした。同時にこの時期(屋良氏は)「自分が果たす役割はあ
ったけれど、その後二期以降は沖縄作りであり、沖縄県をどうす
るかということだ。そういう面では自分には対応できない」とい
うことでありました。

その段階で一時期いろいろな学者の名前も出しましたが、私たち
はむしろ沖縄県の健全な将来像を描くためには、財政問題から地
方自治などをきちんと踏まえなければならぬ。そういうリーダー
ーがいま必要だと思つて、前回は話したように、当時県議会議長
だった社会大衆党の平良幸市さんを説得して出てもらった経緯が
あります。そのときに条件として付された仲吉良新もしくは吉元
政矩を副知事ということについて、応えきれなかった。そのこ

とによって過激な仕事の中で、任期途中で病に倒れたということ
がありまして、相当ショックを受けました。したがって、ただ単
に知事として選ばばいい話じゃなく、どういうバックアップ体制
を作るのかということ、同時にどういう副知事、出納長を含め
た三役体制を作つたらいいのかということ、ここは本当に身に
つまされたというか、反省させられました。

しかしながら、その時期に次の選挙には十分な人を立てること
ができなかった。結果として西銘順治さんが当選したのです。西
銘さんが出て一番特徴的だったのは、安保問題、基地問題などに
ついてはお座なり、むしろそれを是とした上で過重な負担は少な
くすべきだという声を出していたけれど、具体的に行政の中でそ
れらしい力を入れた仕事はしていなかったということです。何か
しらす西銘さんの一期、二期を見てみますと、少し問題が出てい
る。沖縄問題というのを日本の一県という次元で取り組まれていくん
じゃないかと。つまり、沖縄が抱えているいまの問題とこれから
のことに十分対応していない、という厳しい批判をしていました。

その中の一つは、沖縄国民体育大会というのがあって、それに
天皇、皇后が来る。これは当たり前前の仕組みですが、それを巡っ
て県民の中で非常に大きな批判というか問題提起があった。戦争
責任をどう追及するかというような運動ですね。それに向けてこ
の西銘さんの時代に、教育の中で主任制の強行、つまり強引に取
り入れるとか、あるいは学校現場における日の丸・君が代の押し
付けということが、国体に向けて非常に大きくなされていくん
ですね。そういうことから沖縄問題にもう一度否応なしに目覚めさ
せられたということがありました。

ですから西銘県政の二期目に、こういう知事の下、こういう県
政の下では沖縄は大変なことになるぞということで、政治家より
はむしろしっかりした理念を持った人を選ぼう、担おうというこ
とで、大田さんの名前を出して、大田さんを説得した経緯がある

んです。結果として、これは不発に終わりました。当時大田さんには真面目に聞いていただいたけれど、国際的なプロジェクト、自分がかかわっているもの、しかも研究の補助費等は文部省関係ということがあります、抜けられないという切実な問題があったようです。そういう理由を示しながら、自分がこの段階で応ずるわけにはいかないということでした。私たちはそれでもなおかつ粘っていったんですが、政党次元ではまた別の人を探していたということもありまして、結果として私自身は諦めるということになりました。

伊藤 いまおっしゃった政党というのはどこですか。

吉元 革新政党です。社会党、社会大衆党、共産党ですね。特に社会大衆党あたりが別の人を担ごうかという動きがあったりして不発に終わったんです。いずれにせよ、あのときに最終的には大田さんに、「今回はあなたの都合で諦めますが、次は私たちの声を聞いて欲しい」という引導を渡して、それで見送るということになりました。したがって西銘さんの二期目に対決する選挙というものは、私たちはそう力が入らなかつたという経緯があります。

西銘さんが三期目に入り、いよいよ行政の中でもいろいろな矛盾が出た。取り巻きを作って行政を私物化する動きが出たり、顕著なものが出始めたんです。それで県民的な批判も出始めた。特に沖縄県の公共事業、とりわけ入札制度を下手をすると私物化しているような入札結果が表れたりして、これは相当業界の中でも話題になりました。

そういう意味で、これはいよいよのつびきならぬところまで腐敗し始めたなという危機感を持っていましたから、大田さんに強力な説得をした。大田さんもそのときはほぼ覚悟しておったんですね。大学の仕事も一段落したということであつたし、あとは大田さんが出て当選していけるような条件整備といえますか、そういうものをどう作っていくかということでしたから。そういう

意味では担ぎ出すことに成功したわけです。

そのときに、いつてみれば敵側という言葉を使わなければならない、相手側も再び出るということでした。四度出るということでしたから、そこから離反した経済界の一部、とりわけ市町村レベルにおいて、いろいろな県とグルになった公共事業の偏った入札結果が全部表れていましたから、そういう不満を持っていた中小企業のみなさんをまとめることが一方で可能だったわけです。ですから大田さんを担ぎ出すときは、ある意味では保守・革新という対決よりも、むしろもう一つの保守の勢力の中の経済界の一部を私たちが抱え込んだ。それは表向きは口が裂けても言えないけれど、いまの知事の企業であつた「りゅうせき」とか、沖縄で最大の建築業である「國場組」とか象徴的にはこの二つ、もつとありますが、この二つを巻き込むことによつて、一挙に足元を崩して知事選に持ち込んだということですよ。

伊藤 このときは対抗馬といいますが、政党は。

吉元 もちろん西銘順治さんが出たわけですよ。

伊藤 いや、革新政党の側は。

吉元 もちろん大田を担ぎ出して西銘にぶつけた。西銘というのは四期目ですからね。大田さんを候補者として担いで、経済界の一部をこつちがひつさらつたわけですからね。もちろん革新政党側は全部まともりました。

伊藤 まともりましたか。これは異論は全然なかつたんですか。

吉元 なかつたです。これは社会党、社会大衆党、共産党、個別に政策協定を取りましたし、加えて公明党との間でも政策協定を取りました。ですから、いわゆる革新総体がまとまつたということになります。

伊藤 そのまとめ役は先生がなさつたんですか。

吉元 文字通り私自身が走り回つたということです。大田さんを選んだというのは、ただ単に彼が学者だつたという意味ではなく、

文字通り沖縄戦の生き残りということと、それを一つの生き様の出発として、彼がその方面での研究と勉強をしながら、広く沖縄の中で警鐘を鳴らしながら——アメリカ時代もそうでしたし復帰後もそうでしたが——絶えず発言してきたという経緯があったからです。私たちも労働講座に呼び出しながら意見を率直に交換するという機会を持っていましたから、そういう意味では、本人は別として労働団体や政党レベルからは当然だというムードがありました。もつとも四年前にも働きかけた経緯もありましたからね。

伊藤 四年前の段階で、他の革新政党もだいたいOKだったわけですか。

吉元 そのときは必ずしも全会一致ではなかったですね。むしろ私などが走ったということでしょうね。もちろん私個人ではなくて、当時の沖縄教職員組合の委員長とか、さらには社会党の書記長とかの連携がありました。

伊藤 そういろいろいるなお仕事をなさる場合、先生として一人で走り回るといいますか、普通はだいたいパートナーがあるのでは。

吉元 役割分担なんですよね。結局、この運動はチームを作って企画をしますからね。ですからそれをじっくり練り直しながら、広げながら、執行機関にかけて、そして大衆的に下ろしながら運動化していく。これは選挙でも同じパターンです。ですから沖縄県労協というところで私がこのことについて動くことは、三役会議、幹事会で了解を取った上でのごとで、しかも沖縄県労協の組織に入っていない沖縄教職員組合に対して（働きかけるわけです）。

伊藤 （沖縄県教組は県労協に）入っていないんですか。

吉元 連合を作るまで入っていないかったです。そういう意味では、むしろパートナー的ですね。高等学校の労働組合、高教組も入っていませんから、そこを連携を取りながら、そして政党にも

働きかけながら、ということですね。しかしこの種の仕事というのは政党が雁首揃えて行って成功する例はあまりないんですよ。どこか本気で担ぎ出す勢力というか、やはり労働組合の足並みを揃えておくということが大事で、それがあれば候補者に担がれる人も、まず足元を見て、その上で政党の協力を得て、より県民的に広くどう見渡すかという話になります。大田さんの場合は広報学が専門ですから、自分でいろいろ世論調査もしているし、マスコミの世論調査もその都度分析している。ですからそういう意味では感覚的にはほとんど一致していました。ズレがなかった。

伊藤 この選挙は勝てるなという確信はありましたか。

吉元 本人はどう思ったかわからんが、私は三期十二年間の西銘さんの県政というものが非常に問題を起こしたということと、ごく一部とはいえ県内のかつてなかった二つの大きな企業グループが協力しているということができた。それに中小企業の中で、特に土木建築業の中で足並みが非常に乱れてこちら側に顔を向けるということがあった。この辺が従来の選挙のやり方と違う。これは他の人ではできなかったでしょうね。むしろ私が直接それを作っていったわけですから。そこが大田を担ぎ出したときの特徴です。

佐道 （吉元さんは）昭和六十年に県労協に戻られたわけですね。そこからそういう方向でいらしたんですか。

吉元 私が県庁を辞めるときに、十年間私を県労協の事務局長を不信任するなといったんです。これは笑い話ですが、そういうふうな労働組合の親分衆に宣言しました。そのときに私が必要だとするならば、私はそういう長さで沖縄県労協の仕事と同時に沖縄の基地問題や沖縄問題を解決していきたい。つまり、十年間信任するならば、沖縄闘争の再構築をするという約束をするんです。これはもちろん、こんなことが通用するはずはないんですが、私の決意です。県庁の仕事をしているわけですからね。しかも芸術

大学の準備室補佐しながら西銘さんのプロジェクトをやっているのです、それを自分の意志で離れるわけですから。私にも年金問題があるし、いろいろな問題で、公務員としての流れからすれば、辞めることは不利になることはあっても決してプラスになることではないわけですから、そこで辞めるということは相当な決断が必要になってくるでしょう。

そういう意味では沖縄闘争の再構築をするというのが、私のみんなに対する第一声でした。そのためには何か、となると、日常的には基地問題に対してもうちよつと敏感になろうじゃないかということ。もう一つは県政の流れを県庁の中にいてよく見ているわけですから、そこは仕事の分野が別だといつても仲間ですから、そこは居たたまれなくなりますよね。もう一つ積極的に言えば、当時日本は中曽根さんですか。あの一つの大きな流れでは日本の中でも軍事的な方向が出ていて、ガイドラインの問題を含めて中曽根さんが発言していた一連の防衛力強化の方向というのは、私たちにはものすごく気になりました。ですから県庁を辞めたのは、結果として勇気があったとみんなに言われたけれど、それほど悩んで辞めたわけではなくて、もし頼まれるならば、という気持ちになったのは事実でしょうね。

そのときから県政をどう奪還するかというのは大きな課題でした。ですから私は十年間の中に県知事選挙が何回入るのか、那覇市長選挙が何回入るのか、県議会選挙、そして参議院選挙が何回入るか考えました。解散総選挙はそう勝手に入れられないけれど、だいたいサイクルはわかるからそれも入れてみて、その中でどの時期に大きな県民運動をまとめていけるのか、ということですね。それが一つ象徴的な県民運動としてあがってきたのが、嘉手納基地包囲行動です。ですから、文字通りあれを成功させたときに、私は次の知事選への足がかりを確信したと言えるでしょうね。土砂降りの雨の中、バケツをひっくり返したような雨だったんです

が、赤ちゃんからお年寄りまで結集できた。集まった人々は本当に保守・革新なしに地域住民として集まっていますからね。自身で新しい運動の掴み方をしたでしょう。計画した私から言えば、ここから出発できるという意味で、沖縄闘争の再構築の出発点だったかもしれません。

伊藤 あのアイデアはどこからですか。

吉元 一つはイギリスで、やはり同じように米軍基地への反対行動があったんです。トマホーク配備反対闘争とか、いろいろなものがつながっています。そういうものとの関連なんです。イギリスで包囲行動というのが計画され、不十分ながら部分的に実行されたようですね。それをマスコミ的に見ていましたし、同時にそれ以前に、前々から嘉手納基地包囲行動というのは沖縄の中で話題があるんですよ。だけど誰もそれを実践できるとは考えられななんです。民主党の衆議院議員の上原康助さんなんかも、声を出した時期があるというんです。だけどそれはとてもじゃないけれど実行できなかつたんですね。

ですから、そういう意味では熟していたかもしれません。しかしそのためには大変だったですよ。一月早々に発表して、それから六月二十一日までの間ですからね。それこそ寝ずに飛び回ったということですよ。

伊藤 六月という暑い盛りでもあるわけですね。

吉元 私が一番問題にしたのは、復帰後、若者が基地問題に対する怒りとか、将来の問題とかに関心をなくし始めていたことだった。それには非常に危機感を持っていました。ですから、いつも基地に対する行動を組むときに、各組合の青年部を集めるんですが、そうすると、議論し行動を決起する直前になると、顔を洗う場所はどこにありますか、とか始まりますからね。歯を磨く水はありますか、トイレはありますか、この三つを必ず聞きますからね。私たちは沖縄の運動の中でそういう発想をしたことがな

いんです。飯さえどこから届けばいい。眠る場所なんて、とにかくカップの一枚でもあればという感覚なんです。そういうことがだんだん重なってきた時期でした。それではおんぶに抱っこで、飲み水から、顔を洗う水から、歯を磨くところから便所まで、全部揃えないと労働組合の運動ができないのかということに怒りを感じておったんですね。

ですからまずそれをつぶすことから始めた。行動というのはきついですよ、ということですね。そういう意味では、先ほども言ったように、沖縄闘争再構築です。

伊藤 その危機感というのは今でもおありですか。

吉元 ありますね。それはまったく変わらないですね。変わらないうというより、むしろ今回は従来と違った危機感を持っています。県政が保守化したというだけではなくて、なんでもかんでも受け入れる、そしてそのシナリオまで東京で作ったやつを受け入れてしまう、あの体質、ああいうものは沖縄にはなかつたはずなんですよね。ですけど、そういう形で表れています。そういう意味では従来より危機感を持っています。西銘さんの三期十二年間より、僕に言わせれば危機感が強いですね。

伊藤 その話を最後に伺わせてください。

■大田県政での役割

佐道 大田さんを担いで選挙をして、当選ということになるわけですが、副知事になられる前に先生は政策調整監というポストに就かれますね。

吉元 私は知事選挙のとき、当選後も、裏で支えようと思っていました。その前に一九八九年に、実は沖縄県労協というのは解散するんです。同様に沖縄地方同盟も解散して、その直後に「連合沖縄」を作ります。いわゆる労働戦線の統一です。この仕事は実は嘉手納包囲行動などと重なっているんです。県労協がなくなる、

朝から晩まで社会党・総評というブロックと一緒に沖縄で運動しているが、総評も解散する、連合ができる。社会党も、連合ができたら労働組合と距離を持たざるを得ない。

そういう中での沖縄問題でした。沖縄問題は、それではどこで担いでいくのか。沖縄には担ぐ部隊があるけれど、本土はどこが担ぐのかという深刻な問題が起ったんですね。総評解散後、沖縄問題はどこが担ぐんですか。連合には持ち込めない。旧同盟、民社党の関係がありますからね。それをどういう形でつなぐかという問題がありました。これがやつと接するように、平和センターとかいろいろな仕組みを各県が作って、全国が沖縄とつながるようなルートを作ったんです。そのことが一つあった。したがって私は、連合沖縄を作って、県労協は解散ですから、この自治研センターの方に入ってきて、ここで知事選挙までを過ごすわけです。そこが文字通り知事選挙の選対的な役割を果たしていくんです。

佐道 司令部になったんですね。

伊藤 自治研センターというのは、どういうものですか。

吉元 これは自治労沖縄県本部、一万名以上おりますが、その内部組織です。しかし事実上は完全に独立している組織ですが、地方自治にかかわる研究をしようという場なんです。沖縄の地方自治となりますと、朝から晩まで基地に引き回されていますから、必然的に基地問題を中心とした地域市町村との関係、基地の跡利用の問題などを含めて、地域計画作りを支援したり、アドバイスしたりという仕事でした。

伊藤 一種のシンクタンクみたいなものですね。

吉元 シンクタンクの性格を持っていますね。それからシンクタンク以上に運動を前面にだす。ですからシンクタンクの機能よりは、講演をして運動につなぐような役割を負わされているんですかね。

伊藤 先生はその責任者なんですか。

吉元 いまは理事長ですが、あの頃は事務局長という形で位置付

けられていました。私はそういう意味では知事選挙に勝った直後、大田さんを知事に就任させるまでは、細かい県とのつなぎをやりました。その後は私の仕事ではなくて、県の内部で各局長が知事を支えていくというような体制まで作っていた。しかし考えて見ると、西銘さんのところで十二年となりますと、だいたい課長から部長に上がる長さなんです。その長さを一人の知事と付き合ってきて、知事が替わって、しかも基地問題に対する発想も変わるし対応の仕方も変わるといふことですね。知事選挙の政策をみて、いまの部長連中が、「大田と一緒にやれます」とは言えないですね。

ですから就任してすぐ議会が十二月初めから始まりましたが、その中で選挙政策、公約を巡る質問が、自民党・野党から出るんですね。知事自身が適切に答え切れない。副知事はいません。まだ選任されていない。部長連中がおるけれど、部長連中もバックアップし切れない。し切れないというより、しない、というふうに見られたんです。

そこで急遽、このままでは大変だ、つぶされるといふことになって、十二月議会中に（私に）県庁に入ってくれということになりました。入るとすればどういふポジションで入るかということですが、結局、三役つまり副知事人事とは違う形でどう入るか。もう副知事人事はできていました。大田知事がそれでいくという形がありましたからね。

伊藤 それは別の人ですか。

吉元 それを議会に提案していた。結局は一般職、部長クラスで入った方が一番自由に動けるだろうということですが、各部署長というのがあるわけですから、肩書のある特定の仕事を持ったポストは作らないでおこうということでした。そのときに検討した二、三名のグループが、アメリカの大統領補佐官をイメージして、大田さんと話し合っています。ですから、「政策調整監」という名

前になったんだけど、目的としては知事に対する政策アドバイザーという英語名を作ったんです。それだったらどういふ名前がいいかということで県庁の連中が知恵を働かせて、まったく全国になかったんですが、「政策調整監」という名前を付けたんです。ですから知事の政策を特命で担当していく、つまり選挙政策、新しい政策、そして新しい政策課題を掘り起こして、これをもう一回作り直していく仕事を含めた何でも屋ですが、通常業務にはタッチしないということがルールで、あとは知事と一体という形をとったんです。ですから副知事も違う。副知事はラインの仕事をやっていますからね。私は知事の政策を具現化するための仕事をやるわけです。

伊藤 そうすると部局長との関係はどうなるんですか。

吉元 結局は知事、副知事、そして部長というラインがあるけれど、知事、副知事の間から点線が入るんですよ。ここに政策調整監が入るんですね。指揮命令系統は知事に直結。ランクは副知事と「同格」という位置付けをしたんです。一般職ですから同格というのはあり得ないけれど、しかし県庁の中の仕事のウエイトとしてはそういう位置付けをしました。これが政策調整監というポジションです。これは全国でも珍しがられて、国からも、「何だこれは、盲腸みたいじゃないか」と言われたらしいんですが、実際問題としては、それがなければ、通常何十年と生きてきている公務員に対して、知事が選挙の政策を「これをやれ」といっても、なかなかうまくいかなかったらどういふことですね。

これを検討するにあたって背景が一つありまして、神奈川の長州知事と相当論議したんです。知事選を戦うにあたって、横浜に飛びまして、大田さんに会ってくれと頼んだ。だから知事になる前に大田さんを一回会わせています。なった後にも会わせています。その間に私は意見を聴いた。かつての革新の知事と言われた方々、あるいは市長と言われた方々の政策等をどう具現化して実

行していくかという、そのプロセスをどういうふうにかえたいのかということだ。

横浜の場合は、飛鳥田さんの時代には鳴海さんという人がおりまして、相当きめ細かくそれをつないだ。美濃部さんの場合もそういう方がおったようです。それから長州さんの場合は、就任と同時に二人連れて県庁入りしているんです。そのうちの一人が秘書室の中にとつといた。この人と議論をしながら、大田さんが当選して、そしてどういいう仕事を各部署にさせていくのか、特に基地問題に絡む問題、これは通常業務では対応できないよというアドバイスがあった。そのところは神奈川県が苦悩した部分だったらしい。そういう話を聞きながら、どうしたらいいかなということを考えてたんですね。

ですから大田さんが当選した後も、できれば県庁の中でそういうポストを作ろうというのは私自身思っていた。それは軌道に乗ればの話ですがね。ところが、就任と同時に議会が始まった。そこで追及されたものだから、そこで私が入っていった。入ったのが、フリーハンドでできる仕事ということで、政策調整監という位置付けでした。議会でもこのポストは大変問題になりました。翌年二月の定例議会で、政策調整監というのは副知事とどっちが偉いかとか、いろいろな議論がありました。でも結果として、政策調整監というポストは、今も続いています。

伊藤 この保守県政でもですか。
吉元 続いています。むしろ今の知事の稲嶺さんは、これを外部から連れてこようとしたんですが、与党がOKしなくて、外部からは起用できなくて内部から企画部長を起用しています。ですから沖縄の場合は、基地問題にかかわるだけではなく、通常行政との関係を含めて、各県が縦で各省庁とつながっているような仕組みとは違う課題が多いだけに、政策調整監というポジションは続いています。今の知事も必要だと言っています。市段階でも浦添

市に政策調整監というポストができてまして、やっている仕事は那覇軍港の移設問題、これ一本に絞っています。

伊藤 飛鳥田さんとは前々からのご関係なんですか。
吉元 飛鳥田さんが社会党時代ですか、その後市長に出まして、そして社会党の委員長もやりましたね。沖縄に何回も来ているんです。われわれが呼んだこともあります。市長時代も地方自治をしゃべってもらったりしました。ですから何回かお会いして、飛鳥田さん時代には直接細かい話を聞くことができなかったけれど、結果としては長洲さんのときに相当入り組んだ話をしましたね。

おもしろい話があるけれど、大田さんは就任して毎日、決裁文書を見ながら起案をした職員を呼ぶんです。これはだいたい係長が起案しますから、呼んで議論するんですね。だから一時期、課長とか部長が、なんで自分たちを呼ばんのか、とひねくれるたんです。知事に言わせれば、勉強したいんです。印鑑を捺すより前に、なぜこんなものがあるのと聞きたい。しかし呼ばれる係長にしてみたら、意外なのよね。俺は起案したけれど、責任者はちゃんと課長、部長がいるのに、なぜそっちを呼ばないのか、ということですね。こういう職場の決裁の序列を乱すのはけしからんという声がたくさん出ました。そういう時期です。しかし、僕は知事のやり方を否定しなかった。勉強するまでは、それでいいと思っ

ていました。
ある時横浜で長州知事に会ってもらった。知事が質問をしたんです。「長洲さん、就任して何をしましたか」と。そうしたら、私から長洲さんに言ってあげただけに、「一年間は毎日決裁文書で担当者呼んで議論を聞いていた。しかし、ちょうど一年目にハッと気付いた。こんなことをしていたら、自分の政策がでないというのがわかった。だからやめました」という話をしました。それを聞いて大田さんが、「えっ私も同じことをしていま

す」と言ったんです。私のはたから冷やかして、「いや、大田さんは二年間やるはずだよ」と（笑）。それで本当に二年間やった。

ですから一期目二年間は、本人は一所懸命勉強したんでしよう。しかしそのことは、県職員の中では必ずしもいい評価をされていなかったというとは言えます。小さいことばかりはじくって、という誤解を生んだ経緯がありますね。

伊藤 政策調整監のところにも何人かスタッフがいらっしゃるわけですか。

吉元 三名の課長補佐クラスがおりました。それから担当秘書、秘書というのはおかしいけれど、一般職ですから秘書という名前についてはこないけれど。ですから一人が秘書的役割で、三名が文字通り仕事のスタッフですね。

伊藤 それはやはり県庁の中からですか。

吉元 そうです。県庁の職員です。これは人事課が選んだので、私が選んだわけではないんです。面白いのは、私は県庁に前にいたわけですから、私がいいた職場で私と仕事をやっていた職員が二人きました。一人は女性、一人は東大出の優秀な職員です。それからもう一人は、私とは直接仕事はつながっていませんでしたけれど、経済部門でバックアップできるということで。ですから課長補佐クラス三名でやっていました。その三名が、私が担当する仕事をさらに議論をして組み立てた上で、あとは仕事を任せます。そのメンバーがそれぞれ関係部局との間でそれを詰めていくわけです。そして一定程度、予算措置の問題、執行体制、人的体制の問題、いろいろな部門をチェックして、行けるという段階で私の方へ上がってくる。

私はその段階で担当部長、予算担当の部長、計画担当の部長の三名を呼んで、そこでGOのサインを取るんです。それで年度途中の補正でできるものは補正で入れさせ、そうでないものは次年度の当初予算に入れさせる。そこまで段取りを取った上で知事に

持っていった、知事に判断を仰ぐ。知事の場合は、ノーと言った

ことはないけれど、すべてOK、頼むという話でした。そういうことを制度化していった。だから通常業務ではない。やはり知事が抱えている政策、選挙政策です。普通ですと、これをやるころはどきもないんです。計画部門で担当して、全部バラして、全部下ろしてしまつて、いつもやっています、という形でお茶を濁すんですが、そうでない仕組みを作ったんです。

伊藤 つまり、一つの公約をそれぞれ関係部局に縦割りに下ろしちゃうということですね。それをもういっぺんまとめるところはないわけですか。

吉元 その通りです。ですからそれを政策調整監室で全部整理して、やっちゃうんですね。実行可能のところまで熟度を高めるんです。そして現場に下ろせば仕事ができる体制になるんですね。予算と執行体制をチェックした上で仕事を下ろすわけですから、現場は不満は言わないですね。だいたい金も人もいないところに落とされると、なんでおれたちがやるのか、手一杯だ、というのが普通ですからね。ですからそのときに、いろいろなチーム作りも自由にできるようなマトリックス方式とか、いろいろなものを作り上げて、組織の活性化を図っていた経緯があります。

でもやはり沖繩開発庁から見ますと、異常な組織として見られていたようですね。「政策調整監とは何者か。いろいろな仕事を作ってやらせているけれど、結局は各部局から全部開発庁に持ってきて予算を取る。いったいこれは誰の仕事か。俺たちは前年度そんなことを言った覚えはない」となるんですね。しかしそれは開発庁の言い分であつて、沖繩は必要と思うから新しい仕事を出す。このことが（自分が）副知事になって生きてくるんです。非常にきめ細かに仕事を組み立てていく場合に生きてきましたね。

伊藤 では副知事になられたときには、今度は別の方が政策調整監になられたわけですか。

吉元 その通りです。ですから担当している仕事の領域、これは知事がそのときどきで特命事項というのを決めます。私は政策全部、まさにオールラウンド。私の次の政策調整監をやった方（高山朝光氏）は、いま那覇市の助役をやっていますが、基地問題一本でした。その後は基地問題一本になっていくんですね。いままそうなっているわけです、たぶん。ですから、政策全般をやったというのは私しかないかもしれません。

伊藤 政策調整監をおやりのときは、基地問題に限らず政策全般ですよ。やはりこれは自民党からは相当言われませんでしたか。

吉元 それは、そんじょそこらのものじゃなかったですね。普通は予算委員会とか本会議では、私に出る質問というのはないはずなんです。いくら知事の政策であっても、担当部局が抱えている仕事ですから。だげど名指しで私に質問することがずっと続きました。三年ですか。予算委員会でも知事と出席させられるんです。年間一回、二月議会ですが、まさに予算委員会の中では知事以上に質問が出てきますね。いま思えば、俺と議論し、俺をぎゃふんと言わせれば知事も反論できないだろうというつもりだったんでしょうね（笑）。だから知事にしてみれば、非常にいいクッションになった。

佐道 防波堤ですね。

吉元 知事、副知事、私と三名同列に並べて、私にしか質問しないからね。だから、あくまでも嫌がらせ的な面は感じられたけれど、しかしそれは今までなかった仕組みが県庁の中にできたからそうなったと思うんです。ある意味で僕の場合は善意に受け止めて真面目に答えておったけれど、副知事になって、それでは次の政策調整監に予算委員会などで基地問題を聞くかと思ったら、聞かない。私にまた来るんですね。ですからこれは、ある意味では西銘県政をつぶしたのは吉元だ、大田県政の屋台骨を背負っているのは吉元だという位置付けなんですよ。それはずっと続き

ましたから。今日でもおそらく自民党のみなさんはそう思っているんでしょうけれどね。

佐道 そういうことなんですよ。政策調整監も、吉元先生のためにできたということでしょうからね。

吉元 それはその通りでしょう。

佐道 副知事が別にいらっしやるわけですね。その人選も先生がお考えになったということですが、それはどういう基準でそうなったんですか。

吉元 知事就任に「二人の副知事のうち一人は女性にしたい」というので、「それは大田さん、自分で選んでください」と言いました。この女性（上里和美氏）は歯科医をしていた方です。夫が琉大の教授で、奥さんが歯科医でしたが、その人は私たちも見たことがない人で、意見も交換したこともないんです。大田さんがそれがいいというのだから、それはいいでしょうといったんですが、結果的には議会で同意されません。これは大田さんの支持政党側からも反対が出た。ですから野党多数ですけど、与党の方からも（反対が）出たものですから、とてもじゃないが通らなかつた。

その後大田が、琉球大学の教授をしていた尚弘子さんでいきないうから、僕はそのときは「一回失敗したから僕が直接会ってみたい」といったら、笑っていましたけれどね（笑）。その人は通りました。この人は琉球王朝の尚家の嫁で、もともと保守系の人ですから、この人は革新ではないということ、そういう意味では全会一致で通った。

もうひとり、知事が一番最初に不安があったのは、西銘県政十二年続いて変わった。東京の自民党、国会、各県庁は、沖縄は革新県政になったということで、非常に構えたんです。原則主義者とまで言われていた大田が知事になった。何をするかわからんと見られているであろうというふうには知事も思った節があった。

そういうことがあって、国の各省庁とパイプになれる人を本人が強く希望したので、私は「自分で探しなさい」といったけれど、結局「頼む」と言ってきたんです。

そのときに私は、「では便宜的な言い方になるかもしれないけれど、一人おるよ。使ってみるか」といったら、「誰か」というので、「沖繩電力の常務をしていた仲井真「弘多」を使ってみたらどうか」と言ったんです。「彼は各省庁に顔が利くか」というから、「まあ通産の官僚をやっていたんだから顔が利くんじゃないか」と言ったんです。しかし私が調べた範囲では、通産でも決していい官僚ではなかったみたいです。いいポストを歩いていないという意味ですよ。どうかなど思ってたけれど、しかし比較的それはいんじゃないか。背景だって、あの人は沖繩電力を作ったとき、民営化するときに、上のほうから送り込まれたという側面があるんですよ。それは前の知事の西銘さんの時代のことですから、西銘さんが副知事にする、そのための勉強のために沖繩電力を入れておくんだという噂がずっと流れていたんです。ですからもちろん革新ではない。でも国との関係ではいい関係にあるから使ったらどうか、と私が言った。大田さんも、予算も取れなかったらどうするか。自分も初めてですから。それはそうだなという話をして、誰と相談したらいいかということになって、実は今の知事の稲嶺（恵一）、それからもう一つは國場組の、当時は専務だったか社長だったか、國場幸一郎さんと別々に相談した。あいつだつたら、自分たちが連れてきたんだからいいよという話だった。僕は本当に役立ってもらえるだろうと思つた。そして知事に会つてもらつた。

そうしたら、いろいろな話を聞きながら、（仲井真氏は）自分は革新ではありませんよと言う。そこまでは当たり前なんだけれど、そのときの最終段階でいつ返事をもらえるかといったら、実は私は明日東京へ行って来たい。何かあるのかと言つたら、「山

崎拓さんの了解を得てきたい」という発言をするんですよ。これがこの後少し問題になった。この男はちよつと違うなという受け取り方を——私も立会人ですから——した。それでも大田さんとしては背に腹はかえられないわけですから、役立てばということ、彼を結果的には起用した。だから十二月議会で通るんですよ。もう一人の副知事は駄目になる。二月議会の後半で追加提案した尚弘子さんが通るんです。ですから大田体制が作られるのは年を越してからという形になります。こういう形で三役体制が出来上がっていくんです。

その後、仲井真副知事が担当している基地問題、「代理署名」の問題、西銘さんの時代から担いでいたものが回ってくるのです。その処理を巡って仲井真副知事は、「これは機関委任事務だからイエスもノーもない、すぐにやりましょう」と言う。ところが知事は「ノーだ。とんでもない、こんなことをしては沖繩は大変だよ」ということで粘るんです。

私の特命はそのときは基地問題ではなかったんです。年明け早々から、植樹祭の会場の問題と新石垣空港の位置選定の問題の二つをやっていました。基地問題は副知事がやっていたんです。それがあまりにも安易な妥協を押し付けてくるものですから、副知事と知事が衝突するんです。それを横目で見ていたんだが、結局四月、五月とずれて行くんです。国あたりが相当やきもきして、大田に対する恫喝が始まるんです。それに副知事が協調するような形で、与党、野党に関わらず議会根回しをした経緯があります。そこが一つ問題になって、与党の方から批判が出たんです。しかし、いずれにせよ大田が任命した副知事だからということをやっていたんですが、どうも知事としては、副知事の仕事がお座なりだということ、苛立ちを始めた。ですから四月の下旬あたりですか、私の方に担当してくれんか、ということになってきた。私は「担当してもいいけれど、それは副知事がやっておるだろう。副

知事から頼むと言われないと私はやれませんが」といったら、副知事からも引き取って欲しいと正式に表明があり、知事からもあったので、最終段階で私が引き取って、知事公室長と一緒に最後の詰めをやるんです。

そのときの持って行き方として、知事の不信感が出たということとで、重要事項をこの人に任せたくないという話になった。それから私に特命事項として基地問題が加わってくるんですね。ですからそういう意味では、やっていた植樹祭の会場地、つまり沖縄本島北部、名護市の山の上を木を切って植樹祭の会場地を作るというので、そんな馬鹿なこと、選挙中に、戦争で焼け野原になった摩文仁に近いところに植樹祭の会場を作ろうという政策で大田が勝った。これは場所を移す話です。

もう一つは、石垣島の空港問題ですね。これを海上で作るという。そこには世界的に有名な珊瑚との関連で、これも陸の方で作るべきだ、残すべきだということで、石垣島の将来にとって海は世界的な観光地になるよという視点から、これも新しい場所探しで、県政の視点を変えた仕組みを作ったんです。それをやっていた中で、この基地問題がまた被さってきた。ですから大田県政の出発にあたって前県政から持ち込んだ三つの課題は、そっくり特命という形で私が受けざるを得なかったということです。

伊藤 そのお二人の副知事は大きな課題がなくなるわけですか。
吉元 結局は通常業務に仕事の範囲が限定されていくのですね。そこところから仲井真副知事も居心地がよくななくなっていくんでしようね。ですから二年という約束で、二年で終わってもらおうと知事は考えたようですが、本人が何故か植樹祭までは自分がやりたいということになって、植樹祭までやった。だから三年間でした。

伊藤 何か花道が欲しかったということですか。
吉元 これは東京での話だけれど、官僚のみなさんは天皇の関わり

る仕事には絶対真面目に対応するそうです。

伊藤 そうですか(笑)。

吉元 私もそれは知らなかったんですがね。ということになって、ああそうかという理解ができたんですが、結局植樹祭で天皇、皇后を迎えるという仕事をやったのです。

伊藤 飛鳥田さん、長洲さんの話が出ましたが、だいたい中央との政治家との人脈というのは、社会党でございませうか。

吉元 私の場合はですね。当時はその通りです。当時はもっぱら社会党を中心にしてございませう。

伊藤 先生ご自身も社会党の党員でしたか。

吉元 私は復帰までは特定の政党に関わらんでおこうという、沖縄官公労という琉球政府の労働組合ではそういう気持ちをおこわしていたものですから、特定の政党に関わることにはやっていませんでした。しかし(復帰)直前になって国政参加、つまり国会議員の選挙が一九七一年に出てくるんですよ。否応なしに国会議員に立候補させなければならぬということになりました、そのときにローカル政党であった社会大衆党から党首の安里積千代さんが立候補する。社会党からは誰にするか。人民党は瀬長亀次郎さん。自由民主党は西銘順治さんが出るんです。そうそうたるメンバーです。社会党は候補者がいなかった。そこでそのときに沖縄で一番苦労している、しかもこれから大きな課題を背負うであろう全軍労の委員長を出そうということで、上原康助さんをおんなで説得する。彼を社会党から出すために、じゃあ入党せよという話になって、それでそのときに三百名だったと思うけれど、社会党に入党しました。選挙のために入党したようなもので、それが一つです。

その後は、それほどつながっていませんでしたが、去年の参議院選挙で社民党から出てくれと言われたときに、再び切れていた政党加盟を再びやったということで、いまは社会民主党の党員

になっています。

伊藤 そうですか。

吉元 もっともあと五年間資格はあるそうですから、社会党議員に欠員が出ると私になるそうですから（笑）。名簿に出ていますから。

佐道 名簿の順位の三番目か四番目に確かありますね。

話は戻りますが、そのあたりから、副知事に入ってもらってという声が出てきたわけですか。

吉元 仲井真さんの問題がクローズアップして、知事の気持ちの中に違和感として残り、重要な仕事については彼がいつも避けるものですから、私のほうに振ってくるということになりました。仲井真さんももうやる気をなくしていた時期ですから、そういう意味では大田さんから、次ぎ頼む、という一言がありました。でも、それは仲井真さんの希望であと一年延びたわけです。仲井真さんの後をとると、仲井真さんが辞めた後でなければいけないわけですからね。そういう形でした。

実は選挙で当選して就任するまでの間に、副知事人事を私に相談されたんです。そのときに、大田さんは当初は私の名前を挙げたんです。私はそれを断った。直接はまずいですよと、私が断った経緯があるんです。

伊藤 まずいというのはどういうことですか。

吉元 私が県労協の役員をしていたということが一つあって、それから知事選の対応を裏で全部やったという問題があったものから、僕自身はむしろ大田県政を走らせて、一期目はじっくりカバーしたいという気持ちでしたから。

伊藤 外側からですか。

吉元 ええ。それが出発にあたって一番大事な仕組みだと思っていました。ですから当初からそのつもりはなかったんです。

伊藤 政策調整監自体も、緊急の事態ということですか。

吉元 それは県議会でいきなり立ち往生するようなことがなかったとすればね。ですから私には立ち往生した日の夕方緊急に電話がきて、「すぐやってくれ」ということで、「そんな馬鹿な」といったんですけれどね。普通は大変ですよ。人事委員会の一般職での採用だからチェックが必要だし、履歴書も作らないといかんし、それから健康診断にも行かなければならない（笑）。それは文字通り午後五時頃電話がきて、翌朝すぐ保健所に行って、人事課に電話を入れて、俺の履歴書を作り直しておいてくれ、といった。もちろん県庁には仲間がたくさんいるから、笑って作ってくれたけれど。写真もどこにあるかということを探して、それで人事委員会に書類を回す。

ところが、健康診断が来ないと回せないという。それで、血圧が健康診断で引つかかって、どうにもならなくなった。保健所の所長が出てきて、「吉元さん、血圧高いよ」というから、「いやそれはぎりぎりであつたらOKにしてくれ」といったら「突破している」というんです。中途採用ですから、健康上の問題が公務員の採用は大事ですからね。経歴はどうでもいいので、健康上の問題だけが残り、血圧の問題だというから、それではということ。保健所の構内を深呼吸して歩きながら、血圧をうんと下げて。下がったかどうかわかりませんが、結局血圧の測定だけで一時間半ぐらいかかったかな、最終的には所長が直接立ち会って、いいでしょうとゴアのサインが出たから診断書をもらって、そのまま県庁に届けた。それで夕方、辞令ですからね。だから大変でした。

議会が延びていましたから、その日の夜の本会議から私が本会議場に入ったんです。部長クラスで政策調整監ですから、ちゃんと説明補助員として知事が名前を追加したんです。運営委員会が受け止めて僕が入った。異様なムードがありましたけれどね。そして知事が答弁に行き詰まると、手書きしたものを持って知事に渡して読ませる。これを繰り返すわけですね。それで議会を乗り

切ったんです。

佐道 まあ、実質副知事ですね。それで基地の問題まで抱えて、政策全般を見るということになったら、実質副知事ですよ。

■ 一期目の特命事項

吉元 政策調整監として入って、植樹祭の問題とか、新石垣空港の問題とかを担当しながら、同時に基地問題がすぐ被さってきた。先ほど言ったように、私は一期は表に出ないといったのは、この自治研センターで政策の具体化をしたいということがあったからです。これは知事の政策の中で中国、台湾、東南アジア、沖縄との間で蓬莱経済圏、東シナ海経済構想を作っていたんですね。これをどう具体化するかという話を、ここでチームを作ってやってみたいと思っていたのです。

伊藤 それは前から大田さんが言っておられた構想ですね。

吉元 そうです。その部分に、県庁に入ってすぐ着手しなければならなくなったと同時に、もう一つはちょうど当時選挙のときに書いたもの、もうちょっと具体化したのは、やはり世界の冷戦崩壊ですよ。八九、九〇、九一年でソ連崩壊という形になったでしょう。この流れとの関連なんですね。ですからそれはそれとしてやりながら、一方で国際都市形成構想という沖縄の二十一世紀ビジョンをどう作るか、グランドデザインをどう作るかという仕事に取り組みうとしたところですよ。ところが（県庁に）入ってしまったので、それをスタッフと一緒にやるという点では、むしろの方がやりやすいかなという気もしましたね。

佐道 アイデア自体は、西銘県政時代に先生が県庁でやられていたことに土台があったということですね。大田さんの公約というか、蓬莱経済圏になっていって、それをより具体化する。具体化自身は、平成四（一九九二）年ぐらいからですね。

吉元 一九九二年から仕事を具体的にしていますね。九一年暮れ

から議論を深めて、九二年から走らせたんです。ですからそれは調整監時代ですね。最初は三名のスタッフに担がせて、仕事を始めるんです。それを副知事の段階になって、正式に企画開発部の企画調整室に移していくんですね。こういう作業をしながら、ある程度メドが出てきて、次には基地問題に関するプロジェクトチームを作った。これが九五年の少女暴行事件の後、十一月だったか、そのときにプロジェクトチームを作り始めて、九六年四月から国際都市形成構想推進室というのを作ったんです。ですから、その出発の仕事をそこでやった。

伊藤 「国際都市形成構想」というネーミングですが。

吉元 沖縄は、「国際交流拠点形成」という言葉が好きなんです。これは復帰前の私たちが沖縄の将来について、そういう表現をした時期もありました。復帰後、第一次の沖縄振興開発計画、これは国の計画ですが、県計画は同一計画を持たないようになっていますから。この中に沖縄の位置付けが出てくるんです。ですから沖縄で、かつて県民が、沖縄こうしたいな、と欲していたものを第一次振興開発計画の中に取り入れた。これが「国際交流拠点形成」という言葉なんです。これが二次振計にも入っていくんです。その一次振計の終わりの段階で私は職場復帰しました。第二次振興計画の作業にはタッチさせられなかった。それで西銘さんが、あちこちで発言しているプロジェクトを私がやった。その中の一つが国際センターにつながった、日本・中国・東南アジア交流センター構想ですね。それから国際的なコンベンションセンターの位置付けなどをしたんです。

ですからそういう意味でいうならば、国の計画であり県の計画である振興計画の中で言っている「沖縄の日本における役割」、それが国際交流拠点形成ですから。それは一体何なんだ。それはどういう意味なんだということを作り上げきれなかったということが第一次振興計画の弱さ。第二次振興計画でそれを少し具体化

した。これが西銘さんの力だったと思います。第三次振興計画、その時は大田時代になった。そこでこれをもっと明確に出そうというのですが、第三次振興計画の形は西銘さん時代にできあがっているわけです。開発庁との調整もできていて中身が動かさない段階ですから、これをどうするかということで、知事の政策を私が調整監で担いで、ある程度形を作って、今度は計画に乗せるという形になったんですね。

佐道 中身についても伺いたいんですが、その前に調整監の時代の話ですが、最初の公告縦覧を大田さんが苦渋の選択というか、受けられますよね。その経緯というのはいかがでしたか。

吉元 すでに前県政の段階で手続きは全部終わっていたんですね。あとは知事が公告縦覧の決裁をして縦覧する。それを踏まえて、なおかつ土地所有者が署名しないと、それを知事が代理署名する。この仕事だけが残っていたんです。沖縄の米軍基地の作られた経緯、土地収奪の経緯は、誰よりも大田さんが詳しく知っています。やはり基地問題は本人の同意なくしてやるわけにはいかない、というのが持論ですから。それ以外、契約拒否地主以外は全部契約をしているわけです。そこまでいってなければ、その部分については慎重に取り扱うべきじゃないのかというのが、一つの議論でした。そういう意味でいうと、その部分をお座なりにして、「機関委任事務だから、知事がノーと言えない」という形で仕事を進める副知事に対して、厳しい議論が知事との間であった。それを最終段階で私が引き取ったですね。

そのときに、どうしても知事がOKしないものだから、国の方から妥協案が出てきたんです。これは文字通り向こうの防衛庁長官が記者会見して発表したメモですが、そのメモの原点の部分が私の方に示されてきた。私はそれを見て、「駄目です、作り変えます」ということで全部作り変えるんです。ほぼ内容が沖縄ベールになって作り変えたものを、最終段階で国の方からいいですよ

と返事がくる。その中の一つは、基地の整理縮小を真面目に進めるということです。もう一つは、基地問題について、基地の跡地利用も含めて、「特別措置」という表現をした。ところが、この言葉は「特別な仕組み」という言葉に直された。必ずしも法律を前提にしたものではないと逃げられたけれど、しかしそれに近いもので大筋合意した。そして基地の整理縮小を国は真面目に、積極的にやります。それから「特別法」を作ります。関係省庁ではそのための組織を作ります、という三つの約束なんです。もともと、その三つの内容に、なっていないかつたんですね。

基地問題については、国から縮小をアメリカに申し出たことはない、これが一つです。これを将来にわたって、やはり国から縮小せよとアメリカにいう協議の場を作りなさいということ、これが狙いです。

もう一つは、基地の地主が跡利用にするまでの間、放つたらかしてすからね。あるいは補償について不十分ですから、これをどうするのか、特別法を作れということです。

もう一つは、私たちが基地問題を開発庁に言うと、開発庁は「日米安保の担当者ではありません、関係ありません」という。外務省にいうと「聞きおきます」という。防衛庁にいうと「聞きおきます」という。まったくなしのつぶてなんです。これは困るぞ、受け皿を作れとっている。これは関係省庁で作りますといて作ったんです。課長クラスで作って走ったんですが、これもお座なりに空中分解する。全部空中分解する。

結局大田さんが苦渋の選択をしたというのは、詰めて詰めて、俺は駄目だよといったときに最終的に出てきたのがその内容だったわけです。本当にそれはやっていきますねということで、OKさせたにもかかわらず、それがパーになったということが、次の拒否する理由につながるんだが、もちろんそのときは、国がそこまでやるのだったらいいだろうということだった。

しかし大田さん自身にとってみたら、手順として自分の手やった仕事ではないから、これしかできませんよ、ということですね。自分は知事選挙の中で、これは拒否するという方向を打ち出した後ですから、これを受けたという意味では、知事は非常に苦しい立場だった。それは何かというと、一つは知事自身の発言によると——これは事実ですよ——部長連中をはじめ市内がまったくOKしないんです。協力しない。このままでは県政全体に影響を与えていくおそれを知事は感じたんですね。そこが一つの問題だった。

ですから、知事自身は県庁全体が協力する体制を作れない中で、自分の政策だけを押しつけて決めるといふ形で、本当に国とのパイプはうまくいくのかという不安を持ったんですね。それは人事で副知事を国とのパイプという形で求めたということがありますからね。ですから、いろいろな意味では彼自身の悩みとしては、暗中模索で国とどうつながっていくかわからないということですね。そういう時期で、まずはこれで何とかしてみようじゃないかという、そういう意味での苦渋の選択だったんでしょね。

伊藤 この段階では吉元さんは中央とのパイプとしてはどのようにしていましたか。

吉元 最後の段階のメモを作るとき、覚書を作るときの仕事しか私はやっていない。それまでは副知事がずっとやっていました。

伊藤 そのときは東京ですか。

吉元 いや、こちらです。

伊藤 相手は。

吉元 相手は防衛施設局を通じてです。ですからこの問題でいま考えるに、直接の關係を作っていなかったということですね。政治の場、政府の中核部とね。

伊藤 完全に出先とやっているわけですか。

吉元 手続き面ですから、これは防衛施設庁の仕事ですよ。こ

この間を防衛施設局と現地事務所と間でやっているわけですから、政治の中核部に手を突っ込んで喧嘩するようなパイプは作られていなかったわけですね。

佐道 そのときの経験が、後で活かされるわけですね。

吉元 最初からそれを意識して、次は、ということがあった。その間に約束したことを国が真面目にやっていたら、大田知事の「代理署名」拒否というところまで行かなかったかもしれませんね。そこは私自身が最後の文書を作って、詰めて、それが実行されなかったということで、私自身も、これは裏切られたな、という気持ちになっていたから、次の段階では、と思いましたが。

伊藤 政府はというのは、防衛施設庁のことですか。

吉元 そうです。防衛施設庁長官のメモですからね。

佐道 そのときは吉元先生ご自身も、ここではやむを得ないな、という判断だったんですか。

吉元 私はむしろ大田さんより先に（そういう判断を）していましたね。私は、この問題は一過性では片づかんと思っていましたから。どういう手順にするかというのが大事。つまり基地問題について、機関委任事務だから地方自治体の長としてノーと言えるよ、という次元の話とは違う。つまり日米安保の根幹に関わる、土地の提供に関わる部分ですから、これは相当な準備が必要で、県民の意識の中でも、これから本格的にやってみようかという体制作りが必要ですね。そのためには、基地を返還させる具体的な大義名分。もう一つは、その後の基地労働者、地主の生活の問題。同時にそれを跡利用していくための財政的な国の責任、負担。こういうものが全部揃ってこない、最終的にノーという体制を取るべきじゃないというのが、僕の持論でしたね。ですから、私は準備不足というか、就いたばかりだから。これは選挙期間中にわかっていただけですよ。何が課題として残っていたか。それが争点になっていただけですから。だから政治的にはそれでいい。

しかしここは突破すべきじゃない、ということですね。

伊藤 だけどそれを革新政党の中に説明するというのは――。

吉元 この問題は、革新政党の方は県庁の内部のことがよくわかりますから、いま大田がこのことで突つ張っていくとどうなるかといことは、彼らが一番よく知っています。ただし、運動論として選挙で県民に約束したことをどうするんだということと、もう一つは当事者である反戦地主会の方々の厳しい批判、これは耐えざるを得ないですね。これはどうしようもない、受けざるを得ないですね。そのときに大田が何を思ったのか、ということですね。次はどうするかと。ここまであの段階では言っていないですね。ですから、あのときの約束を国が反故にしたということは、九五年以降の問題に連動したのは事実ですね。

僕はそういう意味では沖縄問題を、内閣ないし関係省庁大臣、官僚のみなさんも、自分のポストにおける間だけはなんとか、という安易な気持ちがあつと積み重なつてきて、結局先送りというか、本質的なものに触らないで来たということが、今日の沖縄問題の深刻さにつながっていると思います。

伊藤 しかし、こういうのは政治マターですよ。

吉元 その通りです。しかし、その政治マターの部分に、私たちには社会党しかない。社会党の今日までの関係だったら、安保反対で自衛隊を認めないわけですから、それは政府との間で沖縄県の苦しい接点を切り拓いていくための妥協は、あの政党はやり切れないでしょう。

そういう意味では、それができるようになったのは、私は細川政権からだと思います。日本の連立政権というものが、沖縄問題を政治の中核に打ち込んでいく出発になったと思います。これがなかったら、おそらくいまでも押し合いへし合いで消耗していたかも知れません。

■ 政権交替の影響

伊藤 先ほどおっしゃいましたが、九〇年代初めに社会主義、共產主義体制が崩壊する。日本社会党はいちおう社会主義を目指す政党ですよ。その社会主義の結果がああいうことになって現実の問題として出てきたということで、先生はどういうふうにお考えになっておられましたか。

吉元 私が行政に入っていなかったとすれば、私は相当ショックの連続だったでしょうね。つまり運動としての目標を失ったというのか、それは率直にそういう時代があつたかもしれないですね。私は行政に入った時期だっただけに……。

しかも八九年の北京の天安門事件、このときに私は何かが起きるといふことを沖縄で叫んで歩いたんです。本当に、その年の十一月に入つてベルリンの壁が崩壊する。九〇年に入つてドイツ統一国家ができる。そして、九一年にソ連崩壊。八九年、九〇年と選挙戦を戦つて、文字通り大田知事を誕生させながら、何かが起こるといふ感じはしておつたですね。そのときに私たちは選挙応援に来る社会党のみなさんに言つていたんです。沖縄問題をどう取り上げていくのか、と。そういう意識をほとんどの人が持たなかったんじゃないですか。

国際都市形成構想を構想していく出発は、ヨーロッパでは冷戦崩壊の形が見えてきて動き始めたのに、どうして東アジアでは日米安保が今後も固定的に持続されなければならないのかという危機感からです。だから九三、九四年の例の朝鮮問題のときには、私たちはものすごく危機感を感じました。これでまた固定化されていくのかと思つたんですね。案の定、結果としてはそうなりましたね。ですから大田知事がさかんにアメリカからの知人友人を通じて情報集めて、これは沖縄は大変なことになるぞ。固定化されていくぞという警鐘を鳴らした。これは文字通り、少女暴行事

件の前からすからね。

そのときに、九三年に細川総理が出てきて、大田が初めて日本の総理に会えたんですからね。そして沖縄基地問題をなんとかしてくれという。細川さんはクリントンとの話で、海兵隊の撤去を要求するんです。これは公表されなかった。マスコミは全部押さえられたけれど、あとで本人が言っていますから間違いはないでしょう。それからですよ、アメリカが沖縄問題がどうなるかと（危機感を持った）。日本の政権が連立政権になっているんだから。逆に言えば、その後細川さんが私的諮問機関として防衛問題懇談会みたいなものを作ったんですね。そこで二十一世紀の安全保障問題という議論に入るんです。そしてゆくゆくは二国間安全保障という体制を、国連レベル、アジアレベルの方向でという中間報告を出す。この段階で細川さんは終わる。だから私はこれは事実でないと思うけれど、こう思いたいんです。細川はアメリカにぶざれたと思いたいですね。

そして村山総理になって、この懇話会からの報告書が答申として出る。そのときには、もはや当初の意気込みはなかった。もう日米安保を肯定するような形、強化するような形でこれがつながっていく。アメリカが一番危機感を持ったのは、九四年のこの時期ですね。ですから僕は、あのときに細川連立政権が村山政権に替わったけれど、村山政権のときでもいいんです。冷戦崩壊後の日米安保、それは堅持するとしても、だからといって在日米軍基地、とりわけ沖縄米軍基地が戦後五十年、なおかつ将来も持続されるということに対して、もうちょっと強く、ちょっと待てよ、という発言を、どうして総理としてやらなかったか、ということ、あのとき僕は村山さんを相当責めたんですよ。そこが問題だ。自衛隊を認め、日の丸・君が代を認め、安保を認めるのは当たり前だと。これは国際条約でしょう。法律でしょう。総理になる以上認めるのは当たり前でしょう。しかし、だからといって、何も

物を言わないというのは何事か。

そのことで相当公邸で村山さんと議論をし、社会党との議論をものごくやった中で、あのときに始まったのが沖縄米軍基地問題協議会、文字通りSACOにつながる組織ができたんですね。官房長官と外務大臣、防衛庁長官、それに沖縄県の四者会議が閣議決定された。それを作らせたときに、私はしめた、と思った。ここで議論が始まる。そこで何を出すか。準備できているか。できていたんですよ。国際都市形成構想のグラウンドデザインと基地返還アクションプログラム素案が。これは叩き台ですから、これを村山さん時代に官邸にぶち込んだんです。そうしたら、ここまでできているのか、という話ですよ。それから文字通りSACOの日米間での話し合いですね。

伊藤 社会党と自民党との連立という問題はこういうふうにお考えでしたか。

吉元 まずひとつは細川政権の性格ですね。僕は細川政権の細川さんに新しいタイプの日本の総理としてのリーダーシップをみた。つまり日本の将来の国家像、これを議論していく出発はこの人が切り拓くだろうと思った。甘いかもしれないけれどね。

伊藤 でも実際上は小沢さんが力を持っていたわけですね。

吉元 まさにその通りですね。しかし連立政権である以上、社会党も入っているわけです。そういう意味では、必ずしもそれが使えないというわけではないと思った。だから大田さんが細川さんに会うという状況があった。その後一月末ですから、クリントン・細川対談で海兵隊問題を言っているわけです。そして同時に細川さんのときの二月から防衛問題懇談会を走らせるわけです。ここまでは、僕たちは、あつ動きそうだな、こういう形で新しい冷戦後の日本の安全保障というのが作られていくのかと、これは一つ期待をしました。だからさつきも言ったように、細川さんが例の福祉税でつぶれるわけでしょう。それは仕掛けた。本当の狙

いとはそこにはない。つぶされたと言ったのはそういう意味なんですよ。沖縄ではわれわれはそう見たんです。やはりつぶされたなど。

その頃、九三年にクリントンが出て一番に困ったのは、アメリカはここから問題ですよ。九四年にかけての北朝鮮問題でしょう。この間に日米安保については、さらに冷戦崩壊後どうするかという日本の中で議論が出ているものを、さらに強化していこうというふうに向かつていくんでしよう。一年半ですからね。この期間に細川政権が何をしたのか。つぶされて、自民党と社会党の連立政権が何をしようとしたのか。僕らはそのときに期待が持てなかつたですね、自民党と社会党の政権（村山政権）には。それは圧倒的に、政府運営とか総理を抱えるとか外交とかいうもので、社会党が役割を果たせるとは思っていませんでしたから。

伊藤 能力として、ですね。

吉元 でも、総理だったわけですよ。だったらこの人に何を求めるかという点です。細川さんのときに何を期待したかということ。村山さんには何をさせるかという期待の部分で、もうそんな中途半端な問題ではない。沖縄からぶち込もうという話です。そういうふうに見える、関われる総理だった、あるいは政党だった。正体不明といったらおかしいけれど、そこにいわゆる日本の安保を復活して戦後を作ってきた自民党がくっついていて。本当にその間で沖縄問題はなんとかできるのか。だから就任後、村山総理に接触するために相当力を入れました。

伊藤 その場合はやはり社会党ですか。

吉元 出発は社会党です。もう一つは自治労です。村山さんは自治労出身ですよ。大分の自治労本部の佐藤さんが、自治労中央本部の書記長をやっていたんです。ですから彼を通じて、非公式で公邸に飛び込んだ。沖縄問題の資料をどっさり持って行って、全部説明するんですね。こんな問題がある、こんな問題がある、どういう場を作るか、ということですよ。

村山さんは、安全保障とかこの種の問題は余り得意ではないですね。社労族でしょう。そのときの官房長官の野坂浩賢さんが、また安全保障が得意でないんです。これは非常に困ったですね。一方、安保とか、そういう問題に詳しいのは、伊藤茂さんです。ですからその間にどういう形で誰を使うか。前島（秀行）さんがいま社会党の衆議院議員ですが、彼がその役割を果たしました。実務的な役割ですが。

それからもう一つ、当時は三党連立でした。政務の官房副長官をやっていた園田さんがいました。真面目に対応できました。安全保障問題がわかりましたね。

佐道 園田さんとは、このときが初めてですか。

吉元 初めてです。

伊藤 この段階での自民党の人たちとの接点はないわけですか。

吉元 私は、むしろ避けていました。また、社会党の伊藤さんと前島さんとかと話し合うたびに、自民党の誰と話し合った方がいいよというアドバイスがあつたけれど、僕は会わなかつた。しかし、その後その紹介を通じて会うんです。そしてあとは一本立ちで会うようになりましたけれどね。

伊藤 そのときは、吉元先生だけで行つて話をするんですか。

吉元 私は、この問題に関しては政策調整監を同行させたり、あるいは担当の秘書がおりますから同行させたりしました。つまり水面下の話はほとんど単独です。表の話は必ず県庁の職員、部長クラス何名かで行きます。

伊藤 知事さんと一緒ということはありませんか。

吉元 知事と一緒にするのは、公的な場だけです。これは避けなければいけない。知事は、裏の水面下の話には絶対入れない。これは私の主義、やり方でした。二度と修正が利かない。手直しが利かない。それは大田さんの人のよさというか、あの年代のことですから、ちよつと情にもろいところがありますから、そこらを

僕はよく知っているからね。やはり話をきちんと詰めるまで、水面下の話には知事が出さない。その代わり、東京に行くにあたって、帰ってきてても、議論は十分やった上で、次はどうするかということは、漏らさず報告しました。

佐道 基本的には、任せるぞということでしたか。

吉元 いや、単に任せるんじゃないで、最初に話し合いありき、です。ですから、例えば公告縦覧の問題などで議論するときも、(大田氏が)「俺はもう嫌だよ」と言ったら、「そうか、嫌というのはどこまでか。これはノーと言ったら最後、最高裁まで行きつかんといかんよ。そういう性格のもの。しかし最高裁へ行っても負けるよ」と言うのです。「何故負けるのか」と言うから、判例を述べて、安保に関わる問題は全部そうですよと言ったのです。その上でもなおかつやるというのだったら二つの意味がある。一つは県民運動。積極的に沖繩の声を出す。これでいいのかということですね。もう一つは地方自治という問題に対する根本的な認識を、機関委任事務の中で争う。この二つを徹底的にやれるならやろうと。

ですから私は、最高裁までいった部分は最初からシナリオを作って、その節々で、どういう沖繩県側の声を出していくのかというのを用意周到に作りましたね。一、二、三案ぐらい作って、その一つずつをチェックしながら、知事にそれを認識してもらいながらやりました。ですから基地問題というのがここに関わっていないければ、普通の機関委任事務の範囲であれば、そこまでは行かなかったでしょうし、行ったとしても一審あたりで終わったでしょう。だから条件闘争ではなかったんです。そこところは本人もよく知っていました。

伊藤 大田さんも納得されたということですね。

吉元 その通りです。それを知った上で、しかしきついが、県民がどう理解するかなということでした。県民が理解できるようにな

ものを作ってみよう、というのが私の仕事であった。それと同時に、日本政府というか、関係省庁の官僚の体質を僕らがよく知っていたということでしょうね。必ず妥協をして打開するために何か出してくる。そんな問題では右往左往しないでおう、ということ。これはいまの基地問題も同じことです。

■副知事の選任案件

伊藤 吉元先生が副知事に選任されるということは、議会はいかがな反応でしたか。

吉元 いや、これはまず野党・自民党はノーです。したがって私の承認同意案件の第一回目はたしか六月議会だったと思います。が、議会は審議未了で継続審議で、九月議会に引つ張るんですね。そして、ぎりぎりのところで、二票差ぐらいでOKするんですね。それは自民党さんが二人か三名欠席、本会議場から出て行くということですね。

伊藤 それは工作の結果ですか。

吉元 いや、それはまったく工作していません。それは一県の副知事を議会が理由なしに二回否決すると、これは議会が問われますからね。私に、例えば法的あるいは人格的に、ちよつと言いはきついで、問題があれば別ですけれどね。それから能力の面でふさわしくないというのなら、ふさわしくないと言明が証明しなければいけませんからね。それは厳しい対応をしましたね。ですから、議会では二回ですね。

それは否決される場合も、どういう案件がある場合も同じです。今度は共産党がノーといった。そして持ち越して、共産党がアリバイ作りにOKしたのなら、他の部分が自民党を含めて与党の一部がノーといった。ということ。一、二票足りずに駄目になりますよ。これは二年前ですから。それはいろいろなものを感じますよ。だから大田県政に対する批判であれば、そういう議論を

すべきだと思うんだけど、そういう議論も沖繩ではしないんです。ですからなんとなく物事が決まっていってしまう事態がかってあっただけに……。

例えば冒頭申し上げました最初の女性副知事の問題が、与党の一部から反対されて否決されるという事態になった。あれも大田を信任しているならば、人事については文句を言わないというのは合意事項にあるわけだから、普通はそれで大田が推薦すればいいんだけど、与党の中にそうでないときがあるんです。

伊藤 与党の中もかなり複雑なものですか。

吉元 それはもともとそうです。だって復帰前はアメリカに対する戦いですからね。言葉を換えていえば、まさにアメリカ支配をどう脱却して、日本国憲法のもとに帰るかというのが目標ですから、政党の違いは大きくないんです。復帰後は、どういいう日本を作るかでしょう。そのために沖繩はどうしたらいいかでしょう。つまり（問題の）立て方が逆になるんです。そうすると、日本共産党のつながりが一つありますね。社会党は社会党。ローカル政党。それから自民党。それはそれぞれ思惑もあります。それがコントロールが効かないような形で、政党の中で東京サイドで物事が決まっていってしまうのがいくつもあります。例えば日本共産党の場合、この部分は本当に問題あるんですが、例えば公明党もそうです。社会党の場合は、沖繩問題は沖繩で、というのがあるんです。これはここで方針を出せばそれが通用するんです。ローカル政党の社会大衆党は、もちろん自前でやりますから問題ないんです。その傾向が復帰後だんだん強くなってきているんですね。ですからこの種の問題というのは、ついにここまで来たかなという感じでしょうね。それは復帰後の日本の政党政治の流れと無関係ではなく、来ていますからね。沖繩のローカル政党側の声が強かったときにはそれがとどまるし、弱かったときには本土からの系列の部分が押し込んでくるしね。

伊藤 その場合に、継続になってあとで承認されるということになる。その事態は、先ほどの話ですと、二度否決することは、ということでしたか。

吉元 前の場合は、支持政党つまり与党に問題があったわけじゃないんですよ。与党は全部OKなんです。しかし野党の自民党の方が多数なんです。だから野党が継続ということに継続審議にして、最終段階でも野党から何名かが退場して、取り繕ったわけです。

伊藤 ある意味では、自民党が合意したということですか。

吉元 まさにそうでしょう。今度の場合は、もちろん自民党は全面反対ですよ。これは拮抗していますから。議長を一人与党が出していますから、それで負ける。与党の足並みの中で問題が出た。共産党が、吉元のやり方は基地容認であるといった。名護軍港問題ですが、これを理由にノーといったんですね。その次は中間派が、与党でさえOKしないのに、なんで俺たちが引きずるかということで態度保留。そういう中で共産党は戻ってきたけれど、それだけではもう票が足りない。自民党はノー、つぶすということですからね。自民党は東京から相当認めよという工作があったようだけれど。

伊藤 言うことを聞かなかったんですか。

吉元 知事選をにらんで、吉元をつぶしておかないと知事選は勝てないと。その通りになったんですね（笑）。それは自民党さんにすれば、一九六〇年からの付き合いですから。それは私が復帰運動、労働運動、そして県庁に入ったときはおとなしかったけれど、また県庁を辞めて西銘県政をつぶしたわけですから。僕個人という意味ではない。僕はそんなオーバーな力を持っているわけではないけれど、彼らは俺がリーダーだと思っている。結果としてそういう形態になっているかもしれない。そうすると、吉元をいつかつぶそう、次期再任は認めないでおこう、そうしないと勝

てないよ、ということだったんでしょね。これは結果としてそうなったんですね。

佐道 しかし、県の自民党にしても、基地問題の行方とかそういうことを冷静に論理的に考える場合には、このとき吉元先生を否決してしまうと動かなくなる可能性が高いぞ、ということは思わなかったんでしょか。

吉元 そういう意見は自民党県連の中にはあったそうです。同時にその部分に対して、東京からその通りだといってきた。いま吉元を外すと、沖繩はどうなるかわかんよ、という自民党県連に対する自民党中央、官邸サイドからのアクションが相当厳しかったそうです。あるいは密使まで来たと言われてます。しかしそれは、沖繩の自民党県連のみなさんには、全体の意志としては通用しなかった。そうだといい意見と、そうでないという意見があって、じゃあ別々の行動をとるか、というところまで論議したそうです。が、結果としては、おかし、やはり政党として大田県政を倒すというのが目標じゃないのかということで、最後は統一行動をとるんですね。ですから、あの頃は事前に私のところにあったのは、うちの自民党は何名かは退場しますと聞いていたけれど、最後はそうじゃなかったんです。むしろ退場したのは、与党の側の一人だった。

それは沖繩の政治というのを、東京サイドは少し甘く見ていたかもしれない。つまり基地問題です。この県政とうまくやっていきたいという気持ちで対応を求めたかもしれないけれど、沖繩的にいうと、やはりつぶす奴はつぶしておかないと、次は取れないということをお互いによく知っているんですよ。

佐道 県政が第一だから。

吉元 だから、もしそのことが東京サイド、沖繩サイド、自民党サイド、政府サイドで総括できるとするならば、今度の稲嶺さんが普天間問題をどういう形でまとめ、それが本当に沖繩県民が受

け容れていくのか、余計混乱になっていくのか、これを見極めないと、日本政府があるいは自民党サイドが判断した、吉元を残さんと余計混乱するよということの検証ができない。ちょっとそれは僕自身も読み取れない。

伊藤 この稲嶺県政がどうなるかということ、これから今後の吉元先生の動きというのは、これはちょっと目が離せないという感じですね。

吉元 そういうふうにマスコミも自民党も見ているようだけれど。

伊藤 マスコミはそういうふうに見ています。

吉元 そういう意味で毎日取材に来るけれど、取材ではなくていろいろな話し合いをしています。見通しとかいろいろなことをやっています、ただ大事なものは、少し東京サイドが安易に考えている節があると思うんですね。

伊藤 それは自民党のことですか。

吉元 そうです。これは少し間違い始めているなという気がする。これは無理に稲嶺県政、さらには地域、名護市あたりに、押しつけとは言っていないが、結果としてそうなっていますからね。これは両方つぶれるか、どうにもならない形に突入していくのか。サミットを待たずに出てくることですね。そのところを少し読み違えているんじゃないかと思えますね。例えば議会が決め、首長が決めたなら、沖繩はおとなしくなるんだという受け止め方を東京はしていますよね。しかしそれはそうじゃない。

伊藤 しかし今までの経験からいってもそうじゃないわけでしょう。

吉元 そうじゃないけれど、そういう受け止め方をしています。そこはちよつと見方が甘いような気がするな。沖繩にとつてみて初めてケースなんです。市町村の首長、議会、地域が基地問題を、ここでいいよ、ここに作ってくださいという決め方をする

というのは、かつてなかったことですからね。沖縄にもいろいろな問題が起こるでしょうが、それ以上に大事なものは、そのことによつて本当にできるかどうかという問題ですね。日本政府はこのところはそういう読み方をしていない。アメリカの方はもっと厳しく捉えていると思いますよ。ごたごたしていつて、これが飛び火して、基地問題全体に波及していく、これはそう行きかねないところもあるから。サミットをからめられてね。

■県政と沖縄選出・国会議員との関係

佐道 前に戻りますが、細川政権ができる、村山政権ができる、それで流れが変わるかもしれないという期待を持たれたということですが、その際に沖縄出身の国会議員の方々との連絡とか役割とかは、どういうふうだったですか。

吉元 政策調整監のときは私がすべてですね。副知事になつても、政策調整監を中心にしながら、課題ごとに関係部長とやる。基地問題に限つていうならば、政策調整監が中心ですね。あとは担当の副知事の私が回る。それは保守革新を問わず、与野党を問わず、県選出の国会議員は一通り全部回るようになります。同じ資料を持って、同じ言葉で説明します。これは沖縄のルールです。だから、与党だから、野党だから、という取り扱いはその後の話ですね。前からそうなんです、そういう関係が続いていますね。

伊藤 それはやはり一種のルールなんですか。

吉元 そうですね。例えば県出身の衆議院議員だと、共産党もおりますし、民主党や公明党もおります。ですからこれは区別なしです。

伊藤 自民党も、ですか。

吉元 もちろんそうです。基地問題ですよ。ですから県が開発庁、あるいは関係省庁にあるものを要請行動しようとする場合は、県選出の国会議員は与野党を問わず、保守・革新を問わず、全部

県は説明に回る、これは当たり前です。

伊藤 行政としてですね。

吉元 それ以上の仕事というのは別になりますから。誰をどうしたらいいかというのは、また別の仕事になりますからね。本当に実現していくためには誰をどうした方がいいかというのは、また別の仕事になりますね。

伊藤 こういう質問をしていいのかどうかかわかりませんが、県選出の代議士の中で、与野党を問わず、先生がこれは頼りになるかなというのには。

吉元 いないですね(笑)。これは県のメンバーがやらんです。それは所属している政党にもよるでしょうね。例えば共産党さんは、わが党の方針と違う、と言われたら終わりですからね。しかし、説明はするし、彼は彼なりに努力してくれていることはいくらでもあります。「軍転特措法」なんか、まさに全面協力してもらいました。そういうこともありますけれど。

社会党であつた上原康助さんも、自分がすべてというタイプの人ですから、ちょっと若い県庁の職員たちとは合わないです。かといつて、丁寧に戻るんだけど、文句ばかり言われて帰つてくるといふことがある。同じことを言うにしても、当時社会党ですが、社会党の政審局にいったほうが早いとか、そういうこともありました。

それから公明党の白保(台一)さんなども、ある時期非常にきめ細かに対応してもらいましたが、まあしかしあの政党も、共産党と同じように党で決めなければ何一つ動けない政党ですからね。そういう意味では、必ずしも緩やかなところはない。

自民党さんで言うと、どうせ大田県政だから、というのが見方の一つにありますからね。わかった、聞いておく、ということと終わるんですね。やつても彼らは自分の手柄にならんし、大田の手柄になるという発想ですね。ですから、うまく噛み合わない。

伊藤 敵に塩を送る必要はないということですね。

吉元 そうですね。しかし、村山政権、橋本政権のときに、沖縄県との関係が官邸を中心にして、例えば先ほど言いました基地問題で沖縄米軍基地問題、審議会、それから沖縄の二十一世紀ビジョンについては、沖縄政策協議会が動き始めると、自分たちを袖にしているという言い方をするんです。これはやつかみでしょうね。だから、それぞれが政党の中で頑張ればいい話です。

伊藤 あまり頑張ってくれないということですね。

吉元 能力がないんじゃないですかね。キャリアもそうかもしれないが、結局は力がないということでしょうね。能力じゃない、力がないと訂正しておきます(笑)。その方が無難ですね。私は苦い経験をいくつかしています。それは本当に我慢ができないほどの意見の衝突もありました。これはしかし県民に知らせることもできないし、私たちが、こいつは嫌だ、と思っておけばいい話で、後生大事に墓場まで持っていきますけれど、表で言う必要はない(笑)。

そういう意味では、沖縄の出身の国会議員というのは、党派性が非常に強いですね。僕はいつも北海道のことを例に出すんですが、北海道は、共産党が衆議院を出した頃もありましたが、与野党問わず、北海道に関わる問題だったら全部統一できるんです。今でもその体質が残っているんですね。珍しいところですね。沖縄はそれがいいですね。政党に非常にこだわりすぎる。九州も、九州が全部一緒になって要請行動するときもあります。これも実は形だけやっていることで、全部ばらばらですね。これは地域的に言うと、寒いところと暑いところと違うのかなと(笑)。厳しさの違いかもしれませんね。北海道なんか、一緒にやらなければ何もできないというのが昔からあったのかもしれませんがね。

伊藤 ちょっとわき道に逸れますが、九州と沖縄というのは一つのブロックなんですか。

吉元 九州、山口、沖縄というんですね。

伊藤 やっぱりいうんですか。

吉元 便宜的にいうんですね。

伊藤 これは便宜的なものなんですか。

吉元 そうです。九州、山口のことを九州というんです。僕らは沖縄は別だと思っているから。地域会議は一緒ですよ。山口も入ります。でも一緒に議論することは、例えば新幹線の話とか自動車道路の話なんていうのは、沖縄の話じゃないからね(笑)。われわれも付き合いでちゃんと負担金を出すんですよ。でもやっぱり、どういう役割があるか。支援をしてもらっているかわからんけれど。これは笑い話だけれども、サミットの話で、福岡、宮崎、沖縄でしょう。「首脳会議」が、福岡に決まったら宮崎が大変だっただろうなと。宮崎に決まったらえらいことになると思った。沖縄に決まったからみんな黙っている(笑)。

佐道 それは本当にそう思いますね。

吉元 山崎拓さんが黙ったんだからね。もともと沖縄と喧嘩するつもりはないんですよ。

■ 国際都市形成構想と 基地返還アクションプログラム

佐道 村山さんのときに沖縄の協議会ができて、そのときに準備をしていた国際都市構想と素案のアクションプログラムを出されたときは、こんなものがあるのか、とみんな一様に驚いたという反応ですが。

吉元 そうですね。ショックを受けていたというのが本当でしょうね。沖縄県から二十一世紀の沖縄をこうしたい、そのためには米軍基地については二〇一五年までに、三期に分けて返還して欲しいと具体的に突きつけられた。しかも沖縄の二十一世紀というのは、沖縄戦の体験を踏まえて、平和、共生、自立という三つの

面で、しかもアジアの中で一つ特色ある地域を作っていきたい。それは日本の中における役割分担と、沖縄自身が東アジアにおける役割を認識したいというのが基本ですね。その持つて行き方としては、一つは日米安保体制を僕たちは全面否定はしませんよと。沖縄の米軍基地についてまずは考えてくださいと。日米安保については日本全体で考えることだと。私たちは極端に言いますと、日米安保条約がそのまま継続したとしても、だからといって沖縄に米軍基地があるという必然性はないと。それは冷戦崩壊の今日、ましてや二十一世紀以降必要ないとわれわれは言っているんです。これが一つです。

そのために条件として、アメリカがいつも問題にする北朝鮮問題、私たちは二〇〇〇年までに軌道に乗るはずで、とすでに五年前にわれわれは叫んでいるんです。それはある程度は根拠がある。もう一つは台湾問題です。これは二〇一〇年までに片付くと思いませんと。それはすでに三年前に江沢民さんが、中国共産党書記局でしゃべった内容が香港のマスコミを通じて流れてきて、私たちはそれを分析してみたんです。二〇〇〇年までは陸続きの領土の奪還です、香港、今年の十二月二十日のマカオです。それから次は台湾問題です、それは二〇〇〇年までは物言いません。二〇〇五年には方向を出します。二〇一〇年には実施します。終わりです、と。この通り、何をするかというより、そういう長さでものを見ているということ、僕たちは台湾と中国の関係を、戦争とか武力行使ではない形に到達していけると思ったのです。

その証拠というわけではないけれど、私たちは台湾とのつながりも相当長いですからね。復帰前も復帰後も今もそうですが、同時に大田県政八年間で中国福建省との間で六百年の歴史をもう一回再現しようという事で、二十一世紀にわたる交流の基盤を作りました。そしてそこを通じて台湾問題も私たちは見えていますし、

むしろ台湾と福建省と琉球（この界限で言う琉球といった方がわかりやすいので）、この三つで「蓬莱経済圏」を持つというのが私たち自身の経済政策のひとつであるし、それをベースにもうちょっと拡大していこうというのが二十一世紀の沖縄の国際都市形成構想です。

そういうふうを考えて、同じことを村山さんにも言いました。このことはより細かく、橋本さんになって、橋本さんとの議論も酒を飲みながらやりました。同時に橋本さんのときの官房長官であった梶山さんとも相当突っ込んだ話をやりました。そういう意味では自民党のいろいろなグループともやりました。特に幹事長の加藤さんと突っ込んだ話をしたこともありますし、行革がらみで沖縄開発庁問題、沖縄の将来像との問題では自民党の行革担当者の、水野さんとも突っ込んだ話をすることがあります。そういうことをしながら沖縄の問題というのを地域問題と見るな、日本全体の問題で見たいと言ったんです。日本全国から基地をなくせとわれわれは言っていない。過重の負担を軽くして欲しいと言っているんだ、ということですね。

このことは、実は今の野党の民主党とは相当突っ込んだ話をしている。さきがけ時代からやってきた経緯がありますし、今の民主党の首脳部といえば鳩山さん、菅直人さん、仙石さんとか、何名かとは突っ込んだ話をしました。そういう意味では共通の認識が、民主党の間には沖縄問題についてはあると思います。そういう議論の中で鳩山さんや菅さんたちと私たちが話し合った結果、鳩山さんは「駐留なき安保」という表現をしました。有事駐留論ですね。そしていま具体的な話を詰めているのは、沖縄の海兵隊を北海道苦東に移そうということです。そしてそれは固定化するんじゃないかと、必要のないときは出てもらって、有事に来てもらうというような意味を含めて、北海道苦東の新しいまちづくりをしていこうという構想と一体になって進めています。私も三

ヶ月ほど前にあそこに行つてきました。ですから、そういう意味でいうと、わりと突っ込んだ話を相当広い領域でやってきましたね。

伊藤 民主党ですが、地元には民主党の組織はないんですか。

吉元 あります。民主党の組織はありますが、そこに上原康助さんが社民党を抜けて民主党に入ったのです。それで沖繩の革新側のみなさんが反発しているんです。上原康助さんに対する反発が民主党の運動を伸ばしていない理由につながっていますね。これはこの間、鳩山さんに会ったときにはつきり言いましたけれどね。「なんで若手が伸びないか」と彼が言うから、「何を言っているか、勝手に沖繩の民主党の支部を抜きにして、東京でいきなり入党させたんじゃないのか」と言ったら、「誰を」というから、「あの有名な人だよ」といったら、気づいたらしくて、「えっ、あの人のためにわが党が伸びないんですか」という。「その程度の情報しかないのか」と厳しく言ったけれどね。

佐道 話がだいぶ核心になってきました。ちょうど二時間経ちましたから、ブレイクしましょう。

〈休憩〉

■大田県政の二期目

佐道 話が佳境に入ってきましたが、いまのアクションプログラムと国際都市構想の中身の話を聞きたいんですが、その前に少女暴行事件とか一連の過程があり、その前に大田さんの再選という問題がありますね。これが平成六年ですから、それへの取り組みといえますか、これも大きな節目になっていると思えますが。吉元 大田さんの再選にはほとんど異論がなかったですね。経済界の中でも、むしろ条件が整った。一期目の四年間の中で、沖繩県政に問われていたのは、県内経済の活性化という課題ですね。

それをどういう形で経済界の方と二人三脚で中身を作り上げていくかという仕事です。一期目の最初の二年ないし三年は、仲井真副知事が自ら経済界とのパイプを作り、県庁の中でチームを作つて、経済の活性化その他で何をしたらいいかという議論を始めていた時期です。一方、私の方でも、担当していた蓬萊経済圏を実践するための準備を進めていました。あとは経済界がどういう形で将来を描いているのか、これをどういう場で政策化するかというところが課題でした。そういう意味では、経済界と県庁の間で、革新県政とは思われない、といつも言われていたけれど、緊密な関係をつくることができましたね。

これは大田さんの二期目の選挙に向けての戦略じゃなかったんです。もつと緻密に実務的にやっていました。ですから、そういう点でいえば二期目の大田の選挙は、むしろ経済界の方もパスしようかというぐらいの状況がありました。自民党さんはそうでもなくて、むしろ真正面から候補者を立てようという形でありましたが、それも力が入らなかったという事で、結果として十万票あまり差がついたような気がしますね。

佐道 かなりの差ですね。そのとき先生は、ご自身が副知事でいらつしゃって、先頭に立つての選挙運動とかはなさったんですか。

吉元 それは激しくやりました。ただ、実務的な面は私はほとんど触っていません。戦略的な意味で、少し裏の選対の中心メンバーと情勢分析したりということはありました。それは一期目の流れがありまして、結局私がかつてやらざるを得なかったということもあります。日中は、公務を真面目にやっていますのでほとんど動けませんから、五時以降あるいは土曜、日曜という時期を見て、地域で応援演説会とか懇談会とかに行くわけです。しかしそうはいっても、やはり経済団体との関係をきちんとすることが私の役割でしたから、そういう意味では比較的大胆な話し合いを経済界ともやりながら、二期目を突破しました。

伊藤 それも夜ですか。

吉元 そうですね。その頃、つまり日本における政党の絡み、さらには自民党の状況、そういうことがやはり沖繩にも影響したんでしょうね。いわゆる保守といわれる部分が積極的に何が何でも、というムードが見られなかったですね。ですから二期目の選挙というのはスムーズにいったというのが本当のところでしょうね。

伊藤 先生は、昼も夜も問わず、とにかく活動なさるといことがずつと続いているわけですね。

吉元 そうですね。

伊藤 家庭はいつたいどういうことになってるんでしょうか。

吉元 真面目に帰っていますよ（笑）。ほんとうにまともに帰っています。ただ、やはり帰るのは深夜ですよ。ときどき込み入った話になると明け方までですね。それは詰めの話となりますと、なんといつても十二時を過ぎますからね。そのついでに飲まんといかんし。そういう意味では、ひっきりなしでした。要領がよくなりまして、一定程度飲むと、あとは飲まんということを徹底する。普通はそんなことできないけれど、それを許してもらえぬ雰囲気の仕事の性格上できたんですね。

伊藤 先生は、お子様は。

吉元 男の子が一人おります。もう一人前になっていきますので、あとは家に妻一人です。結婚した最初からそれが条件で、そういう仕事をしながら結婚していますから。私は一九六五年に結婚しているんです。つまり復帰協の事務局長を辞めて、すぐ結婚したんです。一週間後かな。形を変えていえば、復帰協の事務局長を辞めるまでは結婚できなかったといった方がいでしょうね（笑）。

伊藤 そういう方とご結婚されたということは、その方はどういうところにいらつしたんですか。

吉元 うちの人は、実は妙な関係で、私が高校を卒業してすぐ

石垣島の測候所に入って、大学受験を狙っていた時期でした。吉元家は女二人、男二人の兄弟で、上の二人が東京の専門学校に行っていたんです。家からの仕送りでアップアップの状態、私の稼いだものも少し送っていたようです。あれが終わらないと僕が行けなかったということも一つありました。ですから高校を卒業しないうちに気象台の試験があったから、受けて、すぐ入ったんです。そこで十ヶ月ぐらい賃金がなかったもので、これはおかしいというので、それから労働運動に走るようになったときには、もはや大学を狙うという考えはなかった。

その間に、実は二人の高校生を、卒業ができそうでないから勉強を教えてくれと親から言われて、そのうちの一人が私の妻になっている人なんです。幸いに気象台の仕事ですから、物理、数学は当たり前ですから、そういう意味では勉強を教えて卒業させたんです。そのために卒業できたのかどうかわからんけれど。

その後、私のすぐ上の姉が、うちの妻の兄に嫁いだんですよ。それから後、結果として僕はその妹をもらった形になって、非常に安易だと言われているんだけど、実際あまりしていない。彼女が高校生のときに勉強を教えた程度であつたんです。そのときは彼女も一人前で、アメリカ政府の八重山の事務所働いていたんです。八重山に民政府事務所というのがあつたんです。ですから、言ってみればアメリカ帝国主義の手先なんです（笑）。それでどうするかという話になった。彼女の場合は、親が西表の出身で、地域ではちよつとした力を持っている人で、炭鉱も経営していた。たぶん戦後ただちに八重山がアメリカの宣撫工作といいますが、支配をするときに、向こうの方も利用された節があるんですね。ですからそういう意味ではアメリカ側との親しさがあつたんでしょうね。だから娘が民政府で働いていた。それは辞めてもらわんと、僕の立つ瀬がないんですよ。ですから、あれほど那覇で労働運動をしながら、狙われていながら、いくら転

勤できるからといっても、那覇に転勤してもらったらずいだろうと思つて。

当時、琉球政府庁舎の入っている建物は四階建てで、上半分がアメリカ民政府の庁舎だったんです。下半分とそのへんにある建物が琉球政府の庁舎だった。これはまずいよなど。それで民政府を辞めてもらうことを条件に結婚したんです。ですから、最初からそういう仕事だということを知った上での話ですから、それにしても相当我慢してもらったなという気はしますけれどね。

伊藤 だけど、そういう家庭的なバックアップがないと、こういう仕事はやっていけないと思えますね。

吉元 そうですね。そのころは大変感謝するということですね。柔軟に対応してくれました。むしろ積極的だったという感じがしますね。今でもそうですが。

伊藤 それはようございました。ちょっとプライベートなお聞きして申し訳ございません。

■IIの構想の位置づけ

佐道 例の国際都市形成構想の問題とアクションプログラムの問題に戻りたいんですが、立案の前に、先生が政策調整監になられて、やられた仕事を持っていったときに、開発庁の方は「これは何だ、俺たちはこんなの出していないぞ」と言ったということ。先ほどおっしゃいましたが、ということ、西銘さんの十二年ぐらいの間に、開発庁なり何なりが決めた路線に従って大枠を決めて、沖縄はあとの細かいことを決めていくと、そういう仕組みになつていたということですか。

吉元 沖縄振興開発計画は国計画ですから、計画を作るまでに意見を出しなさいという。それは踏まえていますよ、採用されたものはそういう含みを持っていますから、それ以外は余計なことを考えるな、という感じですね。つまり、最も大事なものは、全国総

合開発計画、あるいは沖縄振興開発特別措置法、つまり当初の法律を作った段階で、沖縄をどういうふうな沖縄として作つていくとしたのかということ。この原点が忘れられていたということですね。ですから通常の振興開発計画、つまり「本土並み」という言葉の中で、特色ある産業の創造という部分に集中し始めたんですね。これが西銘県政時代の結果として、国の言いなりになつたと言われる原因ですね。

最も大事なことですが、沖縄の将来をどう作ろうとしたのかということについて、実は復帰段階の日本政府の声明があるんですよ。のちほどデータを出します。その声明に、沖縄の戦争の体験などを踏まえながら、亡くなった御霊のためにも沖縄を国際的な平和の砦にするとか、拠点にするというように沖縄の将来像というの描かれてるんですよ。これが一つです。

もう一つ大事なことは、そういうことを踏まえて沖縄を単なる府県の位置付けではなくて、南の国際交流の拠点にしようとしたわけですが、それが実践されていない。国計画であるにもかかわらず、国もそれをタッチしていない。県もみずからそれをやっていない。そういうことが問題だった。

ですから大田県政のときに、私たちはそのところはきちんとして作り上げてみようとしたわけです。そしてそれは当然、県の計画が独自にあるわけではなくて、国計画である以上、国計画に盛り込ませよう、その最も大事な全国総合開発計画に位置付けさせよう。ですから私が政策調整監のときにこの国際都市形成構想を始めたのは、二十一世紀の二〇〇三年から「第四次振興開発計画」が始まりますから、次の二十一世紀のビジョンを作るために仕事を始めたんです。これが基地返還の問題と抱き合せて、相当大きな仕事だよという認識をしているときに、実は少女暴行事件が起きた。直前に大田が「代理署名拒否」を決意するんです。それが結果として重なってきたんですね。

ですから原点に戻って言うならば、復帰段階で日本政府は沖縄をどういうふう位置付けたのか。ここをきちんと日本政府との間でもう一回確認した方がいい。その上に立って過去二十年間を振り返って、うまくいつているのか。いつていないとすれば、そのところを直そうということです。

そこで第三次振興開発計画の中に、実は「日本における特色ある地域として」という方向を出させた。三つ目の課題です。第一番目が格差是正です。二番目が産業振興の強化ですね。三番目に、わが国における特色ある地域としての方向です。それは大田県政が最後に打ち込んだ第三次振興開発計画の三番目の柱ですから、これに根拠を置いて仕事を始めるという仕組みをとったんです。第三次振興開発計画の最後の仕上げの一年は大田が知事ですからね。基地返還を位置付ける。第三の柱を位置付ける。基地返還についてはあとがきの中にしか入れなかつたけれど、三番目の問題は全部の中に位置づけた。これを根拠に、抱えていた課題を並べたわけです。

佐道 国際都市形成構想の具体的な中味に入る前に、かつて先生が県庁に戻られたときに、西銘さんがやっておられた交流拠点の仕事がされていたということでしたね。一九八〇年ぐらいに自治労の方で「特別県制構想」というのがありますが、あれとのからみというのはどうなんですか。

吉元 まったくその通りですね。復帰段階で、実は沖縄ではいろいろな動きがありました。独立論があつて、このまま復帰は無理だ、独立する、というものです。もう一つは、特別な制度を作つた自治政府を目指すべきだという提案もあつて、四つぐらいの提案が出るんです。それがだいたい二つに絞られてきて、一つは独立論、一つは自治州政府構想みたいな形のもんです。ところがこれは復帰運動の中で十分に議論されなかつた。学者の提案、あるいは反復帰運動の独立の提案という程度で、県民運動の中では

終わってしまった。だから復帰段階で自治を強調したけれど、これは結果としては全国の四七分の一になつてしまった。

これを十年間やってみておかしいなということで、実は私が県職労委員長のとときから一九七八年頃ですか、もうちょっと前かもしれません。復帰後、自治労中央本部と話し合つて、こういう沖縄を僕らは要求したんじゃない、ということをお沖縄から問題提起するんです。あの頃は「自治研センター」はなかつたですからね。地方自治研究という形で、自治労県本部の中で県職員も一緒になつて勉強会を作つていた。自治労中央本部の当時の書記長であり、後に総評の事務局長にもなつた真柄（栄吉）さんという人がおりました。この人はいま新潟のシンクタンクにおるようですが、この人が（自治労中央本部の）書記長をしていて、「それじゃあ沖縄の振興計画を作つた責任者を呼ぼう」となつて、実は下河辺（淳）さんと呼んだんです。

下河辺さんを引っぱり出してきて、下河辺さんを含めて自治労の本部、学者グループ、そして沖縄から数名が出て議論を始めるんです。最初は個別の議論をしていました。どうもそれじゃあ本土の補助金のプラスαを要求するような形だな、これはおかしい、といった沖縄はどうしたいんだ、という話になつた。いや実は沖縄は一つの自治政府を作りたい、という話をしたら、そこに向かつて議論が始まるんですよ。最終的にはそこでまとまつて、まとまつたものを沖縄側が整理して表に出したのが、「特別県制構想」なんです。

これは表に出したときに引っぱたかれた。不十分だ、こんなことやつても、やらないのと同じだ。そこまでいうんだつたらなぜ独立を言わなかつた、という議論と対置させられたんです。

伊藤 それは沖縄の中でですか。

吉元 そうです。沖縄の中で相当議論しました。しかし結果としては、あの議論は無駄でなかつたと思います。行政の中に、あれ

は何だという議論があった。当時、土光臨調が始まったんです。その後、私が職場復帰して、沖繩でそういう議論があったらしいなどということ、土光さんの当時懐刀をしていた臨調の瀬島さんのブレインだった河合良三という人です。これはなんとか開発センターというところの理事長をやっています。この人が少し興味を示した。この人の部下職員が沖繩に来てデータをもらったり、という時期が一時あるんです。しかし、それは臨調の中では道州制の論議が開始した時期でしたから、興味があった程度なんですよ。沖繩側がそれを十分論議し切れなかっただけに、これは音沙汰ない形で終わってしまった。

しかし、この「特別県制」論議では、沖繩の県民が持っている自治意識というのか、ちょっと私たちは本土とは違うよということが出て来た。それは何なのかというと、文化的に、あるいは政治的に、という言葉よりは、やはり持つて生まれた沖繩人の体質的なものみたいなものです。そういう議論があったことが行政の中でも残っています。チームの中で何名か後は次長、部長クラスになったやつも当時おりましたからね。ですから今回別な形で、私が県庁に入ったときに懐に入れていた課題なんです。

だから三つの課題があった。一つは国際都市形成構想、基地返還とワンセットですね。もちろん経済振興策としての全県フリーゾーンがありますが、これもひとつのもの、もう一つは、自治政府構想なんです。これは大田県政の三期目に取り組む課題として残っていた。ところが三期目がない。三期目を前提にして一九九七年二月、副県知事の時に、沖繩県地方自治研究センター、自治労中央本部と一緒にプロジェクトチームを作って、特別県制をベースに議論を進展させたんです。

それが、「琉球諸島自治制構想」です。「政府」というのは僕らが付けたもので、制度の「制」を使っています。「自治制構想」を私たちは「自治政府」と言い換えていますけれどね。これは後

ほどお上げしますが、一冊の形にまとめました。この中に沖繩における分権論議がどうなってきたかというのが書いてあります。

そして私たちがいま目指そうとするのは何なのか。九七年からこの仕事を自治労に始めさせた。つまり特別県制を出した自治労が、今目的にもう一回論議し直して、これが去年の二月にできあがった。大田知事に提言された。沖繩県に提案したんです。それが継続されていないんですね。だから大田さんの三期目にこれを広げていこう、これを要求していこうと。だから日本政府には私たちは、特に官邸にはそれは明確に言っているんです。国際都市形成構想と基地返還アクションプログラム、そして特別全県フリーゾーン。これは一国二制度ですよ。一国二制度をやる場合、そのときの政府のあり方というのはこうですよ。これを出します、といつてあるんです。

この問題で今年の一月に奄美大島に呼ばれて、講演を頼まれてしゃべってきたんです。夜、酒を飲みながらいろいろな議論をしたんですが、彼らも、沖繩県には復帰しない、琉球だったら復帰していい、と言っていました。笑い話ですがね。いまは鹿児島県ですからね。やはりそこの関係がありますからね。この種のものには慎重にやろうという意味でしょう。こういう議論もやってきた経緯があります。

佐道 その国際都市形成構想が、今の沖繩経済振興二十一世紀プランという、かなり似て非なるもののような形になっていくという過程はまた是非伺いたいんですが、プランをまとめるにあたって、そもそも国際都市形成構想をどういう取り組み方をなさったんですか。

吉元 一つは県庁の中で、私を中心にスタッフが議論を始め、そして関係部から数名集めて議論を広げ、それをベースに沖繩のシンクタンクにさせようと思ったんです。つまり、きちんとした考えを出して、それをベースにどう発展させるか。残念ながら沖繩

のシンクタンクには、自治とか政府との関係で役割分担する沖縄をどうしたらいいかという議論を展開できるようなシンクタンクがなかった。

そこで、やっと探したんですが、東京に都市経済研究所というところがあります。これは新橋にあります。その中心的な研究者を呼んで議論してみたら、彼らも面白いなというんです。あれは地方都市のいろいろな仕事をしているらしくて、その理事長、上妻（直正）という人に直接お会いして話し合ってみました。ここでいたく共鳴しました。これは単なる沖縄の二十一世紀の絵を描く話じゃないですよ。理念の問題も入りますよ。それを作り上げていくにあたっては、沖縄だけを孤立させるのではなくて、つまり沖縄が変な話を持っているなという程度ではなくて、今の日本の政治の流れ、将来のアジアにおける日本の役割を含めて、そういう議論をできる場を作ってくれるか、という注文をした。やりましょう、ということが始まりました。ですから、この都市経済研究所、この理事長に責任を持たせてやっただけです。最初にやった仕事は、一年半から二年ぐらいかけて有識者を集めて、徹底的に議論しただけです。まず懇話会をやった。そのときに作った名前が「国際都市沖縄」です。これは国際交流都市沖縄です。沖縄の私たちが「国際都市沖縄」といつていることですが、この出発点で三つの提案を当時やりました。

一つはシンガポールのような島嶼国家として沖縄をイメージしたいということ。もう一つは、本土と離島という意味で、ハワイのように小さくても一つの州で、機能分担をすること。つまり本土と沖縄の機能分担ですね。それでいて、小さくても一つの州。そういうハワイのような州を考えたいということ。三つ目は税制、憲法との関係を含めて、プエルトリコを考えて欲しい。これは私たちが復帰直後から言っている沖縄の将来像だといって三つを重ねたわけです。

沖縄の労働組合は、シンクタンク・沖縄労働経済研究所というのを作っておりまして、それは解散したんですが、ここでこの三つをずっと継続的に調査しておりました。そういう意味では、プエルトリコの仕組みもわれわれの調査で進みましたし、ハワイとこの三つが基礎データだ。それが沖縄の労働組合運動の中にあつたというのが一つあります。

そういうものを県場で組み合わせながらイメージして、そういう沖縄というのが日本の中で可能かどうか。可能だとすれば、それはどういう時期にそれを言った方がいいのかという話ですね。ですから国際都市形成構想というのは、二十一世紀の沖縄のブランドデザインだけではなくて、その中に含まれているのは、先ほども言いましたように、平和とか共生とか自立という理念をベースにした、沖縄が日本における役割分担として何ができるのか。東アジアの中における役割分担として何ができるか。それでいて、二度と戦争のない沖縄。そういう場を沖縄に作ってほしい。これが沖縄県民の願っている一つのあり方だということです。

そういう意味では、シンクタンクには相当苦労をかけた。彼らの非常にいい点は、各省庁の課長補佐クラスと相当つながっているところ。そこが私の狙い目でもあったんですね。大蔵あり、建設、運輸あり、もちろん経企庁もあったし、国土庁にもおりました。何名か課長補佐クラスと会って酒を飲みながら議論したこともあります。彼らは最初はキョトンとして聞いていたけれど、最終段階ではそういう生き方もあっていいなという言い方で、共鳴し始めていましたね。この課長補佐クラスは、もう課長になっています。それが一つの狙い目だったかもしれないけれどね。

ですから、沖縄のシンクタンクでは、無理だったと思いますね。

そういう大きさを作っていきけるシンクタンクを探したということです。一方、そこと議論をさせながら、うちのスタッフは行ったり来たりを相当繰り返していますから、それを作りあげながら、それを政府内にどう広げていくか、実現の可能性のある形で広げていく。

もう一つは、もっと大きな視野、安全保障の面から沖縄をどうするかとNIRAに検討を求めた経緯もあります。ですから、そういう意味ではNIRAにも少し突っ込んだ仕事をしていただいたし、今年の六月に発表した中間報告にある、沖縄の海兵隊を苦東に、という話も、NIRAの仕事として、あるシンクタンクにさせた仕事なんですよ。そういう意味で、相当迷惑をかけたけれど、彼らも時の政権だけではなく、もっと長い長さであるべき日本というのを考える場所ですから、そういう意味ではNIRAも活用しながら、柔らかな形で広げていったということです。

佐道 もう、そのときは下河辺さんはいらっしやらなかったですか。

吉元 もういいいです。それに下河辺さんは、つい最近まで国土開発審議会の会長でもありましたね。ですから彼はポスト四全総、次期全総の責任者。ですからちょうどよかったですね。私たちの考え方を彼は熟知していますから。だから沖縄というの是一项目ありますからね。その部分をどう書かせるかという点については、国土庁の担当局長以下何名かと相当議論をしたりした。私は国際都市形成構想は「二十一世紀の沖縄のブランドデザイン」ですと言ったが、全総、国の計画では、二十一世紀の日本のブランドデザインというのがサブタイトルですね。面白いなと思った。あの中で、「パシフィッククロスロード沖縄」と言っていますね。沖縄をアジア太平洋の十字路、要（かなめ）にという言葉を使ってくれた。これは下河辺さんのアイデアで、私たちはそれを使っています。でも国の方も使っています。

下河辺さんがその仕事をやりながら、その後も下河辺さんとはこの国際都市形成構想、二十一世紀のブランドデザイン、これは理解していただきました。完全に理解したかどうかは別として。しかも基地返還アクションプログラムも細かく説明してあります。笑っておったけれど、この部分は否定的でしょう。しかし、沖縄の全県フリーゾーンの問題については、彼は彼なりに受け止めたと思います。何ができるか。それから特別県制、これは出発はあの人ですから。

最近会っていませんので、（下河辺氏は）どう考えているのか。下河辺さんとは復帰前後から……。私個人が正式に付き合ったのは、復帰後の特別県制議論の段階です。その後、私が県庁に戻り、企画で西銘知事のプロジェクトを手伝いながら、第二次の振興開発計画を西銘さんが手掛けたときに、私が西銘さんに会わせて、下河辺さんを一種の相談役とした経緯があります。もちろん、大田県政になってもそうです。ですから下河辺さんとの間には、ある意味では切っても切れない関係といった方がいいかな。幸いにそのことは官邸サイドもよく知っておつたらしくて、特に橋本さんのとき、さらには梶山さんから特別に下河辺さんはお願いされて、官邸と沖縄県とをつなぐ役割を担ってもらいました。基地問題は岡本（行夫）さんで特別補佐官という名前でした。ですから沖縄県との関係、大田さんとの関係は、下河辺さんがずっとやっていました。

梶山静六氏

伊藤 今までのお話の中で、梶山さんが出てまいります。梶山さんとの接点というのはどこからですか。

吉元 梶山さんが官房長官になってからです。それ以前は私は知りません。名前だけは知っているし、大変な人だなと思っていました。官房長官になって、つまり橋本政権が走ってからです。

ね。もちろん橋本さんともそうです。それは大田さんも同じことです。ですから、そういう意味では予備知識なしに最初からこの手のお付き合いができたという点でいうならば、お互いと考えていることをぶつけ合うという、とてもいい関係を作ったと思います。もちろん政治のああい人ですから、一杯飲まんかと言われます。会った日の夜は大田に付き合っ私も同席して酒を飲みますが、そういうことを通じて、双方が話し合いを深めていくという場を作りました。

梶山さんの場合は掛け値なしに話し合いができる人でした。実に自分の意見はズバツと言っし、違っ意見を僕が出しても、それをどう彼が理解するかという視点からの質問もありましたしね。そういう意味では珍しい政治家ですね。だいたい自民党のあれだけの大物になると、いつも、わかつたわかつたと言っ後でごまかす人が多いと言われるけれど、そういうタイプではなかつた。

もともと梶山さんは沖縄とは長い付き合いがあるらしいんですよ。兄貴の仕事との関連と言っていました。地元で兄貴は石材関係の仕事をやっています。県会議員のときに何回か沖縄に来たことがあるというんです。仲介役というか、受け皿も沖縄の石材会社で、関ヶ原石材の部長がずっとつながっているんです。梶山さんと最も親しい沖縄のつながりのある業者ですが、緑間さんという人です。この人の弟が沖縄国際大学の国際法関係の先生で緑間(榮)さんというんです。この人の嫁と、私の嫁と親同士が兄弟なんですよ。そういうことがあって、そのことを何かの拍子に梶山さんが僕に言っ、「あなた緑間さんを知っているか」というから、「遠い親戚になりますよ」と言ったらびっくりして、不思議な縁だな、という話になつたんですけれどね。あれ以来、少し仲介者が出るようになった。

伊藤 梶山さんとは、梶山さんが官房長官であることによつて付

き合うようになったわけですね。

吉元 その通りですね。

伊藤 官房長官でなくなつたら。

吉元 それでも、たとえば私が副知事を辞めた後、去年稲嶺さんが当選した一週間後に(梶山さんは)沖縄に来ていたんです。沖縄問題で新しい知事と話し合うということでしょう。その場に二十名ばかり呼ばれましたが、何故か私も呼ばれました。こっちは負けた選挙の一週間後ですから辛かつたんですが(笑)、まあ梶山さんのことですから、沖縄の人も全部私との関係を知っている。だから私も行きましたけれどね。そういう関係もあります。だけど、あまりそういう頻繁に連絡をする人ではありません。

佐道 最初は誰かの紹介ということですか。

吉元 そういうことはないです。官房長官ということですよ。

佐道 梶山さんが官房長官であつたから、ということは言えますか。

吉元 それは言えるでしょうね。これは逆に言えば橋本さんも同じことを言うんじゃないでしょうか。橋本さんも沖縄に対する思い入れは長いようです。学童疎開の対馬丸事件の救済のときからそういうことを言っています(朝日に書いていますね)が、梶山さんの場合は、沖縄をなんとかしなきゃならんという気持ちは、官房長官という立場だけではなく、やはり沖縄そのものを知っているということなんでしょう。橋本さんの場合は、沖縄を知るために大田さんが書いた本を読んだらしいですからね。本人が酒を飲みながら言っていたけれど。とにかくなんとかしなければいかんという気持ちは一緒だつた。けれども、沖縄を本当の意味で知っているというのは、やはり梶山さんかもしれませぬ。それはその後の総理にしろ、その後の官房長官にしろ、違っんですね。ですから梶山ファンが沖縄に多いのは、そういう意味ですね。

佐道 知事が総理と、副知事が官房長官と、というのは、ほかの

地方自治体から考えると、あり得ない空前の話ですね。

吉元 それは何だろうね。僕はそこに梶山さんの沖繩問題に対する真剣さがあったような気がしますね。同時に、梶山さんが、総理と大田の話し合いだけでは片付かんよということで、どう道筋を切り拓いていくかというのを僕に求めたんでしょね。それは私と会う以前に私をどう調べたか。もちろんああいう人ですから、ちゃんと調べているんでしょね。ですから言葉を換えて言えば、いわゆる大田のキーマンである吉元と何でも話し合える場、いつでも誰からでも連絡を取れる場、そういう関係を作ろうというのが、どうも梶山さんの狙いだったかもしれませんね。

それはある意味で双方とも果たせたかもしれません。私も同じことが言えます。本来ならば、総理秘書官とか、あるいは事務の官房副長官とか、あるいは政務の官房副長官というのが私たちと対応していくというのが筋かもしれませんね。でも外務省北米局は、私とのつながりは作りませんでしたし、私も求めなかった。防衛庁もそうです。ましては沖繩開発庁は、基地問題は関係ない、と言ったんですから。そういう意味で、やはり官邸、しかも梶山さん自身が古川官房副長官なんかを使わなかったところを見ると、やはり彼自身の沖繩問題に対する真剣さ、一歩間違うと(いけない)、という慎重さがあったんじゃないでしょうか。それは感じましたよ。

伊藤 橋本さんの場合も同じようなことですか。

吉元 同じですね。ただ、橋本総理は、知事と会うときはサシで話し合ってますよ。二人で。それはこの人の特徴みたいですね。ですから私は、橋本さんと大田さんのときに(同席して)いたのは、最初の一回目だけです。しかも、知事と話し合った後に、私たちは入れられて、総理執務室のソファに座って、少し経過報告的なことを総理が話すくらいです。それ以外というと、大田・橋本がいるときに私が入るといえるのは、あと古川官房副長官が総理

の側に座り、私が大田の側に座るといって、夜の部ですね。めったにないけれど。しかし、そのときに本場の意味での議論ができたかな。そういうことがありました。橋本・大田会談は十数回やっています。それに持ち込むまでの間は、すべて官房長官の梶山さんとの話でしたね。

伊藤 その上に乗って、総理と大田さんの話し合いが行なわれるということですね。

吉元 もちろんそうですね。ですから、基本的な流れは梶山・吉元が合意した内容でしょう。その上にプラスα、それぞれの思いをどういうふうにつけ合うか。大田さんも、こうしたい、ああしたいというものをたくさん持っていましたからね。基地問題の本質の部分ではなくて、沖繩の子供たちの留学問題とか、いろいろなことを出していますからね。そういう意味では、ずいぶん細かい話を双方でやり合って、実現していますね。

伊藤 何か特別な留学制度というのがあるんですね。

吉元 そうですね。これはあのとき大田知事の要請を受けて、橋本総理がすぐ実現したものです。ですから(橋本さんから)あるとき、「吉元さん、留学生として若い連中を行かすときは俺のときによこせよ。昼飯食わすから」というから、ハツと気付いて、そう言えばそういうことをやらんといかんなと思って知事に話して、第一回のメンバーは全部総理のところに入れて行って、一言お礼を言わそう、という話をしたこともありましたね。

伊藤 梶山さんという政治家は、非常に現実主義的な思考を持つた方だろうと思います。

吉元 僕はそうは思わなかったですね。これはずいぶん受けとり方が僕とマスコミとは違っていたようです。梶山さんは現実的なものの処理がうまいよということを決えず聞かされたけれど、僕はこと沖繩問題に関していうなら、少しあの人は先を見ていたと思う。例えば、基地返還アクションプログラムを出したときに、

彼はじっくり説明を聞いてくれた。目の前のことだけの話ではない。だから彼は、もし基地返還アクションプログラムを私たち沖縄が出さなかったら、SACOの議題にならなかつたら、説明にならなかつたら、これほど広範囲に沖縄本島にある米軍基地のチェックをしなかつたと思いますね。だからある意味では、戦後二十七年間のアメリカ支配時代、戦後五十年といってもいいんですが、文字通り半世紀のアメリカを総括したと思います。アメリカ自身は二十一世紀の東アジアにおける安全保障について政策的大綱は持っているけれど、個々の軍隊の構成まで持っていないから。それは少なくとも九七年の日米安全保障共同声明、あの中に書かれているアジアの十万人という言葉だけですからね。ですから、そういう意味ではアメリカ自身が無駄なものを省こう、危険なものは何とかしようということでも本気で乗り込んできたという証左だと思えますね。そういう意味では、この功績は橋本さんもさることながら、やはり梶山さんあたりが相当細かくチェックした節がありますね。意外と思われるようなところが十一の整理縮小統合の対象の中に入っていましたからね。もちろん、そのことで日本政府が担ぐ思いやり予算で対応しなければいけない部分は、覚悟の上でやっていると思えますけれど。

私があるときに気付いたのは、例えば那覇軍港の移設の問題です。これは復帰直後からの課題で、返還予定です。ハブ港湾は私たちは作りますよ、グラランドデザインで。二十一世紀沖縄国際都市ですね。軍港は返してもらおう。年間十数回しか船が入っていない、しかも物資の搬出入しかしていないんです。軍事的な要素は何もないんです。

伊藤 戦艦が入っているんじゃないですか。

吉元 チャーター船です。しかもこれは軍港ではなくて、いまの那覇港湾でも認めているんです。この範囲はハブ港湾を作って対応しようという構想を持っていた。商工会議所等とも話し合っ

いた。そういう問題について、個々の具体的な話は梶山さんはしなかつたけれど、わりと幅を持っていましたね。

もう一つ、普天間の移設問題についても、これは梶山さんは政治的な重要な場にいる人だから、ノーと言われるかもしれないが、僕が一方的に受け止めたという前提で言うならば、沖縄海兵隊問題で、僕と梶山さんとの間でどういう話をしたかということです。

朝鮮半島問題をどう見るかという問題が一つありました。もう一つは台湾問題です。率直に言いました。少なくとも九七年の話ですからね。梶山さんも米朝関係というようなものも睨みながら、この種の問題については沖縄が県内移設反対ということに対して受け止めたと思っていた。そのときに私は「二〇〇〇年、朝鮮半島問題、特に北朝鮮問題は米朝関係で軌道に乗るはずだ、それ以上は待たなすよ」と言った。そうしたら「何故か」と僕に聞いたんです。僕は香港返還と一九九九年のマカオの返還、そして二〇〇〇年までに陸続きは全部片付けるという中国の方針を説明した。それまでに北朝鮮問題が一段落してないと、二〇〇〇年以降台湾問題には手を付けられないと思つたから。先ほどもいっただよように、二〇〇〇年以降の台湾問題に対して中国の国家主席が発言したといわれる情報を三年前に僕たちは持ったわけだから。だとするならば中国は二〇〇〇年までに北朝鮮問題については一定の枠組みの中に収める。そういう意味で私はその説明をしたんです。そのときではなかつたけれど、その後ですね。「三年ぐらいい担げんか、海上基地問題を」と梶山さんが言つたんです。三年つて何かな、と思つたんです。二〇〇〇年だな、これはどういう意味かな、と思つたんです。酒を飲みながらの話ですから、それがどういう背景であつたのかわからんが、しかし私がそういう説明をした後の話だっただけに、海上基地問題を三年ぐらいい調査とか何とかで引つ張つたら、二〇〇〇年になつて朝鮮半島問題が一段落してくると、海兵隊の撤退というのか、そういうことを日

本政府が要求するのかな。あるいはそういう時期がくるのかな、と思いましたね。

もちろんそのときに、新ガイドラインも議論していましたし、これは決まるということも知っていたし、言うところの周辺事態法も当然決まると見ていました。そういう動きもありましたから。だからそれを全部セットで考えると、なるほどなど。だけどこれはそこまで発言していなかった梶山さんの発言ですから、「二、三年担げないか」と言ったのは、本当にそういう意味だったのかちよつとわかりません。

伊藤 可能性はありますね。

吉元 ただ、案外そう大きな違いはなかったな、という感じはしますけれどね。

伊藤 北朝鮮問題が二〇〇〇年までに片付く可能性というのは、もう来年は二〇〇〇年ですから。

吉元 私はそのときそういう議論をやりながら、九六年十二月はSACOの最終報告で、九七年一月には大田知事に正月早々の記者会見で県民に、「やはり兵力削減なくしては基地の整理縮小はならん。海兵隊の撤退を今後目指す」という発言をさせたんです。日本政府は相当びつくりして、SACOが最終報告をしたばかりで、まだ何もしないうちに海兵隊の撤退とは何事か、と怒っていたけれど、私たちは次のステップを見ていたんです。

次のステップというのは、まさに次の大統領選挙との関係。同時に沖縄サミットを誘致しようという狙いです。沖縄サミットでクリントンに来てもらう。もう一つあったのは、江沢民を呼ぼうということ。そうすると、いまいった二〇〇〇年の段階で、北朝鮮問題がひと山越しているとすれば、次は台湾問題だから、そのことを含めて、江沢民がオプザーバーでサミットに関わる。これはちょうどいい時期じゃないか。そのためにはWTOの加盟が前提だ、という議論もやりました。私はそういう内容で梶山さ

んに言いました。大田知事はそこまで言ったかどうかからんけれど、「サミットは沖縄で」という話をその後、橋本さんにやっています。これが沖縄にサミットを呼ぼうという出発点です。

ですからSACOの最終報告を真面目にやりましょうと。受けるところ受けないところ、最終的には地域、これは自治体ですから、これは決めてもらいます。決まらないことを県が押し付けるわけにはいけません。駄目なものは駄目だということで進めたシナリオなんです。

十一の課題のうち、大きなもので那覇軍港問題、普天間問題以外はほとんど片付いているんです。だからSACOの内容を一つひとつどうなったかチェックしないで、オール・オア・ナッシングで大田は何もなかったという意見があるけれど、そうではないんですよ。だって読谷飛行場だって、落下傘降下演習を伊江島に移して、伊江島はOKした。それから象のオリ（米軍楚辺通信所の通称）も金武の山の中へ移す。これも金武町がOKした。たくさんやってきているんですよ。象徴的な普天間問題、これは名護市民の投票の結果ノーと出たんですから、いくら大田が優秀な指導者だったとしても、地元で結論が出たやつを、しかも保守の首長と保守の議員が多い議会を通った条例に基づいた投票結果を、大田がノーというわけにはいけません。

だから少しこの沖縄米軍基地問題に対する日本政府の対応のしかたは、これは過ちを繰り返すとややこしくなるなという感じはしています。

伊藤 飛び火する可能性があるということですね。

■基地返還アクションプログラムの背景分析

佐道 時期がまた前後してしまっただけですが、そもそもアクションプログラムを作るときに、二〇一五年には完全にはゼロにするというプランを立ててあるのですが、その構想をどういうふう

つくつていこうということでしたか。

吉元 まず二十年というものをどう見るかということですね。行政は十年計画、これは長期計画と普通いいますが、長期計画を作る場合は普通二十年先をキチツと押さえるんですよ。そしてそれを踏まえて、すべてのシミュレーションをして、その中で確実な十年間にチェックをした上で十年計画を作るんです。だから行政の手法としては、だいたいその先まで見たシミュレーションをします、ということが一つあります。

もう一つは、ここは非常に大事なんですが、APECがどう動く方をし、アメリカが中国に対してどう経済的な入り方をしようとしたか、ということですね。八九年のAPECの発表、キャンベラ会議ですね。それからずっと流れてきて九五年の大阪APEC首脳会議、これは村山さんのときです。そのときに出してきた日米安保に関する共同声明の原案。これは翌年九六年四月のクリントン・橋本会談につながるんだけど、その中を見ると愕然としました。

三つぐらい問題がありました。一つは兵力配置の問題。四万七千とかいう数字を書いてあったり、いくつもありました。それは私たちが文句をいいました。そして、将来の展望のないような書き方だといって、これにも文句をいいました。結果としては、私たちが言った部分は薄められた。そして、どうしても入れるといった部分、つまり兵力削減、兵力構成を含む軍事態勢について引き続き緊密な協議をしていく、もちろんその頭に東アジアの情勢を云々と書いてありますが、この部分に私たちは力を入れたんです。SACOはこれで終わりじゃないよ。日米安保はこの共同声明から新たな出発をするけれど、これからも例えば東アジアの情勢のいかんによっては軍事態勢についての見直しをしていきますよ、という項目を残した。ここを明確に押さえた上で、これは沖縄だけで安保の話ができるわけではありません、あとは沖縄

問題をどうするかの話ですと。

このところは、前の村山さんもそうであったように、橋本さんも気付かなかったのかもしれない。私たちが厳しく言った結果、そうかということ、後半の部分を重要視したかもしれない。これは閣議決定された橋本談話に盛り込んでいます。もちろん見せられたときに駄目だと言つて、これを入れなさいと言つたのは僕だけれどね。そういう意味では、私たちが言えば、日米共同声明で新しい安保の再定義で、沖縄がいつもさっちゃんもいかなような形になることを懸念したということでしょう。

佐道 非常に素朴な質問なんですが、二〇一五年にゼロにするということですね。

吉元 そこで、先ほどの話の続きですが、APECは大阪会議でこういう決定をしたんです。そしてその後のマニラ会議で実施計画を確認したことです。先進国は二〇一〇年に「投資の自由化」と「貿易の自由化」をやるということです。これからの国は二〇一五年から、これは二十年の間になつていきますから。その後のASEAN首脳会議は二〇一〇年に繰り上げています。あのときはそうです。そのときの東アジアの問題で一つ見なければいけないのは、確かにマレーシアを中心にした経済的な混乱がありました。しかし、一方でWTOに入りたいという中国の問題を先送りしていったんです。先送りしない形で出てきたのが、APEC会議の九五年の大阪会議の発表なんです。

そうすると、アメリカがその時期、中国が二〇一〇年あるいは一五年に完全に投資の自由化と貿易の自由化を果たすという国際的な役割にOKした。それをベースにさらにWTOに加盟しようという形で中国はやってきたわけだから、この二つが重なると、沖縄を前進基地にした軍事体制というのは、最後に残るのは台湾問題だけじゃないか。将来は東南アジアの中のどこかの国が、アメリカの基地を置くと見えています。まさかフィリピンじゃないで

しよう。追い出した経緯がありますから。ベトナムと見ています。これは別の話題です。そうすると台湾問題をどうするかの話です。これは先ほどいったように、三年前からすでに二〇一〇年と江沢民が見ているわけです。全部重ねてみると、どうも東アジアの問題で二〇一〇年から十五年の間に大きな変化が来る。これは中国への経済的なアメリカの進出との関連を含めてですが、そのときに沖縄の米軍基地というのが本当に必要なんですか。つまり日米安保は残っていたとしても、ガイドラインができ（これは今だからいうんですが）、そういう体制が次々と日米安保の共同宣言の中で作られていく。それが全部できたときに、それでも在沖米軍基地は要るんですかという話です。

もう一つ、これは最近出てきた話ですが去年の六月の話です。これも後追いの確認ですが、アメリカの軍事評論家のセイヤという人のインタビュー記事があるんですが、彼は、いつとは言っていないませんが、はっきり言っています。在日米軍基地は、将来は、嘉手納、横須賀、そしてキャンプ座間だと。欲を言えば日本海側に小さな軍港、これは舞鶴を強化せよという意味でしょう。それから佐世保はどうするかという質問に対して、あつたほうが便利だけれどいらないと。三沢はどうするか、朝鮮半島問題が一段落すれば自動的に撤退します、と言っている。自動的と言っています。つまりアメリカが長期的に睨んでいるのは完全撤退ではないんです。嘉手納と横須賀です。あとは司令部としての座間の機能です。ここまでアメリカの中では議論が進んでいる。もちろんこれは国防省の最終決定ではない。しかし示唆しています。これを二〇一〇年、十五年という時期に見るのかどうかです。もつと後に見るのか。しかしいずれにせよ、アメリカが一番在日米軍基地を必要だと思っている理由として二つの課題、台湾問題を含めていつ片付くか。これとの関連で、私たちは米軍基地の撤退を、相手がわかるような形で出しましょうというのがこれなんです。

伊藤 逆に言えば、北朝鮮問題、台湾問題というのは冷戦構造の残り滓ですね。これがある程度見通しがついたときに、突然沖縄の土地から撤退されたら大変だ、ということですね。

吉元 私たちが二〇一五年までの二十年間を三期に分けた理由はそこにあるんです。僕らはそれ以外引き取らんよと。帰るのは帰っていいけれど、あと全部、日本政府が雇用問題と地主の保証をやりなさいと。つまり二十年間を二〇〇一年、二〇一〇年、二〇一五年と区切った意味はそこにあるんです。そういう意味で、これは計画的、段階的な返還を求めるといふ県民合意なんです。この内容は沖縄県が勝手に計画を作ったのではなくて、まずは基地を抱えている十七の市町村と詰めて、この三つのランクを入れたということなんです。それは跡利用の計画を一緒に作れということなんです。

もう一つは五十三の沖縄の市町村に県を入れて五十四の首長が集まって協議会をつくって、国際都市形成、基地返還アクションプログラム、全県フリーゾーンを決めたということです。経済界の十団体が、同じことをやって決めてくれた。県議会も追認してくれた。ここまで物事は進んでいたわけです。だから日本政府も、橋本政権・自民党政府になったとしても、容易に真正面からつぶすわけにはいかないという力が沖縄には残っていた。

これが九五年の少女暴行事件、それからもうひとつ、大田が代理署名を拒否したという流れ、そのことによつて全国的に沖縄の声が広がったということとの関連で、日本政府がどうにかしなければならぬという形に、ある意味では政治的に追い込まれた。これがその時期なんでしょうね。

SACOが最後ではなくて、僕たちは出発だと。日本政府は最後ですというような言い方をしていたから、怒ったんです。そうじゃないですよ、出発ですよ。それは出発とも最後とも彼らは言い切らんけれどね。ですから二〇一五年というのは、いまいった

ように、勝手な沖縄の都合ではなくて、東アジアあるいはアジア太平洋における経済の発展、共同体、EUみたいな形で、どこまでいくかわからないけれど、そういう枠組みが現に進んでいるという事実と、ASEANが非核地帯宣言をし、そしてASEANプラス四で、中国、ロシア、アメリカ、日本を入れた中で北東アジアの安全保障を議論しようという時期も見えてきた。そういうことからいうと、むしろ日本はそういう状況に敏感に反応して、アジアの中における新しい日本も一つの軸とした安全保障を提起していけるような、安心を与えるような仕組みを作るべきだと思います。

佐道 国際都市形成構想を作るときには東京のシンクタンクを利用してお作りになったように、このアクションプログラムは。

吉元 原点は、国際都市形成構想をあるときにまとめ、グラウンドデザインを立てたことです。それと同時に並行に、この問題は県の行政の中で議論しているし、シンクタンクにも投げかけてある。だからほとんど一緒です。別になると、むしろ話にならない。ワンセットでなければ、国際都市形成構想といっても意味がない。

佐道 その過程で、台湾の状況ですとか、シンガポールに事務所を作られたりとかいろいろありますが、東南アジアの状況とか、そういう方も。

吉元 これが私たちにとってはいちばん必要な情報だったんですね。大田県政になっていち早くやったのが、ニューヨークに担当者置くことです。これは囑託、参与という形で、元国連の広報担当の職員でありました仲地という人で沖縄出身ですが、大田知事のつながりで彼をお願いした。ニューヨーク事務所を作るために予算化して議会に出したんですが、二回通らなかつたんです。自民党が拒否したんです。これは結果的に事務所という置き方はできなかつたけれど、囑託という形で日常活動に支障のない形は

とりました。

北海道にはもともとあります。東京にはもちろんありますし、名古屋、大阪、福岡にもある。これらは従来沖縄の観光とか、沖縄の産物を守るための宣伝の場。そして同時に復帰前からあった本土のいくつかは、例えば名古屋とか大阪とか福岡は、集団就職の子供の面倒を見る事務所だったんです。しかしこれは全部性格を変えました。いまは集団就職をしてないから、情報センターにしよう、それから観光物産のセールスマンに仕上げようというところで体制を変えました。その上で台湾事務所の強化、シンガポール事務所、香港事務所、そして今は福建事務所、ソウル、ここまですきました。ですから、義務的にほとんどひと月に一回情報が入りますが、もつと早く入るところもあります。

一番大きな意味を持ったのは香港でしたね。香港事務所はJETROの事務所の一角に沖縄事務所という名前を付けて、机置いて仕事をする。地元の人を採用するという形でやったんですが、相当大的な情報が入りましたね。ゆくゆくはと思っていたのが、福建省の沖縄事務所です。これは将来もつと強化しなければならぬと思いますね。そこは北京政府と直結しているところですね。台湾に向けての前進基地ですからね。それと同時に台湾の企業、福建省出身がたくさんいるんですから。華僑資本はほとんどそこの血のつながりですから。そこは沿岸部の経済特区、一番後まで押さえられたところなんです。そういう意味では、福建省というのは台湾の動き、東南アジアの華僑資本の動きなどを見るためでも、一番大きな意味を持つでしょうね。

伊藤 こういう措置は稲嶺さんには。

吉元 継承してもらえらると思います。非公式に五月に知事と会う機会があつたんですが、基本的にはそういうことを言っています。しかし先週の金曜日、県庁の若い連中と飲んでいたら、どうも二ヶ所ぐらい潰されそうだなといって騒いでいましたね。シン

ガポールと香港が潰されそうだと。「なんでだ」と聞いたら、「予算がないから」という。「予算がなければ、海外事務所は潰すな、他のところを潰せ、本庁でも二つ三つ課を潰せ」といったんですが、みんな笑っていました。まあ、そういうトップの考え方がどこまで伝わっているのか。大田県政の場合は、それが通用していたけれど、今の県政の場合、知事がそこまできちんと指示しているのかまだわかりませんけれどね。

伊藤 しかし、こういういろいろな政策決定の中には、稲嶺さんも関わっているわけでしょう。

吉元 そうです。ずっと関わってきました。経済界を代表してね。だからそれは知っているとしますよ。

伊藤 自分がコミットしてきたことですよね。

吉元 ただそれは、いま彼のやりたいところでやれるような三役体制を作ったかとなると、マスコミも経済界の親分衆も私に言っているのは、駄目だな、足を引っ張られるな、というし、知事自身に「こうしたい」ということがきちんと出てこないのが県政が動かんという声もマスコミから指摘されている。そこはどうなんですかね。本人がよっぽどの気持ちを持って、副知事、政策調整監あたりに大事なことは仕事させるということを日常化しなければ、この種の問題は動かないですね。

伊藤 こういうふうなことというのは、他の県と横並びということでは全然ありませんからね。

吉元 ですから沖繩が、いまの県政との関係でいうならば、「国際都市形成構想」という名前そのものに抵抗を示しているんですね。そこに問題がある。これは私もまた聞きなので、正確なことは言えないが、担当のナンバー2が、大田県政時代のことを全部書き直せということになって、いろいろなことを作ってまとめたものを先ほど話が出ました下河辺さんのところに相談に行っているんですね。そうしたら、下河辺さんは怒鳴っているんです。

「百年、二百年の長さをかけてやるべきだ。そして国の計画にも載った、全総にも載った沖繩国際都市形成構想をどうして変えるのか。問題はその中身でしょう。経済振興の部分でしょう。それは政策が変わればどんどん変えていいよ。だのに、何を変えようとしているのか。国の方では五十億の橋本さん時代の政策調整費で、このグラントデザインを推進するための各省庁の調査が始まっているんですよ。全総の一環の調査でもあるんですよ。ここまて来てまだ変えるのか」と言われて帰ってきた。そのメモを見せられました。ちよつとがっかりしますね。

佐道 それは全県フリーゾーン等々に反対の論陣を張られたあの方ですか。

吉元 そうです。沖繩経済のデータをこまめに積み上げて、戦後の沖繩経済の在り方を評論できるという点ではいい能力をもっているんですが、だからといって彼が二十一世紀の沖繩をどう作っていくかというときに、大田県政時代の国際都市形成構想とかいくつものものを全部否定して、新しいビジョンを提起していないで、この種の変更をいきなり下河辺さんに論議すると、それは怒られるでしょうね。

佐道 これはすぐ表に出すものではないので、お名前をいつて差し支えないと思いますが、牧野（浩隆）副知事です。国際都市形成構想がまさに牧野さんなどが反対議論をはられて、大議論になっていくと。それから全県フリーゾーンということが問題になっていくということがあるんですが、その前に例の少女暴行事件が起こります。最近出た大田さんの回想では、今まではあの事件があつて、それで次の代行拒否ということの流れで説明されています。その前からジョセフ・ナイの報告が出て、それをきつかけに、もうとにかく政府に裏切られたんだし、次は拒否をするということを決めていて、それをまた吉元先生にも話をされたということですか。

■代理署名拒否

吉元 それはその通りです。非常に危機感を持ったのは、その年九五年の二月の第三次の「東アジア戦略報告」でしたが、ジョセフ・ナイの報告書が出た。いち早くインターネットを通じてとつた。それを私たちも一緒に知事と論議しました。これは大変だなという感じでした。それはその前の段階からの流れがありますから。同時に、「代理署名」問題も抱えていましたから。

大田さんはその年の訪米——訪米は二年目から毎年行きました。が、その何月かはわかっていませんが——帰ってきた直後に「私は今度はやらんよ。前のこともあるしな」ということを話した。私がおのれのことを知事から言われて、知事と議論し、わかったと引き取った。副知事時代ですから、関係する局長を数名、ごく少数集めて、秘書を交えて徹底的に議論した。それは単に拒否だけでは済まん、最高裁までいく。どういうふうにさせるかと。その前に儀式的に表の仕事をしたつてしようがないから、政府にどう働きかけるか、という話になって、私が行動を開始したのが八月下旬です。

そのとき、沖縄の社会党の県本部の書記長、委員長に集まってもらって話し合つて、彼らもわかったという。それじゃあ村山さんが総理だから、一つそこを自分たちもバックアップしようという話になって、社会党は社会党で動きを作りました。私はそのときに社会党の書記長に同行してもらつて、直接官邸に乗り込むわけです。結果的には不発に終わりましたが、当時の官房長官、野坂浩賢さんに会いたいということで、社会党を通じてアポを取つた。東京に着いたと同時に、風邪を引いているので官邸で会えないという。じゃあ宿舎でいいですよといって、それはOKしていただいただけで、それも土壇場になって駄目になった。それで会える人がいなくなつたものですから。いきなり総理に会つても、こ

れは話にならんと思つた。

それでは、ということでも社会党の伊藤茂、前島さん、あと一人いたと思いますが、どうしたらいいか、大変な問題だ。官房長官が駄目だったら、総理の担当ということで、社会党の代議士が一人が付いていましたので（名前は忘れましたが）、彼を呼ぼうという話になって呼んで、話し合ふんです。沖縄県の知事の考えはわかつた。これを政府がどう受け止めるかの問題だということになった。私は間違いなく、官邸と社民党本部の副委員長、それから沖縄担当者に伝えた上で帰つて来るんです。その八月の末、返事がない。九月に入つても返事がない。

そして九月七日か八日あたりだったか、県警からこそつと情報が入つて、九月四日の少女暴行事件を知らされた。知事に直ちにそのことを伝えたら、知事も愕然として、本当に血の気がなくなるぐらいだった。軽々に発言するなということ、可能な限り、この子供さんと家族のことを考えてなんとかしようということ、私は知事から「悪いけれど、この種の問題は引き取つてくれ」といわれた。私は、子供さんの問題については心理療法士を探した。公務員をやると目立ちますからね。まったく違うルートからそれなりの人を家庭に行かせて本人に会わせる。学校の校長先生にも極秘でパイプを作り、当時の教育長だけに連絡して、まずは子供さんの落ち着きを作ろうと。そして、次に親との話し合いということ、私も非公式にお忍びであるホテルに父親を地元から呼んで、じっくり話し合いました。当時、補償とかのなんとかの話は親は何もしていません。とにかく、この子供が本当に生きていけるかなということ、ものすごくそれだけ怖がっていましたね。これはしかし、いずれ明らかになるよと。私たちは口が裂けても、学校の名前、子供の名前、親の名前、その地域（沖縄では集落のことを部落といいます）、部落の名前を出しません。これは責任持ちます。マスコミも全部押さえてありましたから。とい

うことで、あとは表になったときにどう対応するかという問題です。

ですから、先ほどいった機関委任事務をノーと言う通知書を出して、返事がまだ来ない。それで少女暴行事件が起こった。どうするか。オープンになった。抗議行動しなきゃいかん。知事が上京し、総理、外務大臣に会わせる。外務大臣の河野洋平さんに大田が会ったときに、逮捕さえできないというのはおかしいじゃないですか、という話の中で、地位協定を見直すべきだという要請をしたら、ちょっと走りすぎているんじゃないかという批判を河野外務大臣は大田に投げつける。それを受けて大田知事はがつくりして、一緒に行った県の部長と担当秘書が外務大臣室を出た直後、廊下で知事が「もうやる以外ないな」という発言をしたそうです。これは秘書から私が聞かされました。ですから大田が「やる以外ない」というのは、公表しようということなんででしょうね。この代理署名の問題と対応の仕方を。それから東京から連絡があつて、「もう決意は変わらん」というから、「わかった」と答えました。

あとは私の方で、九月議会に向けて、九月十日前後でしたか、慎重に与野党を問わず、このことを報告して、やりますよと言った。野党にもいいましたよ。まあ、こういう状況で、事件の後ですから、それもしょうがないなということで、与野党とも理解を示してくれて、本会議で県民の前に知事が表明したわけです。

ですから、少女暴行事件の後で決意したように見られています。そうではなくて、大田さんの決意の一つは、最初にあれだけ約束しているながら国が約束を反故にしたということへの怒り、もう一つは「ナイ・レポート」によって沖縄基地がどうなっていくかということに対する危機感、それと抱き合わせの基地の提供のための土地収用という問題は慎重であるべきだという判断が先にありました。その間、アメリカに行つて何回要請しても、「基地の整理縮小というのは日本政府が言つて来ないので、日本政府か

ら提案があれば検討します」というところまでは言うけれど、それ以上は言わない。ですからどうにもならないということは何度も感じていたわけですね。大田は知事なりに、決定的な問題に発展することを承知の上で決断をしていた節があります。

佐道 少女の事件がおもてに出たというのは、事件が起こつてからあまり間がなかったですよ。

吉元 事件は（一九九五年九月）四日ですから、七日か八日あたりじゃないですか。たぶん、三、四日経っていたと思います。それは少し対策をとるまで、県警におさえさせた経緯がありますね。学校現場とかも。この子はしっかりした子で、私は直接会っていませんが、会った医者から聞かされました。

佐道 大田さんが、九月二十八日に県議会で代理署名拒否の表明をされる。そのときに、例の防衛施設庁長官の宝珠山（昇）さんのことがありますね。

吉元 宝珠山さんが来たのは、その前でしたか。

佐道 前ですね。それで大田知事に会えなくて帰つたという。

吉元 その後で議会ですね。あときはノーと言うよ、というのは知事が議会に表明する前に、私は与野党・野党に言いましたし、私はその後も含めて、国・官邸の方には伝えてありました。ですから、そこから流れたんでしょうね。そういう意味では、担当である宝珠山さんが、ということなのでしょう。

あときは、実は宝珠山さんはアメリカから帰ってきた直後なんです。それで羽田に行く車の中で私に電話がありました。私が電話をとったんですが、「今から行く、この問題で行くよ」と言うから、私は「それはちょっとまずい。来ても大田は会いませんよ。僕だつて大田に会わせませんよ。この問題は淡々とやりましょう」と言つたんです。「そうか、わかりました」といつて一度電話は切つたけれど、その直後にまた電話が入つて、「いや、官邸に相談したら怒られた（たぶん官房長官でしょうね）。すごく

怒られた。だから私は会えなくても行く」という電話が入ったんです。羽田に着く前ですね。私は「会わせませんよ。迎えにも行けませんよ」と言うと、「わかりました」ということだけれど、とにかく命令だから彼は来ました。それがやりとりです。

私も会わさない方がいいとは思っていませんでした。ただ、県民感情からいって、それはまずいと思いました。あの事件があり、議会までの間に、アメリカの駐日大使が謝り、軍の責任者が謝り、大統領が謝ったんです。日本政府は河野外務大臣の発言以降、何もなかったんですよ。もちろん後では国会を通じて村山総理は謝りましたけれどね。これは県民感情が許さなですよ。あのとき大田が会ったとすれば、あるいは県の誰かが会ったとすれば、県民は収まらなかったでしょうね。ですから（宝珠山氏が）来て、その後沖縄に滞在している間、私には電話はなかったです。私は東京でのやりとりで終わっていますから。秘書にはしよつちゅう電話があったそうですが、お断りを続けたんですね。彼もそういう意味では官僚ですから命令に従わなければならなかったと思うんですが、その辛い思いというのは一番彼がよく知っているんじゃないですかね。宝珠山さんみたいな人だったら、そこはよくわかきまえていたと思います。

ただ、宝珠山さんについては、沖縄ではいろいろ問題がありましてね。彼が防衛施設庁長官として就任して沖縄に来たときに、実は沖縄マスコミとの記者会見の中で、「沖縄県民は米軍基地と共存共生をして欲しい」という発言をしたんです。これは相当問題になりましたね。それで少女暴行事件のときでしょう。だからそれは県民感情が許さないです。

もう一つその後で宝珠山さんは、沖縄の関わりでいうと、公告縦覧を代理署名したことで、村山さんに対して防衛施設庁としてはいろいろアクションを起こしたらしいけれど、それを官邸がなかなか決断しないものだから、「村山は頭が悪い」という発言を

したという一連のつながりになるんですね。政策調整時代に何回か会ったことがあるので、意外に思いましたね。非常に真面目な人だけに、責任感も強い人だと思いました。

宝珠山さんのとき、村山さんのときでしたが、実は基地問題は三つ、クリントン・村山会談で出ているんです。一つは那覇軍港の移設。これは前からただけれど、今度本格的にやろうと。だから場所を移設先という表現で中身を後で入れてくるんです。もう一つは読谷補助飛行場の返還です。そのために何をするかということ。三つ目は、一〇四号線。県道越えの実弾砲撃演習です。この三つは村山さんがクリントンとの話で決着を付けたものです。実現したのは、今の段階でいうと一〇四号線・県道越えの実弾砲撃演習は、本土に移りましたね。北海道の矢白別、王城寺原、北富士、それに日出生台ですね。これが実現しました。実現したからいいという話ではないけれど。

もう一つは読谷補助飛行場。結果としてグリーン・ベレーの落下傘降下演習が伊江島に移った。それから象のオリが金武町の山の上に移ることになった。だからあのときの問題は二つ片付いた。いま那覇軍港問題が片付いてないだけです。その中心の仕事をやったのが宝珠山さんです。だから宝珠山さんの真面目さというのは、私たちはわかりますし、責任感の強い人だなということもわかっていきます。ただ、大胆な人ですね。総理は頭が悪いということが、オフレコとはいえ思わず出ちゃったんでしょうね（笑）。

佐道 先生ご自身が十月六日に東京にいらっしやって、拒否を正式にお伝えになった。記者団に条件闘争は一切しないとおっしゃったんですね。

伊藤 それは村山さんに直接ですか。

吉元 あのと村山さんには会ったかな。会ったかもしれないですね。第一義的には、防衛施設庁長官です。仕事の上ではあそことの関係ですからね。そこに行つて、そこできちんと言えた。最初

はマスコミを入れないというやり方で、「いいですよ全部入れても」といったんですが、入ってこなかった。その話をきちんと言った上で、帰る際に、「もう少し話があるんじゃないですか」と私に言うから「いや、これだけです」といったらキョトンとしていた。本音を聞きたかったんじゃないですか。それで出てマスコミから聞かれたので、そこをはつきりしたんです。

それは先ほどもいったように、大田知事が決意をした。そのときに細かい将来の話を全部やっていますからね。これは取引は何もないよ、条件闘争じゃないと。これはこれとしてきちつとやっていかなければならない性格のものだということを承知の上でやりましたからね。

伊藤 村山さんの反応はいかがでしたか。

吉元 そこは村山さんに直接会ったのかどうか記憶がないんですよ。日記を見ればわかると思いますが。

佐道 ただ、この問題に関して総理はどう考えているだろうかということは。

吉元 それはわかっていました。そこは社会党が、総理あるいは官房長官と詰めていた節がありますね。ですから十分過ぎるほどわかっていきます。そういう意味では、その前後に私が総理にお願いして、「知事以下、私も含めてうちのスタッフを全部連れて行くから、官邸も総理、官房長官、官房副長官全部揃えてくれ。一回沖縄問題を話し合うという場をつくってくれ」とお願いし、つくらせました。

佐道 それは実現したんですか。

吉元 実現しました。私がライスカレーを食わせろといって新聞に書かれたんですが(笑)。官邸でそれぐらい言うしかないだろうと思って。官邸のカレーライスというのは昔の誰かの総理のときに見た覚え、読んだ覚えがあるんですが、それでカレーを食わせろといったら、本当にカレーしか出てこなかったんですね(笑)。

そのときに、先ほども言いました、さきがけの園田さんが政務の官房副長官をやられていたので、立ち話でじっくり話し合う機会がありましたね。

伊藤 総理はどうしていいかわからなかったんじゃないですかね。

吉元 いや、そのときは割り切っていましたよ。むしろ官房長官がどうだったかというのが印象にないんですよ。これは私と会う機会が八月下旬に作れなかったもので、官房長官にはストリートでこの話をやっていますからね。社会党を通じて、非公式に総理と会ったりということですから。九五年の暮れ、自治労の書記長である佐藤(晴男)さんをお願いして、彼自身の計画にしてあるんですが、働きかけて、主要単産の書記長クラスを全部集めて、村山さんの激励ということで、十二月のクリスマスマス前後に公邸にいろいろなものを担ぎ込んだ。ご苦労をかけて大変苦しめていますということ、私も呼ばれた形で入って、そのときに村山さんを沖縄のシーサーに見たてて沖縄で作った人がいて、これを持っていくてくれというので、それを担いで村山さんに届けた。そういう意味では、表の仕事ではきついことも要求したし、言い合っていました。本土の労働組合の親分衆も気を使って、いろいろなことをしてくれたという感じがしますね。それは、ある意味では僕だったからかもしれません。私自身がそういう意味では長い付き合いがあったからかもしれません。

■一〇・二一県民大会

佐道 先生が東京に行かれて戻ってこられて、例の一〇・二一県民大会に八万五千人が集まったという大会、あのときの盛り上がりというか、熱気はこちらの方に何うとすごかったということですが、それをご覧になって、このエネルギーはただものではなぞぞという感じでご覧になっていましたか。

吉元 あれだけの集まりというのは、復帰後なかったからね。しかもこれは自由民主党まで含めたすべての政党が実行委員会に入り、商工会議所や労働組合すべての団体が一緒になりましたからね。そういうことが一つあって、県議会でもみんな憤りが出ていた。しかも、沖繩の命運を賭けるかもしれない、土地の強制収容に対して大田知事がノーという表明をしたということもあって、この機会を、という気持ちなんでしょうね。

だけども僕は行政の場において、ちよつと怖かったです。行政の場になかったら、やれやれ、ということだったでしょうね。沖繩の大衆運動の一番の怖さは、とどまることがないということですよ。これで限界だとか、これで成果を得たとか、そういうのは労働組合とか政党はやることです。県民大衆というのは、それがいいです。ひとりひとりが自分の目標を持ってしますからね。行政が、沖繩県がその中心になれるわけがない。沖繩県はもちろん実行委員には入っていないですよ。そういう意味では、この力を本当に正しく発展させられるかなど。それは何によってできるかと思つた。

だからそれを、ちよつと仕事をしていた国際都市とか基地返還アクションプログラムという叩き台を重ねて、ここにぶつけるということにある意味ではつながったかもしれない。それがなかった場合に何ができたか。これは歴史の皮肉かもしれないけれど、「もし」という言葉は歴史には使えないそうだけれど、もし、国際都市沖繩の二十一世紀のブランドデザインがなかったら、基地返還のための議論をしてまとめたものがなかったとするならば。公告縦覧でノーという。少女暴行事件があった。県議会も憤った。超党派で集まって、それ押せという形で基地の整理縮小をとった。地位協定の見直しを求める県民大会を作った。もしそれがなかったら、行政はその力をどこにどういう形で持っていたのか。じゃあ犯人探せ、犯人渡せと。地位協定の見直しを要求する。この

部分だけだと。そんな紙に書いたものを書き直させても、そんなもので県民が納得するはずがないでしょう。県民が言う基地の整理縮小というのは何なのか。地位協定の見直しというのは何なのか。もちろん県は、そういう仕事をずっと戦後持っていますからね。いつでも出せる状況だから。基地にかかわる部分だけ、つまり抽象的な基地返還せよという言葉だけでは通用しなかったと思う。

だから、もしその仕事がそのとき進んでいなかったら、それを考えるとちよつと怖いですね。あるとき僕が感じたのは、本当にそれをぶつけて行っているのか、まだ判断がついていないですかね。沖繩の問題を時間をかけて話し合つて、そういう問題をぶち込んでいくのはその後ですからね。結局、一〇・二一の県民大会で決議された部分を日米政府に要求する。その行政の具体的な作業が、一つは地位協定見直しの中身で、これこれこういうふうにしる、ということ。この間僕らが勉強していた西ドイツのボン協定を含めた具体的な中身です。基地の整理縮小という県民大会は何かを。これについては結果的には基地返還アクションプログラムでしょうね。これが重なってきた。しかし、これは何のため

に基地返還させるか。単なる平和だけでは意味がない。県民はそれによつて食っているわけだから、食えなくなったやつをどうするか。じゃあ基地のない沖繩というのは、どういう沖繩か、ということに対するブランドデザイン、国際都市形成構想がなかったとすれば、あの力、あの県民の憤りを、どういう形で日米政府にぶつけられたか。

そういう意味では、それを皮肉るやつもおりますよ。それを出したから日米政府が「はい、わかりました。検討しましょう」という形で問題をすり替えたんじゃないのかという見方もあるんです。つまり、沖繩県民の憤りを、結局行政がそういう形できちんとやったものだから、そこで結局、五十億の調整費が出てきて、そこで沖繩の二十一世紀を検討している、基地返還アクションプ

プログラムについてはS A C Oで検討する、という形で引つ張られたんじゃないのか、という言い方がある。それは、政党や労働団体はそれでいいけれど、行政はそういう瞬間、そういう問題をどういう形で、次は二度とそれを起こさないようにするか。もう一つは、やはり問題をこうすべきだという部分を出していかなければいけない。これは今もって沖縄の中で、俺の仲間もまだ合意していない部分なんです。国際都市形成構想を出した。だから次に全県フリーゾーンも出さなければならなかったと。それで、この本質がボケていったという言い方がまだ残っているんですね。

伊藤 ことの本質というのは。

吉元 基地問題一本に絞った追及の仕方ができなくなったと。私はそれを言うならば、基地返還アクションプログラムが駄目だというんだつたらわかるよと言っているんです。それを容認している、県民に対して申し訳ないだろうと。

だからこれは立場を変えて、もしそういう問題が出なかった場合、じゃあ日本政府はどう対応したのかなと思う。沖縄県は、ではどの基地を返してくれと言うのかと。これは普天間ですよと。地主とどうやりですか。おたおたしたでしょうね。まだきちんとした総括はできないと思います。もう少し時間がかかると思いますが。もし、沖縄問題を真面目に政府として取り組んでいかなければならん、国民的課題として取り組んでいかなければならんという、そのときに政府、官邸、総理が閣議で決定したあの経緯を、今後も知事が替わろうが、保守・革新がどうなるうが、真面目に継続して、それを実現していく道筋に国が責任を持ってもらうならば、あの一〇・二一の県民大会というのは、僕は生きていくと思いますね。またそうあって欲しいと思います。

しかし、最近見ると、大田をつぶせ、他の知事がなったから、もう日本政府は安心だという言い方に変わってきているので、そこは非常に残念に思いますね。沖縄が言っている意味を本当に理

解していないような気がするね。選挙の結果で知事が替わるのは当たり前ですね。それは保守・革新が変わるのは当たり前なんだから。それはそれだけの要素で変わらないで、もっと大きな要素で変わるんだからね。

一〇・二一の県民大会は当時はすごいなという感覚よりは、すごいなと自分でも思ったんです。あのときは知事の側に座って、大田の挨拶も聞いていた。大田は事務方が書いた原稿を読まなかつたからね。しかも中国からの帰りですから、那覇空港からそのまま車で来ると渋滞に巻き込まれて大変だから、チャーターしたボートを飛ばさせたんですよ。そこまでもつてきて、いきなりしゃべらせたということもあった。もつとも事前に原稿を持たせてあつたけれど、本人も自分のナマの声でやっただけですね。それだけに意味がありました。内容も良かった。あの県民大会は大田が、新たに決意する出発になったでしょうね。

伊藤 再確認ですか。

吉元 そうですね。これは相当大きく大田の知事としてのその後に影響していますね。私は逆に縛られ過ぎていっていると思うほど、このことを絶えず口に出していましたね。

伊藤 結局、運動というもののエネルギーですね。

吉元 大田さんは、運動を自ら企画し、そして実行したことがあつたりしないんですよ。できあがつたものを見たり、関わりあつたりしたのはいくつもあるだろうけれど、ああいうものがナマで、自分がやっている行政との関係を含めて作られてくる。それは僕らみたいに運動を自分で作って走り回って、できあがつた力をどこに向けて持つていくか、成果を得るかというものに慣れていない人ですから、相当拘束されますよ。だから、先ほどいったように、同時に作っていた国際都市とか基地返還プログラムを僕は基本的に知事に理解を得ただけで、説明は一回しかやっていません。総理に出すときも。パチッと出すと知事もびつくりするくら

いすからね。それはそうですよ。それからです、知事が本気になって自分の政策がここまでできてきているというのを理解するのはね(笑)。特に基地返還アクションプログラムの中身は、一時期、相当深刻になっていましたからね。

伊藤 知事に説明されたのはいつ頃ですか。

吉元 説明は節々にやっているんですね。しかし。国際都市形成構想のグランドデザインの文章のてにをはまではやっていますからね。「こういう中身ですよ、いいですか」「うん、いいよ。これは入っているか」「これは次の段階でこうします。これはあげておきますよ」ということです。彼が見るか見ないかわからんけれど。まあしかし、あの人の性格として必ず持ち帰って夜中まで見ているんですね。そういう安心感がある。

それから、基地返還アクションプログラムについては、梓組は知事と議論したことがあります。しかしああいう形で基地の名前まで並べたきちんとしたものを見せるのは、直前だったと思います。だから私は村山さんには、これは県の家じゃありませんよ、まさにいま叩き台ですよ、しかしこういうものを出しますよ。基地の中身が二つ三つ変わることはありますよ、ということを出した。ですからそういうタイミングは動物的に私が判断したんでしょうね。

■村山・大田会談

佐道 そういうことを踏まえて、県民大会も経て、十一月四日に村山さんと大田さんが会われますよね。そのときも先生は一緒に会っておられるんですね。

吉元 そうですね。

佐道 村山さんはどういう反応でしたか。

吉元 それまでには、村山さんは沖繩問題というのをある程度勉強しておったようですね。ですから、細かいことにこだわらなかつたですね。そのときに彼が言ったのは、アメリカとの間で基地

の整理縮小を検討する場を作りたいということと、もう一つは閣議決定、報告だったかな、やるということでしたね。ある意味では、課題であるこの機関委任事務の公告縦覧、代理署名の問題等について、そのときは割り切っていましたね。「国として対応していく」という表現をしたと思います。

伊藤 自分が責任もつてやる以外ないとお考えだったんですね。

佐道 実際、その後、署名勧告をされ、そして大田知事提訴ということになっていくわけですからね。

吉元 そうですね。あれも時期、時期の設定の仕方について、いろいろその都度、公式・非公式の話もしましたけれど。

伊藤 それは、どこですか。

吉元 それは官邸とですね。

伊藤 官邸というと、具体的には。

吉元 それは官房副長官の古川さんですね。

佐道 事務方ですね。

伊藤 やはりそういうことになる事務方になるんですか。

吉元 そうですね。政務の官房副長官とか、あるいは官房長官あたりでは無理です。法律的な手順を、最高裁まで睨んで、彼らには彼らなりに逆算して仕事に入りますからね。ですから、そこは官邸でも古川さんを頂点とした事務方でなければできないでしょうね。

佐道 大田さんと村山さんが会われた後に、防衛庁長官の江藤さんが来ますよね。

吉元 そうでしたかね。江藤さんと村山さんと宝珠山さんというのは、大分県なんですよ。私はいつも皮肉ったんですが、なんだ郷友会でやっているのか、と冗談を言ったんですけれどね(笑)。非常に不思議な取り合わせだったですね。江藤さんは、ある意味では沖繩を見たいということもあつただろうし、知事とも担当者として話し合いたいということもあつただろうし。沖繩の私たちのやり方というのは、他の県ではないそうなんです。誰が来よう

が、総理が来ようが、知事との間では最初から全部オープンにするんですよ。マスコミが全部入りますから。特別の込み入った話は、そこではしない。それは、手順としては、それ以前に済んでいるはずなんです。あとは夕食懇談会というのを必ず入れます。これはどこでもそうですが、そこで沖繩の感想みたいなものをお互い言い合うということです。だから仕事に関わった部分で、ああだこうだという丁々発止というのは、ほとんどないんですね。ですから、江藤さんが来たときも、大田知事との会見でやりあった部分以外にはないです。

伊藤 事前の調整はどの部分でするんですか。

吉元 国の大臣クラスが来るときにはどこでもそうですが、前もって目的と時期を知らせてくるんですよ。込み入った話だったから、来るまでの間に示されたテーマに基づいて詰めてくればいい。担当者が行けばいい。あるいは向こうから来ればいい。結局、普通はセレモニー的に万事OK、わかりました、というのが、普通の大臣クラスと首長クラスが会うときのやり方なんです。沖繩の場合は、それからが発発となります。やり方が全部逆転していると本土側は言うんです。私たちはその方がいいんです。知事とトップが話し合っで、代理人が話し合っで、そこで何が出たのかということを押さえて、その後そのことの詰めをしていく。その逆もありましたけれどね。だいたいは、知事は前もって、私はこう言いますということを書き合わせたんです。向こうに知らせなかった。だから普通は、大臣発言とか会見となると、沖繩県知事は何を発言するんですかと言われて、前もってメモを公開しちゃうんですよ。それをさせなかった。問題が問題だけに、それは無理だったかもしれない。

■橋本政権

佐道 村山さんが翌年早々お辞めになって、橋本さんに替わりましますね。これはどうでしたか。

吉元 意外でしたね。しかし年末あたりに匂いはありました。これは決して正式なルートではないけれど、疲れているようだなということがある。もう一つは、これは本人が認めていないが、その後、私は九州で会って、飯を食ったり酒を飲んだりするときに、本当はこうだろうと言ったけれど、「うん」と言わんもんだから、本当のことはわかりません。やはり新しい日米安保の再定義と、それに伴って出てくるガイドラインの問題とか周辺事態法の問題とかというものを想定しておったと思う。当然でしょう。それに自分が対応できるか、ということだと思う。僕はあの人の生き方からすると、それはできないと思う。そういう意味では、ぎりぎりのところで彼は決断をしたな、という感じがしています。ですから、正月早々そのニュースが出たときに、私は驚かなかった。それよりは、私が大田知事とそれに絡んで話したことは、誰が次になるのかなということなんです。だいたい噂はあったからね。橋本さんの名前が出たときに、困ったなという話を私がしたことがあります。

伊藤 困ったんですか。

吉元 あの人はタカ派だと、われわれは見ていた。沖繩的かというと、沖繩問題にどう関わったかということよりは、遺族連の会長として靖国に対する姿勢が見えなかったからね。あのセレモニーのときは先頭に立っている。そういうところが非常に強かった。親からの仕事を受け継いだし。そういう意味では、困ったな、と。

伊藤 ある意味では、確かにタカ派ですね。

吉元 それは替わった後、先に私が行ったんです。そして橋本・大田会談を一月中に設定したんですが、そのときに大田が橋本さんに表敬挨拶をして、沖繩問題こういうことがありますからと言った。そのとき、たしか夕食懇談会に入っただけです。そのときには官房長官も同席したし、古川官房副長官も同席していた。沖繩からは知事と私だっただけです。五名か六名だったと思います。そうやりとりしているうちに、そのときか、その後だった

か記憶にないんですが、早い時期です。九六年一月から三月までの間です。大田さんが酒を飲みながら、「橋本さんはどうしてタカ派ですか」という質問をしたことがあるんですね（笑）。ムツとするかと思ったら、しなかつたな。「いや、私はですね」とさかんに二人でやりあっていた。総理が「僕はタカ派かな」と僕を見るから、「いや、あんたはタカ派と言われているよ」と大笑いしたことがあります（笑）。

沖繩はそう見ていた。だから少し困つたな、本当に沖繩問題を理解してくれるかな、本当に基地問題というのを沖繩を犠牲にしないで議論ができる人かなと思いましたがね。そういう意味では、橋本さんも大田さんを知りたかつたんでしようね。最初会うまで、彼の本を二、三冊読んだそうですから。同時に、会ったときに「先生」という表現を一、二回知事にしたからね。それはすぐに変わったけれど。橋本さんは、大田さんの書いた本に対する疑問を、原作者に対して違つた見方で質問していたからね。それだけ知ろうという意欲があつたんでしようね。

沖繩が橋本さんに、あれつと思つたのは、この普天間問題ですね。しかし、やつぱりと思つたのは、あの共同宣言ですね。あの中の文章で、私の記憶は間違いないと思うけれど、その前の年、つまり九五年十一月の大阪APECにクリントンが来て、村山と調印をする予定の内容と、人が替わつてその後橋本さんがやつたときの内容とは、ずいぶん違つていたんですね。そういう意味では、この人はやつぱり、この種の問題に対しては自分の考え方がきちんとあつて、やはり総理だと思つた。ただ、そういう意味では、性格かもしれないけれど、よかれと思うことを先行する人だなと思つた。こつちがどう細かく考えているかということも十分過ぎるほど捉えた上でどうするかというよりは、どうすればよいか、ということ、結局沖繩のためになることはやろうという

気持ちなんでしょうね。そこは少し突出した部分が見えたね。これは独創ではないでしょう。沖繩から声が出ているんだからね。でもその範囲内であつても、やる場合はね。だから後に引けないというのがあるんですね。

伊藤 佐藤総理のときに沖繩を見て来いと言われて、それで沖繩返還があつて、その後を自分が考えなきゃならんという気持ちも十分あつたんじゃないかと思いますが。

吉元 そういう意味では、タイムリングとしては面白い時期だったと思う。ただ、それが冷戦崩壊後の、しかも東アジアの日米軍事同盟の新しい位置付けをどうするかという時期でしたからね。だから私は先ほどタカ派という表現をしたんだけど。村山政権のときには、自民党と社会党とさきがけだった。そしてアメリカから突きつけられた課題も目の前にある。ナイ・イニシアチブ以降ですね。それを知っているわけだから、そうすると沖繩問題がその前の年に出たからノーと言つたし、少女暴行事件があつたし、一〇・二一があつた。そして村山さん時代に沖繩米軍基地問題協議会が走つたし、SACOも走つた。そういう意味では、少し沖繩の米軍基地を固定的に捉えないで動かすと。沖繩から動かすという視点があつて然るべきだと思つたね。橋本総理になり結局、基地問題は沖繩の中でのたらい回しになった。そのところは、アメリカがそういう要求を出すのは当たり前だ。アメリカに言わせれば沖繩ほど居心地のいいところはないそうですね。

伊藤 戦略的な地点でもあるということですか。

吉元 いや、居住地として。家族ぐるみで、こんないい所はないそうですね。周辺とも付き合ひやすい。

佐道 その辺はまた別に伺いたいと思います。ちやうど時間も過ぎてしまいましたので。

(終了)

【登場人物（第2回まで）】

沖縄県知事

稲嶺 恵一（いなみなね けいいち）
大田 昌秀（おおた まさひで）
西銘 順治（にしめ じゅんじ）
平良 幸市（たいら こういち）
屋良 朝苗（やら ちようびよう）

沖縄県副知事（登場）

尚 弘子（しょう ひろこ）
仲井真弘多（なかいま ひろかず）
吉元 政矩（よしもと まさのり）
牧野 浩隆（まきの ひろたか）

政治家、労働運動家

上原 康助（うえはら こうすけ）
前島 秀行（まえじま ひでゆき）
伊藤 茂（いとう しげる）
白保 台一（しらほ だいいち）
真柄 栄吉（まがら えいきち）
喜屋武真栄（きやん しんえい）
瀬長亀次郎（せなが かめじろう）

その他

仲吉 良新（なかよし りょうしん）
高良 倉吉（たから くらよし）
大山 朝常（おおやま ちようじよう）
緑間 榮（みどりま さかえ）

●西銘 順治（ニシメジュンジ）

大正十年十一月五日生 出生地：沖縄県島尻郡知念村久高
学歴／東京帝国大学法学部政治学科（昭和二十三年）卒
職歴・経歴／外務省に入ったがすぐに退職。沖縄社会大衆党に入
党、昭和二十九年琉球立法院議員に当選、その後、琉球政府
に入り、三十三年経済局長、三十六年計画局長。三十七年から
那覇市長二期、四十三年沖縄自由民主党総裁、四十五年から衆
院議員三期を歴任。五十三年沖縄県知事に当選し、三期つとめ
た。平成五年衆院議員に復帰。通算四期。八年引退。著書に
「沖縄と私」、勲二等旭日重光章（平成八年）

●仲井真 弘多（ナカイマヒロカズ）

昭和十四年八月十九日生 出生地：沖縄県那覇市
学歴／東京大学工学部機械工学科（昭和三十六年）卒
職歴・経歴／昭和三十六年通産省入省。四十三年日本貿易振興
会へ出向。五十年通産省官房秘書課、五十三年工業技術院機械
規格課長、五十五年沖縄開発庁沖縄総合事務局通産部長、五十
六年通産省機械情報産業局通商課長、六十年工業技術院技術審
議官を経て、六十二年沖縄電力理事、六十三年取締役、平成元
年常務を歴任。二年沖縄県副知事に就任。四年沖縄電力に戻り
取締役、五年副社長、七年社長

（以上二件／情報提供者：日外アソシエーツ）

吉元政矩 オーラルヒストリー

第3回

日時：：1999年11月19日（4時間）
場所：縄県地方自治研究センター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

■橋本政権(続)

佐道 一昨日、お話を伺ったときに、ちょうど村山さんから橋本さんに替わられたところのお話でしたが、最初に橋本さんに会われたときのご印象をお伺いしたいと思います。

吉元 一番最初に会ったのは、大田知事と一緒に会ったときだと思います。官邸の総理執務室でした。非常ににこやかな人で、私たち自身はかつての見方としてタカ派だと見ていただけに、たいへん愛想のいい人だなと思いました。それから物腰が柔らかいという感じがしたし、言葉はスローテンポだけれど、逆にいえば何か一つ一つ確認しながら発言しているような感じに受け取れました。これは沖繩問題だからかもしれないませんが、多少相手も緊張感があったように思います。

最初に会ったときは表敬挨拶みたいなものですから、相手も総理として、これから本格的に日本政府が沖繩問題に取り組んでいくということ、明確に私たちに知ってもらいたいという場ですからね。そういう意味では、それほど良い印象もそれほど悪い印象も、特になかったです。

伊藤 梶山さんに会ったのは、もつと後なんですか。

吉元 いや、もつと前です。先にそこから攻めていくというのか、言葉はよくないんですが、そこから上がっていくようなパイプですよね。

伊藤 それも大田さんと一緒ですか。

吉元 いや、それは私が単独です。大田さんが梶山さんに会ったのは、橋本・大田会談の第一回目に、官房長官も同席していますので、そういう意味で(大田さんは、橋本・梶山の)両方に初めて会ったという感じですね。私はその前に官房長官には、その橋本・大田会談を作るために会っています。

伊藤 梶山さんの最初の印象はどうでしたか。

吉元 梶山さんが官房長官になる前に一回会ったような気がするんですが、それがどこだったのか、このあいだ記録を調べても出てこなかったし、僕の錯覚だったかもわからんという感じもしています。そういう意味で、初対面という感じはしなかったですね。単刀直入にものを言う人だなと思ったし、相手も僕の方をそういう見方をしていたかもしれませぬ。掛け値なしに用件をバシッと出すという意味ですね。梶山さんに会ったときにも、陸軍士官学校の出身だということは前もって聞き知っていますから、大変なタカ派だと思っていましたし、政界では武闘派と言われていたからですね。そういうような声もたくさん聞いていました。

たしか、最初に会った日に、昼の官邸での話とは別に、その日の夜に会った記憶がありますね。いずれにせよ平たい話をしました。課題である米軍基地問題とか沖繩の二十一世紀問題等々、沖繩の課題を突っ込んで話し合う場ではなく、ざっくりばらんだつた。それは誰がセツトしたのかな。おそらく官房副長官の古川さんがセツトしたんじゃないかという感じがします。そのときは古川さんも同席していた記憶がありますからね。ですから、梶山さんと私が話し合うときには、昼の部も夜の部も古川さんが必ず同席していたような気がします。

伊藤 その古川さんとの接点は一番最初はなんだったんですか。

吉元 私の古川さんとの最初の接点というのは、実は村山さんのときにも(古川さんは)同様に官房副長官をやっていますからね。だけど、村山さんのときには、古川さんは沖繩問題の担当ではなかったんですね。村山さんは文字通り社会党を通して沖繩とのパイプがあるわけで、私たちが官邸の誰かを通して村山さんと話し合うというルートは作らなかつた。また、官房長官の野坂さんが社会党であつただけに、単刀直入に私も飛び込んだことがありませんからね。それは、まだ具体的な話が出る前の話です。そういう意味では古川さんが私たちのパイプになるという話はなかつたで

す。

むしろそういう段階では、政務を担当している官房副長官、園田さんあたりが、絶えず総理とわれわれが会うときに同席しているわけですから、わりと突っ込んだ話を非公式でもやるということがありました。文字通り橋本総理になってから、古川さんが前面に出てきたということです。

伊藤 担当になったということがですかね。

吉元 たぶんそうじゃないですかね。

佐道 古川さん自身、例えば先生と梶山さん等との間のつなぎ役として、それからずっと出てこられるということですね。

吉元 古川さんの場合は、公的な役割がありました。村山さんのときに閣議決定した沖縄米軍基地問題の協議会、この協議会そのものは、官房長官が座長で、外務大臣、防衛庁長官、それに大田知事が入る四者会議ですね。その下に幹事会というものがあるんです。それは、古川官房副長官が座長で、外務省側、さらには防衛庁側から一人ずつ局長クラスが来るんですね。外務省の北米局長と、防衛庁は防衛局長だったかどうか聞いていませんが、そして沖縄から私、という四者会議です。そういう意味では村山さんのときの協議会発足時から顔を合わせているわけです。それが続いたということです。

佐道 最初に橋本さんと会われたのは、年表風に言いますと、一月二十三日が大田・橋本の初会談ですね。官邸の方に基地返還アクションプログラムの素案を出されたのが一月三十日ですね。

吉元 そうですね。基地返還アクションプログラムを出す場として、当然のこととして、村山さんのときに閣議決定した沖縄米軍基地問題協議会という場があるわけですが、そこに出すわけですね。それは村山さんのときには発足させたが、中身の話はまだしてない。沖縄側が最初に説明をした。

伊藤 その段階で村山内閣が潰れるということですか。

吉元 そうですね。ですから、九五年十二月の初めか十一月後半あたりに沖縄米軍基地協議会が閣議決定された。

佐道 閣議決定は十一月十七日ですね。

吉元 そこでは沖縄側からは、二十一世紀の国際都市グランドデザインを説明する、基地返還アクションプログラムのたたき台を説明する、という段階で終わっています。

その翌年に、村山さんが総理を辞めて橋本さんに替わった。さあ、沖縄問題について説明したけれど、同じように継承されるのかどうか、ここは非常に心配でした。ですから橋本さんになって、沖縄側から早めに協議会を開いてほしい、基地返還アクションプログラムを出したいという行動を起こしながら、それに向けて官房長官と話し合ったり、大田・橋本会談を入れたり、ということなんです。そして、その辺で練り合わせができたという感じなんです。一月末に沖縄米軍基地問題協議会を開いて、そこで基地返還アクションプログラムを正式に提案したということです。

佐道 正式に出されたときの官邸サイドの感触はどうでしたか。

吉元 もっともその前に幹事会というのを必ず入れますので、そこでつき詰め、国サイドは聞き置く程度。そしてこれが幹事会の場に沖縄側から正式に提案されたということを踏まえて、協議会に出します。ですから第一回の沖縄米軍基地問題協議会というのは、沖縄側から出したものを幹事会で詰めた議論をしていますが、それを全体の場で再度説明する、幹事会側から提案するという形をとるんですね。ですから、三十日の場合は梶山さんが座長、防衛庁長官、外務大臣、それぞれが官僚のみなさんが書いた、省庁の基本的な沖縄問題に関わる取り組みの考え方を述べるというセレモニーですよ。

その第一回目のとき、私は記憶にあるんですが、どうもおざなりになりそうな気がした。沖縄側としては、部長あるいは担当の

課長まで陪席させて、彼らに資料を準備させていたので、おざなりな説明というだけでなく、沖繩の米軍基地の実態をもっと詳しく説明しようという準備をしていました。たしか座長である官房長官が発言し、大田知事が発言し、その後外務大臣の発言の場になったときに、私はあまりにもおざなりな進め方をするものだから気になって、「ちょっと待ってくれ、私たちがいま説明している内容を知っていますか。理解できますか」と言ったわけです。ちよと県道一〇四号線越えの実弾砲撃演習の問題の説明の後でしたからね。本土での米軍、自衛隊の砲撃演習の後の処理の仕方やアメリカ国内でやられている方法が、なぜ沖繩とはまったく違うのか。沖繩は野放しでそのままじゃないのか、という違いを言ったわけです。ハワイの実弾砲撃演習をしているところの写真を事前に手に入れていましたから、それを見せながら説明し、テープルの上にいきなり広げた。少しルール違反だったんでしょうね。外務大臣がムツとして、「いま私が説明しているので聞いてください」という声を大きく出していたという印象が残っていますね。

第一回目というのは、そういう意味で、双方で沖繩が出したものに對してどう認識し合えるか。これから日本政府がどう真面目に對応してくれるのか、という出発であっただけに、こちら側としては、これでもか、これでもか、と問題を突きつけたわけですね。だけど、外務大臣の発言が終わり、防衛庁長官の発言が終わった後、座長の官房長官が説明をさせてくれました。事実上第一回ですが、私がそこでアクションプログラムを出して、そこで官房長官や両関係大臣がどのような受け止め方をしたのか。当然のこととして、前の幹事会で担当局長が来ているわけですから、彼らがどう大臣にレクチャーしたのかというのが見えるわけですが、少し心もとなかったですね。おざなりでしたね。

そういう意味では、橋本政権ができて、閣議決定した協議会で

事実上の中身を議論する出発になっていたその場が、村山さんから橋本さんに替わってですから、少し気になったですね。その気になった部分が、やはり最後まで影響してきましたね。

伊藤 直接的にこちらの提案に対してどうこう、ということではないんですね。

吉元 そういう場ではないけれど、ああいう官僚機構がそういう場を作るとするのは、お互いに前もって事務方同士で発言内容をすり合わせて文章にして、それを読ませるといふ形でしょう。こういうやり方が僕たちにとってはおざなりに見える。あなたは自分の政治家としての意見がないのか、と言いたいぐらいですね。これはその後ずいぶん議論に発展していくんですね。いい加減な対応じゃなくて、そこで議論をするという体質を僕たちが求めていった経緯があります。

伊藤 役所の体質が変わらないとそれはなかなか難しいでしょうね。

吉元 その年、ちよと先ですが、沖繩政策協議会ができて、その中に私たちの意見が色濃く使われていきます。つまり、徹底した議論をする場だといふふうな形に変わっていくんですね。

佐道 官邸に示された後、二月二十五日に日米首脳会談がありますね。そこでクリントンさんが再度話し合いましたという発言をされますが、そういうのをお聞きになって何か感じましたか。

吉元 二つの問題がありました。その前に、連立政権が初めてできて、細川政権のときに細川さんがクリントンに発言したと言われている「海兵隊の撤退」ですね。これは私たちは情報として聞いていました。それから村山さんが総理になって、九五年一月末の日米首脳会談のときに、村山さんが「三事案」をクリントンに要求するんです。一つは実弾砲撃演習です。もう一つは読谷補助飛行場の返還です。三つ目は、決まっただけで、村山・ク

リントン会談で確認されるんです。この三つは政府の中で重要な事項として、特に防衛庁、防衛施設庁、外務省の中で議論されていくんです。そしてその流れの中で少女暴行事件が起こったり、公告縦覧の署名拒否が始まったりして、県民大会があり、そしてそれに押された形で国が米軍基地問題を検討する場を閣議決定で村山政権を作る。そこまでは順調に村山政権であっただけに切り口を作れそうだなという認識を私たちはしていた。つまり、細川政権、村山政権。そして総理が替わって橋本政権になった。事前のタカ派という印象など含めて、この人は本当にやってくれるかなという不安があった。

ひとつは、前の年の十一月に大阪APEC会議で、クリントン・村山会談で日米共同声明の確認をする、調印をする、共同声明を署名するという準備ができていた部分が、ここにクリントンが来なくて持ち越されていた。そしてそれが一月、二月という段階で、橋本政権で少し厳しい内容になりつつあるという情報を私たちは得ていたんです。だから少し気になるな、後ずさりしないかなと思っていたんですね。ですから橋本さんがその年の二月末に行ったときに、これはどうなるんだらうかなと。極端に言えば、ナイ・イニシアチブの色濃い内容が、タカ派の総理の下で、そして沖繩問題が少しおぎなりになっていきはしないかという危機感を感じたのは事実ですね。でもそのときに、結果ですが、橋本さんは普天間の問題をクリントンにぶつけたというのが事実らしいですね。

佐道 それで普天間返還という問題が出てきますが、その前にいわゆる基地返還アクシジョンプログラムとの関係でも重要になりますね。例の台湾海峡での中国のミサイル演習問題がありますね。二〇一五年返還ということを見ると、中国の動向、台湾との関係というのは非常に重要ですが、アメリカの空母も二隻ぐらい行くというように、非常に緊張が高まった状況でしたが、ご覧にな

だし、そこから出てくるのが東アジアのアメリカの十万人体制のプレゼンスだし、そこから出ている日米間の戦術的な協力体制をどう作るかということが、ナイ・イニシアチブ後、ずっと日米間で議論されているわけですからね。私たちもその情報は漏れ聞いているわけです。そういう意味でいうと、何を今さら基地問題で沖繩側の提案が反故にされるような問題じゃないんだ、という認識を持っていましたからね。そこまで橋本さんがわかつていたのかな。

伊藤 その段階では、まだ先生は台湾の政治家たちとのコンタクトはなかったんですか。

吉元 そのときはしていません。その後です。

■ 李登輝

伊藤 李登輝さんや何かというのは、その後ですか。

吉元 ええ、後です。そのことがあって、台湾の東海上の南の方でやっていた軍事演習をずっと引き上げ、台湾の北の方に持って来るんです。その場所が、ちょうど沖繩県の与那国島、私の生まれたところですが、そこと台湾のど真ん中になる。そこに軍事演習場が設定されて、軍事演習が始まるんです。そのときに、与那国の一番いい漁場に船が出せないということがあって、その問題で私たちは直ちに外務省に対して、官邸に対して、関係省庁に対して、生活ができるように台湾政府に申し出てくれ、元に戻してくれと働きかけを、県議会あげて沖繩県民がやるんです。

まったく埒があかない。そういう中でどうしたらいいかと思ひ悩んだ後、じゃあ飛び込もうという話で、まんざら知らんわけじゃないし、ということ、私が沖繩から直接进入するといういろいろ言われるので、ちょうど東京に基地問題だったのか他の問題だったのか知りませんが、仕事で行って、帰りに直接羽田から台湾に入りました。その足で、翌日でしたが李登輝さんに直接会いました。

伊藤 事前連絡なしですか。

吉元 いや、それはあるルートを通じてやりました。もちろん向こうも用件なり、誰が来るか、私のことを全部調べておったんでしようね。その上で敢えて会ったわけですから。それなりに沖繩に對する思いというのはあったのでしよう。公的には「琉球」という表現を總統はずっと使いましたけれどね。直接会いました。そして三つの問題について話し合いました。

一つはこの軍事演習問題です。これは困る、与那国の漁民をいじめるつもりか、という表現、それらしい言い方をするんですね。彼はびっくりして、「何だ、それは」と聞く。「どうして軍事演習をそこでやるのか、そのために、私たちの漁民が出漁できなくて生活できない事態に追い込まれている」ということを厳しい言い方をしました。軍事演習をやめろとは言わんが、従来の方式に戻して欲しいという言い方をした。

そのときに、李登輝さんが「ちょっと待ってくれ。私は知らない」という言って秘書官を呼んでいろいろ話し合っていた。その後「わかりました。検討します」と言いました。この「検討する」という言葉に私は反発を感じた。日本の政府やいろいろなところから言われる「検討する」という言葉と同じですからね。「ちょっと待ってくれ。検討するじゃ駄目だ」と言った。もちろん日本語でのやりとりですよ。そのことを李登輝さんが察知したんでしようね。「あつ、私が言う検討するは日本語じゃありません。任せてください」という発言をする。敢えてそこで私も反論せず、「わかりました。直ちに解決することを期待します」という話で終わった。

その直後に、軍事演習場が台湾側にずっと寄るんです。事実上そこは空いたんです。それでそこに魚採りに出られるようになりました。これは本当にひとことで解決した。それは結局、台湾の李登輝さんが沖繩との関わり、琉球との関わりを、いろいろな意

味で、政治的戦略的な意味を含めて大変重要視しているという証
拠だっただけです。本来なら、人口千八百名しかない小さな
島（与那国島）の問題をいちいち、ということがあるかもしれない
。加えて沖縄県の副知事が来て、そんなことをずけずけ言っ
てね。そういうことで会うというのも問題だけれど、そういう意味
では印象深いことでした。

伊藤 あとの二つは何ですか。

吉元 いま明らかになってきているひとつは、沖縄に対する華僑
資本の投資の問題ですね。私たちは、その条件をフリー・トレー
ド・ゾーンという形で作り上げ、大論争をしながら全県フリー・
ゾーンの構想まで出し、ノー・ビザを沖縄で、という仕組みも日
本政府にぶち込んでいた。返事がなかなか出てこない。一方で、
私たちは中国福建省に対しても、あるいは香港を通して、ある
いは台湾を通して、華僑資本の沖縄への進出を希望していた。
そういう意味では投資をどの程度やるのか。それを政府の責任者
である李登輝さんから直接聞きたかったし、直接話し合いたかつ
た。そのときに、そういう問題があるものですから、経済界の代
表ということで、当時の沖縄経営者協会の会長、いまの知事に同
行してもらった。ですから、稲嶺さんがそこに座って、その話を
じっくり聞いて、若干のやり取りをして、私と李登輝さんの確認
に最後までいるんですね。これが一つです。この投資額は具体的
な数字も出ましたし、それを契機に台湾の経済界と沖縄が具体的
な話し合いに入った。今でも続いています。そういう意味では、
そのときのこの問題は、幸いにと言ったらおかしけれど、大田
さんが負けたから不幸にと言わなければいけないけれど、幸
いにも稲嶺さんに引き継がれ、意欲的にやっています。

伊藤 引き継がれているわけですね。実際に華僑資本少しは入っ
てきたんですか。

吉元 入っていますよ。もう予約されたのもいくつかありますよ。

ただ、もう少し沖縄側の条件、つまり日本側の条件を整理してほ
しいということがあります。これは可能でしょう。ですからそ
う心配ないと思います。そのための議論が李登輝さんと若干あつ
た。まだ香港返還前ですから、返還後の「一国二制度」がどうい
う形でいくのか。そしてそれに対する見直し、東南アジアにおけ
る華僑の中心のシンガポールが持つポテンシャル。そして台湾の
問題。台湾の問題は私は細かく言わなかったけれど、そういうこ
とを頭に置くと、中国十三億近い消費者、あの市場に対する関わ
りとしては、もう南じゃないでしょう。私たちは上海だと見てい
ますよ。そうなると、台湾の仕事はどこを通じていくんですか
と。香港を通じてですか。それとも沖縄をワンタッチしていくん
ですか。そういう意味では、すでに実績のある台湾の船が石垣
港湾にクリアランス船として、年間千何百隻入っていますから、
そういう受け皿としてまともなハブ港湾も作りましょうという沖
縄の国際都市形成構想を説明したりしました。ずいぶんそのへん
については興味を持っていましたね。ですから、ただ沖縄に来て
欲しいじゃなくて、沖縄は二十一世紀にこうなりますよ、という
国際都市形成構想に基づくハブ港湾、ハブ空港、そしてそれに国
際資本が活用するソフトの部分のイメージも説明した。沖縄に対
するかかわりを強めて欲しいということ、これが二つ目です。

三つ目の問題は、いよいよなんです。中国、台湾、沖縄、こ
の関係で「蓬莱経済圏」とか「環東シナ海経済圏」とかわれわれ
は言っていますが、その議論をしていますと、当然のこととして
沖縄として近い将来、尖閣油田、海底資源の問題にふれざるを得
ない。その問題が一つありました。それは私が先に発言する前に、
李登輝さんの方から「吉元さん、あと一つありますよ」といっ
て、尖閣の海底油田の問題を出された。そのときに私は「ちよつ
と待ってくださいよ。尖閣は台湾のものじゃありませんよ。沖縄
ですよ。琉球ですよ」と言ったら、彼は苦笑いして、「それはさ

ておくとして」という話になったんですね。どういう形で尖閣の海底資源開発について、台湾の資本（われわれは台湾資本と言っています、華僑資本ですね）と沖縄側がどのような関わりを持つのかという点について、少し手を取り合っているかという話です。私はそのときには明確に言ったんです。当然のこととして、この問題は中国との関係がありますよ、と。

実は（私が）県庁にいるとき、台湾資本の導入については進んでいたんですが、この問題（尖閣開発問題）だけは私が県庁におるときも手付かずで、事務レベルで仕事をさせていたけれど、今年（一九九九年）に入ってから急遽クローズアップしているんです。ですからこの件については、稲嶺知事に五月に会ったとき、「李登輝さんとの三つの点については、一つは私が解決した。あなたはひとつ台湾資本の導入についてやってくださいよ。あと一つ残っているのは、いつでも手伝うから、仕事を県庁で始めて欲しい」ということで、これは現実に仕事が始まっています。まだ表に出す時期ではありませんけれどね。

伊藤 この問題は日本の外務省との関係もあるんじゃないですか。

吉元 ですから、そのレベルで取り扱っていると、国際的な領有権問題に引つかかって何もできません。ですからこれは国が関わる仕事ではないと。沖縄県の県域、領域の中の仕事だから、なんでもいっち国が文句言うんですかと。許認可にあたって、石油の掘削にあたって、それは通産省あるいはエネ庁の許可をとらないといかんだろうが、やるかやらないかの問題まで国がガタガタする必要はない、ということが、私たちが国に言っている言い方なんです。通用するかどうかはこれからですけれどね。

佐道 そうい話をされていいることは、国自体は知ってはいるんですか。

吉元 僕が台湾に行つてその話をし、台湾からお忍びで那覇に帰

ってきたんですが、その後、どうもこれだけの大きな仕事だから、黙っておくわけにはいかんよという話になった。一つ目の、軍事演習海域を移させたことについては、これはそれとなく沖縄県の方から表明しようということ、これは実効があつたから誰がやったかではなくて、動かしたことを当事者に知ってもらえばいい。それで与那国の町長や組合長には知らせてありました。向こうからも、その通りになりましたという連絡がありました。

それから華僑資本の投資については、これは稲嶺県経営者協会長が記者会見をして、この部分だけは発表しました。三つ目の問題については、双方言わないでおこうと。これは仕事が先行すべきだということで、まだ言わせていません。ですから、この問題は今でも表に出していません。おそらく大田知事と、いまの知事と、経済界のごく一部と私、あとはいま担当している職員が三、四名おられますが、その程度ですね。

伊藤 新聞などには全然。

吉元 まったく出していません。

佐道 李登輝さんとは、その後何度か。

吉元 いや、その後私は直接は行っていません。私よりは、むしろ大田知事ですね。これは中国との間で（福建省、これは北京政府がらみですが）、こういう口頭の約束があるんです。台湾と琉球と中国福建省は、自由に経済、文化、学術交流、スポーツ交流、何でもやりましょう。しかし、沖縄では台湾の旗は立てないでくださいと。つまり、台湾を一つの国家としての取り扱いはやめてくださいということ、それは当然です。私たちもそのつもりです。もう一つは、知事が台湾に行くことについてはいろいろ検討してください、というのがありまして、これは知事という肩書きで平日、公的に入り込むということはやめて下さいという意味なんです。それはわかっていますので、私が行くときも、そういう肩書きではなくて飛び込んだ。大田知事が行くときはもつと慎

重に、正月休みを利用して行かせるとか、そういうことをおそらく一度くらいはやっています。そういう意味では、大田知事も李登輝さんとはいろいろな話をやった経緯があります。

伊藤 知事からは、どういう話をしたかということとは。

吉元 そこは聞かないです。お互いに仕事してたから、そういうええああいいうことも言っておったな、という程度の話は出ますからね。大田さんの性格というのは、そういう人ですから。例えば橋本・大田会談があつても、その中で話し合ったことは私に言いませんからね。

伊藤 それはやはり彼のスタイルですか。

吉元 スタイルですね。相手が「二人だけの話だ」というから、そうしちゃう。政治的には、相手が漏らしても自分は漏らさない。ですから私たちは、大田さんから橋本・大田首脳会談の中身を聞くより先に、官邸サイドから、古川官房副長官とか梶山官房長官から、「この間、橋本・大田会談でこういうような話をしたようだよ」と言われて、「えっ俺は聞いてないよ。そんなのがあるの。ちよつと聞かせてくれ」とかいつて、それで帰ってきて知事に「次の仕事はこういうことらしいけれど」というと、「ああ、そういえばそういう話がこの間あつたな」というわけです。やりにくい人ではありますね。

佐道 仕事でこれからのことを決めていったり、動かしていく上では不都合なことも結構出たんじゃありませんか。

吉元 それは結局のところ、どういう枠組みで仕事をするか、ということを最初に話し合いますから。一つの課題が出ると徹底して話し合いますから。そして、それに対する仕事の持つていき方について、いくつかのシナリオを作ります。それで一番いいシナリオで動かしていきますから、その範囲というのは臨機応変に私の段階でやれます。つまり最初に議論した許容の範囲で。ですからいわゆるメッセンジャー的な仕事を私もしたことがないし、大

田さんもそのつもりだし。そういう意味で僕を位置付けたわけじゃないですから。

台湾の李登輝さんとの話は官邸に伝わりました。たぶんマスクミではなくて、台湾にあります外務省のなんとか協会に情報が入ったんでしょう。それが官邸に伝わったということで、その後上京したときに皮肉を言われました。「何か吉元さんは国際的にいろいろ活動されているそうですね」と皮肉を言われました。ああ、これは漏れたんだなと思って、「そうですね、そんな話が出ていますか、そんな話は聞かんでくださいよ」と言いながら黙っていたんです。ですから三つの話をしたことについては、まったく私の口からは言っていない。

伊藤 外務省なんかは、なんらかの形で情報を取っているでしょうね。

■中国・福建省との交流

佐道 台湾もそうですが、福建省とも交流を活発にしようということと連絡をしておられますよね。中国はどういう考え方でいるのかという情報は非常に重要になってくると思いますが、先生ご自身は中国ルートといえますか、そういうのはどうされているんですか。

吉元 もともと中国に対する情報というのは、県庁に入る前に三回ぐらい私は労働運動のときに行っています。しかも受け皿が中国労働組合、総評といわれているところですから、そこが受け皿として私とはいろいろな旅行をしながら詰めた話をざっくばらんにやったことがあります。この国の流れというのは、それほど大きなズレがない形で、私たちがときどき中国へ行くたびに肌で感じていました。

しかし、そうはいっても行政として福建省とのつながりを作るというのは、これは並大抵な仕事ではない。そこで、まずはとい

うことで、交流ありきではなく、まず沖縄の六百年の歴史をもう一度再現したいという行動計画、つまりプロジェクトを持ち込むんですよ。那覇を出発した船が中国福建省に着き、そこから北京まで歩いて、あるいは運河で船で渡つてという話ですから、これを何ヶ月かけて本当に歩いたところ、通った運河を検証していくんです。この仕事を申し入れて、福建省の担当セクションと共同でルートを確認していった。それが明らかになって、次にそれでは若者を送ろうということで、その受け皿を福建省が全面的に受けて、北京までやった。そして沖縄から交代交代ですが、相場の規模の若者を歩かせるんですよ。

なぜそれをやったかというのと、二つの目的があった。一つは、中国福建省との間でもう一度琉球と福建のつながりを、歴史の振り返りではなく、これから位置付けてみようじゃないかということ。もう一つは、沖縄の若者が二十一世紀の生き方として、東京ばかりに目を向けるのではなく、やはり中国や南の方に目を向けて欲しいということ。歴史の勉強で習った中国との関係だけではなく、みずから歩きながら肌で触れ合つて欲しいということで大々的に取り組みました。これは「中国千里踏査行」という名前ですが、そういうプロジェクトを作つて、やりました。これに相当関わってもらいました。そのときに福建省も、かつての記録を全部めぐりながら、「こういうことがあったのか」と。私たちも同じことをやった。行政同士が六百年の歴史、つながりを再確認した。じゃあこれからどうするか、という話に入ったわけです。

一番最初に出てきた話が、中国側からは、かつて六百年の歴史の中で、琉球館というのが向こうにあった。そういう場を提供してもらった。この場所を復元して欲しい。文化財として欲しい。琉球人の亡くなった墓もたくさんありますからね。それはすでにやられていました。そういうことがありましたし、那覇市が福州

市と姉妹都市として十数年前から交流を始めていたということもありました。そういうことを踏まえて、福建省の要求である「友好会館」の取り組みに入ろうじゃないか、ということが一つ。もう一つ私たちは中国から学びたいことがたくさんある。例えば中国から入ってきた織物とか工芸とか、いろいろなものが東南アジアからも入っていますが、それが戦争のときに一度途絶えていますからね。いまやつとここまで持つてきていますが、そういうつながりも続けたいし、学術文化の面でもやりたいし、それだけではなくて、若者にスポーツもさせたい。例えば沖縄が今日優れた面を持つてるとするならば、農業技術の面で貢献したい、養殖漁業の面で貢献したいという提案をする。

彼らも、最初は沖縄がそんなものを持つているとは思っていない。日本といえば全部東京を見ますからね。かつての琉球というのはあまりにも貧しいところでしたからね。だからあれだけ援助したわけですから。逆に、そういう交流の場を作ろうという提案をしますと、洪々ながら乗ってきたけれど、いまはむしろ向こうが積極的なんです。沖縄から学ぶものがあまりにも多すぎるということなんです。最終的には、サミットという表現をしています。[「沖縄・福建サミット」が六回目ですか。

伊藤 これは知事とですか。

吉元 これはトップ同士ではないんです。まさにそれぞれの分野のトップがやるという意味でサミットという名前ですと続けているんです。今年は沖縄でやりましたが、持ち回りで毎年やっています。そして去年の七月には待望の友好会館ができました。地下二階地上十二階の建物を福建省政府のまん前に作りまして、半分沖縄が出し、半分福建省政府が出して完成しました。そこに沖縄は事務所を持つているし、沖縄の経済界、企業が取引する事務所を持ちたいというときには、全部入れられるような場を作っています。そういうことで、本格的な軌道に乗り始めています。

伊藤 これはいまの知事にも継承されているんですか。

吉元 これは、実は今の知事も迂闊なところがありまして、知事に就任して今年の初め、華僑資本の沖縄への投資のために沖縄側が準備した有利な制度を説明する台湾での説明会に、知事が先頭になって乗り込んだんです。それについて、福建省と北京政府が正式に文書で沖縄に抗議をしてみました。本人はちょっと困っていたようですが、相談があったので、「僕が走ってもいいよ」と言ったんですが、「自分でなんとかやります」ということで、北京に行く仕事があったときに福建省まで回ったんです。おもては、中国みたいに大きなところですから「わかった」ということになったようですが、しかしナンバー2にしか会えなかったようですね。ですから、まだ完全に修復したとは言えない。

そういう意味では、大田さんの前の知事、西銘さんが台湾派でして、中国無視で台湾ばかりやっていたんですね。いまの東京都の石原さんと同じようにね(笑)。いまの知事は必ずしも台湾派ではないんですが、最初にそういうボタンの掛け違いをしてしまったので、ちょっと気にはなっています。本人はそれほど落ち込んでいないので、時間をかけてうまくやっていくでしょう。

■ 中国、北朝鮮訪問

佐道 (吉元先生が) 最初に北京、中国に行かれたのはいつ頃なんでしょう。

吉元 それは相当古いですよ。一九八〇年代の前半だったと思います。

伊藤 これは労働組合の関係ですか。北京ですか。

吉元 いや、一番最初に行ったのは、もっと前なんです。北朝鮮に入るときに、北京で二日か三日、時間があつた、そういうことがひとつあつた。もう一つは九州の各県の労働組合、県評といいますが、それと沖縄は一緒ですので、その事務局長が中国労働組

合との交流を申し込んで、これを実現させた。そのときに数名行きましたが、それが二回目です。

伊藤 そのときは吉元さんも行かれたんですか。

吉元 もちろん行きました。それは天安門事件の三年前ですよ。私が二週間ぐらいの旅を終えて、上海から帰る間際、上海で最後に案内してもらったり面倒をみてもらった労働組合の担当者がおりました。平たい議論になったんです。そのとき私が、「この国は三年持たんじゃないか」という発言をするんですね。国という意味ではなくて、この体制は三年持たんじゃないかという話ですね。それが非常に問題になりました。酒の場だったけれど、会議の場がしらけるといふ事態がありました。相当問題にしていたようですが、ちょうど三年後に天安門事件が起こりました。そのことを覚えていた九州の事務局長連中が、あれは単なる予感だったのか、という話をしていたけれど、あの頃北京の繁華街を歩くと、あるいは地方都市でもそうですが、私たちが身につけている特にジーパンなどを欲しがる。カメラなどを交換したいという。しかもこれは若者が中心ですね。つまり、中国の若者が国家の体制はそのままとしても、外に向いた目、外からの情報を取り入れる、そういうものにもすごく大きな関心をもっていた時期だったと思います。

ジーパン文化というのは戦後そうでしたように、やはり中国にも起こったんですね。いまはもう当たり前になっているけれどもね。そういうことを感じていたものですからね。中国との関係と

佐道 いま、チラッと気になることをおっしゃったんですが、だ

いぶ前に北朝鮮にもいらつしやつたわけですね。
吉元 先々週も行って来ました。前に行ったのは、文字通り総評の事務局長を長いことやっていた岩井章さんという方がおりますが、あの人が重要な節目で何回も行っていらっしゃいます。あの人が北

朝鮮に行くときに、秘書長をやらんかという話で、沖縄の労働組合のローカルセンターの事務局長である私が秘書長に指名されたんですね。何かあるなど感じたんですね。わざわざ私を指名する。そのときに行かれたのが学者のみなさんで、その中の一人が武者小路（公秀）さんでした。ですから、あまり突っ込んだ議論というのには、それほど向こうの人とはやっていないんです。ただあのときに北朝鮮を見たというのは、その後私が行政の中で東アジアの状況を分析するというんですか、オーバーな言い方をすると、情報をチェックするときには、ものすごくプラスになりましたね。過大な危機感を煽る情報が多過ぎる、ということが一つありましたね。あのときはちょうどソウル・オリンピックが決まった直後だったんですが、北朝鮮がそれに参加するかしないかということ、いろいろ議論があつて、私たちはむしろ積極的に参加すべきだという主張をしたのです。

伊藤 結局それに対抗するような形で、北朝鮮は何かをやったわけですよ。相当大量のお金を使つて。

吉元 壮大な無駄ですね。そういう意味では、まだあの国というのは僕たちにわからんところがありますね。今回も招待があつたので行ってきましたが、ただ単に個人的な交流ではなくて、本格的に、しかも多くの人々がそれぞれの分野から参加できるように仕組み、しかも継続的に交流できるような仕組みはとれないかということが、あの段階から一頭にあつた。今回呼ばれたときには、その話を率直にやつたんです。単なる旅行者を受け入れるところが招待したのではなくて、朝鮮社会科学者協会という国家的な位置付けをされた、しかもその実務の第一人者である副委員長で、この人はいまのトップにすぐに会って情報交換できる人らしいんですが、この人が直接対応してくれて、きめ細かい議論を一回やつたんです。

中国との関係というのは、相当長いことかけて行政レベルでや

つてきました。そしていまいろいろ民間のレベルでやっています。台湾との関係は昔からやっていますから。あと一つ、特に韓国との関係を先にということで、これは大田知事が積極的に働きかけて、済州島、沖縄、海南島、バリ島の四島嶼観光国際会議を打ち上げた。沖縄側の大田の提案でした。これは持ち回りでやっています。今度で三回目ですかね。そういう意味では大田さんはソウルにも入つたし、それをきっかけにソウルにも沖縄事務所——名前は沖縄観光コンベンション・ビューローの事務所としてありますが——を置きました。今度は最後に残った北朝鮮にどのような形で幅広くなる場を作っていくか。これはすべて沖縄の二十一世紀の、戦争のない、基地のない平和な沖縄の場を作るという県民運動、あるいは行政が戦争をしないという方向に持つていくための県民の流れだと私たちは位置付けていますが、決して大きな意味を持たないけれど、しかし一つひとつ、小さい人々のつながりでここまで成功させてきた経緯があります。今回北朝鮮に呼ばれたことは、その方向を了解していただいたと私は受け止めたので、そういう意味では本格的にそういう場を呼びかけてみようかなと思つています。

伊藤 北朝鮮の側は、交流といつても、向こうは若者を日本に派遣するというような状況ではないですね。

吉元 ないですね。まだそこまでは、とても行っていないですね。ですから、来年やつたとしても片道になると思いますね。沖縄から行かせるだけです。ただ、日本から来た人が案内される場所というのは決まっています。それだけではなくて、今度はそれぞれの分野で分けて、市町村なら市町村行政、あるいは教員なら教員、あるいは産業界なら産業界というように分野を分けて、そういうつながりが本当にできるのかどうか。何が協力できるかというよりは、むしろ知り合うというように、村山訪朝団その後のことも頭に置きながら、ということですね。

伊藤 今度行かれたのは、村山訪朝団のことと関係があるわけではないんですね。

吉元 ないです。それは向こうから聞かれましたが、私は社民党の党員ではあるけれど、参議院選挙に出ただけで、今回はその問題を持つてきたんじゃないかと。ただ、少し話題になりました。

佐道 台湾に行かれるときには稲嶺現知事がご一緒されていますね。前から稲嶺さんと個人的にも知り合いでいらつしやつたわけですか。

吉元 そうですね、個人的にというふれ合いの場というのはい起こせないんですが、それとなく双方が意識していたんでしょね。それから私が特に大田さんを担いだ最初の選挙のときに、稲嶺さんのところに飛び込んだ。あの企業グループは、かつて、いうならば保守系の選挙にいつも参加する企業グループですね。そこをさらった。そのときの印象があつたんでしょね。私が大田を当選させて政策調整監に入ったとき、その頃から経営協の会長というポストを彼がやるようになって、それから否応なしに経済団体との最初の話をしなくてはいけないということがありますので、経済団体が電話一本ですぐ集まってもらえる体制作りまでは稲嶺さんには事前に努力してもらつたということがありました。

経済界全体も、西銘さんを担いで負けたわけですから、当選した大田体制に不安を感じているわけですね。しかも、西銘さん時代にあまりにも露骨な公共事業入札関係で選別をした。その煽りが逆に出てきて、西銘さん時代にうまみを取った奴が今度はパージされるんじゃないかという不安があつたやに聞きますね。ですから私たちは、むしろそういう入札制度のやり方を変えましょうということ、県庁の中で大胆に取り組む。これは建設省が例の問題でいろいろな問題を起す前に、私たち沖繩が先にルールを変えようということをやっていたんですね。そういうときに経

済界の声を県の行政に届けてくれるのは稲嶺さんだったということが言えるでしょうね。

■ 普天間移設

佐道 稲嶺さんのことは後でも出てきますので、そのときにお聞きしたいんですが、流れでいうと、演習の後、代理署名を巡る裁判の問題が起きてきますが、その後いわゆる日米政府の交渉で北部の訓練所等々十ヶ所の整理・縮小。その後、いよいよ普天間の全面返還合意というのが出てまいりますね。その普天間が帰ってくるということを決めたという連絡が来たあたりのことについてお聞きしたいと思います。

吉元 九六年四月の話ですね。知事の方に総理から電話が入つた。最初の電話のときは、私は副知事室にいたのでそこにはいなかったんですが、すぐに呼ばれて知事から言われました。普天間返還と。しかし、代わりのものを検討しないといかんと言われた、と。私は最初に三役が呼ばれたときに言ったんですが、まず乗れ、代わりのものが何かということにこだわるな。まずは返還という日米間の合意を先にとれ、それから出発しろ、と言いました。大田さんはそのとき相当引つかかっていたようです。それは、彼自身がアメリカの軍事戦略なり、ナイ・イニシアチブ後の日米の議論なり、ガイドライン問題なり、そういう一連の問題がどうなるかというのは、私たちが行政の中で相当厳しく、毎日毎日情報を集めていた時期でしたからね。そういう意味では非常に危ないなということも頭に置きながら、大田さんはやはり懸念していました。

二回目の電話が入つたときに、それも一つの方法だなという感じがしたんでしょうね。しかし、後の問題について、そのとき総理もはっきり言っていないんですよ。後はどうするかという話はね。県内という表現をしたかもしれないませんが、少なくとも代わり

のものをとすることは総理の口からはつきり出ていましたね。伊藤 代わりのものといつても、言っている相手が大田さんですから、当然それは県内ということでしょうね。

吉元 そういう理解を当然しますね。それがまず出発です。だからSACOの十一事案が出る前に、まず最初に、先ほどいいました村山さんのときの三事案、読谷補助飛行場、那覇軍港、一〇四号線、これも一緒に含まれた十一ですからね。それがあつたし、その中でこの普天間の問題というのは、大田さんが橋本・大田会谈の中で強く言ったことなんです。これは基地返還アクションプログラム第一期に入っている。二〇〇一年までに返還を求めるところの中に入っている部分です。一番危険なところですから、これを強調した。これを橋本さんがなるほどと思って動いた。ですから、そういう形で日米首脳がOKということであれば、まずそれを固めるべきだというのが私の意見です。

その後、この問題は絶えず尾を引いていくんですよ。議会でも、どの時期に海上基地と言われたのかというような問題が出たりするんですが、これはずっと後の話で、最終的には総理自身が沖縄に来て、県民の前で正式にしゃべったわけです。そのときが初めてです。

橋本さんという人の性格、仕事の仕方というのは、私たちはやつとその頃からわかってくるんですよ。事前に相談するということがまったくない人なんです。これは、沖縄との関係だけではなくて、橋本政権の期間中そういうことだったようですね。ですから、いきなりポンと出てくる。それについて、やるかやらんかという話になるんですね。それがあの人の政治手法かも知れないが、沖縄にとつてみれば少しびびりしたけれど、結果として何だこれは、沖縄県内でたらい回しじゃないか、という批判につながっていくことになるんですね。

私が先ほど、まずそれを受けるべきだといった理由の一つは、

どっちみち沖縄の基地問題というのは右から左にポンポンと決まるような時期、状況ではないと。それはもう少し後に来るという認識を持っていた。しかし、あの少女暴行事件以来の問題で、ここで沖縄県民が一定程度わかった、ということを作らないと、基地全体の問題に波及するということで、日本政府以上にアメリカ政府が動いたわけですからね。そういう意味では、アメリカ政府としてはギリギリのところでしょう。沖縄が出した基地返還アクションプログラムの一期、二期、三期の全部を検討しているんですね。だからSACOの中には、三期に入っているものも出てきているんです。そういう意味では、そうとう深刻に真剣に、戦後自由に使っていた基地の問題に初めてメスを入れたと言えるでしょうね。その中で、考えてもいなかった普天間問題が出てきたわけですから。私たちがそれにノーと言うわけにはいけません。

伊藤 やはりびびりするという方ですか。
吉元 その通りですね。何か動くだろうというのは、ああいう政治家のみなさんが動くときに予想がつくんですよ。つくんですが、やはり村山さんが動かした那覇軍港の返還とか、あるいは読谷補助飛行所の全面返還とか、一番問題だった実弾砲撃演習、これが動く。これ以外に何があるかと考えると、やはり知事が強調していた普天間はひよつとしたらというのは、私たちが出したリストの中でも、これが動けばいいなというのはありますよ。しかし本当にそのことが出てきたというのは、本当にびびりましたね。

佐道 これはいままでの大きな流れが少し変わったな、という感じでしたか。

吉元 いや、そこまでは判断できなかったですね。代わりのものをという話が同時に出ていますので、これは大変だと思いましたがね。ですから沖縄側が、ならばということに積極的に私が動いたのが、嘉手納基地に普天間飛行場を入れることですよ。

佐道 嘉手納というのは先生のアイデアですか。

吉元 これは、実はその前にアメリカサイドから聞いているんです。いまの普天間飛行場は老朽化して、滑走路もこう（手振り）ですよ。ですから、いつまでもそこで使っておれないよ。同時に住宅地の中にあるというのは、いくら理由をつけようが、アメリカ国民自身が認められるはずがないということを思っています。冷戦という問題があつて否応なしに固定化されていたけれど、これ（冷戦）がなくなつてしまつたと整理縮小というのは当然出てくる。そのときの一番最初にこれが課題になると私たちは見ていたんです。

ですが、それをどこに移すのかという問題になりますと、それは大変ですよ。アメリカは勝手なことを言いますから。まだ自分が占領して、血で贖つて勝ち取つた島だと思つてますからね。まさに海兵隊というのは、そういう軍隊です。海兵隊が一番被害が大きいわけですから。ですからそういう気持ちになるんでしょうね。ですから嘉手納にぶち込もうという話は、前の年から、この問題とは関係なくアメリカサイドで議論があつたことは聞いていました。

だからどうせ移るなら、既存の基地の中に押し込める。十一の問題が出たときに、全部既存の基地の中に押し込めるのであれば、ある意味では納得する。ということは地域がOKすれば、という前提ですよ。その証拠に、読谷飛行場の落下傘降下演習は伊江島に移つた。これは伊江島村がOKした。象のオリの（楚辺）通信基地は金武町の山の上です。これも基地の中、キャンプ・ハンセンの中ですよ。これも金武町が基本的にはやむを得ないというふうに収まつた。その代わりという基地の整理縮小を他の地域が求めた。そういう意味で、既存の基地の中に押し込めるのであれば、ある種、地域は嫌でも早く空けさせてそれを県民が使おうじゃないかという話になりますね。

例えばいま桑江にある海軍病院、非常に機能のいい米軍病院がある。これを移す場所も、同じ基地の中でしたが、宜野湾の近くです。それは宜野湾市民が反対したから、私は逆にそれを現在ある自治体の長と話し合つた。あなたの行政区の中で米軍基地の中に移させなさいと。ここは重要だから空けさせなさいと。こういう理屈を持つていいんじゃないかということで、これはその方向になりました。そういう意味では、十一のうち、正確に数えたことはいけれど、少なくとも七つか八つは片付いているんじゃないですか。

佐道 嘉手納はそういう意味で駄目になつてしまつてわけですが、この一番大きな理由は何ですか。空軍と海兵の問題だとか、いろいろありますが。

吉元 そういう言い方がありますが、正確な理由はどうとう今もつて私もわかりません。逆にうがつた見方をすれば、日本のゼネコンが動いたということなんでしょうね。自分たちのプラスになるような形で。ゼネコンというより鉄鋼業界といった方がいいでしょうね。実は嘉手納統合案が議論される前にアメリカ側が出してきたのは、同じ嘉手納の提供軍用地の中ですが、弾薬庫の外れです。これは読谷村の近くです。これは北部のリゾート地の恩納村の隣なんです。それを出してきたんです。そこは自然環境の問題、世界的に貴重な動植物の問題などいろいろ問題があります。それ以上にやはりアメリカの感覚はおかしいなと思うのは、すぐ下にダムがあるんです。すぐそばに沖縄本島のリゾート地があつて大型ホテルがたくさんあるんです。そこに基地を作つて、どういう形で飛行コースを作るんですか。それが決まれば、あのリゾート地は全部駄目になります。こういう感覚がある。ですから、それに対しては大田さんも、ちょうど訪米したときに、真つ先に反対した。私もわざわざそのために東京に行つて反対する。まずはつぶした。そしてその後には検討されたのは嘉手納基地の中

なんです。これがいつの間にかおかしくなっちゃって、いつの間にか今度は東海岸でと。エッと思ったときには、もうその頃からは浮体式、浮くやつですね。これは、日本の鉄鋼業界が喉から手が出るような、関西空港を作ったときからの夢ですからね。

その前の案は、中城湾港の沖合いという案も示された。ここにはフリーゾーンを中心とした港湾作りを進めている。その沖合いにこういう基地を作るんですかと。私はこれは問題だと言ったら、そのひとことつぶれたと言っているんです。しかしそれも一つ本当の案じゃなかった。最終的にはやはり名護市の東海岸、キャンプ・シユワブ沖という海上案が出てきたんですね。

海上案については、沖縄ではもつと前から論議があるんです。いまの那覇空港、滑走路の沖合いを埋め立てる計画を、私たちは復帰前から持っているわけです。並行滑走路、二本の滑走路をつくろうと。それに対して日本の鉄鋼業界が提案してきたのは、ぜんぶ関西空港で構想した浮いたやつ、浮体構造の滑走路を提案してきた。そのときに那覇軍港を移す。そして自衛隊基地も移す。牧港兵站基地（キャンプ・キンザ）も移す。そして普天間も移すという絵を描いてきた企業グループがあるんです。その後、今度はアメリカの方から情報が入って、この設計図を描いたのはMIT（マサチューセッツ工科大学）のグループだといわれたが、推進力を持って、通常はそのまま繋留しておく、いざというときに動かす、というような海上基地案ですね。これは非公式に私が政府サイドに打診をしたところ、日本の国として持っている武器の輸出禁止につながる。これは明らかに推進力を持つと軍艦になっちゃいますから、話題にならなかつた。その後と同じように、これどこから出たか知らないが、アメリカ側からの案ですが、金武町の沖合いに杭を打つという提案をした。これはしかしこの計画とはまったく関係がなかつた。

伊藤 関係なしですか。

吉元 関係なしに、前に出ていた。当時の金武町の町長が私のところに絵を持ってきて、進めたいと思いますと。どういうメリットがあるかというところ、水面は全部地元の養殖業に使わせるという話ですからメリットがあります、といったんですが、結果としてこの話もつぶれるんです。

伊藤 もう全然生きてないんですか。

吉元 生きていないです。ですから、そういう問題が一つ出て、また一つ出て、つぶれていくんですね。そういう形で出ていた。つまりSACOの前にこの種の議論がありますからね。結果として、この情報は日本の鉄鋼業界がグループを作って動いているとすれば、通産省はわからんことはないでしょう。運輸省がわからないことはないでしょう。橋本さんは通産族のボスと言われているわけですから、交渉のやり取りから、そこがつながったんじゃないかというのがマスコミの言い分でした。しかし、橋本さんとの話の中では、そういう匂いは、まったく感じなかつた。

佐道 本土の企業グループという話ですが、地元の企業の方は。

吉元 それに対して反対したわけですね。それは俺たちの利益につながらないと。

伊藤 このメリットは何になりますか。

吉元 要するに浮体構造の空港というのは、鉄で作るわけですから。沖縄に鉄鋼業者もいないし、製鉄所もないわけですから。沖縄の業者が必要とするのは埋め立てですよ。自分たちが直接関われるのは。

伊藤 この建設業界としては、埋め立てを期待しているわけですか。

吉元 今日の時点で言うなら、沖縄の業界も割れていますね。そういう鉄鋼業界とつながりを持ち始めた建設グループと、いやいや地元で直接自分たちの力でやった方が利益が多いというグループですね。極端に言えば二つのグループになっている。だからい

まの予定地と言われているところも、集落の中でも分かれちゃった。賛成派で分かれちゃった。

伊藤 賛成派で分かれたんですか。

佐道 賛成派の中で、海上基地派か埋立派かということで分かれるということですね。

吉元 そういことです。

伊藤 市長はどちらかに加担しているわけですか。

吉元 それはまだわからないですね。しかし彼の体質からすると埋め立てでしょうね。それは将来に残す。軍民共用の民間として残すということをや頭に置きながら、場合によっては腹を切つてもそれを実現していこうという考えに立つでしょうね。ちよつと言い過ぎかもしれないけれど。

伊藤 いま辺野古ということになっていますが、辺野古自体が候補地として、これほど浮かび上がるというのは何故でしょう。

吉元 地形的にアメリカにとって一番都合のいいところですね。一つは、あの突き出たところにほぼ南北に作つて、南の方も北の方も、特にヘリ基地ですからまっすぐ直線で飛ぶわけじゃないですから、コースを曲げれば、という考えが一つあります。もう一つは、より積極的に言うならば、すでにある基地、キャンプ・シユワブという海兵隊の基地、その地先を使うというんです。そういう意味では一番望ましい方法でしょうね。

佐道 辺野古というアイデアは、主体はアメリカですか。

吉元 そう見ます。海上基地以外の埋立案が出てきたというのは、まさにアメリカにとって一番管理運営しやすい仕組み、場、囲い込みやすい、ということでしょう。

伊藤 埋め立ての先に作るヘリポートは海上のわけですね。

吉元 そうです。そこが埋め立てになるのです。

伊藤 これも埋め立てなんですか。

吉元 そうです。いまある岬に作っちゃうんです。ですからこの

部分は全部埋め立てになるわけですね。

伊藤 杭を打つて、というのではないんですか。

吉元 それは浅いですからね。まさに地先ですから。沖に行くとき少し十メートル前後の深さになっていきます。三キロとなると、三十メートルか四十メートルになるでしょう。

伊藤 それだけの土砂を業者たちはどこから持つてくるつもりで、そういう計画をしたんでしょうね。

吉元 それは疑問の一つですね。山を一つ崩さんと、海からだけでは駄目ですからね。そこはまた重要視されているジユゴンの生息地なんです。ですからそれも問題になってくる。

佐道 沖合い三キロ、二千五百メートル級の滑走路ですか。

吉元 二千メートルで止まると思いますがね。アメリカ自体も海上基地、ヘリポートの設計図を描いてきたときに千二百ですからね。前後入れて千五百でしたからね。ですからそれでは民間が使うとすると、ジェット機は飛ばせんよ。それで二千というのが県庁の中で若手がいつている線です。ですから二千以上になると、それはまた日本政府としても無駄遣いになるでしょうね。ましてや二千五百の空港というのは現在、那覇空港があるわけですからね。もつとも、本当はそういう空港を作つていいかどうかという問題がありますけれどね。

伊藤 先生のお考えではハブ空港は那覇の先に作る。

吉元 そうですね。それしかない。それと港湾とワンセットにして、空と海が一体化する機能を持たせる。これが私たちが構想している内容ですからね。

伊藤 それはやはり埋め立てを考えているわけですか。

吉元 それはもちろんそうです。それは、あつちは比較的浅いんです。土砂もそれほど要らないですね。周辺からとればいい。それも二十年か前から調査済みで、地質調査も海底の土砂その他の調査も全部済んでいますので、それほど難しい作業じゃない

んです。

佐道 那覇空港自体の機能を拡張しないと、もうアップアップと
いうところへ来ているわけですね。

吉元 来ていますね。

伊藤 あの発着を見ていると、すごいですね。

吉元 それともう一つは、自衛隊が一緒にいるということです。
その部分をカウントされていませんから。それは危険性の問題も
あるけれど、もう一つはやはりそこは分離すべきだというのが基
本ですね。私なんかは、自衛隊は嘉手納に入れ、と言っているん
です。それは、しかしアメリカがノーと言いますね。

伊藤 そうでしょうね。

■政府の安全保障政策と国際情勢の見方

佐道 普天間返還合意という非常に象徴的な出来事があります
が、その一方で日米安保共同宣言が出されますよね。それと例の
楚辺通信所の法的な問題で国が占拠しているという状況になっ
て、知花（昌一）さんが入っている場所があります。特別立法
をやらなければならないという発言が政府の方から出てくるとい
うのは、まさに同じ時期ですね。

吉元 その特別立法というのは、米軍用地の強制収用にかかわる
ものです。機関委任事務で取り扱っているのかどうかというの
が、米軍基地提供用地に対する、個人の土地に対するものですね。
本土の場合は、個人の土地というのはほとんどないんですよ。ご
く一部です。ほとんどが国有地もしくは公有地ですね。ですから
土地の借地のためというのは、そんなに苦労なかった。ごく一
部といたしましたが、例えば横田基地辺りに個人の土地が若干あり
ますが、しかしほとんど問題にならないぐらいです。

沖繩の場合は、ほとんどが個人の土地だということです。しか
も戦後、有無を言わず強制的にアメリカが強奪してつくってし

まったことからくる問題がありますね。ですからそういう問題が
背景にあることがまず一つ。だから本土とは違う、米軍の土地に
ついての市町村、行政の対応というのは当たり前話です。それ
をいままでは本土と同じ土地収用法の中で処理していた。ところ
が、それができなくなる態勢が出てきた。大田さんの選挙のとき
の公約ですから。加えて、大田県政が言っているのは、もうそろ
そろ変えたらどうですか。もうそんな時代じゃないでしょう。九
〇年の冷戦崩壊後ですから、これからは、むしろ米軍基地は撤退
してもらおうというのが筋じゃないですか、ということ言うんだ
が、日本という国から見ると、まだすべてが安保条約、安保
体制がなければ、在日米軍基地がなければ、自分の国が危ないと
本当に思っているかもしれない。特に政治家は。ここに沖繩との
ものすごいギャップがあるね。

それはギャップどころじゃない。本質的な捉え方、つまり国際
情勢をどう捉えるのか。それから国と国との外交とは何なのか。
戦争になるといえるのは、何から戦争につながるのかという部分に
ついての認識が、与野党問わず、参議院、衆議院含めての多くの
政治家のみなさんと話し合った。やっぱり欠落しているね。沖繩
の問題を論議する場合には、戦後五十年、あるいはこれからの二
十一世紀の日本にとって、安全保障というのは何なのかというこ
とを一つ考えなきゃいかん。まず、主権国家としてのありかた。
事件が起こっても逮捕できない、こういうやり方がまだ特別措置
として地位協定の中に残っているというのも問題。変えるべきこ
とを変えないで、そのままきた。そのツケが全部出てくるのが沖
繩問題です。

そういう意味でいうと、そろそろそれに気付いて、逆手をとっ
た形で、米軍用地特措法を国が直接やるような形に法律を変える。
つまり地方分権の議論の中で、行政改革の中で、しかも機関委任
事務を整理し直して地方公共団体に与える。そして本来の持つべ

きものは、ということ整理し直した形で、安保に関わる、防衛に関わる部分として機関委任事務の中に入っていたこの部分を、国が直接やるように法律を改正したという形なんでしょうね。でも、これは法律を改正して許認可する代理署名をする人が、総理大臣になったり、関係省庁の大臣になったというだけで、本質は変わらないです。個人の土地との関係はね。ですからこのところは、そういう小手先でやるのではなく、やはり米軍基地をアメリカとの話し合いで一つずつ計画的に撤退させていく。それを見えるようにしていく。そこから始めなければ安保条約を続けるといつても、県民の不安が高まって、不満が解消されなければ、あの意味では安全保障は続かないです。

沖繩問題は、保守革新という形で、選挙によってガラツと変わるけれど、変わっても長続きしない。十年単位でまた変わっていく。それは何かというと、目の前の生活やその他に追われるけれど、結果としてはもう一回元に戻って、沖繩は本当にこれでいいのか、安全か、というような問題に帰着していくんです。

ですから、日本政府側が、もしこれからの日本の安全保障のあり方を考えるとすれば、私たちは日米安保条約をいまなくせとは言ってはいないんです。米軍基地もいま全部なくせとは言ってはいないんです。少なくとも東アジアの平和な状況を外交を通じて確立しながら、外国の軍隊である米軍に一つずつ撤退してもらおうじゃないか。沖繩にある過重な負担だけは、まず最初に片付けてくれと。これが出発ですからね。日米安保の本質を論議して、いまず米軍基地全部撤去せよという議論を沖繩県がやったわけではないですからね。東京の政治の場からは、そういうふうに見えちゃうんですね。そこに欠落した欠陥があるんですね。本当の意味で安全保障について一人ひとりが政治の場で考え切れないということが出たような気がしますね。

例えばの話ですが、共同声明の後、何ができたですか。新ガイ

ドラインができたんです。新ガイドラインができるということは、米軍がもつと撤退してもいいんです。前線基地にいらなくてもいいんです。米軍の作戦行動、武力行使について、自衛隊が後方支援するんだからね。しかも周辺事態法という形で、日本全体がそれに対応する態勢を作るわけだから、なぜ米軍基地がこれから固定化されなきゃならないんですか。アメリカ側はすでにハワイ、グアムに在日米軍基地をずっとシフトバックしたときに、どういう形でいくのか、作戦がとれるのか、これはすでにシミュレーションされたと言われているんです。僕はそれを聞いています。

もしアメリカが中国に対して米中間の問題があると、少なくとも日本のためにはやりませんよ。アメリカと中国が向かい合うだけですから、そういう意味では、日本全体が新しい安全保障の在り方に、しかも日本自らが主体的に関われるような思考を持つべきだと思う。これは少女暴行事件以来、国会の外務委員会その他の方が、参議院、衆議院と沖繩に集団で来られて、沖繩の知事以下私たちと議論するときに、いつも感じたことですね。

佐道 いまずぐ全部撤去ということは見ていないと言われましたが、いわゆるアクションプログラムでは二〇一五年にはゼロにということですね。それは、そういう目標として出さないと動かないだろうから、ということですか。

吉元 むしろ、その時期になれば不要になるという発想を持っています。

伊藤 そういう見通しについては今でも変わらないですか。

吉元 それでもなおかつアメリカが残したいというのであれば、嘉手納基地しか残らないであろうと。それ以外に何の支障があるか、という感じがしますね。

余談になりますが、ハワイの州知事、ハワイ議会と州議会の有力者と大田知事が話し合いました。ハワイに海兵隊を引き取りましょうと、ハワイ州知事からも文書が来しました。それからグアム

島選出の下院議員とも話し合いました。グアムは最終的には三千五百までだったら海兵隊を引き取ってもいいですよ。基地が空いているんです。そういうことを一方でやりながら、なぜそれを日本政府は要求できないんですか、アメリカはそれを考えないんですか、と主張しているんです。撤退するところがないという話ではないんです。あるんです。しかし、それは結局は移転費用、新しい施設を作らないといかん、アメリカとしては国家財政が大変だ、というのがあるんでしょうね。日本に置いておくと、思いやり予算で経費の七割から七五%まで負担しているわけですから。そこに本当の問題があるのであって、本心に居心地がいい日本を出て行かない理由であって、目の前の中国が将来どうにもならんからずつといる、という話じゃないですよ。

伊藤 おっしゃった国際情勢の、これから十五、六年の見通しですが、沖縄ではかなりの人がそういう判断を持っているんでしょうか。

吉元 そう見た方がいいでしょうね。私たちは二〇〇〇年で朝鮮半島問題は軌道に乗っていくと見ています。これは私たちは五年前から政府に対して同じことをいっています。根拠があるかという問題じゃない。それはこういう理解です。一つは、中国の出方の問題です。中国は香港の返還が済みましたね。今年の十二月二十日のマカオの返還が済みますと、陸続きは主権回復です。これは二〇〇〇年までに済むわけです。二〇〇〇年までに北朝鮮の問題は、国際的には米朝を含めて軌道に乗せておかないと、中国は次のステップの手が打てません。それは何かというと台湾問題です。だから台湾問題は二〇〇〇年までは中国としては確固たる、いついつどうする、という方針を出しません。これはすでに三年前に中国の江沢民さんが発言したという情報が香港サイドから出ましたからね。二〇〇五年で決めますという方針、方向でしょうね。二〇一〇年で終わります、という表現ですね。

私はこれは案外説得力のある台湾問題に対する中国のスタンスだと見ています。これは誰よりも台湾がそのことを一番知っていると思います。もちろん二〇〇五年か二〇一〇年かという論議ではなくて、そう長くはない。そうすると残るのはあと何かというと、台湾のあり方の問題でしょう。香港は一国二制度。マカオも同じ。中国がいつているのは、台湾はそれに外交防衛も足しましよという話でしょう。香港の一国二制度とは違った形で防衛について——。ですから、そういう議論が米中間で話し合われていくという事実をやはり日本もきちんと捉えるべきだと思います。

そうしてくると、例えば二〇一五年に沖縄にある米軍基地がゼロにならなかつたとしても、少なくとも最も重要な嘉手納基地だけは残つたとしても、あとは残す必要は何もない。ホワイトビーチと嘉手納飛行場と弾薬庫だけ残れば、あとは通信機能がありませんね。そういう理解を、アメリカの東アジア戦略の中から僕らは積極的にとるべきだと思います。発言すべきだと思います。

そのように見ていきますと、日本だつて同じだと思います。関東でも、横須賀でも少し始まりましたね。やはりアメリカ自身も国民の反応を機敏に見ていますよ。それと対決してまで基地を持続する意味はないですよ。そういう意味で、二年前から大田知事も私も官邸に走つたのは、沖縄サミットを入れて欲しいと。私たちはそれにオブザーバーとして江沢民さんと呼んで欲しいと言っているんですよ。それはあの頃から私たちは言っているんです。つまり、東アジアの軍事的緊張をなくしていく、そういうきっかけの重要な一つとしてサミットを沖縄で、という声を私たちが積極的に出したのはそういう意味です。

しかし県政も変わって、国政も変わっているから、そういう形ではなくて、何かしら基地問題の引き換えみたいな形に県民が受け取り始めた。表に出てくるのは普天間基地を合意させようとい

う一方的な強さですから、県民の中では間違つたサインを受け取つてしまった。ですから下手をすると、サミットそのものに対する県民の意見が二分して、何かしら基地問題がサミット問題で押し込まれる、という受け取り方が始めているんですね。これは大変不幸なことです。

■ 県民投票

佐道 県民の話が出ましたが、ちょうど県民投票の問題がありますね。条例にする。それはまたお聞きしている同じ時期のことなんです。こういう動きがある。これは、中心になつたのは連合、労働組合ですね。先生は行政の方にいらつしやるわけですが、そういう動きがあるということ自体についてはどう思われましたか。

吉元 それは十分すぎるほど知っていました。私が労働組合出身だということもあつて、いくつかのマスコミから私の案だろうと言われた経緯がありますが、私は労働組合出身であるだけに、労働組合とは日常的にはその種の話はしていないんです。これはやはりそれぞれの持つ機能が違いますから。しかし、連合沖繩の方でその話が出て、運動が始まつていく。それが署名運動として出てきた。それをどう県が受け止めるか。それは否定する理由は何もない。要件を満たしていれば、それは積極的にやるべきだと思つた。何故その県民投票が出てきたかという、その前の年の例の少女暴行事件、県民大会の延長線上ですね。あの県民投票も、県民大会の決議の内容なんです。地位協定の見直しと基地の整理縮小。ここでいま一度県民の認識を合わせておこうと。具体的な中身については、それは行政に任せようという話なんです。

そこで進んだ県民投票。県議会で最終的には保守側の議員の賛成が得られなかつたけれど、多数決で通つた。あとは投票日の設定、投票に向けての県の仕事、市町村の仕事。条例ができたなら、

これはやらざるを得ないですから、積極的に対応していったわけです。その結果が、投票率が六〇%ちょっと切つたか、その内訳は、九〇%近くが整理縮小に賛成、地位協定を見直し、となつた。その中で特徴的なのは、県議会でもノーといった保守側の政党が中心になつて、県民投票のボイコット運動が始まつたんですね。ですから六〇%の投票率というものに対して、私たちは少ないなと思つた。せめて七〇〜七五%は行つて欲しいなという気持ちはあつたけれど、県民を二分する一つの保守派である自民党が、キャンペーンを張つていくと、それはやはり影響受けますよ。それでも六〇%は投票率があつたというのは、全国的な流れで、首長選挙から見ると異例のことかもしれません。

この県民投票は、実はその後につつ問題を作るんですよ。一年の名護市の投票ですね。いくら署名が法定要件を満たしたからといって、市長は保守派ですからね。市議会も多数与党です。にもかかわらず、あれは全会一致で投票条例ができたんです。そして、それがなぜ全会一致か。県議会では自民党は反対したんです。なんで名護市議会では積極的に賛成して投票運動に入つたのか。これは自民党のご都合主義、官邸サイド、自民党サイドのやり方の判断ミスだと見ています。あれは官房長官をやつていました野中さんが幹事長代理のときですか、沖繩に入つて寝泊りして陣頭指揮をとつたんです。国会議員がものすごく入り込んだ。それもいいでしょう。公職選挙法適用じゃないんだから、自由にできます。市民投票の結果はノーが出たんです。何故それを民意として従わなかつたのか。それを強引に、当時の市長をイエスと言わせて辞任に追い込み、そして今日こういう事態にまで引つ張つたか。ここが私は日本政府というか日本の体質だと思つて、もしアメリカの地方でこういうことが起こつたら、ホワイトハウスも諦めるでしょうね。無理強いしないでしよう。つまり民意というものに対する捉え方が違う。法律的に効力がないから潰していい

という話ではないはずなんです。自分たちが入ってきて、そこまでやっておいて。あそこにボタンの掛け違いが出た。そのときに、いや、いろいろやってみたけれど、全力入れて政府もバックアップしてみたけれど、負けました、ここは無理です、という結論をどうして政府が出さなかつたのか。このところのやり方は、僕が冒頭に言った橋本さんのこの種の問題に対する関わり方の基本的な立場の弱さではないか。極端に言えば、何が何でもアメリカの言いなり。自分の決めたことのメンツを、ということにこだわります。しかしその流れが、結果として去年の知事選挙で大田を潰したわけですから、それは成功したかもしれないけれど、今回はその通りいくのかどうか、これは予測がつきませんね。アメリカ政府に対して日本政府が、沖縄県民の意思が表明されたあの時点、つまり名護市の投票のあの時点でものを言わなかつたというのは大変大きな失敗ですね。

■ 普大間移設に対する県政の考え方

佐道 最初に普天間の合意があつたときに、その代わりのところを、という言い方をされて、大田さんもいろいろ逡巡された挙句、受けるという。

吉元 いや大田さんは、代わりの問題についてはイエスと言つたことは一回もないです。これは橋本総理との会談でもそうだと、という。沖縄県庁の中でもそうです。大田さんが県内移設を認めたという事実は一つもないんです。しかし、地域が合意すれば県はノーと言えないよということ、ここだけは私との確認、県庁との確認、三役会議の確認がありました。

それはどうということかという、十一のSACOの内容は、一つひとついろいろな問題がからんでいるんです。とりわけ、移されていく地域にとってみれば、県がイエスと言つてもノーと言つてもいいかもしれません。結局は受ける被害、この基地問題というのは地

域住民ですよ。しかもそれは法律で自分が確立されている地方公共団体です。市町村ですよ。そこは独自で投票して、首長や議会を選ぶんです。そこでどう決めるかということ抜きに、県や国がこういうふうにとり話にはならないんです。このことがその後、橋本さんが「頭越しには決めない」という言葉を使つていったことにつながつた。私たち県は、国と当該市町村との話をやつてくください。ここで決まるならそれでいいですと。決まらなければ、県もそれを取り上げて、県の立場から検討しますよ、と言つてきているんです。ですから、最初に県内移設ということが出されて、きても、最終的に判断するのは、県が当該市町村の結果を見て、というスタンスは変えるわけにはいかない。

これが今度の知事で変わったんです。最初に県が特定の場所を決めましょうと。そして地元がどう判断するか見ましょう、それによつて国が決めましょう、というパターンでしょう。これはまったく変わりましたね。結果として、当該市町村がイエスカノーか言えば、結果として同じじゃないかと言われるかも知れないが、作業手順としてこれはあるべき姿ではないです。しかし、今の知事は、それを選挙政策として戦つたわけですから、これはこれで、県民の判断が出たんだから、これ以上批判する必要はないけれど、行政のやり方としては、やはり市町村という行政がある以上、県が先に場所を決めるということとは問題だと思つて。ここはいま県政の中でも曖昧になっています。決めるのか。場所を内定するのか。推薦するのか。この場所にしたらどうですかと選定するのか。これは全部明らかになつていないので、これ以上言えませんがね。

佐道 国が当該市町村との話し合いをして、それが認められればということですが、国の考え方としては、何とか県内移設でまともなことが伝わってまいりますね。吉元先生ご自身は、最初に嘉手納というのがあつて、それで駄目になつてしまつて

ですが、落としどころとしては。

吉元 私は既存の基地内だったら、いろいろな議論を地域とやろうというつもりでした。それは先ほどいった嘉手納の問題ですね。まさに嘉手納基地で、それ以外には入るところがないから。

伊藤 それは、大きさからいってですか。

吉元 それ以外に場所はないです。それは北部の山を、軍用地だからといって自然の山を切って作るという馬鹿な話が出てくるはずがないですからね。世界遺産としてノミネートしてある場所ですからね。それはない。ですからそういう意味では、嘉手納の統合案というのが米軍の中で駄目になったというのが本当だとするならば、それは米軍自身が沖繩を知っていない。沖繩の今日を、また将来に禍根を残すことになったと思うね。しかし、先ほどもいったように違うんだと。嘉手納統合案が実質的に駄目になったのは、すでに海上基地という日本の鉄鋼業界が利権絡みで動いたんだというマスコミの当時の指摘がもし本当だとするならば、これもまた何をかいわんやです。

私は既存施設内だったら、それは普天間だからイエスと言ってあるんじゃないんです。十一事案のすべてを言っているんです。それで地域がOKするならば、それはいいんじゃないか、というのが私の出発点です。これは原則として大田県政の中で確定されたかという、そうでもないんです。地元と国との間で話し合った上で、それを決めれば国がそれを後追いするというパターンをとったけれど、しかし中身によっては、県が積極的に先行して、普天間みたいな形でもっていいかということ、それはできないでしょうね。

そのことは当然のこととして国も知っていたと思いますよ。私は、そういう意味では、受けるところがあれば県はノーとは言いませんよ、というスタンスをずっと続けていました。これは当該市町村との話を原則とすると。

佐道 現実問題としては、嘉手納が駄目になったという時点で、これは難しいなと。

吉元 いや、海上基地が出たときに、ひよつとすると名護は受けるんじゃないかという感じがあったですね。それは名護市、行政側のいろいろな水面下の話をその間は聞かされていますが、地域振興との関係ではいろいろな要求があったからね。いま出てくるような問題ですよ。ですから、はっきり場所を特定して見えるようにしておいて、それを受けるために要求はないかという今のやり方がいいのか、あの当時は事前に要求が出ていないわけですから、わからんわけですから。どういうやり方がよかったのかわかりませんが、結果としてどうであれ、地域住民がイエスかノーを言うわけですからね。これは容易じゃないと思います。

何度も言うようですが、十一のこのSACOの内容については、既存の米軍基地内に収拾とするならば、そしてそれを地元がOKするならば、基本的にはノーと言えません。これが県の、というか私の考えです。それは県全体がそれほど遠くなくこの考えに合意できる内容だと思います。

伊藤 県外云々という形で県が方針を決めたわけではないんですね。

吉元 それは水面下では相当国とやり合いました。ひとつは、いま岩国基地の拡張が始まっています。三千メートルの滑走路とマインス十五メートルの深さの港湾です。これは大変な空港、港湾です。それは何のために作るかという話です。もちろんいまは海兵隊がおりますから。じゃあそこに移したらどうか。これに対しては橋本総理は、何とも言わなかったですね。ただ苦笑いするだけでした。これは私は官邸には何回も言いました。それは私たちが独善的に言っているんじゃないんです。岩国市の極めて重要な人が、お忍びで沖繩に来たという事実があります。岩国市の商工会議所の会頭が、受け入れてもいいと公表したこともあります。

去年の十一月、十二月、『防長新聞』というのがありますが、この社主がアメリカに行つて、ペンタゴンの担当者と話合っています。これは新聞の記事になりましたが、その後アメリカ側から否定されました。しかし、その当事者からは、その後、それが間違っていたというような発言はないですね。つまり、そこで引き受けようというところがあったんです。今でもあるんです。これをどうするかの話ですね。これはつい最近の新聞でもアメリカ側の情報として出ました。これがひとつです。

もう一つは、二年前、ちょうど九七年の夏の段階から私は本土に移すということを沖縄県が言うべきだ、という考えを持ちました。沖縄県民の中では、そこまでは言う必要がない、なんで他に迷惑をかけるのか、という気持ちが多いです。だから行政も言い切れない。政治も言い切れないです。一般の人とも言わないです。しかし言おうと。そのために私は内々で調査に入りました。結果として苦東の話につながりました。ただ向こうが空いているからという話ではなくて、冬に雪が降るから駄目じゃないかという言い方もあるけれど、そうではなくて、将来的な構想、将来的な日米安保の姿を見ながら。民主党サイドで「駐留なき安保」という方針が出たり、あるいは本土移設という方針が出たりしているのはそれです。

伊藤 県外移転でなければ駄目というのではなくて、先ほどおっしゃったような落としどころもあるわけですね。

吉元 ありますね。基地の中に。それともう一つ、私はオーストラリアに働きかけたことはありません。オーストラリアも懐を広く持っています。オーストラリアの北西。実弾砲撃演習は、いまやめたかどうか知らんが、あのときまだオーストラリアはやっていましたよ。そういう議論が一時期ありました。オーストラリアに海兵隊を全部移したらどうか。笑い話ですが、ジャングルがないから駄目だという話がありましたね。私なんかはあそこに置

くこの意味は、やはり東南アジアを含めてインド洋との関係などを考えますと、沖縄に置くよりはるかにいいんじゃないのかという言い方をしましたけれどね。しかしこれはまったく話題になりませんでした。大田知事が一時期その話を非公式に発言したこともあります。

佐道 基地の問題と同時に、経済関係、振興開発、いわゆる国際都市形成構想の問題等がからんでいきますが、三時になりますのでちよつと小休止を入れましょう。

〈休憩〉

■ 県議会との関係

佐道 いまお話になっているのは平成八（一九九六）年ですが、ちよつと六月ですか、県議員選挙があつて与野党同数ということになったわけですね。その前は少数与党だったんですね。

吉元 そうですね。少数与党でしたね。

伊藤 この「中立」というのはなんですか。「二名中立」となっていますか。

吉元 もともと保守系です。しかし立候補にあたって大田を支持するということで、大田の支援を得た選挙をやったんですね。支援を得たということで当選した方が二人、これが中立という方です。

伊藤 そうすると与党は二人数というふうを考えていいわけですね。

吉元 その通りです。

佐道 それでだいぶ議会運営はやりやすくなりましたか。

吉元 そうですね。楽になりましたね。沖縄県議会というのは前からそうですが、いつも途中で止まるんですね。空転というんで

すが、空回りするんです。

伊藤 国会の場合と逆に、自民党のほうが進めるといことですね。

吉元 かつては革新のほうで西銘さん時代にはやっていたんですが、そういう形ですね。ですから本質ではない部分で、言った、言わなかった、とか何とかという議論でガタガタするんです。新聞に書いてあったとか、そういうことを巡ってやってみたり。ですから議案に関わる意見の違いで空転するということはほとんどないですね。代表質問みたいなどころですね。代表質問というのは何でもですから。世界一周やりますからね。国会の予算委員会みたいなやりとりをしますから。本会議の総括質問とはちょっと違いますからね。

伊藤 まあ、吉元さんがどこかで何かを言われた、ということが問題になることがあるわけですね。

吉元 ええ、しよつちゆうですね。官邸で誰と会ってどう言った、ということが本土紙に書いてあるが、それは事実か、というようなことが頻繁に起こりますね。県内のマスコミについても同じことが言えますし。

佐道 よく沖繩の問題で周辺取材をしていきますと、吉元先生が県議会軽視であるという不満が相当あったという話を聞くんですが、それはご自身ではどうですか。

吉元 どうなんだろう。県議会の開会中のものに対してさぼったことはないし、まじめな議論はしているし、むしろ言い過ぎだといわれるほど議論はしていますけれども。ただ、議会と執行部の関係、いわゆる日常的な部分について執行部がやっている仕事が多かた議会でわからないという点でそういう声が出てきたのは事実でしょうね。例えば、特に出てきたのは全県フリー・トレード・ゾーンの経済振興策のことが出てきたりしましたね。そのところは与党、野党もそうなんです、通常必要に応じて県議会

会派の代表と執行部と重要事項について協議する場はその都度作るんですがね。

■全県フリー・ゾーン

佐道 ちょうどいま出てきたのでお聞きしたいのですが、全県フリー・ゾーンの問題ですが、最初の国際都市形成構想といいますが、規制緩和と要望等々にも自由貿易地域の拡大というようなことは出ていますが、全県フリー・ゾーンという形では出ていないですね。

吉元 そうですね。沖繩県側としては今やっている特別法である沖繩振興開発特別措置法にあるフリー・トレード・ゾーンの中身と規模、それから地域を拡大していこうということが基本で、これが従来の行政の流れですから、それを強調していました。

日本政府とのあいだでそれをやっていく中でもうひとつ問題が出てきたんです。明らかに違うのはAPECの総会で決定されたのは（これは大阪ですが、実施計画はマニラですが）、「投資の自由化」と「貿易の自由化」を、APEC加盟の先進国は二〇一〇年に実行する、ということですね。これが国際約束となった。これからの途上国については二〇一五年から二〇二〇年となった。この二〇一〇年に日本が投資の自由化と貿易の自由化を達成しなければならぬとするならば、沖繩の今の経済振興のあり方で、本土の後追いをしていたらどうなるのか。結局格差が残ったまま、しかも働く場が作れない産業構造でそのまま推移するだろうということから、私たちはもう少しこれは検討する必要があるのではないか、という議論が出てきたんです。

そこで少し県内の有識者、県外の有識者、海外の有識者を集めて議論してもらおうということで、台湾、香港、さらには本土、さらには県内の経済界、学者を含めて十名近くで検討委員会を作ってもらったんです。そして当初言われたのが、沖繩県側の事務

局が出したものです。それに対して、いま言ったような視点で議論をする。そのままそういう形で流れるとすれば、沖縄は二十七年遅れて復帰した、まだその差が取り戻せないままに国際的に裸になっていくのではないか。それよりは、むしろ先行的に沖縄をそういう状態に置くことが必要ではないか。先行メ리트として、その間に追いつくかどうかはわからないが、沖縄の基盤を整備しようじゃないか、という視点で合意したんです。それが全県フリー・トレード・ゾーンということです。これは「一国二制度的」という言葉を使いましたけれどね。

じつはこれには今の知事もメンバーとして、沖縄経済界の代表として入っているんです。彼も含めてOKしたんです。

それをまとめる段階で、県庁も相当悩みました、それでいいかどうかと。あらゆる部局で、それを抱えている産業との関係で、全県フリー・ゾーンになった場合に何が裸になるのか、それが対応できるのかということを議論しました。農林水産部あたりは、案の定駄目だという。これは部分がいい、地域がいい、全県になるともたない。じゃあ全県になるとプラスになる部分は何か。プラスの部分が多く出てきたんです。そうするとそれを実現するためにはマイナスの部分はどう取り扱うかということで、これは全国的に日本自体が、例えば農産物、水産物等、特に農産物ですが、そういう部分でWTOの中でもいろいろ問題になっていますよね。それと足並みを揃えればいいんじゃないか。それ以外の部分については、沖縄は完全にフリー・トレード・ゾーンにしようじゃないか、という形で、行政はまとまるんです。委員会で結論が出たものに対して、行政のその考え方をくつつけて県民に問うんです。もちろん県議会もそうです。県議会でもしよっちゅう論議していますからね。経済団体は十団体がそれを持ち帰って大論争しています。そして二団体、農業と水産業は最後まで反対。じゃあお前さんたちの賛成を得るためにはどうしたらいいか、という

ことで、先ほど言った行政が作ったものがかぶさってきて、経済界十団体がOKするんです。それで、行政もそれで行こうということ、行政と経済界は足並みが揃った。

県議会は政党が絡みますから、これは政党の理念との問題ですね。例えば共産党は最初からノーということです。いろいろぶつかりました。自民党は最初のほうはOKしていたんだけど、政治的にあとでひっくり返ってくるんです。そういうことになりました。

その間にこの問題をマスコミが取り上げて大論争していくんです。最終的にはマスコミ主催でコンベンション・センターで大討論会が始まるんです。賛成派と反対派が議論をし、そして電話によるアンケート、会場での賛成反対というのをまとめると、結果として全県フリー・ゾーンが多数派ということになったんです。それを踏まえて県は最終的に知事決裁を入れて、県議会にその方向で行くことについての議論を求めるわけです。県議会では大論争しました。結果として実施時期は二〇〇一年を頭に置いていたんですが、最終的には経済界も意見を交換した方がいいということで、二〇〇五年に延ばす。その間に態勢を整備するということ、二〇〇五年で、県議会も後追いでいい、という結論が出たんです。

伊藤 その時は自民党は――。

吉元 全体的にまとまりました。経済界がまとまったんだから。

伊藤 賛成したわけですね。

吉元 たしか共産党さんだけは最後にノーだったという記憶がありますが、しかしその議会で私の二期目の同意案件がつぶれるわけです。共産党の反対で通らなくなるんです。

伊藤 これは関係があるんですか。

■副知事再任の否決の背景

吉元 それはあると見たほうがいいでしょうね。つまり大田県政

のその種の政策というものに対する危険を感じたんじゃないですかね。それは基地問題も絡むでしょうね。

伊藤 どこが危機感を持ったんでしょうか。

吉元 一つは、共産党さんに言わせれば全県フリー・ゾーンの問題ですね。共産党本部はフリー・トレード・ゾーンの問題でどう考えているかわかりませんが、結局は代々木の了解を得られなかったということが、それについて言われていましたからね。それはノーだったですね。それから基地問題等については、吉元は妥協思想だ、ということがありましたね。

伊藤 今のお話を伺っていると、どうして「妥協」という言葉が出てくるんでしょうか。

吉元 そこはどうなんだろう。あの政党の捉え方ですから。

伊藤 それは共産党ということですか。

吉元 そうです。だから、九七年の九月議会、十月の中旬ですが、最終段階でこのフリー・トレード・ゾーンの議論を徹底的に議会の全員会議でやった。私はその晩、議会との議論が終わったものから、職場の皆さん、担当しているセクシヨンの皆さんと酒を飲んで、翌日はちよつと遅く、午後から出ようと思ったんですが、議会は関係なかったから。そうしたら本会議で、共産党の四名の反対によって多数が取れない。一票差だったか、一票差で過半数に満たなくて、同意案件が否決されたのです。

伊藤 その時に社民党の中からも反乱は。

吉元 おりました。一人です。

伊藤 一人ですか。

吉元 ええ。社会大衆党からは二人と言われています。

伊藤 社会党は党の方針としては。

吉元 党の方針は私の再任に野党以外は、各党賛成です。全部了解をとつてある。だけど、その場ですね。

佐道 本来その前の委員会では、先生の人事は認めようというこ

とになっていたわけですね。

吉元 そうですね。なっていたんですね、総務委員会で。

佐道 だからそれが本会議の場でひっくり返ることは本当はないんだけれども。

吉元 各党の意志というよりは、議員個人個人のノーが出たんですね。

伊藤 うーん、ちよつと信じがたいような出来事ですね。

吉元 いや、それが、その九月議会の直前、つまり九月の頭ですね。私は、知事から言われた再任、「次やつてほしい」と言われたことに対して、ノーと答えるんです。「無理ですよ。私がいくらやろうと思っても私じゃ通りませんよ。だいいち支持団体で支持政党の中でノーというのが出ますよ」ということでノーを表明するんです。知事は福建省との関係で中国に行つて、一週間ぐらいで帰ってくるんですが、その時また説得されましたが、「いや、駄目です。最終的に各与党、野党含めてきちんとイエスなのかノーなのかを確認した上でのことにしてください」と言つて断るんです。

やつたんでしょうね。それでイエスだという。野党は仕方ないということになっていたんですが、その時は中間派を含めてイエスで全部まとまったというふうに私は知事から言われた。「そこまで知事がやつて、それでOKというのであれば断る理由はありません。しかしこれは厳しいですよ」と言つて、九月議会に臨みます。それで結果がそうだったんですね。

伊藤 厳しいという判断はどこから出てくるわけですか。

吉元 すでにその間の県政運営にあたっての議論の中で、政党との間でいくつかが衝突していますからね。例えば国際都市形成構想という構想について議論する場合に、やはりついてこれない部分もありましたね。二十一世紀の沖繩を行政が描くということに対して、やはりそこまでやっていいのか、今の振興開発計画がある

じゃないか、という感じで意見が違っていた。また、二十一世紀というものに対する、これからの沖縄県民に対するビジョンを出すということについても、なかなか理解しきれない部分がありましたね。

それからもうひとつは、すでに基地問題でSACOの内容で、しかも普天間基地の移設に伴う海上基地について、海域調査、海底調査を市長さんがすることについて名護市がOKし、それを踏まえて県もOKしたという経緯もあります。その時の経緯は、最終的には知事決裁なんだけれども、これは全部僕の責任ですからね。それもありました。

それからもうひとつは那覇軍港の移設問題で、浦添商工会議所の勉強会に呼ばれて国際都市形成構想をしゃべった後に質問が出て、この那覇軍港問題をどういうふうにか考えたらいいか、妙案はないかという話になったときに、個人的な発言だという前提で私がしゃべった内容があります。新しい港湾、ハブ港湾を造るんです。ここに軍港がある。これを返してもらって、軍港でいま使っている機能を、港湾の中で、港湾管理者の決定で、部分的に使わせるということは考えられないのか、そういう考えは持てないのか、という答弁を私がするんです。これが今の問題につながっているんだけれども、これは軍港移設を容認した、というふうにとられたんですね。

じつはこれにはいろいろ問題がありました。軍港問題というのは復帰直後で返還が決まり、そして村山さんのときに国との話で結論を出した三事案のひとつです。その時には、浦添地先、今後つくる港湾の地先という話が決まる。その具体的な方法を巡って議論が沖繩でたくさんあったんです。即刻移せという案から、いや認めるなという案から。しかしこれは膠着状態だったわけですね。それで、SACOの内容が出た。普天間の問題が海上基地という形で出た。これは調査がもう目の前に来ている。調査が始まった。

一方この軍港問題は動かない。それで浦添商工会議所は浦添市の発展計画の中でこれをどう捉えたらいいかという勉強会を持ったときに僕が呼ばれて答えたものが、じつは軍港移設容認につながったんですね。

伊藤 そうだとすると、ご自身が属しておられる社会民主党あたりが。

吉元 そこは今でもOKしているんです。そういうやり方ではない。しかし、その他の政党、社会大衆党と共産党はノーと言っている。

伊藤 社会大衆党は全体としてノーと言ったんですか。

吉元 いいえ、その時は違うんです。その時は、まあそれでいいんじゃないかというようなことでした。ですけども、共産党はやはりノーだという。だから、そういう意味では共産党議員四名ともノーとあって、私の同意案件に同意しなかった理由の最大の理由はそれだったんです。それを理由にした。それなりの政党の中で出た意見で、何を理由に私をノーにしたかというのと、統一されていらないんです。共産党だけがはっきりしている。あとは個人的に嫌がっているのではないかというのが、いろいろなマスコミの見方ですね。

伊藤 結局さっきの革新と保守が二十三対二十三で、大田さんを支持するのが二人いる。そうすると過半数を持っていますよね。ここから四人抜けると、二しかプラスではないわけですね。

吉元 一が議長ですから。そういう意味では、事前に知事がOKをとったという内容が問われたわけです。なんだ、違うじゃないかと。ひとつの政党が丸抱えで全部が反対しているではないか、というのがひとつ。社会民主党もイエスという議員総会、執行委員会等の決定もあるにもかかわらず反乱者が一人出た。社会大衆党も同じ。議員総会、党の執行委員会で決まったけれども、これも二名出た、ということで大騒ぎになったんです。

伊藤 これはやはり一人の個人の議員が自分の判断でやったことなんですか。

吉元 そこはまだ解明できないですね。

伊藤 感想としてはどうですか。

吉元 それはもう明らかに社民党の一人は、個人の判断ですね。また、これは自治労推薦の議員なんです。これが問題になったんです。この人は前から変わり者と言われた人ですが、結果としてそうだった。今はこの人は社民党を除名されて、いま保守側に回っています。保守に行っています。

社会大衆党の二人は、実際にこの二人が本当にこの二人なのかというのが、無記名投票だからわからないけれども、しかし、ほぼ間違いなくそう確定されている。一人は軽率な判断だったという事で次は賛成にまわるんですね。しかしあと一人は八重山の出身で、私の同郷なんです、やはりノーと言っている。これは、あとで八重山の私の後輩なんか調べてみると、次の県議選挙で吉元は社民党系の候補者を新しく担ぐだろう。自分を落とそうとしているということが本人の思いだったらしいですね。しかし、そんな事実はなかったんだけれどもね。選挙は来年だからね。

伊藤 これはしかし大田さんの力をもってしてもできなかったと。

吉元 大田さんは力を入れたか、ということがマスコミで問われた。今もって問われていることなんです。だから私がこういう場でこういう発言をするのもなんです。私の頭の中には毛頭ありませんけれども、県内では、保守革新を問わず、労働組合や、マスコミ、経済界を含めて、大田さんは吉元を捨てたんじゃないか、むしろ切らせたんじゃないかということがずっと今でも言われていますね。しかしそれは僕に言わせれば違うと思います。大田さんという人はそういう人ではないと思うし、そういう小手先のことをやる人ではないと思う。現に私が辞めたあと、大田県政

のダメージというのが大きいと本人も周囲もそう言っているんだから、そんなことをやるはずはないと思います。まあそこは世間で見える目、実際大田さんに対する評価は分が悪いようですよ。

伊藤 大田さんはそう言われるようなところは、やはりないわけではないわけですね。

吉元 いいえ、私はこの人にはそんなことはないと思います。それはこの人の性格からして。ただ、大田さんは積極的に物事を詰めていく、自ら政党に対して説得していく、というタイプの人ではないです。

伊藤 能力の問題ですか。

吉元 いや、そういうやり方をとらない人です。だからもう一人残った女性の副知事、そして出納長、人事担当の関係部長が走り回っている。節々で大田さんがそれをチェックするという形が続いていたようですね。ですからそのところは――。

伊藤 でも事前に吉元さんの再任が妨げられたら、自分は県政の基盤を失うという。

吉元 それで、第二回目の十二月議会の直前に共産党説得に入っているのです。そういう意味では共産党の四名は戻ってくるんです。しかし、中間の二人が、おかし、共産党と何か密約があるのではないかという。共産党という政党は、一度ノーと言ったら変わらないよ、だから密約があるんじゃないかということ言われて、それに対する適切な手が打てなかったのか、結局中間の二名が保守側に走った。完全に前回（九八年の知事）選挙でも保守側の選挙をやっていますからね。これを機会に離れて行ったんですね。それだから共産党の四名が入ったけれども、社会大衆党の二人のうち一人は十二月議会でも駄目でした。それから社民党の一人も駄目でした。ですから結果としては駄目。

十二月議会の提案にも私はノーと言ったんです。「私が言った通りでしょう。あなたたちがどうやっても駄目ですよ。節目だよ。

これ以上私はやらない」と言ったんだけど、「共産党のOKをとりました。中間派もOKしました」ということを全部並べて説得されて、私以外にないということ、後継者を作らなかつたから、結局議会を目の前にして十二月議会に提案しなければいけない、送付しなければいけないということで、私も逆に追い込まれたとも言えるでしょうね。二度目もやむを得ず、仕方ないな、ということで一任したんだけど、やはり足りなかつた。

佐道 しかし、吉元先生自身にとつて、全県フリー・トレード・ゾーンの問題などは非常に重要な段階ですよ。そこで県政から離れられるということで、これはどうなるだろうという不安はなかつたですか。

吉元 その不安というのはひとつありました。九月議会直前に私はノーと言った。「もうこれで終わりですよ。与党の中からは批判が出ていますよ」と言ったのは、国際都市形成構想を作ったかどうかではないんです。あるいは基地返還アクションプログラムを作ったからどうではないんです。あるいは全県フリー・トレード・ゾーンをやったからどうではないんです。これは全部、例えば五十三の市町村長と知事で作る協議会の場で国際都市形成推進で決定していますから。経済界も決定していますから。そして政党も与党もそれなりに了解をとっていますから。表向きはこれを理由に、というのとは出てこないです。だからあと残るのは何かというと、例えば共産党がいみじくも言っているように、最初に那覇軍港の移設を容認したという決めつけ方ですね。

これからわかるのは、大田県政の中で国と話し合っている実質的な担当の私が、ある意味では相当のところまで国ベースでものごとを進めているのではないかという懸念があつたように思っていますね。そうでなければちょっと辻褄が合わない。ですからそういう意味で言うならば、私は少なくとも勝手にやれるほどのものは持っていない。すべての問題は事前に大田と話し合ひし、帰つてき

ても報告するし、そして次の組み立て方をする。そういう意味では、大田さんのやり方に対する不安、つまり大田に対する懸念につながっていくんですね。現にそういう指摘をした学者がいた。吉元のページは大田に対する牽制だ、大田に対する明らかな警告だ、という捉え方をする。マスコミよりは学者のほうが比較的そういう声を出した人が多かつたですね。

ですからそのところはまだわかりません。現象面から言えばずいぶん政党とは対決した。与党との間がむしろ多いですね。しかし与党というのは何かということですね。まず、ひとつの政党が、二十一世紀の将来像、ブランドデザインを、行政がやっている仕事と同じレベルで取り上げられない。それは政党の組織的な弱さの問題もあるでしょう。また政党としてそこまで日本の政党は出さない。例えば日本の自民党だって民主党だって、二十一世紀の日本のビジョンを出していないでしょう。それと同じように、そういう訓練がなされていない。政党は、すべて出てきた問題にイエスカノーかとか、あとは不満だったら運動をするというパターンの絵を描きながら、そして二十一世紀の然るべき時期に基地ゼロと目指す跡利用計画を作りながら、そしてこのままでは沖縄は四十七分の一で終わる、先取りしようとかいうかたちで国際的な環太平洋の流れを先取りしていくとかいう部分に対して、やり過ぎだということはあるけれども、それにノーと言われたことはないですから。まあ全県フリー・ゾーンは確かに共産党はノーと言つたけれど、それが直接の問題だとは思わない。

あと社会大衆党とか社民党の中の反対したという連中は別として、個人的な問題ですから。政党として共産党がノーと言つたのは、僕に対する問題なのか、それとも大田に対する牽制だったのか、これは今もってわからない。

伊藤 しかし、その二回目の同意案のときは共産党は中へ入つた

わけでしょう。

吉元 そうです。入りましたね。しかし中間派が逃げたんです。それは共産党との間で何があったのか、ということと言われたようですね。何か取引したんじゃないかとかね。

那覇軍港の移設問題で、大田も反対だ、吉元もおれと同じ反対ですよということを強調したと言われているんですね、大田さんが。当時のマスコミではね。私が反対しているのは当たり前だけれども、同じ反対ではなくて、いわゆる許容できる範囲で何があるのかというのを模索するのが行政ですから、政党とちよつと違いますからね。よりましな形でということがひとつ、決定的に県民に損失を与えるならば別として、そういう検討なり努力なりというものが大田知事の方でどういうふうを受けとめられていたのかなあというのが、もうひとつ共産党から疑問を出されたときの言われ方なんです。

■ 那覇軍港移設問題

伊藤 しかし、いまの軍港移設問題について言えば、大田さんがそういう発言をしたわけではないわけでしょう。

吉元 大田さんが発言したらもつと厳しいですよ。

伊藤 大田さんは一直線の発言ですよ。

吉元 だから私はハブ港湾の中で、港湾管理者がどう取り扱うかという問題の一つとして考えさせたらどうかと。つまり軍港という規定の仕方ではなくて、治外法権ではなくて、民港の中で、民間港湾の中でまず主権を回復する。それがベースだということのははつきりしていますからね。大田さんはもつと厳しいことを言っていますよ。那覇軍港はホワイトビーチに持って行け、とアメリカで言っているんです。これを巡っては地元では相当問題になりましたけれどもね、議会でも問題になりましたけれども。もちろんアメリカはOKしていませんがね。大田さんと私との共通項は

集約させるといことがまず第一段階だと。撤去についてはもう少し時間をかけて本格的にやっつけていこうと。これがひとつ。撤去を求めるけれども、それが今できなければ、集約させていく。これは何かと言うと。

伊藤 大田さんはその点では同意しているわけですね。

吉元 全く同じです。それには全くズレがないです。それは最初からの話ですから。例えば港湾について三つあるんです。那覇軍港、ホワイトビーチ、天願棧橋、この三つの港湾の機能が違うんです。天願棧橋というのは金武湾にあります、これは弾薬輸送と航空燃料などの陸揚げですね。それからホワイトビーチの海軍の原子力潜水艦（原潜）など。それから海兵隊の船も来ますけれども。那覇軍港というのはベトナム戦争時代に使った港湾だが、今日的にはもうそこで弾薬を積み降ろしして貯蔵するためには、市街地を通って嘉手納まで行くわけです、できないんです。そんな機能はなくなつたんです。そうするとあと残っているのは通常の物資の搬出入なんです。通常の物資の搬出入といつても、それが何をいくら運んでいるかという、年間十数隻です。

伊藤 いま行つても何にもないですよ。

吉元 なぜ必要か。いざというときに、というものです。年間十数隻しか入らない。しかもその中でチャーター船が主ですから。アメリカ軍は自分の軍艦を使いませぬから。安い民間の船でやりますので。那覇軍港から運ぶのは市街地の主要幹線道路を通るので、浦添地先、つまり那覇港の一番北の方でいま積み降ろしをしているんです。現在の民港でやっているんです。これが、那覇軍港の今の機能なんです。だからそれは一部機能を認めてもいいんじゃないかという私の主張なんです。軍港専用港は必要ない。現に海軍も、それから弾薬輸送もできる港が別にあるじゃないか、ということ私たちはさかんに日米政府に言っている。特に日本政府を追及している。だからただ単に、米軍施設だから代わりの

ものをつくるという発想を持つな、機能を検討してくれという。もう一方的に米軍の言いなりだから、結果的にそうなんです。だからそういう意味では既存の基地の中に入れるとか、あるいは無駄なものを省かせていくという発想では、大田と私は完全に一致していますし、これにズレは全くないです。しかし、それを政党側から見ると、それは基地を容認していることだ、撤去ではなく容認していると見るんです。

伊藤 その場合の政党というのは共産党ですか。

吉元 だけではなくて、社会大衆党というローカル政党もあります。

伊藤 ローカル政党もそんな激しいものなんですか。

吉元 それは結果として激しくなってきましたね。それは選挙もやっているし、市民受けという問題ですね。

伊藤 その社民党と社会大衆党を比べたら、社会大衆党の方が穏健な政党というわけではないんですか。

吉元 普通はそういう見方をされますけれども、全国的なつながりがないだけに、地域事情、感情、そういうものに動かされやすいんですね。同時に、選挙も個人選挙が多いですから、後援会選挙で、政党がまる抱えするというのはほとんどないですから。そんな力はありません。そうすると社会党でも駄目、共産党はもつと駄目、だったらどこに行くかという勢力が社会大衆党・ローカル政党に来るんですね。投票行動として、いわゆる市民と言われているけれども、この種の問題になると非常に行動が厳しくなってきましたからね。考え方も厳しいですから、そこ一致するわけです。結果としてそれを利用する。それがいま出ている現象ですね。

■大田三選敗北の背景

佐道 吉元先生がいらっしやらなくなってから、大田さんの最後

の一年というのはなにか方向舵を失った船のような感じがしてしまっているが、現実にはその翌年の知事選挙で大田さんは二万票の差で今の知事に破れるわけですけども、ひとつ象徴的なのは、かつて大田さんを支えていた沖縄の経済界、それこそ稲嶺さんを支えていたわけですけども、それが最後の一年で離れてしまう。もう本当に敵対する側に回ってしまった。こちらへの理由という原因はどういうふうに分かれますか。

吉元 吉元がいなくなってからと言えば、ちょっと僕にとってみれば手前味噌になるかも知れないけれども。

伊藤 でも現実的にはそうでしょうか。

吉元 現象的に見るならば、そのあと、基地問題に関わる県の発言が表に出てこなくなるんです。知事の発言を含めて。副知事、僕のとが一月下旬まで空白になりますからね。それで、基地担当の副知事がいなくなった。それに知事も発言しなければ、もう行政マン、部長が発言するということはほとんどない。

その時期何があったかというところ、もうひとつ名護の市民投票がありましたね。私が十二月議会でノーと言われた翌日に名護市民投票の結果が出る。いや、市民投票が日曜日で、その翌日が私のノーですね。ですから県が組み立てていた組み立て方があったかどうか、ということですね。例えば名護市民投票でイエスと出た場合どうするか、ノーと言った場合にどうするか、それを官邸との間、国との間でどういう形で処理していくのか。このところでは私は明確なシナリオあるいは方針を、県が持ち得なかったんじゃないかと思う。つまり知事が裸で一人で担いでいたのではないかと思う。そうすると名護市民投票の結果が出た翌日吉元が同意されているならば、僕の仕事なんです。さつそく飛ばないといけないです。しかしそれがいない。いきなり知事は呼ばれているから、東京に行かなければいかん。どうするか。これがない。というところに、やはり出発のミスがひとつあったんじゃないかと思う。

なぜそういうことを言うかという、僕はその翌年、去年の一月中旬ですが、知事から呼ばれたときに、このことで非常に大きく知事を責めたのです。「なぜそのぐらい、やらなかったのか」と怒ったんです。というのは、イエスと出た場合は、県がその他の県民の団体等いろいろな意見を聞いて、与党の意見を聞いて、名護市のイエスを踏まえてどうするかという県の独自の判断を持たなければいけない。何度も言うようだけれども、地域が結論を出せば、基本的にその方向に行かざるを得ない。投票でノーとでたら、国はノーという結果がわかっている、どうしても普天間海上基地を認めさせたいわけだから、これをつぶそうとするわけです。あれは投票だ、法的効力はない、だから首長同士が結論出せ、となるでしょう。当然予想されるわけです。

名護市長は案の定呼ばれて、言われて、イエスと言って、自分は辞めたのです。大田知事も同じ日に呼ばれて、大田知事はここでのシナリオがなかった。その時に大田知事が市民投票の結果は尊重します、尊重すべきであると、原則を言った上で、しかしながら与党・各種団体、経済界の意見も聞いた上で、最終的には返事しますという流れだったらいんです。ところがこの前提がないんです。市民投票についてのイエス、ノーも、総理に対して言っていないんです。まだまとめていません、これからいろいろな団体の意見を聞いた上で、必ずお会いして返事を申し上げますと言った終わっちゃった、というんです。ここでひとつ大きな誤解、錯覚を与えた。いいサインだと向こうは思ったわけです。

伊藤 まあ、普通だったらそう思うでしょうね。

吉元 しかも名護市長がOKしたんだから、いいサインだと思うわけです。そこが今度の本当のミスです。私は九月議会直前に、九月議会対策をするにあたって、名護市民投票が行なわれることはもう決まっているわけです。九月の下旬に市議会は終わっているわけですから。これはイエスと言った場合はこう、ノーと言っ

た場合はこうしかなりませんよ。名護市民が投票の結果イエスと言ったら、県も九月議会答弁では基本的にそう言わざるを得ないですよ、と言っておいたんです。しかし九月議会答弁の中で知事は曖昧にしちゃった。イエス、ノーの選択を聞かれたときも、知事はそこは言わなかった。それはそれでいいと思う。予見を与えてはいけなからね、投票日に。それはそれでいい。

しかしそこで認識合わせをしておいたにもかかわらず、最終的に十二月の段階で市民投票の直後、ある適切な仕組みを県庁の中で作って、知事が何を発言するか、多分作ってあったと僕は思う。私と一緒に仕事をしてきた部長や政策調整監やその他の課長連中の言い分は全く同じ形で来ていたからね。その時はもうシナリオを、これとこれ、という形で出したと思う。それで知事がどちらを選んだのか。いやいや今は返事すべきではないと。基本的な問題までも全部持ち越すということにしたのかどうか、これはわからない。東京に行って、直前に決めたのかわからない。しかしずれにせよ、それがひとつある。

そういう意味では(私が)いなくなつた時に何がすぐ現れたかという、その対応がきわめてまずかった。私に言わせれば、失政と言うほどですね。だって市町村の条例で投票が決まり、決まった条例に基づいた投票の結果が出たんだから。それを県というレベルで無視するということはあり得ないんです。だから基本線をはっきり言うべきなんです。そこにひとつの弱気があったのか何か知らないけれども、シナリオのミスがあったのかわからないけれども、そこは一月に入ってから、あなたの責任だということを強く言ったことがあります。

伊藤 ということは副知事再任が否決されたあと、なんらかの形で知事をアシストするようなことはなさっていらっしやったわけですか。求められなかったんですか。

吉元 それは求められなかったですね。ですからそれは全く言っ

ていません。ただしこの問題のスタッフであった政策調整監とか、あるいは担当の課長とかからは、ときどきファックスが送られてくるし、それには適切なコメントをしたし、二、三回私の自宅に来ていましたので、方向性を言っていました。それは当時の副知事の秘書がまだ残っていましたから、彼を通じて連携はとっていたつもりです。しかし十二月議会直後の状況にあたっての情報はなかったです。

伊藤 その否決ということがはっきりした段階で、大田さんは吉元さんに対してどういう表現をなさいましたか。否決という事態に直面して。

吉元 それはいいです。一月中旬までいいです。一月十日前後に、来て欲しいということで、当時の出納長が、私のあとの副知事をやるということと、私にすまなかったということでした。私は一回、二回、特に二回はあなたにつきあつたけれども、これできれにしてくれ、ということを明確に言った記憶があります。

伊藤 しかし、そういう政治的な判断のミスがあつた場合、すぐに動かなかつたらほとんど意味がないですね。一月になつてから、いやすまなかつた、ではもうね。

吉元 まあ、性格的などころがありますのでね。その点は本人の気持ちの表現がなかなか表に出る人ではないですからね。

伊藤 しかしそれは政治家の問題ですよ。

吉元 その通りですね。
佐道 その大田さんの三選出馬にあたっては、先生は応援をされたわけですか。

吉元 それはもちろんそうです。

伊藤 どういう形でやられたわけですか。

吉元 私は選挙対策事務所とかというところへは行っていません。もちろんここで、この自治労の皆さんのバックアップとして、いろいろなおアドバイスをしていたし、私にも地域票がありますの

で。

伊藤 それはどこですか。

吉元 私は八重山です。ここにもたくさんおられますからね。同時に参議院選挙が七月で終わっていますからね。その後の選挙、知事選ですからね。そういう意味ではそれなりの役割を果たすべく手伝っていました。まあ、しかし告示の前日に、大田知事から呼ばれて、明日告示だ、ひとつ取り仕切つて欲しいという話があったんですが、告示の前日ではあまり意味がないです、本当はね。

伊藤 もう終わっているわけですね、選挙は。

吉元 まあ誰かが仕掛けたんでしょう。しかしそれでも絶えず選挙事務所の体制とか、各地の動きというのは全部知っていたから、「この選挙は負けますよ、勝てる選挙ではありませんよ、このやり方では駄目ですよ」と言いました。それで経済界の分析から、地域の分析から、いろいろやりました。「そして最も大事なのは、基地問題に対する対応の仕方ですよ。県内移設をあなたがノー」という。名護市の投票も含めて、沖縄はもう認められないということとは表明したんだから、だったら何をするか。普天間をどうするかということ、アメリカに帰れという話だけでは駄目ですよ、具体的に言い切れますか」という話をしました。「SACOの十一のうちで片づいたものはいいとして、片づいていない大きな問題の二つ、那覇軍港と普天間の問題、これについて明確な選挙のための政策を出して発言をしない」と言ったんです。

それにはひとつ布石がありました、去年の九月の始め、お盆の日ですが、私も仏壇を持っていますから、親戚が来たので対応していたんですが、夜、急に知事から呼ばれて、是非、と言うから行ったんです。そこで当時副知事になっていました前の出納長の宮平さんと二人でいた。「頼む」ということになりました、「何だ」と言ったら、「この知事選はこのままでは勝てない勝つためにどうしたらいいのか」という。九月の始めですからね。

「普天間の問題については本土への移転というの言いたい。もうひとつは那覇軍港問題は自分の手でどうしても仕上げたい」

「しかしあなたは、共産党が反対したんだよ。あなたは共産党とのあいだでも那覇軍港問題については移設をやらないと言っただろう。私があるためにあんなのは知っているだろう」

「知っている。しかしこれはやらなはいけない。自分の責任でやる。そうでないと自分は候補者を辞める」とまで言い出したんですね。

その時に私はいろいろな議論をした上で「本気なのか。誰がそれを保証していくのか。運動やりきれるか」ということを聞いたんですが、「いや、それなりにやっている」という話でした。「そこまで言うんだったら、県の三役は意思統一しているのか」と言ったら、「しています」ということだから、ちょっと預からせてみて、ということ、三日、四日間ぐらい、本気かなどうかというところで、どう動いたらいいか考えました。

橋本政権とは会っていないんですからね、一月、二月段階からここにちままで。それをどうするかということ、工夫して、じゃあ官房長官にこの問題をぶちこむか。小淵さんになっているわけですから、小淵総理にどうぶちこむか。村山さんを使うか。誰を使ったらいいか。はたまた民主党を使うかということ考えた。結果としてはこういうやり方では駄目だなということ、最終的には僕自身が官房長官に会おうということで、そのための準備に入った。メモを作って、那覇軍港の取り扱いについてはこういうシナリオ、こういうことだと全部文章を作ったんです。A4の用紙の三枚ぐらい作って、それを大田知事に見せて、「これでいいんだったら私は動くよ。そうでなければ私は動きませんよ」と言ったら「いい」という。部分的な手直しはあったけれども、それは本筋ではないから直したんですが、「それでいい」と確認した。立会人として、当時副知事は出張中でしたから、出納長を同席さ

せて、そこで「頼みます」と大田知事から言われたから、「わかった」ということで私は東京に行くんです。九月中旬でしたね。

それで、官房長官と会う時間をとったんです。まず村山さんに相談したんですが、村山さんは「わかった、おれがやってもいいけれども、いま党首は土井さんだから、土井さんを通じてやれ。うまくいかなかったら自分のところへ言いにくい」というから、「わかった」ということで、この問題、私の現役時代に苦勞してもらった社民党の伊藤さんとか前島さんの了解を得た上で村山さんとの詰めをやって、村山さんの了解を得た上で、土井さんに話して、土井さんが直接官邸とのやり取りをしたんです。そして翌日、私が帰る時間ぎりぎり、ホテルでチェックアウトしようとする寸前に土井さんから電話が入って、十一時何分にどここのホテルの何号室に来てくれという。「ということは会えるんだな」と言ったら、「そうだ」という。「わかった、ありがとう」ということで電話を切って、飛行機をキャンセルした上でその時間に野中さんとサシで会いました。

伊藤 野中さんとは前から会っているわけですか。

吉元 野中さんとはそれほど細かい話をした記憶はないんです。ただ、非常に重要な仕事に私もちょっとかかわって見たんです。前の衆議院選挙、総選挙ですね。その時に一区は自民党はもちろん出ているけれども、これは当選しそうでない。それから二区は仲村（正治）さんという方で自由党から自民党に入った人ですが、これはまあ単独で通るだろうと。三区は上原康助・社民党が通る、したがって自民党は通らない。二区の仲村さんはまだ自由党でしたから、これは自民党ゼロになるという状況が投票前に読めたんです。その話は官邸サイドは私に一言も言わなかった。もちろん選挙のことだから。

ある日突然、沖縄三区の嘉数知賢という候補者、今も国会議員で、九州比例で通った人ですが、私の部屋、副知事室に飛び込ん

できて、「頼む。一生のお願いだ」という。「何だ」と言ったら、「自民党本部、選対本部の野中さんに電話を入れてほしい。九州比例の上位に位置づけてほしい」という。「何でそれを俺に言うのか」「吉元さんから電話してほしい」「俺は選挙のことでこんなことを、ましてや自民党のことでやるわけにはいかん」と言ったんですが、「とにかく検討してほしい」ということです。

まあよせばよかつたんですが、ひとつぐらいいやたらどうか、どうせ三区は上原康助が当選するし、吉元さんの顔をつぶさないから、ひとつぐらいいは将来のために自民党に貸しを作ったほうがいいじゃないかという話が出たりした。ある日、野中さんに電話を入れてその話をしたら、向こうがびっくりして、本当に吉元さんかと言うから、そうだと聞いた。結果として、選挙区では落ちたけれども、比例でその人は通ったんです。

その時以来、野中さんが僕を見る目が変わってきた。それ以前はわからないけれども、何か気にし始めたというか、ということがありました。野中さんとそんな話があったんですね。野中さんに会ったときも「あの時はすいませんでした」なんて私に言うものだから、私も「このことについてはほんとうに恥を忍んで電話したんですが、このことはもうないことにしてください」と言った。「しかしあの嘉数君はそんなこともあるのに、吉元さんの議会での同意のときには自民党県議を説得し得なかったからな」と笑っていたので、「いや、もう終わったことは言わないでください」と言いました。

それで去年の九月の大田さんとの話で那覇軍港の取り扱いについてのメモを渡して、詳しく説明した。野中さんはびっくりした。伊藤 それはさつきおっしゃったようなことですね。

吉元 そうですね。びっくりして、「そんなこと、ほんとうに大田さんはこれでいいのか」という。「私は大田に頼まれて来たんです」といった。ちょうどその頃はもう自民党の候補者は稲嶺さん、

という話が出始めていた時期です。同時に海上基地も自民党の稲嶺さんはノーと言う、ということも出回っていた時期です。しかしいずれにせよ那覇軍港問題でしたので、「いずれにせよ検討してください。大田に会ってくれ」と言ったら、「気持ちばかりでした。言っている意味も全く異議ありません。しかしいま私が大田に会うと、後ろから鉄砲を撃たれる」という話をするんですね。やっぱりなと思った。この時期はそうかも知れないと言いながら、「いずれにせよ会う場、やり方についてはいろいろ考えてください」と言って、別れるんです。

そのあと、そのことを大田さんに報告した上で、大田が官邸のトップあるいはナンバー2と会う仕組みを作ったんですね。毎年秋に全国知事会が官邸で開かれるんです。そこには大田を出席させる。それは全国知事会のメンバーですからノーとは言わない。そしてその時に立ち話でもしながら、できれば大田さん、私の部屋にどうぞ、とひとこと言わせてもらおうという取り組みをしてみたんです。

その線で動いていたんですが、急遽その直前になりまして、大田さんが全く別な動き方をしたんです。県庁の部長クラス、自治省から来た職員を使って、官邸、総理と会う、あるいは官房長官と会う働きかけをさせたんです。この話を、俺がさせているというふうな官邸サイドは錯覚して、「吉元さんともあろうものがここまでやるのか。極秘の問題をここまでやるのか」と誤解された節があつて、その旨のある人を通じて私のところに電話してきた。

私はびっくりして、「これは私のやり方とは違います。私はシナリオを作つて、それを渡しているだけであつて、これは私はやっていません」と言っただけで、「いや、そう思われている」と言うから、電話を切ったあと、直接ここから知事室に電話を入れて大田さんに話したんです。「何をやっているんだ」「いや、そんなことさせていないつもりだ」「いや、あんたはこういう職員を使

つてやっているじゃないか」と言ったら、「いやあ、みんな努力しろと言っているので、みんなに言っているだけだ」と言うから「もうやめてくれ。この話は全部私は手を引きますから、なかつたことにしてくれ」ということで、全国知事会の直前に私はこれから手を引くんです。そういうことがありましたね。

ですから、やることなすこと、ことごとく場当たり的なことしかやれない県政がやはりあの時期にありましたね。選挙のためには、オール・オア・ナッシングではなくて、軍港問題は自分のイニシアティブで政策を掲げ、県民に訴えたいと言ったにもかかわらず、僕を走らせたにもかかわらず、選挙本番のときはそういうピラをひとつも出さないんですね。「県外」に普天間を移す、海兵隊を移すという話についても、二年前からの話で、去年の選挙の前にも自分は言う、共産党と喧嘩をしてもやると言っていたけれども、結局選挙運動の演説ではひとつも言わなかったですね。

それはもうすでに私のほうでは、苦東への普天間の移設を前提にして、北海道にも手を回して、北海道の月刊誌、ローカル誌がありますけれども、これに出たんです。苦東の活用についてのアイデアをいくつか入れて、提案を入れて、その中のひとつにこの海兵隊の問題が入っていたんですね。これも去年の九月か十月に出ているんです。これもデータをあげて、こういうものがあるんだから大胆に言いなさいと薦めたけれども、結局言わなかった。

ですから、選挙はいろいろなことをやりましたし、本番に入っても手伝いました。ここが選対みたいになって、やりましたけれども、結果としては県民からはこの人では基地問題は進まないという見方をされたということです。つまり中間派に対する、現実派に対する対応がゼロだったということです。もうひとつは大田さんでは日本政府が相手してくれないということで、今後沖縄はもつと孤立するぞ、ということを言われましたね。

この二つは結果として、先ほど言ったような問題を一つずつこ

なしていればそうでもなかったと思うんだけど、今度の選挙では、基地問題と若者の失業率、県内の企業の倒産、この三つで負けましたからね。失業率と企業倒産は、沖縄の問題ではなくて全国との連動です。しかしこの知事では、というふうに使われた。それは電通さんがうまくいったですね。

佐道 「県政不況」というスローガンですね。しかし、県知事選挙にあたって、保守の側は最初に対抗馬をなかなかまとめ切れないう状況でしたよね。上原さんの名前があがって、結局、上原さんは駄目で、八月ぐらいになってやつと稲嶺さんという形でまとまるわけですけども、先生はもう早い段階でやはり大田さんは第三期は無理だと思われたんですか。

吉元 大田さんは最初の立候補のとき、本人が明確に私に言ったのは、「私は二期ですよ。一期では駄目、二期。三期では長すぎ、二期ですよ」ということです。それは二人の、この行政を推進するにあたっての八年間のスケジュールというんですか、タイムテーブルの中にきちんと位置づけたつもりです。したがって三期は、沖縄のもう一つの課題である特別自治区、自治県構想を出そうということ準備していたんですね。その三期を誰に担がせるかという問題はもちろんその頃なかつたわけです。しかし、政党からいろいろなことを言われながらも、一昨年の九月議会以前までは、大田さんは本当かどうか知らんけれど、「次は」という表現で、吉元の名前を言った節があるんですね。これはしかし確認できないから本当はどうかかわらない。

結果として私が県庁を降りて、去年の一月になりますと、経済界が一月下旬あたりから動き出して、吉元さんを知事にしよう。その際、保守側からは出さない。もうとにかく無投票で出そう。いま一番大事なのは、国との関係もさることながら、県民がやつとこまで来たんだと。同時に経済界もあれだけの力を入れて、国際都市形成構想を了解し、本気になって基地返還アクションプ

ログラムを了解ではないが理解し、全県フリーゾーンを自ら決めてきたわけですから、この仕事をやってきた吉元がいなくては話にならないというのが、県内経済界の四巨頭が僕を説得した理由なんです。去年の一月下旬ですね。これは二月末まで続くんです。あとは個別バラバラでいろいろな人を通じて私の説得に入るんです。その説得の中のひとつに学者グループもいたんですね。わりとこれは広がっていたですね。

その時は反大田という意味ではなかったんですね。まあ、この問題の処理を誤ると、国との間でパイプがなくなる。それでは大田が仮に続けても意味ないじゃないかということとの関係でしょうね。つまり善意で理解すれば、大田と吉元が作ってきた（彼等に言わせれば吉元の案だと言うんだけれども）この県民ぐるみで作ってきた沖繩を二十一世紀にどう乗せていくかという仕事は吉元にやってほしい、というのが僕に対する要請だったですね。

私は断ったんです。だいいち、私は与党からノーと言われたんだから。あれは副知事だからノーと言ったんで、知事になると言ったらまた別だという話があったんだけどね。これは冗談としても、大田を私が担いだんですよ。大田が出るのであれば、私は出ません。それはもう考えられないことです。経済界の方も大田さんに対しアクションを起こしていた節がありますが、三期目について何も言わない。少し感情的になり始めた。つまり国とのパイプがなくなつて三月段階から開き直り始めたというふうな言い方を私にしていましたね。

二月下旬頃から、社民党本部の土井さんや村山さんあたりから、あるいは九州のかつての私の仲間から、吉元を参議院に出そうという声が出始めて、その話が表に出てくるんです。三月下旬から四月にかけて。したがって経済界の皆さんも、吉元には国政レベルの話が出ていく以上、もう話をしてもしようがないということに収まっていくんですね。ですからその時期ですよ。三月下旬か

ら四月にかけてですか。上原康助を出そうという話が東京サイドから出るんです。国会議員の中で、自民党サイドからそれを仕掛けた節があるんですね。大田にぶつけるには上原康助しかないということですね。彼はまだ社民党だったんですね。沖繩県本部はノーと言うし、社民党本部もノーと言うし、そんなことはあり得ないと言う。そのうち、本人がその気になって、工作を始めたからね、沖繩で。だんだん孤立するんです。結果として、彼は社民党を出ることになるんですね。

もうひとつは僕が参議院に当選して出た場合に、沖繩問題の窓口を一手にやるのではないか、衆参問わず政治的に、というふうな誤解、錯覚を、上原さんは先取りした。だから社民党に残つていてもしようがないということで、自分をこの際高くしようということでも社民党に行つたんです。これは沖繩のマスコミの言い分です。本当はどうかはわかりません。しかし、沖繩の皆さんの中には同じことを言う連中がおりますね。そのころ、私の参議院選挙について、どうして社民党から出るかと言つて笑われました。

実は二月の中旬、知事選の話がなくならないうちに、民主党の菅直人さんから電話がありました、「比例に出てくれ。比例一位だ」という。「ちよつと待つてください。おれは社民党に関わっているんですよ」と言うと、「わかっています。もうわが党に来てください」と言っているのです、その時に「いやちよつと待つて、それはできませんよ」と言つたけれども、「とにかく考えてください。一週間後に電話します」と言うんです。一週間後に韓国に行つていた菅直人さんから電話があつて、「どうか」と言うから、丁寧な断つたんです。また今年もあるんです。民主党からはね。

しかしいずれにせよ、それは別として、国政の話に私が乗つたのは、ひとつはやはり断絶している県と国との関係をなんとかして、もし国会に足がかりができるならば、何らかの形で沖繩問題のつなぎを切り拓き、また新たにやりたいという気持ちがあった。

それともうひとつは、やはり社会党との関係というのは、私が若い頃、二十代の後半で復帰協の事務局長をしたときに、社会党を窓口にして、総評を窓口にしたがら復帰運動を全国化したときからのつき合いですから、そういう意味では非常に長いつき合いがありますし、復帰直前に上原康助さんを国政参加の初選挙に出すために入党したという経緯もあった。だから「頼む」と沖繩の仲間から言われたら、あるいは党中央から言われたら、まあ土井さんや村山さんに言われたら、ノーと言えることはなかったんです。そういう意味では義理と人情の問題で、私は関わったんですけれどね。

ですから大田さんは、三期目についてという話がさつきあったけれども、三期目は最初は意識していなかったと思います。しかし結果として、去年になって追い込まれて、開き直ったと思いますね。自分がやらないと、この間やっていたのはどうなるんだという気持ちとか、彼自身の負けん気の強いあの性格からすると、どうしても勝つてやるという気持ちがあったかも知れない。勝つことよって、国との間も切り拓いていくという強気の見方があったかも知れない。

伊藤 実際に力があれば、ですね。
吉元 まあ、そうですね。

■フリー・ゾーン構想

佐道 先生の説得に経済界の巨頭らが会いに来たということは非常に興味深いんですけども、ひとつわからないのは、全県フリー・ゾーン等々の問題についていちおう合意はできて、認めようということですね。けれども細かく見ていくと、例えばそれこそ現副知事になっているような人、あの人は銀行のお方ですけども、反対の論陣を張るとか、もちろん農業団体もそうですけれども、すべてオープンにしてみると、本土やいろいろなところか

らの資本が入ってくると非常にきつい競争にさらされてというのが出てまいりますね。それは今の沖繩では大きいけれども、全国レベルでは、というところもあって、これを性根を据えてバックアップしていかうと思っておられる方ももちろんいらっしゃるでしょうけれども、やはりそこまではどうか、と思っておられるところもずいぶんあるんじゃないでしょうか。

吉元 大事な部分ですね。経済十団体が、八団体が積極的で、二団体、農業と水産業は消極的だったけれども、結果として十団体が、三年、四年ずらして二〇〇五年からと全会一致で決めた。これは県民の動きですよ。県民の大論議ですよ。ひとつの首長を含めて。それは何かというと、結果として投資の自由化、貿易の自由化ということは避けられないという沖繩県民の認識ですよ。それは本土より、私たちは戦後の二十七年間、その生活をしてきたんですね。戦後の二十七年間、復帰までというのは、文字通り沖繩は一種のフリー・トレード・ゾーンですよ。沖繩独自のね。それで、外資導入というのは、積極的にアメリカがその外資導入を沖繩に押しつける。沖繩はそれに抵抗する。地場産業を育てたいという競争の中で沖繩は生きてきたわけです。

つまり沖繩の日常生活、食材もそうですが、外国からほとんど入れていたんですね。日本からはそれほど多くなかった。だからケチャップにしてもマヨネーズにしてもバターにしても、それから肉関係の缶詰にしても、これは全部外国から入れていたんですね。本土からではなかったんです。

私たちは復帰後何年間というのは嗜好を変えるのに大変だったんです。結果的には、今は国産品を使っていますけれどもね。それほど違和感はないけれども、しかし、いまもってお年寄りの皆さんは、従来食べていたタイプのもの（を食べたい）。だから沖繩の中小企業ではまだ独自で貿易取引しているところがあるんです。沖繩はこれを体験したという相当大的な意味がありますね。

経済界もその中で生きてきたんですから。完全に沖縄というものに封鎖されていたけれども、そういう形でしか生きてこれなかった。復帰後は日本という枠組の中で安心して生きてきたわけです。しかし、どうもうまくいかないでしょう。県内経済界が力をつけただけではない。働く場が増えたわけではない。もちろん人口も増えているけれども、しかし、そういう中で沖縄ほどアジア太平洋の動きを敏感に感じているところはないです。現に台湾との話、現に沖縄が経済界と一緒にあって福建省を窓口にも、中国との経済交流の中で発展しようかという考え方を持ったのもそういう意味でしょう。

そういう意味ではやはり沖縄が日本全体の中での歴史と環境からすると、地政的な意味からすると、世界の動きに対して一番敏感じゃないですか。その中でAPECのあの内容でしょう。そして農産物の問題もそうだけれども、どんどんウルグアイ・ラウンドの問題で切られていくでしょう。WTOの話はもう来年から始まるという。何がターゲットかということはみんな知っているわけでしょう、あの頃から。ですから自由化は避けられない。ではどうしたらいいのか、という話でしょう。その中で先行メトリットとして、日本全体がそうなるまでの間に何年間、沖縄に特別な仕組み、しかも特別県制という一国二制度的な制度的にはいわば全く別な仕組みになりますからね。税法でもそうですからね。そういう仕組みがもしできるならば、それに入ってみるか、という話ですよ。

これは経済界のリーダーは異論なく全部そうなりますよ。もちろん学者の中ではノーと言った人もおられます。農業関係の勉強している人とか、経済の中でも牧野君、今の副知事みたいに、全く駄目だという意見もあります。それは論議させればいい話で、それは工夫させたいかと思えますよ。ですから、そういう意味では全県フリー・ゾーンの問題で、私に言わせれば、なぜ牧野さ

んが琉銀におりながら調査部を長いことやりながら、どうして琉銀の会頭が経済界のトップにいるんだから、彼を説得しなかったかと、僕は逆に言っているんです。マスコミを通じてね。おかしんじゃないの。そこまであなたが命をかけるんだつたら、自分のところの親分と話しなさいと。だから学者として学問としてという話ではなくて、沖縄の二十一世紀をどうするか、本当にリーダーレスというんですか、自由化というんですか、そういう形にならないと思うのか、日本だけが別と思うのか、ということですね。

私なんかあの時に議論したのは、WTOに中国がいつ入るかという問題でした。これも二〇〇〇年とわれわれは見たんです。だけれども、これはほぼ今年末ですね。結局当時の見通しはそれほど大きく違っていなかった。しかしその議論は沖縄だけがやったのではなくて、例えば全県フリー・ゾーンの議論をしたときには、香港の学者、台湾の学者、その仕事をしている人。さらには田中直毅さんなんが入ってきて、その議論を一所懸命やった。もちろん議論の浅さはあったかも知れないけれども、しかしひとつの地域が特別な制度をとってでも、一国二制度的でも、新しい沖縄づくりを国際潮流の中で挑戦していこうというまとまり方をしたというのは、沖縄にもかつてなかったし、日本の地域社会にもないんじゃないかと思えますね。

佐道 それは田中委員会と言われたグループですね、稲盛さんとかも入った。県の方はそうやってプランを出す。今度は官邸とか、政府、国の側ですよ。

吉元 ひとつは、許容できる範囲は何かということですね。それは現存する沖縄振興開発特別措置法という中に、自由貿易の制度がありますから、この枠組でどこまで広げられるかというのが関係省庁の考えるところです。特に税制を中心は大蔵の考えです。この考えで自民党のその部会は徹底しているわけです。そのため自民党のその部会を使いながら、官僚が動かしているわけだけ

ら。そこにどう挑戦するかです、この話は。だから橋本さんがたとえ一人で「うん、大丈夫だ」と言っても、そんな問題ではない。そう考えていくと、私たちは官邸を攻める前に、やはり関係省庁だなと思っただけです。ですから沖縄政策協議会の幹事会という場では、この種の議論を大胆にやりました。なぜノー・ビザが駄目なのかという議論ですとか、さらにはどうして一国二制度的な仕組みがいけないのか。日本の将来はどうなるんですか、APECの確認は何ですか、という議論をさかんに吹っかけました。関係省庁がどこまでそれを本気に思ったか知らないが、あとは官邸と政治、つまり政治を動かせばそれに近づくだらう。しかしそれは大変困難だと思った。

その中で私たちが経済界対策をやったわけです。これは稲盛さんの話とか出たけれども、その程度ではありません。諸井さんはどう動かすか。これは何回も相当突っ込んだ議論をしました。それから牛尾さん。それからあと一人、ど忘れしたけれど、そういう方々と議論をし、しかも時の政権のこの種の政策に関わっている経済界の代表という意味ではある程度絞って、徹底的に議論しました。その会社まで乗り込んで、社長室に入って議論しました。

僕は牛尾さんは非常に大胆なことを言ったと思う。考えられる、とまでは明確にわかつたけれども、そういう匂いはしました。諸井さんの場合は少し慎重でした。しかし、いずれにせよ、そこを通じて官邸をどう動かすか、自民党をどう動かすかという話になった。しかしこの話は、実は私が現役の時に最後のまとめをした話で、その直後私はいませんから、これを政府と県が経済界をふまえて、県が庁議で決定して、国に出す、この時僕はいないんです。だから表の仕事に移るときには僕はいなかったのです。その後のことについては少し残念でならないけれど。

佐道 状況だけみますと、先生が県庁から離れられた十二月のあと、自民の税調等々ではとんでもないという話で盛り上がった。

山中貞則さんとか宮下創平とか林義郎とかあそこらへんがみんな大反対とかです。

吉元 私が現役の時に自民党のキーマンとして説得しなければならぬという人が二人いました。一人は幹事長の加藤さんです。加藤さんとはその中身の細かいことまではできませんでした。しかし、一国二制度論議はしました。突きつけました。私がメモを作って出したこともあります。十分とはいえないけれども、ああいう忙しい人と、日中三時間、都内のあるところで徹底的にそればかりで論議しました。沖縄の将来についてどうするつもりかという話をした。一国二制度的な仕組みをとつてもあり得るのではないか、ということ。

それともう一人は自民党大蔵族の親分である山中貞則さんですね。山中さんとは昔からよく知っているので、調整監時代からいろいろなることを……。私は自民党を通して各省庁の予算を取るというやり方は政策調整監になってからはやっていないんですよ。始めと終わりには挨拶ぐらいには行きますけれどもね。しかしこの問題だけは、向こうを通さなければいけないと思つたものです。から、議論を吹っかけました。いの一番に山中さんが、「大田は経済はわからないけれども、お前をつかって全県フリー・ゾーンを出すとははげしからん」と言うから、「ちよつと待つてくたさい、あなたはどこまで内容を知っているか知らないけれども、あれは私の案です」と言つたら、苦笑いをしていた。「いずれにせよ、先生とは徹底した話をやるために改めて来ますので、少し時間をいただきたい」と言つたら、「わかつた」ということで、それ以後会つていないけれどもね。

それからこの話の布石のために、その年の通常国会の中で沖縄米軍用地特措法の改正がされた時に、政党間で沖縄決議をしてもらつたんです。その時に実は、自民党・さきがけ・社民党の政策合意があるんです。その中に一国二制度的な仕組みという経済振

興の言葉を入れさせました。それから民主党と自民党との間で、一國二制度的とまでは書いていないけれども、かなり大胆な七項目か五項目でしたか、まとめをさせました。そういう意味では国政レベルにおける有力な政党にこれを理解させるという努力はやりました。例えばこれは全県フリー・ゾーンだけではなくて、ノー・ビザの問題などを含めてですね。いずれにせよ、沖縄を少し先に走らせてくれないかと。そのあいだ、許容できる範囲で基地を担ぎますよと。先ほど言った長さですね。

ですから沖縄の国際都市形成構想というのは、それだけが生きているのではなくて、基地問題、それから経済活性化のための仕組み、そして全体的に言えば完結するであろうもうひとつの課題、大田県政の三期目にやろうとしていたいわゆる特別自治区、そこまでは考えていたんですよ。

佐道 吉元先生を中心に県の側はそうかも知れませんが、政府の側は、例えば沖振法にいう八八年にできたあの（那覇）港の近くにあるものをフリー・ゾーンと言っていますが、あれは保税倉庫を拡大したものぐらいにしかすぎないですね。それを規制緩和して、本当に自由貿易地域を作るといっただけでも、これは一國二制度で大変なことですね。それをさらに全県フリー・ゾーンであるという、ほんとうに根本的に発想の転換があるような問題ですが、そこまでやるのか、沖縄は、ということが出てきませんか。

吉元 その議論より、沖縄は戦後二十七年間そういう体制にあった、一國二制度にあった、その時の経済の仕組みなどについては、かなりのところでフリー・ゾーンだったんですよ。まさにこれは自由な国際競争の中で生きてきたんですよ。その経験をしてる沖縄が、次に来るAPECの、その節目に来る日本を頭に置くと、今からどうすればいいかということ、沖縄が一番わかるのではないですか、という理屈なんです。

だから制度の中身がいいか悪いかは、そういう発想をする

地域が出たことに戸惑いと驚きと憤りを関係省庁は持ったかも知れないけれど、僕に言わせれば、むしろ遅いな。そういう議論をもっと先にすべきではないですか、と言いたいぐらいなんです。つまり二十一世紀の沖縄のグランドデザインを描く場合は避けて通れない課題です。私たちは現に中国の沿岸部の経済特区も見てきているし、香港もいつも見ているし、台湾も見ている。その中で本当に日本はどういう形で生きていくんですか。沖縄はもっとひどくなりますよ。ということは、私に言わせれば、もし日本にそういうシンクタンクか、国策を作り上げるぐらいの能力のあるシンクタンクがあるとすれば、もうすでに作っていてもいいはずだと思えますね。安全保障についてさえないから、ちよつと困るんだけれどね。

伊藤 まあ、そうですね。

佐道 そのときに自民党では加藤さん、山中さんに話さなければいけないと思っておられたということですね、ちよつと橋本政権の最後の段階で官房長官が梶山さんから村岡さんに替わりますね。これは影響がありましたか。

吉元 あつたと見た方がいいんじゃないですか。私は橋本さんが全県フリー・ゾーンをいきなりOKするとは思いませんでした。しかし、かなり、なんとかしなければいけない、どういう仕組みがあるかということは勉強された節がありますね。ただ単に、例えば空港の離着陸のため、あるいは燃料のための部分をどう安くするかとか、沖縄の自動車道の料金をどう安くするかという話もあつたけれど、そういうのは小手先の話で、私たちが問題提起したのは、受けとめたと思います。問題はそれを実施していくために、彼がどう考えていたかがわかりません。それほど総理とこの問題で詰める時間が私の時代にはなかったですから。梶山さんとの間ではもつと大胆に議論しています。なんで一國二制度が悪いのか。彼は悪いとは僕にひとことも言わなかったですね。どう

考えているかは明らかでなかった。つまりこの問題は、日本政府にとってみればかなりきつい課題なんでしょうね。国内のコメやその他を国際的な競争力の中で保護している。そしてそれが日本の国土を守るとまで言われているコメ、食糧問題に関わらせて国土保全の問題まで出してきている理屈の中で、沖縄地域が先行するというのはきついと思うね。それは承知の上です。でもこの問題は、日本にとって避けて通れないと思います。

佐道 自民党の政治家に会われる。それから財界の方にも会われる。その他例えば前々からの行きがかりでいうと、下河辺さんとか沖縄にもかかわっておられて、実際、裏でいろいろ動いておられたということですから、やはり下河辺さんとかとは連絡を充分とっていたんですか。

吉元 もちろん、私が行けない時は県の担当部長が走っていましたから、充分に意見交換をしています。ただ、下河辺さんが、それでわかった、その枠組で行こう、と言ったかどうかまではわかりません。国際都市形成構想をつくり、そして基地返還アクションプログラムを作ってやっていると、橋本さんや梶山さんの仕事を担いで、密使という形で沖縄に入って、その時にはさかんに論議をしました。だから基地返還アクションプログラムについては全面的にOKをしていない。しかし、なんとかしなければいけないということについては充分理解していた。国際都市形成構想については、ほぼ完璧に新しい全国総合開発計画の中に取り入れた。だからネーミングまで使われたということもありますけれどもね。全県フリー・ゾーンの問題についてはそれだけが問題ではなくて、その他たくさん課題があったんです。ずいぶんバックアップしてもらっています。しかし、全県フリー・ゾーンという問題については、下河辺さんのほうから最終的にどうだという結論を私自身は聞いていません。

佐道 もうひとつ例の梶山さんの私的懇談会という、島田さんの

沖縄懇談会がありますね。こちらに来ていろいろ調査をされたりしていますけれども、あの役割がはつきりわからないんですけれども。

吉元 出発は梶山さんのアイデアです。梶山さんは自治大臣も体験しているし、沖縄の市町村の財政事情は、官房長官になってこの問題にタッチするようになってわかるようになったですね。とりわけ基地を抱えている市町村でいろいろな問題が起こっているということがわかったんですね。ですからその部分もどうにかしなければならぬということ、まずは地域振興を、基地所在市町村に限ってやろうじゃないかというのが梶山さんの出発なんです。その時にその相談を受けました。私もそれに限って言うならば、賛成します。確かに過疎地域、離島振興というのがあっても、あるいは都市についてもいろいろな方式があるけれども、基地を抱えた部分については、防衛庁が抱えている基地周辺整備資金というもので事業補助をするだけでしょう。これだけでは、道路の補助金が足りないからそこから金を出すとかいう形で、ある意味では国の補助金行政の一環ですから、あまり効果がありません。そういう中で、じゃあ基地を抱えている市町村自治体が多分な部分をどう埋めていくのか。それを考える場として作りたい。特別な手当をしたいという。これには私は賛成しました。だけど私は明確に言いました。これが基地を固定化し、基地を容認するための仕組みとして出てきたら私は反対しますよ、と。それは全く違う、という形で出発しました。

出発したあとですが、一度このメンバーと、県の三役と担当部長との意見交換会を、那覇市内のホテルでやったときに、私は同じことを言ったことがあります。「あなたたちは基地、SACOの促進のためにこの問題をやっているとするならば、少しやり方が遅いんじゃないか」と逆の言い方をして、そのメンバーであった連合沖縄の渡久地会長から叱られました。「今の発言を撤回してほしい。私たちは基地固定化のために、あるいは基地受け入れ

のためにこの仕事があるというふうに受けたわけではありませんよ」と言うから、「わかりました」と。それで終わった。だからそういうことは絶えず私は牽制をし、逆な言い方をしながらチェックしたことがあります。しかしこれは私がある間の話です。

その後、去年から今年にかけて何が行なわれているか、ちよつと心許ないですね。ちよつと逆になつていっているのではないか。むしろ懸念した方向に走つたんじゃないかという気がしますね。大田県政との間で、官邸との間でパイプが切れて、沖縄政策協議会がストップした。その間、地域の基地対策、基地容認という国策を推進するための手段に使われたという懸念を、今はせざるを得ないですね。ちよつと厳しい言い方かも知れないけれど。

伊藤 稲嶺さんの方向はそうだといいことですか。

吉元 そうですね。彼自身メンバーだったんですからね。

■ 稲嶺県政への不安

伊藤 何か吉元先生が推進されてこられたものを、叩き壊すといえますか、そういう方向がかなり強く出ているというような印象を受けますが。

吉元 それは国際都市形成構想とか基地返還アクションプログラムとか全県フリー・ゾーンとかという、いわゆる三点セットで沖縄の二十一世紀グランドデザインを描いた部分を、そういう流れで自分は踏まえ切れないというところはあるみたいですね。かといつて、すでに国の基本的な施策である国土開発計画の中に織り込まれている部分は否定できない。これはわかかってきたみたいですね。

この間、今の企画担当の副知事に国際都市形成構想というのを変える、二十一世紀ビジョンを作り直せと言われて、事務方が一所懸命にそういう枠組を作つて、下河辺さんに相談に行つたら、下河辺さんが怒鳴つたそうなんです。「なんでそんな必要があるのか。百年から二百年の長さで腰を落着けて取り組むべき課題

を、知事が替わつたからといつて、どこを変えなければいけないのか、どこに問題があるか」と怒鳴られて帰つてきた連中がいるんです。この連中からメモを見せてもらったんですが、そういう意味では言われるように、私が作つたというよりも、大田県政がやつてきた仕事を消したいという流れがありますね。

伊藤 それは政策というよりも政治の問題ですか。

吉元 そうですね。政治の問題ですね。だから二十一世紀ビジョン、グランドデザイン、国際都市構想などの表現を変えて、二十一世紀経済振興プランという表現をしているでしょう。経済振興プランとなりますと、話題が限定されてきて、既存のものにどう乗せるかの話ですから、それはグランドデザインにもつながらないし、産業の将来を検討していく構造的な問題にもつながらない。しかし、そういう形でひとつずつ変えつつあるというのを最近感じます。

佐道 少なくともその国際都市形成構想を推進されているときには、沖縄側が問題提起をして、それに国がどこまで対応できるかというキャッチボールだったのが、今は政府が何をしてくれるかを待つて、受け身になつてしまつていっている感じがしますけれど。

吉元 沖縄問題を切り拓くために、悲しい事件もあった、県民の憤りもあった。つまり、九五年九月四日の問題、そして九五年十月二十一日の問題、そしてその間に大田知事が県民の意志を代表して、強制収用にノーと言つて、最高裁まで戦つた。そのときに国がどういふ気づき方をしたかですね。沖縄に対してどういふ目の向け方をしたか。村山さんは基地問題については、やはり放つておいたのが問題だったということ、政府をまとめて沖縄米軍基地問題協議会をつくり、そこに沖縄からの問題提起を受けて、それを日米間で協議していくSACCOの場を作つた。次に橋本さんのとき、その延長線上で沖縄が二十一世紀のグランドデザイン

を描いて、それを国に沖縄の二十一世紀はこうでなければいけないよ、今の延長線上では駄目ですよ、と行って、そのことについては橋本さんが基本的に捉えて閣議決定で沖縄政策協議会を作った。つまり二つとも、沖縄の提案を受けて検討する場なんです。各省庁が沖縄にこれをやりたい、あれをやりたい、そのために沖縄の同意を得るといふのは、通常の行政あるいは新しいプロジェクトであっても、それは沖縄開発庁という道があるんです。関係省庁、縦割りあるんだから。そうでない仕組みを官邸に作ったという意味は何か。従来、沖縄開発庁を通じては問題を出せなかった。基地問題だったら担当でないという。外務省も逃げる。防衛庁も逃げた。しかし、少なくとも基地問題について官邸と直接話し合う。私たちが生きていくための術をどう作るかと。

もうひとつは、二十一世紀のグランドデザイン、つまり通常の十ヶ年計画でやってきた復帰後の三次計画、振興開発計画、これでは十分ではなかった。こういう視点では駄目だ。つまり日本の各県に追いつけという仕組みでは駄目だ。沖縄から出された新しい枠組を作ろうと。これが二十一世紀の日本のあり方の、もうひとつの沖縄という地域のあり方として先行する仕事じゃないですかと。その協議の場を官邸で作った。閣議決定して、全閣僚と一緒に作った。これは沖縄から問題を提起する場なんです。それを政府全体が実施していくためにどうしたらいいのかと検討する場です。なんでもかんでもOKしろとは僕は言いません。しかし、少なくとも沖縄からの提案ありき、で動くところなんです。そうでないやつは通常の振興開発計画でいいんですからね。これを活かして切っているのかということになると、むしろ逆にその場を通じて、国が許容の範囲を広げているかも知れないけれども、僕に言わせれば矮小化した地域振興とかいう各目の中で、基地問題をなんとか片づけよう、押し込めようというところに、この沖縄政策協議会が使われ始めたという感じがしますね。これは作った意

味とも違うし、沖縄県民がそれを位置づけた意味とも違う。

そうするとこの県政は、そのあと二十一世紀に何をしようとしているのかというのがまだ見えない。まず基地問題をクリアすれば、次はポスト三次振計という形で、また国の枠組の中で沖縄の振興開発計画という次元にとどまるのかな。それでは、二十一世紀グランドデザインを国策として、全国総合開発計画に位置づけた意味がなくなってくる。そういう意味ではちよつと残念ですね。今の県政、知事、そのプロセスに関わっている人も中身を本當に知っているかな。もうひとつは、沖縄の経済界、経済の中で統計的に過去を知っている人、ものも言える人を副知事にした。この人は何をしようとしているのかな、というような意味で、県の三役が、名前はどうでもいいんですが、二十一世紀のビジョンを作り、提唱しながら、大胆に国に求めていくような仕組みがいま沖縄県から出てこない。なにかしら、市町村レベル、地域レベルの振興策を国に提出して、OKしてもらおう仕事に収斂している。

ほんとうは基地問題というのは所在地域の課題ではないんです。全部に被害が及ぶんです。影響が及ぶんです。だから名護のことばかりやっていてもしょうがないんです。北部のことばかりやってもしょうがない。じゃあ宮古の圏域はどういうかな。北部圏域は沖縄政策協議会で取り上げて二十万人構想を持っているよと。宮古圏域はなんでやらないのかという提案が地域から出てきたらどうするか。八重山からも出てくると、お前のところには基地がないから、と言うのかな。つまり、基地受け入れのための地域振興策、という形に完全に変わったんですね。これはちよつと悲しいですね。

伊藤 それは確かに悲しいことなんです。ただ経済界も一緒にやって作ってきたものを、しかもかなり重要なところにいた現知事が、それを壊していくというのは。

吉元 それは知事が壊しているという言い方をしたほうがいいの

か、それともやはり国、政治、それを一括りにして東京といつも言うんだけれども、東京から許容の範囲の枠組を押しつけられて、その範囲で動かざるを得なくなったとか。善意に理解してですよ。かつての沖縄と国との関係に戻った、というふうに最近私はあちこちで言っているんだけれど。

伊藤 だけどそれを実現するために吉元さんに知事にまでなってもらいたいと言った人たちは、一体どういうふうに変わっちゃったということですかね。

吉元 変わっていないと僕は思うんですね。今をどう乗り切るかの話で、それは行政に任せておく。それは当然のこととして、沖縄と国との関係ですから、自分たちも逆らえないというふうな仕組みですよ。これは悲しい仕組みです。だからある意味で、この知事がもし、フリー・ゾーンとか国際都市形成構想とか、とりわけ国際都市形成構想、この名前で走ったら、経済界はノーと言わないです。言えないです。基地返還アクションプログラムについてもノーとは言えないです。一度論議したんだから。あとは実効性があるかどうかというのは、日米政府の問題ということになるでしょうね。

全県フリー・ゾーンについてもあれだけ論議したんですから、具体的にどう走るかという問題だというふうにはいま理解しているんです。経済界の人と話し合うとね。いや、別にいいんですよ。将来どうせなるかも知れないよと。しかし、今の問題をやっているんですよ、という話ですね。二十一世紀の経済振興プランというやつが、非常に幅がないかたちで出てきているんですね。だからあれは二十一世紀の、というよりは来年、再来年、今年から何をやるかという、当面する緊急課題というような形で全部矮小化されているんですね。その範囲で言うならば、経済界は得ですよ。今すぐやってもらえるものは、全部吸い上げられていますからね。しかし将来の問題はと言ったら、いや、それは県

が次にやるでしょうという話ですね。

だからそこまで政治的には大田県政時代のことを否定しようとしているけれども、中身そのものは――。だって橋本さんのときの五十億も沖縄調整費、稲嶺さんになって百億、この中身は一貫しているんです。可能性調査です。国際都市形成構想推進のバブ港湾、ハブ空港。空港は調査が国レベルで動き出したですね、港湾も動き出す段階なんです。中身は少しあります。だから大枠としては、例えば普天間も、動いた場合は特別法をやりましょうと。これは私たちが出した内容です。そういう意味で中身は続いているんです。

伊藤 それで、その中味身続いているという限りに限って、今の県政に対して吉元さんはいろいろな形でアドバイスをなさるという立場にあるということになりますか。ちょっと微妙な話ですけども。

吉元 それは率直に言っておかなければいけないと思います。いくつかに分けなければいかんと思いますね。例えば実務レベルで、特定な部の特定な課単位で、その責任者、中心スタッフが、あれはどうだったかなということと教えてくれと時々来ます。それもきめ細かに話していますし、どう進めたらいいかについても、戦略的な話をしています。だからそういう意味ではあの仕事の流れというのは、今でも職場との間では、相談がある限りにおいて対応しています。部長クラスもちょっと政治的な話も交えながら、飛び込んできます。ここに来ます。それも、ここで突っ込んで議論をしています。その通りです。

それからもうひとつ上、つまり知事ですね。副知事、出納長レベルでは私のところには相談に来ないですからね、それは心配ないです。知事のところからは過去に何回か、この間ありました、最近はありません。知事との間では基地問題についてはまずはないです。一度、知事に昼食会に呼ばれて、昼食会は二人だけです。

が、じっくり話し合いました。そのときに李登輝さんと会った時の話で、またひとつ残っているよなあ、という話をしました。あるいはまた、中国福建省との関係でちょっと問題が起こると、電話を入れて、私がした仕事だけに、辛かったら手伝うよという程度の話はします。だから相談があれば断りません。

伊藤 少なくとも、ご自身が推進してきた仕事についてですね。

吉元 それもありますけれども、それは私のほうが詳しいということがありますが、それ以上に、言ってみれば、あいつは革新だとかなんとか言うけれども、行政でやっている仕事についてはそれほど大きな差がないですから。それは手伝えといえればいつでもアドバイスしますよ。ただ、基地問題の処理の仕方とかなんとかということについては、手順と基本的な考え方の違いが出た場合は、それはもう手伝えないです。

伊藤 例えば浦添の問題なんかもそうですね。

吉元 そうですね。これは私は那覇市とも話し合うし、浦添市とはほぼ全面的に相談を受けますから。それは細かい相談に乗っています。もちろん県もそのことを知っていますから、県の担当部長あるいは政策調整監などが、私に相談に来ます。そういう意味で、広い意味で言うならば、その種の問題については私が当初から言っていた枠組の中であるならば、手伝っています。

伊藤 かなり微妙な問題ですね。政治的に見られるとかですね。

吉元 そうですね、そのところは私自身もそういう意味ではマスコミさんにも取材という形では一切応じたこともないしね。ただ、「どうなっているんだ、書かないよ、流れを知りたい」というときにしょっちゅう飛び込んできますからね。夜呼ばれて飲んだり、各社と頻繁に意見交換します。

伊藤 でも記事にはならない。

吉元 それはもう、したら終わりですからね。一生つき合いませんからね。

佐道 今の県政がやっているのは結局、昔の沖縄と政府との関係に戻る方向になってしまったと。すると単純に考えると、かつて西銘県政の時にこの県政では沖縄はいかんと思われて県庁を辞められて、組合専従でやろうと。それで大田さんを担いでやられたわけですね。そうするとやはり論理的に言うところ、今の県政は長期的には沖縄のためにならんということになりますね。

吉元 論理的に言えばそうなりますね。首長の資質というのはいろいろ問われますね。政治家もそうですが、行政の首長の場合も問われますけれども、僕はやはりスタッフとして副知事や、一般職で言えば部長クラスと言ったほうがいいかも知れないが、どういうチームを作って行政という組織を動かしていくのか、これをやり切れなければ、いかに優秀な首長を作っても意味がないですね。

そういう意味で言うならば、今の県政というのは、首長としていいかどうかというのはいろいろな意見もありますが、やはり理念がないなという感じがしますね。理念がなく、それから目標を明確に置いていない。つまり基地問題だったら、将来どうするかというのがない。基地返還アクションプログラムは、議会では実行不可能だと思います、と言っているけれども、だったらどうするかということとの関連で今ある問題をどう対処しようとしているか。このつながりが全くない。経済的な政策の分野でも同じことが言える。ましてや平和問題でも同じことが言える。沖縄戦問題もそうですね。

だからそういう意味では、この知事が、それは私の口から言うに変だけれども、一般的な県民にとって、知事として十分だ、指導性のある知事だとはほとんど誰も思っていないです。でもこの人が一人でやっている話ではないですからね。だから副知事にどういうやつを入れてきたのか。部長クラスにどういうやつをはめて、いま何をしているのか、というのが全く見えないのです。漏れ聞くところも全部東京からの流ればかりで、それに対して質問

を受けて、知事が喋る、一週間にいっぺん喋るといふ形で終わっているでしょう。

ですから、知事の弱さは当然政治ですから、政治家にやりたいことはありますよね。でも何をしようとしているのか、それを県民に示してくれない。当面の問題をどう片づけようとしているのか、その次にそれがどうつながっているのか、どうしようとしているのか、なかなか出てこないところが、知事自身の弱さもあることながら、チームとしての県の三役体制に決定的な問題があるような気がしますね。

伊藤 今のお話で首長というのはいやかなり非常に強いものでしょう。沖縄の場合でもどこでもそうだと思いますが、知事になる、あるいは知事とコンビになる、ということほど強いことはないわけですね。一方、さつき国政のことをちょっとおっしゃいましたが、とにかく参議院で、これは繰り上げ当選ということはあまりあり得そうもないような気がしますね。もし、国政の場に出ると百三十分の一ということになりますよね。そうするとご自身の選択肢の問題で、国政の問題か、県政の問題かというのは大きな選択ですよね。

吉元 そうですね。それはあちこちから言われるんですが、そういう意味ではもう政治という場には出るつもりはないです。これはあちこちでひっきりなしに言っていますけれどもね。

伊藤 政治というのは、例えば知事というのは政治ですか。

吉元 そうですね。

伊藤 行政ではなくて。

吉元 いや、沖縄的に言うともう大変な政治ですね。それはもう国会議員以上の政治ですね。大臣以上の仕事ですね。政治ですね。沖縄問題というのは、アメリカの世界戦略との関連で言うならば、日本政府が沖縄の面倒を見てくれるとは思わない方がいい。非常に厳しい言い方だが、みずから自分たちの歩みを県民と一緒に話

し合いながら形作っていく中で政府に求めていくという形を取らない限り、かつての明治時代、大正時代、昭和時代（と言ったら、また笑われるけれども）の任命知事みたいな仕組みに、ややもすると陥ってしまう、容易に。他の県とは違う。そこが一番怖いところですね。県民性の問題もあるけれども、もうひとつはこれだけの米軍基地を抱えてしまうとそれと合わせて、沖縄が持つ地政学上の問題ですね。地政学的な視点から見ると、避けて通れない。だから沖縄がどういう生き方をするかは自分で……。そういう意味で言うならば、知事というのは沖縄の場合は大変で、やりたいからやろうという話よりは、お前には、能力があるかと言われるかねないほどの仕事じゃないですかね。

佐道 まだ、今の知事は一年ですよ。それでこれだけの問題が噴出してくる。別にそれをけしかけているわけではありませんが、あと三年ありますけれども、その間に情勢はどう変化するかまだよくわからないということもありますので、その時には先生の名前もまたいろいろ上がってくるのではないかと思います。

吉元 いや、もうないですよ（笑）。もう過去の話ですよ。

佐道 吉元さんという人は本当は沖縄独立を考えているのではないかと

いかという人がいるんですが、どうでしょうか。

吉元 （笑）。

伊藤 笑っていますからね。

吉元 みんなそう言いますね。でも遠くはないですよ。やはり、これは運命的なものがあるかな。本能的に言うとも、沖縄で育つてこういう体験してきたものとしていうと、独立とまでは言わないけれども、特別な自治区になつてほしいな。それは日本国憲法で許容される範囲で、という前提ですよ。それを言わないと独立だといわれるからね（笑）。

伊藤 どうもありがとうございます。大変恐縮ですが、速記を起こさせていただきます。

（終了）

吉元政矩 オーラルヒストリー

第4回

日 時：2002年7月30日（火）

開始時刻：14時00分

終了時刻：18時00分

開催場所：那覇市・沖縄21戦略フォーラム事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

インタビュー主要項目

今回は、以下のような主要項目を中心に、年代順に少し細かくいろいろな問題をうかがいたいと思います。よろしくお願いいたします。

I 大田県政以前の時代にうつて

1. 西銘県知事時代への評価について。前回のお話では、西銘知事時代は基地問題はまったく動かなかったというご評価でした。ただ、こまかく見ていくと西銘氏も二度にわたって渡米し、いわゆる「知事事案」、そして知事も入った「沖縄県軍用地転用促進・基地問題協議会(軍転協)」による「軍転協事案」などがありました。その結果、平成二年六月に「十七施設二十三事案」の返還にむけての日米間での調整・手続が進められることが合意されました。こうした動きに対しては、あまり評価されなかったということでしょうか。

2. 沖縄県と政府の関係をについてのかなり重要な問題ですが、いわゆる三次にわたる振興計画についてのご評価をお聞かせください。それを踏まえて、「国際都市形成構想」が発想されると思いますが、政府による振興計画の功と罪について、どのようにみておられるのでしょうか。

3. 上の問題と関係しますが、沖縄振興計画の特徴は、沖縄県ではなく政府が中心になって策定するという点です。他の地方自治体は、自らの振興計画は自らが策定するわけですが、沖

縄は違っています。この点、なぜそうなったのか、ご意見をお聞かせください。また、この問題は沖縄ではどのように考えられていたのでしょうか。

II 大田県政時代にうつて

1. 国際都市形成構想と基地返還アクションプログラムについて、九五年九月までの段階に関して、以下のような点について少し細かくお聞きしたいと思います。

① 国際都市形成構想の基本的な考え方として、米軍基地の存在を念頭におかず、沖縄をいわば「白いキャンバス」に見立てたところから同構想は始まっています。こういう構想はいつから考えておられたのでしょうか。

② 九五年はじめに、「国際都市構想」に関する新聞記事が表れてきます。このころから同構想を外に出してもいいとお考えになったのでしょうか。これと関連して、九五年はじめに基地返還プログラムの策定がいよいよ始まっていきます。この時期に国際都市構想と連動して基地返還プログラムの具体化に入られたのは、どういった見通し・戦略からだったのでしょうか。また、国際都市構想、基地返還プログラムは、当初どういったタイムスケジュールでの実現を考えておられたのでしょうか。

③ 国際都市構想は、九五年のころは、まだ本島中南部を中心とした交流拠点構想が主軸であったように思います。振計

にかわって沖縄の将来プランになるためには、やはり産業振興問題が重要な部分になると思いますが、その部分は残念ながらまだ不十分であったと思います。一方で、国際都市構想とは別に県庁で産業振興策を策定しておられたというのですが、これと国際都市構想はどのように、いつから関連させていくというお考えだったのでしょうか。

④基地返還アクションプログラムについて、三つの時期に分けて段階的返還を求めておられるわけですが、それはどのような方針のもとに分けたのでしょうか。

2. 九五年九月以降の問題について、以下のような点についてお聞かせください。

①事件後かなり早い段階で、村山総理に国際都市形成構想と基地返還アクションプログラムを示されています。まだ、県として完全にオーソライズされていない段階で出されたわけですが、もう出すしかないという判断だったのでしょうか。

②右とも関連しますが、国際都市構想はまだ本島中南部が中心で、全県にわたって詳細なプランができているわけではありませんでした。早急に全県プランをまとめると同時に、県庁内や県内かく団体等との意見調整が迫られたわけですが、これにはどのように取り組まれたのでしょうか。

③九六年九月の橋本総理による内閣総理大臣談話には、二十世紀の沖縄のランドデザインという言葉が出てきますが、まだ「国際都市形成構想」という言葉は織り込まれませんでした。これは同構想が県でまだ完全にオーソライズ

されていなかったからだと思われるのですが、それだけ時間がかかったということでしょうか。同構想はまだ全県フリーゾーンの提唱を行っていない時期でしたが、県内各勢力はどういった反応だったのでしょうか。

④九五年に「沖縄基地問題協議会」ができ、翌年「沖縄政策協議会」が出来ます。こういった協議体は政府の提案だったのでしょうか。沖縄そして先生の注文はどういったことだったのでしょうか。

⑤沖縄政策協議会が出来ると同時に、自民党や社会党の中にも沖縄の問題を考える組織ができます。これらとの連絡・調整はされたのでしょうか。また、九五年十二月に、「自民・社会・さきがけ」の与党調査団が沖縄に来ます。鳩山氏、菅氏、加藤氏など、キーパーソンが参加していますが、この調査団について先生はどのような対応をされたのでしょうか。

⑥沖縄政策協議会ができると、沖縄振興問題について、十のプロジェクトチームができて、関係各省が参加してきます。すると沖縄県庁対主要中央官庁という構図で審議が進められますが、これは沖縄県にとってはかなりきつい審議になったのではないかと推察します。この点についてはいかがでしょうか。

⑦上の問題とも関係しますが、結局十のプロジェクトチームには大蔵省すなわち財政当局は参加しませんでした。これは大蔵省が嫌がったということでしょうか。

⑧ 一方で、島田懇談会の事業が始まり、直接各自治体との折衝が始まりました。前回のお話でも島田懇談会の行方についてかなり危惧しておりましたが、現在はどのような評価をしておられますか。

⑨ 田中直毅委員会ができて、全県フリーゾーンの問題が一気に浮上しました。前回のお話では、沖縄にとって全県フリーゾーンは意味のあるプランであったというご評価であったと思います。ただ、今も国際都市構想は全県フリーゾーンの登場で内容が変質し、議論も混乱したという見方もあります。確認になりますが、全県フリーゾーンへのご評価をお聞かせください。

⑩ 国際都市構想や基地問題アクションプランとは関係ない問題ですが、大田県政時代の問題点として今挙げられているのが、「モノレール建設」「高速船」「福建友好会館建設」です。どれも沖縄県がかなりの財政負担を負うことになるというのが批判の趣旨だと思いますが、これについてはいかがでしょうか。

Ⅲ 大田県政以降の時期について

1. 二〇〇〇年七月、沖縄サミットが開催されました。サミット自体は、先生が副知事時代に誘致を考慮しておられたということとは前回うかがいました。前回はサミット開催前でしたが、今、沖縄にとってサミット開催地となったことの意義についてはどのように考えておられますか。

2. 新たな沖縄振興特別措置法について、とくにその目玉といわ

れる「金融特区」等の構想については、先生はどのように評価しておられますか。また、普天間基地移設問題とも関連して北部開発問題が議論されていますが、先生ご自身は、今の沖縄の経済振興あるいは「自立経済」の育成といった問題について、どのようにお考えでしょうか。

3. 普天間基地移設先として名護市が決まりましたが、稲嶺知事の求める「十五年使用期限問題」など、まだ未解決の問題もあります。一方で海兵隊の移動問題も議論されていますが、沖縄基地問題の展望さらに政府と沖縄との関係など、現在どのように考えておられるのかお聞かせください。

■出身地・与那国

伊藤 前に伺った時に、お父さまの話が多少出ましたですね。途中で、お父さんのお話が一回か出てきたと思いますが、お父さまは県政に何かの形でずつとあと関わられていたのでしょうか。

吉元 いやいや、行政とまったく関係ないです。

伊藤 何をなさっていらつしやったんですか。

吉元 うちの親父は、与那国の出身ですから、ああいう地域で鳥ですから、比較的頭がいいだろうと思われるやつは、子どもの時からみんな地域で育てるんです。それで、奨学金を出して、中学に行くわけです。あの頃、那覇商業に出て、世界に出ていく。うちの親父なんか後輩をつくるというので、西銘順治さんはその親父なんか育てました。長期的な与那国の跡取りという形です。それから、西銘順治はもちろん知事。それで、西銘順治さんが育てたやつが別におるんです。この人はその種の社会、政治とかに入りませんでした。一回復帰直後の知事選に出たんです。ところが、その人は公認会計士でアメリカの資格を持って、ちょっと出来すぎて、沖縄の企業は彼を使わないで、本当の公認会計なもんだからね（笑）。もちろんアメリカ施政時代ですから、全部企業から声かけて、いまは生きておるんだけど、この人が育てるべきだったのが、この次予定していたのが僕だったらしいんです。これとは僕はまったく違う畑を走っていますから、そういう流れのなかで、うちの親父は死ぬまでは、絶えず何かあると、西銘さんのことを思いながら。郷友会の会長を長くやっていましたのですから。

伊藤 なんの会長ですか。

吉元 郷友会。与那国の出身者が沖縄本島にたくさんいますね。それが集まって、与那国郷友会というのをつくるんです。この会長を長いことやって、後輩の面倒をみるものですからね。

伊藤 お父さんはずっと与那国にいらつしやったわけではなくて。

吉元 戦前は与那国ですが、戦争中は台湾、敗戦で与那国に帰ってきて、食えないから石垣に出て、八重山電力株式会社をつくったりしている。そのあとはここに僕が呼んで、もうほとんど仕事をやってませんから、余生を送るために、郷友会の面倒ばかりみています。

伊藤 でも、やつぱり一応政治の世界にいろんな顔があつたというわけですか。

吉元 顔は広がったですね。当時（八重山在時代は）の民主党の総務をやっていましたからね。まったく畑違いですけど（笑）。私なんかとはね（笑）。

伊藤 お父さんのそういうもので、吉元先生はずいぶん利用できたという大変ですけども。

吉元 親父の世代のちよつと下というんですか。西銘順治さんの世代の人々は、かなり私を彼らが知っておったから、息子だというので、ちよつと当時の琉球立法院でなんか悪い法律をつくらうとする時に、私たちは反対運動でデモをかける。それで、議会内に入る。話をつける時は、当時の自民党の大物立法院議員の連中が私を呼び出しまして、「あんたが話をつける」ということで、私はデモのメンバーのなかから出て行って、収める時の話をする。というような意味では、彼らが僕を知っておった。これはある意味では、僕は大田県政をつくった直後は、それはかなりいい意味での経済界、あるいは自民党政治、その直後、西銘さんが国政、衆議院に出たあとは、県の仕事で私が上京する度に、彼が「僕の部屋に來い」ということで、「何しに來たか」「こういう課題だ。先生のところにいちばん最後に來ようと思った。反対派だから。これは冗談です（笑）」と言いながらも、結果的には、最後の最後は西銘さんが居室で、問題の詰めは自民党の誰と会えばいいの

かということはおドバイスしてくれたし、彼自身がまたやってくれた。ですから、そういう意味では親父の顔、親父のそういうつながりというのがかなり大きな意味を持ちました。

佐道 与那国の若手をそうやって育てていこうという仕組みは与那国特有のものでしょうか。

吉元 これは沖縄本島にもあるんです。たとえばもつともいい例というのは、ずっと北のほうに長寿の村で大宜味というところがあります。大宜味というところがそういう形で医者育てている。医者なんてなかなかあんなところまで来ないですね。だから、子どもの時から優秀なやつに奨学金を出して、そして、医専まで行かせて、卒業して開業ができるようになったら呼んで、それで、大宜味村で医者を開業する。これをずっと続けていく。与那国だって同じです。俺の親父の先輩である池間さんという人は医者です。この人もみんなが育てて、医者になって、開業する時に与那国に帰って、死ぬまで与那国で開業していました。そういう意味では、医者はおるから、ちょっと商売をやらんと食えないから、与那国は経済がうまくないといつて、うちの親父は経済の勉強をせいで言われて、那覇商業に行かせたということです。そういう奨学金を出すための育英会のようなものはあちこちにあつたようです。いまでも残っています。

伊藤 有力者がお金を出して？

吉元 いや、必ずしも有力者じゃないんです。原則としては、集落のなかで基金をつくるんです。

伊藤 財産に応じて、みんなが寄付すると。

吉元 集落の政（まつりごと）、催物がある時に、カンパを募って、それで何かをやつて、余つたやつを積み立てておく。積み立てるために金を集めるというのは少ないんです。何かをやる時に上乗せして集めて、こういう催物で余つたから積立てにしますという形です。

伊藤 それの単位は？

吉元 与那国の場合は島です。

伊藤 島といったら、相当人口が多い。

吉元 いや、大したことない。二千名余りです。一時期八千名までいったから与那国町になったんだけど、いまでは千七百、千八百には及びません。

佐道 与那国の集落がありますよね。それが一緒になる形でやるわけですか。

吉元 もともとは三つとも、沖縄に来て、郷友会は別なんです。でも、それをトータルする郷友会が一つあつて、大親分がおつて、これが元締めで与那国郷友会というのをつくつた。それで、勝手にいよと、集落ごとで自由に郷友会行動はやつていいよと。

佐道 沖縄における郷友会というのは、よそとはかなり違う存在なので、これは何人に伺つても、よくわからないところがたくさんありまして、ちょっとバッググラウンド的にもつと教えていただけませんか。

吉元 これは離島になればなるほど、結束が強い。そういう意味でいうと、いま、私が言う与那国なんていうのは、まさに那覇にある与那国郷友会というの是一年に一遍総会を一月にやる。前は一月十五日成人式、昼は市町村ごとの自治体ごとの成人式。夜は郷友会メンバーの子どもの成人を集めてお祝いをしてやる。その日にその時間にその場で、今度は六十以上の方の還暦の祝いとか、米寿の祝いという人々を重ねて一緒にしてお祝いする。これを毎年やるものだから、みんなが集まるんです。先輩、自分の家族、親戚も全部集まる。そこは若い者、子どもとお年寄りとの間でも顔合わせ。与那国というものを実感する場という形です。それで、これは夏になると、運動会シーズン、学校の運動会が一段落した時点で、今度は郷友会ごとに運動会をやります。これは若者の遊びの場です。でも、これには年寄りも全部行く。だから、四つ這

いの赤ちゃんからお年寄りまでゲームをつくって、一日中やる。

佐道 皆さんが集うわけですね。

吉元 そうそう。これはまたチームですから、与那国でも、祖納だつたら西一、西二、西三、東一、東二、東三と組がある。祖納だけでも六チーム出る。久部良は一チーム出る。比川は一チームで、八チームが自分のテントを張ってそこへ集まって応援しながら夕方までやる。それを仕切るのは、郷友であつて、学校の先生であつて、大学生、高校生、中学生、スポーツをやっている連中が前もって集まって、何月何日に郷友会の運動会をやるので、そのために誰が何の担当と決めて、全部カリキュラムをつくって、全部組み合わせて。

佐道 自治的にそうやっているわけですか。

吉元 百%です。

佐道 事務所に専従の代表がいるということはないですか。

吉元 それはいいです。それは会長の家が事務所、連絡所です。だから、親父の代は、わが家が連絡所です。郷友会の連絡所という形です。

佐道 会長というのはどういうふうにして選ばれるんですか。

吉元 みんなの互選。だいたい会長は長老。採めると、この人の言うことだつたら聞くだろうというような人格者というのかな。ちよつと抑えの利くやつ。あとは副会長、幹事長というのがおつて、これが仕切ります。五十代前後の学校の先生がだいたい中心です。先生あたりが中心かな。行動力はあるし、何かあると、若い郷友の生徒を引っ張り出してきて手伝わせるといふのがありませんから、そういうパターンです。

伊藤 学校の先生というのは非常に地域に密着しているんですね。

吉元 大きいですね。県庁の職員の名前を覚えるよりは、学校の先生になつたものの名前のほうが郷友の皆さんは覚えやすいで

す。そういう意味ではどの先生が島に帰つたよ。校長か、教頭かとか言つてね。だいたい学校教育の現場では、小学校も中学校も、最後の仕事、教頭以上になると、地元に戻ります。若い先生、新米の先生は人材が十分だということもあるけど、那覇で教育を受けるでしょう。那覇から出身地別で、成績順で採用しますから、これは与那国のやつが与那国に来ると限らんですよ。だから、そういう意味では、教頭以上の連中、島出身のやつを最後に帰して、彼らが先生の教育する。地域社会のなかに溶けこむ教育。

伊藤 それは教育庁の方針なんですか。

吉元 いや、案外、教育委員会の要望が強いんですね。

佐道 今でもそうですか。

吉元 だいたい同じことですね。

佐道 郷友会が選挙の時、応援母体になるとか。

吉元 原則は、復帰前は、郷友会が選挙部隊になつたんです。郷友会の名で、市議員選挙をやるとかやっていたんです。しかし、復帰後は薄れました。これをやると、集まらなくなつてきた。郷友会も分裂する。選挙の季節になると、役員会を開いて、投票が終わるまでは郷友会活動を止めると。きょうからは選挙が終わるまで、郷友会活動はやらんということ、あとは自由。ですから、郷友会の名前は使わせない。そうは言つても、運動をやるやつは顔見知りの郷友を集めたいよね。だから、たとえば西銘さんの時代は、「西銘順治を励ます与那国郷友の会」。「の」を入れるんです。おかしいじゃないかと文句を言われたら、いやいや、郷友会と書いてないだろうと喧嘩するようになったんです。そのあとになつて、まぎらわしいということで、「与那国郷友有志会」となりました。だいたいそういう名前を付け加えて、その地域を表す。それでも、いまはだんだん薄れてきたけれども、それでも力を持っているのは宮古出身です。宮古群島の出身者はそんなことは金繰り捨ててやるからね(笑)。金で動くときまだ言われている。実

際、金で買収というよりは、活動資金をみんなが出し合っていると思います。

伊藤 島によつて、差があるわけですか。

吉元 ありますね。極端にあります。宮古の場合は、どちらかかというところ、本当に向こうで将来ずつとおるといふのは長男ぐらいしか残りませんから、全部出ていきますから。そうすると、連中は親戚を訪ねたり、郷友の先輩を訪ねてきて仕事に就くでしょう。公務員試験、学校の先生の試験も、公的試験を受ける以外の仕事というものは人的なつながりでほとんど入りまますから、面倒をみるのは島の郷友で、誰かが面倒をみる。必然的にそこに集まって、そのボスがやる。これはどこでも同じだと思います。この動きがいちばん強いのがいま言った宮古。沖縄で言うならば、ずつと北のほうの国頭村というところ。このへんは強いんです。たとえば沖縄でいう国頭組というのは国頭出身ですから。国頭組の系列がたくさんあるでしょう。だから、島の出身でなんかやややというところで、全部つながっています。いまでもそういうものが残っています。

佐道 たとえば沖縄における土木建設業は一つの重要なポジションを占めていますけれども、いま、代表的な国頭組と出ましたけれども、ほかのこともありますね。たとえば金秀とか。

吉元 いま、力を持っているのは国頭組、金秀建設ぐらいでしょう。あとは内部的には人材が優秀なやつを集めるとなると、血縁関係がだんだんみんな少なくなつて、ですから、もう選挙で労働者を動かすというのはちよつとできなくなつた。また、目を付けられる。批判されるというのもある。ところが、まだ、一族を中心にやっている中核部はがむしゃらに選挙のときは突入しますから、そういう意味では國場とか金秀とか。もともと大城組という強いところがあったけど、そこはばらけちゃつてね。選挙の時に、名前は出ないぐらいです。新興勢力としては、下地幹郎議員

の親父がやっている大米組(だいやねぐみ)などです。ここは地域に対して、宮古に対しても、影響力が強いんです。企業もリーダーになるものの体質にもよります。これが昨今の公共事業の予算削減との関係で、少しばらけ始めているとは言っています。しかし、沖縄はまだ基地問題で金が落ちるからね。これは大きいです。たとえば今度の普天間の移設問題なんかでも、埋め立てにするか、杭打ちにするかで、どこの企業が関わるかでしょう。杭打ちだったたら、本土のゼネコンだ。では沖縄は排除かという話でしょう。埋め立てだったたら、沖縄でできるから。その場合でも、名護でやるんだから、北部の業者を使い、というのが地元条件なんです。中南部? そんなのだつて、ほつとけばいいんです。なかでも温度差はやつぱりあるんです。だから下地幹郎議員が出した嘉手納統合だという案。これだと、普天間の跡利用開発も速くなるし、沖縄だけのゼネコンが全部関わられるというような意味で、静かに、土建業のなかに広がり始めています。

佐道 現在の話はまたあとでと言いますか、後半の部分で。

伊藤 お父さんのことは前にチラツと出てきたんですが。

佐道 断片的に。

吉元 もともと我が家のルーツが首里から派遣されたらしいんです。ですから、うちのじいさんなんかの時代までは、与那国のいわゆる元締めみたいな人です。行政とは違う実権派で、戦前は「同志会」という名前を使っていたようです。これは勝手につけたんでしょ。なんとか会というのがいつぱいあつたらしいです。戦後は「振興会」と言っていた。それで、スイス方式です。難しい問題が起きると、有権者を全部集めるんです。私は台湾から引き上げてきて、小学四年の頃ですけど、じいさんに手を引つ張られて、なんか知らんけれども、着いていって、夕方日の落ちる頃、涼しくなつて、学校のグラウンドで、校長先生が台を置いてそれに小さな小学生の机を置いて、椅子を置いて、それにじいさんが

座る。俺がそのそばに座る。全部集まります。運動場一杯に、久部良からも比川も全部来て始まるわけです。大論争です。なんかやかや言うでしょう。利害関係も絡む問題なんでしょうね。最終的には、いろんな意見を聞いて、うちのじいさんがそれを整理して、結論をこれでいこうと。それで、まとまる。まとまったら、あとは反対派を認めない。つまり、議会や行政が処理できない課題などを、あるいは行政が決めるにはあまりにも問題が大きいうようなことを束ねたらしいです。そういう役割が我が家にあったようなんです。ですから、私のじいさんの時代までは、親父はそれを嫌がって、商売をしました。だから、政治に関わらなかつたわけだけど、私のことをうちの親戚の長老たちは、やっぱりお前は吉元広栄の孫だというんです。

伊藤 「こうえい」ってどう書くんですか。

吉元 「広い」という字と「栄える」です。広栄の孫だという言い方。これはいまでも付いて回ってます。だから、那覇でも、かなり長老の人は僕には「やっぱりお前はおじいさんの子だ」という（笑）。じいさんも親父も、我が家のルーツについては、いつも与那国の按司（アジ）。その地域を支配するやつ。こういう言葉を使っていたんです。租納のことを浦野と言っていたようですよ。浦野の按司ということですよ。私はそのことについてどうも納得いかないんで、教育庁の連中に調べてもらったら、どうも違うみたいだという話で、もともと与那国じゃないみたい、という話でした。吉元さんはなんか中国らしいよという話だった。それで、ほとんど調べていったら、どうもそうらしいよとなって、ちよつとあいまいだったけど。また、大田県政の二年目だったかな。僕が福建省と沖縄との交流、蓬萊経済圏の再開のために六百年の歴史を検証しなおしてみようという事で乗りこんだ時に向こうから先に言われたんです。「吉元さん、ルーツに行きますか。ご案内しますよ」と。向こうは前もって全部調べて、沖縄でどうい

がいて、どういう県政をやっているかを全部調べておったんでしよう。そこにはまだ行っていない。向こうから言われて、あつ、間違いないなと思った。その後、本格的に調べてもらったら、それが一五九三年かな。一六〇九年が薩摩の琉球侵略でしょう。その直前の十三年前ですね。そのあたりでもう一度琉球王が北京に要請する。その時に派遣されたのは二世帯ある。そのうちのひとつたんです。「阮」と書くんです。

伊藤 なんとお読みするんですか。

吉元 「ルアン」と読むようだが、中国読みでは、ゲンという読み方をするそうです。これはベトナムの。

伊藤 ゲン・バン・チュウ。

吉元 あれらしいです。どうもそれらしい。それで、この（事務所）近くであつたらしいです。いま、本家にあたるのが那覇市役所の近くにあります。そこまでは探ったんだけど、まだ行っていないです。

伊藤 その方も吉元といっているんですか。

吉元 それは阮という名前から、二代目の三男から出ているんです。そのなかに八世帯ぐらい名前があるんです。そのうちのひとつが吉元です。前田とか、なんとかという名前はたくさんあるんだけど、このなかに元が付いているのがね。

伊藤 元（モト）はそれなんですか。

吉元 そうなんです。ですから、そこまでわかって。

伊藤 「ござとへん」が取れて。

吉元 そうなんです。「ござとへん」が取れたんです。これが沖縄本島で三カ所。久米島というところで一カ所。それに与那国、波照間、全部端っこです。鹿児島、熊本、博多にもあるというんです。熊本にあるのは訪ねていったけど、これは関係ないって。

佐道 熊本のほうですから、全然わからなくなっているんでしようね。

吉元 いや、意外と調べてみたら、やっぱり関係あるそうなんです。琉球からの進貢船、あるいは、鹿児島あたりになると、江戸のほりといつて、鹿児島に一六〇九年以降は琉球国から人質を出しておったというような流れで向こうまでいった。元は、首里城では黄色い帽子を被るんです。黄色い帽子で、黄色い帯、これはかなりハイクラスらしいんだけど、情報、通訳などを担当するセクシヨンらしいです。ですから、そういう中国や本土や朝鮮や東南アジアなどの航海などに関わっていたようです。そういう意味で、琉球のいちばん端の波照間とか、与那国とか、中国に行く時の一日の行程で久米島とか、そういうところですか。なぜかこの名前が奄美にないんです。ところが、奄美には、吉元はないけど、元（ハジメ）ですね。最近有名な歌手。

佐道 元（ハジメ）ちとせ。

吉元 あそこも元なんですすよね。だから、これは一回調べんといかんなど思っているんです。

佐道 それは面白い（笑）。

伊藤 一応前にお送りしたと思いますが、前にやった速記ですが、ああいう形でやろうということを考えていたんですか、よく考えてみますと、やっぱりあれだと、関係者しか配布できないんです。

佐道 先日申し上げた大学で作る報告書の形です。

伊藤 一般にちよつと関心のある人が手に入れるというのは非常に難しいので、できれば、商業出版にのせたほうがいいんじゃないかなということを感じまして、そういうことをちよつと打診してもらったんです。可能性がないことはないかと。

吉元 どこにですか？

佐道 「新報」です。

吉元 「新報」だったら、三木、山根、前泊？ あのクラス？ 誰がいちばん詳しいかな。三木も山根も後輩だけど、県の仕事との関係でいうと、前泊がいちばん。この人は必要以上に調べてい

るみたいだな（笑）。

伊藤 ちよつとそんな感じがしないこともないですね。

吉元 「新報」の編集委員の一人が一度まとめたという話があるって、この話とは別です。まだ早いよということ断った。大田さんも国政に出て、これ以上あとがないから、そういう意味では、タイミングとしてはそろそろかなという気はします。

伊藤 私の感じでは、ああいう報告書の形で発信しますと、数があるものすごく限られちゃうんです。ですから、やっぱり沖縄というものを全国に発信するには、商業出版で、「新報」だって、一応全国ネットで販売できると思うので、ちよつとわれわれの報告書みたいな形でやるのは、非常に自分たち自身としてはうれしいんですけども、そういうことを考えると、どうしても情報が限られてしまうので、折角発信するんだつたら。

吉元 これはこの二、三日で結論出しましょう。

佐道 一応「新報」の側で言っておりますのは、今回、またお話を伺わせていただきますけれども、それを前と同じ形で速記を作らせていただいて、記録としては前と同じ形でやらせていただくんですけれども、そのなかで、たとえばいざ本になりますということを前提にして、重要な部分だけ何回かの連載で出していただいて、そして、最終的に本にまとめるという形。ですから、記録としてはかなり膨大な量を聞かせていただいていますので、それをだいたいお削ぎ落とした形になると思いますが、再編集し直して、そして、本ということになる。私たちがほかの東京のほうでもやっている出版と基本的には同じ形ということではあるんですが。

吉元 二、三日ちよつとお待ちください。

伊藤 お考えくださいますか。

吉元 はい、基本的には問題ないと思います。

伊藤 吉元先生、これからのこともありましようから、いろいろお考えくださって、それで、よろしいということであれば、そう

いうふうに進めますし、元通りのほうがよろしいということであれば、そのようにやります。それでは本題のほうに入らせていただいて、少し前に、おもしろいお話を伺ったから（笑）。

佐道 そうですね。前に、九九年十一月ですから、あつと言う間に三年ぐらいたっているんですが、そのあとでそれこそサミットも実施されたり、前に伺った時がちょうど稲嶺県政が誕生して欲しい一年ぐらいの時で、それでもこんな問題が出てきているという感じだったんですが、いよいよ今年、また県知事選挙があるということ。ですから、稲嶺県政自体の総括をされるということもあります。前回伺ってからの以降、このあとずいぶん大きく沖縄も変わったという感じがします。その問題がまず第一点と、それから、やっぱり前回われわれとしても伺いきれなかった部分というのがありますので、この補足ということ。それを今回集中的にお話を伺いたいということで、大田県政以前の部分と、それから、やっぱり大田県政時代のお話と、ここはかなり中心になります。質問項目自体は、大田県政時代の話がずいぶん中心にはなっていますが、それといま申し上げた大田県政以降の話、沖縄の将来像ということも含めて、これは是非いまの段階でお話を伺わなければと思います。

伊藤 そうですね。その時はこのフォーラムが立ってないですね。佐道 立ってないです。だから、ここを立ち上げられた考え方ということも含めて、順序立てて伺っていただければということ。質問項目自体は、思い浮かぶ項目を雑多に並べたものですが、別にこれだけにこだわっていただく必要はありません。順番からいきますと、先生ご自身はいろいろ組合の運動をしながら、西銘県政時代でも、沖縄の将来構想みたいなものに関わって、あるいはご自身でおつくりになったということを伺っていたんですが、西銘県政が三期十二年続いたと。これでは基地の固定化でどうにもならないということもあって、大田さんを担いでということ

になります。細かなことにはなりますが、たとえば自治体外交という形でいうと、西銘さんの時期も直接出掛けてということがいろいろあったわけですね。そういうこと自体は、先生のように組合の活動をされていたような方々とか、基地の問題を正面に持つておられた方々はあまり評価をされなかつたんだろうかということがありまして、そこらへんの問題を。

■西銘県政——那覇空港拡張構想

吉元 西銘さんの一回目の訪米は、私が労働組合の委員長を終わって、県庁の職場に戻った時なんです。当時、私自身が県の企画開発部の企画調整室というところで、県全体の計画の策定する場所を担当している時に、実は、那覇空港の機能強化をしようとして、那覇空港は第二種空港で、国の管理です。県がストレートに計画をつくって国に要請するというのは、なかなかうまくつながらないということがあって、復帰前から、那覇空港は軍事空港として使われていた。それに民間を入れていたのです。復帰直前にアメリカ側を出して、その代わり自衛隊が入ってきた。いずれにせよ、危険だということが一つあり、将来的なことを考えようということ。復帰直後から那覇空港に、もう一つ沖合に滑走路をつくらうという構想を民間サイドが先に持ったんです。これは國場組の当時の社長であった國場幸太郎さんという方が県内の経済界をまとめて、あらゆる団体を網羅して、当時、沖縄県労働組合協議会、いわゆる県労協がそれに加盟して、那覇空港の拡張を要求する県民会議をつくって運動しとった時期がある。つまり、沖縄の運動というのはある種労働組合と企業との労使関係問題だけじゃなくて、沖縄をどうするかということがずっと付いてきていましたから、そういう意味では、復帰後の沖縄のあり方ということ。労働組合も関わったということがあった。そういう運動に私自身も労働組合時代に関わっていたものですから、職場復帰したら、

那覇空港の沖合展開関係を担当している企画調整室のなかで他のチームがやっていましたので、それに関心を持ちました。國場幸太郎さんが西銘知事に毎回要請に来る度に、背広の内ポケットからカラー刷りのA4版の絵を出して、開けて、知事の前に置いて、「沖合に一本滑走路をつくつたら素晴らしいよ。やらんといかんよ」と説明する。当時の構想は、空港をつくるだけじゃなくて、いまの自衛隊基地になつとる部分も全部空けさせて、そこも国際交流のための場にしよう。「日本・中国・東南アジア交流センター」という構想もあつたんです。これと、ワンセットで空港の展開も考える。で、国際的なフリーゾーンをつくるという構想ができた。これの実践を県に求めた。ところが、西銘さんは、自衛隊の基地がはまっているし、これを除けるという発想はなかった。だから、行政の仕事としては、最初に沖合展開だけであつた。基地問題をどうこう言わんと。議論のなかで出たのは、自衛隊も全部嘉手納基地に移したらどうか。そうすれば、全部使えるという話になつたけど、これも西銘さんの時代になつて通用しない。そのなかで、知恵を求められた。事務方である私たちが知事サイドから検討してみろという話があつた。その時に、私の案でもあつたけど、何名かで検討するなかで、沖合にもう一本滑走路をつくつて、そこに那覇軍港を移そうと。そして、牧港兵站基地（キャンプ・キンザ）も移し、普天間飛行場も移そうと。加えて、航空自衛隊も移そうと。これは空港整備予算で計画をつくるんじゃない、自衛隊の予算でつくらすという構想にするならば、早いし、同時に基地が空くという前提です。

佐道 空港のためにもう一本つくるんだけど、それに港湾の施設とか、そういうのもくつつけて、それで、いまのいろんなところを全部集約させようということですか。

吉元 これはかなり水面下で議論になりました。それで、國場幸太郎さんが考えきれなかつたんです。それでいいという判断がし

きれなかつた。私なんかは労働運動もやっていたし、復帰運動もやっていたが、基地をそっくりそのまま復帰後に持ち越したわけですから、行政に入つて、沖繩の将来のことを考えながら、そして、「大那覇空港整備計画」をやるとすれば、そこに全部基地を出そうじゃないか。どっちみち将来的に自衛隊まで含めて基地ゼロというのは難しいよと。だったら、全部そこに自衛隊も含めて寄せていって、あと一気に沖繩の二十一世紀のために使おうじゃないかという発想だつた。空港を一本つくることによって、那覇軍港も移す。

伊藤 もとの滑走路を。

吉元 それはそのままにして、もう一本沖合に作るんです。だから、結果として、いまの那覇空港というのはこういう形でありますけれども、ここは自衛隊の基地です。で、ここに港があるわけです。これが広大な那覇軍港ですから、ここに滑走路をもう一本つくるんです。あと、これは新設ですね。そうすると、ここでも自衛隊と民間航空機の軍民共用ですよ。まず、この自衛隊を移す。これは軍港です。この軍港を移す。少し遠いけど、牧港兵站基地といつて、でっかい兵站基地があります。これも移す。そして、普天間も移す。そうすると、自衛隊基地のところは全部空くし、軍港が空くし、そして、要するに、さっき言ったものが全部空くし、同時に、普天間も空く。これを全部入れ込みきれないかという論議をするんです。

伊藤 これはかなり大規模なものになるわけですね。

吉元 もちろんそうです。いまでも三千五百ぐらいのやつを狙っています。国が調査に入ってます。これをやろうと思えば、その間を埋め立てでつなぐならば、もつとこれは全部使えますから、そういう意味では、なんでも使えるんです。

伊藤 この案はまだ生きてるわけですか。

吉元 いや、恐らく今回実は問題になつたのは、普天間を名護の

キャンプ・シユワブ沖に移して軍民共用といった時に、私が裏で政治的に問題にしたんです。「では那覇空港をどうしますか。いなくなりますね。向こうで二千五百メートルのをつくるならば、しかも、民間航空に使わせるといふんだから。だったら、沖合い展開はいらないんですか」と。県は困っちゃった。私たちはここに最初から民間空港のもう一本滑走路をつくることを前提に、ハブ空港をつくることを前提に、新しい民間空港というのには北部には必要ないと。だから、北部から要求はずつと昔からあるんです。そんなのはいらない。その代わり、たとえば橋本案の時にも、この軍港を拡大して、民間も使えるようにしたらどうかという案が出たんです。だめだと。あくまでも空港はここに一本で集約化する。これが効率が上がると。港湾と空港とワンセットにしようというような構想までつくったんです。

伊藤 そうすると、ここは民間の港として使えるということですか。

吉元 そうです。自衛隊もここに追い出すから、ここも民間が使える。そうすると、普天間も空くし、牧港兵站基地も空く。これだけ一挙に空くならば、これは価値がある。

佐道 これを最初に立てられたのは八〇年代の初めですね。

吉元 そうです。私が職場に復帰したのは、七八年か九年に職場復帰していますから、そして、企画調整室。その直後にこの議論が出てきたわけです。ですから、西銘さんに最初にアメリカに行ってもらった時は、実は、こういう構想もあるということを入れて行ったかどうかという話をしたんです。つまり、ここは具体的に県がオーソライズした案ではないんです。そういうことを頭に入れて、それで、基地問題について、きちつと基本的な議論をしていくべきだと。なにしろ日本政府に言ったって、何も進まないんだから。まず、アメリカに飛び込め。国務省を動かして、ペンタゴンを動かして、ペンタゴンから一言言わせてやれば、日

本は動く、というのが私たちが復帰後抱えていた課題です。今日でも、大田県政でもそのために毎年行かせたんです。ですから、そういう意味で、西銘さんにそれをアドバイスしたことがある。

伊藤 西銘さんはやりましたか。

吉元 そこがちよつとね。西銘さんが行った時のペーパーには入ってないんです。しかし、データを相当つくっているから言わせているはずですよ。それをどう言ってきたかというのがちよつと問題です。ここははっきりしないので、その後は、西銘さんから基地を移すという構想についての具体的な指示はなかった。同時に、私はその途中から、県立芸術大学のプロジェクトを担当させられて、そればかりに専念したから、これにタッチしてない。だから、その後は、県のなかでも、国の空港ではあるけど、沖合展開というのは、県のプロジェクトとして、その後ずつといても検討しています。これは県がつくって出したものを、運輸省は時期をみて東京で出して、予算に乗せようと。やつとこれがいま実になるような段階に来たんです。ですから、この構想というのは、一番目の問題に関わるけど、西銘さんがアメリカに行った第一目の段階から、私自身は少なくとも、こういう戦略を持って言ったことが、西銘さんがそれを踏まえて展開しておるならば、これは二十三事案について評価します。ところが、そういうものと関連なく細切れで、全部出てきたんです。しかも、地主の意向をまったく無視して出てきたやつです。

佐道 その調整とかを全然してないんですか。

吉元 はい。ですから、結果として、数は多いけど、全部細切れで、しかも、返してもらってもいまいすぐ使えないようなところが出たりして、それで、迷惑だという。しかし、あれが相当参考になったんです。まず、地主の意見を聞こう。地元自治体が跡利用計画を持っているか、ここが基地返還アクション・プログラムの一期・二期・三期につながる原点です。ですから、この第一回目

の西銘さんの「十七施設二十三事案」というやつは、基地の整理縮小と沖縄のその後をどう描いていくかという戦略的な視点を持ちえなかったもので、そういう意味で私は評価しない。現に、相当迷惑と言われたところがあります。

佐道 どうするんだという話は確かにありますよね。

吉元 もし西銘さんがさきほど絵を描いたような構想を、口頭でもいいからぶち込んで、その方向で県庁のなかで仕事をさせて、然るべき時期に彼がそれを表に出して県民に問うて、それを二期目の選挙に持ち込むというのであれば、もつと違った形が出たんじゃないか。たとえば今回のような橋本案のような海上基地には「ノー」と言い、結果として、いまのような軍民共用を。自己矛盾です。沖合い展開を要求しながら、同時に、北部にも民間空港をと。できたら、すぐ民間の空港も使うという。しかし、十五年後には全部もうよという話でしょう。これはどうするの？同じ時期にできる那覇空港との関係は。これもある意味では戦略なしです。こういうやり方はよくない。

佐道 いまの続いている那覇空港の沖合展開の問題ですが、これは先生のおっしゃるようなほかの基地も収容した多機能集約というのは入ってないですね。

吉元 100%入ってないですね。100%航空局管理の民間のための空港ということですよ。

伊藤 じゃ、防衛施設庁の関係じゃないんですね。

吉元 違います。それで、なかなか軌道に乗らない。予算が採れない。空港整備の五か年計画のなかにどうぶち込むかということですよ。予定に落ちたり、入ったりで来ている。もう十何年になります。だから、結局は、いまの沖合い展開を必要としている理由は、いまの滑走路でも、キャパシティは限界まで来たということですよ。併せて、自衛隊の緊急出動その他事故などがあって、危ないということがあって、それで、どうしても自衛隊のこの前提と

する限り、もう一つつくろうということになってくる。容量の問題と危険性の問題です。ですから、さきほど私が言ったような視点はこれに入ってません。どうせつくるなら、最近になってそれをもつと自信を持って言つとるのは、この間岩国へ行ってみてきたからです。岩国の沖合というのは、三千メートルの空港をつくるための埋め立てが終わりました。同時に、水深十五メートルの大港湾をつくるんです。ワンセットです。それは私たちの構想とまったく同じです。恐らく将来的には佐世保にある海兵隊の基地を岩国に移すはずですよ。そして、弾薬庫も恐らく移すはずですよ。そして、やっぱり民間としては、佐世保は自衛隊に全部任せというような形で、ゆくゆくは日本政府だつていつまでも「思いやり予算」が湯水の如くあるわけではないですから、韓国の駐韓米軍の整理が終わる二〇〇八年までそれと見合いながら、岩国の問題ができあがっていくと、どういう形で海兵隊の本土、沖縄を含めた問題が。もちろんどこを撤廃するという意味じゃなくて、シフトし始めるかというのが出るでしょう。

伊藤 岩国の問題というのは沖縄とも連動するわけですね。

吉元 連動します。しますけれども、それを日本政府側が一言も言わない。アメリカ側は少し匂わせている。

伊藤 沖縄の側からはどうなんですか。

吉元 私たちは最初から。

伊藤 言っている？

吉元 「移してください」と橋本さんに私は言っています。でも、あれは飲んだ時の話だから、橋本さんは忘れておられる（笑）。昼間は言えんからね。但し、最近、非常におもしろいのが出てきた。安倍（晋三）さんらのグループの議論のなかでは、在日米軍と、これは地位協定の議論のなかで、将来の日米安保のパートナーシップの正しいあり方という議論のなかで論議されているものがあります。やっぱり米軍基地の整理縮小というのは思い切っ

て進めないと、有事法制を含めて、尚かつ、日本の体制は強化していく、これはどうもうまくないよという問題を自覚し始めているということ聞いています。

伊藤 予算的にやっていけないでしょう。

吉元 まあ、そこまでいくと思いますが、本来ならば、ODA予算をいきなり切らないで、許容の範囲で「思いやり予算」のほうから手を付けて、スリム化しながら、ODA予算に食い込んでいくというのが外交としては正しいと思うし、日米間のあり方としても正しいと思います。アメリカはODAを増やしている。だから、そういう意味では、一歩遅れておるなという感じがする。しかし、西銘さん時代の二十三事案の問題というのは、そういう戦略なしの問題だけに、これではだめ。いらないといって、遊んでいる部分を返してもらおうと、こつちが使えない。

佐道 形としては「十七施設二十三事案」みたいなことがあるので、そこらへんはどうかということ、いまの那覇軍港の沖合に多機能集約型のものをつくって。

吉元 那覇空港の沖合いね。

佐道 國場幸太郎さんとかが詰め切れなかったとおっしゃったわけですけども。

吉元 國場幸太郎さんが出してきたのは、復帰直前からの県民要求なんです、いまの滑走路の沖合にもう一本つくって、ハブ空港にしよう。どっちも日本でハブ空港をつくりきらんよと。成田が頓挫しておる。中国、それから、台北空港でさえまだ許可されていない。唯一、あの時期、シンガポールがもう一つ国際空港をつくるという時期ですから、私たちはシンガポールを見ながら、シンガポールのような都市国家を、というのがこの時期の復帰直後の沖縄のデザインです。これは民間も一緒です。そういう意味でいうと、経済界を中心に描いた絵というのは、あくまでも全体を民間という前提に、いまの陸上の基地については触らんと

いうことになる。そういうことでは県民は納得しないよということから、公務員のなかで職場で議論した時に、これは全部ぶち込もうと。そうすると、ペンタゴンもオーケーすれば、軍港も整備されたやつがここでできるし、牧港兵站基地も邪魔にならない。港湾とワンセットになるし、普天間も住宅地を飛ばなくていい。それを全部入れてみたらどうかと。併せて、自衛隊も移せばいいじゃないか。これについて、知事が自分のものにするための仕事までにはゴーサインを出し切れなかった。だから、第一回目に何を言われて帰ってきたかというのはわからないんです。

■米側からの代替基地案

伊藤 しかし、これはもしペンタゴンが関心を持ったとしたら、非常に大きいですね。

吉元 このあとに大田県政になって、九四年の初め頃、アメリカサイドから一つ出たんです。いまの嘉手納の沖合、あそこまで北でなかったけど、あそこに港湾をつくりたいと。そうすれば、いまの那覇軍港は撤去してもいいと。つまり、那覇軍港の撤去というのは復帰直後の約束なんです。代替港湾をつくれなければ、実行できない。それが一つ。もう一つ、これは那覇軍港との関係ではなかったけど、九四、五年頃の話ですが、金武の沖合に、マサチューセッツ工科大学のプロジェクトとして、絵が描かれたやつを持ち込まれてきたのは、そこで基地をつくり、普天間を移す。そこで、水面は全部あけると。金武の皆さんに養殖業その他に使用しないというふうな幾つか出してきたわけです。三つ目には、これは日本政府が門前払いをしたきらいがあるけど、マサチューセッツ工科大学は、本当は推進力を持った海上基地が欲しかった。これはいまペンタゴンが検討に入っているんです。

佐道 移動可能ということですか。

吉元 移動可能という表現です。これはおもしろいということ

で、実は軍事専門家のなかで、飛びついた連中がおったんですが、早い時期に、それでは軍艦をつくってやるのと同じだから、日本政府は手を出せないという話になって、これはほっしゃっていくんです。

伊藤 軍艦ですものね。

吉元 ですから、九〇年代に入っても、軍港移設、普天間移設はなんとかしなきゃいかんと、アメリカ自身もものすごくある種追い込まれていった。それはもつとさかのぼっていくと、普天間の移設問題については、キャンプ・シユワブ沖は一九六五年、一九六八年頃に出ているんです。ベトナム戦争中から出とるんです。ですから、そういう意味では、そこをきちつとつくって、復帰段階で、本土にある海兵隊の部隊を沖繩へ移すというのが次に出てくるスケジュールだったんですね。

伊藤 これは埋め立てなんですか。

吉元 埋め立て。

伊藤 杭打ちじゃなくて。

吉元 これは完全に埋め立てです。そのほうがいらしいです。

伊藤 そんなに水深がないんですか。

吉元 ないです。ここは砂地が中心で、但し、海底だけからでは間に合わない。陸上のどこから持つていくかということが一つ出ている。

伊藤 しかし、國場さんなんかは、そうになったら、非常に乗り気にならなかつたんですか。

吉元 本当は乗り気だったんでしようね。だから、基地をかますと、却つてうるさくなるということで、引いたんでしようね。

伊藤 基地をかませれば、予算としては防衛施設庁の予算になるでしょう。

佐道 いろんな予算がまた入ってきますよね。自衛隊が入る、海軍が入る、それから、普天間の海兵隊が入る。いろんな軍も入っ

てくるし、そういうことで基地問題にこれ以上踏み込みたくないという判断だったんでしようか。

吉元 たぶんそうかもしれないですね。それよりは、むしろ将来、冷戦以降を考えてない時代ですからね。

佐道 冷戦以後を。八十年代初めですからね。

吉元 まったく考えてない。だから、恐らく、僕らなんかあの時に二次振計を策定する作業に入った時に、ちょうど七九年のアフガンにソ連が突っ込んだんですかね。あの頃から、これはやばいぞと。たぶん東アジアのアメリカの力がアフガンを中心に裂かれていくはずだから、湾岸とは言わないけど、中東の石油問題なんかに影響していくんじゃないかなと。それは復帰直後の石油ショックの問題は、東京もチリ紙がなくなつたけど、沖繩は酷かつたからね。まざまざとみせつけられて、沖繩で米軍基地に対して、ものを言うというのは、経済界は言う気がなかつたし、県政も言う気がなかつたし、だから、ちょうど一期目の西銘さんというのは基地問題に触れなかつたからね。二期目あたりから少し余裕を持つて言うようになって、三期目の時は自信を持って、将来続けたいために言わんといかんと、二十三事案を集中的に出してくる。二回目の段階だと思います。それにしても、軍隊を動かすというような視点が西銘県政のなかで、検討するセクシヨンなり、人がおつたら、これはいまでも同じことが言えると思います。いまの県政もそれがやられてないので、少し。

伊藤 いまだつて、これは息があるんでしよう。

吉元 生きてますよ。いまは事業としては本物になっていきますからね。

伊藤 単なる民間空港だけじゃなくて。

吉元 だから、大事なものは、確かに八〇年前後のこの時、それから、大田県政になつた九〇年代の「国際都市形成構想」及びこの時期、そして、それが終わつて、九八年以降今日、みんな節々全

部状況が違うでしょう。大田県政というのはまさに冷戦後ですから、沖縄はなんとかよくなりそうだよと、させてみようという気持ちの方が重なってきたでしょう。だから、基地問題にあれだけ集中したんです。今度は、動くだろうと思って動かそうといったけど、なかなか動かない。そのうちに九・一一テロがあった。もうだめになったという事で、全部うちひしがれた形だよ。だからこそ、今度、もう一回、これを県庁レベルで見直して、いや、これじゃ困る。もうちょつと動かせないかという話をね。それが無いものだから。

伊藤 これはすごい問題だな。

吉元 だから下地幹郎案が出てきたんです。あれは彼は去年の中頃からアメリカに行く、グアムに行く、そしてフィリピンに全部蓄積して、彼は彼なりにいろんなものを組み立てていつて世に問うている。しかも、今年の正月の第一第二の日曜日、私も彼に引っ張り出されたけれども、沖縄のテレビで二週にわたって、この問題について彼と議論しました。僕は、「一つの考え方だ。しかし、これは一回検討したが、だめだった。だけど、いま、あなたが言うような仕組みは、あの時はアメリカに突きつけてない。だから、状況が違うから、おもしろいと思うよ。しかし、これで本当に空軍がオーケーするかな。空軍は将来は自分たちが主人公と思っている。だから、ケイトー研究所の報告書がある。つまり、南にもう一つ使える空港が必要だ。朝鮮危機は去っても、台湾有事、それを前提するならば、飛行機だよ。今更、海兵隊じゃないよという話でしょう。そうすると、今日的に重要になってきたのは、アメリカ的というと、テロとの関係で海兵隊の必要性が高まってきた。それは大ききじゃなくて、まさにやることに意味がある。集積所であることに意味があつて、そこに何万人とおることが問題じゃない」と。

佐道 睨みを効かせられるということですね。

吉元 そうそう。「そうであれば、アメリカはすでに手を打っている。フィリピンで恒常的に残るようなところまでいけますか。憲法改正が伴うから無理かしらんけど、ベトナムはどうです、カムラン湾は」という話でしょう。シンガポールはいつでもオーケーと言っているでしょう。これは駐留はできないから、じゃ、どうするか。駐留する場所をアメリカはいま沖縄にと言っているんでしょ。これだけ本当に駐留する必要があるかどうかという議論に食い込んできたのが下地幹郎さんの案なんです。下地幹郎さんも表現はしてないけど、このことを言っているんです。名護・辺野古に軍民共用空港を十五年後につくって、彼の計算では、二十五年から三十年後に、民間専用になるから、その時にこれができるのに、航空会社はノーと言っている。北部の空港には行かんと言っている。誰が使うんですかということでしょう。農協、JAの皆さんは農作物を出すのに必要だからと、いまの知事さんは言うけど。

佐道 大きな国際空港をつくって、農作物をというの。

吉元 ですから、結果的には、麻生（太郎）政調会長が言っているのは、いまの政府側の本音ですよ。あの考え方を沖縄側がもう一度冷静になって整理し直して出すと、これは保守、革新じゃなくて、県民のなかでストーンともう一回議論をして行ける道筋ができると思う。そうすると、アメリカ側は沖縄をみて、保守、革新という間尺じゃなくて、このへんだったら落ち着くなどいうつかみどころがつかれる。そこを示さん限り、この問題は進まないね。

佐道 下地さんなんかはこの構想はそもそも頭にあるわけですか。

吉元 ここまでではないと思う。全部セットにまではやってない。

佐道 これほど多機能集約型のものはないかもしれない。

吉元 おそらく彼が付き合っている範囲では、ここまでは出てこ

ないと思います。

佐道 結局、八〇年代の初めに、先生を中心に構想されたこの案というのには、その時に県政とか、経済界が踏み切れなかったというところで、那覇空港の沖合展開という問題自体は残ったものの、ここまでの多機能集約案というのはずっと潜ったままになっちゃった。あまり知られないということですね。

吉元 そうですね。知られなくなっちゃった。さきほど言った九〇年代に出てきた金武の沖合につくると。あの時はまさに多機能だなという感じはしたね。沖繩の中南部にある米軍基地を見ていて、百万住んでいるところに、嘉手納基地から南の那覇軍港まであまりにも都市にへばりついた、しかも、いいところにへばりついた基地でしょう。これを集約するというのは、素人が考えても、政治が考えても、当たり前の話です。その当たり前前感覚が全体に出て来ないというところに問題がある。沖繩は慣らされすぎている。基地があるのが当たり前だ。なくなればいいなあ。よし、なくそうという運動はするけど、ちよつといますぐではないよという話でぼしやるでしょう。何か動き出すと、それに全部集中しちゃうんです。こつちでいいのか悪いのか。賛成、反対と。もう少しトータルで、まとめてどういうふうになるかなという議論に集約できないのは、やっぱり軍用地主の利害と基地に働いている軍作業員は家族を抱えているからです。これを根っこに抱えている間は、自治体の長でも言い切れません。少なくとも選挙で選ばれるやつは、このことについては言い切れません。政治的な発想でものを言っても、投票では全部関わっているからというのがあつた。ここは沖繩から言わすのではなくて、沖繩にいろんなアイデアがあることを知ったうえで、絵を大胆に描くのは、言つては悪いけど、政党か政府の仕事だと思えます。このことは安定的な沖繩における日米間の問題、とりわけ基地問題の長期を展望した方法をつくるための大きなきつかけだと思えます。そこに入らん限

り、これはいつまでも残ります。一方的に押しつけられている。

■本土との系列化問題

佐道 いまのお話なんですけれども、たとえば先生は八〇年代初めにこういう構想を立てられた。それから、八〇年代の最初というのには、たとえば自治労や一部研究者も自治県制構想を立てるとかありましたよね。今も先生ご自身もそうですけれども、特別県制構想など、いろいろ議論があるんですけども、沖繩の政党、たとえば社会党があり、自民党があり、復帰以降の政党ですね。国会議員レベルに止まらず、沖繩の政党自身がこういう問題をプランとして具体的なものを出すと、そういうのを構想する。西銘さんもいま先生がおっしゃられるところでは、こういう長期的な戦略ビジョンがなく、はつきり言えば、ちよつと場当たりにやつたということなわけですよ。沖繩の政党自身はどうだったんでしょうか。

吉元 復帰直後の私たちがいちばん懸念したことが始まったんです。労働組合は一応単産に系列化されていく。つまり、加盟していくのです。そのことで、沖繩問題が、沖繩にある労働組合の支部、分会というのが職場から薄れていくんです。労使問題に置き換えられて、それが当面の課題になっていく。もちろんいろんな苦しさのなかで、全国的な労働組合というのは、過去の一時期は、全通がマル生闘争でやられたり、日教組の「勤評」闘争があつたり、国労「民営化」の闘争があつたりと続いていくでしょう。ですから、労働組合というのは、当然自分の身分、権利の問題に入っていく。つまり、それが日本の労働運動であつたし、大きい闘争といえば、安保反対闘争という節々での戦いだつたでしょう。沖繩みたくに日常的に朝から晩までずっと基地問題で苦しめられているところはなかった。復帰後は、それを全国化しようといわれれば合言葉をつくつたんです。そのつもりでつながろうなど。

つながっていくと、労働組合の性格上、そうならなかったわけですね。だから、個人加盟の労働組合というのは、N.T.T.の労働組合なんかはまさにそれです。そうでない組合が残るか残っていない。学校の先生の組合。これは沖繩教職員組合という一つ単位で日教組に加盟している。あつち協は協議会であつて、連合体じゃない。独自の運動方針をつくり、独自の意思決定を持っている。中央が自分たちの方針を反対するならば、単独行動をやる。これは自治労であつたり、教組です。少ないんです。あとは小さな組合がある。そういう意味では、運動が弱かつたということがあつて、労働組合総体の力が分散していった。これが一つあります。

伊藤 県労協。

吉元 県労協で束ねていても。だから、そういうなかで、「沖繩闘争」というのはみえなくなっていく。

伊藤 全通の宝樹さんなんかはかなり応援したんじゃないですか。

吉元 国際自由労連の中心にして、沖繩の復帰前からの沖繩戦後労働運動を支援したのは事実だけど、宝樹路線が限界に入ったのは、国際自由労連との関係で、国際自由労連というのは同時にアメリカが主導権を持っているでしょう。国際自由労連の発言というのは、必ずしも沖繩側でなかつたんです。だから、私たちはそれに対して、アメリカにものを言わないで、国際自由労連のアジア執行委員会にものを言ったんです。そこはインドのカルカッタにあつたから、私たちは沖繩から派遣して、労働大学にも行かせたり、向こうで発言させて、アジア執行委員会から国際自由労連に発言をすることによって、沖繩の権利の問題、基地労働者の労働基本権の問題をアメリカと喧嘩するというパターンをつくつて、やつと国際自由労連の本部の了解を取つて、沖繩事務所をつくらせて、派遣されてきたのがロビンソンという黒人で、彼がものすごく直接沖繩で米軍と喧嘩して、基地内労働者の権利を獲得

していくんです。それでも、日本労働運動総体はカバーしきれなかった。だから、そういう意味で言うならば、日本労働組合は総評を中心というけど、総評の体質は最後の段階では、国際自由労連の中心である宝樹さんなんかを中心にした部分が、アメリカとの関係で、沖繩問題を少しへこませていくんです。それは残念だったね。だから、沖繩がストリートにインドとの関係、シンガポールとの関係、レバ・ナランさんなんかと直接やつていたのはそういう意味なんです。レバ・ナランさんはいまでも沖繩に對する思い入れが大きいんです。ですから、そういう意味では、復帰後の労働組合が労働運動総体のなかで、本土に系列化されていくことによる体質の変質、弱体化していったというのが一つ。政党がストリートにつながることに影響が出たんです。一つは極端にいうと、共産党はなかつたわけですから。沖繩人民党……。

伊藤 でもこれは共産党でしょう。

吉元 実態はそうだと言われていたが、やつぱり一つの政党だから、沖繩県民に依拠しなければだめだから、可能な限り沖繩県民と一緒にある歩いた。つまり、共産党とは違う一種の民族統一戦線をつくるための努力を沖繩人民党がやつた。これは瀬長亀次郎さんなどがカリスマだった。ところが、内部的には、本土に行つて勉強して、大学に行つたものが共産党員になって送り込まれてきて、党を全部支配しておつたから、復帰後はボンとこれが出てきたんです。だから、直結しちやつたんです。そういうところで、運動が絶えず、代々木からの「指示」がないと「イエス」・「ノー」が言えないという形に落ち込んでいく。これはもう系列化です。社大党は比較的自由に、沖繩の社大党はやつていた。復帰後は、ローカル政党が力をなくしていくという過程です。

伊藤 社大党。

吉元 社大党ですね。これは魅力がそれほどあるとは思えないという役割だった。沖繩人民党は復帰までの政党なんです。綱領にそ

う書かれています。だから、あれはそのとおり終わって、共産党が新しくできた。ところが、移行と言っている。社会大衆党も復帰までの政党なんです。これは復帰段階で解散するかどうかです。たもんだしたけど、結果としては、解散できずにそのまま残しちゃった。そうすると、全体的な運動のなかで存在価値がなくなっている。独自の行動を単独でできないから。それだけの能力がないから。結局は、政党にも求心力がなくなる。これが八〇年代の最初まで続きます。手前味噌になるんだが、そこで県庁に戻った私が説得されて、県庁を今度は退職して、県労協、沖縄県労働組合協議会に専従の事務局長が入って、「沖縄闘争の再構築」という言葉を使って、もう一回、沖縄を見直そうということで、基地問題から沖縄の将来のあり方まで議論をし直そうと。それがある種知事を替えるという意味で、「革新県政を奪還する」という言葉に変わっていくんです。それが八三年か八四年から、私が県庁を辞めたあとに始まった。最初に取り組んだのが、いろいろありますけれども、嘉手納基地包囲行動。これはもう一回基地問題を見直そうと。ところが嘉手納に集まって、周囲十七・四キロ取り囲んで手をつなぐだけかとすぐ批判された。批判されたけど、そのことによって、もう一度考え直してみようじゃないかということで、赤ちゃんからお年寄りまで、これはそうなった。それが一つの力になった。

佐道 象徴的な行動だということですね。

吉元 そうですね。その後、合計三回やっているけど、それなりの意味を持って、基地問題をもう一度県民の意識のなかに、生活のなかに取り戻すということにつながったのは事実でしょう。この力が西銘さんの四期目を潰して、大田を誕生させたとき一般的には評価されているけどね。

■ 企画調整室時代

伊藤 こういう企画力といいますが、戦略的な構想を立てるとい

う人材は、吉元先生は企画調整室におられて、そこにそういう専門家がたくさんいたんですか。

吉元 考えてみると、それなりのやつがおったですね。誤解を恐れずに言うのだが、だいたい各部署で、ルーチン業務でいちばん不得手のやつがおる。遊んどるやつとか、仕事が遅いやつとか。そういう連中というのは現場では嫌がられる。だから、昇任は遅いでしょう。県庁全体六千名のなかでは、探せば二、三十名すぐおるよ。そのなかから何に向いとかという話でしょう。企画調整室というのは、だいたい人事課あたりが配慮する場合は、そういうやつも選んでくるので、担当部署は、ああ、こいつを置くよりは真面目に仕事をやるやつのがいいからとすぐ入れ替えるでしょう。こういうやつは集まりやすいんでしょうね。企画調整室というのはもともとそういう場でもあった。日常的にはそうやつのけど、集中的に仕事をさせて、一つの案をつくって、これを出して、県庁全体をどういうふうにさせるかと。だから、パワーよりは構想力というのかな。欲を言えば、戦略思考。そういうやつがおれば、幸いよね。私がおった期間では。

伊藤 吉元先生、なんでそういう企画力をご自身で持たれるようになったのかなあと。

吉元 それはなんだろうね。自分ではわからんけど、たぶん、なんだろうね。

伊藤 やつぱり組合運動のなかですかね。

吉元 言ってみれば、復帰運動でしょうね。組合運動というよりは、復帰運動でしょうね。六三年から始まった、若い時、二十代で復帰協の事務局長をやつて、よせばいいのに立法院を取り囲んで乱入事件を起こして、全県回って、政党の親分衆を連れて歩いて演説会をやつたり、復帰運動をすることによって、沖縄はこのままではいかんという話なんでしょうね。

伊藤 でも、そういう運動をやることと、こういう企画をつくる

ことというのはちょっと別な。

吉元 別な仕事でしょうね。まったく別な仕事だと思います。なんでしょうね。

伊藤 これは別に先生がいたわけじゃないでしょう。

吉元 先生はいないですね。考えと言ったって、大して考えないんですよ。だって、小さな島だもの。どこに何があるかは頭のなかに全部あるし、どうしたらいいかというのはだいたいわかるし、一か所に集まるよね。

佐道 だけど、ほかの人はそういうことはやっていませんよね。

伊藤 そのあと、吉元さんはたくさんできていますよ。そういう人材は、たとえばいまシンクタンクとか、そういう形で結集するということはないんですか。

吉元 沖縄ではないですね。沖縄ではシンクタンクはいくつかありますが、極端にいうと、プロポーザルを出して、県が少し手直しして、県がこう考えているから、このとおりプロポーザルをもう一回つくり変えろと出させて、それでオーケーしてという話でしょう。そうすると、県の担当者というのかな。あるいは県のイメージしている部分の範囲内で仕事をさせている。これはシンクタンクの仕事じゃ、本当はないですよ。

伊藤 そうですね。

吉元 だから、私はそれはまずいと思って、相当昔、まさに職場に復帰した段階で、西銘さんの時代に、NIRAに県から出向させた。当時、下河辺さんが経企庁を辞めていたから、下河辺さんと話をして、「採ってくれ」と。「使えるやつがおるか」「いや、使えるやつがないから、育ててくれという話だ」と。ちょうど北海道から来た人が帰ることになって、北海道はあと出さんと言つとるといふ。一つ空く予定だったので、そこに一人入れたんです。これがいまでも付き合っているやつだけだね。県庁におるんだけど、その後、二年交替で行かせてますから、そのあとは

指定席にしまして、もちろん私は一係長クラスの職員ですが、ずっと県のトップ、当時は西銘さんですが、二年越しに西銘さんへメッセージを送り、「次ぎ、こいつを行かすよ」と名前を先に、ずっと続いて十何名が行つてきとるんですね。この間あつた時に、玉那覇つて珍しいやつがおつたけど、あいつもそうです。あまりにも変わつとるんで、県庁では使い物にならないといつて（笑）、いま、モズクを売つて世界的に回つとるんです。

佐道 ものすごく行動力があるし、発想もおもしろいし、でも、職場ではなかなか難しいかもしれないと思うタイプですね。

吉元 だから、ああいうやつがいまでも県庁に十何名近くおりますからね。彼の仲間を集めれば、百名ぐらい集まるでしょう。使つていくためのまさにリーダーシップというんですか。使つていく人、チームとして、それを引っ張つていくような管理者。これは管理者に弱さがあるかもしらんですね。

伊藤 これは知事でしょう。

吉元 西銘さんの時代というのは、まさに、あの人にはこれをやりたいというのがあつたんです。私なんかは通常の業務、振興開発計画に関する、二次振計に関する仕事をやるうとした時から、議会サイドから言われて、「県職労の委員長をやつた吉元に仕事をさせるな。あいつは何を書くかはわからんよ」と。そう言われると、職場のほうでは、管理者のほうで、「吉元さん、何か好きな仕事はないか」「毎年、調査費を五百万くれ。五百万くれるならば、国際交流の拠点形成の仕事をやると言つて、それで、僕は三年間ぐらい知事のプロジェクトをやつた。いま「国際センター」というのがありますね。あれはその仕事の最初のやつです。沖縄に東南アジア交流センターをつくらうと。「日本・中国・沖縄東南アジア交流センター」というのが当初の名称です。これは全部なくなつちやつて、国際センターになつちやつたけど、これをつくつて、西銘さんはこれをやるうという話になつたけど、財

政を担当しているのが「自分の県民の教育さえ十分できていないのに、なんで東南アジアから人づくりセンターまで県がやらんといかんか」という話になって、「ちよつと待て。二十年ぐらい長期展望を持つじゃないか」と言っても、「そんな金はない」と言われて喧嘩しているうちに、例の東京から、外務省から話が飛び込んできた。鈴木（善幸）さんが東南アジアを回る時にプロジェクトがない、お土産がないということで、例の「アセアン人づくりセンター」としてさらわれた。西銘さんはものすごい怒ったけど、私はデータを上げながら、「沖繩につくるんだから、国が設置主体だろうが、民間だろうが、沖繩のものじゃないか」と。結果的に、あれは沖繩のもんだから（笑）。そういう意味で、みんなが育ててくれた。

そういう意味では、国際交流拠点形成事業調査ということで東南アジアの四カ国へ副知事を団長にして回りました。先進的なシンガポールをみたり、どうなるかなあとというジャカルタに行ってみたり、マレーシアは伸びそうだなという感じがした。タイへ行っても、華僑がどこまでこの国をつくるかな、経済を握るかなという話になったり、フィリピンに行くと、危ないなという感じでした。そういうのを肌で感じてきたから、当時、私たちは職場のなかで、若い連中が集まった時に、「シンガポールのような沖繩をつくらう」、「都市国家をつくらうと」、「ハワイのような本土との機能分担を持った場をつくらう」と。そして、「プエルトリコのような合衆国との間の分権を取らう」と。この三つが復帰前からの運動をしている時の合言葉だった。これを実践するなかで、たとえば基地問題も、いきなりゼロというわけにいかんよ。しかし、それに確実に結びついていくためには、沖繩が基地の跡を利用しながら、どこまで沖繩を高めていくか。アメリカがおる間に、どこまでその力のもつとで、つまり、そういう言葉は使わなかったけど、安全保障のもとでと言ったほうが正しいかもしれない。沖繩

を高めておくか。状況を整備するかというのが僕たちの戦略だと。基地がゼロになってから初めてすることじゃないからという話でした。これは相当県三役ともやり合った経緯があります。どこまで理解したかはわからんけどね。一時期、企画調整室というのはそういう議論をやるような場所であったのは確かです。いまでもやろうと思えばできると思います。国際都市の論議をした時には、まさにそれが企画調整室のなかでのテーマでした。それがある意味では、国際都市形成構想が将来の絵空ごとではなくて、走っている振興開発計画の後期の課題にぶち込もうという目標を入れた時に、目の前の仕事だと職場は動き出す。そういう意味では、構想力もさることながら、沖繩県庁の場合に、構想力を持ちえないのは、復帰までの二十七年間、とりわけ二次振計までの間に、沖繩側が美しい夢をみたと思うね。「追いつけ」という。それは特別措置法を作った目的でもあるし、二十七年間分をどう追いついて、沖繩県民の生活の豊かさにつないでいくかというのが目的だから、だから、特別措置法をつくって、一次振計、二次振計とというのは当然のものだという議論があったし、私たちは当時労働組合だから、ちよつとおかしいよと。開発庁もいらんと。第二民政府になるよと。

■特別県制構想の背景

佐道 最初から開発庁方式はおかしいということですか。

吉元 復帰前、琉球政府が進める復帰対策要綱というのがあったんです。日本政府とつめて復帰後のあり方なんかをつくっている。それに対して、このやり方はおかしいなど。なんでもかんでも、事件、事故まで全部引き継ぐのか。たとえば私の場合なんかは、復帰前の一九六七年二月二十四日に、琉球立法院にアメリカのゴアのサインが出て、琉球政府が「教育関係二法」を早く立法せよという形で突きつけられるんです。それで、当時の立法院は、議

員立法という形になりますから、国会の仕組みと違いますので、琉球政府が参考案として法案を送付する。それに対して、県民運動が起きて、これは復帰運動潰しだということになって、大闘争へ。屋良さんを先頭に座り込み・ハンストがあったり、学校が二十四時間文字どおりのストライキをやった。スト権があったからね。琉球政府職員以外はスト権がありません。地方公務員法もなかったし、教育公務員法もないからね。それで、立法院が県民に取り囲まれる大変な事態になった。ああいう闘争の結果として、二十四名が刑事裁判にかけられた。僕はその被告団長です。これは復帰後に判決がありました。復帰段階というのは、公務員だから、私の履歴書のなかに起訴されたことを書かれています。これはどうして引き継ぐのか。七二年五月十五日に憲法が適用され、その他法律が適用されるでしょう。それ以前の問題をどうしてこれに引き継ぐ必要があるんだ。それはおかしいということの問題になったんです。結果的には、そのまま持ち込まれていくんですが、それでも私たちは琉球政府の労働組合で沖繩官公労は当時の琉球政府の主席と団体交渉のなかで、ハレンチな行動、反道徳的な刑事犯罪などは別として、一切履歴から削除すると、団体交渉では結論を出したんです。これはすごく問題になりましたけどね。それで、そのことは学校の先生方にも影響したし、市町村公務員にも影響させていく。それをうまく汲み取れなかったところが幾つか市町村に出ました。復帰と同時に、日本の地方公務員法を適用されて、分限条例に引っかけちゃって、係争中の刑事事件の被告人は二人で消防職員だったけど、私と同じ事件では解雇されたんです。そういう意味では、私たちの取り組みの不十分さもあつた。基本的には、復帰前と復帰後とは施政権が違う。これは整理しなきゃいかんが、こういうものが全部そのままごちゃごちゃにして持ち込まれた。これは復帰対策要綱がおかしいということ、別に、私を含め、琉球政府の係長クラス十名ぐらい集めて、復帰

対策要綱の総点検を始めるわけです。日琉政府がまとめたやつ総点検。そのうちの一つが沖繩開発庁方式に対する意見です。私なんかはいらない。北海道と同じだよ。同時にいま、琉球政府があつて、アメリカ合衆国政府があつて、その間に民政府というのがある。これが事実上の沖繩に対する支配をおつたから、民政府と同じ機能を沖繩開発庁がやるなら、いらぬという話だったんです。ところが、流れとしては、それを潰すぐらいの力を僕は持ちえなかつた。それでも残っています。屋良さんが「建議書」のなかに書いたんですが、その文は最後に消されたけど。これが一つ。刑事事件の問題がありました。ですから、復帰前にあつた復帰運動の質というのを、復帰後まで継承するというのはほとんどできなかった。さきほど言った「特別県制」というのはまさにそれから出てきた。復帰段階で、学者等からいろんな提案が出て、琉球独立国論まであつた。私たちは現実に復帰段階ではものを言わなくて、復帰後十年間の総括のなかで、二次振計の時に出した特別県制、憲法の許容のもとで、県民投票によって、沖繩を特別県にしようということできつくりあげたわけです。これが今日の「琉球諸島自治制構想」につながっているんです。

佐道 開発庁方式の問題と振計の問題とセットになっていますから、これは伺いたいことはいっぱいあるんですけども、まず、いま、先生がこういう戦略的なプランを立てられている時に、同時に、県庁のなかでの二次振計の問題をやられていたわけですよ。それと同時に、これはおかしいということがあつて、特別県制構想という議論をなさっていた。

吉元 特別県制議論というのは行政の場じゃない。

佐道 はい。二次振計の内容がだんだん明らかになりますね。その時に、県議会ではいろんな議論がされたかもしれませんが、よくわからないのは、たとえば議事録を拾えば個人の議員の方が何をおっしゃったかはわかりますけれども、たとえばそれぞれの沖

繩島の政党としての取り組み方ですね。一次から二次になってという話ですけども、どういうふうに取り組んだのかというのは、党としてのあり方がよくわからないですけれども。

吉元 基本的には、復帰段階で、復帰対策要綱に基づいて、復帰は実現したと。すべての法律を含めて、本土並みになったという前提です。違うのは、沖繩が遅れた部分を早く追いつくために特別法ができた。これは三つだと。一つは、沖繩振興開発特別措置法（沖振法）、もう一つは、沖繩開発庁設置法、そしてもう一つは、沖繩振興開発金融公庫法。これが沖繩三法（開発三法）です。別に、復帰措置法というのがあって、これが身分継承の問題とか、いろいろあって、犯罪の引き継ぎをやる。沖繩三法との関係で、二次振計はそれを軸にして展開した。だから、基本になる沖繩振興開発特別措置法に伴う振興開発の自身のチェックに全部集中したんです。それはなぜかという点、本土より優遇されているかということでしょう。どのぐらいのスピードで、二十七年間の遅れたやつを取り戻すかという積み上げなんです。事業の積み上げはどこまで大きいかと。これに全部集中した。これは政党も労働組合も行政も全部それに集中しました。ですから、それに向けて、国が打ち込んできたのが、一つは海洋博。国際海洋博特別事業を入れたことによって、公共事業をはね上げようと。これは沖繩経済の振興につながる。万博方式ですね。もう一つは、沖繩特別国体。われわれはミニ国体と言っていました。規模は小さかったが、特別国体。これは一種の各県における国民体育大会をやる。つまり、スポーツ施設及び健康という意味で、その部分で人間形成と。一つは海洋博で基盤整備をと。これをやった。そのうちに三つ目に出てきたのが交通方法変更。復帰前は本土とは違う車線をとったからね。アメリカ方式でまったく反対。これを日本並みにするということで、いまは車は左ですね。あの時は車は右でしたからね。これはかなり大きな公共事業なんです。

伊藤 これは公共事業なんですか。

吉元 これは大きいです。交通方法を変更しますと、交差点の角を切るわけにいかんですよ。つくり方が違うわけですから。大きく曲がるのか、すぐ曲がるのかで全部違う。

佐道 道路のあり方が変わるわけですね。

吉元 中央分離帯を動かしたり、大変です。これを徹底的にやっただんです。七八年あたりにやっただんですが、これが小さな市内の小さな道まで含めて直しますよね。これがすごい大きな公共事業です。

伊藤 これは公共事業とは思わなかったな。

佐道 なんにでも結びつくものですね。

吉元 だから、一次振計の十年間のなかに、この三つがバーンと入ってきたんです。これが膨れ上がるんです。そして、沖繩に過重な期待がかかっているんです。県民自体が「それは観光立県だ」と。それで、ホテルをつくる、増設が始まったんです。海洋博後に人が来ない。たくさんさんの倒産が起こり海洋博被害というのが多かったです。そういうことを繰り返しながら、結果として、国の公共事業の資金投入によって、沖繩の生活基盤、産業基盤、社会的インフラをどこまで早く持ち上げることかというのに県民が総力をあげたということです。そのなかで、復帰直後に、本土移ってきた海兵隊が膨れ上がったことも含めて、沖繩で手をつけることができなかつたのが基地問題だった。だから、さっき言ったように、以後、十年間、文字どおり、沖繩闘争がなくなったというのはそこにあると思います。それで、八三年、四年に私が県庁を辞めて労働運動に戻るといふことになったんですが、その時に、私たちが沖繩の闘争を再構築していったのは、やっぱりもう一回基地問題を無理しないで、真正面からとらえて、どうしても問題のある基地を除かそうと。そのあとの土地利用を含めた沖繩づくりをしないと手遅れになる。つまり、基地に依存した、依拠した県民

生活というのはいつか破綻するよと。復帰段階でできなかったこととです。これが県民の目から十年近く、政党の目からもおざなりになったということがその後大きな問題を残したんでしょね。それから、それを過ぎちゃうと、西銘さんも気づいてくる。基地問題をやっぱり触らないといかんと。私はそういう意味では、この構想を、県庁なりで、職場に復帰した段階で議論しながら、経済界の親分衆に説明しても「うん」と言わんし、知事に説明しても「うん」と言わんし、しかし、いずれにせよ、アメリカに行くということになって、西銘知事がペンタゴンに行つてこれをぶち込んでくることを期待したんですがね。

伊藤 これは國場さんはどれぐらい。

吉元 あの人ではできればいいと言つたんです。

伊藤 それでは、吉元さんのほうから話をした？

吉元 いや、僕が職場復帰したのを知っているから、一度だけ細かい説明をしたことがあります。恐らくこの時期ですから、まさに冷戦の最中ですから、そういう意味では、政治的な要素についている人ほど、飛びつかなかったんでしょね。飛びつくべきだったと思うけど、飛びつかなかった。

伊藤 飛びついておかしいというのは。

吉元 どうなんだろうね。

佐道 基地の問題というのはなかなか触れたがらない。

吉元 中曽根さんが一時期沖縄に関心を持った時期があるということだったんです。

佐道 総理の時代ですか。

吉元 少し興味を持ったんだけど、だからといって、あの人のところからこの種の話が出たこともないです。結局は、復帰したあと、政治は沖縄問題に目を向けなかったということなんでしょね。沖縄が騒がんから。

■ 振計策定の考え方

佐道 沖縄県の政党を中心とした政治が本土にアピールをしない。アピールをしないから、本土の政府も、開発振興費でどんどんお金をぶち込んでいるから、もういいだろうという形になってしまうということですよ。

伊藤 振興と基地問題とは。

吉元 もう一つあるのは、大事なものは、振興開発計画の形です。これは特別法によつて、策定される国計画ですからね。県知事は原案提出権しかありませんからね。

佐道 まさにそのお話を本当に伺いたかつたんですけれども。

吉元 原案提出権というのはかなり重いんです。ところが、原案提出権というのは、日本の官僚に言わせれば、原案をつくる段階で調整せよということだから。

伊藤 原案をつくる段階でもうすで。

吉元 そうそう。政府の関係省庁の了解を取っておけと。だから、許容の範囲で原案がつけられるということなんです。これが一次振計の段階。一次振計はかなり抵抗して、屋良さん時代ですから、企画調整室の連中がぎりぎりまで基地問題で争っているんです。そして、どうにも突破できない。あの時、県では年次計画がつけられてるんです。

伊藤 やっぱり基地撤去ですか。

吉元 いや、基地の問題だけじゃない。沖縄の振興開発計画に伴う、原案を策定した段階で、そのバックデータとして（琉球政府が立案した）十年計画がつけられている。これは無視されているけどね。つまり、あの時に日本政府とものすごく喧嘩して、結果として、屋良さん時代にさえ、突破できなかった。私が職場に復帰したのは、二次振計策定時で、毎日といっていいほど、企画調整室の職員は東京に交代交代で呼ばれる。そういう意味では、さ

きほど言ったように。

佐道 中身の調整ですね。

吉元 だから、許容される範囲ですね。

伊藤 東京はどこですか。

吉元 各省庁が。開発庁というところは、文案調整に目くらまら立てるけど、仕事の中身については、結局は、各省庁と事業の内容は全部調整する。それで、決まったやつを持ち帰ってきて、事業を並べて、あと、文章化する段階で開発庁に行つて、「これでよろしいですか」。ですから、開発庁という仕事の沖繩に関わる力というのは、顔だけで、ほとんどないです。

佐道 そもそも論になるんですが、開発庁方式もそうですし、それから、さきほどの沖繩三法ですが、沖振法の基本的な問題。あれは国の計画であつて、県は一応は国との調整のもとにつくるけれども、基本的には国の調整権が非常に大きいわけですね。結局、こういうことかというのと、つまり、国の下げ落としのプランになるということですね。ほかの県はマスタープランは自分の県で自分でつくるわけですね。沖繩だけは国が決定されたものをいただいて、それに従つてやるという。

吉元 基本的には、法律上はそうなつていないはずですが。原案策定権が県知事にある以上、自由につくつていい。しかし、そのとおりでできない力関係で終わつていいるから、結果的に、あなたが言われるような形になつていいる。それをおかしいと、つくりかえようと。三次振計の西銘さんがつくつた案を大田さんが当選して引き継いで、審議会答申も受けた、県庁内で調整も終わった。大田が就任した。待つたをかけた。もう一回見直そうとした。それで、基地問題を入れると。その二行か三行を巡つて、開発庁と「大闘争」になるんです。これは九一年の初めです。

佐道 そもそもいまの実態ですよ。本当は原案提出権があるにも関わらず、実は国が非常に強い力を持つてプランをつくるとい

う仕組みは、それが動いてみてわかつてきたということですか。

吉元 そういうことです。もつと質的にいうと、公共事業を年次計画的に並べて、積み重ねていく。量が多いか少ないかという関心は強いけど、どこにウエイトを置くかという関心は強いけど、もつとソフトな、沖繩は将来どうするということに対しては、目がいかなかった。金をとるのに精一杯だった。それで、「本土並み」、「追いつけ」ということが目的化しておつた。しかし、二次振計が終わつた段階では、「ちよつと待てよ」というのが県民のなかに出てきた。しかし、その時にも、西銘県政と大田県政の接続の場ですから、なかなか従来の公務員の思考は変わらなかった。しかし、大きな問題が起こつたのは、一つは八九年のベルリンの壁の崩壊です。選挙は九〇年十一月ですから。その時は東西ドイツが合併です。統一国家です。九一年といつたら、ソ連の崩壊でしょう。八九年二月三月も、アフガンから撤退していでるでしょう。だから、大田県政ができたというのはまさにそういう節目で、基地問題が動くぞという県民の実感があつたということです。基地のない沖繩をつくりたいという大田の言い分がスーッと県民に通つて、「西銘さん、基地問題どうしたの？ 公共事業ばかりやつて」というのが、逆転していくことでしょう。政治的力量からいえば、西銘さんのが数段も上です。だけど、県民はそう見なかつた。やつぱりここは沖繩の基地問題で変わつて欲しい。それで、大田が就任しても、前県政から引き継がれた部長などが占めており、大田の政策を組み込むことに積極的になれない。私も調整監で入つていいるから、そのままではまずいと指示。ほかの部分はいいとしても、基本的な部分は問題だよと。基地問題が一つ。もう一つは、二十一世紀の沖繩をどうつくるのかという視点がない。新しい三次振計の前文では、「我が国の南の……」という、国際交流拠点のなんとかという「二行」を書き込んでるんです。これをとつかりにして、国際都市形成構想に入つていく。あれは最

後までこだわりました。そういう意味では、三次振計になって初めて、沖縄の将来の姿を、日本の国の役割を含めて、沖縄自体の絵をどう書くかというつながりつくったということです。

佐道 言葉を変えれば、それまでは沖縄県の政治の中核は沖縄の将来像を構想しながら、開発振興計画を立てるといふ発想はなかった。

吉元 なかったと言ったほうがいいでしょうね。

伊藤 要するに、目的としては、県民所得を内地並みにすると。

佐道 なんとか追いつかせることが主要目的である。

伊藤 そのためには、どんどん公共……。

吉元 一次振計が本土との格差是正ですね。技術的發展の基礎条件の整備ですね。「平和で明るい豊かな沖縄県」。二次振計もまったく同じなんです。平和で「豊かな」が「活力ある」になるんです。これはなぜかというのと、「豊か」を使ったのは屋良さん。「活力」を使ったのは西銘さん(笑)。これだけの違いです。三次振計になって初めて、本土との格差是正と自律的發展の基礎条件の整備を加えて、広く我が国の社会経済及び文化の發展に寄与する特色ある地域として整備する。これが付け加えられました。これが特徴です。これを前提にして、今度、国際都市のプロジェクトに取り組んでいくんです。二十一世紀のグランド・デザインの。

佐道 その言葉を入れるのに大変。

吉元 それは大して向こうはこだわらなかつたみたいだけど、僕らはこの文面に相当こだわったですね。

伊藤 それは基地問題と関わる?

吉元 基地問題というよりは、むしろいままで目標を持ってない。沖縄の将来像を描き切れない。描こうとしない県民を、行政を、ちよつと待てよと。二十一世紀はこう目指そうじゃないか、二十世紀の最後の十年はこれらをしっかりと勉強してみようと。仕事として奮い立ってみよう。そして、二十一世紀に、つまり、次の振

計につないでいこうと。この文言を入れたことによって、開発庁も国際交流のために何をしたらいいかという仕事に入ったし、沖縄県も、私が二次振計からやつておつた仕事が始めて、計画の方向として、県庁のなかで乗るようになったということです。

佐道 大田県政時代に入つておもしろい話なんですけども、ちよつと休憩を。

〈休憩〉

■大田県政と沖縄開発庁

佐道 ちよつと大田県政に入つたあたりということで再開をしたんですけども、三次振計のところ、さきほどの文言にこだわつてお入れになつて、そこから、国際都市形成構想の芽が始まるということですけども、開発庁自体は、そういうふうな沖縄が将来構想を頭に描きながらやつていくという姿勢を見せ始めたということについては何か。

吉元 自覚してないでしょうね。それほど自覚してないと思います。大田県政が、基地問題については、何か言ってくるだろうという覚悟はあつたでしょう。でも、開発庁はもともと基地問題についてはノータッチですから、最初から俺たちじゃないと言っています。沖縄のことについて全てをと言っていないながら、基地問題については違つと。これは外務省に、防衛庁にというやり方です。つまり、基地問題についてののみ、開発庁は触らなかつたわけですから、そういう意味では、大田知事が誕生しても、うるさいやつが出てきたという感覚はあつたかしらんけど、それほど沖縄の将来のグランドデザインを持ち込んでくるという自覚はなかつたと思います。

佐道 沖縄開発庁は、国務大臣がいらつしゃつて、たとえば県出

身の方もいらっしやいますよね。そういう方々とは、先生が議論をされたりとか。

吉元 ありますよ。沖縄県出身の国会議員も含めて、それは頻繁にあります。私たちは北海道を参考にしたんです。北海道は、保守、革新、与野党を問わず、北海道出身の衆参議員は全員が一つに集まって、北海道に必要な予算措置とか、制度的な仕組みとかの実現のため統一行動をとるんです。これは当たり前につくりあげられてきています。それに北海道庁とは緊密な関係ですね。北海道開発庁は予算を取るために活用しているんです。ところが、沖縄開発庁は、それだけの力がなかった新しい組織であるかもしれないけど、やっぱり沖縄開発庁の軸になる職員、官僚の姿というのがばらばらなんです。そこが基本的な問題だったと思います。

伊藤 これは寄せ集めですか。
吉元 そうですよ。だから、沖縄開発庁の事務次官をやるのは、大蔵がおったり、自治省出身がおったりということでしょう。ほとんどこの二つかな。交代交代ですかね。ですから、誰が次は事務次官になるのか、誰が振興局長かというような形で、少し定まっていなかったというのがあったかもしれません。逆にいえば、それだけに大蔵とのつながりが強かっただけに、自治省からのやつが事務次官になったら、振興局長はハードな部分を担当するやつは大蔵だというのが決まっています。ですから、予算措置にはそれほど困らないというのがあったかしらね。だから、国会議員も、沖縄は、与野党が激しいでしょう。国会で一緒にチームをつくるというのは全然だめなんです。いくら頭を下げて、西銘さん時代からだめなんです。だから、集まるのは別々なんです。必ず別々です。それはいまでも続いているそうです。そういう意味では、あまり力にならないけど、そうは言っても、自分の出身地のことについてはそれなりにやっとなつたようですから、たとえば社会党のなかにも、沖縄特別委員会というのがあったり、自民党

のなかにも、同様の組織がある。

伊藤 これは連携してないわけですか。

吉元 いや、まったくないです。それが沖縄の政党とのつながりですね。自民党の時代はよかつたんです。ずっと続いとつたから。屋良さん時代でも、革新のほうに顔を出して、自民党のほうに顔を出せば、それまでつなげていた。ところが、細川政権になってから、パタツと変わってきたんです。細川政権になって、自民党は一年間余り野党になるでしょう。この時に構図がばらけてきた。その時に、沖縄開発庁長官を上原康助さんがやる。しかし、この細川政権というものの将来性を官僚の皆さんは見てなかったから、細川政権と各省庁のキャリアとの関係なんていうのは、そんなのできる時間もなかったし、信頼関係なんてまったくなかった。私たちはそれをみとつたし、ただ、いちばんの問題は沖縄選出の国会議員だけはなんとか手を組んで欲しいということで政策調整監としてに働き掛けたけど、これは不発だったですね。

伊藤 上原さんはどうだったんですか。

吉元 沖縄のことについては熱心であつたけど、党のなかで信頼がなかったというのかな。つまり、副委員長までやつた人だけど、党のなかでは、沖縄問題は自分だということで、党内の他の議員が沖縄問題を委員会で発言すると「怒っていた」という話は社会党のなかで聞いたとつたのですから、結果的には、彼から離れるというのがあったし。

佐道 求心力を持ち得なかった。

吉元 持ち得なかった。これは人の問題でしょう。いい評価は聞かなかつた。

伊藤 吉元さん自身は上原さんとうつたんですか。

吉元 復帰直前の第一回の国政参加選挙の時に出したのは、私たちが中心です。彼を出すために、私は社会党に入党したんです。ところが、実際問題としては、彼が沖縄とのつながりで、沖縄の

なかでとなると、それほどないですからね。文字どおり、全軍労時代に首切り反対のためのストライキを彼らがやる時に、私たちは支援しながら、銃剣を突きつけた海兵隊と衝突したこともあったんだが、その程度の付き合いで、労働運動のなかでも、それほど彼らが沖縄の労働運動をリードするという立場にはなかった。基地の労働者に対する県民の支援の仕方というのは特別で、何かある時に全部包むということでした。

伊藤 構想力みたいなものはどうですか。

吉元 ああ、それはいいようです。特に聞いたこともない。

佐道 その場合に、保革を問わず、沖縄の政治家として、まともって欲しいという時には、誰か中心になる人がいないと思えますが、その人は想定されていたんですか。

吉元 だから、結果的には、それがいいから、沖縄県の東京事務所所長が朝昼晩国会の居室を回って連絡をつけて、それで、私たちが行くと、必ずあいさつ回りをすると。知事が行ってあいさつ回りをするわけにいかんから、一年に一回は、十二月の段階になると、例の大蔵内示の段階で、直前に知事が行って、政党別には集まってもらう。与党、野党と。

伊藤 別々ですか。

吉元 それで、結果的には、お礼をして帰ってくるというパターンです。それですんでおったんですがね。政党が実際にそういう意味で絡んできたのは、西銘さんは自民党のなかでもそれなりの力があったし、同時に当時の田中派の流れを汲む人ですから、それなりに自分の派閥が面倒をみてくれた。大田さんになると、それがなくなつた。しかも、細川政権になつたわけです。細川さんとの間で初めて、総理と沖縄県知事大田が会つたわけです。その時に、大田が海兵隊の撤退と、それから、普天間の返還を求めるんです。それを細川さんがクリントン会談のなかで出したが、なぜか発表は抑えられた。それが総理と官邸と沖縄県とのつながり

の出発です。細川さんが始めた安全保障問題に関する「懇話会」にどう反映されるかというのを僕らは期待しとつただけど、途中でそれは頓挫していく。村山さんになって、その答申が出たけど、その内容は、細川さんが言った内容とは違う形で、もうすでにナイ・イニシアティブを前提とした取り組み、それから、防衛計画との関係の整合性があるような形に答申が出てくる。懇話会の中身はそうなっていく。その結果が、大阪APCC会議にクリントンが来る時に、例の「共同声明」と言われたものでしょう。酒を飲んだ時に、村山さんが、「俺、やりたくないよ」ともらしていたけどね。村山政権ができたとしても、実態は自民党政権であつたことは間違いないでしょう。

佐道 いま、非常に重要な問題なんですけど、そこに行くまでにまだいろんな問題があるので、そこをお聞きしたいんですけれども、開発庁と県庁との関係ですが、そうやって三次振計の段階になつて、大田県政になつて、将来ビジョンということを考えてやらなきゃいけないという話になつてきたということですから、それまで振計の問題を睨んでも、たとえば県庁と開発庁とがいかにか密接なパイプを持ってやるかということが非常に大きな課題だつたと思います。西銘県政の時代はそうだつたと思いますけども、たとえば大田県政の時代、先生は最初から開発庁方式はおかしい、よくないというご意見だつたと思いますが、実質的に開発庁はあるわけですね。あつて、振計なんかをやる場合には、開発庁という存在があつて、それがしかの関係をつけないといけない。この開発庁との調整、いまは開発庁はなくなつていくわけですから、大田県政になつて、開発庁との関係というのはどのようにしようと思われていましたか。

吉元 一つは、振興開発計画。三次振計というのが大田県政に替わつた節目で立ち上げたということです。ですから、この一行が新しく出てきた。これはとっかかりになつたということが一つあ

るけど、それ以外の通常のもの、予算の調整なんです。事業をとるかどらんかの話です。これは開発庁にほとんど実権がないんです。各省庁に全部あるんです。運輸省なり、建設省なり、その他省庁にある。だから、たとえば起債の問題を言っても、開発庁は関係ないからね。自治省です。最初から最後まで自治省です。あとは報告するだけです。やりますよと、これはもう全部報告です。だから、二重仕事をやるとというのが県庁の課長連中の言い分なんです。各省庁はメインだと。こうしますよというのは必ず報告する。報告しないと、目をつけられるという話だからね。これは何かというと、開発庁の職員の出向が二年サイクルなんです。各省庁から二年サイクルで入ってきて、同じところに帰っていくんです。ですから、事実上、これは各省庁と詰めておけば、仕事は終わりだということです。開発庁の存在価値というのは、唯一、振興開発審議会を持つということなんです。だから、策定の段階、それから、総括する中間段階、後期の課題と施策をまとめるということなんです。ちょうど五年の節目、それから、次期振計。だから、極端に私に言わせれば、十年間に二回が、開発庁が大きな顔を立てる時期であって、あとは十二月の予算段階で開発庁が大蔵内示がありましたよと。沖縄県では担当副知事が来て、ちゃんと長官室でみんな一緒に立って報告を受けるという形で、御苦労さんとビールを飲んで帰るといふんでしょう。あとは開発庁の長官の人事の時に、発令されたら、そこにいないといかんということです。知事が副知事が辞令が出るまでの間に東京に行って、開発庁に行って待つと。辞任する大臣に「御苦労さんでした」というあいさつと、発令された新大臣に「よろしくお願いします」と、これぐらいですよ。

佐道 総括的に言うと、開発庁はなくなりましたから、開発庁が果たした役割、功と罪をいま評価できる時期だと思いますが、それはどう思っておられますか。

吉元 特別な課題、たとえば復帰措置とか、戦後処理とか、やっぱりそれはそれなりの窓口として取り上げる。取り上げないと、関係省庁が新しい仕事ですから、ルーチン業務じゃないということがありました。たとえば厚生年金問題。復帰前の沖縄に民間には厚生年金法がなかったわけです。国民年金も沖縄になかったですから、ですから、それをどうするか。沖縄の民間の重役も社長さんも全部そうなんだけど、復帰前の年金制度はなかったから、結果的にはカットされておるんです。使用者負担もない。労働者負担もないでしょう。政府負担があるだけです。その分は押さえる。それをどうするかというのは長いこと問題だったんです。それで、これは大田県政になって、最終的には私が片づけたんだが、沖縄も条例を改正して、いまある企業に法人税を少し上乗せしてもらう。つまり、復帰前の使用者負担をどうするかというので、政府との話をまとめた。沖縄も、いまの民間企業に持つてもらいましょうと。それで、労働者負担についても、ちゃんと出してもらいましょう。無拠出時代の分を。だから、政府も責任を持って制度化してくれということでもまとめて、そして、特別措置を走らせたのです。

伊藤 遡って負担するわけですか。

吉元 ええ。それで、嫌な人は金を出さなくていいということも前提に、それから、マラリア保障とか、そういうのは幾つかあります。そういうものについては、開発庁が窓口として受け止めて、これは権限がありませんから、「イエス」「ノー」はありません。そこに入れておいて、それから、厚生省ですべて決着をつけて、ついたら、それを開発庁に報告して、措置してもらう。厚生省では措置できないわけです。

伊藤 厚生省だけでは。

吉元 ええ。通常の国民年金の仕組みとは違う例外ですから。こういうものが開発庁予算として特別に出てくるんです。そういう

意味では、マラリアについてもそうでした。

伊藤 復帰して、いろいろなことが正常化した段階では、各省庁との関係だけで済んじゃうということですか。

吉元 もともと復帰措置とか、そういう問題については、開発庁はなくても片づけなければいかん戦後処理・復帰措置という政治的課題です。日本国民だということは間違いないですね。施政権がなかっただけの話。なかったから、法律も適用しなかったから出さなかったけど、それを片づけなかったから、窓口があるからと開発庁の責任になるけど、僕らは開発庁がなくても、これは当然日本政府が片づけるべき問題だから、関係省庁に持ち込めばいいわけです。その程度の話だから、あったからやれたのかということ、そうでもないんです。そういう意味では、本質的な問題です。つまり、便利であったかどうかということが問われる。どういう機能、役割を持ったかというよりは便利であったのか。

伊藤 どうだったんですか。

吉元 県庁の職員はほとんどうるさいという。それほど便利とは言っていないですね。僕らも北海道開発庁との違いを相当勉強したんだが、北海道開発庁というのは歴史的にご承知のとおり、知事選で道庁の係長が知事になったんです。そしたら、当時の自民党が怒っちゃって、政府からの予算を全部引き上げると北海道開発庁をつくったんです。だから、土地改良、農地の整理なども、市町村がやるとする仕事の範囲、領域まで、北海道開発庁の仕事なんです。港湾も空港予算も、二種、三種、つまり、まったく仕組みが違うんです。仕事の領域が違う。たとえば皆さんは覚えているかな。北海道でトンネルが崩れて問題化しました。あれは本来言ううと、道庁の「県道」というのがありますね。ところが、あれは北海道開発庁の仕事なんです。だから、北海道の道路は、その多くが開発庁の直轄なんです。これは問題にいつかなるそうなんです。国がやってくれるから、便利なんです。

そういう意味で、北海道をみると、いやいや、そんな仕事は

沖繩開発庁にない。市町村や県が持つ。これは直接各省庁とつながる。沖繩開発庁と一体何がつながるかという話で、メリツトはそれほどないんです。だからと言ったらおかしいけれども、橋本さんになって、行革が始まって「開発庁をなくすよ」と単刀直入に言われた時に、「沖繩、北海道、国土庁の三つを潰す」と。最初に沖繩開発庁なしが橋本さんの結論なんです。だから、考えなくて。どのほうがいいかと言われて、私は大田知事にも報告し、県庁のなかで、企画調整室のなかで、数名のグループをつかって徹底して論議させた。何がいいかと。それで、ちょうど沖繩政策協議会も走っておったから、これを潰さないで、県政が変わっても使うという約束を取り付けておったから、これはある。そうすると、別に開発庁はなくてもいいな。じゃ、事務的な仕事はどこでやる。窓口はどこでやる？ ゼロじゃいかんよ。北海道開発庁と同じように、国土交通省にぶち込まれたら困るからね。やっぱり沖繩問題は、基地もあるし、安保もあるし、まだということで、特殊事情は残っておるからということで、内閣府に置くということを先に取ったわけです。内閣のなかでどういう仕組みをつくったらいいかということをや五つの案をつくって、将来、「特別県制」をつくるから、それまでに受け皿をつくっておこうと。これをつくった時にこれを託そうというのが五番目の案で、しかし、一番目の案がいま実行されています。

伊藤 一番目の案というのはどういうことですか。

吉元 いまの内閣府のなかに沖繩のセクションをつくって、担当大臣を置くというのが条件です。規模とか、そんなのはあまり言っていないです。

佐道 担当大臣がいて、統括官がいて。

吉元 そして、沖繩政策協議会の事務局であればいいということ。これは結果的にそのとおりになったけど、勝手な取引をし

たと議会ではやられました。

■シンクタンクを積極活用

佐道 それは大事な問題なのでちよつとあとなんですけど、国際都市形成構想の問題なんですけれども、開発庁の問題も絡んでくるんですが、実際、開発庁というのはそういうふうには実質的に、沖縄県としても、開発振興の問題を考えるとしたら、各省庁だと。開発庁ではないということがあったんですね。前回のお話でも出たところでもあるんですが、国際都市形成構想の基礎的な作業を進める時に、沖縄のシンクタンクではなくて、東京でやった。まず、最初はNIRAだったけども、NIRAがだめだった。なんでもNIRAがだめだったのかという問題と、それから、都市経済研究所というのが受けたんですね。都市経済研究所は多省庁とのつながりがあったということも重要なポイントとして前回お話をされていたんですが、いま、お話をされていたこと、まさに沖縄の問題は開発庁じゃなくて、いろんな省庁とのつながりがあるということがあって、一つの都市経済研究所というのを選ばれたのか。

吉元 まず、NIRAの話ですが、NIRAに県庁の職員を二年サイクルで送り込んでいたということで、送り込んだ度に、行くやつに特定の課題をもって、二年間勉強させたんです。それなりに彼らは勉強してきたと思います。帰ってきたやつは、特に九〇年代、私がおる間は、チームを時々集めて議論させておった。企画とかなんとかというルーチン業務とは別に、若いこのクラスを集めて議論させた。そういう意味では、国際都市形成構想というのをつくりあげるための重要な人的財産だったという気はする。その中心になったのは坂口一ですが、東大を出て、官僚になるのは嫌だといって、キャリアになるのは嫌だといって、沖縄に来て、県の公務員試験を受けて、県庁に入った。最初にNIRAに行かせた職員ですが、だから下河辺さんとのつながりも深いんです。

そういう意味では、最初の仕事はNIRAにさせたほうがいいという話だった。NIRAも始める前に、一回、安全保障に関わる東アジアと沖縄をテーマにしなから、日米間の安全保障を頭におきながら、もう少し広げた形で研究会を一回やっただけです。NIRAの予算です。これも私も非公式に呼ばれて議論に参加したりしたんですが、これでさせてみて、これでいけるかなと思ったんだけど、やっぱりNIRAでは無理だというのがわかったんです。これはNIRAの限界です。特別にNIRAが日本の一つのプロジェクトをとらえて、極端にいえば、沖縄県の将来をという形で、そこまで絞り込んだ議論をするというのは、各省庁との関係からすると、NIRAでは荷が重過ぎる。圧力がかかりやすい。

佐道 圧力の問題で。

吉元 そう。これは案の定そのあとに圧力がかかったんです。それは九八年です。例の海兵隊の移設先を苦東（苦小牧東部）に。

佐道 北海道という話ですね。

吉元 あの仕事は私がNIRAに二回目に持ち込んだんです。そして、その仕事をNIRAが直接やるのではなく、日本リサーチかどこかに出すんです。このレポートが野中さんの手に入って、それで、潰しに入られた。だから、あれは「幻の報告書」と言われている。お蔵入りしとるはずなんです。ゲラ刷りは僕は持っているけどね。だから、NIRAにはちよつときついのがあったので、NIRAはストレートに使えない。下河辺さんも、「そうだろう」という言い方を暗にしとつたから、荷が重いなと思った。そこで、都市経済研究所。そういうのがあるということさえ、私はわからなかつたんです。沖縄でも、県とつながってなかつたし、あそこには宮城健一さんという人がおって、日本リサーチから都市経済に出向しとつたらしい。常務クラスかな。彼が沖縄にしよつちゅう来とつたんです。いまでも時々来ます。彼が県庁に遊びに来た時に、私がこのプロジェクトの話をした時に、「あれっ、これにふ

さわしいところがあるよ」「どこが」「都市経済だ。自分はいまそこに居る」という話で、名刺をもらって、「お前のところの仕事の実績を見せろ」と言ったら、都市経済ですから、横浜とか、幾つかのところをやつとるんです。それを見てレポートも取つてみたんですが、ストレートで使えるというよりはむしろ普天間の跡利用を含めた中南部都市構造の再検討ということにさせるならば、おもしろいところだなと思つた。国際都市を最初に彼らにさせたんじゃないくて、そういうイメージであそこをターゲットにした。それで、僕は東京に行く機会に、その理事長と話し合つてみたら、意外と政治にも近い。後藤田さんとか、塩川さんその他も含めて、政治にもものすごく近い。同時に、仕事そのものが幾つかの省庁との関係があるので、その関係で、どのクラスと付き合っているかと聞いてみたら、課長補佐クラスが多いんです。フリーに論議を彼らはやるそうなんです。そうしたやつをまとめていくらしいんだけど、可能性があるやつを可能な限り身近に活用していくのが都市経済の手法らしくて、それならば、少しさせてみようということで、理事長とある日、徹底した論議をするんです。最初に私はいつも言う「シンガポールのような都市国家を」と。「ハワイのような役割分担を」と、「プエルトリコのような分権を」というような趣旨を解説した上で、沖縄の二十一世紀、文字どおり、冷戦崩壊後の東アジアのあり方、朝鮮半島問題、台湾問題、それから、中国の問題などを中心に、福建省とつきあつて、将来的に蓬萊経済圏をと夢見て動いている話などを含めてです。九二年頃だつたと思います。その時に理事長のほうから、それはやつてみたいという話になつて、それではということ、県庁のなかで、「ここに絞ってやる」といつか問題があるか」と聞いたたら、「県内のシンクタンクをどうするか」という話になつた。県内のシンクタンクはずいぶん昔から知つとるものですから、一つ一つ現場から持ってきた実績を見ながら、そこ

は無理だと。県内のシンクタンクを組ませて、そこに人材を集めて、チームをつくつて、委員会をつくつてやるという方法はあるけど、それではこれは一過性になるよと。もつと本格的に日本という大きな視野からこうありたいなという方向も重ねながら、沖繩をみて欲しい。しかし、考えていることはきちつとやつておかないといかんと。最終的には、大田知事との会談のため、理事長に来てもらつた。だから、最初の一年か二年ぐらひは、一般的なレポートをつくらせてないんです。

佐道 懇談会。

吉元 懇談会で徹底した論議をさせたんです。沖繩をどうするかという話です。それは安全保障の問題から、東アジア全体のこれから、日本のあり方を含めて、いろんな論議が出ました。それを議論させながら、並行して、関係省庁、大蔵も含めて、十名内外の課長補佐クラス、キャリアを集めて、そこで議論をまたやるんです。これを重ねて、まともに入ろうといった段階で、「報告書」という形が出てくるんです。それが薄つべらな「二十一世紀の沖縄ブランドデザイン」というのにつながつていくんです。ですから、普通の委託調査というイメージでいうと、なんのために金をかけているのと言われる。これは議会でも言われたけど、でも、そのことで少なくとも沖繩がやつとる仕事を幾つかの省庁に入れ込んだ。この仕事を県庁のなかでも、係長クラスを集めると。それ以上のやつは集めるなど。二〇一五年までに県庁におけるやつを集めるといふのが私の主義でしたから。県庁でこの仕事を担当するやつと、仕事にアドバイスした中央官庁のキャリアの連中を付き合わせていこうという工夫がもう一つありました。

佐道 人材育成じゃないですけど、教育というか、そういうこと。吉元 むしろ戦略的な思考を私たちも得たいけど、逆に国のほうに植え込みたいというのが本音として僕にあった。

伊藤 戦略的に国に考えてもらいたい。

吉元 そういうのを沖縄は考えているよ。お前さんの間尺でどうなるの。考えてないというなら、考えろという形で、その役割を都市経済研究所に担ってもらった。これは私たちがつかめないぐらい、こまめに各省庁とはやってます。だから、そういう意味では、ちよつと先を飛ぶようだけど、沖縄政策協議会はつくられて、そこにグランドデザインを出して、そして、国際都市構想の中身がある程度ペーパーに出していく過程で、各省庁から来た局長クラス、ついてきているキャリアの補佐クラスも手の内を知っている格好だったからね。理解がものすごく早かったです。それは無駄な選び方じゃなかった。

佐道 国際都市形成構想を都市経済研究所に立案しろという話が九二年（平成四年）から始まって、最初の二年ぐらいは、先生がおっしゃるように、懇談会という形で、有識者を呼んで、いろんな議論だけをしているという、時間的にみると、すごいゆったりした形で始められておられるので、どういった考え方からそういうことをされていたのかなど。

吉元 それ一つですね。もう一つは、やっぱり沖縄での体制づくりです。これは県庁内だけではなくて、私が言っているイメージというのを県庁の職員がとらえる。だから、県庁のなかで、国際都市形成構想のチーム、組織がきちつとできあがるのは九五年かな。確かその頃です。それ以前は、私が政策調整監の時に、三名のスタッフがやって、この連中にこの仕事を担がせたんです。そして、確か九四年あたりに、企画調整室に一回おろして仕事を始めさせて、片手間でできないというところになって、国際都市形成構想推進室という十名近くのチームが始まるんです。これが組織づくりの初めだと思います。

佐道 九五年四月に、国際都市形成推進班ができて、十一月にプロジェクトチームですね。

吉元 九六年四月一日に推進室設置ですね。

伊藤 さつき言ったような人たちをそこに集めたわけですか。

吉元 そうです。

佐道 最初、懇談会という形でやっておられるんですけども、これは非常に印象的なことは、いろいろと議論をされているんだけども、先生が最初に都市経済研究所などにおっしゃった、基本的な考え方として、質問表に書いたんですけども、基地ということがないというか、沖縄というのは基地があると前提になりますが、そうではなくて、「白いキャンパス」に沖縄に基地がなかったら、どういうふうな絵が描けるかみたいところから始めてくれということをおっしゃったと。

吉元 これは知事の選挙政策のなかに、一期目は口頭で、「基地のない沖縄を若者のためにやってみよう」ということ。二期目の知事の政策のなかに、これは九四年十一月の選挙の時ですが、「基地のない沖縄」という表現があるんです。これがその後の行政のなかでメインにしていく理由につながるんです。九二年かな、大田知事に正月の職員への「メッセージ」で「真っ白なキャンパスにデザインをしてみよう」と。あいさつをつくる時に、この文字を入れたんだけど、本人はまだその場ではどういう意味かはわからなかったみたいです。

伊藤 大田さんは読んだわけですか。

吉元 そうですね。あんまり意味を吟味しないでやってみたくいですね。従来、政治姿勢としては、基地の存在も根拠となっている「日米安保条約に反対し、核も基地もない平和な沖縄を目指し、米軍基地の整理・縮小を引き続き強く要請してまいります」という言葉が普通の言葉ですが、それ以降、さきほど言った「基地のない沖縄づくりを云々」という言葉は各項目のなかで出していきます。ですから、例の国際都市形成構想の原型になった、基地との関わりで基地ゼロにするという二〇一五年の姿と、それを前提とした基地返還アクションプログラムというやつは、知事のこの

政策、県民との約束を表に出した。だから、民間、経済界からも相当怒られました。「なぜ基地がゼロか」と。「二期目の大田の政策活動ですよ」と。そうすると、みんなが納得したけど。いや、オーケーはしなかったけど、政策かと。

佐道 一期目の時からそれは言っておられた？

吉元 基地のないという表現はしていました。でも、文字として、きちつと政策に書いたのは二期目です。

■代理署名拒否の背景

佐道 二期目というのは、比較的再選は安定したというか、大きな波はなかったということですが、それは一期目に大田さんを支援した県の経済界なんかも一致して応援をしていたということになるわけですね。

吉元 ええ。

佐道 担いでやっていたので、それに文句はなかなか言えなかった。

吉元 そうですね。文字どおり。そういう意味では、大田の二期目の政策の原点は国際都市形成構想ですから、それを世にどう問うか。知事政策で問えばよかったけど、私はそれをまだ行政の仕事だからと思ったので、政策には抽象的な書き方をさせたけど、九五年一月の確か『琉球新報』にシリーズとして載せた沖縄のグランドデザインですね。あれを新報はどういうタイトルを使ったか記憶にないけど、グランドデザインのほとんどの中身を県民に問う形で投げ掛けました。

佐道 そこが質問したところですが、九二年ぐらいから少しずつ準備をされて、だいたいいろいろまとめられて、九五年に新聞でという形で出ていくわけですね。この時期になったから、もうそろそろこうやってオープンにして。

吉元 二期目の初めの年です。正月早々。やっぱり問うたほうが

いいという判断です。

佐道 それは先生のご判断ですか。

吉元 もちろんそうです。

伊藤 大田さん。

吉元 いや、私も副知事になっていましたから、私の判断。もちろん相談しますけど。あまり内容はわからなかったでしょう。それで、これが相当反響が大きくて、その年の二月の中旬にナイ・イニシアティブ（米国防省の第三次「東アジア戦略報告」）というのが出ますね。これに大田が相当怒って、この批判に入るんです。国際都市形成構想、グランドデザインがこのシリーズで出て一カ月半、そのあとにナイ・イニシアティブが出て、日米軍事同盟はもっと強化されていくということを。村山政権でしょう。そして、大田がその年の四月かな。訪米するんですが、そして、帰ってきて、その年はまさに米軍用地の強制収用に伴う代理署名の問題。俺はやらんよという決断を知事がするんです。最終的には八月の末でした。その時の会話は、「やらなければ、裁判にかかけられますよ。最高裁までいき、争ったって負けるよ」「いや、負けてもいいから署名拒否をやる」と。これはナイ・イニシアティブの関係で、そのまま進めたら大変になるから、村山さんとの間で徹底的に詰めてくれと。当面は自分の口で言わんよというから、八月の末に私が上京して、公邸で話し合ってます。九月四日が少女暴行事件ですよ。そして、九月の議会で大田が「代理署名しません」と表明をし、十月二十一日が県民大会。そして、その前後から、大きな問題になって、形式的にいうと、十一月の何日かに大田・村山会談をさせる。そこで私が出したのが基地返還アクションプログラムの素案というやつです。そして、国際都市形成構想の枠組みです。それで、村山さんはびっくりしちゃって、SACOが始まるのです。この流れにつながりますね。ですから、何度も言うようですが、九五年一月にこれを出していなければ、

なんか少女暴行事件があったので、県民大会があったので、国際都市や基地返還アクションプログラムを速成で提示したということになったんでしょね。事実、県議会ではそのことで議論になりました。

佐道 いまだにそういうふうなあれでもって。

吉元 だから、私は九五年正月からずつとシリーズで出た『琉球新報』の記事をみていますねと念を押すんです。みんな黙っちゃうけど、これはなんでそれがそう重なってうまく並んだかという結果論になるんだけど、僕に言わせれば、二期目の最初の年に、知事選で争って、知事選で政策として「基地のない沖縄」と表明した。それをどういう形で展開するかというやつはやっぱり出すべきだというのがありました。ですから、それほど流れとしては突飛ではなかったような気がします。

佐道 いつ頃出すかというのは、タイミングを見計らっておられたわけですか。

吉元 もちろんそうです。

佐道 一方で、基地のない沖縄をまず頭に描いて、そうやって将来の沖縄の構想を国際都市形成構想ということになると、当然、基地の問題が表裏一体になるわけですけども、都市経済研究所などには、そろそろアクションプログラムのより具体的なプランニングを、九五年の四月とか五月ぐらいの時期に、先生が立案に入ってくれということをおっしゃったということなんですけれども。

吉元 だから、最初は、地元の市町村の意向を抜きにして、とにかくグランドデザインの延長線上で、具体化する国際都市形成構想と離して、どういう基地返還のスケジュールをつくつたらいいのか。というのは、手をつける優先順位の話です。やっぱり優先順位は、那覇軍港はもうすでに出ているんだけど、普天間からいくのは当たり前です。だから、そういう意味では、あのグラン

ドデザインが絵空事ではなくて、基地の問題と噛み合っているという姿は、早い時期にプランニングをしたシンクタンクに手を付けさせたほうがいいという感じがありました。問題は、僕はここがわからないんだけど、それを策定するに当たって、もちろんうちの県庁の連中とやりながらあれをやってますから、恐らく都市経済が自分の持つとるチャンネルで、外務省とか、防衛庁とか、あるいはまた結果として、撤去したあとの普天間の跡利用とか、どういう形をつくつたらいいのかというので、関係省庁のつながりでもどこまで彼らがアドバイスを受けとったのか、つながっていないのか。これはいまもって僕はわかりません。そこは聞いてないからね。でも、あの時期にその仕事のゴーサインを出したのは、タイミングとしてよかったような気がします。遅かったら、却って、少女暴行事件があったからという話になったかもしれない。

佐道 現実の問題として、九月に少女暴行事件があつて、その後の展開がすごくあつたので、どうしてもとらわれて考えがちなんですけども、この時点ではまだそんなのは全然もちろんないわけですから、先生として、いろんなスケジュールを考えながら、二期目の最初の年だから、国際都市形成構想も一応表に出していること。四月、五月になって、アクションプログラムの具体的策定に入ろうということやっておられたわけですね。

吉元 最終的には、大田が当選した一期目は、県民との約束は代理署名しないという約束なんです。ところが、当選して、やらざるを得なかった。振計がネックでした。当時の海部総理大臣が「リンクしとる。沖縄法の延長はどうなるか……」とまで直接言われたんです。沖縄県はこうですよ。エエッ、国が計画を策定しないの。沖縄振興開発特別措置法は時限立法ですから、国会に潰されるよ。「作らんよ」といった時は大変でした。これが突きつけられました。だから、一期目は、大田は最終的には防衛施設庁長官の「念書」（僕が最終的に調整したんだけど）を取ったこと

で、大田は自分が責任を取るということで、苦渋の選択という形で県民に詫びた上で署名したんです。ところが、その後、まったく動かなかったんです。それで、九五年にまた別件が回ってきたんです。五年単位で回ってきます。その時に、大田知事はやらんよという決意を四月五月段階でしていましたから。私はそれは知事がそこまで決断したのは、一つは、前の選挙で約束したことを守れなかったことと、もう一つは、今度来たやつは署名するなというのを学者やブレインから相当やられていた。公約違反を批判されてますから、大田さんは一時期、「吉元に言え。これは俺に言うな」と喧嘩をしておったぐらいです。私は大田さんの性格だから、「ノー」と言うだろうと。この時に大田は二月のナイ・イニシアティブで決断をするんです。それで、最終的には、少女暴行事件前に、「俺は署名拒否をやるよ。だから官邸と話し合ってくれ」ということで、僕は飛んで話す。その直後に「少女暴行事件」がある。だから、大田さんの決断というのは、やらんというところが先にあります。そのことによって最高裁までいく。負けてもいいと。このことでしか、沖縄問題、基地問題は国民にアピールできない。ある意味では、彼は裁判を通して、全国民に問題を明らかにしようと。私は行政のなかでそれを無理しないような形で展開しようと。それは国際都市形成であるし、同時に基地返還アクションプログラム。強いていえば、さきほども言ったけど、大田が署名しないということが一つの基地返還アクションプログラムを具体化する、ゴアのサインを出すタイミングだったかもしれないです。

佐道 ナイ・イニシアティブは二月ぐらいの段階ですよ。その段階で、大田さんはもうすでに。

吉元 いや、そのあとです。

佐道 ナイ・イニシアティブがあつて、それで、決断をされる。

吉元 決断は彼は選挙の時からやっています。一期目はできな

った。二期目はやるぞということですよ。ですから、彼はもうそのつもりだったけど、一期目と同じように、また押しつぶされるんじゃないかということもあつただろうし、だから、展望のない基地反対だけで署名を拒否するのかということでは話になりませんから、これは一期四年間の僕らの行政の勉強です。だから、二期目は正々堂々と二十一世紀はこうですよ。基地返還についてはこうしますよというのを作つた上で、大田が「ノー」と言う。これは手順としてやる。大田が「ノー」というのを国にいつ言うかというの、最終決断は大田です。結果としては、八月にすでに出てきたけど、その直後に少女暴行事件が出て、それで、上京して、アメリカ大使館に行く。河野洋平外務大臣に会つて、地位協定の見直しを求めた時に、「走り過ぎとる」と一言言われて、彼はショックを受けて、外務大臣室を出る時に、秘書に「もう拒否以外にないな」と発言をして固めるんです。でも、彼は政治家としてそれで済むかもしれない。行政はその政治家の一言で全部パーにするわけにいかんから、やっぱり手順を前から作つておつた。グラントデザインをこさえて、そして、基地返還アクションプログラム、これを世に出す時が重なつてある種効果的になった。

伊藤 結果として、非常に効果的だったわけですね。

■村山内閣との折衝

吉元 で、タイミングとしては、社会党党首村山さんだったから、水面下の喧嘩もできた。それは大変だったです。社会党だからって、総理なんだから、官房長官も社会党だけど、会わなかったんだから。

伊藤 野中さん？

吉元 野坂さんに。とうとう会えなかった。「代理人」が会ったけど。土井さんも「なんで逃げるか」と怒っちゃったけど。官邸で会えなかったから、宿舎に行つてくれというので、熱を出

しているというので、結局会ってくれなかった。

佐道 会ったら、まともにその話をしなければならぬ。

吉元 いや、官房長官と話を付けて、その上で公邸で村山さんと会うというスケジュールだったんです。ところが、そうはならなかった。「それで、じゃ、どうするのか」と俺が開き直ったものだから、伊藤茂さん。彼は副委員長だったかな。政審は前島さんという静岡出身の衆議院議員。それから、当時、環境庁長官になっていた岩垂さんの三名を前に話をした。彼らが「ここまで来たか」と。どうして官邸はという話になって、官邸の話はアンテナの問題だと。俺は次来た時には総理に会うよと。それまでという話をする。そこからが始まりです。だから、あの三名がその後自民党のあるグループとつながって、沖縄問題をそのままやると大変なことになるぞということていくわけです。だから、三党連立と言っても、社会党との話、社会党を通じて自民党の皆さんとの話、当時、加藤さんが幹事長です。いまの塩爺が総務会長かな。決定的な役割を果たしたのは塩爺ですね。

佐道 塩川さんはどういう。

吉元 塩川さんはこの問題についてはストリートにあだこうだと言わなかったけど、社会党のこのメンバーの言うことをじっくり聞いた上で、自民党をまとめて、そして、官邸が主導で関係省庁、つまり、外務と防衛を関わらせないでね、官邸がストリートに沖縄県と話し合うというパイプのゴースト出したんです。ですから、その後は、私は官邸で野坂さんじゃなくて、官邸から指名された官房副長官の古川さんがすべて前に出てくるんです。社会党政権の時は、そのほうが実務をわかっている人ですから、当時の官邸におつた社会党の関係者は実務をわからんから、結局は、官邸に入っていない伊藤さんとか、前島さんとか、大臣である岩垂さんを通じて、政党同士の話はさせる。関係省庁との関係は、すべて古川さんとの話し合いに入っていく。私は何回か村山さんと

会ったけど、結果的には沖縄知事が署名拒否したら、撤回はないと。最終的には総理が裁判に訴えるしかないという決断をしているのです。その間に、宝珠山さんが村山さんに頭が悪いという発言をしたとかなんとかというのが出てくる。

佐道 繰り返しますが、大田さんの二期目の時から、最終的にどういうタイミングかは別として、大田さん自身は代理署名は「ノー」と言うだろうということはだいたいわかっていた。そういうことで、行政としては、「ノー」と言ったあとの問題も考えなければならぬので、沖縄の将来ビジョンである国際都市形成構想と表裏一体のアクションプログラムは準備しておかなければならないということ、九五年段階になって、表にも出すし、具体的な策定を命じていたということになるわけですね。

吉元 そうですね。この二つとも、まだシンクタンクのレベルです。グランドデザインは県民に披露したが、アクションプログラムについては、まだシンクタンクのレベル。県庁のなかでデータを出しながら、彼らと詰めているけれども、まだ県庁のなかでオースライズする段階ではなかった。これは結果的には、非公式に、二つとも、村山・大田会談に十一月四日かなんかに出すんです。

伊藤 それで、記事が。

吉元 あの時、記事になっていきますけれども、そこまで出したかどうかというのはあつたかどうかはわかりません。

佐道 それはなかったんじゃないかと思えます。

吉元 あれは回収しました。基地返還アクションプログラムのペーパーは回収しました。村山さんが個人でもらいたいというから、じゃ、あなただけということにして、あとは全部回収しました。あの時はまだ県庁のなかでオースライズされてないし、同時に、関係市町村との問題もあった。ですから、先へ飛ばすだけ、結果として、基地返還アクションプログラムは正式に沖縄米軍基地問題協議会に出されたのは橋本さんになってからです。九六年

の一月の末だったと思います。次、出しますということにしたんです。

佐道 ここはまだ素案というか、その段階で出されたわけですね。

吉元 そうです。

佐道 でも、これは大田さんとは詰めているわけですか。

吉元 もちろんです。具体的にメモをみて詰めたという話じゃない、出しますよと。

佐道 出しますよということは言われたわけですね。

吉元 そうです。だから、大田さんがペーパーを見たのは、あの日、あの場じゃないかな。いや、前に渡してはあったけど、大田さんがそれを見とったかどうか。

佐道 アクションプログラムと、それから、国際都市形成構想につながるブランドデザインの中身の問題については、どのぐらいの理解をされていましたか。

吉元 大田さんですか。アクションプログラムについては、返還時期が二〇〇一年一〇年一五年、最終的にわかったと言ったのは、その年の十二月。

佐道 九五年十二月。

吉元 あるいは九六年一月の初めあたりからでしょうね。それには少し細かい話になるんだが、なぜ二〇〇一年が第一段階で、二〇〇一年が第二段階かという話です。二〇一五年が第三段階か。二〇一五年というのは計画をつくる県庁の職員もそうなんだけども、だいたい十年計画をつくる時に、人口動態も含めて、二十年間を予測する、展望するという。それは行政の話です。もう一つ、僕はAPERCを非常に頭に置きました。APERCの九五年の十一月の大阪会議がどういう形で例の「投資の自由化」と「貿易の自由化」とを具体的にスケジュール化されるか。そして、その後、アクションプログラムがどうつくられるかというのは非常に気になっていました。そういう意味では、クリントンが日本に来る。クリ

ントン・村山会談があるということがはっきりしたし、そこで「共同声明」の話も出ていた。素案も見せられたし、とんでもないと僕は怒った。十万人という問題とか、三点か四点、絶対だめだといって、非公式の話ですが、それは認めるわけにいかんということ、むしろ開き直って、それは大変なことになるぞと。それは政党ですから、わかつとったようだけど、村山さんもそれはとらえていたでしょうね。だから、一つ焦っておつたのは、九月四日の少女暴行事件、九月下旬の議会における大田が代理署名をしないということ。そして、次、十月二十一日、県民大会。その次にどうするかという話です。だから、どうしても官邸との間で沖繩米軍基地問題をまな板に乗せていくしつかりした協議の場をつくりたいということで、これを官邸と話し合うための経緯がまだ野中さんとの間でつくれなかった。しかし、野中さんが党に任せたから、さつき言ったメンバーと社会党を通じた自民党の。

佐道 野坂さんですね。

吉元 野坂さん。社会党を通じた自民党の加藤幹事長以下のメンバーとの接点をつくった。そして、呼吸合わせをしてきて、社会党の政審会長の前島さんが酒を飲みながら、中華料理店で、「吉元さん、これしかないよ。あなたが言っているとおりの、協議会をつくらう」という話です。「そこまで決断できるか」「やる」と。これは村山が閣議決定すればいいんだという話になって、それでいこうという話になった。そういう意味では、僕が気になったのは、どういう構成にするかということ。官房長官は座長に、これは当然だと。次は外務大臣も当然、防衛庁長官も当然だ。問題は開発庁の位置づけです。開発庁が事務局になるのか。もともと開発庁設置の段階から基地問題はノータッチで来たところが、いまになって、基地問題に関わりますという話じゃないだろうと言ったんです。だから、事務局も担がせない。メンバーも出さない。ところが、私の考えでした。内閣府で事務局が担ぐということに

なって、結果的には責任者は古川官房副長官になったわけです。幹事会は古川さんが座長です。僕もメンバーです。それで、当時の沖繩開発庁長官が上原康助さんでむくれたわけです。沖繩県が認めないと。

佐道 上原さんとその段階で前もって説明とか、そういうことはされてますか。

吉元 いや、これは社会党の問題です。もちろんさきほどから言ったように、この種の問題は本来的には沖繩県選出の上原さん、あるいは場合によっては開発庁長官だから、彼と相談してやるべきだけど、たまたま彼が開発庁長官だから、ここに基地問題を持ち込まんというルールがあるから、結果的によかつたわけよね。これは社会党の問題だと。で、伊藤さんや前島さんや岩垂さんも、上原さんとは沖繩問題で喧嘩しとる間柄ですから、上原さんがまったく取り合ってくれないと言つてね。沖繩問題の発言をすると、上原から怒られるということ。だから、そういう場にも、社会党は呼んでない。

佐道 上原さんはその問題について、何か具体的なことをおっしゃっていたんですか。

吉元 私にはないです。知事にはあつたようです。

伊藤 何か具体的な案があつたんですか。

吉元 いや、そうじゃなくて、相談がないと言っているのか、何か知らんけど、あつたらしいです。

佐道 顔を潰された。どうしてくれるという。

伊藤 積極的なものはないわけですね。

吉元 それはいいですね。

佐道 たとえば官房長官に会えない。しかし、先生は次には、「総理にも俺は会おうよ」とおっしゃった。これは社会党政権であるわけですけども、従来は制度的にいうと、県の副知事が簡単に総理に会うということは普通はないような気がしますが。

吉元 それはいいですね。これは人間関係です。私は自治労です。で、自治労の運動は長いし、復帰前は、沖繩官公労という琉球政府の労働組合をやつたけど、琉球政府の労働組合であっても、国家公務員労働組合との付き合いは多くはないんです。復帰後も、沖繩県庁だということでは自治労に加盟しています。村山さんは大分の出身で、大分自治労の県職労の関係ですから、公務員ではなかつたけども、書記さんをしながら、市議員、県議員、それで、国政ですから。自治労組織にずっと関わっている。総理になつた時、自治労で主要単産の書記長が集まり、一杯飲むからと呼ばれた。公邸でした。村山さんが「御苦労さん」と言つて、その前から個人的には知つとるから、そういう意味では、「沖繩問題を持ち込むよ」と言つたら、彼は「来なさい。そろそろ沖繩問題をやらんといかん」という話で、まさか年が明けてこんな問題が起こるなんて。そういう意味では、直接官邸を通して申し込んでないです。自治労本部を通して、当時の書記長をしていた大分出身の佐藤春夫さんを通して、彼がパイプ役でした。何か問題が起こると、自治労を通して、村山さんの秘書にストレートにいくようにパイプをつくつてあつたから。

伊藤 村山さんの秘書官に自治労の人もいたんですか。

吉元 おりましたよ。秘書に。ですから、そういう意味では、社労委関係は連合をつくつたあとも、村山さんパイプ役になつたようです。そういうことがあつて、自治労が事実上村山さんとの間はないだ。

伊藤 これは官房長官を通さなくても大丈夫なんですか。

吉元 はい。私は二、三回会つた時に通してないです。公邸に裏から入つて、公邸に直行して、そこで村山さんともちろん胸襟開いて徹底的に話しました。二つ課題がありまして、一つは、軍転特措法案をどうしてもやりたいよ。社会党の軍転特措法案はやめなさいと。なぜ自衛隊まで入つとるか。沖繩の軍事基地に自衛隊

まで入れてやっている。大田県政が言っているのは、自衛隊基地を除いた米軍基地の問題。だから、上原さんと意見が合わなかったのは、それに一つ理由があるんです。彼が社会党のなかで、プロジェクトチームのリーダーとしてつくったのが、国会で何回か潰されている「軍転特措法案」でこれは自衛隊基地も入っとうるんです。沖縄県は最初から自衛隊基地を入れてませんから、そこで沖縄県が軍転特措法の問題で政党に要請をすると、上原さんが怒ったのはそこなんです。それで、沖縄特別対策委員会というのが社会党にあります、山口鶴男さんが書記長以来、大田県政ができたからといって彼が辞めないで、書記長をやりながら、社会党の沖縄特別対策委員会の委員長もやっていたんです。何か知らんけど、そういう形だったんです。だから、軍転特措法案も社会党に出した時は、私は呼ばれて、山口さんが社会党のメンバーを揃えて、僕は県の立場で説明する。上原さんも座っていたけど、「俺は大田さんから聞いたことがない。これは県の案か、個人の案かがわからん」と言い出したからね。「上原さん、そこまで言う必要はないだろう」と一言言ったら黙っちゃった。

佐道 九五年の段階で、基地問題協議会ができるわけですね。ストリートに基地の問題を話し合うための場が欲しいということ、先生の側から提案したということになるわけですか。

吉元 そうです。二度ほどいろんな議論をしながら、最終的に前島さんがやろうと。閣議決定で協議会をつくらうと。県と官邸、閣僚との協議会をつくらうと。彼らは本当に悩んだそうです。こんなことはないから。

伊藤 前例がないんですね。

吉元 前例がない。結果的に、閣議決定すればいいんだらうというところで、沖縄のこの時点の問題は大変な問題という話になって、この延長線上に米軍を引きずり出したという狙いが、僕もあつたけど、彼らもありました。だから、沖縄米軍基地問題協議会を

つくるというのは、常に日米政府で沖縄の基地問題を話し合う場をつくるということが目的だったから、そういう意味では、日米協議が連動しとるから意味があつた。それに彼らが踏み込んでくれた。それに自民党が踏み込んでくれたというのがすごかつた。

伊藤 彼らというのは誰ですか。

吉元 いま言った前島さんとか、社会党の伊藤茂さんとか、環境庁長官をとつた岩垂さんとかが中心になつた。社会党議員です。予算委員長をやっていた山口鶴男さんなんかがいこうという話をしたのはこれだからね。

佐道 いまのを確認しておきたいんですけども、少女暴行事件が起こつて、いろいろ混乱のなかで、アメリカも当惑をしますよね。それで、ペリー国防長官が来日をされて、日米間で基地問題を協議する場をつくらうかという議論が起きてきたわけですね。それを睨んでおられた。

吉元 いや、それはなかつたです。それは外務省がそれに乗つてこなかつたんだから。

伊藤 實際上、できるのはどこがイニシアティブをとつたんですか。

吉元 だから、さっき言った官邸です。最終的には社会党が決断して、自民党の了解をとつて、そして、事務方である古川さんを説得してと思います。たぶんそのパイプだと思います。あとは閣議持ち込みですから。

佐道 新聞とかによりますと、アメリカのほうがそういうものをつくつてもいいよというようなことを確か言っていると思います。

吉元 それは中身がほとんどそこまで高まつた時期でしょうね。第一、九月四日の少女暴行事件、九月十日前後に知事は上京して、河野さんに会っています。その時に、地位協定問題で走り過ぎていと批判されました。その時は、沖縄県民は基地の整理・縮小

という具体的なことを言っていないんです。少女暴行事件直後ですから、問題は地位協定が基本です。これがテーマだったんです。それをトータルで私たちは協議の場を求めた。ですから、それは明らかに外務省が乗る課題じゃないです。政治的な決断ですよ。その政治的な決断を社会党が割り切り、そして、自民党の了解をとり、そして、官邸をしてと。そのあとで外務省が付いてくるという話でしょう。ですから、恐らくそれがなかったら、S A C O までにはいかんかったと思う。従来どおり、沖縄の要望を受けて平定という話に終わったかもしれないんです。

伊藤 日米安保協議委員会。

吉元 協議委員会とかなんとかという話ですね。四者協議ですね。その段階で、日本から要望を出し、アメリカから回答がないという形で来たかもしれません。

佐道 その時の自民党というのは加藤さんとか。

吉元 加藤さんが中心ですね。そして、まだ表には出ていなかったけど、梶山さんでしょう。

佐道 その段階からですか。

吉元 それらしい話は彼らとやっていますね。村山政権をつくった時から、梶山さんは社会党とは心情的に村山を支えていたからね。だから、梶山さんや塩川さんがオーケーしないと、社会党の連中も、加藤幹事長に持ち込まなかったかもしれない。幹事長は少なくとも団長ですから、だから、彼のところに最初に持ち込んでも意味ないでしょうね。つまり、僕以上に苦労したのは、そういう意味では、社会党の三人組でしょうね。だけど、加藤さんに会ってくれと言われて、それは筋としては会わんといかんという話になって、私も真つ昼間ですが、料亭に呼ばれて、いや、そこしかないよと加藤さんは言ったけど、お茶しか出なかったけど、前島さんが私を連れてそこに行って、彼はすぐ帰って、私は加藤さんと一時間半ぐらい、沖縄問題について彼が質問し、僕が答え

る。そして、沖縄の将来を考えながら、「今度は本気でやってくれないと困りますよ」「わかっています」ということでした。僕はペーパーを渡したんだけど、これがなんのペーパーかはちょっと覚えてないです。ペーパーに基づいて、沖縄のこれからの話をしたはずなんです。

伊藤 そのために準備したペーパーですか。

吉元 沖縄のこれからをどうするかという形で、展開をする一種のチャート的なものを出したような記憶があります。

佐道 これはグランドデザインとか、アクションプログラムを盛り込んだもので

吉元 多分そうでしょう。

佐道 こういうことを沖縄は考えているんだという。

吉元 それらしい書き方で課題を彼に説明した。その時に、加藤さんが「いや、前もってみています」という言い方をしたから、僕はびっくりしたんだけどね。国会議員に渡すと、すぐ回るというからね(笑)。社会党からでも先に回ったんでしょう。

伊藤 じゃ、加藤さんが動くようになるというのは、外務省。

吉元 だから、結局は、加藤さんにやってくれと言ったのは、文字どおり、官邸はもちろんそうだけど、外務省ももちろんオーケーで、全部話は終わったから、セレモニーとして、村山内閣との関係ですから、自民党の幹事長に、責任者という場をつくってくれたんじゃないですかね。

伊藤 形ですか。

吉元 そうですね。加藤さんの口から「こうします」という話はなかったからね。

伊藤 聞くだけですか。

吉元 ええ。「米軍基地問題協議会についてはいいことです」という話をしとったですね。特に、米軍用地の署名拒否についての見解についても、「県は覚悟しています。どうぞ」という言い方

を私がしたからね。

佐道 九五年の基地問題協議会をつくらうという段階ですけれども、ちょうど十二月ぐらいに自民党・社会党・さきがけの与党の調査団がいきますね。このなかのメンバーは、加藤さん、鳩山さん、菅さん、前島さんとかも行かれますね。そういう方々への、利用しようといったら変ですけども。

吉元 来て欲しいと言ったのは確か私だと思います。少なくとも、村山連立政権の決意を示して欲しいということだったと思います。だから、来た時に、ちゃんと知事を会わせて、そこでおざなりの話はしていません。知事も言いたい点を言わせてますから。

佐道 それは同席されているんですか。

吉元 もちろんそうです。県庁でやりました。これはかなり大きな意味があったと思います。これは連立政権だけに、自民党政権と違って、やっぱり県民に形をみせんといかんというのがあります。三名が来るというのは異例ですから、そういう意味では、来たことによつて、県民が「なるほど。動き出したな」という判断と、その決意を政党次元で見せたという点では大きいでしょうね。あれはそんなに難しい話じゃなかったと思うよ。軽く僕も呼び掛けたような気がします。

■ 苦東問題

佐道 いま、苦東の問題もありますけども、たとえば鳩山さんとかが沖縄の問題に非常に関心を持ってやっておられますが、鳩山さん、菅さんと先生とはそれまではどうだったんですか。

吉元 つながりとは菅さんが先なんです。連立政権をつくった段階では、私は三党等しく、変な言い方ですが、目配りといえますかね、あいさつというんですか。それはいつも戸を開けていました。そういう意味では、菅さんは沖縄の自治の問題、特別県制にすごく関心があつて、これは自分のライフワークにしたいとあの時か

ら言っていました。それで、自治労ともつながり、いま、連合ともつながっているんですね。だから、沖縄の特別県制、例の自治政府構想なんかは随時自治労を通して彼ともつながりがあった。それから、鳩山さんとは基地問題です。安保問題です。彼と私の違いは、軍事条約としての軍事同盟としての安保を彼は認める。僕はそこまで認めないが、平和条約は必要だと。「あなたが言うように軍事同盟が必要だというんだったら、沖縄にある米軍基地はどうするんですか」と言った時に、彼は「そうだよな」と言つて、論議のなかで、「駐留なき安保」を出すわけです。だから、鳩山の周辺に言わすと、吉元の入れ知恵だと言っているけど、僕は入れ知恵したつもりはない。議論のなかで出たかもしれんね。

伊藤 追いつめたから、それしか言いようがなかったということじゃないですか。

吉元 「じゃ、具体的にどうするの」と言ったら、「すぐはなくなるん。沖縄は減らさんといかんな」ということで、苦東の話は僕が出す。岩国の話を出したんです。岩国の話を出した時に、「うーん、海兵隊全部は無理だよ」という話になる。それはそうだなと。全部持っていくたら、それはキャバシテイから無理である。それで、どうするかという話になったり、北海道でという話になったり、結果的には、では苦東に有事の「駐留なき安保」というんだったら、ストックヤードをつくったらどうかと。最初は移す。しばらくして帰つてもらつて、いざという時に使わせるという話になって、それがNIRAに持ち込むきっかけです。北海道の彼の選挙区のメンバーから、二、三名知っているんだけど連絡があつて、鳩山が帰つていきなり後援会の有力者を集めてその話をしたと。後援会の親分衆は、「あんだ、この間の選挙でやつと通つたのに、なんでまたそんなことを言い出したの。よけい難しくなるよ」という話だった。「いや、それでも」と。あの頃から彼は選挙が弱かつたんかな。

伊藤 弱いですよ。

吉元 そういう話が出て、僕も本人から言われたけど、そこまでやったかと思つてね。それならば、絵を描かそうという話になつて、それがNIRAの話。NIRAが委託した「報告書」原案の段階で、新聞にちよつと載つたために、野中に潰されたという話なんです。

伊藤 苦東の話ですか。

吉元 苦東の話です。でも、北海道開発庁は解散する前に私が別件で北海道に行った時に、港湾局長が自ら苦東のなかを案内してもらつて、「港湾はこれを使えますよ」と。「幾らあるか」と言つたら、「十三メートル」だめだ。十五メートルないと「やれま」す。「奥行きが短い」「いつでも伸ばせます。幅も広げます」と。「ストックヤードはどうか」と。小高い丘に登つて、どこに住宅をつくる？ 学校はという話。それから、二つ注文をつけたのは「水をどうするか」「あそこにダムがあります。それはもつと強化できます。心配いりません」「エネルギーはどうするか」「ここに

とは間違いないですね。これからの民主党のなかでどう展開するかですね。

伊藤 菅、鳩山の関係というのは難しいから、どういふことなるのかはわからないけど。

佐道 菅さんや鳩山さんとの関係では、与党調査団で来て、それから深まつたということですか。

吉元 そういふことですね。それ以前は面識がないですね。

佐道 菅さんとはその前から会つたわけですね。

吉元 その前に一、二度会つとると思つただけ。

佐道 あまり印象はない？

吉元 印象はないですね。

伊藤 さつきのお話だと、向こうからのアプローチがあつたような気がするといふお話だから、それはあり得るでしょうね。

■基地返還アクションプログラム

佐道 重要な問題になっていきますので、避けることになるんですけども、九五年段階のアクションプログラムと国際都市形成構想について整理しておきたいんです。まず、アクションプログラムですが、さきほど三つの時期に分けた。なんでその時期かということについて伺つたんですが、どの基地をどの時期に当てはめるかというのは、実現可能性の問題とか、いろいろありますので、非常に重要な問題だと思います。これは先生がそろそろ具体化に入るといふふうに言われた都市経済研究所では、逆にいうと、手に余る問題で、これは県庁と相談をしたけれども、県庁が主導権を持つていたというのが彼らの話です。それはまさに先生が恐らく大きな指示をされていたと思いますが、まず、何を基準に。

吉元 普天間返還を前提とした中南部都市の都市構造まで変えること。道路一本をつくるために、それに関わる展開。つまり、都市計画再編の作業との関係で、彼らは展望できるよね。普天間が

空いたら連動して、横の線をどう入れるか。どこが邪魔になるかという話になるね。道路が向こうで迂回してますから、真つ直ぐ延ばすとすれば、その次にあるキャンプ瑞慶覧をどうするか。嘉手納基地を触らんとすれば、どこから線を入れるか。どの基地がかかるか。そこを先に描かせるのが目的だったね。それと、彼らにさせている仕事は、ハブ港湾として那覇港と中城港湾を一体的に整備しようということで、線をつなぐか。道をどう入れるかという話との関連があった。機能分担をしながらも、ハブ港湾を中城港を含めてどうセットするかというのが指摘された。あとは那覇空港の沖合展開を含めて、国道五八号は年がら年中渋滞で、パイパスとしての湾岸道路の延伸問題など。牧港兵站基地はどこまで触っていいかということ。ですから、中心的な基地は全部触らんといかん。だから、彼らに、お前さんたちが描く都市の再構築の絵と、われわれが持ち込む課題とどこで合うかという話の一つ。彼らは彼らなりにイメージは描いたと思います。しかし、もつとも大事なのは、関係市町村が絵を持つとるかということ。地主とどの程度熟度がある将来像を市町村が詰めておるかということ。これはやっぱり普天間が早かったです。同時に、これは大田知事も「普天間を早く返せ」、それから、「県道一〇四号線越えの実弾砲撃演習を早くなくせ」、「読谷補助飛行場のパラシュート降下訓練」。この三つはこだわっていましたからね。

佐道 将来構想と言いなながら、かなり個別具体的な問題ですね。

吉元 それは目の前の問題です。それは大田さんの気持ち。だから、一〇四号線などは、アメリカに相当食いがつとる。ですから、超長期的な論議というのを大田さんのほうではちょっと出てこなかった。でも、いま言ったような形で、さっきの絵につながるんだけど、港湾を先にあげさせようとした。那覇軍港ね。それは復帰段階の約束ごとですから、代替港湾がつかれないから、返還されないのであって、年間、十数隻しか入っていません。深さ

も浅く、機能が悪い。いま、整備中の民間港湾部分に接岸しているんです。これは港湾管理者の判断で、つまり、危険物や武器弾薬を積んでないという証明さえあれば入れとるんです。だったら、軍港を返してもらおう。那覇港にハブ港湾をつくらそうと。民間港湾としてつくった上で、必要に応じてパイパスを使わそうという構想を私は出したわけ。これは共産党に食ってかかれて、これも不信任の理由の一つになりました。ですから、そういうことで、戦略的には港湾を早く、普天間も消す。この二つから始めて、将来的には那覇空港の展開、ハブ港湾、ハブ空港をワンセットにしてポートオーソリティーで運営させよう。これは減多にない世界でも稀な機能を持つんです。そうすると、アジアのハブ、単なる物の中継じゃなく、人の中継。国際都市形成構想のなかでいう人と物と両方のことが狙いでした。そういうことになると、やっぱりあけて欲しいのは普天間、これは危険の問題、都市構造問題、それから、キャンプ桑江、これは兵站基地です。

伊藤 これは開発は。

吉元 もう市町村段階では、二度目に入っているところ。一回作業して終わって、それについて意見を集めて、またもう一回、地主の意見を聞きながら、またやりかけているところ。ですから、熟度としては、ここはいちばん進んでいます。

伊藤 これを第一段階に入れると。さっきの沖合の問題は。

吉元 那覇空港は国のものなんです。第二種空港で、空港管理は運輸省所管で、沖縄県からはずつと復帰前から要求しているのに、なかなか進まない。結局は、いま言ったように、国際都市形成構想のなかで乗せて、運輸省に早く調査に入れということ。調査費をつけてやらんと。これは結果としては、五十億の沖縄政策協議会の調査のなかで手をつけていくということになった。国は、あれから始まったことになるんです。

伊藤 それは移転の問題を含めてなんですか。

吉元 これはその構想のなかに入っていない。

伊藤 吉元先生がお出しになった考えのなかには、それがあつたわけでしょう。普天間の問題と。

吉元 最初、普天間を嘉手納にぶち込むという案を。そのほうが早いからしばらく議論しとつたけど、空軍側が拒否した。これは今度は下地幹郎案で出てきたんです。「早く普天間返還をというのなら、既存の施設にぶち込む以外にない」というのは明らかでした。

佐道 いまの嘉手納の空港案というのは、普天間移設が一応決まって、そして、大きく出てくるわけですね。その前の関係で、アクションプログラムの三つの時期の問題なんですけれども、先生がおっしゃるのは、まず、普天間とか、国際都市形成構想を考えたの重要地域をまず重点的に置いて、そして、優先順位をつけていったということになるわけですか。

吉元 市町村の熟度とか。

佐道 一期二期三期になっているのを当てはめてある基地をみてみると、あとでできるSACOで返還合意ができるというのか、それがだいたい基本的な一期のものと若干二期のもの。それから考えると、実現可能性という問題から考えると、なかなかよくあの時点で考えられた案だと思います。三期の問題というのは、目標としては掲げるけれども、かなり難しいもの。嘉手納やホワイトビーチもそうですけれども。

吉元 こう考えています。これはあの時の考え方でも、事務レベルでは一緒に議論したけど、最終的な政策としての決定はしていません。いずれにせよ、日米安保が残るとするならば、しかも、駐留米軍がゼロにならないとするならば、横須賀は残るだろう。横田はなくなるだろう。佐世保は残るだろう。しかし、これは自衛隊が使うだろう。岩国は離さないだろうと。この三つを見て、三沢は朝鮮半島が統一への歩みを確実に始めたとするならば、こ

れはなくなると見ます。そうすると、海軍の第七艦隊の母港は横須賀。それから、海兵隊は岩国でいいと。すべてとは言わんよ。沖繩は何が残るかというのと、やっぱり空軍です。だから、嘉手納は残るだろうと。その上で、海軍のホワイトビーチは残したほうがいいだろうという話です。これは米軍というよりはむしろ自衛隊と考えたほうがいいです。海上自衛隊は沖繩でまともな基地を持つてないです。空港だって、共用でしょう。ですから、嘉手納基地に航空自衛隊を移そうと、既存の施設のなかにぶち込むと。

それは米軍は嫌だと言つただけの話で、将来、米軍だって、いつまでも嘉手納を全部百分百自分で使うという話にはならんでしょう。そうなつてくると、残すのはこの二つしか残らん。あとは弾薬庫でしょう。弾薬庫はいまのとおりあればいい話です。海兵隊がどこまでスリム化されるかという話がもう当面の課題です。そうすると、いま、三つの節目というやつは、やっぱり嘉手納をいちばん最後にしておくというのは、県民が理解しやすいでしょう。嘉手納が仮に返つてくるとしても、嘉手納を別の目的で、つまり、空港以外の目的で使うという県民は誰もいません。だから、あれは残しても、俺たちが必要とする段階、彼らが必要としない段階では、空港として使おうという話ですから。それはホワイトビーチだつて同じでしょう。それ以外の基地はほかのことに転用できるわけですよ。そういう意味では、あの三期に分けたやり方というのは、当面する課題もあつたけど、やっぱり手をつけるとすれば、何を最後まで残すかという議論のほうが早いです。それが先行したんです。県民にも、理解しやすいんじゃないですか。

伊藤 二〇一五年ゼロというところには、これは強いアクセントなんですか。

吉元 強いですよ。私などはかなりこだわっています。それはAPERCが確認した方向との話です。これは甘いとみんなから言われるけど、環太平洋という規模で経済の発展をどう展開するかと

いう場合に、EUという形の一つの仕組みで考えたら、今度AUという形でアフリカが始まった。いままでではなかったんだから、これからですよ。それが安全保障的な話に入っていくならば、内乱の問題なんかも時間がかかるけど、生きるためにエイズの問題から食糧の問題から含めると、やっぱりAUができたというのはすごく大きい。つまり、支援の仕方の窓口が一本化されるということです。これは大きいと思います。

もう一つ、アメリカは当然いまNAFTAがあるし、南アメリカをどうするかは射程距離ですから、アメリカが本気になれば、いつでもできるし、本気にならんことでああいう問題が起こっているんだから、そうすると、あと残るのはアジアでしょう。これはAPEC規模でいつまでもAPECが残るかどうかという話の一つある。僕は残らんとする。思うけど、これが軸になって、いま、アジアではASEANを中心とした中国の関わり方、FTAの議論が少なくとも進んだし、十年と言っているけど、恐らく十年待たずに、五年から十年の間に、中国はASEANの幾つかの国とは先行する。日本は最初から手を挙げておったつもりだけど、表に出さんんだから、結果的には、この間小泉さんが回って唾付けて歩いているでしょう。あんなやり方じゃだめ。でも、結局、意思表示はした。だから、日本もASEANとは中国、場合によっては、韓国を含めてもう避けられない。そうすると、アジアのなかでの安全保障というのは必然的でしょう。それがAPECが頼りになるかどうかは別です。少なくとも今あるのは地域フォーラム(ARF)、ここに北朝鮮が入ったわけだから、これを軸にして、どこまでそれが使えるものになるかという意味での関わりはそれしかない。そこを睨みながら、今度は沖繩問題を考える場合、やっぱりなんやかやと言ったって、中国の発展計画のなかで、台湾問題をどこで中国は処理するか。二〇〇八年の北京オリンピックまでは手出しはしないが、「方針」は決めるはずだよ。彼ら

が言っている二〇一〇年というのは、江沢民が言ったという。そこで手を打つのか。ちよつと待てよ。そうすると、二〇〇八年の北京オリンピックまでには、モスクワオリンピックの反省があるから、中国は台湾問題に手を出さんし、強行しないけど、二〇一〇年は上海の万博ですね。手を出し切らん。その後となると、私たちが四、五年前に展望したように、二〇一五年という長さのなかで、台湾問題は収まっていくでしょう。

その間に、台湾総統選挙が何回あるかということになる。中国が経済計画のなかでどの程度展開していくかということと、中国の五年ごとの党大会があと何回あるか。これは直接関連しないけど、韓国の大統領選挙がどういう形で展開するかということ。だから、結論をいうと、朝鮮半島問題は、予想どおり北の経済破綻は回復できないし、外との関係で生きていく以外にないから、そう粗暴的にはならんけども、じっくり虐められながら、徐々に展開していくでしょう。それは中国からしか勉強できないから、それ以上のことは北朝鮮も持ちえない。あとは台湾ですが、台湾はもう自前で生きていこうと思えば生きていけるけど、しかし、自前で生きていくつもりはないでしょう。上海に投資した分、しかも、上海に投資して成功した企業は、北京政府と一緒に内陸への発展のため、投資している。この流れは止まりません。で、陳水扁さんがいくら頑張っても、あと二年後の総統選挙の前にして、「三通」は片づいたとしても、それで台湾経済が持ち直すとは思わない。台湾を見ていくと、結果的には、安全保障は沖繩に、つまり、米軍に。その米軍の基地をどう残すかという話でしょう。だから、僕は二〇一五年の嘉手納ゼロというのは、台湾問題が一段落したらという意味もあって、それ以前というのはスケジュール的に無理ですよ。日本の政治の流れを読む以上に、読めるところから読んでおけば、あとは沖繩側が県民的な合意を一つ一つきちんと、どういうことになるかということ踏まえて

おけば、行政はそれを一つ一つ展開する要求をしていきながら吟味するという話になります。それぐらいですもんじゃなかな。

伊藤 各自治体がアクションプログラムに提示された年限までに。

吉元 これは、基地の所在する自治体と詰めた結果です。自治体は跡利用計画があるかという問題もあるけど、もう一つは、地主との間で百%合意を取ったのか、です。これはまだないんです。そういう意味では、最初に基地アクションプログラムありという形を地主会は受けたわけです。だけど、僕は地主会のみなさんに、「みなさんだけの問題か。そのための被害は、地主以上に県民は受けている。県民がどう歩くかという時には、あなたたちは自分の財産であつても、これからは県民と一緒にあるんだつたら、じゃ、次どうするかということと一緒に考えようということではないのか」ということで、議論したんだけど、しかし、最終的にオーケーしてません。

佐道 九六年になると、先生のおっしゃるように、国際都市形成構想と基地返還アクションプログラムを巡って、全県レベルでいろんな団体とも調整されて議論されていますね。その過程での話だと思いますが、これも確認になります。たとえば三次の嘉手納はいまのようなお話ですけれども、たとえば一次の普天間とか、そういうところについては、その基地所在自治体の、これが返還されたあとについてのいろいろなプランニングは結構進んでいて、それから、素案じゃなくて、県の正式な決定になった時には、

これはその自治体との基本的な調整は、自治体レベルではすんでいたということになるわけですね。

吉元 まったくそのとおりです。そのことがあったので、知事が替わっても、普天間の移設は変わってない。その流れは絶えてないし、自治体も変えてないし、地主との話も淡々と進んでおる。変わったとすれば、普天間が出ていく時期が遅れているというだけ。そこはしようがない話だけど、だから、いまの市長も革新の市長だったけど、みんな革新政党から支援しないと聞かれても、彼は市民から支持されて市長を続けているんです。それはその仕事を淡々とやつとるからでしょう。ここに任せたい方がいい。いまの市長に任せたい方がいいという形で市民は信じている。特に地主の多いところですから、彼らも信じているでしょう。市長は非常に微妙な立場です。それでも頑張っています。やつぱり目の前からなくなるほうがいいと。但し、県内移設は困るけど、受け入れるところがあるならば、早くなくなつたほうがいい。それなりに筋が通つてますね。

佐道 国際都市形成構想の話もあるんですけども、これはちょっと大きな問題なので、きょうはこの段階で止めさせていただいて、明日も明後日もお時間をいただいておりますので、きょうは、一応ここでいうことで。

伊藤 本当にお疲れ様でした。

佐道 ありがとうございます。

(終了)

吉元政矩 オーラルヒストリー

第5回

日 時：2002年7月31日（水）

開始時刻：14時00分

終了時刻：18時00分

開催場所：那覇市・沖縄21戦略フォーラム事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

■県内の労働組合事情

(伊藤 沖繩の労働運動は本土とも深い関係があったわけですか。)

吉元 沖繩はその付き合いをしてないんです。僕たちがとめたんです。総評、同盟、その他の運動路線を沖繩にストリートに持ち込むな、復帰まではそういう形で運動をつくるなということなんです。これが一つ。それで、労働組合も、復帰までは可能な限り系列化するな、沖繩を自由にさせてくれと、総評と同盟、同席の上で、沖繩側と約束したのが六〇年代の初めです。それで、沖繩は復帰直前までは、労働組合はローカルセンターは一つなんです。総評、同盟はないんです。もちろん民社党も組織をつくらないで、ずっと来ました。ただ、六九年十一月の佐藤・ニクソン会談で復帰の目処がついて、七一年あたりに民社党ができ、同盟が復帰運動から抜けていくという形が出てきました。つまり、復帰後の「移行」を前提とした労働運動の路線上の整理が始まっていくんです。

伊藤 そうすると、沖繩のナショナルセンターが。

吉元 沖繩県労働組合協議会です。

伊藤 これは？

吉元 県労協というやつです。これはずっと続いて。

伊藤 やつぱり県と言っていたんですか。

吉元 あの時も、琉球政府時代だけでも、沖繩県労働組合協議会です。一九六三年につくったんです。本当は六〇年につくった全沖繩労働組合連合会、「全沖労連」というのがあったんです。それは共産党系も全部含めてやったんです。ところが、例のソ連の原爆実験と原水禁運動のなかで「いかなる国問題」が起こったんですね。「社会主義国の原爆実験はきれいな原爆だ。あれに反対すべきじゃない」という日本共産党路線が沖繩に持ち込まれて、原水禁運動の分裂になる。沖繩で初めて、県民的な運動が分裂す

るんです。その時から、一本化しておった労働組合が割れた。そこは共産党系が残った。総評、同盟グループが新しい労働センターとして、沖繩県労働組合協議会を組織した。

伊藤 そっちの共産系の組合とこれというのは、勢力比はどうだったんですか。

吉元 十分の一ぐらいですかね。いまでもそのぐらいです。

伊藤 共産党系はどういうところを取っていたわけですか。

吉元 どちらかというと、中小企業でもアメリカ(外資)関係の企業ですね。自動車販売、コカ・コーラとか、ペプシコーラとか、外資が基本に入っているところなんです。そのなかで唯一残っているのは、コカ・コーラ労働組合です。いまは共産党じゃない。

伊藤 今、共産党系の組合の中核になっているのはどこなんですか。

吉元 国家公務員関係にありますね。政府関係というと、各省庁のなかでの司法、気象、医療関係の労働組合。

伊藤 あれは中央も確か……。

吉元 幾つかのところから単一組織をつくって、その出先機関が沖繩にありますから、それが集まって、労働センター的な共産党系の運動をつくっています。大きいのは、医療生協があります。

伊藤 同盟系と総評系と対立した時代は、県労協は割れてなかったんですか。

吉元 もともと復帰直前に、沖繩県労働組合協議会、県労協一本だったから、それから、復帰段階で、どうせ系列化されるからというところで、同盟系が抜けて、地方同盟をつくった。その時に民社党をつくったのです。社会大衆党というローカル政党の一部が抜けて、民社党の組織の核をつくるんです。

伊藤 それで、だんだん社会大衆党が細っていくわけですね。

吉元 そうですね。かつての社会大衆党の素晴らしいリーダーだった安里積千代さんを復帰直前の第一回の国政参加選挙、衆議院

選挙の時に当選させたが、国会での活動の場がなかった。われわれは上原康助が社会党で出たわけです。だから、いきなり代表質問をやりませう。安里積千代さんは戦後沖繩政治史のなかでは大変にすごい人だけど、国会に行っても所属会派がないでしょう。無所属で一人だから、それで、本人が参つちやつて、民社党に入る。すると、地元では民社党に入るために国政に出したわけじゃないと。社会大衆党内で大論争になり、それで、委員長を辞めるんです。そして、民社党に行くんです。安里さんの一の子分、二の子分であつたのが社会大衆党から離れて、民社党の沖繩の組織をつくるんです。ところが、社会大衆党から行った連中は何年も続かんうちに終わつちやうんです。

伊藤 民主党までつながらないんですか。

吉元 労働組合の連中、同盟に行った連中のなかから、市会議員に出るといふ形で、民社党を担ぐやつが始めて、それでもあまり広がってないんです。沖繩というのは県民性があつて、「政党」は嫌なんです。

佐道 嫌というのは（笑）。

吉元 関わり方という。政治の枠組みは、もともと県民的体質から言つて、嫌なんです。

伊藤 いや、吉元先生がそうだとするのはわかつたんですけども（笑）。

佐道 政党というような枠組みを信用しないんですか。

吉元 なんだらうね。ああいふどこでつくつたかわからんような綱領を、いきなり「お前、認めんと党員になれんよ」と言つたら、嫌ですよ。だから、社会大衆党がいまでも県民から忘れられてない存在になつてゐるわけです。沖繩はずつと「政党」はだめです。

佐道 そうですね。社会大衆党から出ますからね。

伊藤 みんな社会大衆党から出ているんじゃないの（笑）。

吉元 そうです。西銘さんなんかは社会大衆党の青年部長をやつ

ていました（笑）。

■野中氏と移設問題

伊藤 きのおのお話で、北海道の例の話を野中さんが潰したという話をされましたですね。

吉元 苦東の話ですね。

伊藤 野中さんも、橋本さんとか、梶山さんとか、あのグループでしょう。

吉元 それをNIRAに持ち込み、NIRAが直接できないから、委託という形で、たぶん日本リサーチというところだつたと思うんだけど、そこに出して、そこでまとめるんです。ほぼまとまつた段階で、いけそうだという時に、ダイジェスト版が私のところに届いたのが、九八年ですから、私はその時は副知事を辞めてました。それを県が担げばよかつたけど、パイプがなくなつちやつていた。二月三日（六日）かな。大田知事が「普天間移設海上基地はノー」と声明を出しましたから。そのあと、国との間は切れましたから、それをどうするかという問題で、喉から手が出るほど、大田さんもそれを国にぶつけたかつたらしいですが、結果的には手がなくて、私とその役割を負うことになった。その時は森さんに替わつたんですね。

佐道 幹事長がですか。

伊藤 いやいや、内閣だらう。

吉元 いや、失礼。小淵さんに替わつて、何月だつたかな。替わつたのは何月ですか？

佐道 小淵さんに替わつたのは九八年ですね。

吉元 九八年の何月でしたか。七、八月？

佐道 七月です。

吉元 替わつた直後です。だから、官房長官が野中さんですね。それで、官房長官に私が。

伊藤 官房長官ですか。ああ、そういう意味なのか。

吉元 官房長官に私が渡すんです。それが二つ目的がありました、一つは、全国知事会を一年に一回は官邸でやるんです。それに大田を出そうと。そして、その際、大田から官房長官、あるいは総理に発言の場を、会議の場ではなくて、その他の時間を取らせて、会わそうと仕掛けてみたんです。その時に、これは名護市民投票の結果だから、大田さんは「海上基地はだめですよ。——しかし、那覇軍港の移設については前向きに対応する」という決断をするわけです。——であれば、あと、普天間移設はなくなるわけだから、「ノー」と言ったわけです。これをどうするかという問題です。それは一年前から作業させていたNIRAの委託調査の結果が出てきて、苦東という線を出してきたから、それを早い時期に非公式に野中さんに渡して、そして、野中さんから総理に説明させておいて、官邸で開かれる全国知事会に大田知事が参加して、そこで全国知事会が終わったら、その足で官房長官の部屋で、官房長官にメッセージとして、「那覇軍港の移設についてはこうします」と言わそうと。これが大田から持ち込まれたシナリオで、俺は「わかった。それぐらいだったら、私は手伝う」と言つて手伝った。それで、官邸で会うわけにいかないから、村山さん、土井さんを通じて、野中さんに会いたいと。それで、赤坂プリンスホテルなんかには、官房長官が取つてある部屋があつて、そこに来てくれということになつて、野中さんが部屋のなかで一人だけで待つておつて話し合いました。那覇軍港の話をした。それから、苦東の話をした。で、三枚のペーパーを渡して、あなたがこれを使うかはあなたの問題だということに渡す。これを見て、彼はびっくりして、「エッ、北京から遠くなるな」という発言をする。普天間の位置が、海兵隊の拠点だね。「いやいや、野中さん、いま、そんなのは問題外ですよ。遠くなるもなかったって、アメリカに返すわけじゃないんだから、日本の国内だから、そんなのは

どうつてことないですよ」と言つても、彼はそういう感覚だった。ですから、実際問題としては、そういう発言をしたけど、本音としては、まだ私の説明だけで十分理解できなかつたんでしょう。それで、そのペーパーはこういう経過があるよと言つたものだから、帰つたあとで、彼がそれを求めておるんだね。そして、NIRAが下請けのレポートのゲラを持ってあげたんでしようね。それをみた野中さんが怒つて、「潰せ」と言つて潰されたというのが。

伊藤 なんで「潰せ」なんですか。

吉元 あれは表に出さないということでしょう。ちょうど野中さんは橋本さんの仕事を引き継いで、二月三日（*記録によれば六日）に大田さんが「海上基地はだめです」と断つたから、これになくなつたやつを、では大田を潰して、新しい知事をつくつて、そして、継続していこう、復活させていこうというその最中なんです。だから、稲嶺さんが知事候補として、オーケーするかしないかという瀬戸際なんです。だから、野中さんは二日とか三日遅かつたなという発言を僕にするんです。これはなんだろうと思つたら、結果として、あとでわかつたのは、稲嶺さんが事実上出馬をオーケーしたということの関係で言つたかもしれない。その三日か四日後に僕は行つていっているんです。

佐道 稲嶺さんが一応事実上オーケーしているので、従来からの名護移設策の芽が出ています。ここで苦東なんかを出したら。

吉元 そういうことになつたんです。そういう意味では、この内容はいくつかのルートで鳩山さんにも流れていますから、鳩山さんなんかは。

伊藤 鳩山さんは地元ですか。

吉元 そう。だから、僕は直接鳩山さんから聞いたわけじゃないが、鳩山さんは野中さんにその問題で会つていっているんです。そのあと、聞いた話です。

伊藤 野中さんとはその時だけですか。

吉元 私が。

伊藤 前？

吉元 前は何回かあります。副知事時代はあります。

佐道 しかし、野中さんはその前はこういう絡みでお会いになっていたんでしょうか。

吉元 どちらかというところ、自民党の幹事長代理ですか。ですから、ちよつとごちゃごちゃした話になると、加藤さんはまったく擦れ違いで、わかるところのか、わかってないのかわからんぐらいの擦れ違いで、誰に会ってくれという言い方をするんです。だから、たとえばの話だけど、少し込み入った話になると、「これは鈴木宗男議員に会ってくれ」と言ったりね。

佐道 その当時からですか。

吉元 うん、当時。だが、私は会ってないんです。会っても意味ないと思ってるから。だけど、彼の口から一回出ました。それから、当時、政調会長だったと思うけど、山崎拓さんに会った時も、宗男さんの話はポツと出たんです。それは僕はそのあと会ってないので、野中さんに会ったのも、幹事長代理という地位です。佐道 その前の段階では、野中さんは幹事長代理ぐらいの地位です。

伊藤 ぐらいといったつて、それはものすごく大きい。

佐道 そうですけど、あとの像が大きいからそうですが、役職的にはそんなにあれなんですよね。

吉元 でも、あの時僕が感じたのは、やっぱり橋本、小淵につながる、つまり、小淵派ですよ。だから、幹事長代理という役職であるけど、事実上、彼が全部切り盛りしておったんじゃないかという感じでした。

佐道 加藤幹事長ではなくて、実質的なところは野中さんが抑えていた。

吉元 というふうに感じました。

伊藤 まあ、一般にもある程度そう思われていたんじゃないですか。

佐道 沖縄の問題、特に基地問題に関して、きのうも梶山さんがその前からいろいろやっていたという話がありましたし、きょうも、鈴木宗男さんや野中さんや、やっぱり小淵派が自民党のなかでもメインでやっていたということですか。

吉元 復帰前から、一連の日本政府の権力構造を頭におきながら、私たちは復帰後の流れをみとったわけだし、特に大田県政に移ってから、どの派閥が沖縄問題をいちばん理解があるか、担ぐかという話は気になっていました。それは何かというと、一つは、大田県政前の十二年間、西銘さんだった時、この人はやはり田中派ですから、いわゆるいまの橋本派でしょう。そことの関係ですから、やっぱりそこがキーマンだというのがわかっていました。しかし、ここが本当に外務省を切った張ったという形で動かせるかといったら、必ずしもそうじゃない。それ以外の力はあるけど、外交問題については、あまりパイプがないという感じは、僕は思ってたんです。

佐道 田中、竹下派、小淵派。

吉元 そうですね。ですから、大事なところだけど、そのところは見極めの限界だった。結果としては、一方で、大田県政をつくったあと、官邸につながる直前までは、外務省北米局、審議官、局長などの非公式の話は何回もやりました。ところが、まったくもって回ったような話で、従来から聞いている枠組みでしかものを言わんから、一回、酒を飲みながら、高野さん。

佐道 高野北米局長。

吉元 彼が審議官かなんかの時かな。課長連中も一緒に酒を飲みながら、あんまりわからんもんだから、「なんでお前さんたちは、アメリカ国務省、国防省の東京事務所か」と言っただけの問題になっ

た。そこまですぎすぎした論議をしたことがあります。しかし、その頃はやっぱりもう細川政権になつとるし、羽田政権になつとるし、そういう時代ですから、村山政権になつてなかつたかもしれない。あるいはなつた直後かもしれんけど、そういう形しかやつてなかつた。

だけど、少女暴行事件以降は、私たちがつながらる場所を変えた。もう各省庁とはやらない。官邸と直接やると。だって、長い経験が県庁は持っているわけだから、官邸と直接やらん限り、この問題は動かんということで、たまたま何度も言うようだけど、総理が社会党村山さんにかわつたというところから、文字どおり出発しているんです。少女暴行事件があつたから、悪い言い方をすると、さらにはずみがついたというのかな。食い込んでいけるような力関係が、流れでいうならば、沖縄がイニシアティブをとれたということなんです。その場合に、自民党とのパイプというのがなかなかつくれなくて、結果的には、きのうも話したように、社会党の三人組が中心になってパイプをつくつた。その時に、官房長官になる前の梶山さんが党の長老というか、相当経験を積んだ方々を集めて、日本なんか会議というのを、日本の安全保障問題というんですか、将来を考えるとという党内組織、議員連盟みたいのをつくつていた。このメンバーは、中山（太郎）さんなんかです。それから、塩川さん。だから、私が塩川さんに会つたのはその場が初めてなんです。しかも、自民党本部で、梶山さんが来てしゃべつてくれというから行つて、国際都市形成構想の枠組みと、それから、基地返還アクションプログラムの考え方とか、まだ政府にきちつと出す前だったんです。そして、東アジアの状況、こういう展開を思うよと。私たちは中国、台湾と付き合つている問題なども整理し、基地はやっぱりそろそろ計画的に段階的に減らしてもらわんといかんという話をしました。その時に、議論になつたのは、（中山）太郎さんと。それから、橋本さん時代の

塩川総務会長、その後二回ほど、具体的な話をしたいということと呼ばれて、それは結果としては「政策協議会」設置につながり、そして、梶山さんが「全県フリー・ゾーン」をやつてもいいぞという決断をするための重要なものにつながっているんです。国会決議につながつたし、連立与党三党の合意文書にもつながつた。

伊藤 梶山さんの役割というのは結構大きいんですね。

吉元 大きかったですね。梶山さんは初めてあつた時に、自分と沖縄の関わりを詳しく説明してくれました。兄貴ですか。石材の仕事をやっていると、その関係で沖縄との関係は長いと。ずっと昔からあるという話です。戦後すぐから、沖縄の石との関係がなくなる。沖縄でも親しい人がおるということを聞いて、その親しい人が私も親しいものだから、アレツという形で、そういう関係で、梶山さんも、官房長官になられたあとは、ツー・カーで、むしろ自分のところに問題をいち早く出せと。いつでもフリーパスで会うというふうな官邸とのパイプを、梶山さんが最初につくつたのです。

伊藤 わかりました。非常におもしろい話だな。

佐道 きのもちよつと出てきました塩川さんですね。総務会長という役職として関わつてくるのはわかるんですけども、塩川さんご自身は、それまで沖縄との関わりは何かおありだったんでしょうか。

吉元 あまりわからんですね。ほとんど僕たちはつながっているという話はそれ以前から聞いてないです。

佐道 でも、沖縄の話を、先生などからお聞きになつて、それから沖縄の問題に積極的に関わるようになられたわけですよ。

吉元 そうですね。一体沖縄はどうしたらいいのかという話が、彼から問われた。きのうも言つたけど、「橋本行革では開発庁はないよ。覚悟してくれよ。」と言つたのは官邸サイドです。「ウン？ じゃ……」と言つたら、「お前、自分で考えておけ」とい

う言い方を、中華料理を食べながら、橋本さんから言われて、考えてみるかという話になったんだが、橋本行革の自民党のなかでのパイプというか、責任者は水野さんなんです。

佐道 水野清。

吉元 そうそう。水野さんが、事実上当時は全部担いでおった。沖繩問題がこんな時期だから、沖繩開発庁はなくなるということは早めに手を打たんといかんというのが党サイド、橋本さんサイドにあつたんでしょね。だから、当時の自民党の総務会長はある種法案関係の最高責任者でしょう。だから、塩川さんが早い時期に意見を聞きたいと言つたと僕は思っています。だから、その場には水野さんがおつたし、水野さんと同席の上で、社会党の議員もおつたけど、どこかのホテルの地下で、朝飯のお粥を啜りながら、二時間ぐらい話し合つたことがあるんです。その一つがいま言つた「開発庁はなくなる」と。僕は、「国際都市で描いている将来の沖繩のあり方は」という特別県制の話をした。「ウン？」という話で、その中身を具体的に言うとおもしろいなと反応した。その後、水野さんは行革担当大臣として入るんですけれども、その時に、よせばいいのにあちこちに言い触らして、「沖繩も開発庁廃止はオーケーしている。将来は、特別県制をつくる」と言っている。その間、どうするかの話だ。沖繩が要求しているのは基金を構想し、金をくれと言っている」という話をパパーッとしゃべつたんです。それがまた問題になつてね（笑）。

伊藤 新聞報道になつたんですか。

吉元 新聞で出る前に県議会が出たんです（笑）。始末におえないぐらゐの問題になりましたね。

■特別自治県構想の考え方

佐道 ああいう人の口は戸を立てられないから。

吉元 要請じゃなくて、レクチャーのなかで、どういう構想を沖

繩は持つているかということの関連で、一次振計、二次振計はやつぱり国ベースの計画だよと。公共事業をぶち込んで、確かに効果はあつた。しかし、将来は、同じ公共事業で金をぶち込むなら、公的資金をぶち込むなら、それは基金として沖繩は受け入れると。その代わり、それを処理していくためのきちつとした自治組織をつくりたいと。これは県政の基本でした。当時の特別県制というのは、復帰後十年後につくって私たちが出したやつだけど、一兆円の基金構想というのがあつたんです。これは十年間でどの程度沖繩に公共投資をしたか、金をぶち込んだかというのを調べながら、同時にもう一つは、類似県の過去約三十年間の投資を全部調べた上で、将来、どうあるべきかということで、予算のプラズマを取るよりは基金を取つて、それを沖繩が自前で計画をつくり、それを自前で執行していく。優先順位も。そのためには、いまの県政と市町村の関係ではだめだから、国との関係ではいまの県以上の権限を持つと。そのためには、国からのある財政支出を基金として運用する、ということがワンセットでつくらなくちゃいけない。それはわかりやすく言えば、「第二の琉球政府構想」という。その構想をしゃべつたわけです。おもしろいという表現で、その後、あれこれあちこちにその言葉が使われて、しかし、沖繩では消化不良のまま問題になりました。

佐道 いまの県と市町村との関係という問題で、県の力を従来より強くするという話ですけども、確認の意味も含めてお聞きしたいんですけれども、これは普通一般の日本の全体の地方自治体のなかにおける県と市町村の関係というよりかは、沖繩の場合には、より市町村が力が強いといつてはなんですかけれども、独立性が強いというか、県との関係でいうと、どちらかというところ、力があるということが前提になつているということですか。

吉元 そうですね。沖繩の戦後は、もちろん沖繩県をなくしたわけだから、アメリカがいち早く手をつけたのが群馬政府なんです。

琉球政府をつくる前に群島政府をつくったんです。奄美群島政府、沖縄本島の群島政府、宮古郡島政府、八重山群島政府の四つの群島政府、それぞれが住民の投票で知事を選出して「自治政府」をつくったんです。これは続かなかった。このなかで復帰運動が起ったから、アメリカはこれを早く潰すということになりました。だから、群島政府をつくったけど、潰されて、次、今度は全琉統一の琉球政府をつくることになった。そして、そこには司法・立法・行政の三権を持たせた。立法院、裁判所を持たせて、その上に米国民政府が日常的にはきちっと管理しますよと。もちろんアメリカは援助で金をおろしますよという仕組みをつくったわけです。その時に出てきたのは、市町村には可能な限り仕事を落とさないということで、琉球政府のほうに仕事を全部持たすような仕組みをつくった。保健所などは市町村にはなかったんです。その名残があつて、いまでも沖縄では那覇市に保健所はなく、市町村病院は那覇市立病院以外はないんです。

伊藤 全部県立ですか。

吉元 そうです。福祉事務所もそうだったんです。保健医療福祉は全部琉球政府の仕事だという仕組みをつくったんです。琉球政府は文字どおり一つの政府ですから、出入管理、税関から、検疫、防疫、一切合切やるわけでしょう。そういうことを頭に置くと、本当にいまの国と県と市町村の関係を頭に置くと、国から徹底的に必要とする許認可権は沖縄自治政府におろす。第一、いまの課長以上は、当時の琉球政府の職員でいちばん苦労した連中です。ですから、そういうイメージが県民のなかにまだ残っている間に、自治政府をつくらう。違和感はないんです。自治政府より独立のほうがいいんじゃないかという違いはあつたとしてもね。

だから、全国で言われている分権論議のなかに、道州制の論議があるが、一つわからんのは、一つの九州という道州をつくった場合に、国との仕事の持ち分をどうするか。これこれは州に渡

すという前提がなければいかん、そこは明確になってない。だから、一挙に沖縄方式のほうがいいんじゃないかと僕らは言っているわけです。

そのところは琉球諸島自治制構想には現実的な仕組みとしてつくってみた。法案要綱までつくってあるけど、まだ大衆的には広げる段階に来ていない。九八年、大田県政でそれをやろうとした。だから、二期目はまさにブランドデザインに基づいて、国際都市形成構想を一つの枠組みとして、基地返還アクションプログラムなど、経済振興策をセットする。次、実施の段階に向けての行政のあり方は当然のこととして、九八年、大田県政の最後の年からその仕事は初めて、それから、「三期目」に二〇〇一年の全県フリー・ゾーンの実施時期、これは県民の大論争の結果、二〇〇五年になりました。二〇〇五年の実施の時期までには、行政の仕組みは国との間で全部整理して、琉球諸島自治政府をつくらうという話であつた。九七年二月に、そのことで県庁のなかで議論するよりは、むしろ広く外で論議させようということで、自治庁中央と地方自治総合研究所とそれから、沖縄の自治庁との自治研センター。それに、今度は沖縄の研究者を集めて勉強させて、ちょうど一年後、九八年二月に大田知事に提言という形で出した。その時、僕はもう県庁にはいなくなつたけど。このずれが結果的に。全県フリー・ゾーンの問題も、まとめるまでは僕はおつたけど、十月中旬以降僕はいない。それをどう国政レベルに、沖縄政策協議会におち込んでいくかというのは、あとで参考として僕がアドバイスした程度で、実際にタッチしてないんです。それが九八年二月の知事声明、「海上基地はノー」以来、国とのパイプが切れちゃって、五十億の執行に、各県庁が群がった。沖縄のプロジェクトもコントロールタワーがいなくなったということであれば、少しずつ逆転していく流れにつながった。

■全県フリー・ゾーン構想と大田三期目

佐道 そこは非常に重要な問題なので、あとでゆつくりお伺いしたいんですが、一点だけ、いまの問題で確認しておきたいのは、前回にお話を伺った時に、九九年の時ですね。大田県政は二期八年だよと。三期目はないよというのが最初の先生の見通しも含めて。

吉元 本人の言い分です。

佐道 九七年二月の段階で、そういう構想をつくろうということになさって、九八年二月にそれができるわけですね。それは三期目を見据えてということですから。

吉元 大田県政三期目という意味じゃなくて。

佐道 ああ、この流れのなかでということですか。

吉元 別にその時までに、代えるという動きはなかった。だから、大田県政三期目というぐらい、あなたが言っている言葉はまさにそういう。

伊藤 結果としてそうなった。

吉元 流れとして、大田さんは自分は二期だよと。そう理解されているわけです。大田県政下ではこういう提言で、いまやっている課題をこう展開するという話で言うならば、まさに出てくる課題は、たとえば全県フリー・ゾーンなんてそうです。大田県政二期目では処理できない話です。それから、いまの「特別県制」なんかもそうです。そういう意味では、絶えず僕たちは「大田県政三期目」という表現をしとった。

佐道 そういうことで三期目ということですか。わかりました。

伊藤 大田県政と言われても、誰を担ぐかは別として、流れをかなり長期に想定しておられたという？

吉元 一期目の選挙でぎりぎり三万票近くの差で西銘さんに代わって、二期目の選挙では圧倒的に県の経済界を含めて一致した。

その力、経済界からの力も結集して、五十三の市町村も結集したうえで、具体的に展開したのが国際都市形成構想とか、基地返還アクションプログラムとか、そして、大論争した全県フリー・ゾーンです。この枠組みは議論の流れも変わってないんです。このなかで一つ問題になったのは、基地返還アクションプログラムのなかでは、軍用地地主会が、俺たちはオーケーしないよと最後までオーケーしなかった。しかし、市町村はそれをオーケーした。議会も基本的に理解した。経済十団体もオーケーした。それから、全県フリー・ゾーンについては、漁協と農協がノーと。これは経済団体のなかで徹底した論議が始まった。最終的には二〇〇五年とした。最初、農業と水産業については特別措置で、完全にフリーではない。ある意味でのカバーはしますということが前提になって、全県フリー・ゾーンを経済十団体が全部オーケーしたんです。で、準備の問題がある。なんやかやということ、二〇〇五年になった。それでも合意した。すべてオーケーした。しかも、結果として、全県フリー・ゾーンになるなら、規制緩和委員会とというのは経済振興策をつくる。これは沖縄政策協議会のなかで議論して、グランドデザインに基づく国際都市形成構想も、経済振興策については、ではこういうことを沖縄から提案してくれ、こういうものを出してくれという要望がある。そこで、沖縄県は知事の諮問機関として、検討委員会をつくって、そこでしばらく時間を貸してくれということで、次の政策協議会のなかで議論されて、幹事会で議論された路線を持ち帰ってきて、田中直毅さんを中心にして。

佐道 田中委員会をつくるわけですね。

吉元 田中委員会です。だから、本間（正明大阪大学教授）さんは僕らの推薦じゃないんです。私もあの時本間さんはわかりませんから。本間さんはいまは国の経済審議なんかをやっているでしょう。最近、財政諮問委員会のメンバーになってます。彼なん

かはむしろ官邸サイドから推薦があつて、田中さんの推薦かどうかは知らないけどね。

佐道 田中委員会のなかですか。

吉元 本土側から。それで、沖繩側からのメンバーも、むしろ私たちは台湾と香港から入れようということ、二人入れたんです。かなりユニークな意見だった。そういうのをつくって、そこで議論して、規制緩和をぎりぎりまで一国二制度を追求した結果として、田中さんが委員会のなかで、ここまで来ると、全県をフリー・ゾーンにするの踏み込んだほうがいいんじゃないのという話になって、全県フリー・ゾーンに踏み込むと、関係省庁の許認可権をどこかで一括しなきゃいかんなど。僕は副知事として毎回陪席していた。「吉元さん、特別県制を同時に走らせたかどうか」というアドバイスが出たりしたんです。ですから、確かに全県フリー・ゾーンに高まったのは、この委員会の議論と、経済界を含めて、それを沖繩側が議論の結果、「いいぞ」というからまとめました。しかし、出発は大胆な規制緩和という表現で、沖繩政策協議会から始まったのです。

佐道 重要な問題なんですけど、少し時間をおつて整理しながら、細かく伺つていきたいんです。国際都市形成構想に入る前に、一点だけ、さっきの自民党とのパイプの問題で補足でお聞きしておきたいんですけども、西銘さんの関係で田田中派、竹下派、小渕派ということはわかるんですけども、もう一点、たとえば自民党というと、山中貞則さんという方がいらつしやいまして、沖繩の問題については山中さんという話が出てくるという。前回お聞きした時も、節目になる時は、山中さんとはいろいろ話は、吉元 あいさつには行きました。

佐道 あいさつには行かれたということだったんですけども、しかし、重要なポイントでは出てこられてないんですよ。

吉元 そうです。山中さんの沖繩との関わりというのは、沖繩県

が関わったというよりは、沖繩市町村が仕組みに乗らん、制度に乗らんという問題をなんとかしたいと持ち込む。そういうのを山中さんが取り上げて、大蔵等関係省庁と話し合つて、特別に措置させるといふやり方で、これが幾つかやるうちに、今度は橋をつくりたい、港湾を拡大したいというのが県を飛び越して、山中詣でというのが始まった。これは沖繩の将来をどう描くかという話とまったく違う領域なんです。

伊藤 逆にいえば、対立する可能性があるじゃないですか。

吉元 場合によってはですね。だから、全県フリー・ゾーンの時是对立したわけですよ。私と山中さんとの関係というのは復帰直前です。復帰直前で、山中さんが総務庁長官で、沖繩返還の受け入れの準備を全部しておつた。私は琉球政府の労働組合の書記長です。賃金はうまく引き継げない、沖繩が高いと言われて、そんなばかな話はあるかと再検討させたんだけど、それでも、特定職というのがありまして、たとえば獣医師とか、薬剤師とか、沖繩は人材が少ないから、初任給が係長の初任給なんです。大卒の初任給じゃないんです。こういうのを元に戻さんといかんというのが出たりして、本土並みにするんだから、再計算すると。こういうのをどう処理するか。これは生活費になつとるから、では剥がすのか。いや、剥がすことはない。現給保障をしようというわけです。その代わり何年間の昇給で消していくかという話の一つある。もう一つは、沖繩は特別昇給というのをさせなかつたんです。不公平になるから、管理職が一方的に査定するから、全然させなかつたんです。この分は本土では特別昇給の仕組みがあつて、三年か四年に一回回ってくるわけです。それが沖繩はさせてなかつたから、この分を全部入れこもうという話をしたり、それと合わせていくんだけど、結果として、それでも吸収できない分は特別な処理をする以外にない。結局、大臣である山中さんが大蔵とも話をしなきゃいかん。大蔵の主計局長が相沢さん。復帰直前に琉

球政府の労働組合はストライキをかまえて、私と山中さんとの間で話し合い、その時に、全通出身の社会党衆議院議員の大出俊さんが立会人で、自治労本部の三役も来ていた。私も同席して説明して、幾らかと。何億という金です。わかったということで、私の目の前からすぐ主計局長に電話を入れて、相沢さんだったらしいです。話を聞いて、イエスという返事じゃない。「やれよ」と言われておった。「わかったか」「わかった」と言ったんでしょう。パッと切って解決。

二日後にストライキの準備を入っている現場にどう連絡するか。電話連絡がなかなか通じない時代なんです。大変な時代。それで、山中さんのヒントで「ホット・ライン」の電話回線を使え」と。これは復帰前から琉球政府との間にあった。その回線を使いまでいつて使って、沖繩に電話を入れた。団体交渉している最中の知事室に電話を入れさせて、委員長を呼び出して、「解決」「スト中止」と。自分で中止ということで和解させたことがあります。そういう意味では、山中さんにはお世話になったことあるけど、そういう解決の仕方には、非常に沖繩のためになったというのかな。沖繩に貢献したという人なんです。だから、市町村の幾つかのところから、名誉市民、町民となつていっているんです。だから、西銘さんの時代は西銘さんがあいさつする程度で、県庁の職員なんかほとんど行かなくてすんだらしいけど、西銘さんが替わったあと、大田さんになると、監視役に回ったのかな。そういう立場に山中さんはなつたんでしょね。前から面識があつて名前を知られているのは僕だけで、僕が調整監視時代に、上京する度に、沖繩県東京事務所のすぐ傍だから、暇な時といつたら怒られるけれども、行くべき時には、——知事は行かんけど——俺が行つて、「来ましたよ」「何かあるか」「何もない」と。「東京まで来て、先生に会わんで帰るとまた何を言われるかわからんから」という程度の話で、何回か。

伊藤 その時期も、山中さんは市町村とはつながっていたわけですか。

吉元 いまでもそうです。山中詣でというのがあつた。

佐道 吉元先生が進めようとしていような構想とか、そういうことについては、具体的な説明とかはしないんですか。

吉元 まったく次元の違う話です。たとえば戦後処理とか、きのうもちょっと話した厚生年金の問題とか、ああいう時はまた必要なんです。ですから、これは自民党のなかで制度を新しく、戦後処理とか、復帰処理という問題を片づけてもらうためには、この時期になんで沖繩問題だけか。もう何十年もなるよという話になると、最後に沖繩問題を俺が話してらんだということを一言言ってもらう役割は、山中さんにいまもつてあるんでしょうね。そういう意味では、山中さんの役割というのは相当大きいのがありますし、特に大蔵あたりは沖繩に関する税制上、補助金、補助率などの問題で、少し下がる時は必ず山中さんの了解を取るといふ不文律があるみたいです。そういう意味では、いまでもね。

佐道 山中さんというのはとにかく自民党税調のボスで、先生がいまおっしゃるように、大蔵にもパイプがあるわけですね。そうすると、山中さんを何かの形で使おうということは思われなかつたんですか。

吉元 そういう意味では、官邸と直接つながつてからは、必要なくなつたですね。それよりはむしろ連立与党三党と等しく付き合うというんですか。話を通しておくというんですか。これは必要以上を気を使いました。ただ、一つ、この開発庁の問題の時は、「廃止はだめだぞ」と僕に言いよつたからね。「先生、あなたで頑張つて残せるか」と聞いたら、笑つていました。「いまは便利だから、なくなつていいんじゃないの。別にきちつとしたのができれば」と。その時にすでに私の考え方が官邸を通じて向こうにいつていた節があつて、それは開発庁の連中はものすごく怒つてい

たけど、キャリアの連中のなかで、開発庁廃止を沖縄県が非公式といえども最初に認めたということは大変問題になってね。でも、山中さんのところにその向きで行って報告した時は、「本当になくていいか」と言うから、「ああ、あれば便利だけでも、なくてもなんとかなるんじゃないですか」と話して、それにはあえて残す必要を彼は強調しなかった。そのあと、言われたのは、「大田は全県フリー・ゾーンと言ってるけれども、政治経済もわからんやつが言つとるから、あんなのを暴走させるなよ」と僕に言うから、「あれは私の案ですよ」、「なに」と大声が返ってきた。「この時間では、全県フリー・ゾーンの話はできないから、今度大田を連れてくるから、いっぱい酒を飲みながら、泡盛を持って来いな」と山中さんは言っていた。僕はその後行っていないです。それが最後でした。極端な言い方をすれば、全県フリー・ゾーンは山中さんとの詰めが必要だという認識はあった。それはなぜかというところ、沖縄で山中詣でをするのは市町村首長だけじゃなくて、企業の連中です。税制上優遇されているところ、たとえばオリオンビールとか、沖縄電力とか、いまは三つぐらいしか残ってないけど、こういうところは軽減措置の延長をいつも意識しとるから、山中詣でをしている。もちろん政治資金にもつながっているだろうけど、私たちはそういう意味では、十年に一遍振計をつくる、特別措置法が国会で審議される、「頼みます」というあいさつは当然だけど、普通の問題では、県はあまり関わっていないです。今度の問題、つまり、全県フリー・ゾーンの問題では、きちっと話しましょうということだけは言いたいきさつがあります。

伊藤 それからあと、行かなかつたというのは。

吉元 私は役割が終わったから。議会で再任を拒否されたからね。佐道 すべてが、そのタイミングがずいぶん大きいという感じがしますが。

吉元 その話のなかで気になっているのは、梶山さんが「全県フリー・ゾーンに突っ込んでいくよ」「いいよ」と言った時に、梶山さんは山中さんとの間ではどういう発言をやったのかなと気にはなっていたんです。沖縄問題を自民党のなかで、ベテラン議員同士だけど、沖縄問題については、一言は山中の話をとというのが普通のルールですからね。

伊藤 あまりそこに突っ込んでいかないほうがいいかな。

■ 国際都市形成構想の合意形成

佐道 いよいよ国際都市形成構想なんですけれども、九五年の段階で、九月に少女暴行事件が起こって、先生が村山さんとかにお会いになる。かなり早い段階に、アクションプログラムの素案と、それから、国際都市形成構想の概略みたいなことを説明になる。それで、九六年（平成八年）には、国際都市形成構想ということ、梶山さんの案にまとめるためにいろいろ努力をされているという話になっていくわけですが、国際都市形成構想をもととはどういうスケジュールでやろうと考えたのか。たとえば国際都市形成構想の策定を下請けでやっていた都市経済研究所の話を聞きますと、最初ゆっくり懇談会の形式で調査を始めていって、九五年ぐらいの段階で、まだ本島の中南部を中心とした拠点形成プランが中心であった。そもそも全県にも広まっていない状況だということですし、これはのちほどドッキングはしていくことになると思いますが、県のほうで独自に作成されていた産業振興アクションプログラム。それとのドッキングはそもそもはどのようなスケジュールで考えておられたのかと、九月以降の事態がものすごく速く展開していくので、逆にわからないところがありますので、もともととはどういうふう考えておられたのか。

吉元 三次振計に一項目目標にさせると言いましたね。きのうもちよつと言ったんですが、「我が国の南の交流拠点として云々」

という部分ですね。あの文を一つのきっかけにして、大田の一期目の政策をどういう形で行政に乗せていくかという話の一つです。それは意識したのは、振計を策定しますと、中間年には「後期の課題と展望」という方針をつくるんです。これは国もそうです。県もそうです。その作業が三年目頃から始まるんです。実施についてチェックしながら、そして、この計画でよかったのかなと。これを中間で見直す必要があるかどうかと。これは一つあります。私が特別に政策調整監として、国際都市の議論を始めた時には、企画の仕事じゃなかったんです。私のもとで三名の補佐クラスチームをつくって、そこで彼らを中心にさせた。

佐道 企画というのは、つまり従来のラインのなかにある企画調整室ではなくて、スタッフたる先生の政策調整監のもとでやったと。

吉元 私のいるところの知事とは直接のパイプですし、私の政策調整監の英語名は知事に対する政策アドバイザーですから、アメリカ大統領方式でいうと、特別補佐官。それを意識して、知事はこのポジションに入ってくれと言われたので、私のもとには課長補佐以下三名がいた。そこでこの仕事が始まった。それは企画がやる中間の睨んだやつを、最初から、私たちのチームは中間段階で「後期の課題」に反映させようと。つまり、三次振計の当初にその項目を入れたんだから、国の了解を取って、国に入れさせたんだから、これはまだ実施されてないんだから、五年間でどこまで突き上げていくかという話です。これが一つ。そのうちに、ポスト四全総の話が国で始まったんです。これは幸いでした。下河辺さんのほうから、「本格的に始まるよ」と。目標年次が二〇一〇年とか、あるいは二〇一五年とかという話で、いつからかという話で、だいたい二〇〇〇頃から始まるという話です。それでは僕たちがいま考えているポスト三次振計に関わってくる。では国土庁がやっているポスト四全総の作業にどこでぶち込んだらいいのか

という二つの課題がありました。三次振計の「後期の課題」を意識した。もう一つは、国の次の全総との関係で、それに位置づけさせていこう。そうすれば、当然、ポスト三次振計には、国レベルで沖縄は枠組みができるわけだから、それに乗ってくるという話です。それはなぜかという話で、「新全総」に沖縄の復帰段階がかち合うんです。だから、五、六行で沖縄編がぶち込まれるんです。この経験があるものだから、ああいう中途半端なやり方ではまずいという下河辺さんの反省もあつたんでしょうね。ですから、早い時期にそれをしたんです。

琉球政府の時代に、長期経済計画というのを琉球政府がつくるんです。下河辺さんはその時に経企庁におつて、これを指導した人なんです。沖縄に何回も来ておつた。復帰直後、私も組合役員だったけど、直接会って、いろんな議論をしながら、実は特別県制というのは、これはあとに回しますけれども、下河辺さんの議論のなかから出てきた話なんです。二次振計策定の段階では、もう西銘さんにかわつていた。西銘さんのほうから、誰かアドバイザーはおるかという話になった。私に担当企画部長から知事からそう言われているから、人を探してくれと。下河辺さんと呼んで知事に会わせて、で、下河辺さんを沖縄の二次振計をつくる時の知事のアドバイザーとしてセットしたんです。ところが、なかなかうまく知事は下河辺さんとの呼吸を合わし切れなくて、十分に使えなかった節がある。で、三次振計の段階が来るわけです。もちろん下河辺さんは離れとつた。県が下河辺さんが必要としていかなかったかもしれない。で、三次振計の具案策定のぎりぎり、知事が決裁するところまで来ておつただけで、選挙で知事が代わつた。大田が当選し、私も政策アドバイザーとして県庁入りした。「政権交替」の事務引き継ぎのため事前に協議した。重要な決裁を全部止めると。公共事業の入札も、緊急性のあるもの以外は原則として全部止めると。とりわけ、三次振計の県

案策定については、私の同期生が企画部長でしたから、勝手に知事の印鑑を押すなど。これはもちろん知事との話し合いであって、当時の副知事、いまは國場組の会長をやっている宮城宏光さんという西銘順治さんの最後の時の副知事と話し合っていて、彼も当然ですということ、引き継ぎ文書をつくらせて、それで、知事に引き継がせる。そういうことがあった。だから、結局、ぎりぎりまで来て、最後に大田知事が就任して、私が政策調整監として入ってみようと、やっぱりこれはまずいなど。幾つか問題があった。でも、県の審議会は終わっている。国との調整も終わっている。どうするか。もうほかは触らんどこう。基地問題だけは触らう。これは譲らんとすることで押し込むんだけど、これは土地収用に伴う「代理署名」問題と重なり、非常に問題になっていくんです。結果として、その段階で下河辺さんに連絡を入れて、どうするか。国の審議会が開かれた時には、県案を審議する。そこで手入れをするような余裕があるかどうかの意見を聞いた。いまの開発庁はそれをやりきらんといいから、下河辺さん抜きで最後の詰めをやる。その後、この振計が走ったあと、さきほど言ったように、国際都市形成構想の仕事を都市経済研究所にぶち込む。あの前後に僕は下河辺さんと細かい話の討議を何回かやるんです。彼もそこまで来たのかという話になって、私たちのやる仕事を見守ってもらおうという形になる。それから、九五年以降、特に村山さんの後半、あるいは橋本さんになってからは、下河辺さんは相談役になった。それが一つの流れです。ですから、きっかけは三次振計の後期に反映させたい。より具体的には、ポスト四全総、国の全総のなかに、作業が始まってからぶち込む。この二つです。

佐道 つまり、三次振計というのは二〇〇二年までですね。二〇〇二年の四月から新しいのが始まるということになるわけですが、二〇〇二年の四月以降の沖繩の将来を決めるような構想には、もちろん国際都市形成構想が反映していくことを睨むわけ

ですね。

吉元 そうそう。だから、そのためには三次振計の後期から入れておかなければいかん。

佐道 つまり、タイムスケジュール的には、だいたい九七年ぐらいを一つの目処で考えている。

吉元 まったくそのとおりです。現に、県も審議会を起こしたし、国も後期の審議会を。それぞれに国際都市の中のものを持ち込ますために、相当入れ込んでいますから、それで、国は例の国土庁のあの仕事のなかで、どこまで反映されるかと、直接国土庁に呼ばれてやっていますから。

佐道 そうすると、これもきのう伺った話ですけども、九五年の初めに新聞なども使って少し公表し始める。基地返還アクションプログラムも、九五年の四月の段階で、具体化を始めるということを始められたわけですね。

吉元 基地返還云々の話は、タイミングはそのとおりだけど、それは大田知事が「代理署名」にサインしないよということとの関連で、やっぱり準備に基地問題もかまっておかなきゃいかんというので、時系列的には少し早かったけど、四月五月段階で、都市経済に非公式な調査をさせたということ。

佐道 それで、指示をされたということですね。九五年九月の事件があって、そして、これを緊急にお示しになって、沖縄県はこれで行きたいんだということ、現実に進んでいくわけですけども、それは当初の構想より、プランの熟成度としては、一年ぐらい早かったということですね。

吉元 まったくそのとおりですね。逆にいえば、結果として、早かったと思うけど、なかったとしたらどうなったかということをお考えます。

佐道 そうですね。そこが問題でありますね。

吉元 いや、通常、その種のがなければ、出せなかったか。

いや、少女暴行事件がなくても、出していったよ。そのために準備したんだから。ただ、基地を除けるとか、沖縄の将来を描いてないじゃないかという話では、自治体としての県が責任を問われています。ですから、その仕事が一年早まったというのは、確かに少女暴行事件との関連、県民の盛り上がり、そして、国が「わかった。それでは基地問題も検討しよう。それで、沖縄の二十一世紀のグランドデザインも検討しよう」というつながりのなかで、スピードを速めたと言えます。これは間違いないです。

佐道 つまり、プランの熟成度からしたら、一年早いのはわかっています。はい。ただ、このタイミングでもやらなければいけないという判断でお示しになった。それが国を動かしたわけですから。

吉元 それがストレートに来年からという実施を求められた課題じゃなくて、次のステップ、だから、タイムラグはあるわけです。早いうちに出して、だから、県議会でも誤解されたけど、なぜ沖縄政策協議会をつくった時、五十億の金を最初に取ったか。沖縄県があと一年抱え込むことができていたら、沖縄県でメニューは全部つくったと思います。つまり、大学院大学が必要だとは書いてある。しかし中身はというのをまだやっていないんです。というよりも、リストは全部できているんです。中身がそれぞれまだできてないというだけです。この部分をどこでやるかとなると、これは国がやるというんだというんだしたら、沖縄政策協議会の場で詰めてみようじゃないかという話です。さきほど言った経済振興策のうち、規制緩和の部分で、沖縄に先に検討を深めてくれと言われたのと同じです。そういう次元で考えると、あの五十億の金はその段階で使えるから、前もって、沖縄政策協議会やその他を通じて、関係省庁の担当局長や課長連中がペーパーをもらつとるから、それで自分らは頭づくりして、どう関わられるかという話に飛びついてきたということなんでしょね。私が辞めたあと、

九八年に入って、レポートは出てくるんだけど、何冊かみただけ、考えとると違うなというのはいくらもありました。

佐道 もともと産業振興策たる産業振興アクションプログラムというのは商工労働部。

吉元 そうですね。産業政策課がつくって向こうに出した。

佐道 それを国際都市形成構想のなかにはめ込むという作業も、九六年ぐらいにやろうというふうに考えておられたんですか。

吉元 いや、産業創造アクションプログラムはもともと早く思いました。私の前任者のいまの沖縄電力の社長の仲井間さんが副知事の時に、大田から特命が出て、産業政策がいちばん弱いから、ここは少し金目を心配せんでいいから、徹底的につくりあげると言われるんです。副知事は「これは私にさせてくれ」と言って、私が調整監時代ですから、私の領域だったから、「わかった。それではその話はあなたに渡しましょう」ということです。だから、国際都市形成構想の枠組みのなかで、議論するターゲットの対象ではありますけれども、この部分を先行させる。それは失業率の問題があったから、企業が潰れていくという問題もあったしね。そういう意味でいうならば、副知事が一、二年担ぐんです。そこでまだ完成しないうちに、彼は副知事を辞めていったから、結果として私が引き受けた形になります。

佐道 引き継がれたわけですか。

吉元 そうです。それを単独で政策化しなかったというだけです。枠組みのなかに全部ぶち込んだということは言えます。

佐道 そうすると、一つの問題として、もともとは実は始まりの根っこが違うわけですね。国際都市形成構想は先生のほうで、産業の問題は仲井間副知事が中心にやっておられて、商工労働産業政策課のほうで中心にやっておられたわけですね。いずれドッキングするにしても、沖縄の将来構想というかなり長期の問題を見越してつくっておられたプランと、失業率をどうにかしなきゃい

けないという具体的な産業振興の問題というのは、必ずしもすべてが一致するというのは。

吉元 出発はね。だけど、国際都市形成構想の規制緩和委員会が出したなかで、それと連動させましたから、そして、同時に、そのなかで全県フリー・ゾーンの話が出てきて、では彼らがつくったやつをどうするかという問題になりました。それはすったもんだしました。杵のなかに全部ぶち込むかどうかということですが、私は理屈はそうあるべきだと思つとるけど、全県フリー・ゾーンは先の話ですから、たとえば二〇〇一年の最初の案は、二〇〇五年になつたけど、しかし、三次振計は二〇〇二年までの話ですから、その枠内でやらんといかん仕事です。それを先行させたわけです。それは出たものは取り入れていくというやつは当然の課題だつたと思います。現に、そういう意味でいうならば、二〇〇〇年を待たずに、産業創造アクションプログラムのなかから出てきたやつは、幾つかいまの県政のなかで芽を出したやつはあるようです。それはそれほど大きなずれじゃないと思います。

佐道 九五年の九月の事件が起こる前の四月の段階で、企画調整室に国際都市形成推進班を設置。

吉元 (平成) 七年度からですね。

佐道 この段階ではまだ規模は大きくないけれども、国際都市形成構想に関する予算化を具体的にされて、推進をしていくということを県庁内部でも明らかにされていく。十一月に事件が起こったあとですけれども、「国際都市形成及び基地返還促進対策プロジェクトチーム」をおつくりになる。年度が変わつて、四月にそれが室になつていくということですが、この段階で、国際都市形成構想を、都市経済とかが下請けでやっていたのが県の企画調整室のなかの具体的な重要な仕事として組み込まれていくということになりますね。

吉元 そうですね。

佐道 そうすると、恐らくまだまだ当時は一部分の人がこれに関与されていたという段階かなというふうに思うんですけども、県庁の内部での反応というのはどうだったんでしょうか。

吉元 それは何がどうなつとるかというのとはわからん段階でしょうね。企画調整室のなかにチームをつくつたというのは、組織的な認知ですよ。元締めとしてはね。そこでやつとる範囲はまだ軌道に乗ってない段階で、どちらかというと、委託調査との関係で、時間を稼いでいるという程度です。そことの関係でやり合っている。十一月段階で、プロジェクトチームをつくつたというのは、現実的な課題が出て、それは片手間でできないよということ、本来ならば、企画調整室で担がせていた課題だけでも、性格として無理だという企画から出てきて、僕も企画におつたのであるほど。ではこれは独立させようという話になつた。二つの問題があつて、いま、ちょっと読み上げたものなから感じとるんですが、一つは基地問題をどうかますかです。これは企画調整室がやってきた従来の仕事の範囲と違う。もともと基地問題は別のところでやっていた。

佐道 知事公室に基地対策室があつて、そこでやつておられたわけですね。それをここで。

吉元 日常的な通常業務としての基地問題はそこでさせて、そこでやっていた跡利用問題を取り上げて、ここに全部。

佐道 企画調整室のこのチームにドッキングさせたわけですね。それで、また戻っちゃうわけですね。何を考えているのかと思いませんが。

吉元 足跡を消すと(笑)。クリントンもそう言ったけど。

佐道 国際都市形成構想と沖縄将来の構想というのは、基地の問題と一緒に考えなければいけないということで、こういう措置をおとりになるわけですね。この処置をされたのは、組織変更として、意味がかなり大きかつたと思えますが。

吉元 沖縄県のなかで初めてのケースなんです。七〇年以降に沖縄県になって、沖縄の将来を描く絵のなかに、基地の返還を組み込んで、跡利用の仕事と一緒にしてつくりあげていく。この段階というのは、沖縄県全体の絵を書くというよりは、中南部圏の、だから、普天間の、那覇軍港のという部分が先なんです。そういう意味で言うならば、これは完全に一つのプロジェクトに組み込まないと無理だと。別々にさせるわけにいかんというのが、初めてのケースとして、基地問題と計画を一緒にした。それだけに、企画調整室では、振興開発計画の十年間のフォローをするところですから、あるいは中間見直しをするんですが、これでは無理だという話になったということです。実は、これには私自身の経験があります、私は琉球政府で最初の「基地専門官」という肩書きのポストを担ったことがある。復帰直前に一九七〇年から七一年、二年かけて、琉球政府が、これは文字どおり最後の仕事だけど、私の後任が中心になって、米軍基地の総点検をやるんです。膨大な資料をつくるんです。これはワンセットわが家に置いてあるけれども、これをやっていなければ、恐らく復帰後、防衛施設庁が全部担当でしょう。データをくれなかったと思います。あの時、琉球政府の最後に、三年間で、琉球政府自体がプロジェクトチームをつくって、そこでその仕事を徹底して金をかけて、すべて地下構造物、配線まで、これはすぐ問題になりましたけれども、あの頃、米軍は気持ちが大きかったんだらうね(笑)。

伊藤 これはかなり軍の機密ですよ。

吉元 だから、今日的に言えば、機密でしょうね。あの時は、全部が機密だから、機密と思わんじゃないか(笑)。だから、あのデータはずいぶん参考になりました。ずいぶん細かいのがわかったからね。あの時、琉球政府が復帰直前でなぜあれをやったかという、将来、基地問題をさちつと残しておかないといかんというのが一つあったけど、もう一つは、軍転特措法を復帰直後直ち

につくらせようとしたんです。これは少しずれるけど、五年目です。平良幸市知事の際に、軍転特措法案要綱をつくるんです。これは国に出すんです。見向きもされなかったです。だから、軍転特措法というのは、沖縄県というなら、復帰直前から手掛けていますよ。あの時に、この仕事をさせたグループの中心だった若い係長クラスを、実はプロジェクトのリーダーに集めたんです。彼らがかつての仕事を持ち出してきて、そして、全部データを並べて、全部チェックする。その時に初めて、この基地をどの時期に動かしていくかという話の優先順位が浮かぶ。僕は感覚的にしかわからんけど、彼らは可能性の話についてやる。市町村が把握してないことまでわかっていました。これはいまの県庁のなかでも、あのグループのなかでも、残っていると思います。何名かはいまでも残っています。

佐道 国際都市形成のプロジェクトチームに、基地返還促進のチームも加わったと。県庁内に対しても、かなり大きなメッセージになったと思います。大田さんが知事になられて一期目の時には、西銘さんの十二年の県政のあと、保守県政のあとに大田さんが入ってこられたわけで、庁内としても、すべてが一致していたわけではないわけですね。恐らく県庁内でも、基地の問題にはなかなか触れたくないというような人たちがあって、恐らくいらつしやったかもしれないし、そういうことでいうと、たとえば自分は企画なら企画でも、将来構想の経済振興とか、そういうことは一生懸命だけでも、政治的な問題には触れたくないという人たちがあっていらつしやったかもしれないと思います。

吉元 沖縄の場合は、基地問題に関して言うならば、思想的に安保を認めるか認めないかという、組合運動をやったかやらなかったか、それから、復帰運動に関わったか関わらなかったか。地域の生活との関係で基地に接触があるとかないとか。それぞれあるけど、基本的には基地問題については、触らんといいかんという認

識が県庁のなかに、これはすべての市町村にあります。問題が多過ぎるというか、面的にも多過ぎるけど、問題も多過ぎると。だから、地位協定については、五十二ぐらいの市町村がもう六月までに全部見直しの決議していますから、というぐらいの体質があるんです。そういう意味では、向き不向きは思想的な問題じゃないんです。使えるか使えないかの問題、能力の問題、これは差があります。もっぱら一つの方向をやってきたやつを無理して連れてきてても、この問題では使い物にならない。という意味では、人事課の連中が膨大な人事記録のなかからリストをつくってきてみると、最終的に名簿をみると、それほど大きな感覚のずれはなかった。但し、誰をリーダーに据えるかという点で言うならば、これはやっぱり総務部長や人事課あたりが出てくるものとは違うということがあるんです。

佐道 このプロジェクトチームは本当に特別なプロジェクトチームですよ。

吉元 そうですね。

佐道 これは人選まで先生がすべておやりになったんですか。

吉元 いや、人選はしていません。私は人事についてはノータッチが原則で、もともと職員だっただけに、私ほどの部長は使えるなんてやると、えらいことになりますから、組織がもたんですからね。

伊藤 一つのプロジェクトをやる時に。

吉元 リーダーをつくる時は違います。集めてきた名簿をみて、誰がトップですか。この人？ これはちよつと無理だよと。これは意見を出します。誰をトップリーダーにするかというのは、私たちが長いこと県庁に関わり仕事もしているし、人を知っている。これは無理だよ。これはやれるけれども、弱いよというふうに、ずいぶん差がありました。だから、この問題については、最初からこれしかないよと。総務部長にこいつをリーダーにしたいよと

いうことを言っており、多分彼を軸に、彼の意見聞きながら集めたんじゃないかなという感じがします。この人はいま退職して、企画開発部長までやったけど、宮城正治という、いまJTAの常勤監査をやっています。彼を中心に据えた。本當言うと、彼は乗用車付きの部長クラスだけど、商工労働部長からこのプロジェクトチームの長に持つてきたんです。そしたら乗用車どころじゃない。秘書もないって他の部長たちが。それでも宮城さんはやってくれたんです。

佐道 いや、宮城さんにお会いしましてインタビューして、先生のことを現代の坂本竜馬のような人だと言って心酔をしておられまして、非常に印象的でした。スケジュールの面ですが、どうしてもしょうがないですけども、国際都市形成構想は、タイムイングのずれがあったわけですよ。翌年の九六年からは、初めから県外の各団体や各勢力に説明と協議とをいろいろお話を進めながら、よりプランとして全県に広げつつ、産業振興策とのドッキングもされてということで、プランとしてまとめていかれる作業を両方お進めになるわけですね。

吉元 そうです。ですから、最初は、中南部都市なんです。基地との関係で、都市構造をどうするか。北部とか、宮古、八重山とか、そのブロックはいま手をつけんでもいいと。手をつけなきゃいかんのは中南部都市。それは一つは普天間の跡地という問題があるけれども、中南部都市構造のつくり変えもある。もう一つあるのは、那覇空港と那覇港を一元管理する。同時に、中城港湾をどう連動させるか。ここが仕事の中心で、これを先にやると。「シンガポールのような都市国家」という表現を私は絶えずいつも言うんだけど、それを先に手をつけようと、中南部都市を。そこを軸として、百三十万県民のうち、百十万住んでいますからね。

伊藤 中南部にですか。

吉元 はい。極端に言うとうてりラ演習場以外は、そこに全部基地

が集中しているでしょう。具志川・嘉手納以南ね。基地の問題を

触ろうとすれば、同時に、これだけの人口が集積し、都市が集積すると、臨海、つまり、海との関係、物流を考えると、やっぱり空との関係、これはここにしかありません。ここをどういう形で絵を描いておくかというのは避けて通れない課題です。それで議論をし、出発し、これを持ち込んで、国にも頭を下げながら始めていって、そして、市町村の相談の段階に来ると、ちょっと待てと。俺たちは入らないかという、宮古、八重山、北部から手が挙がる。いや、そうじゃないよ。それは次のステップだというのが、それは困るといふ。市町村長と一緒に議論するならば、自分たちのプロックも絵を描いてくれということになって、広げていくんです。それは振計全体の論議の時にやろうとした話です。でも、これは一緒にやったほうが全体的な県民の意識が結集される。それで、このことよって、県民に等しく影響する経済振興策などもみえてくるし、同意ができるし、それから、基地問題といったって、中南部の基地所在の市町村の問題だけじゃないだろうと。確かに土地問題は地主との関係、市町村との関係だろうけれども、俺たちも基地によつて苦しんだという話がポーンと出てくるでしょう。ですから、市町村の長の皆さんは当然のこととして、同時に、構想を明らかにせよということになったんでしょね。

佐道 最初に、国際都市形成等市町村連絡協議会ができていくんですけれども、これは中南部の中心のものを。

吉元 これも全部。走った時から全員です。五十三市町村。

伊藤 最初に説明した時は中南部という形なんです。

吉元 非公式に企画担当者を集めてきた時は中南部が中心です。

伊藤 そうすると、北部が俺たちのところはどうなるんだという話をやってくる。

吉元 それは新聞に出ると、必ず言います。ですから、そういう意味では、五十三集めた時はもう。

佐道 もう全県の。

吉元 たとえば国頭からずっと座るんです。私のすぐそばに与那国町長がおる。ぼくの先輩だから、「おい、俺のところの島になんにも書いてないよ」と言いました。困っちゃってね。「島単位じゃなくて、八重山郡全体の話をしとるんだ」「いやいや、それにしても何も書いてないよ」って。やっぱり「独立国」だと思つとるだろうなと（笑）。いろいろありました。

伊藤 国際都市形成といふのは、沖縄全体を含んでいる。

吉元 そういうイメージでわれわれは言っているんです。何度も言うんだけど、シンガポールのような都市国家を。シンガポールといふのは実は島がたくさんあるんです。

伊藤 そうですね。周辺に。

吉元 あそこだけが島だと思っているけれども、そうじゃないです。ハワイだって、われわれはオアフ島の話ばかりしとるけども、ハワイ島にまでわれわれも行つて、深層水の勉強に行った時に、えつ、これもハワイかと思うほど、やっぱりあれです。プエルトリコは、僕は不幸にしてまだ行つてないけど、向こうだつて、街とまったく違うところです。米軍基地まで抱えて、大変なところですよ。

佐道 市町村連絡協議会の発足の準備を進められておられる、まさに最初の段階で、九六年の最初には、国際都市形成庁内連絡協議会といふのをつくつておられるんですけども、これは国際都市形成構想を進めていくにあつて、まず、いろいろ説明にするにあつて、庁内を一つにまとめようということどういふものをおつくりになつたんですか。

吉元 いや、むしろ各局部からの意見の集約をするわけです。構想をつくるためのパイプじゃないです。逆です。あくまでもこれは通常の振計の作業と違いますから、各局部の蓄積と、それから、将来の計画を集めてきて、情報交換して、絵を描くといふのと違

いますから、こういうのを二十一世紀につくりたいと。グラウンドデザインのおかげで、どういうふうな関わりを持つか。従来の関わりはだめよということもあるだろうし、つまり、ここから発信していくというのが役割として、庁内連絡会議。だから、この庁内連絡会議も、本来からいえば、企画調整室が持っている振興開発計画に関わる調整会議を使えばいいんです。使わなかった。ここを使うと、まさに通常の振興開発計画のシステムにつながるから、それにつながると、今度は国、開発庁との関係が出ますから、だから、そこはまったく触らないで、このプロジェクトチームの室との関係で新しくつくりました。

佐道 単純な疑問なんですけれども、つまり、従来の流れからの一次二次三次の振計があつて、その流れのなかで企画調整室の調整をやっておられた。従来の県庁の仕事では、その流れでやっているわけですね。この国際都市形成構想はそれとは全然違う発想でやっておられるわけですね。

吉元 たぶんポスト三次振計にどうつながっていくのか。県庁全体がそれを見ておつたんですね。

佐道 なかなか理解できないという。

吉元 いや、それよりはむしろ復帰までの二十七年、約三十年をどう取り返すか、「本土との格差」に追いつくか。それが沖繩振興開発特別措置法、振計、開発庁、公庫、もう三十年になる。次どうするかというと、もうこれは復帰直後から、国が言つたかどこが言つたか別として、特別措置は「三十年」だよ。特別措置はそれ以上ないよと、ずっと県庁のなかで刷り込まれています。これは相当刷り込まれています。だから、ポスト三次振計というのは、振計とも言わんどうこうという話もあつた。県庁のなかでは、大部分が補助率、その他については財政力が弱いから、まだ、プラスαが必要だと。だけど、いまの振興開発計画のやり方はよくないというのを、呼吸合わせは基本的にできていますから、です

から、これとちよつと離れるけれども、いまの稲嶺知事がポスト三次振計を描いた時に、「新たな」という表現しかしていない。「次の」という言葉さえ使っていない。ここはもし私たちがおつたとしても、同じことになると思います。ですから、文字どおり、三次で一区切りという認識があつた。ましてや、開発庁がなくなつたから、これはある程度刷り込まれたもので、新しい状況のなかで、新しい発想というのは、これとの関係でいうと、仕事は重なつて忙しかつただらうけれども、だいたいこれがつないでいくと。だから、さきほど言つた県庁のなかでは、ポスト四全総との関係で、全総のなかにこの考え方をぶち込んでおけば、三次振計の次の沖繩振計では、それはベースとして国に位置づけておけば大丈夫だという認識があつたわけです。だから、振計づくりとまったく違う話じゃなくて、振計から出発したという原点だけはある程度知つておつたと思います。

伊藤 反応はどうだつたんですか。

吉元 いや、それは千差万別ですね。特に東京サイドの省庁の事業官庁、農林とか、建設とか、運輸とかというのは「そんなのは」という話ですよ。

伊藤 庁内でも。

吉元 いや、それは違います。庁内の場合には、優先順位がガラッと変わってきますから。それは金はないというのは知ってますから、九七年以降は、公共事業の工事費も落ちています。伸びていません。九五、九六、九七年というのは、全部それはひしひしと感じる時期です。国との関係で、一%、予算が前年比で伸びるか伸びないかの話です。そういう時代ですから、特別措置も、そんなものはないぞというふうなことを実感しています。ですから、農林とか、建設省とか、運輸省というのは、公共事業の何々整備五カ年計画とあるでしょう。これに乗せさえすれば、ああ、こんなのはいいよ。予算もとれる。金もくれる。事業もくれるという

発想があつたんです。だから、そういう事業官庁は、東京サイドも、プロジェクトチームが沖縄政策協議会のなかで十チームぐらいできるでしょう。このなかでも、なんか知らん、従来の延長線上の意味で、沖縄に回す金を先に回すために、何かこの金を使おうというような発想でプロジェクトをつくった。だから、あとで読んでみて、あれ、これは先取りの話じゃないかという感じでした。沖縄が目指そうとしている方向をつかんでいないというのが幾つか出ました。

ところが、それ以外のところなどは真剣に考えていた部分があります。たとえば厚生省なんかは、離島医療をどうするのか、県立病院をずっと担ぐのか。あの時、いろんな議論が出ました。それと、ここまで来るならば、福祉関係の福祉事務所を市町村にうんと持たすべきだとか、そういうのは、東京サイドも、全国を見ながら、将来のことを考えながら、いつまでも甘い、沖縄の県の仕事にいつまでもおんぶされている仕組みはよくないよという自覚はあつたんでしょうね。ですから、このなかで、中南部の位置づけのなかで、ヘルシー・リゾート・アイランドとかなんとかという言葉が幾つか出ています。厚生省あたりは、リゾートという言葉だと運輸省だけど、そうじゃなくて、健康、長寿という領域で沖縄とどう関わるかと、厚生省あたりで少し興味を持った経緯があります。

佐道 庁内の連絡協議会をつくる一方で、九六年一月には、軍用地主連合会の三役にまず説明をされる。一月二十二日には、沖縄県の経済団体連合会に説明されるという形で、どんどんそういう説明をされていかれるわけですね。こういうのに先生もお出になったり、直接おやりになったわけですか。

吉元 文字どおり、どんどん私が。

伊藤 矢面に立っているということですか。

吉元 これは職員、部長クラスにさせる仕事じゃないですね。だ

から、さつきから言う通常業務だったら、それでいいんだけど、この種の業務というのは、できれば知事が直接出て、「俺の政策はこうやりたい。どう思うか」という話をすべきです。これはやってもらったほうがいいけど、暇もなかったけど、むしろ詳しくはわからんからということもあるけど、私のほうがよかったかもしれない。特に、そういう団体との関係、それから、経済界との関係というのは、九十九%私だったと思います。

伊藤 では知事さんの役割は。

吉元 たとえば市町村との連絡協議会に、知事が来てあいさつをして終わるといふ感じで、あとは私が進めると。

佐道 では、具体的な話は副知事という形ですね。地主さんたちは最初からやっぱり問題にされるわけですか。

吉元 市町村地主会は賛成と反対に分かれました。軍用地主会という全県組織は最初から警戒しました。これは何かというと、本音は、土地を返してもらったら困ることなんです、本音はね。それは何かというと、那覇市でも、天久ですが、副都心とわかれは呼んでいるけど、あれだけの米軍の土地を返してもらったけど、三段階か四段階かの小間切れ返還になって、その間、時間がかかって、交換分合ができなくて、区画整理がうまくいなくて、今日まだ不十分ですから、あれを見えていますから、本当に返してもらえるか。あんな形ではだめよというのと、もう一つは、返してもらったら、地代がなくなる。どんなにして食ったらいいのという話でしょう。だから、結果的には、軍用地転用基本計画をつくらせた。三年なんです。返還後三年は土地代の補償がある。私たちは五年を出したんです。値切られたんです。軍用地転用計画案をつくる時は、軍用地主会と県と一緒にやっただけです。国会で統一行動をした。傍聴まで一緒にやった。残念だった。三年だったな。次、法改正を目指す時は、五年にするとかね。沖縄ととにかく基地返還をさせなきゃいかんというのは、地主会とも一緒

なんです。しかし、こんな計画でタンタンとやられていくと、本当に自分たちに被害が及ばないか。生活に影響を受けないような形で跡利用がうまくいくのかという点で、明らかにしてくれと。それでなきゃ納得できないと。反対というより、納得できないという理由が基本です。

伊藤 場所によって、温度差がある。

吉元 もちろんそうです。普天間の場合は、最初から地主会は割り切ってますから、県軍用地主会としては反対だけど、普天間の場合は、市と一緒にあって、現実の利用計画が入っています。那覇の軍港の跡も、これも地主会と市と盛んに、向こうも（地主会）独自につくる。市も独自につくる。突き合います。もう二回目を終わってます。あとは事業主体を広げること、誰に事業をさせるのかということ。もちろん代替港湾ができればの話です。そこまで詰まっています。そういうところは返還がはつきりすれば、いつからその作業を始めるとか、跡利用が始まるということがわかれば、それを前提にオーケーする。それはかなり多いんです。個別に決着すれば。

伊藤 そういう意味では、計画と返還のアクションプログラムとは非常にリンクしているわけですね。特に第一期の場合は。

吉元 そのとおりです。第一期は緊急にね。それと、私はむしろ政治的な意図で賛成しかねる、反対をいわざるを得ないというようなニュアンスがあつた時期、地主会のなかには強かつたと思えます。本当に安保は日本全体の問題だ、沖縄は安保破棄までは言っていないよ。だけど、基地は二〇一五年ゼロと言っている。本当にこれでいいのというのが東京サイドから出る。沖縄だけか。それは困るよ。沖縄の米軍基地がなくなると、安保はどうなるかという議論が政治サイドでボンとされてくると、そことつながっている支持団体、ちよつと言いくいけど、軍用地主会というのは自民党の「支持団体」ですからね。そういうところはやっぱり影響

を受けます。ですから、そういう意味では、本当に腹割ってどこまでやれるかという話は、二度ほど相当遅くまで酒を飲みました。言っていることは全部聞きました。あとは同意を求めたのは無理だなあと。走るしかない。一方的に宣言して終わりましたというような関係です。だから、物理的に反対するところまでいかない理由は、そこにあつたんじゃないですか。それが踏まえられたから、五十三の市町村長も基地返還アクションプログラムに賛成したし、特に米軍基地所在の市町村は「わかつた」と先に言つたし、経済団体もいちばん敏感な連中は、なるべく論議して、全会一致でまとまつたし、政治的な色濃い論議をする県議会でさえ、最終的には、県民の気持ちとしてはそうだよということ、呼吸合わせはできました。

伊藤 労働者はどうだったんですか。

吉元 労働組合のなかでいちばん問題になつたのは、全駐労ですね。駐留軍労働者ですね。これが普天間返還、橋本案が出た九六年四月、いち早く俺たちをどうするつもりかという話になつたんです。私は橋本案が出そうだと言つた時から、状況は知らされていきましたので、いや、知らされていたというのは撤回しよう。予測できたから。

伊藤 まあ、匂いはしてきただけですね。

吉元 県庁で担当者のなかに詳細な計画を作らせました。普天間基地で働いている労働者の数、職種、年齢、居住地。

伊藤 おおよそどのぐらいの方ですか。

吉元 四百名ぐらいです。そして、家族構成、それをベースにして、第一次的には、配置転換、希望する基地に、基地のなかなら安心できますから、そこではまらん場合は、公的な場で、つまり、市町村を含めた場で、それは住民であることが前提です。地域環境との関係です。四段階ぐらい決めまして、そして、それを労管事務所を通じて全部データを把握する。いけるということで、非

公式に連合沖繩を通じて、県はここまで準備しますよと。表になつた時には、知事に会いに来たら、知事はそのことについて「実務的に相談する」ということを言いますから、そこでやりましようなどということ、その後、私のところで連合沖繩と全駐労さんと一緒に来た時に、その議論をし、実務的には担当部局、商工労働部と詰めさせるということをやりました。この間もあつた。基地内における民間委託業務、契約更新、必ずしも同じ業者が継続できるとは限らんでしょう。ミルクなど、フードがあるでしょう。それで、突如として契約が切れちゃう。そこで働いた者はパーです。復帰前だったら、新しい業者は働きたい者を引き取るという、それは労使関係でできたわけです。今はそれができない、アメリカ的契約社会では、どうするかというと、県が労管事務所できちつと希望を聞いて、「どこで働きますか、希望は」と現給保証を前提に引き継ぐところを探す。いままでもこれを県がやっているんです。だから、それはきつい仕事です。それはそういう形で。

伊藤 いま、この失業率の高い時に。

吉元 それはやろうということをやっていました。可能な限り、その種の仕事というのは、実はわりとすぐ展開しておつたんですが、基地ごとに労働者の数は出てくるし、それに基づいた働き場所をどこに持つていくかということは、これは当時つくつた返還アクションプログラムは、二〇〇一年から二〇一五年でしょう。基地名を全部いれて、そこにどのぐらい労働者がおるかというのを全部書いてます。これは従業員数の表じゃありませんけど、それをどういう形でどの時点で計画をつくつておくか。米軍とも当然関わることで、こういうやり方でやっていくんだということ。これは国の沖繩政策協議会、あるいは幹事会の場で詳細にやられています。防衛施設庁あたりも、そういう点では、沖繩県のこの仕事の展開については、予め説明してあつただけに、専ら自分たちだけに責任を負わされるということがないということで、ある

種落ち着いた時期がありました。

伊藤 地主といつても、ごく僅かな土地の人と非常に大きな土地を持った？

吉元 そうですね。小間切れが多いですね。

伊藤 小間切れが多いんですか。

吉元 沖繩の土地というのは小さい単位が多いんです。当然のこととして、その土地には家があつて、畑があつたわけです。でっかい畑というのはめつたにないですから、小さな単位ですから、家を立ち退かされた時は、文字どおり畑も取られて、建物をつくれたら、いまはどこかで土地を買つたり借りたりして、建物をつくつても、やっぱりそこに家をつくりたいという気持ちがある。普天間の場合なども、自分の土地に住みたいというお年寄りとはほとんどそうです。だけど、そこは学校用地に計画したんだけど、ど真ん中にあなたの家だけをつくるわけにいかんでしょうという話をして、その場所じゃないけど、少し遠いけど、交換しようという話をいろいろ……。これがいまの那覇市の返還跡地の計画の難しさです。

伊藤 これは土地台帳は完全に残っていたわけですか。

吉元 これが問題だったんです。残ってないんです。戦争で、いまで言う住民基本台帳ですが、これも焼失してなくなつたんです。複写したのが福岡で残っていたというんです。福岡の登記所で残っていた。それで、戦後、これで戸籍を再現してつくるんです。土地については、ほとんど地形が変わつたんですね。地形が変わつたら面積が変わってくるでしょう。百平米持つているという者は、こんなになると、五十も残らんです。与那原という町があります。そこは地形がものすごく変わったんです。自分の土地を申請させたいんです。そしたら、いまの町の倍の申請がある。これはどうしようもないんです。それで、幾つかお年寄りを集めて、本当に間違いないかと。ここに何があつたかと。それで、掘るんで

すよね。井戸の跡が出てきたりね。境界線のところに、確かに石敢當があつたと。石敢當はないけど、石敢當を置いとつたという石が見つかった。それを掘り起こして、これを全部結んでいつて図をつくと、でだいたい調整がすみます。これは琉球政府で片づかなかつたんです。これは琉球政府が文字どおり金を出して、土地調査に入りましたが、いまでも若干残っているんです。「境界不明地」ということで、いまでも事業名になっている。復帰後は国が予算を出すようになりました。いま、問題になっているのは、特殊な例での「境界」争い。これは裁判に持ち込ます以外ない。しかし、それとは関係なく、不在地主、つまり、ブラジルにおるとか、ブラジルまで行って確認しなきゃいかんというのがいくつかあるんです。ブラジルだけじゃなくて、ハワイもそうです。こういうの多くはないが最後に残った。

伊藤 戦争でみんな死んじゃっているというのはないんでしょか。

吉元 それはあります。それは糸満あたりに行きますと多いです。だから、いまでもその屋敷はそのままで。親戚が来て草を刈るという程度で、昔の石垣が残って、家が吹っ飛んで、土台が残っておるといところは草ぼうぼうです。

伊藤 それは所有権はどうなるんですか。

吉元 どうなつたんですかね。わからんけど、そのまま誰かが管理しているんじゃないですか。

伊藤 やつぱり土地を確定するというのは非常に難しい。

吉元 これは命と同じですから、沖縄的にいうとね。

伊藤 沖縄の中南部というのは大地主というのはいなかったんですか。

吉元 ほとんどないですね。もともと利用できる土地は自分の土地にするけど、首里が検地をして、それを財政的に困つた首里王朝は武士をあちこちに行かすんです。土地があるからそこで食え

と。そういうのが行つたところで新しく集落をつくつて、土地を耕していくんです。そういう意味では、地方に行けば行くほど、そういうところが多いんです。利用できるところしかそれをやっていませんから、そうじゃないところはほとんど残つて、最後には、共有地とか、市町村有地とか、字有地、沖縄本島の北部で、国頭では、米軍用地の土地は個人ももちろんおられますけれども、山地と原野は役場か字（アザ）の用地です。だから、土地代が区に入るわけですね。で、区は積み立てて、奨学金に使つたり、すごいですよ。公民館なんて、ちよつとしたすごい建物をつくります。金武、宜野座あたりはそうですね。だから、町財政よりは豊かです。で、変な言い方だけど、自治をやつてますから。

佐道 その分、財政のなかに、基地を持つていっているということが占めていく割合が大きくなるということですね。

吉元 そうですね。基地返還アクションプログラムをつくつた時に、市町村との間で最大の課題だったのは、市町村有地を返還させたなら、収入がなくなつて、市町村財政が落ち込む、この分をどうするか。これを前提に職員を採用し、事業を執行しているわけでしょう。

伊藤 これは失業対策みたいなものですね。

吉元 必要のない山の中まで道をつくつたり。ですから基地所在市町村は、本土で騒いでいるような地方交付税の問題とはちよつと違う意味での問題がいま出てきているんです。それを見越して、九五年あたりから、この議論に入つたときから、私もそうだけど、大田知事はさかんに市町村長には「特別積立にしなさい」、「特別会計に入れなさい」、「一般会計に入れるな」と。「奨学金にしたリ、別に使いなさい」と。金武町は実行したんです。たしか半分移したんです。

伊藤 これは一般会計に入れていたら、なくなつた瞬間に。

佐道 身動きが取れなくなる。

吉元 いま、そのために那覇市が困りまして、そのために結果的には。

伊藤 那覇市もそうなんですか。

吉元 ええ、那覇市も土地を持っていますから、いまは自衛隊基地になつているところなんか、土地を持っていますから、それで、結局、那覇市は前市長の時は契約拒否。収入が小さいんです。それで、財政が困つたというから、いまの市長は自衛隊と契約するといつて、三倍ぐらい増えるつて（笑）。

佐道 ちょっと休憩にしましょう。

〈休憩〉

■SACCOの感想

佐道 県内の地主もそうですし、経済団体連合会もそうですし、説明をお始めになるわけですね。その一方で、一九九五年には基地問題協議会を立てるといふことを実現され、日米間ではSACCOというのが始まるということになるわけですね。これは先生がブッシュをして基地問題協議会をつくるということが、非常に影響を与えたということになると思うんですが、このSACCOが出来たということ自体については、この当時どのように見ておられたんですか。

吉元 やつと日米政府が沖縄に限った——前提条件であるけれども——米軍基地に関わる全てのことを、基地の縮小だけではなくて地位協定を含めてね。日常的な犯罪そのものを含めて、全てのことについて話し合う場ですから、これは外交ルートとはちよつと違う話ですよ。そういう意味では実務的に問題が展開されるという期待。つまり、私たちもその期待を持っていたけれど、県民から見ると大きな期待を持っていたでしょう。やつと

（基地が）動くんかな？ それで、（基地を）残すために、あるいは現状を固定化させるために、こんなのはつくらないという認識でした、沖縄としてはね。「動くぞ」というとらえ方は県も等しくしたしね。それは、その前に私たちが出した「基地返還アクションプログラムの素案」、あるいは「地位協定の見直し」についての十項目の要求などがありますから、かなり大きな期待をもちました。行政としても持ちましたしね。だから、強いて言うると基地返還アクションプログラムのプロジェクトチームを先に走らせた意味も、そこにあつた。

伊藤 外交ルートとの関係は、どうなるんでしょうか。

吉元 そこは、実はSACCOの話が出てきた時には、むしろ「日米間で真面目に話し合ってくれ」と、強いことを我々は言ったんです。つまり、官邸とやっているわけですから。外務省との関係というより、官邸主導でやる仕事だから、まさに古川官房副長官の仕事ですね。責任者は官房長官です。そういうことがあつて、少なくとも「外交ルート」に乗せないほうがいいと。だから、こういう仕組みをつくつた。これを後で日米安保協議委員会の場に出すんですよ、結果として。

最初、そうじゃないんですよ。まあ組織ですから、仕事ですから、当然、安保に関わることですから、日米安保協議委員会の下にこれが位置づけられるのは当然だと思うけど、それを前提につくらせただけじゃないからね。当初は、ものすごく期待して、同時に何らかの形で成果を得るだろうと。途中で中間報告の段階で、ああいう形で普天間の移設も海上基地が出てきたりするでしょう。だから、完全に動くという感じを受けました。

佐道 SACCOというのは、できるのが決まったら結構早めに動き始めて、基地問題協議会も、これもまた早めに動き始めましたよね。ところが、動き始めた途端にといいますか、村山内閣が橋本内閣に一月十日の段階でチェンジをすると。その一方で代理署

名拒否の問題があつて進んでいくわけですね。代理署名の問題は、前回かなり詳しくお聞きしましたが、橋本内閣に替わつた段階で、古川さんがかなり重要な役割を果たしていらつしやつたということがあるわけですか。

吉元 そうです。これはもう間違いないですね。つまり、各省庁官僚キャリアを彼が押さえている、彼がリード出来る。政治に対しては、官房長官を中心に与党三党の中で誰がイニシアチブをとるか。ただ、その時点までは自民党が前に出てきてないんですね、村山さん時代は。それは当然、総理が村山さんだから。ですからそこは私たちは、若干の不安を感じていました。

結果として懸けたのは、十一月の大阪APEC総会ですよ。クリントン米大統領が来るということですよ、一九九五年ね。そこで日米共同声明の話が出た。そこで、「こういうものが、共同声明の内容になりそうだ」というのをつかんだ時に、「ちよつと困るよ」と。具体的に三点ほど、「このこと、このこと、ここはこうすべきだ」という意見を出したことがあります。これはもちろん、非公式の話。外交の話ですから。政治の話ですよ。結局、十万人を東アジアに配置しておくという。これは固定化ですよ。それは困ると。SACOが始まるのに、そんな声明が先に出ては困ると抗議。結果としてクリントンは米国内事情で来日しなかつた。だから、「日米共同宣言」が出せなかつたんです。

そういう意味では村山さん、ものすごく困つていたんです、この時期ね。自分が日米共同声明を、安保の再定義をやらざるを得ないというのは大変でしょうね。いくら安保を認めてもね、自衛隊を認めてもね。

伊藤 もう一步進むわけですからね。

■ 橋本政権の誕生

吉元 それは大変だと思いますよ。そういう意味では、苦渋はわ

かつていました。年明けに退陣した。あれ、と思つた。でも、流れとしては必然かな、という感じがしましたね。だから、私自身はとくに村山さんが替わつたことでショックを受けなかつた。むしろ橋本さんにバトンタッチということは、すぐ直前に聞いていたから、「あ、これは沖繩にいちばん関わりの深い派閥という形で関わってくれるならば」という気持ちがありましたね。だから、予定していたものを早めに出すことにした。「大田―橋本会談」を一回入れないとセレモニーにならんということで、一月の中旬かな。

佐道 二十三日ですね。

吉元 「大田―橋本会談」を入れて、徹底的な話し合いをさせて。伊藤 同席なさるんですか。

吉元 はい、最初でしたから同席しました。二人で差しでの話し合いをさせました。

伊藤 でも、同席はされていたでしょう。

吉元 終わったあとでね。総理が「入ってくれ」と言うから、僕も入つたんです。

佐道 大田さんと橋本さんの差しの会談の後に？

吉元 橋本さんから、「実は、こういうことを大田さんに言われた。自分は、こう言つた」と話があつて、それを聞いた上で。少なくとも、「これでやっていけるかな」という感じをもちました。

その後、夕食懇談の時に、大田さんが橋本さんに泡盛を注ぎながら、「実は」という話をしました。「橋本さんは（日本）遺族会の会長で、前の靖国神社に参拝しているし、政治的にはタカ派と思つている。どうして、あなたはそうなんですか。あなたのような、若い方が」というようなことを言つた。その席には、橋本、大田、そして私、古川さんの四名がいました。大胆なことを聞くなど思つて。まあ、これはアフター5の話ですからフリーの場です。橋本さんは、なんかかや言つとつた。

今度は逆に橋本さんが、「大田さんが高等弁務官について書いた本を読んでみたけど、あれはこういう意味かな」と質問する。大田さんは、「いや、書いた意味はそうじゃないんだが」と言っていたんだけど、橋本さんは盛んに食ってかかるんだよね。書いた者に、「そういう解釈はできない」と食ってかかるんだから、面白いですよ（笑）。それを見とって、かなり打ち解けてなんでも話しあえる雰囲気は双方がつかんだのかな、という感じがしたね。結果論だけど、大田さんと橋本さんは十何回話しあっているんですよね。

伊藤 第一回から始まってですか。

吉元 そうです。その度に、大田さんは何か実現を要求するんですね。可能な限り、それが実現していくんです。それは二人の会談だから、沖繩では「首脳会談」と言ったんですね。本当は、そういう言葉を使つてはいかんかもしれないけど。でも、沖繩的にいえば、まさに沖繩のトップだからね。何を話し、何が合意されたかというのをこっちはわからない。大田さんは二人で話をしていくから。そのとおり、僕にさえ言わないんです。

ところが、翌日早い時間に僕は那覇に帰る。県庁に戻ると古川さんから電話が入って、「この件は、こうなりそうですよ。それでいいですか」と言われる。「え？、何のですか」「いや、夕べ、知事と総理が話し合った件ですよ」「わかりませんよ、私は」と言ったら、「何？」と、これが毎回だった。

大田知事が帰って来て、「総理と話し合ったか」「うん、話し合ったよ」「よかったか」「うん、いろいろあったよ」「何を話し合ったか」「いや、二人の話だよ」という具合。これは、一、二回ほど僕は黙っていたけど、それじゃ仕事ができないから知事に、「いや、それは困るよ。古川さんはわかかって僕に連絡が来るのに、僕がわからなかったらどうしようもないだろう」ということになつて。その後、大田さんは帰って来て、「こういう話をしたよ」

「こういう返事を貰ったよ」と、口頭で受けるようになったんです、その後はね。たとえば留学生の派遣など、その時の話なんです。幾つかあります。二人は、そういう関係まで深まった。

ですから、橋本さんがいみじくも大田さんの「海上ヘリ・ノー」と言った記者会見の直後に橋本談話として出たのは、「イエスとは言わなかったけど、だからといってノーとも言わなかったはずだ」と、さも「裏切られた」と言わんばかりの言葉で表していたけど、そこは政治家同士、大人の話だから言葉の綾はあまり大事でないかもしれないけど、橋本さんは、大田さんとの関係は、そういう意味では「あ・うん」の呼吸でいけるぐらいの信頼関係になつていたと思つたかもしれない。言うことは言うし、つきりする人だから、曖昧にしない人だから。言うことは言うし、必要のないことは言わんし、言われても必要のないことは黙っているし、そういうタイプの人ですから、ということがあつたのか詳細には僕はわからんけど。

佐道 しかし、橋本さんも大田さんとの会見を重ねる中で、イエス・ノーをはつきり言う人だろうということには理解をした上で、そういう発言をされているということになりますね。

吉元 そういうことでしょうか。

佐道 首脳会談の中身について、橋本さんのほうは実現するためにも下に降ろしていかなければいけませんから、古川さんに連絡がある。古川さんは、（吉元）先生に連絡をされる。大田さんは、先生にはさすがにおっしゃらなかった。しかし、先生がおっしゃつて話をされたということですから、それは大田さんのほうから、「今回会った時には、こうだったよ」と必ず言われるのか、先生がお聞きになつてお話しになるのか。

吉元 いや、一、二回は僕は黙っていたけど、古川さんから三回目あたりからは、「こう言われているんだけど、何があつたのか」と聞き出した。それから言うようになったんです。それは、古川

さんから聞いていると言ったから。「僕がわからんじゃ、仕事はできないよ」と言ったから。

伊藤 その後は、どうなされたんですか。

佐道 首脳会談の後には、必ず古川さんなりから先生に連絡があるわけですね。

吉元 それは、やっぱり連絡をとりましたよ。

伊藤 とつたんですか。

吉元 はい、私がやる時もあつたし。「こういうことを知事から聞いているけど」、「そうです。こういうことですよ」という話は。

伊藤 すれ違いなんかはなかったわけですか。

吉元 基本的にないです。だから、「大田―橋本会談」の細かい話は抜きにして、何がまとまったのかという、必ず一致した意見交換、確認はしました。

佐道 何がまとまらなかったについては、どうですか。

吉元 それはほとんど、そこまでの話はなかったです。まとまらなかったとかいう場じゃないからね、二人の話の場は。

伊藤 いろいろな話が出て、その中でまとまるものはまとまるということでしょうね。

吉元 そういうことでしょうか。そこはもう、橋本さんに聞く以外にないですね。

佐道 大田さんは十五回ですか、十数回……。

吉元 十七回とか。ちょっと回数わからんけど、そんな話をしています。

佐道 吉元先生ご自身は、非公式を含めるとその倍ぐらいおやりになって？

吉元 橋本さんですか。いや、総理とは大田さんぐらいは会っていないです。ただし、会う時は長い時間ですよ。日中は、官邸で総理執務室に入つてというのがほとんどないです。もちろん、

終わつた後でどこかで。

佐道 食事をしながら、飲みながら。

吉元 それは、徹底した時間をとつてね。それは、大田さんがおつた場合もあるし。おつた場合が多いけど。むしろ、それよりは梶山（静六）さんが、官房長官室、ある種フリーパスで行けるように連絡をとれば。そういう形で、ちょっと話すことができない部分については五時以降ということで、話し合ったというのは頻繁だったですね。しかし、その時は私は必ず立会人を求めましたからね。古川さんが必ず立ち会った。

佐道 じゃ、必ず古川さんが基本的には入るといふ形で？

吉元 そのとおりです。

佐道 ということは、古川さんは今もいらつしやるわけですから、ずつとその間の流れは古川さんが引き継ぐというか、流れを知っているいろいろなことをやるという？

吉元 そうですね。だから、官房長官と話す時には、時々込み入つた要因、つまり東アジアの軍事情勢とか、だいたい基地問題。そう頻繁ではなかったけど、ある時は、いま防衛庁の防衛局長の守屋さんが一緒にその場に来て、飯を食いながら酒を飲みながらワイワイガヤガヤということもやっていました。何故か知らんけど、外務省は一人も入らなかつたですね。

佐道 実は今、それをお聞きしようと思つたんです。SACOが出来て、SACOは防衛庁と外務省が出るわけですね。防衛庁の側は守屋さんが審議官で担当されて、外務省の側は北米局長の（今、アジア太平洋局長の）田中均さんがやられるわけですね。これを、政府としてはセットになつてSACOでやっておられるわけですから、沖縄県としておやりになる時には、防衛庁の守屋さんなどがお入りになる時でも、外務省は入らなかつた？

吉元 沖縄米軍基地問題協議会というのは、官房長官が座長で、外務大臣、防衛庁長官、大田沖縄県知事ですね。同じ構成で幹事

会があつて、古川さんが座長で、沖縄からは私で、田中さんで、守屋さん。ここは、徹底して何でも話しましたね。ちよつと拡大したりして、関係省庁が。そこは、わりと厳しい話をしたりしたこともあります。ですから、その時には外務省は議論の中心ではありませんよね。でも、官房長官などが特別に話し合いたいといつて話す時は、僕は一回も外務省の立会いを見たことがないです。

佐道 何故ないんでしょうか。

吉元 何故か、ちよつとわからないです。

佐道 それは、梶山さんがつまり政府側のメンバーをお決めになつたど？

吉元 こつちはそんなこと言つたことないですね。

伊藤 つまり非公式なあれなんですか？

吉元 しかし、あのクラスになると非公式というのが正式だからね。政治的な話は。

佐道 そうですよ、非公式に腹を割つて話をするというあれですよ。

吉元 それはもう、かなり厳しい話を。

佐道 日本の政治の中では、実はそつちが大事だと。

吉元 たとえばの話だけど、「海上基地を三年担げんか」という話になつたもんね。梶山さんは、官邸でやつたんじゃないですよ。飯を食いながら。ちよつとしたところに招待されてね。こんなところでやつておるか（笑）。料亭政治というやつですよ。それで話す。古川官房副長官、守屋さんが中に立つておると。徹底した話をして。そのときに、「三年つて二〇〇〇年か？ うん、そうだな。サミット要求したよな？ ははっ」と笑っているわけです。「江沢民さん呼んでおるか」と言つたら、また笑っているわけだよな。「どうなるかは、まあ今忙しいから橋本さん、決断しないのよ」とか言つてるのね。

しかし、橋本案が出たのが一九九六年四月でしょう。もうちよ

つと、移設はね、県内移設が出たのはもうちよつと後ですよ。その後ですから、結局、「これ厳しいよ」と言いながらも、その選択よりは陸上案のほうがいいんじゃないのか。嘉手納におち込んだらという話を出たりさ。いやいや、と。そういう様子の中で三年という話が出ている。三年というのは何だろう。梶山さんはそれ以上のことを言わなかつたけど、たぶん、その後の私の理解では二〇〇〇年沖縄サミット、それで、同時に要求したのは江沢民さんを招聘すべきだと。東アジアの緊張緩和のためにはそれが出発だといふ言い方なんです。総理に会つたとき言つたことがあるし、私なんかも官房長官に。その中で一九九六年、失礼、これは一九九七年の話だな、ちよつと後ですよ、この三年の話は。一九九七年に入つてからですよ。

二〇〇〇年サミットを要求した後ですからね。そのときなんか、「三年担げんか」と言つたときに、「三年つていつたら二〇〇〇年だな」と。そういう状況だなというような認識があるしね。それで、そのときに通常空港を一本造るのに、五年で基礎調査をやつて設計やつて、アセスをやつて中断してOKするのに、だいたい三年から三年半、四年かかるよと。アセスで三年引つ張ることは出来るよと。それがどういう意味あるの？と言つたら、それ以上言わなかつたですよ、梶山さんは。それを言われてみて帰つてきて、スタッフと細かい話を繰り返し、繰り返し、梶山さんがいったという言い方はしないけど、考えていくと、はつと気付いたのはやはりサミット後に最終結論、それまではこれは吊るしておくということだったのかと。そういう感じはしたしね。

一九九六年の一月の初めに総理が変わりますよ。大田と橋本会談がありますよ。一月三十か三十一日に米軍基地問題協議会、そこで基地返還アクションプログラムも正式に提出した。それで、二月か三月に台湾での、例の――。

佐道 ミサイルですよ。

吉元 このときに橋本さんが、もう大変だと。これは基地問題どころではないと。ものすごく顔色を変えて、三月の下旬だったと思うけれど東京に行ったときに。私ははつきり言ったんです、「そんなの関係ないよ。あれは別に本気でやっているんじゃないから」と。たしかに第七艦隊、空母が台湾海峡の北と南に張り付いてね、というような話で。しかし、そういうこともありながら、いやこれはSACOは動かないんじゃないかという危機感を橋本さんは感じた節はあるんですね。だけど、急遽、例の橋本流のやり方で四月の十何日かですかね。

伊藤 十二日。

吉元 モンデール会談ですね。その前日かその当日だったかな？大田知事に電話が来て、それで県内移設、どうするか。返事を求める、記者会見は何時からと。それで、知事はびびりして、三役が緊急に集められて、総理からこういう電話があった、どうしようかと。どうしようか？総理がこういうものをやると言うんだつたらさせなさいよ。なぜ拒否する必要があるか。県内移設だか何だろうか、とにかく中身を出させないと。その上での話だと。「イエス」も明確に大田は言わなかったみたいだけど、それを前向きに受け止めたような形で電話を待っていたときにきたから、大田さんが発言しておったんです。それを踏まえてモンデーさん同席の上、官邸で記者会見をやって、あの発表になったんですね。それに対して、大田はコメントを求められて、まあ前向きに受け止められるような発言につながったんです。

普天間をどう動かすかという点で、なんか考えなきゃいかんというの、知事の腹の中にも、きつとまだすわってなかったが、ここでひとつ受け止めないとどうなるかわからんと。その三月の問題もあつたりして。だから、イエス、ノーをはつきりしている大田さんがノーといわなかったのは、つまりそういう意味ですよ。そういう意味で、橋本さんに言わせれば、「ノー」と言わな

いんだから、呼吸合わせはしておると思っただんでしよう。それがずっと続くわけです。

佐道 先生がその段階で、大田知事に、「普天間返還の県内移設というのがあればいいよ、受けなさい」とおっしゃったのは、それは昨日の話のいちばん最初に出てきた問題ですが、たとえば、那覇、沖合い展開をした新滑走路の多機能集約型という構想を。

吉元 あそこまでは私は、時間的に無理だと思っただんです。

佐道 那覇のあれは別としても。

吉元 いや、私はもう普天間の話は、嘉手納のことが頭にあつた。

佐道 もうそのときの段階から――。

吉元 「基地の整理縮小」とわれわれがいう言葉の中には、集約を前提として、ひとつずつ片付けられるやつは片付けていこうと。「退け」と(米軍に)言っただって、退かんよと。

たとえば、那覇の上之屋、今の那覇の新都心と言っているけれど、米軍家族の住宅地だった。結果的には嘉手納基地の中に移したんです。そういうやり方で、空けると言っているんですね。だから、基地が無くなるというよりは、やはりどこかに移すだろうと。それは新しい基地じゃない。復帰前でさえ、新しい基地をベトナム戦争の最中でさえ、具志川市の昆布という所に基地をつくらうとしてつくれなかつたんです。反対運動のために。長期的な座り込み闘争をやって大変なところまでいったんです。現に、恩納村で海兵隊の都市型ゲリラ訓練施設をつくるために、キャンブ・ハンセンの中ですよ。軍用地の中に。そこにつくろうとして入れないし、結果的に村長が先頭に立って、機動隊とぶつかって中止させたんです。この村長は今、県の副知事です。

だから、ベトナム戦争の最中でさえ、沖縄では新しい基地をつくれなかつたんです。復帰後も都市型ゲリラ訓練施設はつくってないんです。つくれないんです、物理的に。もう県民が許さない

んです。だから、新しい基地をどこかにつくるといふのは、ありえない話なんです。だけど、基地の中に移すというんだったら、「ノー」とは最初から言うなというのが私の考えなんです。佐道さんがいわれるように、沖合い展開のあれは、スケジュール的に無理です。もうとてもじゃないけど間に合わない話。嘉手納基地だったら、カネの工面さえつければ三年で使えますよ。中に入れる話はね。

佐道 そうやって普天間の返還という問題が出てきたりとかするわけですが、一方で前年の一九九五年から始まった基地問題協議会ですね。結局、ある段階で基地問題協議会では不十分であるという形で、やがて九月以降に沖縄政策協議会という形になって。

吉元 基地問題協議会は、あくまでも基地問題だけ。沖縄の二十一世紀のグランドデザイン、国際都市形成構想、経済振興、あれはここでは議論出来ないから、新しいのをつくろうと。村山さんのときは基地問題、これで走るから。それを前提にしながら、県は署名拒否を続ける。村山さんは、大田知事を提訴する。これは最高裁まで行く。基地問題は橋本さんになっても続くのです。

一方、沖縄の二十一世紀のグランドデザイン、国際都市形成構想、沖縄をどうするかという話は、これでは取り扱わないことになっっているから。

佐道 別の問題だということですね。

吉元 そう。橋本さんになって、「これどうしますか」と。そこで、塩川さんなんか政党サイドの役割が出てくるのです。似たようなのをつくろうと。具体的な話になっていくのですね。これが沖縄政策協議会として走ったのですね。

伊藤 顔ぶれは？

吉元 顔ぶれは総理大臣と北海道開発庁長官以外は全閣僚が入るわけです。官房長官が座長で、それに大田知事が入る。幹事会も同じ構造ですね。

伊藤 各省は次官ですか。

吉元 いや、局長クラスです。

佐道 この沖縄政策協議会が正式に閣議決定されるのは、平成八年、一九九六年の九月十七日ということですが。

吉元 九月十日が総理談話ですか。

佐道 総理談話ですね。

吉元 それで表明されて。

佐道 はい、実はその前の段階、SACOや普天間の返還とかの一方で、一九九六年、たとえば六月には、自民党の中に特別調査会が出来たり、それから社会党の中にも、同じこの一九九六年の七月に沖縄総合振興本部というのが出来たりしますね。結局、そういうところとの調整といいますが、あの意見の集約とかも必要となると思いますが。これは、具体的には党にはどのようによ？

吉元 きっかけは一九九六年のその時期、一九九六年かな？ 一九九七年かな？ 例の米軍用地の強制収用に伴う特措法の改正がなされてくるんです。首長が反対する、大田知事がノーと言った、また裁判かという話ですよ。そんなものだったら、元々これは国の仕事だから、法改正して、こんなものが県、自治体と関係無いようにしようじゃないかというものが出てくるんです。

これに対し、沖縄では反対運動が起きるんです。こんなことをすると、何でもかんでもやられちゃうんじゃないかと。大田知事ももちろん反対するんです。これは身近に住民と接している自治体が関わるべきだと。それをやったんだけど。結果的には、政治の流れは自民党サイドが、さきがけもそれ以外にないと。それで社民党もついていかざるをえない。あれは一九九六年の国会だったと思いますが。一九九七年かな？ 調べてください。

結果として沖縄の問題を基地問題だけに集約出来ないよということになって、従来あった自民党の沖縄委員会、社会党の沖縄対策委員会、これじゃ機能しないということになって、主に基地問

題だけやるから。それで、沖縄のこれからをどうするかという、橋本談話を前提にしたような形で、対応する組織が出てくるんです。たしかさがけでも出来たと思いますよ。足並み、三つが揃えたと思います。

伊藤 それとの接点は？

吉元 私が関わりました。つくられるときには、それぞれ事前に呼ばれて、話し合ったことはあります。だけでも、その構成とか機能とかというところまでは、私はタッチしないで。まあ政党の問題ですからね。

伊藤 意見のために呼ばれると？

吉元 それはいいですね。

伊藤 それはいいんですか。

吉元 ええ、それは何度も言うようですが官邸ですよ。それは政策協議会とか、基地対策協議会とか、このルールを外すと、政党が何を言い出すかわからんですからね。これは橋本さんになっても、ガンとして私は守ったんです。このパイプは崩さんと。これ以外の話はしないという形で。

伊藤 政党の側からはどうですか。

吉元 政党がそれぞれ沖縄調査に来たりというのが頻繁にありましたね。

伊藤 来てくれということとは？

吉元 ほとんど呼ばれたことはないですね。だから、さっき言った梶山さんのあのグループ、日本何とかをする会とか何とかという、自民党の中の議員連盟ですよ。あそこに呼ばれたのが正式な。その種の議連に呼ばれたのはですね。

佐道 ちようど、同じような時期なんですけど、これは昨日からうかがっている話で、ある種確認にもなるんですが、六月に内政審議室に沖縄の米軍基地問題担当の事務局を設置するという話になります。それは、つまり開発庁がもちろん基地問題は触らない

し、内閣を中心に基地問題も含めていろいろやっていくんだということ、これはもう内閣でやると。それについては内政審議室でこれをやらなきゃいけないということ、このような流れになった。

吉元 そうですね、全くそのとおりですね。それが前提になって、沖縄政策協議会をつくったときも、開発庁長官はメンバーではあるけれど、事務局は開発庁でない。あくまでも幹事長が古川さんだから内閣でやる、ということが原則として沖縄がこだわったわけですね。それほどめなかつたんです、これは。すんなりいきましたけれど。

佐道 ちようど同じような時期なんですけど、五月に「国際都市OKINAWA懇話会」という。

吉元 これは何ですか、どこのあれですか。

佐道 沖縄がアルファベットで「OKINAWA」と。「国際都市OKINAWA懇話会」というのの設置要項というのを。

吉元 どのあれですか、記憶が定かでない。何月ですか。

佐道 一九九六年の五月三十日に。

吉元 俺のメモには入ってないな。

佐道 そうですか、その第一回を六月十一日に「国際都市OKINAWA懇話会」を開かれて、意見交換をおやりになったと。

吉元 それはどこですか、沖縄ですか。

佐道 沖縄ですね。

吉元 これは、県の国際都市基本計画、これをオーソライズするために構想、策定を。これは十一月十一日に閣議決定していますから。そのために民間を中心にして、県内で有識者を集めてつくったものです、そうです。

佐道 だから、この沖縄というのをわざとアルファベットで「OKINAWA」と書いておられるわけですね。

吉元 そうです。

佐道 橋本談話の中に二十一世紀沖繩のグランドデザインと、沖縄県が出してきた二十一世紀沖繩のグランドデザインを踏まえてという言葉がいわれますよね。結局、この段階ではつまり沖繩県として沖繩問題について内閣総理大臣談話という、二十一世紀沖繩のグランドデザインは沖繩県のその願いを聞いた構想であると承知いたしておりますということで、政府としてはこの構想を踏まえ、云々ということになるわけですね。つまり、これは基本的には「国際都市形成構想」なわけなんです、この談話の中には「国際都市形成構想」という言葉自体は入っていない？

吉元 「国際都市形成構想」という言葉は、ある種固有名詞ですから、県がオーソライズしないと使えないわけです。

佐道 使えないわけですよ。だから、時間のタイミングの問題でこの言葉になったということなわけですね。

吉元 まさにそうです。中身そのものは、ストレートにそれにながっていくんですがね。

佐道 もうそれ以外はないわけですよ。

吉元 だから、その政策協議会にはまさに国際都市が必要だから、そうです。

佐道 ということになりますね。

■特別調整費五十億円

吉元 このとき、例の五十億の話が出るんです、特別調整費ですね。やはり五十億の話です。これを取るために、本当は総理が約束すればそれでいいんだけど、ちょっと念を押すために大蔵大臣に会いに行きましたね(笑)。それは、そのためにというよりは、むしろ大蔵大臣にしばらく会ってなかったものだから、社会党の久保巨さん、彼がやっていたので。それで、しばらく会っていなかったから、「会いに行きたい」と電話を入れたら、秘書官が取り次いでくれて。「いや、総理からそう言われたんだけど、確認

する必要はないけれど、大臣のところにも表敬しなきゃいかん」と言ったら、「すぐ来い」と言うから、飛ばして行っただけです。それで、「実は……」と話して、「こういうことが出ておるよ」と。「聞いています、調整しています、ありがとう」と言った後で、「それ以外何かあるだろう」と言うから、「改めて来ます」と。細かい問題はその場ではやらなかったんですがね。しかし、この特別の調整費という五十億の話というのは、かなり沖繩にとつては大きい額でびっくりしましたね。これを各省庁が狙ったんですね、どう使うか。

これでは少し揉め事が後で起こったんです。当時、下河辺さんなどが十分裏ではツーカーで関わっていたから、このカネは勝手に各省庁に使わさんごうと。沖繩ではこれに使うという形に絞って、三つか四つぐらい徹底的にさせていこうと。私もそうだったんです。ところが、官邸が、内政審議室が、先に走っちゃって、従来の発想で各省庁に国際都市形成構想、この展開のために沖繩から説明されたものを踏まえて、各省庁、「沖繩に関わるやつを出して来い」と言っ、バツツと集めたんですよ。それが

佐道 八十八のプロジェクトで。最初は先生がおっしゃったように三つの作業部隊でやろうとされていたのが、八十八のプロジェクトを出してきて、それが結局、三十四項目のあれに集約をされることになるという、それで十のプロジェクトチームが出来るんですね。これに外務と大蔵とか、あと細かいところですが、以外の主要なところはみんな入ってくるという形になつてくるんですね。

吉元 そうですね、これは異様でした。だから、結果としていくつかの部分は——これは大部分と違っていいかもしれないけれど——やるべき仕事、やるべきプロジェクトを、これを利用して先取りするというような各省庁の思惑が働いた部分もいくつか出

ているというのが、あとで県庁の対応させた各部局から出されてきた。しかし、これが軌道に乗るのは一九九七年後半、成果、レポートが出るのは一九九八年に入ってからで。これは各部局との対応をさせながら、私のところでは全県フリー・ゾーンに結びつく規制緩和委員会を、沖縄政策協議会の了解の下に走らせるというのがあるんですね。三か月か四か月ぐらいかかったんですね。

佐道 これは十のプロジェクトチームが出来て、実際この三十四の項目自体に本当に多岐にわたっています。これは結局、企画調整室の国際都市形成構想推進室が実質的に具体的な窓口で、ここが十のプロジェクトチームを相手にして議論されていることになるわけですね。

吉元 そうです、それで庁内連絡会議を通じて、関係部局との間では調整するという形ですね。

伊藤 当初考えたのと、全然違うことになっていますね。

吉元 違いますね、ここが問題だということは下河辺さんからも、その後、相当指摘されたんですが。結局、そのところが、私もそこまで細かい、気配りに最後まで専念しなかったということがあったかもしれない。私が継続出来なかったところで、少し野放図になり始めたという感じはしていますけれどね。それは、責任転嫁になるかもしれないが。

つまり、規制緩和の検討会をつくらせて、その結果を踏まえてどうするかというのが、実は描いた絵だったんです。そのようにつながらなかったという、そこに問題があるんですね。

佐道 つまり、この三十四の項目で十のプロジェクトチームがあつて、具体的な細かい、各省庁から上がってくる細かな話があつて、それを自主的に調整し始めたわけですよ。

吉元 それを勝手にさせるんでなく束ねてね。三つ、四つの部会をつくったんです。三つかな。これが基本なんです。それ以上分散しないと。

佐道 そのはずだったんですよ。

吉元 そうなんです。そこがひとつの限界だったんですね。この枠組みで進めるべきだったんですよ。そこに関係部局、省庁を集めて、こういう沖縄国際都市形成構想、こういう狙いだよ。ここに集約した共同作業というのが本来だったんですね。そこまでは描いていたんですね。

佐道 本来は、その前のこれが出る八月に沖縄県は規制緩和等、産業、振興に関する要望五項目を政府に提出されていますね。つまり、これはまずきちんとやっということが土台で、これが真ん中ということですか、中心のテーマ。規制緩和という問題が出てくるわけですね。

吉元 だから、通常行う振興開発計画のプロジェクトみたいな形で分散してきちゃったんです。そのとおりでしょうね。

佐道 先生は、特措法の問題もあり、基地の問題もあり、それから規制緩和委員会のほうもあり、という形になって、相当、忙殺をされていくということになるわけですよ。具体的には。

吉元 結果的にそうですが、内政審議室の中でチームが出来て、これの受け皿が各省庁に振り分けられて、そして国がやる通常の調整業務に入っていく、それに対して沖縄がちよつと違うよ、という歯止めをしきれなかったというのがひとつありますね。そこがひとつのポイントだと思います。ですから、各省庁は特定な二十一世紀の沖縄のランドデザインを頭に置いた部分を、文言としては調査のタイトルに使いながら、実態としては通常の部分に走りますよ。

それにはひとつ問題があるんです。われわれの問題がひとつあるんです。国際都市形成基本計画を最終的に決めたのは、一九九六年の十一月ですよ。その次に、推進計画の作業に入りますよ、翌年度ですよ。これは推進計画と、具体的にこの頃五十億のプロジェクトを結びつけるというのが目的だったわけですよ。一九

九七年に入つて、推進計画を四月から委託調査に、同じ都市経済にさせて、これは一九九八年に成果物は出るんですが、この段階から、この調査とこの推進計画とをかみ合わせる目的だったんです。結局は、それをかみ合わす力が沖繩県になくなっちゃつて、結果的には調査物は国際都市計画から出ておるけれども、県庁の中でさえ一九九八年四月以降、これが眠っちゃつたんです。推進計画がね。

佐道 一九九八年、もう先生はいらつしやらないわけですね。

吉元 これはかなり力作ですよ。一度、都市経済から取つて見てください。これを見てください。

佐道 見ました。

吉元 そうですか。これを見れば、いわゆる国際都市形成がどのような形で、どの領域を展開していくかということが……。だから、構想があり、基本計画があり、そして戦略的課題、政策課題を立てて、その上で推進計画の作業を入れたんです。この推進計画と五十億のカネがどう結びつくかという形で、個々のプロジェクトと結びつきがあればよかつたんですよ。個々に結びつくまでの間に実務が入つちやつたんです。

伊藤 そつちが先にいつちやつたんですね。

吉元 結果的にはそのとおりです。

伊藤 これ、その特別調整費というのはいつ使つたんですか。

吉元 一九九六年の何月か。総理談話は九月十日ですね。そのときに約束して。だから、その年の年末で、次年度に措置されたんですかね。

伊藤 次年度ですね。では一九九七年に？

吉元 補正だったのかな？ 補正か次年度ですね。だから、ちょっとそこは覚えてないから、一九九七年の四月以降の予算になるか、それとも補正で組んだのか。ちょっとそこは記憶がないですね。

伊藤 しかし、補正で組むとかなり急がないと。

吉元 この時期、九月はまだ臨時国会開いていないですからね。一九九六年のこの時期というのは非常に問題がありましたね。一九九六年の八月三十日かな？ 最高裁の判決が出るんですよ。そして、大田知事が敗北するんですよ。

佐道 八月二十八日ですよ。

■海上基地を巡る住民投票

吉元 九月八日が県民投票なんです。そして、その直後総理の談話ですよ。この間で相当苦しんだんです。県民投票の結果は想定したとおりの結果になったんです。やはり投票率は下げられませんでしたかね。ボイコットを自民党が展開したものですから。それでも、約六〇%、五九・何%の投票率。それで、九〇%近くの基地返還、整理縮小と地位協定の見直しの支持があつた。これを力に、それじゃもうひとつ戦いを挑んでいこうという前提だったんです。

ところが、最高裁の判決が先に繰り上がったんです。これは官邸の意向が入つたと思えますがね。通常だとその時期に判決が出ないというのがうちの弁護士団、県の弁護士団の判断。だから、最高裁の判決がたぶんその後だろうと、われわれは見ておつたんです。その前に県民投票を入れようと。ここはものすごく官邸の政治の力と、沖繩の運動とが競り合つた時期です。私はその年の六月議会で、連合沖繩の二月から始まつた署名運動がまとまつて、大田知事に条例制定の要求が出て、それで与野党を調整した結果、やはり条例をつくるべきだということになって、その前の一〇・二一の県民大会の流れがあるものですから、「県民投票条例」を一九九六年の六月議会でつくる。投票実施は県の仕事ですから、県は補正予算を組んで六月議会に出して、同時にいつ投票させるかと設定するんです。この設定と今いった最高裁の判決がいつ出る

かというのが、これが――。

結果的には投票日というのは、予め告示するんです、そうすると国のほうはそれを先取りして、最高裁の判決を八月中に入れたんでしよう。まさかと思っただんですが本当に判決が出たんです。だから、九月八日の県民投票が、その最高裁の判決の後になったんです。そのときに県民から出たのは、「代理署名するな」、ですよ。知事にね。最高裁判決が出たが、それでもするんですよ。そうすると、これは明らかに法律違反だから、これは知事が辞めるということの選択しか残らん。それでもいいかという話で、私が九月八日直後、深夜まで政党や労働団体などと議論を徹底的にやっただけで、単独でね。団体ごとに。本当に徹夜状態ですよ。終わった後で知事に報告した。知事は、「総理に会う」ということで東京に行くんです。そして、総理と会って帰ってくると。これが九月十日の総理談話につながっていくんです。それで、それに県が受け入れるということが前提だったんです。もちろんその間に、事前に私は行っていますから。

そういう意味で、結果としてあのときに代理署名に応じた知事が問題だという批判が、今日まで残っておるのはそのことなんです。私は、最高裁の判決を無視して、「ノー」と言っただけ署名しなれば、これは明らかに法律との関係、判決との関係で首長は辞めるべきだと。継続するとすれば署名すべきだと。大田知事は署名したんです。その後は私が矢面に立つんですが。結果として、私はそれが勝負どころではないと見ていたから。勝負どころはもうひとつ、つまり海上基地の受け入れ自治体である名護市がどうするか。これはもう議会で毎回論議しておいたから、第一義的には関係市町村が、地方自治体自ら市民との関係で判断すべきだと。それを踏まえ、沖縄県は全県的な視野から、関係団体や県民間の意見を聴取して判断するというのが、この海上基地、イエス、ノーを巡る闘いですよ。ですから、一九九六年はそういう形で。

一九九七年になって、十二月二十か二十二日辺りに、名護市民投票が実施されたのです。

佐道 十二月二十一日ですね。

吉元 名護市民が、「ノー」という結論を出した。それは、私たちが狙ったとおり、仕組んだんじゃなくて展開のとおりですから。結果として名護市長がどう判断するか、それを踏まえて県知事がどう判断するか、これが最後の勝負だと。名護市長は投票日の直後、上京して、橋本さんに会って、市民投票の結果を尊重すると、自ら条例を作っていないながら、尊重しないで、「イエス」と、「受け入れます」と言い、辞意を表明した。大田はそれを踏まえながらも、なおかつ、各団体、政党などの意見を聴取した上で、一九九八年になって、「ノー」と言っただけです。この流れは国もよく知っている。

だから、国の場合は一九九七年の名護市民投票に向けて、保守の市長で、市長与党が圧倒的多数の議会でしょう。住民投票条例案を市長がOKして議会で提案した。議会は与党多数であり、全会一致で通したんです。その結果に対して、どういう読み方をしていたか、ですね。すごい投票運動を国はやったんです。それは野中さんなんかも入ってきて、いろんな大物政治家が入ってきて、それだけじゃなくて防衛施設庁、施設局の職員を総動員して、個別訪問もするんです。それで、勝つとみたんです。

九月議会前でしたが、私はまだ県副知事でしたが、この投票結果がどうなるのか、官邸サイド、さらには自民党サイド、どう読んどるか、興味があつたから、官邸サイドに聞いたから、「勝ちます」と言う。僕が、「勝つよ」と言ったら、向こうは、「いや勝つ」と言われた。私が言っておるのは、「いや、これは投票になると必ず反対が多数になるよ」と。そういう意味で、私は、「これはそこまで追い込んだらノーが出るよ」と。だから、「私は勝つ」と言っただけで、「いや絶対に自信を持っておる」と。名護市出

身の国会議員、衆議員である嘉数知賢さんが沖繩開発庁の政務次官、彼の部屋に表敬で行ったときに、彼は「勝つ」と。「これで決着つけたい」と言ったんです。同じことを自民党サイドは言っておったんです。官邸に行ったら同じような言い方をしておったんです。官房副長官の古川さんだけが、「本当にそうなるんですか、吉元さん？」と言って。「きつとそうはならんでしよう」と言っていたんです。だけど、もうこれで決着をつけたいという焦りがあったと思うんです。市民投票のほうで、「イエス」となったら、これはこれで一件落着きます。それを狙ったんでしようね。ところがそうでなかった。

だから、そこまで沖繩県との関係は本当に裏表の関係でね。沖繩の言葉で言えば、「フチバンタ」という言葉があるけれどね、崖っぷちに立って国とのやり取りをしながら、県民の意向を考えながら、ギリギリのところで沖繩県は来ておるんです。ところが、一挙にそれを、その海上基地案に一挙に賛成まで持っていこうという、市民対策さえやれば、という安易さが、今日まで延びた理由でしょうね。

だから、その流れからすると、今さら言ってもしょうがないことだけど、「海上へり基地」に大田知事が、「ノー」というのは当然のことで、県や議会でも「第一義的には地元自治体の意向を尊重する」と言ってきたんだから。ところが、「ノー」と言ったからといって、国のほう、官邸が「大田と会わん」ということで、それで、「大田つぶし」に入るわけでしょう。結果として大田の三期目がつぶれて、稲嶺さんが当選し海上基地は無くなって、埋め立て方式が選挙公約として出てくるんですが。この流れはまた同じことに入っちゃったんです。地元の見解はどこまで聞いたの？ 埋め立てという違う中身が作られちゃって、またすぐ始まっているでしょう。どこか無理があるような気がしてね。沖繩に対する関わり方、焦り、組み立て方の雑、カネさえ出せば何とか

なるという、そういうパターンに見えますね。

佐道 そのところで、先ほどたとえば梶山さんが、三年担げないかみたいな話をされるわけですよ。サミットまで見越して。

吉元 そのとおりですね。結局、朝鮮半島の情勢を梶山さんは見えておったと思いますね。

佐道 そうすると、梶山さんなんかはその話ですと、もうちょっと強引にやるのではなくて、もうちょっと長めのタイムスパンを取っておいて、そしていろいろ手を打つべきところは打ちながら、落着点を見つけていくということですか。

吉元 そこは、やはり官邸じゃなかったと思う。そう思いますね。伊藤 そこはというのは、つまり強引にやったほう？

吉元 その住民投票までの持っていく方。だから、住民投票の署名運動が始まって、条例制定の。それは地域住民が自主的にやったからね。条例制定まで持ち込んできた、市長のところで受け止めた、市長がどう判断するか、ここからですよ、問題は。

一年前に県議会であったことです。このときは、九五年の県民大会の流れがあつて、事前では、自民党まで条例をつくらうと調整がすみ、やろうと来たんです。ところが審議の最終段階にきて、自民党は反対に回るんです、いつの間にか。ここは東京サイドから、いわば東京、自民党絡みになったんですね。政治的には、流れが変わった。それで、革新の与党のほうが一、二、三票多かったから、通るとみたんでしょね。退場者が出たんですよ。本会議では、条例制定の最終段階で。それでも通った。自民党から反対者が出たが、条例は制定された。県が九月八日を投票日に設定して、投票準備、各市町村と調整に入る、走る、その中で自民党がポイント運動をしたんです、公然と。投票に行くなど。これは、もう明らかに自民党中央との関係で投票に持ち込むと、この流れからするとどうなるかと知ったんでしょね。だから、結果としては投票率は下がって、五九・六%だったかな？ それでいて九

○%近くが基地の縮小・整理、地位協定の見直しに賛成だ。やるべきだと。

その次に海上基地の問題でしょう。自民党は当然沖縄も中央も、この県民投票のことを知っておる、反面教師として勉強した、学習したんだが、なのに突っ込ませたでしょう。投票に行かせた。それは、だから積極的に関わって、地域対策をやって、そこで勝負をつけようという形に変わったんだと思いますよ。だから全会一致で名護市議会はやったんです。市長が積極的に条例を提案し、議会が積極的になった。それで、投票に入りました。あれだけ沖縄県にある国の機関の管理者は投票運動やっていますからね、とりわけ集中的にやったのが防衛施設局ですからね。でもこうなつたでしょう。それで上手いかなかったから、今度は「大田つぶし」でしょう。

僕は政治的にはわかるんですよ、このやり方は。だけど、こんなやり方で毎回くると、どこかでも一回爆発しますよ。何か問題が起こると、一九九五年どころじゃなくなりますよ。これは、今度は一九九五年は犯罪を犯したのはアメリカ人だったけど、軍隊だったけど、今度何かあったら、地位協定も運用問題も上手くいかない。おぎなり。結果的には基地問題、動いていない。パースと重なってくる。こういうやり方をもうやめようというのがあの取組みだったから。にも関わらず、今回また同じような土壌が蓄積され始めているというのには気がなりますね。

■島田懇談会設置の経緯

佐道 すると、沖縄政策協議会をつくって、いろいろ議論を始めた。その一方で、先生がおっしゃるようになり強引なことも、党を中心にやり始めたというんですが。一方で、梶山さんのところで、島田懇が出来ますね。これが一九九六年の段階なんですが、これが具体的に基地所在市町村と直接つながっているいろいろやり始

めることとなるんですが。

吉元 この経緯はこうですよ。沖縄から特別交付税の要求がたくさん出るんです。梶山官房長官は、竹下派、竹下さんが総理のときの自治大臣だったかな？ 例の一億円のふるさと創生資金。梶山さんがそのこととの関連で私に、「沖縄の市町村から出ている特別交付税の上積みの問題については、何とか考えんといかん」という話をしたんです。「それはどういう意味ですか」と言ったら、「いや、まあいろいろ方法を考えていかなきゃいかんが、沖縄だけ特別交付税を上積みするというのもおかしいな」という話になって。「それはそうですね」ということで、少し考えてみたいという話が出るんですよ。

それで、梶山さんが出してきたのがこの基地所在市町村については、なんか目配りせんとおかしいと。基地周辺整備資金では十分じゃない。あれは十分な使い方は出来ない。むしろ、米軍基地との関係は、これは本土ではない沖縄の問題だから、基地所在市町村についてはなんか考えんといふことで案を出してきたときに私は賛成したんですよ。ただ懸念したのは、掴み金では駄目、きちつとした地域計画とか、整合性をちゃんととった形でやらないと駄目という形にしたんです。それで、これは走るときにはもうひとつ条件を付けたんです。明らかに基地所在市町村の懐柔策につながらんようにということ、懇談会の人選は厳密に求めたんです。

だから、沖縄ではマスコミ、つまり琉球新報、沖縄タイムスの社長に出してもらったんです。極めて公平、公正にモノを言える人が。そして、労働組合の、あるいは経済の点は経営協会の会長というような、今の知事です。こういう形で。それで、本土側もそれに準じた形で対応してもらった。それで島田懇が出た。ここまではよかったと思うんです。それは、過大の期待を島田懇は与えすぎたと思うね。ここに問題があったと思うんです。しかし、作

つちまえばそうなるというのは、最初からわかっておるだろうと言え、それまでだけれど、結局、また同じことになるが、私のいない後のことだから。それはもう、何ともいえない。

「国が直接やるから、県は関係ないよ」と言われたときに、「わかった」と。しかし、私は企画調整室に対応するプロジェクトチームをつくらせたくて。必ず市町村は県に持ち込む。自らつくれないという力量を知っているから。特に基地関係、市町村の体質を知っていますから、いくつかを除いては。必ず何々を要求したいけれど、(と市町村は)計画を相談しにくるからということがあって、内々にプロジェクトチームをつくらせたくて。後になって、県は関わっていない、おかしいじゃないかということとを市町村から言われて、内閣府は県のほうで対応するための何か窓口をつくってくれませんかとなって、プロジェクトチームを表に出した。今でもそれは続いているんですね。

これが、少し人的な問題、島田(晴雄)さんに対する、これ僕は個人的にわからないですが、その後やめた後、市町村の講演会などに頻繁に呼ばれている。その関係市町村の、島田懇のカネの使い方などを見てみると、フェアじゃないですね。マスコミからも相当問題にされた時期がありました。私は率直に言つて、島田懇は、梶山さんが走らしたモノを、少し広げすぎたかもしれない。そういう意味で。

私は、そういう意味で所在市町村の島田懇のメンバーとの第二回目の沖繩での会議のときに、夕食会に呼ばれて、こういう発言をしたことがあります。これは問題になった。「あなたたちがそこまでやるならば、もっとSACOの最終報告に出ている基地の整理縮小、移す先の関係市町村、その面倒までみるべきじゃないか」という発言をしたんです。そしたら、当時の連合沖繩の会長が、「吉元さん、この間言ったことと違うじゃないか。あんたは、米軍基地を抱えているからと言つて特別なことを、やるな、

と言いながら、今度は“やれ”というのはおかしい」と。さらに、私は「そのとおりだけど、本当にみなさんは島田懇のカネの使い方というの、公平な形で出来るか」と。これはハービービューの地下の会議室で、彼と論争したことがあるんですよ。昨日、鷲尾(悦也)さんが同じことを言つてね。「吉元さんに一回怒られたな」とか話し出していましたけれど。

しかし、もう少し時間が経たなければ何とも言えないのだが、ただこのことは結果として基地の無い市町村から逆に問題にされている、今日的にね。これは、いつまでも続ける仕事じゃないと思う。だったら、「制度的」に何かの形に乗せるべきだ。それは、だから何らかの形で交付税方式に変えていくとか、特別な要項をつくつて、別個に何らかの仕組みをつくつておくということにするのか、そうしないと。

だから、米軍基地に対する関わり方じゃなくて。基地周辺整備資金のやつはあるんですよ。自衛隊基地を中心としながら。これが不十分だからこんなことが起こってきたんですね。

副知事再任否決と官邸

伊藤 今のお話の最後の段階は、吉元さんの再任問題の時期になるわけですね。

吉元 そうですね、十月の十七日から十八日に僕は終わっていますからね。

伊藤 これは、前にうかがいましたけれど、今までの流れでいうと、一方での官邸との関係、これは一応ずつつながっているわけですよ、まだこの段階で。

吉元 そのとおりです。

伊藤 しかし、その官邸と同時に自民党の幹部との――。

吉元 だから、一九九七年の六月議会で、私の任期が十月の十六、十七日だったから、九月議会で再任の同意案件として審議される。

そしたら、いろんな意見が出て、与党からも出たんですね。ちょっと上手くいきそうもないよという話が出てきて。それで、それはいち早くマスコミが取材に来てわかるから、私は結果として後で聞いたんですが、官邸サイドが相当びっくりして、沖縄県議会の動向を把握した上で、さらにそれを与党三党（東京）に働きかけて、そしてそれを通じて県議会、特に自民党サイドを同意させるような工作をしたと言われています。同時に、県内の経済界も総力を挙げて説得をしたという。今の知事なんか、「働きかけた」ということを本人が後で言っていました。ですから、そういう意味では、私がいなくなることでの問題に、いちばん危機感を感じたのは東京サイドでしたね。

伊藤 特に官邸？

吉元 官邸サイドですね。そのとおりでしょうね。だから、そういう意味では名護の市民投票の前、十二月、直前でもありますね、ある種の危機感を感じておったかもしれませんね、いろんな意味で。

伊藤 それだけ、いろんな中央も、ある意味では働きかけたりなんかしたにも関わらず。

吉元 その後、今の那覇市長になっている翁長雄志さん、当時自民党の幹事長ですよね。彼が、「東京が何を言おうが、俺たちの目的は知事をつぶすことだ」と。知事をとらないと、基地問題にしろ、安保の問題にしろ、小手先じゃ駄目だということ、最初に吉元をつぶして、翌年の知事選で勝利するという戦略ですよ。それが本人の発言として出ていました。狙いとしては正しいと思いますよ。

伊藤 まあそうでしょうけれど、やはり自民党の中の強硬路線が突っ走ったんでしょうかね。

吉元 どうなんでしょうかね、そのところはちょっと読めないですね。東京サイドからの「承認せよ」、「同意せよ」という形

で、いろいろ議員個人個人を説得されたということは、県内の議員から聞いたけれど、ところが沖縄の中で、やはり知事をとられたことが、自分たちの勢力、自民党内（沖縄県支部連合会）の力関係、それがことごとく、いくら中央とはつながっている、政権党だといったって、沖縄県知事がとられちゃって、しかも吉元を中心に官邸とつながっているって、政治はそこで相当やっていると見られているわけだから、これに食い込むためには、知事をつぶさんといかんと。そのために、まずは目の前にある副知事をつぶすということから、彼らが描いた戦略というのは、そのとおりになっているんです。

伊藤 つぶすまではわかりませんが、つぶした後のことを。

吉元 二つありましてね。一つはその年の八月の末あたりから動きが出てくるんです。一九九八年の八月末あたりから。公明沖縄が基地問題について大田知事に対する批判的な意見を出してくるんです。

伊藤 どっちの面から批判的なんですか。

吉元 あまりにも、頑なだということ、いわゆる海上基地については、検討に値するんじゃないかというような流れです。これがまず一つです。それで、八月の末に大田知事に対して六項目の要求をするわけです。その時、これに対して知事が答えてないですよ。

伊藤 公明？

吉元 その要求に対して。与党ですからね、きちっと答えてないで聞き逃しちゃうんです。それで、九月議会になるんです。これが一つ。そこで、公明が大田知事との関係を少し距離を置く理由になったんじゃないか、とも言われているんです。

しかし、それはそれとしても、もう一つあるのは、一九九七年の八月の末あたりから与党の一部で、表向きは那覇軍港の移設について、私が浦添商工会議所で講演をし、やりとりの中で言った

のは、「軍港の移設は認めん。商港、民港として造る」と、那覇港湾は。そして、今でもやっているように商港のバースを港湾管理者が積荷の安全確認して利用させる。船は大きくなっていきますからね。現在の那覇軍港はもう狭い、浅いですからね。今でもその方式でも考えていいんじゃないですか。そこまで拒否するといふわけにいかんと、現にやっておるだろうという話をする。この話に対して共産党がものすごく反発するんです。「事実上軍港の移設と同じだ」と言ってくる。「全く違う」と僕は言うんだけど、これは議会でも論争になりました。結果として吉元の再任は認めない。これが理由で共産党はパツと抜けるんですね。六名かな。それにつられて一、二名、与党の一部から抜けるんです。それは自民党さんのほうはそれに飛びつくことになる。与党さえまとってないのという話で。九月議会は明らかに共産党反対という形で、数が足りない形で終わるんです。

十二月議会でもう一回出すと知事から言われて、僕は嫌だったんです。それが前もってわかっていることだし、また同じようなことで与党の一部が割れるのは嫌だった。そしたら、「いや与党は責任をもつてまとめる」と言つて大田さんは共産党説得に入ります。だけど、結果として今度は自民党が退場するという形で、いわゆる成立要件が少なくなっていく。本会議場から退場する。だから、その過半数というのが厳しくなっていくわけだからね。というような形で、結果はそれとおり十二月議会でも同意を得られなかったということです。その間に九月も十二月も含めて、官邸サイドは相当な力を入れて、自民党を含めて集中的に沖縄の経済界、および自民党の議員の説得に入ったというのをあとで聞きました。

佐道 官邸も沖縄県の自民党議員に、いろいろ説得の電話を入れたりいろいろしたということですが、しかし具体的には先ほどからのお話のからみもあるんですが、党と官邸が、多少意見がずれ

ているというか、割れている形がありますね。

吉元 ありますね

伊藤 僕はさっきのお話をうかがっていると、強弱がこう出てきますよね。

吉元 やはり政権党といっても、官邸はやっている仕事をストリートに直線的に効率的に進めますので、政党はやはり絶えず自分たちの勢力拡大ですから、マイナスにならないような形で紆余曲折は平気で関係なくやりますからね。僕は沖縄問題に対するずれというのは、一部政党の中におけるずれというのは、基本的な路線の違いではなくて、そういう意味でのずれだと思いますよ。ねじれでもないし。だから、それは時間的なものとして理解するのか、もう少し幅を広くして、その範囲だったらいいよといって見過ごすのかの違いでもあつて。だから、今回の場合も同じようなことが起こったんだと思うんです。地元は三つの行政区は、沖でなきヤダメと言っているにもかかわらず、官邸で決めたのは、リーフにボンと入れちゃった。これで今、問題になつていっています。誰がそんなことを言ったのか、「裏切った」と、市長が矢面に立つ。知事が矢面に立つでしょう。それは官邸サイドから見れば、いやいやそれは沖に出していけば、一兆円に近くなると。このリーフに埋め立てをやったら三千億ぐらいで済むと。カネの問題だといわんばかりの言い方をする。冗談じゃない、騒音はどうするか、埋め立てのために流れが変わる、ジュゴンどうするか、海藻どうするか。そういう問題は結果的にはカネで片付けるというのでしようね。そういう意味で、やはりずれますよ、それはね。だからそういう意味での違いだと思つて、幅の問題だと思つて。伊藤 すみません、官邸がそれだけ考えたというのは、このパイプを非常に大事したいという意味だろうと思つていますが、これ再任が否決されて、そこから先パイプはどうなつちやうなんでしょうか。

吉元 結局、十月中旬に十七、十八、十九日あたりに私の仕事は終わりましたから、その後は私は県庁の仕事をやっていませんから、その後は沖縄政策協議会もあつたかな。

佐道 沖縄政策協議会は――。

吉元 やってますよね。

伊藤 やつていいますよ。

吉元 その年に二回ぐらい入れたかな。たぶんあつたと思いますね。

伊藤 平成十年に再開しているよ。

佐道 先生がお辞めになつた後ですか。お辞めになつた後はすぐには開かれていなくて、翌年の暮れに稲嶺さんが。

吉元 そうですか。

伊藤 だから、それは逆にいえばパイプが無いという？

吉元 私がいなくなつて組織はあるんだから。

伊藤 組織はあるでしょうけれど。

吉元 知事もおるしね。

伊藤 そりゃそうですね。

吉元 だから、私の後がすぐ埋まらなくても、副知事はまだ残っているんだから。やはり県庁の中でも分担を変えれば、それはすぐ出来るはずだけれど。それはしかし形式論で。実際として相手との関係でどうなつたかという話でしょうね。

伊藤 はい。長年築いてきたものを、そう簡単に修復は出来ないと思いますけれど。これは、しかし大田さんとしては吉元さんを見失ったとき、どうなるかというそのことを考えていたんですかね。

吉元 もう少し時間を重ねないと、やはり年を重ねないとそのところは出てこないでしょうね、本人からは。難しい問題かもしれないですね。

伊藤 これは非常に微妙な問題ですね。微妙だとはお考えですか、やはり。

吉元 いや、どうなんだろうね。そこまできちつと大田さんが整理しきつていたかな？ 三期目出ると決断したのは……その本音がわかればね。そりゃ回答になるんだけど。

伊藤 そうですね。

吉元 二期という約束をやりながら、三期目も出たわけでしょう。

伊藤 翌年ですよ。

吉元 結果としては。その間、沖縄政策協議会もつまつておるし。それとのパイプを切られたわけでしょう。単なる悔しさからまた出るといふ話じゃ、それはどうなんだろうな。そのところはちよつと読めないですね、本人じゃなけりゃ。

伊藤 勝つつもりでもちろん立つたと思うんですよ。

吉元 そりゃそうですね。

佐道 官邸側でのキーパーソンとして、もちろん橋本総理がいらつしゃつて、それから梶山さんがいらつしゃつたわけですね。ところが、一九九七年に月があれなんです、内閣改造（※）で村岡さんに官房長官が替わる――。

吉元 一九九七年の九月の末か十月の初めです。総選挙の後ですね。

佐道 そうですね。

吉元 だから一九九六年の、違う、一九九七年？

佐道 いや、もつと前ですよ。

伊藤 第二次橋本内閣が出来たのは一九九六年の十一月ですか。

吉元 それで、一九九七年――。梶山官房長官はまだやってますよね。おそらく橋本さんと一緒ですよ。辞めるのもそうですね。だから、一九九八年に入つて何月かに総理が橋本さんが終わつて、その段階で梶山さんも終わつていふと思う。七月十三日ですね、総理退陣は。小淵内閣が三十日に出来ていますね。辞意表明が十三日で退陣が三十日ですね。小淵内閣の成立ですね。

佐道 先生からご覧になって、橋本さんと梶山さんというのは、これは。

吉元 戦略思考からすると、はるかに何枚も梶山さんが上でしようね。ところが、実際のごとをタンターンと重ねていくという能力は、はるかに橋本さんでしょう。それは何かというと、議論が好きだということ、官僚とのやりとりが好きだということでしょう。しかも、目の前で官僚を罵倒——罵倒じゃないな——叱責するからね。それはやはり仕事、官僚の対応も早いでしょうね。梶山さんの仕事というのは、枠組みをポンと示して、あとはやれよというようなタイプだね。だから、古川さんという人がおって初めて生きてくるタイプです、梶山さんというのね。だから、梶山さんという方は一人というよりは、そこに「あ・うん」の呼吸で一緒に仕事をする何名かがついていないと、あの人は光らない人じゃないかな。

伊藤 要するにそれを具体化してつめて、仕事にしていく、という人ですね。

吉元 それは総裁選を見ておって気付いたんです。梶山さんはトップになる人じゃない。仕事をする人であるけれど、カリスマ的にトップになるというタイプじゃないなど。橋本さんの場合は戦略的な発想は出来ないだろうな、係長クラスの仕事しか。でも、ある種スター性があるという意味では違う。ちよつと、あまり人物評価は出来ないけど。夜の部で橋本さんと話し合っておつたら、あまりにも細かすぎるのね。こうなつたらどうするか、こうなつたらどうするかという話をね。何であなたがそこまで考えるのと言いたいよね。こうやって決まれば、あとはどういうやり方が出来るかというのは、やる奴がやる、という主義だけど。好きなんでしょうね。ただ梶山さんの場合は、酒を飲みながらもそうだけれど、モワツとした話しかしないですよ。細かい話はしない。最初はその人のほうから、口から出ないですよ。古川さんが

傍で解説してみたり(笑)。そのうち僕らも、ある程度だが梶山さんの話はいち言つたら、だいたい読めるんだけど。

伊藤 これ、否決された後に政策協議会が行われているんですね。佐道 十一月にはありますね。

吉元 七日ですね、第八回。これは全県フリーゾーンを出したとさです。新たな振興策です。そうですね、これがひとつあります。

伊藤 それを出したときに、それを推進してきた役者はいなくなつたんですか。

吉元 十二月ですか、村岡さんになつたのは。

伊藤 それは翌年？

吉元 これは翌年ですよ。

佐道 でも、橋本内閣のときなんですよ。

伊藤 橋本内閣のときに替わつてる？

吉元 十二月ですよ。そうですね、(梶山さんは)最後までいなかったな、たしか。なんかそういう感じがするね。

佐道 この全県フリー・ゾーンを、こうやって政策協議会の要望として十一月に出されるわけですが、先ほどからのお話もありますけれど、これも確認になるんですが、規制緩和を突き詰めていくと、全県フリー・ゾーンになると。これもやらざるをえない。ということ、じゃもうこれでいこうという決断をされるわけですね。大田さんとはそこら辺の話というのは？

吉元 規制緩和委員会、検討委員会です。前、こういう議題、次はこうですよ、前回こうでしたよ、終わりましたらこういう内容でしたよ。知事には、常時報告されていますから。私からも報告するし。事務レベルからもデータが上がっていきますからね。田中委員長が「全県フリー・ゾーンに行かざるをえないなど、県はどうする？」と言われたとき、「持ち帰ります」と言つて、私は大田知事に相談した。大田さんはいの一番にやろう、そうならざ

るをえないと。中途半端は無理だと。そういう結論をボンと出したんです。それにしても摩擦は大きい、農業団体、漁業団体も。どうにかなるかという話だね。それは、大田さんは大田さんなりに農林水産部長を呼んで、いろいろ相談、議論をしておった。基地問題も関連しているし。また部長から聞いたんでしようね。わりと決断は早かったですよ、全県フリー・ゾーンは。そこまで行かざるを得ないというのが。

ひとつは、那覇軍港で始めたフリー・ゾーンが使えなかったということ、また失敗したくない。どうせアジアの中でそこまで行くよという認識は、詳細に知事との議論をやっておった。まさにAPECの話を含めて。そういう意味では、基本的な認識のずれは無かったですね。ただ、知事を通じて経済団体、何回か話し合いさせながら、合意を取りつけるために。十団体の長でなくてね、数名とね。知事との話し合い、何回か場をつくったことがある。全体と話し合うのはもう僕の仕事じゃない。特に農業団体、漁業団体とは差して話し合って詰めていくという過程をやりましたけれど。

伊藤 その問題と再任拒否の問題はあまり関連が無いんですか。

吉元 自民党サイドから言えば、彼らは賛成だからね。

伊藤 賛成なんですか。

吉元 経済団体がまとまった段階では、もうそれで行こうと。二〇〇一年、ちょっと早すぎるんじゃないかということで、二〇〇五年。だから、経済団体が二〇〇五年という形でまとまって県に出してきた。県議会に参考人として呼ばれたときもやりますと。それを踏まえて県議会もまとまったんです。ですから、それが理由じゃないですね。むしろ――。

佐道 時期だけを問題にしていたということですか。タイミングの問題、実施の？

■与党・共産党の思惑

吉元 いやいや、農協団体、漁協団体の問題ね。つまり、弱者を切り捨てにならないかという話で。これは、最後まで全県フリー・ゾーンにこだわったのは共産党さんです。

伊藤 こだわったというのは？

吉元 ノーです。

伊藤 ノーですか。

吉元 そういう意味では、結果としては強烈に反対はしなかったけれども、議論としては最後まで彼らはこだわりました。それともうひとつ、先ほど言った那覇軍港の移設との関係で、軍港は造らん、民港だと。バースは使わず、港湾管理関係者の判断であればということ、事実上の吉元はゴアのサインだと見て、これが大きな理由ですね。全県フリー・ゾーンも理由にくっ付けたかどうか知らないけれど。ただ、十二月議会に向けて、知事が共産党県委員会、事務所に行つて議論したときに、彼らが言ったのは那覇軍港問題だけだったんです。それだけが理由だったんです。その後、マスコミにもそう書かれていたんです。

伊藤 だけど、数からいえば自民党が。

吉元 もちろん、全部が賛成すれば共産党六名がいなくなっても、反対しても、そりゃ問題無いけれど。そこが先ほど言ったようにまさに自民党としては、大田県政をつぶすにはここで吉元をつぶしておくこと。

伊藤 それは吉元をつぶすという点でいうと、逆にいえばそういう数を見ればすぐわかるわけですから、共産党はつぶそうという？

吉元 共産党は吉元がいなくなっても、代わりを大田知事が出してくればいいという話でね。一期目に女性副知事を大田さんが出してきたときがあるんです。これは、私がまだ県庁に入る直前

でしたが、事前に大田から言われていた。僕は見たことない、聞いたことのない名前だから、誰だろうと思った。琉球大学の仲間の奥さんで、歯医者さんだという。それでいきたいというから、まあそれはそれでいいでしょうと。あとは、与党調整しながら、議会に出すんだけど、出したら与党が反対しました。それは、信任されないということが一回あって、最初の、大田さんが当選のとき。そのときの十二月議会で大変問題になりましたね。

伊藤 与党は賛成しなかったんですか。

吉元 共産党は賛成したんです。そこで社会党と社大党が猛烈に反発した。公明党さんも反発して。与党の大部分が反対して、結局は同意出来ない。

佐道 大田さんは、つまり共産党の方とは結構近かったという？

吉元 違いますね。

佐道 そうではなかったんですか。

吉元 共産党と比べると公明のほうが。どちらかというところ、学会の平和運動のアドバイザーとか講師に相当呼ばれていますので、そういうのを通じて学会とは近いし。公明党と大田さんとの関係は必ずしも遠くはない。だけど、先ほど言ったように公明沖繩が少し大田さんとの距離を持ち始めたのは、やはり東京との関係ですよね。橋本政権が終わり、次のステップに行く過程。自公路線が事実上、だけど連立じゃなかった、まだ自由党との間が。だけど、それを事実上もうそういう関係に、自民党の間は。ところが大田さんの三期目の選挙の一九九八年はもう明らかでしたからね。だから、結果として大田さんの三期目の選挙というのは、公明党沖繩県委員会は大田さんの選挙運動に顔を出して演説はするけれど、実働部隊は向こうということをやっっちゃったんです。

伊藤 僕、よく考えてわからないのは共産党が、これは吉元さんを自分たちがつぶすことになるわけですよ。

吉元 そうですね、だから――。

伊藤 そのことでどういうメリットがあるということなんですか。

吉元 それは、私がつまり大田の後継ぎになることを、相当必要以上に警戒したということじゃないですかね。

伊藤 それよりは、まだ保守のほうがましだと、こういうことですかね。

吉元 いや、それは違って、吉元は駄目だよということ。

佐道 吉元先生をターゲットにしていたということですか。

吉元 そう言われていた。

伊藤 でも、自民党の側からいえば、吉元さんからしてその勢いで大田さんもつぶすと。

吉元 だから、一九九八年選挙が結果的に危ない危ないといわれながら、選挙で大田さんが負けた後は、やはり吉元をつぶしたところが正しかったなと自民党は言うし。大田さんの支持政党であるという話になるし。共産党にしてみるならば、それは別だと言いながら、今度、知事選の議論が始まって、どうするかというのは、最初からずっと今日までこれからも続く政党間の話し合いの中で、吉元の話は最初から共産党はもうノーということですから。

伊藤 そこは何と言われてもよくわからないんですよ。

吉元 いや、それは私にはわかりやすいんですよ。一九六〇年からの闘いですからね。労働運動の現場でもそうだったしね。当時の沖繩人民党と共産党の労働運動に対する介入に対して、ものすごく私は反発して拒否したほうですからね。徹底的に。原水禁運動にも真っ向から対立したし、復帰運動の中でも私は若いときに事務局長をやったんだけど、そのときにも強烈な反対がありましたからね。その後、労働運動の中では文字通り、沖繩官公労、つまり琉球政府の労働組合の中では、役員選挙で私に対する不信任

は、いちばん人民党サイドが多かった。それは、一連の流れの中
ではどうしてもあの政党に妥協出来ないところが、やはり問題に
なったんでしょうね。それは復帰後もつながっているんです。

伊藤 副知事就任のときは？

吉元 私が政策調整監として、入ったときは一般職としての人事
だから、文句を言わなかったようですが。副知事をやるときは知
事には、やはりひと言あった。

伊藤 反対はしなかった？

吉元 結果としてはね。議会では反対しませんでした。

佐道 表立ってはどういうことですか。

吉元 表立ってね。

佐道 しかし、先生が入らないと二進も三進もいかない状況にな
っていたわけですね。大田さんとしては。

吉元 結果的にそうなんでしょうね。最初に大田さんが当選した
直後に県三役人事、とりわけ副知事人事の相談があった。一人は
女性にしたほうがいい。次に、私の名前をあげながらも、大田さ
んから出てきたのは、国とのパイプになる奴が欲しいと。その後、
仲井間さんの名を出した。仲井間さんを大田さんに会わせたいの
は私だ。だけど、仲井間さんと最初からトラブって、基地問題など
を巡ってね、やはり違う。代理署名の問題から真つ先ぶつかって。
それで、大田さんは二年後に替えたいと言って、仲井間さんに通
告したときに、「知事がそうであればそれでいいです。だが、し
ばらく残してくれ」と。植樹祭で天皇が来るので、それまではや
りたい、とのことであった。

伊藤 どうしてもそこまでやりたいと？

吉元 やりたいという本人の希望を入れてね。四月の末の植樹祭
を終わらせ、六月いっぱいまで。その段階で私は、彼の後任とい
う形で知事から言われた。

伊藤 いちばん最初に大田さんが吉元さんを考えたとき、最初に

なったとき、考えていたにも関わらず……

吉元 大田さんの説得では、一回断られてね。そして、二度目は
もう逃げられんぞと言って、四年間待った。そして、もうそろそ
ろ来年選挙ですよ。再び行って説得した。うーんとか言ってい
たけれど。出るまでの条件整備、退職金の問題から一切合切、年
金への影響の問題、全部処理する仕組みをつくった。条件整備し
て政党や労働団体などの根回しを含めて、全部事前に了解を取っ
た。政策協定までつくりました。ですから、そういう意味では
(私が) いないと仕事が出来ないという感じは持っておったんじ
やないですかね。だけど、それはそれとしても、別に三役でなく
ても、県庁に入ってもらえばサポート出来るわけですからね。

佐道 まあそれはそうでしょうけれど、最初から表に出るのはま
ずいということですか。

吉元 いや、そういう意味ではなかったですね。国とのパイプと
いうのが原則で。それに相応しい人を選ぶことだから、私
も推薦して仲井間さんになつてもらったということです。

佐道 その仲井間さんの後に先生が副知事になれるわけです
が、このときは、共産党は裏では大田さんに問題だということは
言っていたけれども、表立って反対はしなかった、出来なかった
ということですか。

吉元 そういうことですよ。議会では政策調整監ですから、知
事のすぐ後ろに座るんですが、反対はなかったですね。

佐道 それが、この段階になると、ほかのいろんなこともやはり、
積もり積もってきたということなんですかね。

伊藤 この間に別に積もり積もるほどのことじゃないんじゃない
い？

吉元 それほど問題は無かったと思うんだけど。ただ、やはり基
地問題に関する、共産党という政党の性格、綱領に絡む問題で
すから。やはり、かなり原則に戻るんですね、そういう話は。県

知事、首長というのは、たとえ特定の政党から出たとしても、たとえば共産党から出たとしても、首長になったときには市民の半分は保守で、半分は革新ですよ。もっと厳密にいったら、三割が保守で三割が革新で、それで後残った四割が浮動票と。昔の言葉でいったら無所属みたいなね。こういう構造を頭に置きながら、施策、政策を展開して、行政を執行していくという場合、どこを選択するかによつて、彼らは変わってくるんですよ。県政の仕事、特に基地問題、あるいは経済政策二十一世紀のビジョンとなると、これは政党の間尺では今まで描かれていないことですよ。たとえば、ちよつと極端な言い方だが、二十年後の日本のあり方を描いて、具体的な政策、立案をせよといったって、国だって無理でしょう。それは自治体だつてね。しかし、やらざるを得ない。それは何かといたら、基地があるからそれをやらざるをえなかったんですよ。だから、基地反対のためのものじゃなくて、県民が理解し、納得し、それで一緒に歩けるようなものをつくらなくては、必ずしも政党次元からイエスと言えない部分が出てくる。そのところで、それが重なっていく、進んでいくと。しかも知事のイニシアチブで進んでいるような形になっていくと、次、誰が

やるのと。この仕事。それは当然見ますよね。そこに対するね。伊藤　そこまではわかるんですけどね。だけど、保守に取られるよりはマシだど？

吉元　そういう運動体質を持ってないですよ。自分たちの意見が通らなければ無いほうがいいと。保守に取られても、次また取ればいいという話で。それはもう各県の首長選挙でも。だから、最近になって共産党の市長がつぶれていくところがいくつか出ておるんですよ。従来と違う政治構造もある。社会党、共産党、公明党という枠組みの違う、民主党、自由党というのが出てきておるでしょう。だから、政党の組み合わせも違って、市民の政治的関心も違ってきた。だから、硬直しているだけにつぶれていくのは必然ですよ。だから、政党とか何とかって支持されない形の首長選挙がたくさん出てきた。沖繩は、そういう意味では少しまだ古いというのかな。原則的領域からは抜けていない。政党が集まって次の候補者を誰にするかという、そこで。決まるまでみんな黙ってみておる。まだその域を脱しない。それが、沖繩的政治の仕組みなんですよ。ね。

伊藤　ちよつど時間ですので。

(終了)

吉元政矩 オーラルヒストリー

第6回

日 時：2002年8月1日（木）
開始時刻：14時05分
終了時刻：18時05分
開催場所：那覇市・沖縄21戦略フォーラム事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

■ 県内革新政党的の相関図

伊藤 きのおのお話の中で共産党の話が出ましたけれども、共産党の中で吉元さんに同情的な部分というのは全然ないのですか。

吉元 比較的インテリゲンチヤというのですか、学者、文化人サイドとはそれほど仲が悪くないのですよね。しかし、あの政党は白黒レッテルを貼ればもう変わらんですから。

伊藤 でも、六〇年代以来の因縁だとおっしゃいましたけれども、やはりその六〇年代ころに戦った相手はまだ現在でも向こうのリーダーなのですか。

吉元 もうリーダーはほとんどいないです。

伊藤 いないでしょう。

吉元 いないですけれども、過去のそういう積み重ねというのは消えない組織です。

伊藤 そうですか、継承されていますか。

吉元 消えないどころか、それを学習することによって、当時同じ若者で向こうのリーダーになったって、僕らみたいにこのクラスまで来ると、やはり自分たちの勢力拡大からいうと邪魔な対象ですから。革新という枠組みの中では共通に走るけれども、それはローカル政党がかすがいとして中に入って大きくまとめているうちの話であって、そのローカル政党のそういう役割が薄くなったり、あるいはそういう役割を持たない領域になると、ナマで社共がぶつかってくる。これが復帰後の三十年です。

伊藤 社民と共産もだめなのですか。

吉元 比較的よくないです。県議会では圧倒的に社民が革新野党の第一党、次は社会大衆党、それに共産党。こうなるのだけれども、なぜか知事選の候補者擁立のための政党間の話し合いの呼びかけは社会大衆党がやる。共産党が動くより、社民党が動くより、社大党が呼びかけて座長になったほうが、というふうな形で一種

の緩衝地帯の役割。

佐道 つなぎ目になつていてという。

伊藤 吉元先生がいちばん担いでいるのは今は民主党なのですか。

吉元 いや、民主党という組織は、沖縄にはまだ県会議員を一人も出してないし、ほとんどない。労働組合は系列化されて、全通とかNIT労働とかいろいろなところは、基地労働者の全駐労も民主党支持労働組合のだけれども、組織上はそうだし運動方針上はそうだけれども、沖縄はそうじゃない。民主党にはなかなか行かないし、転ばない。

伊藤 社民党に行くわけですか。

吉元 まあ、ほとんど。

佐道 どうして民主党にはそんなに限界があるのでしょうか。

吉元 中途半端だというのが一つあります。極端にいうと、社会大衆党、ローカル政党でさえ反安保、反基地なのに、どうして民主党が安保を容認し、もちろんそうであつたら基地を容認するし、しかも改憲の動きでその方向に走るのか。大体、改憲の部分が県民的な体質の中からは、「おかしい。あの政党はけしからん」と、こうなるのです。安保問題というのはそれなりに緩やかな意識が出始めているけれども、憲法問題になるとちよつと許さないという感じですよ。

佐道 沖縄の中では憲法問題はそれだけ重い。

吉元 重いです。それは戦後の憲法五十年余りの歴史の中で、私たちは三十年しか憲法適用されていません。まだ血肉につながらないでしょう。憲法適用外の二十七年間のそっくり同じ構図で米軍基地がそのまま来ているでしょう。事件、事故はそのまま。つまり、安保も地位協定も憲法も一緒に適用された。「こんな安保や地位協定はおかしい。憲法違反だ」と我々が言っているのは、ただ単に憲法との厳密な問題というよりも、憲法が適用して

いない前からのものがそっくり持ち込まれて、なんで今適用されているのか。俺たちの基本的人権さえ……と、こうなる。これがそんじょそこらでは消えないです。

伊藤 そうですか。それが、社民党はほかの地域でほとんど消滅に近い状態なのに。

吉元 沖繩だけは旧社会党が残った社民党。つまり、衣は変わったけれども中身は社会党という形です。現に社民党の沖繩県連合は今でも、委員長、書記長、副委員長という職名なのです。ほかのところはもう、幹事長、代表という職名になってはいるけれども、やはりまだ県民的な呼び名がそっくりその組織の名前として、その支部規約も改正しないでそのまま。

伊藤 吉元先生はやはり社民党の系列だというふうに。

吉元 それは根っこにあります。復帰直前の第一回の国政選挙に上原康助さんを出すときに当時の社会党は、「党員が少ない。三百名党員をつくってこない」と公認しない」といつて、「ばかか」といったんだけど、この際一人出したほうがいいということで上原康助さんを出すためにそろって党員になったといういきさつがあつて。

伊藤 それが今でもずっと続いているわけですか。

吉元 続いています。抜ける必要もないし。しかし、一時期、復帰後はそういう意味で政党の党員であつた者については首長選挙の候補者としては認めないというのが復帰後の日本共産党の沖繩県委員会の方針だつた。だから、ずいぶんいい人材が首長選挙では候補者になり得ない。

伊藤 そのために離脱してもだめなのですか。

吉元 「党員であつた者」になるので。

佐道 過去でもだめだということになるのですか。

吉元 それを例外的に認めるべきではないのかという動きが出てきて、一時期、浦添市長選の統一候補に、社会党、社民党であつ

た県会議員が出た。そういう意味では一つひとつそういう芽は出始めてはいるけれども。やはり、今回でも、例えば去年の参議院議員選挙のときに照屋寛徳さんを社民党系ということで二期目挑戦させたのだけど、共産党は対立候補を出して、自民党と三名で争つて、二人の得票では勝っているが、結局自民党が漁夫の利を得た。だから有識者から共産党批判が出て、「こんなことをしてはたのでもないならんではないか。那覇市長も負けだろう。浦添も負けだろう。四年前の知事選挙もそうだっただろう」というような形で、この際、今回の十一月の選挙についてはそういうことにこだわらずに一本化、政党が譲つて市民が支持できるように、しかも保守に食い込めるような候補者を選ぼうじゃないかということでは話が始まっているけれども、名前が出ると、ポンポン、ポンポン。この政党が、あれは嫌だと、ここへ出すと、これも嫌だ。それで結局、六、七名の名前が出て全部つぶされて、まだ決まらんという状態が今続いています。

伊藤 でも、本当はもう今ごろ決まっていたら大分強いわけですよ。

吉元 そうですね。構造的にいうと、公明党が保守と組んだ。沖繩は四年前の知事選ですから、ここから出発です。従来は、私たちと復帰運動も一緒、平和運動も一緒、基地反対県民大会を開くときも一緒、そこがパタッと向こうへ行つた。その分が足し算引き算です。単純な算術計算ですね。何万票か動いたわけだから。

伊藤 やはり中央の枠組みとそのまま。

吉元 それが橋本（龍太郎）さんの最終段階から始まって、小渊（恵三）さんになつた段階でガラッと変わってくる。だから九八年。そして九八年の知事選では、公明党さんが大田支持。与党だつたから大田のところで演説会なんか顔を出すけれども、中身は全部……で、選挙で大田が敗れ稲嶺さんが出ると、与党ということを利用して。今はその構図で市町村首長選挙をやっている。

それでも、宮古と八重山、石垣市と平良市、これはまあいいです。妙ないい方だけど、公明党は向こうに走ったのだけど、公明党は関係なく我がほうが勝ってしまった。向こうは乱立で負けちゃった。

佐道 公明党も沖縄全体の中では地域差がかなり大きいという。

吉元 ありますね。私の出身地の八重山はひっくり返っても保守と一緒にならんのです。そういう体質、地域性。

伊藤 地域性があるのですね。

吉元 それはどちらかというと公明党の組織というよりは創価学会の青年部とか婦人部とか、いわゆる創価学会のその地区の責任者とかいうふうな人々の生き方の関係です。

■大田県政の総括

伊藤 九七年に再任を拒否されて大田さんはつかえ棒を失って、翌年選挙があつて負けると。その翌年負ける選挙には先生ほどの程度かかわりになつたわけですか。

吉元 文字どおり選対には私はかかわっていないけど、むしろ後輩を選対の責任者にぶち込んでアドバイスしながら、大きな枠組み等については大田さんの相談を受けたり、あるいは当時の県の三役が飛び込んできたりという形で、地方自治研究センターに私がおるころ、そこに頻繁に相談に来ていました。私はいちばん表の仕事ではなくて、情勢分析とか一種の市民の動向調査とか、そういうのでアドバイスしたり、その結果、分析をふまえて、この地域にはどういう手を打とうというふうなアドバイスをしたりしたのです。

伊藤 そのときの予測ではやはり勝てるという。

吉元 私は最初から、九八年大田が出馬表明した六月の段階から、もうそれは無理だということを強く意識していました。

伊藤 それは何ですか。

吉元 結局、沖縄県民の体質です。振り子が振れるのと同じように徹底的に、我慢に我慢を重ねながら食うためにはだれを首長にしたほうが、いちばん国との関係、財政、公共事業との関係で食いつなげるかという、ある種、明治以来の沖縄県民の体質みたいなものがありますから。飯を食わせているやつが主人だ（物呉ゆどう我御主）という沖縄のことわざもありますけれども。それはいちばん我々の先輩方が批判をし、克服すべきことだと言ってきたにもかかわらず。でも、土壇場まで追い詰められ、追い詰められ、何か起こるとバーンとバネが吹き飛ぶんです。それで五年のまさに少女暴行事件みたいなのがあつて。

もつというのと、八九年、九〇年の冷戦崩壊で一つの振り子が左に戻つたというのかな。むしろ私は中間に戻つたといっているのですが。それで西銘（順治）さんを圧倒的に、これだけすばらしい政治家をつぶしたわけだから。それで当選し、いろいろ問題はあつたけれども、大田が苦吟するなかで九五年の二十一世紀のビジョンを出しながら、そして大田が腹をくくって、「代理署名を拒否する。署名しない」というところで決意する。それは不動な決意を応援した。そのかわり裁判受けるぞ。いいよ、最高裁までやるぞということも固めた。まだこれをしないうちに少女暴行事件が起こつた。これを発表する。県民大会と、一連の流れですよね。ですから、ああいう事件があつたからバーンと準備もなしに出したのではなくて、準備されてきたやつがあつた節目で加速した。県民も、もう我慢できないと、基地問題、事件、事故、凶悪犯罪に対する反発が全部一つに重なつちやつたのです。だから、保守・革新の県会議員の全員、全会派が一緒になって県民大会をやる実行委員会に入ってくる。右左問わず、すべての団体が結集する。あの県民大会はつくられていくのです。しかし、まさか本場に沖縄県民がそこまで開き直るといふか、立ち上がるといふことを日米政府が夢にも思っていないかつた節がある。

日本の場合は、細川政権がつぶれてその後の「自・社・さ」の連立ですから、ある意味では政治的パワーからするとごちゃごちゃになって、どうするかという話でしょう。対応しきれないといふときでしょう。アメリカだって決してクリントンのあの時代は政治的に安定した状況ではないですからね。ですからまあ、そういう意味では日米政府が事前に対応しきれなかった。事前にきめ細かに沖繩を分析する、情報をとらえる、組み立ててみるという、僕はそこはある種手抜きだったという気がする。そういう中でポイントと出たものだから。それはアメリカの東アジア戦略との関係もあります。朝鮮半島から始まって、なかなかうまく、どうもつていくかきちんとしなかったでしょう。そういう意味では九五年というのは、県民の爆発もあつたけれども、日米政府も冷戦崩壊後の一時期、どう対応したらいいのかというアメリカ側の東アジア戦略との関係を含めて少し落ち込んで、戦略をつくり直す、そういう間に沖繩が突出した、噴出した。そこなんでしょうね。

伊藤 その後、九六年、九七年と大田県政が続いて、これで非常に安定したと。

吉元 そういう見方をしておつたのだが、結果的には名護市民投票の結果をふまえて、受け入れを実質的に了解していた名護市長が、結果として市民投票ではノーという結論が出て、市長は政治責任を感じて、海上基地を受け入れますという市民投票とまったく違う結論を出して辞める。それからが大田知事の出方をどうするかと。大田はノーといったから、それじゃあもうこれはつぶさんといかんぞということで日米政府が沖繩のいろんな分野に手を入れて、そして反大田の体制をつくっていくのが九八年の二月、三月ごろからの急速な流れです。

伊藤 それはよく見えていましたか。

吉元 私は見えていました。私自身が官邸とのつながりを日常化していただけにね。ですから、九七年の市民投票の結果をふまえ

て、この処理を誤ると、つまり名護市長と大田知事が別々の行動をとると、せっかく沖繩がここまで持ち込んできて中長期的に、アクションプログラムも含めて、道筋をつくつたにもかかわらず、日米政府と真つ向からぶつかっていくよと。それは沖繩県だけで日本政府がオーケーしてアメリカ政府に要求するはずはないので、押し合いへし合いが始まつておつたわけだから、どこで本当の勝負をするかというのはまだつくつていないわけです。そういう意味では、名護市民投票の結果は、市長が結果的にはイエス、大田がノー、市民投票はノーという結論ですから。

佐道 そのところなのですけれども、市民投票でノーが出ますね。九七年の十二月です。比嘉（鉄也）市長が十二月二十四日に橋本さんと会つて受け入れ表明をして、辞任をされる。大田さんが海上基地反対を表明されるのが翌年の二月六日です。その二日後が名護市長選挙で、岸本（建男）さんが勝たれて容認のほうに行くわけです。まさに二月八日に名護市長選挙があるというのはいちろん当然のことながらわかつていっているわけで、それでその六日というタイミングというのは。

吉元 おそらく、どうなんだろうね。普通、三日前という、選挙では三日戦争というのです。投票日三日前、最後の総行動をやるんです。だからそれにタイミングを合わせて、要するに海上基地にノーといっている玉城義和を押し上げるといふ政治的狙いがあつたと思うべきでしょうね。だから三日前なのでしょう。それはもちろんだ、当時の与党、地元からそういう要求があつたからでしょう。ただ、いつ発表するかという問題は、三日が早かつたか遅かつたか、もっと遅くてもいいんじゃないか、これはいろいろあつたかもしれないけれども、僕はその後橋本さんがマスコミにちよつとしゃべつた言葉を今思い出しているのだけれども、なんか意図的に政治的に利用したといわんばかりの発言をちよつとやつたことがあるのです。この問題をそういう形で使つたといつてす

ごく大きく反発したというのをちよつと覚えているのだけど、まあ、そう見られたでしょう。また、それが勝つための狙いだったのでしょうか。

伊藤 大田知事三選に踏み切る以外に革新系には方法はなかったわけですか。

■再任否決後の吉元氏の去就

吉元 九八年の一月に、実は私の慰労会というのを経済団体の代表が数名で仕組むのです。普通、経済団体会議というのは十名の団体ですから、その十名がいつも集まる場所に集まって。あのときは八名、農協と漁協はいなかったけれども、それ以外は全部。「俺はそんなのは面倒くさいことは嫌だ」といったのだけれども、「いや、自分たちがお礼をするのだから」というから、それを断るわけにはいかんと言って言った。ハーバービューホテルの地下で和食の飯を食って泡盛を飲みながら話していたら、本当の狙いは「頼む」という話だったんです。露骨にそれは明確にいつていました。「吉元さんが三期には出てください。もう大田がないということだったから」と。それは経済団体から言われる前に、だったら大田さんから言われるのが普通という印象を僕は持つてくるから、「この時期にイエス・ノーがいえる時期ではないでしょう。ましてや大田さんは皆さんとも相談しながら、意見を聞きながら、海上へりについても投票の結果をふまえて県民的合意形成をどうしようかとしているのだから、そういう最中にこういう話を出ないでしょう」といったら、「まあ、それはそうだ」といながらワイワイやっていたのだけれども、これが一回目。都合三回あるのです。三月までかかったかな。今さっきの発表は二月六日ですか、二月の中々下旬あたりに二回、三回同じことがあるのです。

大田さんの心情からいえば、県民に対する知事のメッセージは

もう結論を出したわけだから、その問題は一段落したという感じがあるから、当然のこととして、もちろん知事選についてどうするかというのが政治的課題としては……。議会の二月定例会も始まる段階ですから、と思ったのだけど、知事サイドからそういうのはないしね。むしろ二月議会というのは、新しく一月下旬の臨時議会で副知事と出納長の同意を求める。それで新年度の方針に対応するための議会ですからそんな余裕がなかったかしらんが、依然としてそういうのは知事サイドからはなかった。だからまあ、大田さんがそのまま三期目に挑戦していくと、国との関係などを含めて、県内の経済界が支援するか支援しないか、支持するかどうかという問題を含めて、おそらく経済界の皆さんがいちばん苦しんだ時期じゃないかなという気がします。あれ以降私は明確に、「大田さんから頼むと言われたら検討はします。しかし、皆さんから言われて、はい、そうですかというわけにはいきませぬよ。筋が違うだろう」と。

そのうちに社民党の土井（たか子）さんから、総理をおりた村山（富市）さんから東京へ来てくれということになって、なんだといったら、参議院に出てくれということになって、なんだってね。それは既に社民党は大田さんにはアタックしておつたらしくて、吉元さんが出てくると国政の場で沖縄県の問題を切れ目なくバックアップしていけるようなポジションをつくれるのではないかというふうなアドバイスがあったのでしよう。大田さんのほうもそのほうがいいという形で、逆に当時の三役、大田さんではないけれど三役のほうから、「ぜひ出たほうがいい」というアドバイスがあった。

伊藤 社民党のですか。

吉元 県の三役からもね。私もそれで少し心を動かされて、どうしようかなと迷っちゃって。もつと早く一月末あたりに、菅直人さんから頼むということで名簿順位一位と明示されて、これは少

し迷ったんです。確実に一位ですからね。

伊藤 それはもう絶対ですね。

吉元 それで迷っているんな相談をしたのだけれども、身近な連中は、「なんで民主党から出るのか、筋が違うだろう」という話なんだね。「いやいや、それは筋が違うけれども、社民党はこんなしくないよ。ここはこんなにあるよ。やろうと思えば」と。僕は菅さんとも鳩山さんとも、安保の問題とか基地問題とか、特別県制とか、わりと細かい沖縄の二十一世紀像の説明なんかをやってきているから、ある意味では沖縄政策というのをワンパッケージで民主党の中に持ち込めるという利点を感じておったのだが、だれ一人として、「民主党から出ていい」というのは沖縄にはいなかった。結果として二度も菅さんの誘いを断って。その直後にさきほどいった村山さんの話があつて、これを相談したらみんなが、「出る」ということで。民主党から一位ではだめだけれど、社民党だったら順位はわからんけど出ると、バカかと言つたのだけれど、しかし結果として出たのです。

佐道 社民党に対する沖縄のイメージというか、社民党ならある程度の順位でも当選するだろうとか、そういうあれがあるのですか。

吉元 いや、それよりはむしろ県民的理解を得やすい。つまり、民主党は改憲までやる、しかも基地問題も曖昧だろうとか、そういうのが払拭されない時期ですからね。社民党だったら社会党からの流れで、それはもう体質的に全部県民も知っているわけだから、という意味では理解しやすいということだと思えます。

佐道 民主党左派には社会党からの系統の人も入っているということでは説得にならない。

吉元 ならんですね。沖縄的な社会党から言わすと、「あの連中は裏切り者」になる。

佐道 ああ、そうですね。

伊藤 そうか、裏切り者の仲間入りすることになるわけですね。

佐道 裏切り者になるのか、という話になるわけですか。

吉元 いや、それを言われましたよ。組合の若い連中からはそう言われるよといわれてね。そうではないよといつても。ですから、国政レベルで沖縄から一人も民主党から出せない、県議レベルさえ出せないという状況がまだ続いている。それは何かというところ、議員になりたいという人よりは、どの政党から出るのかというのが絶えず県民の目にさらされる、あるいは有権者が選択の基準にする。これは今でも続いています。

伊藤 仮に民主党から出ていたらどういうことになっていたでしょう。

吉元 去年、総選挙のときに鳩山（由紀夫）さんから口説かれたのです。頼むと。これはまた厳しかったですよ。「一回菅さんのことは断られましたよね。今度私からのことを断らんでしょね」とまでいわれたよね。一回呼ばれて、鳩山さんと三時間ほどワインを飲みながら徹底して話し合つたんです。そう大きな乖離はなかった。本質的な部分で曖昧さを残しながらも、「今の民主党という政党のこの枠組みしかできません。それ以上のことは、沖縄県が懸念しているようなことは変えられません。例えば九条の改正まで、そんなところまで民主党はいけませんよ」という限界を整理していた。そういう意味では、現実的にこの政党の力量からしてどこまで政策の枠をつくっていくかというのはある種明確に把握して説明を淡々とおつたので、あ、なるほどなと思つた。ただまあ、それが一つあつて、それを持ち帰ってきてみんなに相談したけれど、「またか」と言われてね。だから結局、衆議院選挙の問題もだめになった。

佐道 今でもやはりだめなわけですか。

吉元 去年の参議院選挙の前に土井さんから、「最後のお願いだ。一月に説得に来る」というから、「いや、来るな。来ても俺は断

るよ。それは話がややこしくなるから、俺が行く」と、一月下旬に上京して土井さんの部屋に行つて。「出てくれ」というから、「あなたに口説かれて前も出て、僕も嫌な仕事をして頭を下げ選挙をやってきたのだけど、今度また出て行つて、今度は何位にするつもりか」と言つたんだ。結局は、それは保証の限りではない。前は順位を決めたけれど、今度は得票率でしょう。私は、「もう、あれは終わりましたから」と断つた。その後土井さんは大田さんを説得に入つて、大田さんが出たわけです。大田さんにも民主党から働きかけがあつた。聞くところによると、大田さんは民主党から出るという感じの返事をした記事があつて、すごく問題になりました。選対をやっている熊谷（弘）さんとの話しでそうなつたという話がバーツと出て、「何をー」ということでみんなが怒つたいきさつがありましたけれども、結果として土井さんとの話で社民党からという形で出た。ですから、衆参、国政という場では魅力がないですね。むしろ、生きている自分の島に何貢献できるか、役割を果たせるかというのが基本のような気がするのです。

伊藤 つまり、議員さんになればワン・オブ・ゼムですよ。

佐道 参議院のうちの一、衆議院何分の一、まあまあ、そういうところですね。

伊藤 一遍首長に近い地位でいろいろおやりになつたら、とてもじゃないけれどもまだるっこくてやつていられないという感じだろうと思うのですが。

吉元 そうですね。最近例の五名の知事が動き出していますね。あれなんかを見ると、僕らを取り組んだ五年前の話ですよ。この五年間は空白になっています。だから、県政のトップに近いところでも、「なぜ今まで進んでやってきたことをつぶしているのか。遅くないから手を挙げる。発表しなさい」という。今の県政は、国の納得、理解をもらう枠組みの中でしか動いていないふしがあるものだから。

伊藤 こちらから枠組みをつくつて。

吉元 そう、それがいいような感じがするね。

■ 九八年県知事選の背景

佐道 実はその問題と関連あることをお聞きしたいのですけれども、九八年の例の知事の海上基地移設反対と名護市長選挙とあつて、先生のところに県の経済団体が知事選の出馬の問題を言ってくるまさにその時期なのですが、三月三十一日に沖縄振興開発特別措置法が一部分改正されて、特別自由貿易地域の創設という、これは従来要求されていたことですね。五全総の二十一世紀の国土のグランドデザインが閣議決定をされて、この中に首都の問題と並んで沖縄の振興が組み込まれていくということです。これは従来求められていた方向にあるわけですね。ただ、これを形にしていくというか、沖縄が訴えてこられたものそのままにいくかどうかとなると、実はこれから大きな問題になっていくということだったと思うのですが。

吉元 特別自貿というのは、もし私がおつたとすればそういう表現でさせなかつた。もうちよつと大きかつたと思う。つまり、規制緩和の検討委員会、沖縄政策協議会の了解のもとに走らせて、そしてあの経済政策をつくつた。その中には、全県自貿を前提にして、どうそれに近づけていくかという話が組み立てられた。三つあつて、一つは自貿の問題です。もう一つは情報通信特区の問題、もう一つは国際観光リゾート問題。それのうちの自貿の問題です。これは、まさに特別自貿も、今ある自由貿易よりは内容的には強化され、場的にも大きくなる、場所も違うけれども、しかしそれも中身は同じ、ほとんど変わっていないんです。新しくつくる場所の埋め立てがすんで、ここにつくるよという場所を決めたから、もうエリアを区切って、そこにやるのには今と同じのをやったらまた問題になるから少し中身を濃くしようという形で

きただけの話。その話ではあまり意味ないよというのがこの規制緩和の田中（直毅）委員会の議論の結果なんです。だから、「私がおもったとすれば」という表現をするけれども、私はこの沖縄政策協議会でそういう中途半端なことをさせなかった。

佐道 九七年の八月の段階で県案として出されたのが全県自由貿易地域であり、マルチメディア・アイランドの構想であり、観光リゾート基地の形成だということですよ。

吉元 それは沖縄政策協議会にも出してあるわけですよ。

佐道 出してあるわけですよ。それがここでは、全県自由貿易地域がまず特別自由貿易地域になった。マルチメディア・アイランド構想とかそういうのが、「沖縄の振興」という形で大きく、ちよつと曖昧な形でいろいろなるようになってきた。これは変わったなという。

吉元 いやもう、変わったなどころではなくて、確実に大田は無視されたなと思いました。大田県政でやっていた仕事を全部つぶされて、より積極的というよりは無視して、元のそのままでおくわけにはいかんから、やはり沖縄からこれだけ出されて総理が取り上げたブランドデザイン、しかも沖縄政策協議会で、そこで何かしなきゃいかんというならば、一歩進めたという程度の話であつて。「こゝまでは認めるよ。しかしこれ以上はこの県政とは付き合はんよ」というような、まさにこれはサインだとかは思わなかった。あ、これはうまくないな。本当に僕たちが狙ったのは沖縄振興法の改正ではなかったのです。もつと抜本的なものです。極端にいうと、全県自貿の話だったら今度の法改正、沖縄振興開発特別措置法の全面改正に向けて、それまでにどういう形でないでいくか。

佐道 ポスト三次振計の、ということですね。

吉元 まったくその通りです。この途中から急遽こういふのを一部法改正ということを出してきたというのは、要求されている

から何か沖縄のためにやらんといかん。しかし中身は別よ、といふふうな意味でしか私受け止めなかった。

伊藤 あとは要するに、大田さんの路線はもうだめよと。

吉元 そういうサインとして見るべきだったのでしょうね。だから、少なくとも今度の知事選が焦点ですよという明らかなサインでしょう。

佐道 その流れの中で、その先の経済団体などの、二月三月ということですから、先生の出馬というのはいやほやほやという問題も、このままの流れでいいのかもしれないことがあったのでしょうか。

吉元 おそらく、論理的に整理するならば、「大田は終わりだよ。経済界の皆さん、次はだれが出てくるのですか」「いやいや、この仕事を実質的にやっている吉元がおるじゃないのか」と。それで経済界が動き出したというふうなのが流れとしては読みやすいかもしれない。で、私が断った。じゃあどうするか。三月、四月、四月に入ると私の名前が下旬からは社民党のあれに出ちゃう。当時、東京サイド、自民党サイドから、これは野中さんという話だけど、本当かどうかわかりません。新聞にはそう出ていたのだが、上原康助さんを口説いて知事に出すと。

伊藤 上原さんを。

吉元 上原さんが急遽知事の候補、本人もその方向でという表現がマスコミにバーンと載るのです。「え、どうして？ 上原が大田をつぶすんか」という話があつた。

佐道 保守の候補としてですよ。

吉元 上原さんは民主党に入るかどうかの瀬戸際だったから。

伊藤 そうですか。

吉元 結局、上原康助さんの話が表に出て、そして労働組合連合沖縄の中でも民主党としてという話が出てきて、「エッ」といふうにみんながびっくり。そのうちに上原康助さんが社民党を脱党して民主党に鞍替えした。しかし、その直後に今度は自民党サ

イドから上原さんのはしごをはずした。これは民主党に入党したからはずしたのかどうかはわかりません。筋を通すと、橋本時代はまだ自・社・さきがけの連立ですから上原康助さんを担ぐというのは橋本政権としてもおかしくはない。三党連立政権で一緒だから。だけど、民主党に入っちゃうと話が違ってくるということでしょうね。これはちよつと僕の時系列的な誤解かしらんけど、民主党に上原さんが入ったために自民党が上原康助のはしごをはずしたのか、そこはちよつとわからんけれども、いずれにしてもその辺の動きは。

伊藤 それは新聞で見れば大体わかりますね。

吉元 その後、上原康助さんの話が急にしぼんでいって、本人ももう出ないといった。それで今度は大田の話が、初めてそこで大田の意思が前に出てくる。だから六月じゃないですかね。

佐道 そうですね、出馬表明は。

伊藤 その間にまだずつと時間がありますから、変な話ですけれども禪譲というような動きはなかったのですか。

吉元 いや、そのときはもう私は社民党の指示で参議院選挙の選挙運動で北海道から鹿児島まで走り回っていますから、もうその余裕はないです。もちろん告示されていないから法的にはまだ候補者ではないけれども。だけど、最初に「大田さんありき」がもう始まっていますからね。逆に言えば、それが明らかにわかったからこそ決断をしやすかったんじゃないかという気がするのだけれども。

佐道 大田さんは三期目で出るという気持ちは内々的には伝わっていたわけですか。

吉元 なかったんです。私は参議院議員の社民党に考えましようといつて四月の下旬あたりにゴアのサインを与えたときまでは、大田さんはまだ表明されていないし、大田さんサイドもはっきり大田が三選挑戦という表現はだれもしていなかったし。しかし、も

つと身近なところではあったかもしれないけれども、私は知らなかった。

伊藤 大田さんは、参議院選挙の問題についてはどうぞおやりくださいなのですか。

吉元 むしろ積極的に選挙応援演説なんかも走り回ったからね、県内は。

伊藤 でも、その前は大田さんは二期しかやらないと名言していたわけですから、自分の後を誰に託すかということは何かお考えがあったのでしょうか。

吉元 そこは本当にわからんです。県庁内部で知事の身近におつた職員の中では、二月の「海上基地ノー」、受け入れるわけにはいかなと言ったとき、そこで一つ区切りをつけて、自分が三期目にとつて決意をする節目になったのではないかとということが、ささやかれていたが。しかし、これもそれぞれの感じですから、職員の受けとり方の問題ですから。

佐道 海上基地反対表明を明らかにするということが一つのきっかけというふうな。

吉元 そのことによって、自分で三期目を戦って、三期に……結局は、自民党に渡すと、保守に渡すとこれは復活されるぞという危機感じゃないのかなという感じはするのだけれども。常識的にいくとそういう感覚になりますよ。せつかくここまでやったのに、という。

佐道 さきほどの経済団体連合会ですね。農業団体と漁業団体を除く代表が。

吉元 数名でしたな。六、七名かな。

佐道 先生のところに出馬の打診をされてきたということですが、

吉元 それが正式な打診……、まあ、ああいう場ですからね。しかし、口を揃えていうというのはある種打診でしょう。

佐道 それはつまり、これまでやってきた県が政策協議会にかけてきた全県フリー・ゾーンの問題を中心にした国際都市形成構想も、やはりここまで来た以上これをもっときちんと推進させることが重要だという認識で経済団体の代表がまとまっていたと。

吉元 そう見るのが普通かもしれませんね。でも、もっと積極的に言うならば、政治的に読むならば、官邸サイドというのか東京サイドというのか、そういうところから、結果的には吉元が継承していったほうが、というふうなアクションが当然出たから経済団体の彼らが動き出したと見るのが普通でしょうね。過去のこの種の問題で経済団体の親分衆の出方を見てみると、自主的に何かをするということは沖縄では一〇〇%ないです。東京から何かがぶち込まれてきて、それで三々五々集まって打ち合わせしながら、強力なてこ入れを中央からされながら動き出すというのが沖縄の経済界のパターンです。それから見ると今回の場合も、彼らが自主的に集まって、大田知事がおるにもかかわらず、「次はお前だよ、頼むな」という、そんな勇気のある連中ではないよね。

■県民的なリーダー

佐道 沖縄の場合には、例えば経営者協議会とか沖縄経済団体連合会、商工会、いろいろございますね。その長という名前がついているだけではなくて、そういう名前ではないのだけでも隠然と力を持つておられる方、四天王とかいろいろいらっしやいますよね。やはりそういう人たちのほうが力はあるのでしょうか。

吉元 そうですよ。どちらかというと沖縄の政党というのは、特に保守の場合は西銘順治さんが亡くなった後は県民的なリーダーの役割を担う者はいませんか。

伊藤 玉がないということですか。

吉元 玉がいません。強いていえば、古いという、回数は重ねておる仲村さんがおるけれども。

佐道 仲村正治さんですか。

吉元 でも、あの人は沖縄ではまったく存在感がない人ですから。

佐道 いや、国政でもそうですけれども（笑）。

吉元 あとは二回生だけど、マスコミを賑わしたりあちこち飛び回っているのは（下地）幹郎さんでしょう。確かに光っているよ、声もでかいし。でも、県民との間で彼が保守のリーダーだという認識はだれも持っていない。

佐道 それは西銘さんが後継者を育てなかったということなんですか。

吉元 そういうことが一つあります。

伊藤 後継者を育てるといのは難しいことですよ。

吉元 自分の限界を悟りきれない。最も人間的な次元を抜け切れないのが沖縄の政治的リーダーとしては多かつたのではないでしょうか。そういう意味では、屋良（朝苗）さんなんていう方はある種すごいと思う。「私はここまでしかできません」と、明確に線を引いて、それで本当に終わる。ちよつと私がかういう形で批判するのも問題かもしませんが、批判という意味ではなくて、引き際が悪かったなと思うのは喜屋武真栄さん。もう終わりだよと言っているにもかかわらず、しかもバックアップ組織である教職員会がずつと担ぐものだから切り替えのチャンスがなくなつてずつと来ちゃった。ですから、屋良さんのいちばんの教え子である喜屋武さんでさえ、そういうところまで走っちゃったでしょう。その後、革新の中ではないリーダーがたくさんおつたけど、共産党の瀬長亀次郎さんなんか病気で倒れたりして、そういう方々はおるけど、やはりいいですね。

佐道 西銘さんは八〇年代の沖縄の保守のトップリーダーですよ。九〇年代に西銘さんがいなくなつてしまつて、国政に一時期出られますけれども、保守はいなかった。では、革新のほうのまとめ役になるようなリーダーというのは、これも例えば政党とい

うことではいらないですね。沖縄の労働運動にしろ、政治活動にしろ、地域運動にしろ、住民運動にしろ、自分のテリトリー、自分の領域の中では一所懸命やる、で終わる。それ以上はやらない。役割が違うという認識があります。これは県民性も一つあるのです。前に出て行って、「俺が」というのは沖縄ではなかなかないのです。

伊藤 ほかの県でも多かれ少なかれそうだと思うのですけれども、この場の要するに殷様になつて終わり。それで、大田さんも自分の限界をわかないと。

吉元 皆さんを前にして言ったら怒られるかもしれないけれども、やはりそういう雰囲気です。せいで引つ張り出しても、学の中で、生徒とのつながりですか。せいぜい引つ張り出しても、こういうものを頼んでしゃべる程度の話で、一方的にしゃべる話です。あとはといたら、学者生活の中で本を読んだり、新聞、そのくらいを見るくらいじゃないかなと思うよ。そうするとやはり範囲が。だから結果的には僕たちが引つ張り出して、この人を説得してみようと組み立てていくでしょう。そういう仕事をやるやつは多いです。

伊藤 結局、修羅場をくぐって伸びてくる。しかもその修羅場が限られた地域ではなくて、沖縄から全国を見て、あるいはもう少し広い地域を見てという、そういうリーダーがなかなか生まれにくい。それはどこだってそうですよ。

吉元 一人、意識的にリーダーとしてつくった。自治労本部の副委員長までいったのです。仲吉良新といいますが、私が官公労時代の書記長、彼は委員長をやった。復帰後も、自治労の委員長、県労協議長をさせながら、そして、近い将来の知事候補というふうにつくっていたのだが、次に国政に出るか知事候補に出るかという悩みのゴタゴタと、既に国政に出ている上原康助さんが社会

党の沖縄の委員長で、つぶしにかかるという状態になって、一度、二度、そのチャンスをつぶされたといういきさつがある。そこで本人が、もう沖縄におつても自分の役割は無いと。復帰直後から吉元か仲吉か本部に来てくれと中央から求められていたから、私はもう沖縄で最後までということ、仲吉のほうはそのときに自治労中央本部の副委員長に行きました。

その後、全国闘争の、平和闘争、反基地闘争などのリーダーにしながら、国政レベルの仕事させながらという育て方をみんなに入れておつたのです。それなりに育っていた。西銘知事が三期目に入るときの選挙で、大田さんを説得したらノーと言われたんです。じゃあ、仲吉さんを連れてきて彼を出そうとした。当時の県労協はオーケーした。教組がオーケーした。労働団体は全部オーケー。政党もオーケーした。最終段階で共産党がノーといってきたのです。それでつぶれるのですね。それ以外に、共産党がノーといった理由も決して思想的な問題ではなくて、プライベートの問題もあつたけど、とにかくつぶれちゃった。

ですから、沖縄のこの種の問題というのは、国政レベルは政党同士でやるからいい。沖縄での首長選挙、知事選まで含めて、政党も反自民でずっとやってきた。復帰前から革新共闘会議というのがありまして、ここで統一候補をつくる。そうしないとどっちみち勝てないよと。保守と全面対決のなかではそれでないとならない。これでずつとやってきましたからね。

伊藤 共産党の力がなければ勝てない。

吉元 やはり三万から五万、四万近く確実に取るのです。そういう意味では公明党と同じくらい取るのです。

佐道 二万票、三万票の差で知事選が勝利になりますものね。

吉元 そうです。

伊藤 キャスティングボードを握っているようなものだな。

吉元 そうなんです。今の自民党さんは公明党の票をとらんと

負けるとはつきりしている。わがほうも共産党が来ないと負けるというのがはつきりしています。

佐道 共産党がイエスといわない候補者はなかなか立てにくいということになるわけですね。

吉元 去年の、照屋寛徳参議員の二期目も共産党が対立候補を出した。自民党一人に公明党がついているから、社民党の照屋寛徳と共産党も出て、両方を足したら軽く上回っているんですよ。

佐道 共闘していれば勝っていたのに。

吉元 そうそう。それで私はこの四年間あちこち全国まわりながら、講演へ呼ばれて必ず地域で言っているのは、「言い古された言葉だけど、政治的統一戦線をもう一回やれ。自由党だから嫌だ」というなど。民主党は当たり前だろう。もう兄弟と思いなさい。せめてそれで反自民でまとまらんと、それでも公明党さんが向こうにつくのだから勝てるかどうかかわらんけど、これが発発じゃないのか」と、ものすごく厳しく主張してきましたのです。この何か月前から小沢一郎さんがそれを言っているのですね。だから、そういう意味では沖縄のやり方というのは確かに人を選ぶ視野が若干狭くなるのは欠点だけど、しかし、それでないと勝てないという県民の認識。物事を曖昧にしないで、真っ向から保守、革新という形でずつと対立していく。このことを一種の政治というならば、原点としてはるかに全国よりは一歩先に行っていると思う。そのなかで、共産党と民主党とは違うよと。いわゆる野党の中に細かくばらばらがありすぎて、ここでの議論が復帰後三十年になると東京からのつながりにもものすごく影響されている部分がかたくなになったという問題はあります。でも、まだ集まろうという体質があればね。

伊藤 大田さんの頭の中には吉元さんの名前は出てこなかったというふうには。

吉元 それはもうまったく想定つかんですね。

■沖縄の「夜の部」

伊藤 ほのめかしも何もなし。すみません、この問題はちよつと厳しいからまったく話題を変えてしまいますけれども。

よく泡盛を飲みながらお話しをするということがございますよね。私にも内地の地方でいろいろ話しを聞いていると、政治家は大体こういふところに巣があつて、この政治家はここに巣があつてというふうなことを聞きますが、沖縄の地方政治の場合にはどうなのでしょう。同じ泡盛を飲むといたつて。

吉元 それぞれアジトは別ですよ。趣味の違いは沖縄のほうがはるかに個性的ですよ。一緒に政党や一緒に仕事をやらざるをえない立場でも、アフターファイブは別だつて。別に上司とも付き合いわんしね。そういう意味では、わりと自分たちが行くところは、知事が行くところはあつち、だからあつちへ行かないとかいって、それぞれ別々です。

伊藤 じゃあ、大田さんなんかと吉元さんは全然別。

吉元 そうですね、夜の部というのは本当に一緒に飲んだことはないです。

伊藤 しかし、この夜の部で結構いろんな話が。

吉元 いや、そこがおもしろいですよ。出ないんです。あんまりそんなことはやらないです。もつとも仲間だけだったら別ですよ。昼の延長線上をやりますよ。

伊藤 じゃあ、交渉ごとというのがあるじゃないですか。

吉元 それは持ち込まんです。不思議なほど、沖縄ではそんなのは持ち込まんです。仲間同士のやり方はやるけど、まったく違う部分があつてね。

伊藤 きのうの話で、東京へ行つて。

吉元 あれは向こうの体質がそうだから。

伊藤 それを非常に珍しそうにおっしゃったので、あれ、じゃあ

沖繩では料亭はないのかな。

佐道 料亭待合型の。

吉元 料亭政治とかああいうのはほとんどないですね。

伊藤 それは保守系もそうですか。

吉元 それはわからん。多分ないんじゃないかな。聞いたことがないものね。

伊藤 経済団体の方に呼ばれたとき、ホテルの地下とかとおっしゃったでしょう。

佐道 その飲みながらとかというのは、普通の飲み屋さんという感じで考えておけば。

吉元 そうなんだろうね。

伊藤 そんな開かれた場だったらみんな聞こえちゃうじゃないですか。

吉元 いや、経済団体の連中がやるときは彼らの顔でやるから、やはり個室とかそういうのを使っています。僕らが行くときはワイワイガヤガヤのところ、「できたらいちばん隅がいいです」と隅を確保して座ったりするけど。

伊藤 けっこう聞こえちゃう。

吉元 そうですね。あちこちでやっとなるのは、「どこの連中が来ているのかな」という感じで顔を見るのは時々ありますけれども。

佐道 大田さんは例えば飲みながらそういうことを部下とか政治家の方とか。

吉元 大田さんのタイプは気が許せる人との飲み会というのが多いです。そういう意味では、昔の仲間である大学の自分が教授時代の助教授、講師とか。

伊藤 先生、先生と言ってくれる人ですね。

吉元 「俺は議会で怒られているけど、おまえらは何をしているのか」と言われているんじゃないかなと思うくらい。

佐道 ご自身の学部長選挙では、お使いになったような人たちを

お呼びになってということですね。

吉元 わりとそういうタイプのようです。同僚であった教授連中、もちろん大田さんの知事時代はOBになっていて人とたまに会うとか、それから……。そうですね、あんまり付き合いの範囲は広くないみたいです。僕らはせっつかく飲むのなら大田さんとは飲みたくないしね。まったく別のところに行くしね。

佐道 きのうの話の中で、橋本さんに泡盛をつぎながらというお話があったのですけれども、大田さんが泡盛をお飲みになったのですか。

吉元 大田さんは泡盛を飲みますよ。

伊藤 いえ、大田さんじゃなくて橋本さんです。

吉元 大田さんは泡盛好きですよ。本当はあの人はウイスキー派なんですよ。

佐道 ええ、泡盛は飲まないとおっしゃるようなことを聞いていますけれども、

吉元 いえ、飲みますよ。飲みますけど、最初にカクテルを飲んでね。

佐道 カクテルですか。

吉元 アメリカ時代を思い出さるだろうね。

佐道 アメリカも南のほうでしょう、それはメキシコのほうじゃないですか。

伊藤 だいたい西海岸はテキーラを飲んでる。

佐道 大田さんあの人がいたのは東海岸ですよ。

伊藤 彼が行ったのはね。

吉元 強い酒、バーボンなんかが好きですよ。ウイスキーが好きみたいです。しかし、ほかの連中が泡盛が好きなときは泡盛でやりますよ。

佐道 泡盛は絶対に飲まないというわけではないですね。

吉元 いや、けっこう飲みますよ。だけど、どちらかというとウ

イスキーが好きというタイプです。

伊藤 大田さんは酒を飲むとどうのこうのといういろんなうわさがありますけれどもね。

吉元 わりと飲むほうですよ。大田さんが酔っ払うまで僕は見たことがない。

佐道 それは幸い(笑)。

吉元 めったにないんですよ。何かの集会の帰りに、「ちよつと寄るか」という。第一ほら、車が別々でしょう。これ幸いですがからね。同じ道は通らないですよ。知事が行けば、秘書が気を利かせて別の道から帰るのです。

伊藤 私は吉元さんのお話を伺っていて、本当に大田さんと腹を割って。

吉元 仕事の上では大変な論議をしますよ。

伊藤 論議ではなくて、お互いの腹の中に信を置いて。

吉元 大田さんのタイプがそうなんです。僕もそうですが、絶対にお互いに立ち入れない領域というところはさわらない、入って行かない。家庭の問題とか個人的な問題とか。

伊藤 それはそうだと思いますけれども。

吉元 これは大田さん自身が徹底していますから、そういう意味では僕らも付き合やすい。向こうも言わんし、僕ももちろん言わんし。そういうのがあるので、仕事は仕事、五時以降になると一緒に飲みに行かないという形で終わってしまうのです。そういう意味では淡々としているのです。むしろ東京に行ったときなんかは、たまたま知事、副知事が一緒に行っている。もちろん宿も別だし、車も別だし、知事は知事の仕事で私はまた別の仕事をやっているけど、夕方知事への報告ということで東京事務所であつてちよつと遅く八時ごろまでやりとりすると、飯はまだだったよなという話になって、一緒に行こうというときは、そうか、ではおごってもらえるかといって行くのですがね。しゃぶしゃぶが

好きだから。

伊藤 一般的に政治家の話を聞いていると、やはりお酒の席でないとなく、そこではつきり物事は言わないですけれども、お互いの感触をつかまえる。

吉元 これはないですね、一〇〇%。沖縄的な仕事のやり方がそうかもしれないのか、私と大田さんの間はまさに典型的です。通常五時以後に仕事の延長線上で話すというのは私の記憶にないもの。

伊藤 そうですか。

■県知事としての大田氏

吉元 そのかわり、日中だと私は秘書を通さずにいきなり知事のところに飛び込みます。知事も時々黙って来るのです。会議をしておると来て、「あ、会議か」と帰ろうとするので、みんな職員が出て行って知事を呼び戻して。そういう行き交いはやりません。これはまあ仕事のことですから、それは大変な言葉と言われますよ。目をむき出してね。わからぬのに怒るなど僕は言うのです。わかつて怒るのは聞くけど、わからない人が怒ったら職員は逃げていくよ。それはだめだよ。

佐道 わかつてなかったのですか。

吉元 わかつてないですよ。あれだけほかの仕事をしてきた人に、行政の仕事の、しかも法律やその他にかかわる非常に微妙な問題の決断、それをさせるといふのはきつい仕事ですよ。だから副知事までの間に選択肢がもう絞られて一本か二本ぐらいになつて、知事に決断を求めるといふのは、「これでいいですか」がほとんどです。そうでなければ、「どっちを決断しますか」という話でね。どういう違いがあると。だから、法律的にどうのこうのという議論はもうそこにはない。また、そこまで知事のところで

論議されても、行政はもともと知事にそういう能力を求めているから、これは意味のない話です。いわゆる民間会社との決定的な違いはそこなんです。民間会社の場合のトップの決断というのは、ある種、初めにありき、最後にありきでしょう。それは全部責任でしょう。株主総会に対して全部責任をとる。知事の場合は、システムとしてできあがった行政の構図の中で、職階制の中でそれぞれの責任で判断していくことでしょう。これが意図的な解釈で結論をもってくるならば、間違った問題を出してとるとその職員は首になります。そこまでは全部チェックしていく、それは知事の政策をふまえて部長連中は判断しますからね。国の官僚組織と違うのはそこなんです。国の官僚組織は大臣がどう考えようと関係なくタンタンと決まってくるでしょう。

伊藤 それはそうですね。だけど、それと類比でいうと、知事というのは政治ではないんですか。

吉元 いや、政治ですよ。政治ですけど、今でいうならば、三年前の地方自治法の改正後、機関委任事務なんていうのはないのが原則です。それ以前は機関委任事務が七割八割でしょう。機関委任事務にイエス・ノーはないもの。だから知事が判断するというのは一部分の予算、県の予算の枠の事業範囲のそれはやります。やりますけれども、でも大した量ではないです。

伊藤 知事が政治だとすれば、行政のトップは副知事になるわけですか。

吉元 いや、やはりトップは知事だろうけれども。だから、知事の政策の優先順位を知事と相談してきちっと認識した副知事クラスが、担当部長との間で各省庁との調整をやるときに、「おまえのところの優先順位はこれが第一番だよ。これは後でもいいよ」という範囲をもたさない。つまり、そこまでは知事がいえませんから。知事の政策をきちっと認識して、その中で優先順位を絶えず知事と論議しておいたら、後は副知事がすべてを動かせる。

その方が、知事にそういうものにかかわらない余裕を持たしたほうがいいと思いますね。

佐道 それだけ副知事が例えば各部長との調整をよほどうまくやっていたかといかない。

吉元 まったくそのとおりです。

伊藤 知事が直接部長と。

吉元 それはありますよ。大田知事の場合はかなりその点はユニークで、決裁文書には、起案をした職員の名前と印鑑を押しますが、この職員を電話で呼び出していた。最初の二年ぐらい。

佐道 係長さんとかそういう。

吉元 これは異例なことです。「どういう意味か説明せよ」から始まるんです。

伊藤 それはびつくりしたでしょう。

吉元 係長なんかがいきなり呼ばれて、「説明せよ」といわれて、「ウーン、何ですか」という話だね。ものすごく問題になりました。

そのときに、大田さんにいくらいつてもなおらんから神奈川の長洲（一一）さんに会ってもらおうと思ひまして、長洲さんのところへ行つて、「うちの知事と一杯飲んでくれんか」と言つて頼んだら、「いいよ。何か、吉元さん」と言うから、「いやいや、まだやってるんですよ」と言つたら、「ああ、やっぱりそうか。自分も最初の一年はそうだったんだよ」と。私は、「先生が職員を呼んでいたというのを聞いておつたので来たのですよ」「じゃあ、それを言えばいいか」「お願いします」ということにして、予算折衝で知事が行ったときに私もおつたので、神奈川に行つて、長洲さんと向こうの副知事と秘書室長、沖繩からは私と知事が行きました。一緒に飯を食いながら、大田さんが、仕事はどんなふうにしたらいいかと言わんばかりの質問をして、「今私は起案者と呼んで説明させるのだけど、これが評判悪くて」と。長洲さん

がおもむろに、「大田先生、私も一年間それをやっていた。だけど、一年間を振り返ってみると、これをやっておいたら知事が考えることを考えている余裕がなくなった。だからこれはむだだと知った。副知事の印鑑が押されていることは、特別なものは秘書課長にもう一回調べさせるといことはあつても、そんなむだなことはしないで知事の仕事に専念したほうがいいですよ」という発言をしてから、「いや、私はまだ続いていますよ」という話をしているのです。もう一年過ぎですよ。それで長洲さんが、「吉元さん、もうそんな仕事のさせ方をしないほうがいいよ」というから、「いや、うちの大田知事は二年やりそうですよ」と大笑いして、その後には知事は止めた。やはり二年かかりました。

起案した職員がどういふものか考え方をしているかを聞きたいのですかね。だから県議会で一度それが問題になりました、本会議での質問に出ました。ゼミと間違っているんじゃないかと（笑）。佐道（笑）、いや、きつとそうでしょう。

吉元 知事のところに自民党系の野党議員が、知事の発言はおかしいと抗議に行くんです。そうしたら知事はそれを聞きながら、「わかった。あなたたち、問題があるのならレポートを出せ」といった。何を考えとるか、それがまた大問題になってしまつてね。大変ユニークな方ですから、一期目はいろいろありました。

佐道 そういうのを経て、少しずつ知事のお立場に慣れていったということですね。

吉元 学問の領域が、広報とか何とかということで細かい資料の積み上げというか、僕たちに言わせればほじくり。本人は怒るけど。そういう研究姿勢を持つていものだから、実に丹念に物を見たい。わからんことは必ず確かめるといふのがあるような気がします。僕らに言わせれば、それが行政組織という間尺の中ではむだという気がするけれども、ところが本人はそうではなくて、よりわかりたいという気持ちが強かつたようです。職場からワー

ッと文句が出るものだから、とうとう労働組合あたりまで上がっちゃつて、沖縄県職労の三役が直接話し合いたいと乗り込んだいきさつを聞いていますのですけれども、どういふ議論をしたか聞いていません。

伊藤 国の政治のレベルだと、総理大臣は議員内閣制ですから議会で選ばれるわけですね。地方自治の場合は直選ですよ。そうすると、知事と議会との関係というのは、国の総理大臣と国会との関係とはちよつと違いますね。

吉元 そうですよ。議員内閣制とは違う部分、地方自治の場合の首長と議会との関係のことをきちつとわきまえて、お互いが住民代表だと思つていないと。双方のテリトリーをきちつと、住民と直結している場だということとを双方が認識しないと錯覚を起こす場合があるのです。特に議員の中に錯覚が多いですよ。

今度の長野の場合なんか、ちよつとケースは違つけれども、まさに象徴的な事件が起こつた。本當だつたら議会は、ま、それは議会の権能としてあるのだけれども、不信任を出したら普通は常識的には議会の解散と議会政治は思うわけですよ。しかしあれは、あの不信任決議の文書を読んでいるとハツと気づいたのだけれども、ダムについてどうのこうのといふのは一言もないのですよ。行政の手法、ある種人間的なことなんです。それが前面に出ている信任できない理由ですから、これは完全に逆手に取られるなど僕は思つたのです。案の定、ぎりぎりまで引つ張つて、自分に対する人間的な不信だから、これは議会の問題ではありませぬ。私が辞めて問いますという形に。議会はすり替えだといつていふけど、ああいうふうにはやられちゃうわけですね。議会のほうも相当考へて、議会が自ら条例をつくつて、ダムの検討委員会をつくつて、まあ、賛成、反対はあるのだけれども、いずれにしろ結論が答申されたものが知事に出てきて、知事はそれを、六月議会というのには国庫要求の前だから、それを次年度予算に反映させ

ないためにも早く議会で表明されないといかん。表明した場合はイエスカノーかの話ですから。そして、表明した上でそれにかわる枠組みをどういう形で行政の中でさらにつくっていくかはこれからの話。枠組みは示しているから。

この流れを長野の新聞をインターネットで引き出してずっと読んでみると、議会の怒り方はわかるが、矛先の向け方を、知事を県民側に向けちゃった。投票という形だね。そういう余地を残しちゃった。これは議会のやり方としては、直接選ばれた議会の在り方として下手だな。もしそこまでやるのだったら、議会が自分で解散してもう一回同じところで投票日を設定して議会の選挙もやればいいと思つた。議会も不信任は全会一致ではないのだから反対した議員はおる。彼らは辞めないという。例えば共産党議員は辞めないでしょう。辞めないというやつを引きずり下ろすわけにはいかん。結果的には、後で田中（康夫）が当選してくると自主的に辞めるといふ人が出るかわからん。これは県民から問われますよね。

伊藤 もう一遍不信任ということもありうるのですね。

吉元 それはあります。でも、もう来年の議会との関係だから。脱ダムがけしからんという不信任ではないから、人間性の問題だから。今度はまじめにやりますって。しばらく時間をかけないといかんでしょう。

■ 議会対策

伊藤 議会対策というのは、知事の側ではどういう。

吉元 それは副知事が担当です。だから筆頭副知事である私が議会対策はすべての責任者で、あとは担当部長と連携をとって、そして与党、野党、事前に議案説明。これは非公式の説明。その上にあたって、正式の表での議会の協議会に対する事前の議案説明。これをきちっとやった上で本会議召集ですからね。もちろんこれ

は表の話。質問、通告がある。それに対して答えを出す、答弁を知事とつくる。かなり再質問が予想されるやつなど、議員の特性とか癖というのは大体わかっていますから、この議員はこういう質問をしておるけれども実はこれが狙いだよというふうな現場が。答弁を書くのも係長クラスですから、彼らが日常付き合っているのもう一本答弁をつくっていますと。それは三役調整で、知事調整のときに持ち出す。じゃあ、表のやつのはオーケー。裏のやつはちよつと待ってくれと私が預かって、本番に案の定そういう再質問が出ると準備したやつを出す。これも間に合わんときはもう知事は答えられない。部長に答えさすか、そうでなければ副知事が直接やってしまうというような展開です。

知事の答弁で再質問などすれ違いがあったとして、混乱して議会が急に審議ストップすることもあります。そのときの処理も副知事の仕事です。大田さんのときはもう空転。空転という言葉が沖繩は多いのです。夜中まで議会が空転する、二時、三時ごろまでとまったまま。どう再開させていくか、答弁のどこで折り合うか。大田さんは、「いやだ。この答弁以外はもう言わん。俺は悪くない」と。悪い、悪くないの話ではないよね。相手の顔を立ててくれと向こうも言ってくるから、「じゃあ、こういう文章で顔を立てるか」と言ったら、「この文章と自分の言ったことと本質は変わっていないだろう」「本質は変わっていない。言葉は変わっている。これでいいと言っているんだから、これを読め」と言ったら、「いやだ」と言う。そういう形で相当大田さんは個性的なところがあります。しかし、夜中の二時、三時まで知事室でほけつと座っているわけですから。「どうなつとるか」と秘書課長に聞いて、「そろそろ知事もあせっているよ」と言うと、それじゃあ、そろそろ行くかって。「どうする? それとも答弁かえようか」「任す」「それじゃあ」ということで事前に議会に行つて、議会の質問者と話し合つて、「こういうことしか知事は言わんよ。

それ以上のことはだめよ」「ああ、いいよ。」「じゃあ、それを読まそうか」「文書を見せる」と言うから、「いや、それは見せないよ。知事の答弁をあなたに見せるわけにはいかんだろう」と私は帰るけど、担当部長がこっそりと。

今の県政で問題になっているのは、書いたとおりにしか言っていないのです。これが問題。再質問してもまた同じ答弁をやる。また再質問して、また同じ答弁。「なんだ、これは」といつて野党が批判をしているのはそこなんです。これは、大田さんのときだったらまさに議会がとまるのですよ。今とまらんところを見ると、与党多数ですから、公明党が向こうへ行きましたからね。だから議会はとめないで、どんどん強行して議長が進めてしまう。伊藤 野党と折衝する場合は、議会の中で各党派のリーダーとやるわけですか。

吉元 そうですね、会派の責任者。そして、原則として議長を通して。これがほかの県との違いです。ほかの県は議長を通さない。全部議員個人と最初にやって、そしてその会派のボスに、「この先生はオーケーしましたよ」ということを報告して、それでいいかと。そして議長に通知が行って、それで議長が、「じゃあ、開いていいか」という話になる。沖縄の場合、ま、これは私のときのやり方かもしれませんが、必ず議長室で最初の相談はする。佐道 議長室で会派の代表を集めてやるわけですか。

吉元 そうです。その発端になった問題の答弁は何か、質問は何か。あなたの会派の議員はどこまで求めるかという話がストレートに出てきますから。そこに私も呼ばれますのでそこで聞いて、「いや、それはむりですよ。実質的な中身を聞かれたら、これ以上答えられません。実質の中身ではなくて、将来の検討課題とか何とかという形で引っ張るのだったら知事と相談しますよ」と。あるいは、「それはできませんよ。しかし、別の言葉で言えというのだったら、それは検討します」と。どこが限界かというのを

最初から議長の前で言っておかないと。安易な形でやると議長の責任も問われますから。

佐道 通常の場合の、例えば知事の答弁で空転したとか、そういう場合の調整は副知事がなさるといのはわかったのですけれども、吉元先生の例の再任の否決の問題ですね。これは、先生はもういいよということがあったけれども、大田さんが、いや、やってくれということでおやりになった。結果的には案の定否決されたというお話でしたけれども。その下調整はどなたがおやりになったのですか。

吉元 それは与党の会派の代表というのですか、政党。これは議会というよりはむしろ支持政党。与党のほうの代表には、三役クラスには知事が話し合ったということ聞いています。そして、特に反対している共産党に対しては、知事自ら共産党の事務所に行って話し合ったということも新聞に出ました。あと、野党に対しては知事はやったかわらんかわかりません。少なくとも新聞には出なかつた。結果として、野党に多く退場者が出たということがあつて。ま、与党にも一名おつただけけれども。そういうことです。万全だったかどうかというのが後で問題になったわけです。

伊藤 欠席が出ると、基礎数が減つて。

吉元 そうですね。同意案件は三分の二ですかね。ですから、どつちから欠席者が出るかによって非常に重要な要因になつていく。今度の長野みたいなね。

伊藤 だけど、それはある程度読めるわけでしょう。

吉元 それは読めますよ。あれは一票か二票差でだめになつていきますから。多分そうだったと思えますから、きわどいところでしたのでしょね。

佐道 でも、最後のぎりぎりの調整とか説得をなせしなかつたのかという話が後々出てきたということですね。

吉元 そういうふうにはマスコミにも書かれていたことはありましたがけれども。しかし、知事、三役、それなりにしつかりやって大丈夫だということだから最終的には私も知事の説得に応じた。

伊藤 そういう読み違いというのはやはり出てくるものですね。

吉元 読み違いと言っているいかどうかはわからんけど。

伊藤 そこも微妙なところなんですよね。

佐道 再任を否決された後はもちろん副知事ではないということになりますから、県庁にはもうお入りにならない。

吉元 そうです。

佐道 ただ、それまでの部下の方などを通じて県庁の状況は情報としては。

吉元 任期が十月十七日だったと思うので、九月議会に最初に出したとき、その最終本会議が多分十六か十七日、その前日あたりだったと思うのです。そのときでだめになったので。本会議の日は二日酔いで出ていません。前の日に徹底的に議会との議論がありますから、十一時ごろ終わって、最後まで残った部課長を全部つれて酒を飲みに行つて。全県フリー・ゾーンの問題だったのでギスギスした論議だったから、それで明け方まで飲んだんです。そして帰って寝て、十時過ぎごろ、十一時ごろからな、秘書から電話があつて、同意案件がだめになったということがわかった。

伊藤 同意案件というのはどういう形で出てくるのですか。

吉元 議案として出るので。まさに、「副知事に吉元政矩の同意を求める」というような議案です。あとは履歴書がつく。もちろん議会の招集日に出されますから、委員会でも審議し。

伊藤 委員会がある。

吉元 委員会審議は終わっているんです。本会議でだめになったのです。なぜ委員会でも否決しなかったかという問題もあったんです。あくまでも流れとしては異例な展開が本会議で起こったとい

われている。

伊藤 しかし、これは今までの流れからいうと、自民党の中央がそれを推進したとは考えにくいですよ。

吉元 逆に、どうも危ないようだよという情報が出て、最終本会議の前々日あたりから、大体最終本会議の二日前には議案整理のため休会に入ります。本会議には採決のため議題が全部出てくるから、そのへんから情報が出るのですね。マスコミの情報はすぐ出ます。マスコミのほうが詳しいですから。それで東京サイドが動いたという話は後ほど新聞に出ていたような気がします。

佐道 そう出ていましたね。

伊藤 その委員会の中ではもちろん反対は大分あったのでしよう。

吉元 僕はその記憶は今ないけど、共産党が反対の意思表示をしたということはあったんじゃないかと思うのですが、それでも委員会では通っているのです。

伊藤 その反対の理由づけは。

吉元 きのうもちょっと説明したのだけど、那覇軍港の移設について吉元副知事は軍港移設を認めているというそれが理由です。それは大田県政の政策とも違うんじゃないのか。自分たちの政策とも違う。私が講演の中では、質疑応答でやっていたのは、軍港移設は認めません、民港として那覇港は整備します。民港として整備されたバースを、今でもやっているように港湾管理者が船舶の積荷の安全確認をした上で利用させる。これは考えていいのではないか。それまで拒否する理由にはならんだろうと。そういうことをやりながら、現実には那覇軍港を返還してもらおう。浦添市でもそういう流れが既にできていたということもあつて。そのことが問題になったのです。軍港移設を認めているのではないかと。私は認めませんから、認めていないと。そういう表現をしたのは事実です。

伊藤 共産党はそういうでしょうけれども、野党のほうは。

吉元 自民党は賛成ですよ。彼らは軍港移設に賛成なんだから。

伊藤 いや、吉元さんに反対。

吉元 それはそういう問題とは関係ないですよ。吉元をつぶしておかんと。

伊藤 それはわかりますけれども、委員会でもさかそうはいわないでしょう。

吉元 それは任期途中ではなくて、任期が終わって次、新しい議案ですからね。認めるか認めんかということだから、これはもう。

伊藤 理由なしですか。

吉元 戦略的に向こうはやりません。

伊藤 やはり委員会で議論するときには何か理由を言うのではないかなと思つたのですけれども。

吉元 人事についてはあまり言わんです。ほとんど認めるか認めんかということで委員会の中ではやられるんです。履歴詐称でないかぎり出ないでしょう。

■産業政策批判への反論

佐道 最終的には大田さんがどうされたかと、これは吉元先生ご本人もよくおわかりにならない部分がおありになるので、きつとよくわからない部分があると思うのですけれども。きょうは副知事を終わられて以降の問題があと重要な問題なのでそこに移りたいと思います、その前に一点、さっきの議会の最後で、全県フリー・ゾーンでかなりハードな交渉をやつて、そしてそれが終わつてという話だったのですけれども。全県フリー・ゾーンの問題で最後に確認的なあれをお聞きしておきたいのですが、国際都市形成構想についてもずっとついてまわつていた批判が、このプランは理念が先行して産業界の問題が甘いのではないかという議論。それから、全県フリー・ゾーンが、これは刺激が強す

ぎるといふ。農業団体、水産業界もそうですけれども、そういう批判ですね。それが、例えば今副知事になつている牧野（浩隆）さんは『国際都市の陥穽』などをお書きになつて大論争をなさいますね。しかし、一方で着実にプランをつくられているわけなんですけれども。田中委員会を経て、もうこれで行かないといけません。ということ踏み切られたという話だつたと思うのですが、ずっとついてまわつた産業界が甘いという批判について先生ご自身はどう思つておられるのかという点。それとフリー・ゾーンも、やはり今から考えてもあれに踏み切るのはやむをえなかつたのかどうかということについて。

吉元 産業政策が弱いというのはいつの時代でもあるのです。これは復帰後ずっとつきまといつています。これには特効薬はないと思います。一つはやはり、保護措置、優遇措置のために企業が外に出て行かない。仕事として、商売としてね。この弱さね。それから、金融機関もなんとなく申し合わせがあつて、沖繩には当分の間は入らんと。保険も。というふうな流れがずっと暗黙のうちに続いているのです。つまり、沖繩が一つの閉鎖された社会で、経済的な、社会的な枠組みの中で、外からのものが入つてこない。内側から外に出て行かない。内だけで回っている。

それに刺激を与えるのは唯一公共事業だと。これは、大手は本土のゼネコンがきちつと吸い上げていく。何割残つているかという話ですよ。沖繩県の市町村の公共事業もさることながら、ちよつと大きなもの、高度のものになるとやはり本土のゼネコンを入れなければいかんという。ダムとかその他については、国の直轄事業、いわゆる（沖繩）総合事務局の抱えている事業は大きいのですから。もう一つ、米軍用地にかかわる、軍事基地にかかわる公共事業。つまり防衛施設庁。これも大きいですからね。この部分は沖繩県の意思が働かない。ということ、業者からの資材を使うか、県内でできるアルミ、鉄筋、セメントなどを使わんと

いうような問題が出たりして、これが非常にトラブるのです。県政が変わっても変わらんでも同じなのです。今でもまだ問題になっている。むしろ大田県政のときには私たちが声をあげますから、そういうチェックが働かないということがまた出ている。これはこの間ずっとある。結局、公共投資しても吸い上げられている。本当はそれが産業の基盤につながるはずだが、つながっていない。まさに「ザル経済」ですよ。この構造は、首長がだれになろうが構造的には同じです。基地に頼るか、公共事業に頼るかというパターンは。それを変えるためにどうするかが国際都市だったわけです。だから基地からの脱却が基本にあった。どうするかというところで方法論が違っている。

僕らが考えたのは、この体質を治すには、沖縄から本土という市場に勝負をかけても負けるよと。品質、量的な問題、流通コスト。流通コストだけでも負ける。では、どこと競争するかという場合は、私たちと同レベル、あるいは私たちのほうが少し先に進んでいると思われる東南アジア、中国、台湾、この間で新しい競争といえますか、新しい市場をつくらう。これが国際都市形成構想の経済政策の基本になっている。だから最初に蓬莱経済圏構想というのを出して、直ちに中国福建省との経済交流、文化の交流の構築に入った。開花まで結びつくのだけでも。台湾との間ではずっと復帰前から続けてやっていたのをさらに拡大するため、今までのショールーム方式を台北駅のどまん前に引っ張り出してアンテナショップという形で仕組むのです。これはシンガポールにもつくったし、香港にも沖縄事務所をつくった。結果として、ビジター・ビュローの事務所はソウルまで置きましたけれどもね。つまり、本土での勝負というのやりながら、同時にもつと開けて。

そのためにはどうしたほうがいいか。今の日本の仕組みの中では、外と競争させるにはあまりにも障害が多すぎる。だからフ

リー・ゾーンの論議なのです。それは何かというと、沖縄がかって琉球だった時代にフリー・ゾーンがあった。復帰によりなくなった。それが特別措置に残ったあの表現で、自貿につながったのです。ところがその自貿が、国際的な競争をやる自貿の本身として日本政府はつくってくれなかった。税制上の問題とか通関の問題とかいろんな問題があります。その優遇措置をつくる気がなかった。ああいう自貿ではなくて本物の自貿をつくらう。東アジアの経済の交流、将来の展開云々といってAPECの話に。わかりやすい表現をするなら、二〇一〇年に先進国は投資の自由化、貿易の自由化、それに向けて進む。では農業問題はどうか、水産業は。それは確実にかつての、今はWTOでやっているけど、その前から議論されているアクションプログラムがつくられているが日本政府は表に出さない。それは農業団体対策かもしれない。政治的な。だけど、二〇一〇年には文字通りFTAの段階に入るから、それを一足先に沖縄に取り入れようではないか。それを取り入れるためには、沖縄は幸い陸続きではないから、一つの特別区をつくらう。いわゆる「経済特別区」という表現をした。この論議の中で、いきなりそれに入ることにはきついだらう。だったらそれを踏まえていこうという形で、規制緩和委員会という名前はそれなんですよね。

ところがその論議をしている中で、いや、中途半端すぎると。二〇〇一年にこれをやったとしても、二〇一〇年までの間に加速度的に早くなるかもしれないというのが出てきたり。香港の学者、台湾の学者も入れているのですから。しかも、田中委員会の田中さんが経団連のシンクタンクのトップですからね。彼らは、日本のこれから、二十一世紀の十年、二十年という先を読んで経団連は研究会をやっているのですから、彼らが、沖縄が経済特別区として許容できる範囲というのは何なのかというのに論議の結果として行き着くのです。それを検討委員会の最終段階で、「吉元さ

ん、これは中途半端な段階を踏まえるやり方はメリットないよ。苦しくても一気にぼーんといったほうがいいよ。かつて琉球政府時代は一国二制度だっただろう。そこに入ろう」という話が。今の稲嶺知事が経済界を代表しての委員ですから、彼も含めて議論したので。最終的には、ではそのことについてもう一回検討しよう。各団体ともそれでもう一回検討しようということでも元に戻るので。

その間に稲嶺さんは経済団体との話に入る。私は県庁の中の論議をする。一方で私は東京へ行つてそれを打診する。政治的に。こういうことを続けてきて、県内では新聞を通じてほとんどオーブンに情報は出しましたからね。それをめぐってマスコミに引っぱり出され、賛成、反対だと私との論争がマスコミを通じて行われる。そのの頂点としてコンベンションセンターで牧野さんも出て、反対のほうの。論争と同時に電話を受けながら、県民の動向を、賛成、反対の件数が出てくる。そういうところまでやったのです。

結果として、経済団体があれだけ苦しんだとはいえ、最終的に二〇〇五年、もう少し時間がほしいということで二〇〇一年を二〇〇五年としてまとまったことを最大限に尊重しようと。本来ならば二〇〇五年では遅いと僕は思っていたのです。一方で、一九九七年の話ですから、二〇〇一年といたら四年です。二〇〇一年というのは、まさに沖縄振興開発特別措置法の切り替えの時期なのです。それをはずして後の中間年度に持っていったって、これはメリハリがきかんよというのがあったから、あとは県民の気持ちとその態勢がとれば行こうという話になった。農業団体と漁協業団体は、農水省からものすごく足を引っ張られたと聞いていましたけど、しかし、これはこれとして。ですからある種、日本政府の関係省庁がいちばん沖縄に何をやるつもりかということを目を光らせた時期なんでしょうね。県内でも同じような意見が

あった。

私は、この全県フリー・ゾーン、あるいは「経済特区」、「一国二制度」というやり方についてはやるべきだったと。今でもそう思っています。今日的にいうと、濟州島知事と、あれは韓国のほうではチェジュ国際自由都市基本計画のダイジェスト版だけど読んでみると、あれはすごいですよ。二〇一〇年を目処だったかな、一七年目処だったかな。法人税なんかは七年間ゼロですよ。あと五年は二分の一です。

伊藤 いつからですか。

吉元 二〇〇六年からかな。ちょっとデータがあると思うのだけれども。なぜあれが早まったかということだよね。それから、中国はASEANと二〇一一年を目処に走って、前倒しが始まっています。日本は遅まきながら小泉さんがまわって。それでも一本釣りですよ。まあ、ASEANと話し合うところまで来た。ASEANは全体的にはもうそういう方向に行かざるを得ないというところまで来たけど、ちょっと足並みが違う。しかし、いずれにせよ東アジアはあるときに私たちが展望した流れよりは少し早まったような気がする。でも枠組みは変わってないと思っで見ている。しかし、日本という国の中で規制緩和、構造改革の名の下に特区制度が出てきたでしょう。ああいう細切れはけしからんと僕は思う。でもやってみたい。それはなぜかといったら、画一的に変えることができないから、させるといけない。させて、見とつて、いいのだったら全部に広げようという話だね。私なんかは沖縄県全体をそうしようといった。どこに本質的な違いがあるか。もちろんあれは税制上の優遇措置はないという前提。しかし必ず出てきますよ。私たちは税制上の優遇措置がある。じゃあ、沖縄に優遇措置をおいて、なぜ俺たちにはおかんのかということがあるので。結局は目指すのは二〇一〇年になるか前後になるかわからんが、東アジアの中の全体的なFTAとの関係でしょう。あ

の内容も。私たちもそれを展望したんでしよう。だから、少なくともあの認識は今でも正しかったと思う。

なぜ、経済政策としてあの時期に取り入れたかという是非については、それはいろいろ意見があります。それは琉球大学の中でも賛成、反対がおるし、幾つかの大学でもそう、経済界でもおるし。その論議はあっていいと思うのです。でも、あの論議を完全につぶして、特別に三つ挙げた全県フリー・ゾーンの部分の一部、つまり特別自由貿易の部分にもう少し中身を濃くせよという要求に今の県政は変えた。情報通信特区は同じ中身。そして、もう一つは国際観光リゾートね。これはまあ、大体同じでしょう。しかし、それに見合う内容は出てこなかった。とりきらなかつた。だから今、県内では北部のほうがいわゆる小泉経済特区、あれの観光編を沖繩に入れようとしている。その絵をいま描き始めていますね。だったら、あどときに私たちが出した規制緩和の三つの大きな枠組み、あの中の三項目をどうして手を抜いたのか、と言いたい。

佐道 それはまさにお辞めになってから後の今の現県政の問題になりますね。

伊藤 では、ちょっとここで中断しましょう。

〈休憩〉

■副知事退任後の県政との関係

伊藤 政党はあまりお好きではないというお話ですが、副知事をお辞めになってから後、社民党の中で役員をやられるというようなことはないんですか。

吉元 ないです。政党の役員は一回もやったことはないです。最

初に国政に上原康助さんを出す時に「入れ」と言われたから入って、ずっと続いとる。

伊藤 その場合は社民党の中でのこの組織に属しているか、というの。

吉元 それはもう地域組織としては、那覇支部です。

伊藤 那覇支部の役員も……。

吉元 それもないです。もう最初からさせるつもりないですから(笑)。

佐道 政党側が、ですか。

吉元 みんなが。結局、運動の領域がそれぞれあるもんですから、党は党サイドでしっかりした地域活動が欲しい。私なんかは党員になったといつても、労働運動という領域がありますからね。

伊藤 組合の中に党員協議会というのは。

吉元 それはないですね。沖繩の場合はそれは目的化しないです。全国組織である自治労という組織は、社会党時代に社会党員協議会というのがあったが、僕らはそれに出なかつたです。

佐道 運動ということで言うと、大田さんの時代もひとつ注目されたのが、例の「一坪反戦地主」とかああいう運動体がありますね。市民運動と言いますか。それと大田県政と言いますか、先生との関係はどういうことでしょうか。

吉元 その種の運動は、市民組織にはいろんな団体を通じて、あるいはいろんなテーマを通じて、たくさんあるんですよ。これはもちろん全部個人ですから。県庁の職員にもそれに入っている者が多いし、もちろん管理者にもいるし、大田県政時代も部長さんにもいた。私は入ってなかつたけれど、大田さんも入ってなかつたようですが。議会で質問されたこともある。

ああいう団体は選挙などについて特定の支持者、候補者を支持することは決めないところなんです。それぞれ個人が、といううなやりかたですから。政党などははっきり選挙に関わってきま

すけれど、その他のそういう個人加盟団体のような部分は、組織としては動かない。だけど中に構成委員としておる連中は、大田の支持派であることは間違いない。全部とは言わないけれど、もちろんそういう一坪反戦の場合だと、必ずしも社会党、社民党系だけではなくて、社会大衆党の支持者もおるし、党員もおる。共産党もおる。

佐道 あまり政党とは関係ないですね。

吉元 ないですね。全くその点では、かなり沖縄の場合は裾野が広いですから。

伊藤 副知事をお辞めになってから、地方自治研究センターの理事長にご就任になられるまで一年くらいあります。

吉元 そうですね。選挙が終わるまでです。九八年の参議院選挙です。それとの関係がありましたから。私は八三年か四年に県庁を辞めたんだけど、専従制度が在籍五年というのがあります。それはもう復帰直後に使ってますから、県庁辞めて県労協の事務局長をやったのです。その段階から、県職労委員長の時もありましたから、特別執行委員として位置づけられた。県労協が終わって、大田県政を作って私が県庁に入った時は、私のポジションは部長クラスです。実質的には三役クラスですけど、職階上は部長クラスです。議会同意のないポジションを作ったんで。その時は当然労働組合の組合員の範囲から離れているから、組合との関係は切れています。副知事が終わるまで。終わった後、今度は自治労が私に自治研センターを担いで欲しい、ということになった。先程言った選挙があったので、それが終わるまで私はノータッチ。そういう意味では参議院選挙が終わって、たぶん九月一日から自治研センターに入ったと思う。その理事長をやって。

伊藤 これは前からあった組織なんですか。

吉元 これは復帰直後からあるんです。自治労のシンクタンク。これは各県にありますよ。

佐道 前に私たちが、九九年に来た時にあそこがありました。

伊藤 結構大きな組織だなあとと思って、見てたんですけど。

佐道 お辞めになった後、十月の十七日が任期で、その後、県庁内の情報はどのくらい……。

吉元 少し経過があっただけに、県庁のみなさんが私との関係で仕事をやりとりしていた。それは十月一杯、十一月の初めごろまで。ところが十月の末か十一月のあたりになって、大田さんから「必ずもう一回出て欲しい。責任は持つから」という話があった。県庁の中では当然戻ってくるだろうという認識が、現場の連中、特に部長さんなんかは持っていた。しかも私の時にまとめた、議論した、全県自貿の問題、規制緩和委員会、これは沖縄政策協議会に報告しなきゃならん課題だし、県庁としても協議、決定しなければならぬ課題、最後の経済団体との詰め、それから五十三市町村との詰め、その他がありますから。そういう意味で言いますと、頻りに連絡はやっていました。早い話が担当課長クラス、部長クラスが書類担いで我家に来たこともある。通常の県庁の用事はFAXで送り込んできた、というふうなことがあります。

伊藤 大田さんとの関係はどうなんですか。

吉元 それは直接はないですけど。もつとも今言ったようなパイプでやりますので、私の相談を受けたか、というのが、いつも知事のところの上ってくる場合の前提条件であったようです。

佐道 実質的には十二月にもう一度出されて、もうそれでアウトということになるわけですね。

吉元 しかしそうは言っても、仕事の相談はその翌年も受けていました。可能な限り私の方は避けとったけれど、そうはいつても生きた人間がやっておる仕事ですから。沖縄政策協議会が九八年は開かれていないと思う。

佐道 九八年後半は開かれています。

吉元 新しい知事になってからでしょう。だから、ほとんど機能

はストップしているんです。官邸との間は。だからその間というのは、昨日もちよつと話をしたんだが、総理談話が出た時の出発が沖縄政策協議会ですから、特別調整費が五十億ついて、これの調査に三十いくつのチームが入りましたからね。結果的には、それがその間やられとるんです。だからこの対応は、それとの関係で各部署が繋がつとつたんです。ですからおそらく、沖縄政策協議会はやらなくても仕事は続いているという認識を、当時の県は持っていたのではないか。

佐道 まさにそこをお聞きしたいのですが、政策協議会という、大きな公的な、県のトップと国の協議の場ではなくて、各省庁が一斉に入った十のプロジェクトチームの、細切れの議題でそれぞれの省庁が出してくるプランを国際都市形成推進室を中心に議論されるわけですね。もともと国際都市形成推進室を作られたのも先生であり、その室長、実質部長を直接指揮下に置かれながら、先生がいろいろ議論をされていた。その先生がいらっしゃらなくなったわけです。政策協議会という大きなパイプが働かなくなつて、一方で個別の各省庁のいろんな議案が推進室にワツと集約されて出て行く。そうすると指揮命令を下す方がいらつしやらないで、県の側は各日本の、オールジャパン中央省庁との仕事をやらざるを得ないということになっている。

吉元 その間の橋本総理の九七年十一月に沖縄経済振興二十一世紀プラン、これが実は大事な部分なんです。このなかに本来ならば私たちが規制緩和で出したあの大きい三項目、中にたくさんの項目があるけれども、これを基本に入れていくのが目的だったんです。だからタイミングとしては、私がいなくても、この政策協議会の延長線上で沖縄から出した規制緩和の報告に基づいて、これに反映されていく仕組みだったんです。だから「これは総理が策定します。」と、その時期表明するんです。そして翌年になつて沖縄県側からそれに対するコメントを出すんです。県の考え方

を。そしてさらにそれを踏まえて、中間報告が作られ、最終報告が作られていくんです。これが今日、特別措置法に反映されていくという構図になっているんです。

これをきちつと動かしていたということであれば、問題はなかったんです。結局ここに沖縄政策協議会の意味があつて、あとと言われたプロジェクトについては個別具体的な事業の話だから。ここに県がどこまで関わつたかというのが九八年の県から出した、だから県から出す時は私が非公式に関わっているんです。辞めた後だけでも。二月、三月頃ですから。四月ですか。九七年の十一月二十一日に沖縄経済振興二十一世紀プランをしゃべりましたね。復帰二十五周年式典で。ここはもう私はいないですからね。しかしここは文案等に付いては事前に私も相談を受けておりましたから、辞めた後も非公式に官邸との間では相談しておりました。その次にこれが続いていって、約一年ぶりに開かれる九八年の十二月の沖縄政策協議会に結びついて、そして表で九九年の三月段階、四月段階に中間、県の考え方がこれに反映されるために出て行くんです。このところは事実上私はもう相談受けてません。県政が変わつて。だからここからこの中身がずいぶん、今の県政、知事のスタッフとの関係で作られていくんです。

■ 稲嶺県政

佐道 さつき九八年三月の(五)全総の問題ですが、その前の振興開発特別措置法の一部改正で本当は「全県自貿」だったのが「特別自貿」になった。そして全総に基地の沖縄振興を一つの絡みで入れるようになった。これはもう従来とはかなり、沖縄が求めているものとは違う、無視されたんだというお話でしたけれども、その流れの中で、稲嶺さんが登場されて、その中で二十一世紀沖縄振興プランという名前は変わらないけれど、中身が大きく変質した……。

吉元 稲嶺県政が出来た時の十二月議会、翌年九九年の二月議会、実はこれが問題なんです。「国際都市形成構想は否定するんですか。今まで議論してきた一国二制度的経済特別区的経済振興策は否定するんですか」ということで、これは大問題なんです。議会がとまったりするんです。その時に非公式に執行部、知事を中心とした担当部長のクラスを含めて、相談が相当やられているんですよ。僕はそれを後で酒飲み場でしか聞いていない、議会が終わって。実は今の県政の経済担当の三役は全否定だという言い方で、事務局と担当部局——というから企画調整室あるいは国際都市推進室、あるいは担当部長である企画開発部長とやりあいをするんです。その時に問題が出て「これを全否定すると沖縄政策協議会を潰すことになります。橋本談話から出発してらんです。橋本談話の前提がなくなるんですよ」ということで、はじめて県の三役がその仕組みを理解するのです。そして議会答弁を作り替えて、これは継承されているという前提の文章を知事から議会答弁として発表させた、といういきさつがあるんです。

ところが実際問題として、今度のポスト五全総、ポスト三次振計、今の県の新しい振興計画を読んでもみると、国際都市形成構想の私たちが作った流れがそっくり入っている。ところが違う。読みようによつては「なんだ。文章を変えただけだな。底流では全部入つとるな」と思うくらいなんです。表現がちよつと違うけれど。ところが随所に全く違うのが出てくる。それは何かというと、今言った経済政策の部分で、たとえば「全島フリー・ゾーンの話を抹殺するためにどうするか」とかいうようなものが、ずいぶん置き換えられていつているんで、やっぱりサアツと読むとちぐはぐな部分が出るようです。一貫性がないという感じ。あの当時作った産業振興アクションプログラムもバイオから一切合切の領域までたくさん範囲が入るんです。あれは結局「国際都市の議論の中での規制緩和の委員会は、別物じゃありませんよ。この

沖縄における産業振興の枠組み、アクションプログラムを展開するにあたっては、この規制緩和の諸施策はのせて、厚くしていきますよ」というのが、この規制緩和の最終報告書に沖縄審議会に出された、政策協議会に出された文書にも入っているんです。たしか入っていると思います。

そういう意味で言うと、やっぱりそれから今日政権がかわって今の県政になっても、そのまま継承していけばそれほど矛盾した形にならなかった。ただ、全島フリー・ゾーンを実施する、しなということとは、政策上の判断があるから延ばせばいい話なんです。たとえば二〇一〇年でもいいんですよ。あるいは時限を切らなければいいんです、検討課題とすれば。日本全体がそうなるんだから。そういう意味で言うと、全島フリー・ゾーンあるいは三つの当時の県政時代の政策、振興策、経済政策を意図的に消すために、ちよつと無理したきらいがありますね。だから沖縄経済振興二十一世紀プラン、これの後半、本格的の中身からずいぶん。各省庁との許容の範囲に。

佐道 国、政府、現在の規制の仕組みの許容範囲の中で何が出来るか。

吉元 そういうところにずいぶん押し込められていった、というのが現実ではないかな。

伊藤 作業をしている人は同じなんですか。それも入れ替わられたんですか。

吉元 県では担当部長は同じ、今の部長も国際都市の次長をやっておられた方だから同じです。だけど、企画調整室長は全く違う。という意味で言うと、肝心な部分はやはり人事は変わっています。佐道 そうしますと、二十一世紀プランの中間報告が出るくらいまでの段階が終わるまではそうですね、ある段階で変わった……。

吉元 二十一世紀プランが出される段階までは、メンバーは同じ

です。中身をやりたりしました。その後、九九年の四月から人事がガラッと変わりますから。だから実務の段階、県と最終的に擦り合わせする段階からは、つまりこのプランの中間報告をまとめる段階では、もう変わっちゃった、と見た方がいいでしょう。

伊藤 新しい稲嶺知事の県政と吉元先生の関係というのは？

吉元 基本的には稲嶺さんが知事になったわけですから。

伊藤 稲嶺さんはもともと全県フリー・ゾーンに関わっていたわけでしょう。

吉元 経済十団体のトップですから。そして彼が代表して県と話し合って、検討委員会にも入っているし、県の、国との関係のすべてのところを顔を出している。そういうことからすると、相当苦しんで全県フリー・ゾーンを割り切った時の、あれは彼自身が「ほんとに苦しかった」ということを言っとるから。でも経済団体はあれだけまとめた。これは変わらなくて引き継いだ方がよかったですかもしれない。

しかし稲嶺さんが作った新しい県の三役、そしてそれを支えているブレインと稲嶺さんとの間、一緒に関わりをまとめた経済振興策、これがどこでどういう形で、整理していったのか、という姿が見えないんです。俗に言われているのは、琉球大学の三人組といわれている。彼らがそこまで関わったのかどうか、ちょっとそこは分からない。でも大部分は牧野さんを含めて四人組という。これはいうところの保守側のブレインですから、それが選挙の段階からそっくり稲嶺さんにいたし、今日まで一緒だといわれている。やっぱりそこがチェック機能を果たしたと思った方がいいかもしれません。現にそのメンバーはこの四人が四人とも、牧野さんを除いて三人が三人とも、国の審議会、県の審議会などいろいろな公的な協議の場には全部入っていますから。そう見たほうがわかりやすいんじゃないかという気がするんです。

伊藤 先生と稲嶺さんとの間にはパイプは全然ないんですか。

吉元 今年、選挙の年だから言いたくはないんだけど（笑）、一年に一遍は向こうからきちんと連絡があって、九九年も、二〇〇〇年も、二〇〇一年まではきちっと連絡があって、二時間ほどじっくり相談を受けてきました。その節々、毎年違う課題で相談を。平たく言えば、沖縄の経済界と行政の関係など、つまり経済界の人的な将来構成、リーダーをどうするか、という問題などを含めて、相談を受けたことがあります。一年遅れてずれているけれど、だいたいその方向にきているようです。

佐道 稲嶺さんが登場するにあたってシナリオを書かれたのが、さきほどの四人組、三人組、そういう方々だったと思うんですが、実際に公約の台本をその方々がお書きになった、ということもあると思うんですが、稲嶺さん自身はたとえば経済界を全島フリー・ゾーンでまとめるとか、いろんなことがなさっていたんだけれども、稲嶺さん個人は何をなさりたいということでしょうか。

吉元 それはわかりません。それを判断する材料としては、彼が自らの企業で「トップリーダーとして何をしたか」というのがわかれば、わかりやすいです。ここからはノーコメントですね。仕事をするためにトップダウンで仕事をさせる人ではないみたいです。そういう意味で言うならば、一種修羅場をくぐるということがあったのかどうかかわかんけれど、そういう点で言うともあまりその辺の体験があったようには見えない人ですね。淡々としている人です。

佐道 大田県政の中でも規制緩和委員会にお入りになっておられますし、県の経済界の代表として重要なポストにいらっていると就いておられるわけですね。沖縄県として、先生も副知事としていろいろな関わりを持っておられたわけですね。知事選に出られるまでの間、政治的なお話をされることは……。

吉元 ないですね。経済界の皆さんと私が行政の立場から、副知事の立場で話し合うというのは、特定のテーマがあってはじめて

やっているんで。僕も特定のテーマがないと、飯も食わんし酒も飲まんし。あの人なんか忙しい人ですから。そういう意味では頻繁に会ったというのは、まさに経済振興策とか、どうするかとか、あるいは国際都市をどう描くかとか。それは個々のプロジェクトもたくさんありますよ。たとえば海洋博の時のアクアポリスを那覇に持つてくるか持つてこないか等を含めて、いくつか民間が抱えているものに対して行政のバックアップが欲しいというような問題などは、それなりに相談を受けたり。もちろん県内の企業のことですから、あるいはこれからのあり方論ですから、それは行政が出来る範囲を見極めながらも支援することはあつた。出来ないものは出来ないといったこともあつたし。むしろ県の了解を取らないと、国や政治に対する政治的なアクション、沖縄関係施策なり予算なり公共的な需要も引つ張り出しながら。それは県がオーケーしないと駄目だから、というようなこともあつて、それは緊密な関係で展開したのは事実ですね。

佐道 規制緩和委員会とかそういう場にもたくさん参加しておられたんですね。そういう場で積極的に発言される方ですか。

吉元 それほど自ら積極的に、議論が沸騰した中で整理するという役割をする人ではないです。

佐道 役割的には、では……。

吉元 規制緩和検討委員会の中では田中直毅さんの個性を見るとだいたいわかるでしょう。彼が全部切った張った、するから。

伊藤 全体の役回りとして、まとめ役なんですか。

吉元 もちろん民間経済団体の中ではその役割を彼はきちっと果たしています。

伊藤 まとめ役と言っても、自分がこつちの方へ持つていこうというところで、だいたいそつちの方へ集約させていく、というのか、それとも全体の意見を目配りしながらだいたいこつちの方向かな、と。

吉元 ちょっと読めないですね。

伊藤 やはり沖縄の経済界ということ言えば、こういう言い方はあれですけども、りゅうせきというのは一番の企業ではもちろんないわけですね。沖縄経済界の天の声を発する方々がいらつしゃいますよね。天の声を受けて行動される方なのか、天の声にいろいろご意見をおっしゃるのか。

吉元 天の声を出す人にはならないけれど、天の声が出たとしてもその通り従う人でもないし。大きい選挙になると、これは結果論だけれど、ほとんど海外出張でいなくなるし、ということに現に本人が言つて大笑いする。四年前の知事選挙の時もきわどい段階でいなくなつちゃつて、本人説得の場がなかった、「早く帰つてこい」と言われて、せつつかれて帰つて来たら強引に有無を言わさず、ということになつた。自分からそういう場に出て行く人、そういう役割を引き受ける人ではないですよ。

伊藤 地方自治研究センターの理事長という仕事は、それに専念して非常に忙しいというわけではないですね。

吉元 いえ、そうではないです。むしろこの本来の仕事よりは、この間というのは、去年の初め頃までは、理事長時代二年間は全国講演に頼まれて、ひと月二回くらいの頻度で出ていましたから、ほとんどここでの仕事というのは……。

伊藤 それは自治労の仕事？

吉元 いや、講演は自治労だけでなくて、ほとんどいろんな地域団体です。いろんな団体から言われて「沖縄の今、過去、これから」というような課題で、しょつちゅう求められてました。最初、九八年の後半から九九年の初めにかけては、九十年代の沖縄、つまり大田県政の国際都市形成構想とは何だったのか、なぜそれを出したのか、基地返還アクションプログラムは本当の意味は何だったのか、全県フリー・ゾーンと言っているけれど沖縄だけがそういう事が出来るのか、というような素朴な意見が、つまり四十

七都道府県の中で極めて異例な問題提起を、将来を目指したわけですから、単なる基地反対運動とは違う、という意味で。行政のトップが単に走ったんではなくて、県民と一緒に、経済団体が一緒に、この構図はあまりなかったんじゃないか。そういう意味では珍しがられた、というのか、聞きたかったというのが、最初はあったかもしれないですね。

九九年の後半は、小渕政権時代の日の丸、君が代の立法化をはじめ周辺事態法などを含めた盗聴法ですね。さらには住民基本台帳の一部改正問題、今の住基ネットにつながるね。一連の動きとの関連で「どうなるの、日本は」ということとの関連で「沖縄から見た日本のこれから」、「沖縄から見たアジアの中の日本」、つまり沖縄から見える日本のあり方に対する声、意見を聞きたい、というのが中心に。したがって、私は講演する時のタイトルはかなりシヨックなタイトルをつけるんだけど「二十一世紀の日本、改憲に向けて云々」というネーミングで、あとはレジメを作って一時間半くらいの講演をする。これは非常に頻繁にやりました。

伊藤 だいたいは民間団体ですか。

吉元 そうですね。地域の任意的なグループ、それからなんとか団体の記念講演とか、それでも地域の県レベルの平和団体、それからあまり多くはなかったけれど自治労サイドも大会やその他の記念講演で呼ばれたり、北海道などは沖縄の特別県制とか自治政府構想を北海道も勉強したいということで「いやいや沖縄はしばらく出来ないから、北海道走ってくれ」と言って、二、三度集中的に呼ばれたり。

伊藤 それは行政の方ですか。

吉元 行政も入ってます。北海道大学の先生なんかを中心としたグループですね。

伊藤 中央との関係はないんですか。

吉元 中央と言うと。

伊藤 自民党は？

吉元 その種はないですね。

伊藤 講演じゃなくて……。

吉元 つながりですか。

伊藤 意見を聞かれるとか。

■小泉政権の沖縄政策

吉元 九八年の知事選の前に、そうですね、去年ありましたね。去年、塩爺から呼ばれました（笑）。財務大臣ですか。突飛にね。「どうするか、どうなるか」と。

小泉政権の中枢部には沖縄がないんです。あの政権の中には知つとる人がいないんじゃないかって、沖縄がないんです。僕は「小泉さんの政策の一つもない」という言い方をするんだけど。たとえば去年の九・一一テロ後、沖縄への修学旅行が全部キャンセルという状態が続いた時、TBSかどっかが番組を作って小泉さんと呼んでやり取りした時の、その場に沖縄から呼ばれた若者が帰って来て、涙を流し残念がっていた。「沖縄は大変だ。キャンセルされて来なくなって大変だ」と言ったら、小泉さん曰く「ハワイもグアムも同じだ」と。そうよね、あつちはアメリカだね。「その感覚はいつたいなんなんだ」と言ってるね。「ここは日本、沖縄だよ」と言わんばかりに反論しようかと思っただけでも、マイクがなくなつたから。「横須賀も同じだ。基地を抱えているし米軍を抱えている」という言い方をしたんです。その若い観光関係の青年は、ほんとにシヨックを受けたようですね。

伊藤 今、内閣の中で沖縄を考える……。

吉元 ないですね。結局、尾身（幸次）さん一人で、言ってみれば好きな仕事としての大学院大学を一生懸命やっている、というのが沖縄で口さがないもつぱらの言い方なんですが、それは私たちが国際都市構想の中でも出した大学院大学構想で、中身が一緒か

どうか、これは別としても、少なくとも先鞭をつけていた。ある所で稲嶺知事が「これも吉元さんの計画の中にあるよ」と言ったという話が、後で出てマスコミがびつくりしたらしい。

しかし、尾身さんの沖縄への思い入れというのは、基地とか沖縄戦後史とかとは全く関係がないんです。担当大臣であることがまずひとつ、そして自分が何かをしたい、というのが出てきている。だから沖縄に対する関わりは淡々と官僚に任している。しかしこれだけは俺がやる、というのが大学院大学構想だということなんです。それに対して塩爺が「お前さんそんなこと言うけれど、大学設置審議会に相談しとるか」と。それでバタバタしているでしょう。

結局、国としては財政的に基地移設に関わる費用の問題、さらに大学院大学、「金ないよ。優先順位をつけろ」という意味でしょう。ところが「それとこれは別だと。総理の了解を取る」という感じで財務大臣とのやりとりがあった、と言っていたけど。そのうちに自民党の政調会長の麻生さんが「一兆円近くで海上基地を造って、十五年後にまたどこかに造るのか。そんな馬鹿な。国民は納得しないよ。嘉手納統合案という下地議員の提案も検討に値するのではないか」という。そういう発言が出て、政府と党、党内で衝突したり。

つまり小泉政権の中で沖縄との関わりというのは、政策的な、党との関係を含めて整合性のあるような形できちんと整理しているか、というところではないような気がしてね。ただ唯一アメリカとの関係で言うならば、何にもまして優先しようという、そこがすべてだ、というような認識があるような気がします。

佐道 自民党との関係で言うと、今、財務大臣の塩川さんの問題が出ましたけれども、たとえばさつきから議論になっている、三十四項目で十のプロジェクトチームがございましたね。オールジャパン中央官庁ということを先ほど私、申し上げましたが、ひと

つ重要なところで入っていないのが、大蔵なんです。あの中には大蔵の存在はないんです。後で規制緩和の問題や税制等の問題で自民党税調もこれに噛みついてくるし、大蔵省もそんなものは認められないという話になってまいります。その段階では先生はもう離れられていたりするわけですけども、これはどういうふうにご覧になっていきますか。

吉元 大蔵は最初から「規制緩和、税制に関わる部分などについては金を出すのはどうということはない。しかし仕組み、制度という部分に触れるというのはまず最初からノーだ」と。これは二十年前に出来た自由貿易地域、この議論から出発している。特別自貿で、二つ目ね、橋本さんの時に、中身がはつきりした。それ以上のことについては「とてもじゃない」というのがあると思います。だから沖縄がどういう構想を出してこようが、関係省庁の中でさせていいて、それ以上の税制上の問題とか国家の仕組みに関わるような問題、そういう部分についてはきちっとしておこうというのがあると思います。これを左右しきれる力を持っていた内閣はもうない。今の小泉さんの体制というのは、文字どおり財務省の力を借りないとも出来ませんからね。結果としてそうになっている。ですから、今の小泉内閣に沖縄政策がないというのは、まさにそこに入っている。金だけ出す、というだけでも、塩川さんがああいう発言をするぐらいになってきたんです。今までは沖縄に関して基地に関わる費用を値切るということは、百パーセントなかった。これはお家の台所事情といえはそれまでだけれど、僕はそれ以上の問題だと思ふ。つまり、沖縄を三十年面倒見たんじゃないの、と。あ・うんの呼吸として復帰後あった、官僚の中にある三十年。沖縄覚悟しておけよ、というのは、やっぱり継承されていると思ふ。

もう一つは、たとえば沖縄開発庁があった時のように「事務次官になる奴は大蔵から連れてくる。自治省と交代交代だ。振興局

長は原則として大蔵だ」というような仕組みがこの内閣府の沖縄振興局にあるのか、というところとはちよつとわからない。内政審議室に最初に沖縄政策協議会を作つて、事務局を担当したというのは、最初は担当室長はたしか大蔵から来ていたと思います。そのあと通産から来た今の安達（俊雄）さんに代わつて、安達さんが今、統括官。ここまでできたんでしよう。それを大蔵が取らなかつたという意味は、そこにあるんじゃないですか。

佐道 仕組みは動かさずに済んだ、ということが前提で、そういうことになるんですね。

吉元 そう思いますね。だからこの県政の四年間の歩き方を見ると、つまり沖縄振興特別措置法は、時限立法の十年ですから、抜本改正の前に今がチャンスだから、これだけ蓄積してきた中身をご破算に、潰せと言われたから潰したはず。だから許容の範囲という形で終わるといふのは、やつぱりそうだと思います。その枠の中にきちつと納まつていくような形でやられたいと思います。

佐道 もうひとつ重要な問題としてあるのは、梶山さんが官房長官の時代は、これは昨日も伺っていますが、一国二制度という話をかなり議論をされていた段階があつたと思うんですけども、いろいろ経つ間に先生もいらつしやらなくなつて、今のよう到大蔵が、税調が噛みつくというような時期になつて、一国二制度的な、仕組みを大きくいじるといふようなことはしないという流れになつていった。その一方、県のポスト三次振計に繋がる沖縄振興二十一世紀プランというのは、内政審議室を中心に議論がされて結局向こうが中心になつて作つていく一方で、北部振興策というのが具体的に国と基地所在市町村が直接つながる形で進行してまいりますね。これはすごく意味が大きかつたのではないかと思います。

吉元 北部振興策の原点は基地所在市町村懇話会です。梶山さんが出発させた「島田懇」です。それを見ていて次に出てきたのが、

本音で勝負しなければいけないかつたのは、普天間の移設のあの場所と隣、隣接する地域の振興です。これは名護と限定できないんです。三つの町村にまたがるから。結局それをどうするか、という話なんです。

それから北部という体質がありまして、名護市を中心に「北部は一つ」だという仲間意識が非常に強い。逆に言えば中南部に人間が百万住んでいますから、公共事業が集中する、そこは先に伸びますから、結局、北部が切り捨てられ、残されている。手をつけられていない。「俺たち捨てられている」という認識が常日頃から強いんです。振興開発計画の中でも。だから過去三十年、二十年は振り返つてみてもそういう言い方をする。だけど振興開発計画の中で必ずしもおろそかにしているのではなくて、北部の特性、つまり山と海とリゾート地を前提に、逆に言えば手をつけられない、という形になつてしまふ。「この際、基地を押し付けられるんだつたら、迷惑施設だから俺たちの振興策も作れ」。つまりこれは北部中心の名護市が叫んだことなんです。当然名護市に基地を持つていくから辺野古と三つの集落に関わる。政治的には、名護市だけで孤立するよりはみんな一緒に金を取つてみんなで責任をもとう、と。つまり北部圏域で反対をなくすという前提です。これが保障されると金は出ます。あくまでもあれは北部振興策というよりは、基地受け入れのためのお金を出した、という話で受け取るべきだと思います。

佐道 まさにそのとおりだと思います。もう一つあるのは、たとえばついでこの間岸本さんが講演会で何をおっしゃつたか、という「北部振興策は北部全体をいかに活性化させるかで考えるべきである。従来は各市町村が思い通りに勝手にいろんな事をやってきた。ばらばらにやっているので、これではいけないのではないか。だから北部全体のことを考えるようなプランにするべきではないか」と岸本さんはおっしゃっているわけです。北部のいろん

な首長さんのご意見では「振興策については県は通さなくてもいい。国と僕ら直接やるから」という話が出てくるわけです。そうすると基地所在市町村と国が直接パイプでつながった。県は県で振興策でいろいろたくさん総花的にやっていると、基地所在市町村にこうやってピンポイントで落とされているし、これでもうだいたい沖縄は全体がつかめたな、ということですか。

吉元 そのやり方が実は琉球政府時代の高等弁務官のやり方だったんです。高等弁務官は水、電力、石油、この三つを握ったんです。そして電力については配電会社を作らせて、アメリカが作った電力を配電会社に売って、配電会社が民間の家庭や工場まで引っ張ったんです。これは復帰までそうです。だから沖縄電力を作った時に配電会社を統合して、県庁も出資して沖縄電力を作ったんです。水道についても公社があった。それからエネルギーについては特定な琉球石油を中心にああいう形でやっちゃったから。つまりこのことで吸い上げた果実である資金を、今度は高等弁務官が基地、アメリカとの摩擦を起こさない、あるいは文句のあるところ、首長選挙にかかわる部分などについて、そこに重点的に直接補助金をおろす。もちろん琉球政府を通さない。弁務官が直接おろすんです。視察をしてすぐ。「弁務官資金」という言葉がある。

これと同じ事が今、始まっているんです。これは必ず失敗します。現に中部の市町村は中部振興資金を取ろう、と言っている。現に今、嘉手納基地を受け入れているではないか、という話なんです。だから昨日もちょっと話したように、防衛施設庁の基地周辺整備資金という仕組みがあるでしょう。これでは足りなかった。ということでは梶山さんが善意に考えた、特別交付税の中にも入っていない部分はどうするか、ということで作った。さらに島田懇とは別に今度は地域ブロックとして特別に北部に普天間移設の迷惑料として出した。それでは基地の迷惑を被っている今の嘉

手納基地の住民は、俺たちも取ろう、というのがもう出とっている。「中部振興資金」を取ろうという言い方をしている。こういうやり方をする、南部もまた要求する。基地の被害は全部一緒だ、ということ。で、「弁務官資金」と同じような構造に今、どんどんなっている。これは何かというと結局日本政府、これは自民党も問題だけれども、政権に沖縄政策がないからです。基地をなんとかするためとにかく金をぶち込む。文句あった金を投入する。こんなことしたら、じゃあ問題がたええの話ですよ、今の普天間移設が名護のあそここの場所に造れないということになったらどうなる？一つは環境問題で、一つは市民運動、県民運動のために。前にも言ったように、六〇年代にベトナム戦争中に天願橋、これは軍の棧橋ですが、天願ピア、そこにストックヤードを造るための基地を建設しようと、新たな土地を収用しようとした時でさえ、県民運動、座り込みが始まって、大闘争に発展して指一本触りきらん。布令で強制的にやれる力を持っているアメリカでさえ、やりきれなかった。今の時代に環境問題も含めて国際的な連携も、あるいは市民の運動・県民運動含めて、行き詰まり、造れないといった時に、北部振興策とか名護地域振興策とか名護市への金融特区、これを元に戻しますか。全部はがすという？結果的にそういう問題が出てくると何のためにこれをやったの、という責任が問われます。

結局基地を抱えている市町村、そういう単位の要求に直接つながるやり方は、いくら地元が要求したって、それを認めるといのはおかしいです。将来ビジョンをもった沖縄政策がないから、結果的にそうなる。それよりも沖縄全体を次どうするか、という方向に持っていくのが筋でしょ。ところが今度の三振計の次の振計、今新しい振計の中に圏域別振興策というのがあつて、北部圏の振興。ここの最初に基地移設、SACOが出てくる。こんな話がどうしてあるの。十年間の振興計画ですよ。SACOの今

の普天間移設は三年間で環境アセスをし、それから実際のゴアのサインが出た、といつても四年から五年。そしてそれから着工したとしてもだいたい短くて九・五年、約十年とみよう。あわせて十三から十四年でしよう。十五年使わずという。二十八年、約三十年。そういうやつを頭に置いて、どうして今のような補助金のおろしかたが将来的に安定的なものになると思うのかな。

今の政権、小泉政権。森政権からと言った方がいい。小淵さんの時代までは、何をしようとしているか見えた。僕は辞めた後だったけれど。沖縄に対して何をしようとしているか、見えません。今は見えないんです。沖縄から持ち込んでいない、ということも問題。これは原点、出発です。出発だけれど、そればかり言っておれないです。

佐道 その問題で重要な点は二つで、今、先生が指摘された問題、政府に沖縄に対する確固とした方針がないから。今の振興計画などを見ましても、県もこの流れで容認をしているのではないか。

吉元 そういう県政を作った、ということ。そういう知事を選んだ、選ばされた。選んだのは県民だけれど、そういう知事を作るために仕組んだ。それが九八年の流れです。出発はすべてSACOから出発した普天間の移設、「海上基地ノー」と言った。そこから始まったということ。

佐道 その中でもう一つ問題になるのが橋本さん、梶山さんといった方々が、いらつしやいましたね。さつきも一國二制度を梶山さんも議論されたということをお話ししましたけれども。それがある段階から、たとえば野中さんが苦東移設案を潰したという話がありますけれども、自民党の中でも沖縄問題に対するパイプが微妙に変わりかけた。昨日のお話の中でも、政府と党とずれが出てくる、という話がありましたけれども。

吉元 今日の日はもつとひどい。

■沖縄を取り巻く国際情勢

佐道 野中さんがいて、鈴木さんがいてという。もちろん小淵さんは一生懸命おやりになろうとした、ということがあると思うんですけれども、そういういろいろ自民党の中での沖縄問題の関わり方の変化、これは影響が大きかったんですか。

吉元 沖縄から見ると、森さんから、変わったと思います。それはサミットです。サミットは九七年の年初に大田さんと相談して「SACOが終わった。問題がある。兵力削減はない。しかし無視できない」。まず一つは、「受け入れるかどうかは当該市町村、自治体が、住民が第一義的には判断すること。それを踏まえて、県は全体的な視点からやろう」という話をした。もう一つは、「次の目標として兵力の削減を明確にしよう」と。それは何かと出出したんです。あわせて、もう一つ、「サミットを沖縄に」呼ぼう、と。そしてサミットできちつと沖縄を軸に東アジアの中で将来的にアメリカと対決、対立するであろう中国の江沢民を呼ぼう。テーマは「人間の安全保障」。これを具体的に役割分担して、知事は総理に、私は官房長官に、その上、私は各政党を回った。

それは何だったかという、一つは朝鮮半島の問題をどう見るかということとの関連。二〇〇〇年のサミットを沖縄にさせることによつて、ちょうど私たちの持つていこうとする流れ、二〇〇一年から全県フリー・ゾーンも含めて。その流れと、そう大きな乖離のないままで持つていける、と。私たちはSACOで終わるんじゃないかと、その次を目指すとしたら、やはり海兵隊だ。そこまでは視野に入れておこう、と。具体的なアクションプログラムを出してあるわけだから。そういう意味で県民に絶えず、今の問題で終わるのではないから許容の範囲は許容していこう、というメッセージを出しながら、次の目標として、兵力が動いていない

から、「次は兵力削減を目指そう」、こういうことを立てたんです。だからサミットの二〇〇〇年は私たちに言わせれば、ひとつの節目になる。二〇〇〇年以降は具体的にSACOIIを求めたと思いますね。明確に。

梶山さんが三年ぐらい海上基地を担げんかといった時の話にもう一回戻るんだけど、やっぱり梶山さんは朝鮮半島のことを睨んで言っていた、と僕は理解した。だからそのことを、真剣に受け止めて大田知事とも相談した。三役とも相談したし、県庁のスタッフとも相談した。同時に政党とも相談し個別に話しをした。積極的に自民党県議会野党にも相談した。なかなかまとまらんから、支持団体、労働組合、すべて政党も共産党まで含めて集まってもらって、三役、大田さんとの議論もさせた。大変な議論をしたんです。結局は共産党さん以外はローカル政党さんも含めて、最終的には「知事に任そう」、と。しばらく担いでいけるのか、アセスで引っ張っていけるか、ほんとにそれで固定化されないか、という最後の判断は知事に任そう、という話だった。これは九七年の夏ですよ。

これまでやりながら海上基地問題は真剣に大田県政も受け止めて動いた。で、同時に名護市民投票の動きも始まっていたんです。そして結果がああなる。ですから、そういうことを考えていくと、私は少なくとも、いま当面する課題も頭に置きながら考えると、大きな枠組みとしてはそう間違った判断はしていなかった、という気がする。

「アーミテージ・レポート」を見た時に、それは私たちが描いた枠組み、レポートを作った、書いた、あるいは分析の素材をメンバーに提案した情報源に。ここまで細かく沖縄問題を把握しているのか、という感じがした。それはアーミテージさんの個性だけではない。二〇〇〇年の六月に金大中が北朝鮮に行ったんですよ。七月に沖縄サミットです。九月にオルブライト米國務長官が

北朝鮮に行ったでしょう。十一月ないし十二月といわれていたクリントンの訪朝、ブッシュのブレーンがノーと言った。それで終わったが。「アーミテージ・レポート」は十月に出ているわけですから、それは確実にブッシュ政権の中心メンバーに引き継がれている、という認識を僕はしておいた。

しかし、二〇〇一年の段階でブッシュが来て北朝鮮政策の見直しを出していく。「ちよつと待てよ」と思いながらも、枠組みとしてあれはくずれんだろうと。大きなずれはないだろうという感じがした。つまり言葉を変えて言うとならば、もう一つは沖縄側の議論の中でもう少し議論が出来るとするならば、日本が全体的に集団的自衛権の問題と憲法改正まで、とは言わんけれど、そこまで持ち込みが出来るならば、ということがいくつか条件があるけれども、それを踏まえた上で沖縄の問題をどう処理するかという方向が見えていた。

ランド研究所の報告も出ました。これはラムズフェルド国防長官就任前のものでです。それを見ながら、沖縄の南部、離島に、これは下地島のことでしょう、台湾有事を前提とした流れで沖縄の在日米軍基地を見た場合、何が最後に残るのか、どこにウエイトが置かれているのか、全部見える。でも、九・一一テロ以後をみても、そのずれ、遅れはあったにしても、量的な大きい小さいはあったとしても、僕はアーミテージ・レポートの枠組みはそう大きく変わらんと思う。

むしろ、アメリカ側はそれよりもっと積極的に、かつて追い出され、憲法改正までされたフィリピンにどうコミットするか。社会主義国ベトナムにカムラン湾を中心はどう関わるか、ベトナム政府が許容するかということを含めて。同時に南沙諸島の問題を頭に置くと、やっぱりアセアン地域フォーラムとの関係で、むしろシンガポールはアメリカの方にもっと使ってくれ、でしょう。そういうのを睨んでいくと、アメリカはいつまでも沖縄で海兵隊

のすべてを前提に将来を描く、というのは無理が来ているような気がする。だから、ひとつグアムをもう一度どうするか。あれだけの「財産」を、基地としての財産をどうするか、ということを含めて。グアムから測ってみるとそれほど大きな違いはないです。だけど台湾問題が最後まで残りますから。それは台湾問題が、台湾に住んどの人の結論が出るまでは、しかも中国の軍事的な強硬介入を抑えながら、平和的に時間をかけて軟着陸をさせていくという道筋がまだ見えないけれど、それは国際的にはつくっていかんといかん課題だから、そこも睨みながら考えても、やはり近い将来、海兵隊の問題というのはアメリカ自身が先に手をつけなければいけないだろうと、見ています。

伊藤 朝鮮問題はどうですか。

吉元 僕は二年前に朝鮮に、大田さんを団長にして、百二十名近く沖縄から連れて行った。これは朝鮮問題を沖縄のいろんな人々に意識させようと思って。学者だけではなく、文化人だけではなく、労働運動や地域運動、平和運動をしている人を連れて行ったんです。その三日くらいの間に何を掴んだか、というところ、行ってきたことよって日常的に関心を持ち、情報を自分にインプットさせるというのが目的だから。

あの時から言っているんですが、北朝鮮は経済的に破綻するという言い方を私はしているんです。それはもう見てその通り。それは今回いみじくも出たような気がする。でもそれだけであの国が崩壊するとは思わないし、言ってみれば軟着陸。東ドイツ方式ではない、軟着陸をどうさせるか、という意味で言うならば、時間がかかっても直接的には南の仕事、日本がどこまでサポートするかの役割。ロシアはやっぱり極東に関心を持ち、強めてきた。中国はあんまりうるさいと少し距離を置くが、金正日を抱きかかえながら、暴発させないペースでながら、少し経済政策の指導に入った、と言っている。たぶんこの一、二ヶ月後には二、三ヶ月

前にも情報が出ていたんだけど、金正日は極東ロシアの経済視察に入ると思います。だからプーチンとの対談もそこで行われるだろう。そうすると当面暴発はもろくないけれど、ここまで来るともう行き詰まっているから、後はアメリカと真つ正面からの話し合いをどうするか、日本との付き合いをはじめないとアメリカからいい返事はもらえんし、いい返事をもらえんと日本も金を出さんし、という構図だから。何よりもやはり中国から少し距離を置かれたということに対する北朝鮮のあせりがあるのではないか。この間の銃撃戦は暴発だと僕は見ている。結果的には遺憾の意を表明、という程度で終わったけれど。今度の付き合いはもう紆余曲折はないだろう、と思う。それは何かというと、これは読み過ぎかもしれないけれど、情報としては、アメリカのイラク攻撃が本物のように見えて来ている。この際あの銃撃戦の延長線上で、南との対決を構造的に煽っていたら、北はもつと、「悪の枢軸」論の一つですから、アメリカの出入を非常に危険視するロシアが、北朝鮮に相当大きなアドバースをした節があると思う。それはロシアとアメリカの今日の関係を見ればわかります。

伊藤 ロシアとウラジオストックで条約を結んだんですよ。

吉元 はい。韓国と中国の経済的な連携というのが非常に進んだことで、むしろ北朝鮮の方が焦っていますから。こういう点がある国の中からでないけれど、見とつたらやはり一つ一つそういう流れ。そうなつてくると、次に私たちがいつも言うんだが、朝鮮危機から台湾有事だよ、と。沖縄の基地は台湾有事を睨んだ。あわせて九・一一以降が東南アジアのゲリラ対応のための機能としての海兵隊の役割、これは見直しが始まる、と。しかし沖縄でなければならぬという理由にはつながらない。沖縄の方がいい、いいけれど沖縄でなければならぬという話にならん。じゃあどうするか。という話でね。ここがこれからの一、二年の沖縄の課題じゃないかな。

佐道 長期的なアメリカが恐らく見直すであろういろいろな事を、それを見据えながら沖縄も考えていかなければならない……。

吉元 はい。二〇〇八年の北京オリンピック、これはモスクワオリンピックと同じように、七九年のソ連のアフガン侵攻、その直後のモスクワオリンピックはボイコットされたでしょう。それをよく知っているだけに、今の中国はそんな馬鹿のことはしない。だから二〇〇八年までに台湾問題については有事に繋がるようなことはない。もちろん口で攻撃はやりませう。

それは何かというと、すでに「二〇〇五年には方針を出す」と江沢民が言っているんです、九六年の段階で。二〇一〇年には台湾問題は決着をつける、解決する、と。これは変わらんとする。

これを押さえた上で、それでは中国の福建省を中心とした部分に配置し始めたミサイル問題など、報道の範囲でしかチェックできないけれど、それをひとつ頭に置きながら、一方で台湾の経済が落ち込み始めて、ポスト香港が台湾ではなくて、ポスト香港は文字どおり上海になっちゃったから、上海に全部台湾の資本が流れ始めて止まらない。「三通」以前の問題として止まらない。台湾は投資の制限をしていた法律の枠を取っ払いましたから。そうやってくるとあと残るのは、中国との間で台湾政府が台湾のあり方をどう作るかの話でしょう。台湾の当時の国民党のシンクタンクも、今の陳水扁さんの若手の学者グループといわれているけれど、私に会いに来た。沖縄の自治政府構想などに興味を持ち、いろいろ勉強している。つまり、香港ではない、一国二制度というのが本当に模索できるのか。これは従来より緩やかな形で、北京政府からは台湾に投げかけられています。

そうするとあと残るのは、それでも不安だとするならば、二〇一〇年の上海万博の前に、ということはないでしょう。結局は、基地返還アクションプログラムで私たちが描いた二〇一五年までの間尺の中では、台湾問題で大きなドンパチが起こることは、常

識的に見た場合、ない。そうするとあと八年ある。沖縄の海兵隊はそのままでいいのか、という議論はやはり問直されていきま

すよ、県民に。

佐道 沖縄県民の中から？

吉元 そうですね。なんでそこまでね。アメリカの海兵隊はそのままというのか、という話です。そこが、今、稲嶺知事が出している「十五年問題」とぶつかつた理由なんです。普天間の移設がそれまでにできないんですから、施設が。その後十五年間認めるんで。ひよつとすると「いらん」というのに「もつとおれ」と言うのか、という話です。これは本当に笑い話、と酒飲みながら若い連中から出る言葉なんです。これほど矛盾した話はないよ、と言っているんです。だからアメリカがノーと言っているんだから、幸いだから、そこで出てきたのが下地幹郎案ですね。それがいいか、悪いか、という論議よりは、それもひとつの自民党という枠組みの中の議論だよ、と。

何度も言うようだけれど、小泉政権の中には沖縄はない。というところで、自民党の中で議論が始まった。地位協定問題もしいのか、在日米軍基地。これは確実に自民党の若手、地位協定論議のあの連中、出てきますよ。もちろん日本自身の集団的自衛権の問題、憲法改正までいかなくても解釈、改憲ということに踏み切ることも含めて。そこまで読んでいくと、アメリカからせつつかれて二〇一〇年を待たずにやるんじゃないですか。その時がひとつの、海兵隊問題の決着をつける時期だ。それでも海兵隊を残すというのなら、何のためにというのを国民から問われる。そういう意味では、基地問題を真つ正面から自民党の若手が取り上げるよりは、地位協定問題に対等なパートナーシップを目指してやるとするならば、正論でしょうね。

伊藤 そつちから行くということですか。

吉元 たぶん行くと思います。自民党、つまり県内でも県議会やその他も地位協定については、全面見直し、決議を五十二の市町村の内、四十八までやってます。もう県民的コンセンサスは終わっていますから、あとは中身の問題。中身の問題は、大田県政の時、九六年に十項目の改正案を出しています。稲嶺県政になって環境問題をつけて十一項目出していますから。それがベースになって自民党の中で議論が始まった。彼らが八月一杯は勉強会、たたき台作り、九月である程度完成しよう。だから九月になると、あるいは八月から始まるかもしれないが、彼らはグループを作ってアメリカに行くでしょう。そして議論が始まるでしょう。

そうすると小泉政権やあるいは外務省という窓口とは違う動きが政権党の中に出はじめる。これをアメリカ側がどう受け止めるか、国務省は。アーミテージがおるといふ安易さというわけじゃないけれど。今のブッシュ政権がやろうとしている、中間選挙を前にした、MD計画を含めた予算の問題などを含めて、経済問題を抜きにするけれど、もう少し民主党との間のかみ合いがきちっとおさまれば。テロ戦争というのは見えてきましたから、後はチャンネルを作って最後に残ったイラクの問題、アフガン以上にとの程度協力体制が国際的に出来るのか、国連抜きに。そこまでやりそうな気がするんだ。そうだとするのなら、この一、二ヶ月間に動く自民党の若手の連中がそれも含めて日米のあり方、在日米軍基地のあり方、これをすごく問われるでしょう。

伊藤 基地の問題というのは日本側がどう対応するかという問題と同時に、アメリカが世界情勢をどういうふうに見て世界戦略をするか、ということによって決まる方が大きいと思いますか。

吉元 私は自民党のこの若手の連中の中で、名前は「言うな」というから言わないけれど、この話をしているんです。もう一つは「これは経済戦争だ」と僕は言っているんです。「東アジアの中の経済戦争です。アメリカにとってみれば中国というマーケット

をどうするかという話です。将来的にはインドというマーケットをどうするかという話です。もう少し言うならば、サウジを中心とした中東のエネルギーに頼らなくても、ガスと石油が確保できる中央アジアの利権の問題です。ビンラディンが犯人でなくてもいいんです。だからアフガンですよ」と。それはみんな知っているんです。そこは、情報としては。だけど本当か、そこがひとつ。

そうだとするならば、中国にとっても同じ事だから。これから経済成長の中で、エネルギーをどうするか、という話です。これはやっぱりロシアから買うか、でなければ尖閣の周辺の海底油田を探るか(笑)。こんな非効率なことを領土問題にも発展するかやらんでしよう。そうすると中央アジアでしょう。それはアメリカと中国のぶつかりあいでしょう。だからアフガンの戦争を利用して、パウエルは「何タスタン」という三つの国に手を打った。基地を置いた。ロシアはそれをけん制しているけど。ロシアだって自分の石油を売るためにパイプラインを大いに使って。アメリカはこの間ロシアと手を打ったのはエネルギーをくれるという話だから。

そこまでやっておいて、あと残ったのは日本のエネルギーの問題でしょう。日本だけがうまく行っていない。でも今度のアフガン問題で護衛艦を出した、船を出したということが、ある意味では中央アジアからのアフガンを經由……。そして、ここですね。まさにここですよ。今問題になったのはトルクメニスタンです。アフガニスタンのパイプラインでしょう。一千何百キロ。パキスタン、インドまでの話ですね。南を通るかどうかわからないけれど。ここに支援に行った自衛隊の自衛艦の役割、そういう意味で言うならば、日本の新たなエネルギー政策、つまり中東に対して対等な平等な形、どこにも、ソ連にもアメリカにも組みしないで付き合っておった、安定的な供給をやっておった、これがいざというときどうなるかわからんよというときに、今度このこと

関係で確保されたという感じをアメリカは信用しとった。これは俺が説明したら、社民党の連中から怒られたけれど。お前はどの味方かというから、冷静に考えろと。これが一つ。その上でシーレーンの話でしょ。どうするかの話。これは夢の話ですか。

伊藤 台湾海峡が問題です。

吉元 そうですね。そういう意味で言うならば、朝鮮半島が中国を包囲する右腕、これ、左腕。ここが喉元。この喉元からブッシュは中国を刺激している。ここに軍事力を強化しておこうと。そうじゃないだろう、と僕は言っている。ここに強化するという意味は、ここを緊張させるだけだろう。そのためここを強化するために台湾の要請も含めて、沖縄の米軍基地をそのままにしようとしているわけだから、そんな馬鹿な話はないだろう、と。ここは中国のものなんだから、たとえ一国二制度になっても。そうすると台湾の問題と言うのは、やはり沖縄にとつてみるならば。

私などは国際都市形成構想の経済施策の中で、琉球と台湾と福建省の三つで蓬莱経済圏構想を出して、一緒に動いていた。中国からは知事、副知事は台湾に行くと言われた。勤務時間中に行っていないです。連休中に行つとるんです。大田知事は正月休みに行く。行ったことは彼らも知っているけれど、僕は別に旗立てて行ったわけではないから。だから、きちつと話し合つて。

そういう意味で言うならば少し民間外交を沖縄に任せてもらう。この領域の。アメリカがやるよりは、日本がやるよりは、沖縄にそれだけの役割を持たせてくれ、というか。台湾と中国との関係を含めて、尖閣問題を含めて、うまく処理していきますよ。

■ 沖縄の将来に対する期待と現状の不安

佐道 非常に面白い考え方だと思つてますが、たとえばそういうふうな沖縄にそういうことを任せてもらうように仕向けるには、どうすればいいのか。先生はおやりになりましたが、そうそう人

材がたくさんいるわけでもないと思つて、具体的にはどうしますか、という問題が出て来ると思いますが。

吉元 そういう意味ではこれからの五年、十年、まさに十年というのが沖縄にとっては最高の仕事をする時期でしょう。枠組みとしては国際都市構想を出した理念、そして仕組み、それは変える必要はない。今の県政の中でも経済政策の部分ではずいぶん潰されたものがあるけれど、それはもうこだわる必要はない。理念とかなんとかというものはそつくりそのまま引き継がれているから、私はそれでいいと思う。新しい振計も。

しかし今の新しい振計、十年計画の中で、決定的に不足なのは元に戻つた、ということですよ。つまり「沖縄」になつちやつた、ということですよ。沖縄と東京の関係になつたんです。それを脱皮しようとしたんです。それが元に戻つちやつた。これを今度はもう少し、もつと広げていこう、外に目をむけよう。東京と那覇との間で、同じ距離に北京が入るんですから。そうだったら、なぜ遠い福建省との距離は同じなんです。そうだったら、なぜ遠い東京まで行かすか、と。沖縄から少し勝手に動かしてくれという意味で、沖縄の気持ち、県民自体、経済界自体が、あるいは地域の政治家自体が、その気になつて。

だつて行政としてはすでに福建省との間では技術交流までやっているんです。農業、水産業。かつて、五百年前は向こうから芋ももつたけれど、今は沖縄の農業試験場で品種改良した苗を持って行つていんです。サトウキビの改良品種まで。台湾からもらつたけれど、今、台湾との間では果実の品種の交換までやつているし、それはこの間やつて来た。確立したルートがあるんです。沖縄県の農林水産部長と台湾の台北市の農林部長と五年単位で直接協定を結ぶんです。そして技術交流をやるんです。こういうのはもちろん戦前から切らしてない。そういうことが周辺の国ではなく地域との間では日常茶飯的にやつていける。

軍事的な仕組みをゼロにしる、と僕は言わん。言わんけれど、今のままでなければ駄目だ、という発想には立たない。県民的に言っても。やはりスリム化すべきだと。県民合意として成り立つとするならば「嘉手納は仕方ない。ホワイトビーチ？仕方ない。海兵隊？あれはもう全部撤退しろ。必要だとするならばストックヤードくらい置いておけ。どこか？キャンプハンセンくらいか、シユワブか」という話だ。「じゃあ本体はどこに持っていくの？岩国に持つていけ。あと五年、七年で出来上がる。三千メートルの空港。水深十五メートルの大港湾が出来る。その上、なんで沖繩にまで作るの」ということになる。ですから四年前の選挙の時に、突如として稲嶺さんが言った十五年使用とかいうような問題は、この四年間で随分変わったから、あれにこだわらないでもう一回、見直す。三年間の内に、つまり環境アセスをやっておる間に見直す、という機運を作るには、今度の知事選挙で大変重要です。佐道 そうですね。しかし一方で四年間で変わったというその変わり方の中身としては、先生がおっしゃるのように、もう少し自治体外交的に沖繩にいろんなことを任せる。その沖繩にある兵力規模だっているんな見直しが出来る。その通りだと思っんですが、しかしたとえば先ほど申し上げた、北部振興策で基地所在市町村には直接お金がおりてくる、二十一世紀プランをもとにした沖繩の新しい振計で、また従来の三次までの振計と同じように国からのお金がおりにてくる、高率補助金もそのままという仕組みが、とりあえず残ることになる。しんどいことをやるよりはこれの方が今のところ心地よいし、いいんじゃないかという……。

吉元 北部振興策十年間で一千億円は、公共事業が多いだろうという期待が相当土建業にはあるんです。土木建築業でね。それと基地の移設、普天間の移設を含めてだが、相当沖繩のゼネコンに期待を持たせている。一方で道路、港湾、空港という国の公共事業は減っている。これは九七年からどんどん減っています。もつ

と減っていく。そのことを埋め合わせをこれでできる、という発想なんです。それが一つ。

もうひとつは自治体は市町村合併を目の前にして、やりたくないんです。沖繩は十キロ村が外れると言葉が違うんです。同じ沖繩の方言だけれど、やはり違うんです。というほど個性がある。強いんです。そういう意味では市町村合併はなかなか出来ない、ということなんです。市町村財政からいえば、全部飛びついているんです。金を貰いたいのは公共事業です。何か作りたい。公民館を立て直したとか。これはなくても市町村はつぶれない。そこに住んでいる住民もつぶれない。ということであるならば、もう一回こんなあぶく銭取らんでもいいんじゃないかという話を誰がやるか、ということ。それは基地がなくなるなら、たとえば普天間の移設がどうしても実現できない、県民がいがみ合っただうにもならん、社会情勢も軍事情勢も違ってきたというんだったら、これは誰の責任かという責任の問題とは別。そこにうまくシフトしていくような役割を誰かが持たないと。今の知事が十五年、十五年と言いつけたら大変なことになります。全く変わらんから。そういう意味では、下地幹郎さんの提言というのはすごく大きな問題だけれど、こういう考え方もあるよという提言。しかも自民党の中から。そういうやりかたをしないとそっくりそのまま残るという、今のままで。

伊藤 しかし、自民党にしか期待が持てなかつたら……。

吉元 そこで出てきたのが麻生太郎さんのあの発言だった。「ちょっと待てよ。彼は政調会長だろ」という話です。麻生政調会長の発言というのは、つまり下地幹郎さんの普天間の嘉手納統合案も一つの考えだ、見識だ、という言い方というのは表現もうまいけれど、すごく大きな政治的メッセージだと思います。小泉さんは終わり。次は誰がやるのか、ということこれはセットだと思います。それは自民党の中でも、地位協定なども含めて、旧態依

然とした自民党を変えなければいけないというグループは、確実に小泉離れが、派閥と関係ないと思う。あれは一つの力になる、という見方をしている。だから呼ばれたら僕はアドバイスするんだけれど。そこがひとつの今までなかった、つまりかつて私がいった橋本派、小渕派という意味での政権作り、枠組みが使えないとするならば、どこに作るか。民主党も頼りにならない。では、どうするか、と言ったら、やはり政権党の中軸である自民党の中に出来上がったこの部隊、それはストレートに普天間問題ではないけれども、地位協定問題ですからね。真面目に勉強してもらったことによつて、ここから切り拓いていく。通常国会まで五、六ヶ月でしょう。たいした長さじゃないですよ。

伊藤 それはこのフォーラムとは関係があるんですか。

吉元 ほんとはそう言うべきでしょうが。実は一昨年から呼びかけをして、去年の夏頃から始めた研究会があつて、東京でやつとるんですが。

伊藤 それはこのフォーラムとは関係があるんですか。

吉元 いえ、全く。軍事同盟を破棄して、平和友好条約。あれを作つてやつてきたんだけど、それにいきなり行くとは思わんよ。だけど、今の日米軍事同盟である、日米安保条約が、そのままの形でまだ後生大事に御輿に乗つていこうとするのは、問題だ。憲法を見直すくらいなら国際条約であり、軍事同盟である、日米安保を見直して、そしてはじめて日本が持っている軍事力をどういう形で憲法に位置づけ、どういう形で国際的な位置づけの中でパートナーシップを作っていくか、ということ抜きに議論できるはずはない。

伊藤 それはその通りです。

吉元 そうだとするならばそれは誰がどこにさせるか、となると、政権党にさせないという意味がないでしょう。政権党にさせるとすると、悪いけれど社民党にだけ頼つてはいかんでしょ。それは究

極の目標まで変える必要はないけれど、当面する課題に到達するまでの手法ですから、戦略的な手法をどう持つて行くかの話ですから、それはもうありとあらゆる……。このフォーラムの仕事であるはずなんです。

伊藤 このフォーラムですか。だから、ずっと協議会を作りSACCOを作り、というこの形を作つていつて、それがポシヤッタ。

吉元 これを再構築するために全国行脚をしてきたけれど、やはり温度差がある。基地のないところで基地のことを喋つてもなかなか。外国人を見たこともない人のところで危ないよといっても仕方のない話で。

伊藤 それはその通りですね。

吉元 やはり運動している部分で政党ともつきあつてきた。でもやはり沖繩問題は沖繩問題です。沖繩の中でもう一度、構築するとするならば、ということ去年の十月にこれを立ち上げたのは「ここにいろんな人が手を挙げて相談に来なさい。あるいはまた一緒に酒を飲もう」。だから経済界の若手の連中が飛び込んできたり、全くの市民運動の連中が来たり、明確な政治的な目的を持つてくる人が来たり、いろいろあります。いろいろありますが、そこで押し付けるつもりはないけれど、今どうなっているか、何が問題か。「過去を見る」、「今を読む」、そして、「将来を見通す目を」、この三つの言い方でね。

伊藤 それはわかりました。だけれど、やつぱり県政を奪還しないことにはこれではできないんじゃないですか。

吉元 その通りですね。それは無視できないより効果的な手段です。

伊藤 そうするとやはり官邸とあるいは政権党とのつながりを作るために……。

佐道 沖繩県がやると強いんですけど。

吉元 だから県をどうするか、という話の一つある。でも、県を操作しても「乗り越えずに」という流れの中ではどうしようもな

い形になってきたから、やはり向こうも変わってやらわんといかん、ということもひとつある。それに次の日本のトップを構想しながら、ということも自分で構想するわけではなくて、議論の中で見ながら、それに繋がっていくであろう政策的な提言としての地位協定とか基地問題がどっと出始めた。それが政権党の中でどう吸収力を持つて議論が広がっていくかを見たい。その時に派閥の長が潰すか。そんな時代ではない。そこまで来た。

伊藤 いや、もう潰せないでしょう。

佐道 派閥が弱くなりましたから。

吉元 そこまで来るとあと残るのは、政権の次の姿は見えてきたから、それではそれにあわせて沖縄をどうするか、という話です。十一月の選挙というのは避けて通れない課題です。誰か手を挙げるでしょう。

伊藤 ここから先はちょっと聞きにくいな。

吉元 いや、私は早く与那国に帰らないといけないので。大統領のポストがもう決まっていますので。

佐道 与那国大統領ですか。

吉元 これはもう一昨年の夏に町長と全町会議員が来て「早く帰って下さい。名刺も作りました」と。

伊藤 肩書きも決まっていますね。

吉元 帰らんといかんです。

佐道 与那国大統領として自治体外交を展開される。

吉元 笑い話になるけれど。台湾問題は与那国で台湾と北京とが会谈をやったら一番早いでしょうね。福建省も交えて。これはほかでやっても意味がないです。

佐道 ちよつと最後にけむに巻かれた気がしますが。

伊藤 いやいや、ほんとにそう思いますね。

吉元 議論の場を提供すると前からいつているんです、中国では。

伊藤 これはけむに巻かれる以外しようがないんです。それは事

柄がはつきりしてから、もう一度伺うしかしょうがないです。

■次代を担う人材

佐道 先生は中央も沖縄県の側でも受け皿になっている人々を今のうちに、教育といったら変ですが「こういうことを考えないといけないよ。こういう見方をしなきゃいけない」とか。そういうことをいろいろおやりになっている、ということだと思っんです。そういう人材は育ちつつあるんですか。

吉元 かなり若い連中、三十代の後半から四十代の前半の連中が集中的にですね。五十過ぎた連中というのは、自分の今のポジシヨンの将来しか頭がないから、あまりこの種の話には真剣に乗ってこない。これは本土でもそうかもしれませんが、沖縄はその傾向が強いんです。だから今の県会議員とかはあんまりあてにしないほうがいい。決まれば動くから。筋が通れば。

佐道 その次の世代ですか、もう。

吉元 そう。そのもつと前ね。理由は沖縄の経済界が三世代目に入ったということです。つまり創業者であった戦後の苦しんできた大ボス、おじいさんが、おやじにバトンタッチして、おやじがもう使い物にならん、今の時代じゃおやじの感覚では仕事が出来ない、商売が成り立たん、という連中が今、社長をはじめとるんです。これが今言った四十前後ですよ。

伊藤 なりはじめているわけですか。

吉元 そうですね。ですから、五十手前が一、二名おるけれど、あとはやはり四十前後です。この連中がいま経済界の中で発言力を増してきた。言葉を換えて言えば、政治的に弾圧する奴がいな、ということなんです。それだけの力を持った奴が。だからこの部屋へ平気で来るんです。普通だったらここに入ると、吉元の所へ行ってきた、といったら翌日から大変ですよ。

佐道 かつての大長老、軍政下に置かれていた時代からの戦後の

沖繩をつくってきた大長老がついこの間までいらっしやった。この人たちの影響力が今は急速に低下したということですか。

吉元 俺たちの先輩だけれど、後継者を作らないことによって長期政権を安定化していた。そこでガタツと若返っている。だからといってこの若い連中が今経済界の重要な業界団体、業種団体のリーダーに入るということは、やっていない。むしろ入らない。「それどころではない。そんな遊びはいやだ」と言っている。自分の仕事を真面目に、受け継いだ仕事を積極的にやろうとしています。そういう点で言ったら、この間、大田知事のもので、私が中国や台北やシンガポールや香港やいろんな手を打ってきた、ソウルまで。これが生きて来ているんです。そういう時代です。

伊藤 経済界以外の部分で、芽はいかがでございますか。

吉元 政治の領域というのは、ものすごく今言ったような断層があつて、少し使えるところが見当たらないです。戦後沖繩が、あのアメリカの苦しい支配の中で生きてきたのは、三十歳前後で仕事を始めているんです。ずっとそれでやってきた。だから経済界の三世代の四十前後というのは、別に若いわけではないんです。自分たちが若いと思っただけであつて。だから私は酒を飲む時に言うんです。「私たちはまだ若いのに」という彼らに、「馬鹿かお前は。僕は二十七歳で復帰協の事務局長をやった。全県運動を指導した」というと「えっ」とこういう。だから「同じだよ。ただただその場にあわなかつただけだし、役割を負わなかつただけであつて、今からでも遅くはないからそういう役割が回った時には積極的に発言して欲しい」と。

伊藤 私は、一般的に言つて組合運動の中から新しいリーダーが出てくる可能性は非常に低いのではないかと。

吉元 それは賛成します。かつての労働運動に比べると、今の労働運動はものすごく視野が狭くなったというか、企業内は当然だけれど。それと格好よく社会的などうのこうのと言つて政策闘争

と言っただけれど、それに対応する政党を作りきれない。かつての社会党・総評みたいな。そういう意味で言うならば連合と民主党との関係も必ずしもそうではない。

伊藤 あれはマツチしていませんね。

吉元 そう見てくると組合が閉鎖的になつていく理由がわかる気がする。それは何かと言うと当面、自分の企業との関係、そうするとこの企業では、グローバルな経済社会の中で云々と言われているように、リストラが始まつている。そのリストラも首を守るためにストライキをやるといふ話になつていないから。まず、希望退職者から募る。するとなぜかいるんです。それで終わる流れです。だからこれを今の労働運動のあり方として認知した上で、そういう場から政治的な領域に手を挙げていく奴がおるかという、かつてはおつたけれど今はない。全くない。そうするとそういう連中も労働運動が一つの政治的な役割を負っているという自覚が薄くなつてきている。だから政治の場に出ないんです。そのことがいいかもしれないけれど、ある意味では。

伊藤 昔でいえば、労働組合か青年団とかですね。

吉元 そうですね。そういう運動、社会的な運動、社会的な役割を担いながら、政治的に目覚めて、首長とか議員とかいるんなところに顔を出しながら、揉まれて育つていくんです。だからたぶん経済界も同じだと思ふけれども、そういう場がなくなつたんでしょう。

ただ沖繩の場合は地域の祭りごとに関わる若者が増えてきたんです。夏でいうならば、エイサー、盆踊りですね。そういう集団的な場に関わる若者が増えてきた。これはまた今までで言うならば労働運動とか政治とか、それが全く不得手な文化運動でしょう。ここに人が増えている。こういう中から市議員を出そうかという話が出たり、意外に出はじめています。これはユニークで。この間、四月の沖繩市の市長選挙の時に普通の感覚でいう「候補者」

がいなかったんです。どうするか、と大変な問題だった。市長もミスばかりしている人です。クリントンを迎えるために基地の中に市が金を出してクリントン公園を造って、パーになってみたり。変な話ですよ。けれども結局出る奴がない。政党からもない、有識者もない、どうするか。全く若い奴が、しかもこの子は劇団をやっている子でポツと名前があがって来て、本人も出てほしいよ、ダブルですけれど。ところがお母さんがその事を気にして、息子が選挙に出ると裏で色々言われて大変だ、家族も親戚も。結局、本人はそれを理由に止めてしまふんです。もつたいないなと思いがちね。そういう人材がいるんです。どうするか、と本人に聞いたら「市会議員から始めたい」。今度、市会議員に出るんですが。

それも含めてですが、そういう意味では市長村議会の議員のみなさん、若い、地域で労働運動でもない、政治活動でもない、そういういろんな地域の活動の中から、ボンと出てきた。あいつが出るなら面白いから出そう、とまとまった。これは四十代前後です。私から言う連中とふれあう場が将来作れると思います。

伊藤 しかし、今の様なお話は頭の固い左翼が聞いたら、これは……。

吉元 いや、行政の中でこの話が通用してきたんですから。だいたい一番融通の利かない県庁の役職員がこれで理解できて、これでいこうと言うくらいはの気持ちに過去はなっておったんだから。僕は政党が政治団体としての綱領なり運動方針の枠組にこだわらないでその他の団体と一緒に議論するんだつたら、決してひびは入らないと思います。特定の政党は別ですが。それは無理ですけれど、かなり地域のこと、オールジャパンで画一的に物を考えない、地域に責任を持たせて運動していくような体質のある政党だつたら、特に異論はないと思います。

■ 県内政党の今後

佐道 沖繩のたとえば自民党とかはそういう政党自体は大きく変わりつつはある？

吉元 そう見たほうがいいでしょう。

伊藤 沖繩の自民党も変わりますか。

吉元 僕は変わると思います。それはだから自民党の市町村議員も首長も含めて、何々派というのがなくなつたんです。このところ聞いてない。昔は西銘さんに繋がってる人がはつきりわかつたから。あれは西銘派、上は田中角栄だとだいたいわかつた。今はそんなのありません。強いて言うとな政レベルの選挙に出る時に、誰が金を出しているか、誰が応援しているか、と見ているとあの派閥かという話になる。それ以外にはほとんどそういうつながりで見るとような県民性もなくなつてきた。だからホワーつとなつていきます。

佐道 一時期「宗宗と幹幹」(ムネムネとミキミキ)というような問題がありましたけれど、それは一部ということになるわけですか。

吉元 あの業界の話でしょう。県民的な視点から言うとうとういうことはないでしょう。但し、現に宗男と繋がっていたということとを本人も認めているし、「選挙の時には金をもらいました、金は返しました」と公言するくらいだから。それが社会的に指摘され、刑事事件になつてくるとやっぱ悪いんだなど感じるんだらうな。金を返すくらいだから。これはまずいと思うんでしょう。後遺症として残り残らんかもしれせん。

伊藤 社民党はどうですか。

吉元 県議会野党第一党であるし、十名近くの会派ですから、十四、五名の定数の中で。ですから、力はそれなりに持っている。日本の社会民主党とは必ずしも運動的に一つに繋がっているよう

ではないんです。沖縄の運動、沖縄の課題をもつばらの仕事にしている。

伊藤 ベースにするのはわかりますが、ベースにして、日本全体そして日米関係というところまで。

吉元 最近学習する連中が少なくなってきたんです。政党も含めて、あらゆる領域で。情報が得やすくなってきた時代だけれど、案外蓄積していない。だから自分たちが必要な時にたとえば僕を呼んで、一時間くらい喋って、あとはやりとりして自分たちの頭作りをする。「あの本読め、あの資料を探せ」と。自分で探して来て自分で勉強するという感じで、誰かからきつかけになるコンパクトな情報を仕入れて、そして自らの領域を認識して役割を果たしていく。こういう場が増えてきた。だからそれが、議員団活動というのかわからんけれど。投資効果はあまりないみたいです、そういう意味では。

伊藤 社民党の中から新しいリーダーが出てくる可能性は。

吉元 ないことはないけれど。

伊藤 僕は全国的に見たら社民党は駄目だと思っんです。

吉元 まだまだ使える政党ですね。

佐道 社大党は残りますか。

吉元 残そうと思えば残る政党ですね。

佐道 必要であるということ、残そうと思えば……。

吉元 必要であるというのをこの政党が持っている運動の質とか運動の量とかエネルギーということではないんです。共産党があつて、社民党があつてということから、社大党は必要。

伊藤 民主党左派は全然駄目なんですか。

吉元 民主党左派という存在価値を上原康助さんが代表をしてくれたというけれど、あの人が引退して民主党を抜けてしまったから、と言われています。

伊藤 やはり全国的とはちょっと違うんだ。非常に僕は最後面白

く何っちゃって。

佐道 ちょうどお時間になってしまいました。

伊藤 本音は、本当に社民党でやっていけるのかな、と。

吉元 社民党も変わります。ついてくるんじゃないですか(笑)。名護市議会が、軍特委が代替施設計画白紙撤回決議をすることになった。臨時議会を招集して全会一致で提案するということが決まったんです。この間の基本計画、当の名護市議会が、軍特委が一番懸念したことになつた。普通、知事選挙前にそんなことをやるといふのも馬鹿じゃないかと思うけれど。

佐道 その意味では県もそうだし、国の方にも司令塔がない、という感じですね。

吉元 十五年問題について一歩も動かないのに、早く決めておこう、早く決めた方が選挙にとつていいよ、というのが東京の考え方。「いやそれはちょっと困るよ」とも「いいよ」とも言わないで、設定されたものにノーは言わずに沖縄が応じて、しかも決まった基本計画の自身そのものが地元と調整した内容と違うんです。そこに今問題が起こっているんです。これをどうするか、ということです。市議会から白紙撤回を突きつけられると少し市長も、東京ではオーケーしてきたわけですから。市議会が決めると九月議会、県議会は正面から取り上げていきますから。おそらく市議会が白紙撤回を決めちゃうと、県議会もいやおうなしにそれに追い込まれていきますよね。十一月の知事選挙です。すんなりは終わらないかもしれない。

伊藤 十一月ですから、もうあまり時間もありませんね。

佐道 そうですね。あつという間に十一月です。

伊藤 これをどういう形でまとめるかわかりませんが、まとまるまでには十一月は過ぎて、ということになります。前書きなり何なりをお書きいただくということになります。

伊藤・佐道 長時間ありがとうございました。

(終了)

吉元政矩 オーラルヒストリー

第7回

日 時：2005年1月5日（水）

開始時刻：13時30分

終了時刻：16時00分

開催場所：那覇市・吉元邸

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

佐道明広（中京大学助教授）

■「沖縄21戦略フォーラム」設立の背景

佐道 前回、私どもが沖縄に参りましてお話を伺ったのが、ちょうど二〇〇二年ということで、それこそ知事選のお話ですとかが後半にございましたが、それが本格的に始まる前のことでした。ですから、今回はぜひ、大きくいうと二つの柱でお聞きしたいと思っております。一つは、二〇〇二年にお話を伺って以降のわずか二年くらいの間ですけれども、沖縄の中の政治の動向もかなり変わったのではないかとということが一つです。この沖縄政治の中の全体の動向ということについては、これも主に二つございまして、いちばん大きなところは先生が知事選に出られたという問題。それから、知事選後、いま現在の状況ということ。これが大きな二つです。それからもう一つの大きな柱は、日本と沖縄全体の問題ということで、それが市町村合併の問題を含めまして、自治体の再編成という問題が起こって、先日、十一月（二〇〇四年）に私がこちらに来させていただいたときに、若手が立ち上げた道州制の勉強会にちよつと顔を出させていただけたりして、沖縄の中でもそういういろいろな問題に関心が高まっているということがあると思います。実際、市町村合併といいますが、その話自体がいろいろ進んでいる。それはもちろん本土の動向を踏まえてということなのですけれども、先生もそれに関わっておられて、どういふふうに考えておられるかということが一つ。それから最大の問題は、米軍の再編の問題と基地の問題。これはどうしても切ってもきれない問題で、これ自体も市町村の動向と大きく絡んでくる。基地がどう動くかという話になってくる問題です。ですから大きく、沖縄の中の政治の問題。それが、知事選と知事選後の状況。それから、日本と沖縄の問題。まず地方自治体の地方の再編の問題と、米軍の再編問題、基地問題。その大きな二つをお聞きした後で、最後に全体の総括といえますか、数十時間にわた

って先生のオーラルをとらせていただいて、これで最後に冊子にまとめさせていただくということになって、最後にいわゆる結びの部分と言いますか、先生ご自身のこれまでのご経験を踏まえられて、沖縄政治というものをどういふふうにごらんになっておられるか。今後の期待、あるいは沖縄が抱える課題ということも含めて、それを最後にまとめて話していただきたい。このへんはまた明日のお話ということになると思いますが、きょうはまず、沖縄政治の中の動向を中心に伺わせていただいて、明日、本土と沖縄の問題、地方再編と米軍基地の問題を伺うというふうにご考えています。両方とも、かなり重い問題ではあるのですね。

前回、伺ったのは、先ほど申しあげたように二〇〇二年七月から八月ということ。先生が「沖縄21戦略フォーラム」（以下「フォーラム」）を立ち上げられて、もうだいたいぶ動いておられたわけですね。前回の部分と重複することになるのですけれども、この「フォーラム」、いわゆるシンクタンクと言いますか、そういうものを立ち上げられた動機から入っていただければと思います。

吉元 二〇〇〇年に沖縄サミットを実現させる布石というのは、九七年からありました。九七年の正月早々、大田知事に県民向けの正月メッセージを出してもらいます。その中に、九六年十二月のSACOの最終報告を踏まえて、県民がどういふ形で受けとめていくかと。県内をたらいまわしですからね。とりわけ県内移設という前提で、普天間移設、普天間の今の場所から移設が始まっているものから。そういう意味では、少し明確にしようじゃないかと。大田知事にしゃべってもらったのは、「SACOで終わりじゃないよ。これからは海兵隊、兵力の削減を目指します」というメッセージを県民に出すのです。これはかなり東京サイドも官邸サイドもびっくりしましたね。「なぜSACOをまだやってもいないのに」と。それと同時に私たちは、兵力削減を狙うと

するならば、九六年四月のクリントン・橋本共同宣言にもあるよ

うに、十万人体制を崩さなきゃいかんわけですから。その中にもあるように、いわゆる沖繩、あるいは日本を取り巻く周辺諸国の政治情勢というのですか、軍事体制の問題ですよ。これとの関係で、米軍基地の整理縮小、兵力削減というのが位置づけられているわけだから、そこに食い込んでいかないといかんというのがありました。「県民は兵力削減をこれだけ求めていますよ。これが本物ですよ」という数字を出しながら、同時に、「二〇〇〇年のサミットを沖繩で開いてほしい」ということを強烈に、これは官邸に対して出すのです。表へは出していません。それから、何らかの形でそれを官邸に持ち込もうということで私は飛んで、梶山官房長官に話す。大田知事が上京して橋本総理に要請するといふのを繰り返すのです。結果としては、小淵（恵三）総理になった段階で、ケルンサミットの終了後、記者会見して、「サミット首脳会議を沖繩で」と発表したのです。「人間の安全保障」を議題にすると。これはもう、確実に私たちの要請なんです。私たちが要請したものの一つに、中国の江沢民国家主席を招待したらどうかと。沖繩でクリントン・橋本・江沢民の「三者会談」というのをやって、東アジアの平和について話し合ってもらおうと。これが、緊張緩和につながっていくのではないかと。

これは、小淵さんはそのとおりやったのです。それを公明党の神崎（武法）さんを名代にしたりしたのです。北京サイドもちょっと心を動かした様子があったみたいなのですが、結果としては、それは実現しなかったんです。私は二〇〇〇年にどうしても北朝鮮に沖繩から大量に交流団を派遣したいと考えていましたから、九九年の十二月あたりに北朝鮮に行った。

佐道 私が最初に先生のオーラルをやらせていただいた年で。

吉元 あ、その話は出ましたか。

佐道 はい。北朝鮮に行く。なんか連絡をとっておられたこと

があると。

吉元 それをやりました。向こうは快く引き受けてくれたのです。それで、二〇〇〇年のどの時期にするかと非常に迷いましたね。五月の段階で、私たちは連休を利用して、百十名近く。

佐道 かなりの数ですね。

吉元 それは、沖繩がやっておかなければならない最後の仕事だったと思います。九〇年、大田知事が誕生し、中国福建省と正式な交流が始めます。経済・文化の交流などを通じて将来を展望できる段階までいって、一方で、表向きではないけれども、台湾との間でも親密な関係をつくった上で。加えて、濟州島、沖繩、バリ島、海南島、「四つの島」の国際観光フォーラムを、サミットをやった。韓国にも、「沖繩事務所」という言い方をしたけど、実際は県の事務所ではないのですが事務所を置いたり。そういう意味では、唯一手付かずのところは北朝鮮だったのです。ですから九八年、大田知事の二期目の最後の年にそれを考えていたのですが、それは私がいなくなっていたから、ぜひ自分も行きたいということだったので、二〇〇〇年の五月に行ったのです。六月は南北のトップが平壤で会い、七月が沖繩サミットです。九月には、オルブライト米國務長官が北朝鮮を訪問し、十一月が米大統領選挙。にもかかわらずこの時期にクリントンさんは、北朝鮮に行つて話を詰めたいと。しかし、ブッシュのスタッフから「ノー」と言われて行けなかった。そういう流れからすると、私なんかの構想は間違つてなかったと思う。沖繩サミットを一つの節目にして。その流れで、構想した枠組みを継承する知事が誕生していたとするならば、これは確実にそこに持つていったという自信を持つています。二〇〇一年、ニューヨーク・ワシントン同時多発テロのときに沖繩も地域経済が混乱した。米軍基地がテロに狙われているということで大混乱になりました。沖繩の警察では米軍基地を警備できないということで、本土から動員する。そうい

う体制の中で観光客がバタツと止まる。ものすごく危機的な状況に入る。これが二〇〇一年の十一月以降ですよね。米軍基地のため、一見華やかに見える沖縄の経済発展と思われる部分がガタツと変わるでしょう。「やはり基地問題じゃないのか」ということに、経済界は目覚めるんです。そのときに経済界の若手の連中が私のところに飛び込んでくる。私は、二〇〇一年の夏ごろから、気軽に相談する場所、協議する場所、論議する場所をつくりたいということ、で、「フォーラム」を結成しようと動いた。それでフォーラムを立ち上げて間もなく、この問題が飛び込んできた。若手の経営者と一緒に話し合って、シンポジウムを開いたり、それを支援したりして活動するのです。

佐道 二〇〇〇年の中ごろに相談をされはじめていたというのは、先ほどおっしゃった、県政にいらっしやる間につくった枠組みが、北朝鮮訪問であるとか、クリントンさんの動向であるとか、一応部分的には進みつつあるように見えたけれども、結局その全体的に後押しするわけではなくなっているわけですね。県政が代わりましたし。そういう動向をごらんになって、やはりもうちょっとときちんとやらなきゃいけないと。

吉元 そうなんです。二〇〇〇年サミットを沖縄でお願いした本当の意味が、いまの知事には継承されていないし、基地に関しては触らない。むしろ、普天間の移設を自ら積極的に県内移設を認める前提で、あとはどの場所にするかという選定に入っているんです。「それみたことか」というのが二〇〇一年の結果ですよ。だから、県内の課題も結果的に片付かないのではないかというのが、私たちの言う危機感です。それが案の定なのです。ですから、基地と沖縄の問題、経済の問題というのは、まさに表裏一体の関係だという認識。「これは危ないぞ」と、これが一つ、フォーラムにつながったし、フォーラムをつくったことで若手経済界との議論の場がつけられたし、シンポジウムをやった。これに国

が動きだした。沖縄の政治家が動き出す、県が動き出すという形で、「どうしたらいいのか」という高まりをつくった。沖縄経済がもろにその被害を受けた。それを今度は克服すると。どうしたらいいのかということ、で皆が右往左往するのです。国も、熱い目を向けながら、米軍基地をどうするということではできないわけだから。その部分はそのままにしながら、いろいろな支援をしていくのです。国際会議を入れるとか、何とかと。これは二〇〇〇年のサミットの延長線上でもあったのだと思います。大きな効果は、それによつてはなかったと思うのです。ですから、あれから一年近く影響は克服できなかったです。これが二〇〇二年に入つてです。

そういう中でどうするか。知事選がある。もう、知事選の候補者を決めるいろいろな議論が政党内で始まっている。それは当然、候補者を出すと私は思っていたが、うまく話がいかない。結果的に崩れ、出せない。それはいちはば危機感を感じたのは公務員の労働組合です。市町村の労働組合であり、政党が投げたので、連合沖縄が動き出す。そこに私が結果として追い詰められていくのです。「もう勝ち負けじゃない」というムードの中でね。十一月が選挙です。もう七、八月です。その段階で出てきていますから。結果として、それは受けざるをえなかったのですが。受けるときの記者会見でも言ったのですが、一つは、「サミットの意味は何だったのか。本当にそれが生かされているのですか」と。もう一つは、「テロは、結果として、米軍基地があるがために沖縄経済はこうなったんじゃないですか。これをどうしたらいいか」と。二つの問題から、いまの県政がそれに対する適切な手を打つて、政策に生かそうという施策を出しえない。これに対して言い切れない。やはり問題だというアクションを起こそうというのが知事選に出るきっかけだ、という表現を私はたしかしたと思います。

佐道 この二〇〇二年の知事選に関しては、いわゆる各政治勢力、

例えば、特に革新側ということであろうと、取り組み方自体も遅かったと思うのです。

吉元 かなり遅かったです。従来、社会党の流れである社会民主党、ローカル政党の社会大衆党、共産党、この三党が同時に話し合っているのです。普通は。大田のときもそうでした。その政党が見合っているのですよね。そういう状態なんです。この稲嶺県政が誕生して以降は。それは九八年の参議院選挙がそうでしたけれども、結局、私はそのときに大田知事から言われて、出る事になった。だから、沖繩が一個にまとまって何かをしようという動きがなかなかつくれない。で、民主党というのが本土では、国会の場では表に出てくるでしょう。社会党というのが社民党になって、相対的にバランスが逆転する。結果としては、その流れが全国に流れるし、沖繩にもそういう意味では影響したと思います。

佐道 この二〇〇二年の段階では、かなり影響していたという。

吉元 そう見たほうがいいんじゃないですか。だから、当時の社民党がイニシアチブをとって、「こうしていこう」という引つ張り方が、弱かったといえるでしょうね。社会大衆党は、年数が経てば経つほど活動ができないようになっていましたね。共産党は、自分たちのパターンにはまりこんでね。

佐道 共産党もそうですね。

吉元 結局従来、九〇年代に大田県政をつくったときの状況とはまったく違うのです。そういう中で、民主党を支持する労働組合の数が増えてくるのです。全通がそうだったね、NIT労働組合もそう。連合を通じた単一組合だとかがそうなっていくしね。それから、連合を通じて、よりそれが広がっていく。全駐労あたりも民主党支持ということではつきりしてきたのです。連合沖繩の場では、流れとしては中央から、連合中央との関係を含めると、民主党の流れが非常に強くなってきているけれども、沖繩的事情で、沖繩では社会民主党が県議会では圧倒的に野党第一党であるとい

う状況でしょう。民主党は一人も議員がいない。このアンバランスが影響したのでしょうかね。ですから政党間では、三党ではうまく話し合えて、じゃあ、民主党を入れようという話で民主党を呼び出して、四者の話に入るので。形の上では、最初からそうなった形になるのだが、パターンは違うのです。そこでも話がうまくいかない。前参議院議員の照屋寛徳さんを出そうという動きがあつて、照屋寛徳さんは後援会と相談した結果「ノー」だという。それでもう、だめになったんです。ですから、かつて沖繩の革新といわれている政党の枠組みが、そういうふうな機能、役割をなしえなくなった。前回、三年前の知事選挙も、そのことで時間がかかるだけで、そうすると四月いっぱいになっちゃつて、もうだめだということになる。各党どうするか、といつても手が無い。適当な駒もない。そういう中で労働組合は、「ちよつと困るよ」という動きが出始めたということ。だから流れとして、私が出てくれと言われたときは、たしか政党の支援、特定の政党の支援というのは要りませんよと。文字通り、吉元政矩というのが立候補して、私の政策を支持してもらえらる政党と一緒にやりましょう。そういう団体・個人と一緒にやりましょうというパターンをつくった。これは、ちよつとオーバーな言い方をしますと、今後の沖繩における首長選挙など、そういうパターンに行かざるを得ない一つのきっかけだという認識だったんです。だから、そういう方向を切り拓くという意味でいうならば、ここはやはり辞退するわけにはいかないです。文字通り政策は政党抜きでつくられていきますからね。私を中心に。それには、フォーラムがあつた、つくって走っておつた。そこでいろいろな議論があつたということが、結果的には役に立ったのかもしれない。

■知事選の枠組み——公明党の位置づけ

佐道 あの選挙戦を私も拝見させていただいて、沖繩政治の中で

も、日本全国的にもそうではありません。実際に先生はかなり特異な選挙戦をおやりになったと思うのです。それはまた後でお聞きするとして、今の話の続きをお聞きしたいのですけれど。大田さんが最初に知事になられたのが九一年。そこからへんは五十五年体制がまだ崩れていない時期ですし、いわゆる野党共闘といえますか、革新共闘が可能だったわけですね。二期お務めになって。

吉元 公明党も含めて。

佐道 ああ、あのときはそうですね。それが、九八年に大田さんは選挙で敗れるころは、もうおかしくなっていたのですか。

吉元 九八年の夏に、八月の末だと思えますが、普天間移設を巡って、公明党県議団が大田知事に何項目かの要請行動をするのです。つまり、県内移設はやむをえんじやないかというような趣旨

のものが入っている。これに対して知事は「イエス」、「ノー」を言わないで、その年の九月の県議会ですのやりとりをするのです。

それから公明党さんは、「ちよつと違うぞ。オール・オア・ナッシングだ。部分的に、段階的にという考えはこの人にはない」と

把え、一線を引くのです。これはしかし、沖縄的に一つの形をつくったという意味であって、本流は東京で既に、自民党と、あの

ときは新進党ですか、それと公明ですか。その枠組みで新しい自民党主導の政権を、という形で構築されていたのですね。それを沖縄問題で公明党に線を引いてもらったというのですか、いわゆる旗幟鮮明にもらったというのが正しいかもしれませんね。それがその八月末の公明党県議団が大田知事に突きつけた内容だったと、私は後で見ました。だからその年の十一月の知事選

挙は、公明沖繩は、大田に顔は向けて支持し、沖繩の責任者は大田と一緒に演説はしておられるけれども、実態、学会はほとんど稲嶺さんに走っていました。これはもう、公然たる事実でした。その結果が、稲嶺さんが誕生し、県議会で、「待っていました」という形で公明が与党に入っていく。中央では入っていますから。

これで一体。だから、沖縄米軍基地問題、SACOの推進、つまり普天間の移設問題を含めて、方向は出ておるのだけれども、この自由民主党と公明党の枠組みでいこうという話です。小沢一郎さんと一緒にグループにおった仲村（正治）さんという沖縄の二区の彼もその流れですからね。ですから沖縄自民党は、違和感を持ちながらも、中央がまとまっているから、そこに流れなきやいかん。公明党は、この際ということで表に出てきたということでしょう。大田知事が負けたあの知事選というのは、曖昧模糊とした中で東京サイドの政治路線が押し付けられてくるやつを、自民党の中では違和感もちながらも、公明党が関わったことによつて、稲嶺を支援する与党という意味ではガチッとまとまっていくのです。稲嶺与党ではまとまる。

佐道 革新がバラバラになったというよりは、稲嶺与党がまとまったということが強いと。

吉元 つまり、大田に決別をした公明党、創価学会がごそつと、我々と一緒にやっていた枠組みから離れていったということですか。

佐道 公明党という政党は、ちよつと一種独特な政党で、いまはとにかく与党化していますから、いわゆる平和の党という看板もだいぶかけ替えになります。しかし、沖縄の場合ですと、基地の問題とかもあって、この問題はより切実ではないかと思うのですが、やはりあそこも共産党と同じで、上意下達といえますか。

吉元 似たようなケースとしては、社会党が社民党に変わったときに、沖縄の社会党県本部は、「安保は容認しない。自衛隊も憲法違反だ。日の丸・君が代は認めん」という前提で、「沖縄はそれでいきますよ、いいですね」ということで、社会党解散、社民党に合流していくのです。社民党は、総理を出しながら、国会でああいう村山（富市）さんの演説を踏まえて路線変更しながらも、

沖縄的にいうと、沖縄は違ふよと。沖縄はこれまでの、「県民と一緒にある」という、これを堅持しておったのです。同様の意味で、公明党についても、それはまだ残っているとされているのです。公明や学会中央が動いている中で、「ちよつと違ふよ。沖縄は沖縄だよ」と、こういう問題があるといわれているのです。でもこれは、私に言わせればこじつけではないかなと。そういう実態もなくなってきたんじゃないのかと言われるほど、那覇市長選挙なんかを見ると、あそこが動かんと負けるという選挙ですよ。

佐道 本土とまったく同じですね。
吉元 まさに母屋を乗っ取られているという感じですね。ですから、そういう意味では、かなり自民党の中の亀裂もそれによって拡大されているということが現実に出ている。沖縄では。

佐道 本土でも、公明に配慮せざるを得ないがために、自党の候補者に、「我慢しろ」みたいな話になりまして、いろいろひずみが出てきています。

吉元 結局は自民党そのものが、国政レベルで政権をとる、それが唯一の目的化しちゃったんですね。そのために支援してもらって、議会政治として圧倒的多数派を形成するという形で、許容の範囲をオーバーしてでも抱きかかえんといかんわけでしょう。そこが憲法の問題に移ってきたし、教育基本法へと移って。そのかわりといわんばかりに、日米の安保の問題、在日米軍の問題、とりわけその種の問題について、公明は逆に押し込まれていっているでしょう。だから、結果的には見合っているんですよ。どちらが得しているかというところ、どちらとも少しずれておるようだが、今日的に見ると完全に重なっている。そう言ってもいいほどだと思います。

佐道 政権をとるといふ目的だけでは一致してやっついて、長期的に見ると、お互いに首を絞めているんじゃないかと思うのですけれど。

吉元 思いますね。思いますけれども、それは何だろう。そういう意味では、それぞれの政党が、政権与党が日本の二十一世紀をどうするかを描ききれないというところに突き当たっていると思います。沖縄も、そういう意味で言うなら、共産党はつながっている。社民党もつながっている。民主党も、公明党はもちろん、自由民主党もそう。労働党もつながっているし、自由連合もつながっている。だけど、社会大衆党というローカル政党はどのつながっていないけれども、ここがどんだん力をなくし、名前だけになっています。そのぶん全体的に落ち込んだ。そこが強い間は、社会的に影響力を持てる間は引つ張ってきた。そこに求心力を集めてきたけれども、落ち込んでいると、皆がこう……。全国のレベルで落ちとるから。このまとめ役がない。これが最大の問題じゃないですか。二年前の知事選挙がそうだったし、今度の那覇市長選挙がそうだったと思います。

佐道 与野党の結節点としての社大党の意味というのは先生がおっしゃるよう大きいと思いますけれども、社大党の凋落というのは、これは漸進的なものですか。それとも、けっこう急激に。

吉元 急激ですね。私は、八〇年代の中ごろからは、組織、政党としては評価できるようなものがなかったと思います。落ち込んでいく中で、議会勢力として、個人の若手の県会議員とか市町村議員が社会大衆党に学ぶことで、いわゆる沖縄革新だという錦の御旗が使える間は存続すると思います。いまの社会大衆党は、唯一それを錦の御旗として担いでいると思います。しかし、本当にその理念のもとに沖縄をどうするかというのにつながっているかというところ、つながっていないですね。文字通り一人ひとり、議員に当選するという利益のためにこの政党が残っているといつてもいいほど。また、ある時には、逃げ道としてね。社民党が推薦すると共産党が別人を推薦し難航する、その時、「どつちも出さな、うちが出すから」というような意味では一定の役割がまだ残

っていた。これも首長選挙で使えなくなりました。ましてやもう、知事選挙では二年前からそうなった。今度的那覇市長選挙なども、最初からそういうのはないです。だから、社会的役割はもはや終わったような気がします。

佐道 一方で公明党はどうなのでしょう。

吉元 与党という意味で、県政与党、国政与党という意味で持続しているのでは。頑張っているというのか。宗教団体である創価学会と重なった部分が、きちつとね。どこにも行きようがないんじゃないですか。そういう意味では、何が自分たちの利益かということなのでしょう。それは、野党としておったほうがいいのか、政権与党としておったほうがいいのか。これはもう、いまの日本の流れの中では政権与党におったほうがいいですよ。

佐道 沖縄における政治勢力として、公明党を意識せざるを得ないというふうには先生が感じになったのはいつごろからですか。

吉元 復帰後でしょうね。復帰段階の選挙、例えば琉球政府の最後の選挙、まあ、初めての選挙だったけど、一九六八年の琉球政府行政主席選挙はべつに公明党というふうな認識はない。文字通り、社会党、社会大衆党、人民党ですよ。それに労働団体である県労協が一緒になって、革新共闘会議というのがあらゆる団体を網羅してずっと続いたんです。それを機に、沖縄的というと、民社党が直前に出た。だけど、これはなくなっていますね。その後には公明党さんが声を出し始めるのです。ですから、公明党さんが声を出していくのは復帰後です。実は大田さんは、公明党というよりは、創価学会の平和学習にずいぶん青年部とか婦人部とかに呼ばれて、いわゆる講演などを通じて、ものすごく貢献しています。ですから、大田さんの二期目というのは何の違和感もなく、公明党との政策協定も結んでいるのです。だけど、その大田さんに対して決別をした。それが何かというと、沖縄的要因ではなくて、日本の国政レベルの政党の組み合わせという要因で、ガタッ

とそこに移っていく。これが見え見えだけにね。一方で、「そこまで追い込むな」という声はまだ残っているんですよ。あんまり選挙のたびに、「裏切り者」と言わんでおこうとか。でも、もはや自民党支持者よりも運動面では先行しますのでね。あそこは忠実ですから。それでもやはり、県民的にいうと、「いやいや、まあ、いつかは」という期待もないわけではないんですよ。「あまり叩くな」という声は、選挙のたびにいろいろなところから聞きますから。

佐道 いずれにしろ、その九八年の選挙を経て、この二年前の先生がお出にならざるをえなくなった知事選挙のときには、沖縄の政界自体にかなり大きな構造的な変化が起こっていたということですね。

吉元 そうなんです。それはすごかったです。一つはやはり民主党ですよ。それで、社会大衆党というローカル政党の凋落です。民主党がいい指導者に恵まれなかっただけに、イメージとしては、県民の間では、沖縄の中ではといていいでしょうか、なかなか政治の場で人をつくりきれなかったというのが続くんです。

佐道 民主党がいい指導者に恵まれなかったというのは、沖縄の中に於けるいい指導者ということですね。

吉元 そうそう、まったくそうです。

佐道 沖縄の民主党を育てる指導者ということですか。

吉元 それは、かつて私もこういうインタビュに答えたつもりですが、例えば九八年、社会党より先に、当時の民主党の菅直人さんから、「頼む」といわれて、参議院比例一位というところまで指名されて、私も一週間悩んで、「いや、やっぱりだめです」と言ったことがあるんです。

佐道 あのとときに出ておられたら、ちょっとまただいろいろなことが。

吉元 だから、民主党中央が目をつけたというのはおもしろかつ

たと思います。

佐道 そうですね。

吉元 それでもあきらめずに、その後の衆議院の段階で鳩山（由紀夫）さんから、「頼む」といわれたときも、やつぱり人づくりじゃなかったんですか。沖繩で民主党の顔になる人というのがあって。まあ、全国から集まるメンバーの中で、参議院や衆議院の中で一人おったからって別にどうってことはないはずだが、沖繩的にいうと、「沖繩の吉元が出ている。民主党だ」ということになれば、その人が当然沖繩のトップになるはずだから。

佐道 民主党はとにかく、ある意味で安全保障にかなり力を入れている政党であることは間違いないので、その意味で沖繩の基地問題というのは民主党にとっても、かなり大きな試金石なんですね。

吉元 今日的にも、相当そこが壊れ始めていますね。

佐道 その意味では、「先生に」と考えると、それは我々からすると全然無理がない話ではあるのですけれども。

吉元 これは大きかったですよ。「どっちみち、言い方はきついかれども、社会民主党さんはどうなると思いますか。これはわかるでしょう」と。これは、沖繩ではみんなわかっている。「だからって共産党は」って、これも。そうすると、どこに県民のエネルギーというのですが、自公に対する批判的なエネルギーを、県民の声をどこに向けていくの？ だれが？ ということですよ。いやいや、民主党があるじゃないか。おるじゃないか。早い時期に上原康助さんが民主党に入ったでしょう。社民党を脱党してね。彼を顔にしたつもり。だけど、県民的に見ると顔にならなかったようだ。そういう意味でいうと失敗したといえる。むしろ遠回りする原因になっちゃった。今度、昨年の参議院比例区で喜納昌吉が出た。いま、彼を顔にしてやろうとして、動いている。

佐道 政策の面ではかなり危ないんじゃないかと思いますが。今

朝の新聞では、今度の衆議院選挙に玉城デニーさんが出ていますね。かなりおもしろいんじゃないかと思います。

吉元 民主党は、全選挙区で候補者を出そうという一つの方針ですね。一方で社民党も、最低限現有勢力は……と思っているよね。だけど流れとしては、社民党は堅実だと思われていた地域で、例えば大分から一人、九州比例でおりますが、おそらく社民党から出ないんじゃないですか。そういう状況ですよ。沖繩で唯一、社民党は選挙区で一人だけ、照屋寛徳さんがおるのです。そこも含めて、民主党は沖繩の四議席全部出すといっているのです。本来ならば調整をして、少なくとも現在議員がおるところはぶつけないというのが、沖繩的にいうなら普通のやり方ですよ。共闘、日常的な平和運動と反基地闘争を一緒にやっているから。労働運動の領域でも一緒にやっているから、という配慮が政党レベルで出るのがあたりまえです。しかし、いまはそうでない形になり始めているでしょう。もはや、沖繩的にそれぞれの政党がお互いに配慮して、有効に相乗効果を出そうという時期は終わった、と僕は思います。それを二年前の知事選挙に例えたのですよ。

佐道 つまり民主党は、共闘を組む相手ではないと社民党のことをみなしているということですね。

吉元 そのとおりでしょうね。

佐道 二〇〇二年に先生が出ざるをえなかった選挙というのはまだ、過去からの、共闘して戦うということに対する残滓といえますか、そういう考え方は残っているわけですか。

吉元 残っていたと思います。思うけれども、その民主党が三党と一緒にあって、四党と一緒に論議する……。社民党、社会大衆党、共産党、自由連合、それに民主党、五党ですね。五党が一つのテーブルにつくなかで、それでも候補者をつくりきれなかったことで、やはりひと通り幕引きではないですか。

佐道 もう、ここでだめだよ。

■二〇〇二年知事選に立候補

吉元 だから、労働組合が自主的に私を担ぐ。私は、「うん、そう
うだ。問題は二つあるよ。サミットを生かしてないな。同時多発
テロの結果、基地問題で観光客は落ち込んで経済は大変なことにな
っている。これに対して、やはり基地問題に真正面から切り込
みきれない今の県政というのは、そのまま続けさせていいの？」
というテーマを挙げた。そういう意味では、本来ならばこの四党
全部が支持してもいい課題だったが、そうならんでしよう。「吉
元が出たから、共産党も出そう」という話でしようね。あとは、
「選挙にならんから」ということですから。選挙になりません。
最初から、四党は知事選をやめたわけだからね。

佐道 各党は、二〇〇二年の選挙戦に関しては、最初から及び腰
だったということになるのでしょうか。

吉元 結果的にそうかもしれないね。積極的じゃなかったといえ
る。これは今回に限ったことではないが、だいたい十年単位で沖
縄は変わるんです。

佐道 ええ、なんかそうですよね。

吉元 だから二期。まあ、西銘（順治）さんが三期やったけど、
そういう言い方がずつとあるんですね。それが沖縄のバランス感
覚だとも言う。学者が言うような分析ができるかどうかはわかり
ません。私は県民性だと思います。

佐道 稲嶺さんも一期やって、「まあ、二期くらいやらせてやつ
ても」という、なんか全体的な雰囲気みたいなものがあつたのか
なという感じがしますね。

吉元 そうかもしれませんね。それはそうでしょう。それよりは
むしろ、「二期で終わらせると、また元に戻るよ」という、これ
が効果あつたんですね。僕がやったら元に戻ったかな？ 戻って
ないと思うんだけどね。かなり（基地返還）アクションプログラ

ムは県民的に合意を得て、国際都市形成構想もそうだったし、全
県フリー・トレード・ゾーンも、経済団体があれだけ論議してま
とまった。むしろそこから、きちんと東アジア全体の流れの中で
実証……。あのときは、「なるよ」と想定しておったけど、今度
は見えるようになってきているのだから。二〇〇二年にはね。そ
れを選ばなかったというのは、日本の小泉体制が出来上がった
ま、「沖縄で政権が変わったら無視するよ」ということなんでし
よう。そういう意味では、沖縄の県民の目というのが十年単位と
私は言うけれども、中央の政権との関係をよく先取りしているよ
うな気がします。「じゃあ、稲嶺さんが三期を」という声は、も
うないのだから。

佐道 それはそうでしょうね。ただ十年というのは、前はよかつ
たと思うのですが、本土の変化のほうが早くなっているの
で、もう十年待ってられないのではないのでしょうか。私なんか
からすると、そう見えてしまうのですが。いずれにしろ、二〇〇
二年の場合は政党が候補をまとめきれなかったと、労働組合
が出てきた。私と伊藤隆先生が二〇〇二年に先生のオーラルをや
らせてもらったのが七月の末、八月の頭。あのときもやはり、も
う話が来ていたのですか。

吉元 話はあつたと思いますよ。いや、……七月でしたか。

佐道 七月末、八月の頭です。

吉元 八月の中ごろ以降ですね。私が、もうやらざるをえないな
と思つたのは八月の末だと思います。もうギリギリの段階でね。
たしかアプローチを始めたのがそのころだったと思います。

佐道 新聞にちらほらと先生のお名前も出るか、出ないかがあつ
て。

吉元 あれはおそらくどこかが流したのでしようね。労働組合サ
イドが。それは巧妙にやりますからね。マスコミさんはまたそう
いうのが好きだから（笑）。

佐道 八月の伊藤先生とやらせていただいたときに、最後に食事をご一緒させていただいて、そのときに、「先生、知事選に名前がちらほら出ているようですが」という話をしたら、先生が、「まあ、こういうのは年中行事みたいなもので、そうやって出てくるものなんです」とさらっとおっしゃって。

吉元 その前の那覇市長選挙のときです。だから二〇〇〇年です。二〇〇〇年の一月に私の話がポーンと出るんですよ。那覇市長選挙の候補者。

佐道 那覇市長の候補者。

吉元 それで、「あれ？」と思うのですが、これはどうも、それを発言したのは当時の市長の親泊（康晴）さんだということが後でわかりましてね。その親泊さんの発言というのが新聞に載るわけです。それに対して共産党が抗議をするんです。それでなくなるんですよ。ま、そういうことがあつたりしておつたものだから。

佐道 しかし、本当に共産党には（笑）。

吉元 あそこはもう、六〇年ごろからのね。基地運動、原水禁運動、労働運動、この三つの領域でことごとく、対決というほどではないけれども、路線上のね。私なんかは遠慮するほうじゃないから。「じゃあ、きょうの論議はこれで終わりだな。来週もう一回やろうか」「うん、やろう」「赤旗を見てやろうな。赤旗を見ないと言えんだろう」というと、みんな黙っているんですね。そういう冗談を言うくらい、六〇年代の初めのころは、原水禁の問題、核実験に反対するか、社会主義国の核実験は正しいとして支持するか、というでしょう。沖縄の復帰運動をめぐって、私たちは、四・二八は「屈辱の日」という意味で、県民大会をもつたり、海上大会をもつたりしてアピールする。ところが、突如として六四年だったと思うけれども、「四・二八は誤りだ。八・一五が正しい。八・一五の海上大会をやるべきだ」という復帰協の中でまた論議をしてくるのですよ。大喧嘩するんですよ。彼らもそれは

やるんですよ。おかしいと思いがちでもやる。つまり代々木の指導ですよ。それで、彼らはそれ一回で終わっちゃうのです。やはり、自分たちだけが船を出しているんです。そういうことがあつたりして。労働運動もそうです。労働運動の現場に対して、バスの労働者が春闘でストライキをかけて闘っているさなか、「このストライキは誤っている。バス賃値上げを後押ししているようなストだ。やめろ」という攻撃をかけたんです。ですから、労働運動の現場も、復帰運動の現場も、原水禁運動の現場でも、いつもぶつかつていたし。そういう意味では、議論する場合の中心メンバーであつただけで。しかしまあ、あれは人民党時代ですよ。共産党は副業ですからね。

佐道 そうですね。

吉元 でもまあ、そういう意味では学生運動……。本土の大学へ行つてきた連中が共産党の影響を受けて、私たちは当然だと言いつ方をしていたけれども、帰ってきて沖縄で人民党の中で、あるいは労働運動の中で、という形でしょう。ですから、付き合いは長いですよ。

佐道 付き合いが深いほど、向こうのつもり積もつた不満も深まるといふことなのでしょう。労組を中心に、先生にといいことで、やはり最終的には労組の方が先生に依頼に来るといふことですか。

吉元 形の上ではそうになりました。供託金は自分で払って、ちゃんと戻してもらつたからね。選挙にかかわる運動費用というのは全部カンパでやっていますから、私は一銭も使っていないです。第一準備がなかつたわけですから、選挙をするなんていう発想よりは、出ているということだけで投票になるんだよというだけのことですからね。

佐道 十一月が投票で、最終的に決断されたのが八月の末だと。

吉元 九月に入つて記者会見を求められてやつたという感じですよ。

から、中旬ですか。

佐道 二〇〇二年のときには、私は、伊藤先生と先生のオーラルをやらせていただいた後、一週間くらい沖繩に残っておりまして、最後の日に先生に確かごあいさつをしに伺ったと思うのですけれど。その前に連合の沖繩の委員長の狩俣（吉正）さんにインタビューのお願いをしていたら、倒れられたんです。入院されたか何かで、それで会えなくなりました。それで、「あれあれ？」と思ううちに先生の名前がどんどん出てきて、「これは……」と思うようになったのですけれども、お盆明けというか、中旬以降ですか。

吉元 そうだと思えますね。新聞を見ればわかると思いますが、「よし、わかった。出るよ」と決めて、すぐに記者会見を開いていますから、本当にあつという間ですよ。

佐道 出るということになったときには、例えばどなたかに相談されるとか。

吉元 いや、もうないです。もうそれは、さつき来られた方（奥様のこと——佐道注）（笑）、そのへんで、それ以外にはないです。佐道 ちなみに、奥様はどういうふうにおっしゃっていましたか。

吉元 例えば、九八年の参議院のときも、社会党からやると。僕は経過を全部話しますからね、その都度。だから、僕と付き合いの範囲がまったく違うところで付き合っていますから、女性のつながりもありますね。だから、いろいろなところの話は聞いているかもしれないけど。しかし、息子を含めて、「やらざるを得ない」と言ったときには、もちろん反対はなかったし、仕方ないでしょうという思いが多かったし、「そうね」というぐらいかな。選挙に出るという考え方は、僕自身には元々ないですよ。もしあったとすれば、それは沖繩復帰直後の早い時期に何かを目指しておったはずなんです。そういう形で沖繩問題を切り拓いていくという考えは、僕にはなかったですね。例えば政党とか、国の

政治とか、県議会とか、首長とか。むしろそれを作り上げていく、そこに関わって政策を執行させていく、広めていく、そういう部分で。私の若いときから、例えば復帰協での事務局長を二十代後半ごろにやっていますからね。全県を飛び回って、政党の代表と演説会を開いたりして、「大きな事件」を引き起こしたりね。ですから格好よく言えば、私自身は組織者が向いているし、どういう形で多くの団体の意見を集めて、重ねて、運動を作って実現していくかというのが、ある意味で私の生き方というのですか、役割みたいなもの。だから、自分が選挙で選ばれて政治に——ということではまったくなかったからね。それは何かというと、そういうことで変えられるとは思っていないから。

佐道 そうですか。

吉元 だって、一人で知事をやったって変えられないですよ。もっと多くの土台、支えるやつをつくらんと。その役割を担うということがいちはんだきな……。そしてトップを作り上げていくというのかな。

佐道 単純に考えれば、大田さんのときの政策調整監、副知事をやってこられて、実質的に大田県政を支えてこられたわけですね。大田さんというのはいろいろおやりになる方で、いいところもあれば悪いところもあると思うのですけれども、ご自身がトップならこうするのにな、というのはもちろんいろいろあったと思います。

吉元 それはありますよ。でもそれは、トップにこうしてほしいという意味であつて、「こうしろ」とは言えなかったですよ。

佐道 ご自身がトップであれば、こうできただろう。じゃあ、トップになつてやつてやろうとは。

吉元 だけど、トップがすべてを、組織から、運動をつくる組織的な活動から、リーダーとしての役割までというのは、それはねえ。

佐道 まあ、確かに。

吉元 織田信長だったらできたかしらんけどね（笑）。

佐道 いやいや。

吉元 そこはどうなんでしょうね。私自身は、九八年に社会党から参議院にといわれたときも、大田知事自身が、「今のパイプがなくなったら大変だ。何もできないから、とにかく出てくれ」と。それに社会党も、「とにかく出てくれ」ということだったし、まあ、全国区だったらダブらんしね。沖縄の参議院の選挙区とダブらせてという問題もいろいろあったし。ですから、それでも相当悩んだんです。それは私は悩みました。むしろ、政党のこれからとか、日本の政治のね。それから、二十一世紀をどう見るかとかいうようなことを考えていくと、どの政党から出るかというのは、ただ過去に党員だったからという話ではだめよね。

佐道 それはそうです。

吉元 影響力、しかも県民の利益につながる、生き方につながる政治の場で勢力を発揮するならば、それはやはり可能性のある政党というのが、政治をやるとすれば、当然選択肢として出てくると思います。

佐道 じゃあ、副知事をおやりになって、その先々ですね。実際は、副知事をおやめになったときにはまだそんなに。

吉元 いや、六十才だったと思います。だからちよつといいんじゃないですか。職場だったら定年ですからね。

佐道 ですけども、定年でおさまるにはまだエネルギーも……ということ。

吉元 自治労という組織が、地方自治研究センターというのを持っており、そういう場に関わってくれという話がポーンと来たから、じゃあ、やれるうちはやろうかということ。ですから私は、九七年十二月の議会で二回目、重要案件の通らなかつた年末、年明け。年明けごろから、経済界から、「次の選挙を推薦で出てく

れ」と説得されたのが一月末、二月ですか。二月か三月ごろから、民主党からの誘いがあったし、社会党からも誘いがあった。全国に引き回されて。選挙運動ですからね。結果が出て、当選順位に入れなかつた。自治労県本部のほうも正式にやってくさいということ、決まりましたと。どうも僕には余裕がなかつたみたいですよ。その後も含めて。それは、自治研センターをやりながら、その後、二年たちましたから、もうバトンタッチする時期だなどと思って、フォーラムの話が出てきた。何名かで一緒にやろうという話だったから、「じゃあ、やろうか」ということで、私を中心として「沖縄21戦略フォーラム」を立ち上げた。ほとんど余裕がない。隙間がないんですよ、つながっているんですね。ここで本格的に、いろいろな場をつくって、沖縄のこれからについて検討する場を広げたりしようというところで、ホームページを立ち上げたりしているうちに、今度は知事選の話が出てきた。それが終わって、「ちよつと待て。こういう形で事務所をずっと続けて行くと、これは際限がないな」と僕自身も思ってた。そういう役割に絶えず引きずり出されるというのは、やはりちよつと違うんですね。もう事務所をたたもう、いい時期ではないのかということ、事務所をたたむ話をして、ほぼ合意させて、自身は継続するということが続いていくんです。だから、何名かが自分の家でパソコンでつながりながら、データを送ったり何かでコンタクトをやったりしています。例えば二〇〇三年三月に宜野湾市長が誕生して、「基地問題、普天間問題をちよつと手伝ってくれ」と市長と自治労から要請があつて、本格的な論争をして、行動計画を二〇〇八年まで……。彼は二〇〇三年に当選して、五年で普天間撤去を求めるという方針だから、その五年間にどこまで追い込むか。つまり二〇〇八年というのは北京オリンピックです。どこまで持っていかということ、具体的に論議した。過去の蓄積が役に立った。地元は焦りますから、それをどういう形で組み合わ

せて。同時多発テロがあったし。これも一つ。だから、チームをつくって、作業に入りやすかったですね。

佐道 それが、いまやっておられることに続いていく話だと思うのですけれども、ちよつとまた選挙戦の話に戻らせていただいで。出馬を受けざるをえないということになって、出馬声明を出されたのが九月に入つてのような段階ですから、選挙の準備ということからいうと、まったく時間がなわけですね。先ほどもちよつと申し上げたのですけれども、私もちよつと選挙戦を拝見させていただいたら、これまでの沖繩の知事選挙にはなかつたような、かなり独特なスタイルといますか。つまり、組合頼りではなかつた。先生ご自身が組合のご出身であるにもかかわらず、組合が全面的に表に出てきているわけではない。勝手連のような人たちが、かなりいろいろやっていると。つまり、ボトム層をどのよう巻き込んでいくかというような形でずいぶんやっておられたような気がするのです。けつこう若い人にもアピールするようなことをやっておられた。ある新聞記者に言わせると、先生は、午前中は家で勉強しておられて、選挙戦は午後からしかやらないとか。「そんなことでもいいのか」と新聞記者が言っていたというような、独特のスタイルだったということなのですけれど。これはやはり、やる以上はこれまでとは違う形の選挙をやらないと、ということだったのですか。

吉元 朝立ちというような、出勤時に繁華街で、あるいは交通の多いところというの、ああいうのを自分で見てきたし、させてきた。「あれ、投票効果にどんな意味があったかな」というのが実はありますよね。選挙に実際に関わった者として、やらなければ不安だけど、やってどういう意味があったかなというのは、ずっと疑問に感じていたのです。市場を回るとかね。ちよつと違うんじゃないのかと。その理由は、私が関わりとすれば、顔を見てもらう、覚えてもらおうというものではないはずだと。ちよつとそ

こは、「吉元つてだれ？」という話よりは、「あ、副知事をやった吉元。知っているよ」というのが一つあって。いや、知っていない層がおるよと。その知っていない層は、朝、繁華街で、あるいは交通量の多いところで手を振って顔を覚えてもらうか。ちよつと違うんじゃないのか、というのがあって。やり方が違うというのは、意識的に変えたわけではなくて、かねがね考えていた、自分で言っておったことをやらなかつただけの話です。それが一つ。もう一つは、朝にやはり弱いんですよ。ですから、そんな無理はしないほうがいいんじゃないかと。三ヶ月くらいやるのだからね。それがやはり、支部あたりから、「いきなり走り回るほうがいいんじゃないのか」と。しかも、もう短い期間だから離島にも行けないということ、十の市がありますから、そこを中心にやろうと。そこから、「隣のところまで行つてくれ」というのだったら、そこへ飛ばうということ。選挙期間は短いし、運動組織をつくるということも政党に頼つてないですから、五十三市町村全部、離島までつくるといふのは。普通はこれを三年かけてやりますからね。どんなに短くても二年かけます。そして、候補者を擁立して、一年でひと通り回すのですね。

佐道 大変なものですな。

吉元 それは、自分でやってきた経験が幾つかありますから、そこはできないよと。だったらどうするかという話です。だから、政策はどこが違うのかということ、何を中心に訴えるかということ。どこをあてにするか、これを最初から決めたつもりです。しかし、これはいろいろなところから相当怒られました。「なぜ、そこまで来ているのに、隣に来なかつたか」と。私に言わせれば、そこまで行くべきだというのは分かっているけれども、それは回れませんとということ。ですから普通、候補者というのは、朝昼晩なしで、懇談会を含めて、とにかくどこにでも顔を出せというパターンでしょう。それはまずできません。できないこと

を、「やれ」という人もいなかったから幸いだったのですね。

佐道 逆にいいますと、これまでの知事選挙、大田さんのときとかその前とか、実際に先生が第一線で選挙戦の絵を描いていたわけですよ。そして候補者に、「こうしてください。ああしてください」と。今度はご自身が候補者になられているわけですから、その候補者としての先生を、かなり厳しい戦いであつても当選させるために、選挙戦で絵を描く人が必要になると思うのですけれども、こういう人はいらつしやつたわけですか。

吉元 それは、選対事務所を置いてありますから、彼らが工夫したと思います。彼らは僕を引っ張り回すことをあまり考えていなかったみたいね。どこにだれがおるか、どことつながればそれが広がるかという点でいうならば、相当毎日夜中まで苦労していた。ですから、私を動かすと言うよりは、むしろそこは宣伝カー担当の人に任せちゃつて、あとは全部市町村担当しながら、そこに拡大していくことに集中しておつたみたいです。行けない部分、私が十市を中心していますから、市以外の部分にどう広がっていくかということ。

■労組、運動力の低下

佐道 先生は元々労組ご出身ですから、やはりなんだかんだいっても労組は。

吉元 あ、この労組というのは、もうちょっと前から、事実上組織運動ができていないんです。組織的選挙活動はできないところですよ。これは、もう限界ですよ。私が県労協に行ったのが八〇年代の中頃ですね。十年かけて西銘知事を倒して県政を奪還するという方針で県庁を辞めて行くのですが、幸いに十年かからずに県政を奪還した。そのときに、徹底した選挙運動のパターンをつくつたんですよ。すべて戸別訪問。「こんなもの選挙違反じゃないか」と言われるけれども、そのかわり、きれいに地図の上で、

この区画はどの組織の〇〇支部というところまで全部。大きい市は全部。小さなところは、そこにある自治労の市職労、町村職労に任せる。例えば那覇市なんかは、全世帯くまなくですよ。ブックごとに選対事務所を借りて、そこで地図に色塗りをして、全部つぶしていくのです。これを毎日毎晩させたのです。それが限界だったですね。九〇年十一月の大田知事選挙、僕にいわせればこれが最後だと思います。

佐道 それが最後ですか。

吉元 九四年は大田の勢いで、経済団体も含めて、「もう反対しない」というところまで押さえ込んだ。そして、自民党はもちろん出すだろうけれども、もう公明党も一緒ですからね。労働団体も、もちろん九〇年のパターンを持っているけれども、ほとんどビラ入れを一、二回やるという程度で終わっています。集票というよりはむしろ、「またお願いしますよ」と。九八年、大田さんが敗北した選挙。これは、私は選対には入っていませんけれども、自治労の特別執行委員でもありますから、彼らの運動、連合の運動を見ておつたのですが、そこまでやりきれなかった。この何年かの違いだね。その後の大きい選挙も全部そうです。今度の那覇市長選挙なんかも、ちょっと見ておつたら、各家庭にビラ入れをすることさえできないという状況ができていました。私なんかは荒っぽいほうで、「とにかく、捕まっても死刑にはならんから」というような形でね。弁護士を十名くらい揃えて、そして運動は運動で突っ込んで、トラブルが起こると弁護士が走っていく。これが当たり前で、八〇年代から。こういう選挙はもう、あれで終わりだったと思います。沖繩といえども組合員はそのような運動をしなくなっている。執行部も、そこまで運動を求めている。「無理だ。できる範囲で」という形になってきていると思います。これは、沖繩がそうだから、全国的にも沖繩より先になつていっていると思います。

佐道 まあ、確かにそうですね。労組が集票ということはほとんどなくなってきたという。

吉元 ですから、公明党の運動に皆ビクつくのですよ。あれ以上のことを僕らはやっていました。

佐道 組織票ができるのが、共産党と公明党しかありませんからね。吉元 二〇〇二年の知事選挙というのは、それはもう知っていますので、投票率は下がるなど。革新といわれている部分が投票しなくなるなど思った。選挙にならんと最初からわかっているから。共闘をつくれなかった、統一でね。これはもう、結果ははっきりしていますよ。票がどのくらいいくかな、という話でしょう。

佐道 共闘がつかれなかった時点で、新聞なんかはもう、やる前から結果はわかっているという報道が圧倒的でしたからね。

吉元 ただその中で、いろいろな世論調査なんかで、「案外いい線いっているよ」というのがポロンと出たりしてね。それは、世論調査というのはそんなもんですよ。テレビに、顔を必ず出してもらえるからね。一、二回、討論会もあるわけでしょう。ああいうのを通じてみると、稲嶺さんが笑いながら、冗談だとは思いますが、最初のテレビ討論を浦添市民会館でやったんだけど、「吉元さんに負けている」と奥さんが言ったそうです。彼のことだから、冗談だとは思うけども。もう集票活動というやつはできなくなっているんじゃないですか。

佐道 そもそも運動員という形で労組を組織することはできないと。

吉元 労働組合の自由に任せちゃっている。

佐道 あ、自由に。

吉元 自分でやる。やれるときにやってくださいと。

佐道 そうすると、選対事務所に入っておられる方は。

吉元 労働組合からはほとんどいなかったんじゃないですか。

佐道 ほとんどいなかった。

吉元 それぞれが自分の、労働組合員の集まった部分をどういう形で分担するかというのは、もう大枠として決まっているから。

佐道 基本的にはボランティアベースですか。

吉元 そうですね。

佐道 勝手連的な動きがけっこうありましたね。

吉元 すごく連中なんだけれども、本当に何も分らないでね。七つ道具というのだけれども、届け出て許可をもらった宣伝カーとか、オーケーをとった携帯マイクとか、いわゆる選挙運動の免許証ですよ。これを持っていない宣伝カーに俺を乗せちゃって、那覇市で選挙運動をしてね。それで、パレットくもじの前でしゃべって帰るときに、那覇署、県警本部からとめられて、「吉元さん、まずいですよ」「どうしたんですか」「こんなことをやってもらったら選挙法違反です」「どうして」と、そこでハツと気づいたんです。あ、この宣伝カーは、ひよつとすると普通の街頭宣伝カーじゃないかなと思ったのですね。聞いたら、「いや、許可証はありませんよ」という。県警が許可証を見たら、「これは街頭宣伝のだろう」と。「あつ」と思ったけれども、私が、「それは分からなかったなあ」と言うわけにもいかんし。「もう分かっていると思いますから、もう二度と言いませんよ」というから、「分かった」とひといいって、それで僕は降りたんです。こういうことを平気でやる連中ですから、選挙法がどうのこうの、公職選挙法がどうのこうのの話じゃないですからね。でも、あの意欲はすごかったです。

佐道 そうですね。私は、実はそのときに那覇にいた勝手連的なことをやっておられる方にお目にかかって、お話しを伺ったりしたのですけれど。やはり、二〇〇〇年からサミットでいろいろ沖繩がクローズアップをされて、それがどんなものかなと思っていると、なかなか方向が定まらない。さつき先生がおっしゃった二〇〇一年の風評被害というのがあって、このままでいいのかなと

いうことを非常に漠然と不安に思った方々が実はけっこういらっ
しゃって。

■吉元塾

吉元 あの中から何名か市会議員が誕生しているのですね。びつ
くりするほど、その後小さなグループができるのです。その小
なグループの代表が集まってきて、私に政治塾を開いてくれとい
うことで、いま塾があるんです。

佐道 吉元塾ですか。

吉元 そうそう。実は保守系だけではなく、自民党の県会議員が
入っているんです。私は、「勉強するのだったら、だれでもいい
ですよ。思想信条を問いません。この場で徹底的に勉強しましよ
う。それぞれの生き方は生き方です」という形でオープンにして
いる。

佐道 塾の話も伺いたいですけれども、その前に、塾のような
後進の指導は、選挙戦をきっかけにそういう動きが起きてきたと
いうことですか。

吉元 政治という意味でいうならば、若い者を育てるという意味
では、それはそのとおりです。それ以前は、県内はもちろん、全
国どこでも呼ばれたら行って講演することはやってきました。で
も、自治体の問題とか、市町村合併を勉強するとか、基地問題を
集中的に勉強するとか、沖繩つてこれでもいいの？とか、こうい
うテーマで彼らがテーマを出してきますからね。自分たちが勉強
しようというテーマを出して、これに応える中身をつくって、一
緒に勉強する。つまり政治を目指す若手の勉強する場として意識
し始めたのは、この吉元塾。知事選以後ですね。知事選に係わっ
て、僕に係わった、僕を見ておった連中が最初に集まったのです。
だから勝手連の連中もその中におる。

佐道 その勝手連をやっておられるのも、これも固有名詞はだめ

かもしれませんけれども、たとえば、物産公社に元々いらっし
った方々が……。

吉元 ああ、おりましたね。

佐道 ああいう方々とか、つまり先生が県庁にいらっしやった時
代に芽を出して、芽吹いているところで稲嶺県政の中ではちよっ
と外れてしまったというような方とか。

吉元 でも、それはまだ少ないです。ここには、自治体の職員の
意外と若い連中ね。それから、いろいろなことをやっておったん
だが、例えばテレビとかラジオでタレント的なね。それでなんと
か政治の場に顔を出したい、出てみたいという連中とか。親がそ
うだったから俺もやりたいとかね。そういう連中が集まって、吉
元塾をつくるきっかけになったのです。

佐道 選挙をおやりになって、結果的に残念な結果。まあ、残念
といえますか……。

吉元 もう当然の結果でね。十五万が最高だなというふうな読み
方は自分ではしていたから。それは選挙にならんということは承
知の上だからね。だけど、十五万いっていなかつたんじゃないか
な。ちよつと足りなかつたという気がします。

佐道 そうですね。じゃあ、結果は先生の予測の範囲内。

吉元 もちろんそうです。私はむしろそれよりは、言ったことが
その後続くのかなと思つた。次の選挙につなげるのかなという点
で、そういう成熟が芽生えてきたというのが一つと、まあ、フォ
ラムというのは、事務所は閉鎖したけれども、それを通じて関
心を持つやつは増えてきた。自治体レベルでこういう問題を考え
るときに、手伝ってくれんかと。宜野湾問題とか、与那国問題と
か、こういうのが出てきたという点でいうならば、私が副知事時
代にやっておった仕事だけじゃなくて、選挙のときにアピールし
てきた「沖繩の二十一世紀のあり方」みたいな、こういうのが首
長とか市町村議員、一般の若手の頭の中に残つたのでしょーうね。

そういうのが次から次へと出てきているような気がして、それが次の選挙につないでもらえれば非常にうれしいなと思う。消えないという意味でいうのならね。どくらいの大かさかというの、ちよつと量れないけれど。

佐道 それはそうですね。後になってみないとまた、わからない吉元 保守系のの県会議員が来るくらいだから、少し広がっているんじゃないですか。

佐道 革新を含めて、沖縄の政治構造の中の大きな変化の中にあつたということですけども、つまり既成政党を中心として、従来の組織といえますか、そういう枠組みが大きくずれてきていると。

吉元 労働組合の僕たちが描き、将来的に理想と想っていたあり方、労働組合の社会的役割。つまり、組合の権利義務と家族の福祉のためにという、いわゆる労働組合主義的なそういうものにプラスアルファして、沖縄の場合は、「沖縄はこれでいいのか」という復帰運動があつたでしょう。「こんなに米軍と付き合い合わされていいのか」というのが。つまり、本土の労働運動とはちよつと違う持続性を持っている。いまでもあるよね。でもそれは、政治、選挙とかいうものとは分離し始めています。それは何かといえば、労働組合総体が縦の全国とのつながりのなかで、運動が矮小化されているというのかな。あたりまえでいうならば、総評と違う連合の労働運動に入ってしまったというのかな。これを埋めるのは何か、日常的にいうと、それを埋める場がなくなっている。例えば、基地問題に対して、平和センターというのは作ったのだけれども、それが本当にそういう意味を持つて広がっているのかという点でいうならば、基地反対で運動しているけれども、なぜ広がらんのかな。辺野古沖への普天間移設の問題も、思ったより広がらん。でも、反対運動は持続している。そういうのを見てみると、「労働組合員って何だったかな。政党って何だったかな」

ということ、やはりこの何年か、特に二〇〇二年の知事選以降というのは身につまされるほど自分で感じ始めています。そういう中でどうしたらいいのかという話でしょう。何か大きい組織をつくつて、打ち上げて、そこを運動の求心力を持つつかというのと、「いや、そうでもないみたいよ。何なの？これ」と。という意味でいうならば、確実に労働組合が担ぎきれない領域に入った。組合員の気持ちも、もう労働組合を中心に社会的役割を担つていくというものはなくなつた。政党も、そういうものではなくなつてきた。特に沖縄ではそれが顕著ですね。かつて沖縄革新を担つてきた社会大衆党とか社会党、いまの社民党とかを見ているとね。そこに若い市町村の議員が出てきましたね。彼らは、最初から労働組合の組織をあてにしていない。政党の組織をあてにしている。今年の県議選も、意外に思ったのは、都市地区である浦添市で初めて出た若者が圧勝する。沖縄市あたりで、市議員選挙であれだけの票を一人でとるといふ若手が出てくるし、べつに組織とか何かというのは関係ない。それを見ていると、ちよつと違うなと思いますね。

佐道 確実に沖縄の政治も新しい流れが起きつつあると。

吉元 いま、その二人も吉元塾のメンバーですけどね。労働組合の役割を僕は否定しない。政党の役目も否定しないし、政党は当然必要です。でも、それに頼つてきた運動、それが当たり前だった運動ではなくなつてきたということに早く目覚めて、これから地域社会を担つていく若い人をどのくらい作つていくかというのが欠落していたんじゃないかという感じがしてね。

佐道 いまの沖縄の政治の問題、吉元塾の話をもつてきたのですけれども、その前に、ちよつとお聞きしづらいつた話ではあるのですが、先生が知事選に出られる最終的な判断をされるときに、ちよつとお体のこともあつたんじゃないかなという話を聞いたことがあつて。

吉元 ありますね。県庁を辞めて県労協に行つて、ローカルセン
ターに行つて、沖縄闘争の再構築ということで、反基地闘争を作
り直すんです。嘉手納基地包囲行動を企画し、地域をまわつて、
議会や議員や青年団や、いろいろ話し合うのです。そこで酒も飲
むし、相当消耗していたんだらうな。ちよつと倒れたんです。ほ
んの軽い。それから自分の健康を意識した。その後、血圧が高い
ということで医者に注意されて、薬を飲むようになったのです。
いまでもそれは続いています。県庁に大田県政ができて県庁に入
るときにちよつと問題になりましたね。一度県庁職員を辞めてい
ますから、健康診断をきちつと受けなきゃいかんということで、
保健所でチェックしたときに、「血圧がどうしても高い。これは
無理ですよ」という。何時間かな、保健所の庭で深呼吸したりし
て時間を過ごさんです。所長が出てきて、「ギリギリ血圧が落ち
ました」となつて、それで診断結果を持って県庁に届けて、それ
で県庁に入りました。大田さんが就任した直後の十二月上旬。そ
れから私は、血圧の問題はずつとそのままです。県議会の深夜審
議、二回ほど私はついていけなくなつて、翌日休んだ。議会でト
ラブったこともありますけれど。私自身は、その後ずつと健康に
は気を付けているつもりです。一つは血圧。もう一つは、これも
少し酒を飲みすぎたのかもしれないけれども、これは〇二年の知
事選挙後にわかつたんですよ。前立腺肥大。それだけすめばよか
つたけれども、細胞検査をしたら前立腺がんという。そ
れ以後は酒も飲んでいません。健康上、けつしていい状況ではな
いんです。二〇〇二年の知事選挙というのは、本当は自信なかつ
たですね。朝弱いというのはそこなんです。もともとそうではな
かつたんですけれど、徹夜でも、酒を飲んできても出勤して仕事
をしておつた。無理がきかなくなつてきています。

佐道 吉元塾の話をもうちよつと伺いたいのですけれども、選挙
戦をきつかけに、若い人たちが中心になつて、先生に、「こうい

うのをやつてください」と言つてくるわけですか。

吉元 そうなんです。三名でしたかね。「どうですか。そうい
うのをやつて、私たちが勉強する場を作つてくれませんか」と持
ち込んでこられた。で、「そうだな」ということで。これは一年
半近くなるのですけれども、一月に一回、第三火曜日の夜という
ことで。十九時からずつとやっているので、この間からは、
県会議員まで増えましたので、一時間ずらしてくれということな
ので、二十時から二時間くらい、八時から十時ごろまでやつて。
あと、帰るやつはそこまで、残るやつは近くの居酒屋で、そこか
らが本番で、十二時近くまで細かい話をします。テーマをつくる
のは、一週間前にメルマガで、それぞれから、「今回はこれをや
りたい」と出てくる、それを担当者のほうが一つに絞り込んで。
私も毎日見えています。それで決まれば、準備に入り、作ったもの
をコピー取らせて、渡して、だいたい一時間くらいこつちがしや
べつて、それについて論議するということでやっています。

佐道 先生の沖縄21戦略フォーラムの事務局は形としてはまだあ
るわけで、そこも……。

吉元 いや、違います。

佐道 そこはまったく違うところが。

吉元 その仕組みとはまったく違う。

佐道 完全に分けておられるわけですか。

吉元 最初は、フォーラムの一環としてやろうという話もありま
したけれども、そこには運営委員会がありますから。

佐道 あ、フォーラムに。

吉元 だから、そこで一回論議させたんです。そうしたら、や
れ講師陣を何名そろえるか、から始まるのですからね。ちよつと
待てと。そういうのは彼らが望んでいないよと思つたものではな
ら。そこで、別枠でやるだけやってみて、手に負えなくなつたら
フォーラムの中で位置づけてみたらどうかと。まったく別世界で

す。新聞記者も入っていますよ。

佐道 そうですか。平均年齢は何歳くらいですか。

吉元 三十中ごろですか。五十以上は来るなど僕は言っているんですよ。例えば、沖繩から米軍基地がなくなる、そして国際都市形成構想が完結する目標が二〇一五年。九五年から数えて「二十年」、ここに焦点を当てていたのです。県庁時代も。国際都市形成構想の自身をきちつと細かくかかわっていきける職員は、若い係長クラスで作ろうと。このクラスは残るんですよ。自分たちが作ったやつだから、卒業まで責任を持てと。いまやっている塾も、「言いつ放し、勉強して自分個人の頭作りをするというのでは困るよ。社会的に自分が何をできるかというやつを求める人が来なさい」と、彼らがそういう。「じゃあ、それに対して僕も応えましょう。だったら、五十から上には来てもらっては困るよ。例えば、せいぜい四十代の中ごろ、それ以上になると……」と僕も言う。「俺たち、もうギリギリだな」というやつが、二、三人おるんですよ。そこところもまあ、難しく言っているつもりではないが、勉強していくという点でいうなら、やはり三十の中頃から、四十中頃、自分の体験でこのくらいがいちばん、将来をがむしゃらに、何かやりたいんだというエネルギーが見えますね。

佐道 三人から始まって、いまは常時どのくらいのメンバーなのですか。

吉元 十数名おるのだが、いろいろな仕事を持っていますから、いつも来るのは八名から十名くらいですね。

佐道 これは、どこか定期的に場所をちゃんととってやっているのですか。

吉元 はい、そういうつもりでやっています。ただで借りてね。それぞれが一回ごとに千円出しているようですが、コピー代を払ったり、お茶を買ってきて並べたり、そういう費用にあてているみたい。少し余ったから、何か成果を発表するためのフォーラム

をやるという動きが出はじめています。まあ、一年に一週くらい、自主的にやってみたらどうかと言っているのです。

佐道 これはとにかく、超党派の職業を超えた。

吉元 来年の選挙で、ある市の市会議員を目指そうというのがおるし、市会議員で次に市長を狙っているやつがおるし、今度県会議員になった人も。まあ、本人はいまのところ、本気かもしれないけれども、「副知事はやりません。知事を狙います」というやつもおるし。だから、何かをやるというやつが集まっています。

佐道 女性はいらっしやるのですか。

吉元 はい。女性は、市会議員が一人、一般のNGOをやっている人が一人、市町村役場の職員が二人、四名くらいおります。

佐道 そうですか。なかなかおもしろそうところですね。

吉元 そうですねえ、いちばん若い自治体の職員がおもしろいですね。とにかく物を言わないから。

佐道 物を言わない？

吉元 なぜかと酒を飲んでいるときに話すと、「いまは何を質問したらいいかわからない」と言うのですよね。「とにかく参加したかった。とにかく皆の話を聞いていただけで精一杯だ。自分に何か質問してということと言わんでください。もう少し時間をください」と言うんだよね。それには僕は感激しました。それでも参加したいと来たというのがね。誰の紹介か分からないが。

佐道 そういう形で来る人もいるわけですか。

吉元 だから、だれかがしゃべっているでしょうね。吉元塾という言葉も、あまり難しい表現するなといったのだけれど。メルマガが流れるときは、ローマ字の「YOSIMOTOKOJYO」という形で流れるのです。日常的にはそれぞれが連絡しあっているんです。私も見れます。ときどき感じたことを書きますが、見たという合図が来ます。

佐道 フォーラムをおつくりになったときには、若手の財界人と

いう話が確か出ていましたが、これは連動していません。

吉元 これとはまったく。

佐道 していません。

吉元 その若手の財界人も、表向きは名前を出さんと。私もわからない。フォーラムの事務局長が全部管理している。

佐道 フォーラムのほうも。

吉元 フォーラムは。

佐道 いまの若手の財界の動向とかはどうなのでしょう。

吉元 一般的な言い方をしますと、親離れですね。だいたい親離れし始め、もう出来上がっていますね。親の代がちよつとルーズで、子どもにバトンタッチしたにもかかわらず、子どもの歩き方が、親の世代で現役の連中から、「おまえの息子は革新か？」と言われると、その親がびっくりしちゃって。ま、商売をやっていますし、いろいろなつながりもあり、若い経営者の連中はまだまだその中です。だけど、割り切り始めたのは、「公明党と連立政権。やはり自公は問題だ」というふうな沖縄の自民党の中のこの動きが連動しておるんです。「おかしい。これは、いつか裏切られる」と感じているんです。だから、保守とか革新ではなくて。そういう意味では、経済界の若手の連中は、沖縄がどうかを見たいなど。だから、いい意見がある人から聞きたいという傾向です。自分の仕事のプラスになるという理解とはちよつと違うんです。ここは非常におもしろい。親の世代は、自分の仕事がつながるのか、つながらないのかですね。その世代とちよつと変わってきたんです。沖縄の全部が全部そうではない。例えばバスが、もう公共バスとして成り立たなくなってきたでしょう。それから、例えばオリオンビールが文字通りいなくなっちゃって、アサヒに救われて。こう見てくると、復帰前のしつかりしておったと思われていたところがガタガタになっているんです。そういうところほど、バトンタッチが遅いんですね。そういうのをなんと

なく支えてきた、琉球銀行などが破産状態まで一回落ち込んだんです。ですから、「ちよつと危ないぞ」というような、そういうものが九八年の知事選にくつついちゃったのです。だから稲嶺恵一さんにワツと飛びついた。乗って出てきて、生き残ろうと続いている。この動きとはちよつと違うのです。先ほど言ったように、自公に対する批判というふうに政治的に目覚めている連中は、「いや、いつまでもこの体制は続かんよ」というような見方をする。少し経済的には自立したいというのがあるみたいで、それが、下地幹郎さんの選挙のときは、「同じ自民党じゃないのか。なんぞ除名するか」というふうにあります。政治の中で決して大きな発言はしていないし、前に出ていないが、広がりつつあります。

佐道 じゃあ、もう少し時期を待てば、かなり大きな力になってくるということ。

吉元 だから、この次の選挙というよりは、もうちよつと長期的に見なきゃいけないんじゃないでしょうか。次の選挙まで、どういう形で知事選に向けての政治の色分けがすすりするか。その仕方によってはおもしろいと思うし、それがいまのようなくじゃぐじゃの形で、自公がそのまま突っ走っていく、「仕方ない」という形で経済界もそこに流れるのか。「いや、ちよつと待て」という形で若し連中が牽制するのか、これは見ものです。

■〇五年以降の国政、県政の展望

佐道 いまちよつと次の選挙というお話が出たのですけれども、そこをお聞きしたいのですが。今年はもう二〇〇五年に入ったところで、実際には二〇〇六年、来年になるのですよね。

吉元 そうですね。

佐道 県知事選もそうですし、国政レベルでいうと、小泉さんの任期が来年、二〇〇六年に一応切れる。多分、もうその後ははないという話があって、実は今年一年の動向が……。今年一年もてば、

小泉さんがきつと最後までいって、しかるべき人に譲るなり何なりという話になると思いますが、今年、もし、いろいろな動きがあると、下手をすると民主党に政権が行くかもしれないというような形がいま出つつあるところなのですが。県知事選挙ということを考えて、先ほど先生は、三年がかりとか二年がかりとかいうことをお話しされたのですけれども、まさにもう、稲嶺さんは来年で終わりだということを考えて、そろそろいまの時期くらいから考えておかないといけないということになりますね。

吉元 今年の三月あたりまでに、市長選挙……。実は、知事選挙の年の三月、四月に、石垣と宮古の平良市と沖繩市、三つの選挙があるんです。石垣市は合併問題があります。平良も合併問題がありますから、合併問題が成功すれば、今年の十月選挙になります。新しい首長選挙ですね。そうすると、最終的には来年の四月に選挙というのは沖繩市だけになります。沖繩市長選挙と知事選挙が年の初めと年の末にあつて、この間に解散総選挙が入ると見ている。十月あたりかなと。十一月が知事選です。そういう呪み方をする、どっちみち知事選も解散総選挙も、候補者はそう遅くないうちに決めようという意味で民主党も動き出しているし、民主党も現役を決めている、という状況です。四月からは動き出すだろうと思います。知事選というならば、今年の九月議会あたり、稲嶺知事が、「もう出ません。これで終わりです」と言うのか、十二月議会と言うのか。だいたい九月が普通のパターンです。まあ、出ないことを前提に実は動いていますから。

佐道 本土のほうもそうなのですけれども、候補者を絞るという話になったとしても、リーダーが不在といいますが、弾がないと言いますか。

吉元 これは両方に言えますね。沖繩市の場合も、新人同士の争いになるだろう。それから、県知事選挙も新人同士だと、こうい

う状況ですね。それがごく当然のように認識されています。結局先に決まるのは、民主党の衆議院議員沖繩の四選挙区が先に決めるのか。そして、民主党の二人にぶつけてくるのか。もう既に三区は、民主党本部選対の動きがきょうの新聞に出ています。私は、二〇〇〇年十二月の段階で、県知事選挙には、照屋寛徳が参議院に出ないで、一回、二〇〇二年は落ちてもいいから、二〇〇六年で勝負をかけようと本人を説得したことがある。本人は、結局は参議院を狙って落ちて、今度は衆議院に鞍替えして、選挙区を変えて当選した。そういう意味では、彼自身がどう選ぶかの問題もあるだろうけれど。まあ、いつまでも、いまの政党、いまの国会議員ということにこだわらず、知事選で彼でまとまるならば、今度はその別の政党が衆議院の選挙でぶつけないで、早めにだれかがそこを整理して、照屋寛徳を知事選にという形に決めておけば、それを前提に前後が整理できると思う。そういう役割を担うやつを探さんといかんですね。

佐道 まさに先生がおっしゃった、そういう人がいるかどうかを探さなければならぬという状況。

吉元 人間社会ですからね。坂本竜馬じゃないけれども。

佐道 歴史というのはおもしろいもので、そこにいるべき人が突然出てきたりすることはあるとは思いますが、それにしても、まだ芽も見えないという感じがしますね。

吉元 結局、何を課題にするかでしょうね。二〇〇六年という、二〇〇八年の前ですよ。北京オリンピック。沖繩的に言うならば、海兵隊が全部なくなるの、なくならんのかという大きな節目。九月、十月と言われている在日米軍の再配置の問題の動向を見ながら、もう一度知事選の争点にしていくことができるか、でしょう。もう一つは市町村合併です。沖繩はうまくいっていないです。川を一つ隔てたらだめです。結局どうするかの話は、市町村合併以前に、沖繩をどうするのという問題ですね。「琉球政府」を作

ろう。そういうものとの兼ね合いで、次に市町村合併の段階になる。ですから、まさか九州と一つだということにならないだろうけど、いまの知事はどうもそれに反対していないようだ。

佐道 あまり考えておられないような気がするのですけれども。

吉元 黙らされていると思うのです。その種の発言をするなど。そこで県庁の若手のグループが任意組織をつくってやっている。いたたまれず動き出したと思うのです。ですから、次の争点は何ですか。これによつて一挙に、おもしろいパターン、人が出てくるかもしれません。

佐道 それと同時に、県政もそうですけれども、国政自体に変化があるかもわからないということを言われているようですね。

吉元 どうですかねえ。郵政民営化法案、それを花道にして引退させるといふふうな動きが一部あると聞いているのだが、それさえも通さんで潰そうというところまで、幅がありますね。

佐道 ありますね。

吉元 小泉さんがやってきた改革は、結果がいつも曖昧な形で、「やった、やった」という。この郵政民営化問題も、結果としてどこに落ち着くのかなというやつがだいたい見えてくる時期が一月いっぱいですか。その頃というのは、イラクの国民投票です。そういう意味で言うならば、一月二十日がアメリカ大統領就任式、二月に「日米審議官級協議」がある。戦略目標、兵力の見直し、日米軍の役割分担など、もうその段階では実質的に決まっています。キャンペーン座間へのワシントン州から米第一陸軍司令部の移転。これはもう決まり。あと普天間の問題だけでしよう。私は前の知事選挙から言っているけれども、岩国のアメリカ海兵隊基地を拡張していて、なぜ、そこに移さんのか。私は、「そこは選択肢にすべきだ」と。共産党は、「いや、それでは俺のところは候補者を出す」と知事選の候補者を出してきたというのだから

ね。岩国が嫌だったら、日本から海兵隊は出て行くべきだ、とやっている。そういう意味では、普天間の問題も県内移設の話がなくなつて、あとはそこに持つていくための道順に嘉手納統合の議論を一度やらないと県外へ展開しないと見ている。基地問題こそ小泉さんを決してあてにしてはならないが、「俺がやったぞ」という実績を作るのだから。自民党のある部分もそれには対抗出来ない。郵政民営化は命を張るほどのものかな、という感じもするしね。

佐道 郵政で選挙で出てきている人は頑張らなきゃいけないのでしょうけれども、自民党全体からすると、郵政民営化で小泉さんに解散なんてやられたら、そのほうがよっぽど大変ですから。このところの選挙の動向によりますと、それこそ民主党に政権が行きかねませんから。

吉元 私の見方は、結果として小泉さんが任期満了までやる。そうすると、新総裁、新内閣のもとで、衆議院解散総選挙がそのときにはある。知事選のほとんど直前にある。任期いっぱい、四年待つバカはいないよ。

佐道 あまりいいですね。

吉元 来年あると考えたら、四区にもちろん自民党は出すし、公明党は一区に出すし。民主党が四区出すというし、社民党はいまの現役の二人を三区と二区に。こう並べて、この間の参議院選挙で下地幹郎さんが貢献したお返し、今度の市長選挙で共闘したお返し、これをいわゆる革新といわれている政党のどこが一区でまじめに付き合うのか。公明党をつぶし、下地幹郎が選挙区で上がるか。除名されていますからね。最終決定はされていないけれども、選挙までには「無所属」という形で決着する。下地幹郎さんは、実は小泉の最初の総裁選挙には入れておるんですよ。だから橋本派から怒られた。二回目もそうなんです。そして同時に、いまの普天間移設も、もう辺野古への移設はだめだ、という考え方は、実は中川（昭一）さんとは一つです。ですから、小泉さ

んが続くとすれば、下地幹郎をほったからすわけはないだろうと。ちよつと深読みしすぎかもしれないけれども。

佐道 彼は、中川さんの動きとかいろいろなことに本当にずいぶん貢献していますので、無下にはしづらひはずですよ。いくら人情に欠けた小泉さんでも、そこはやつぱり。

吉元 だから、そうなる最終的には、自公が公明党の議員を沖縄一区、県都である那覇市を中心に出すといったときに、自民党がそれでも、「分かりました」と引つ込めるのかどうか。僕は、もう引つ込めないだろうと見ているんだよね。

佐道 いずれにしても、沖縄というのは大変多様なところですよ。つまり沖縄全体をまとめられるようなリーダーを探すというのは、相当難しいことなんじゃないかと。

吉元 沖縄から東京ばかりを見ているからバラバラなのです。

佐道 最近、その傾向が余計強くなっていると思うのです。

吉元 そのとおりですね。それは、せっかくあれだけ議論した中身が全部雲散霧消したからです。しかし、あの論議が県庁の中で残っているとすれば、首長選挙によつて、そこがもう一度浮上するという可能性は否定できないと思います。そのときに、そつくりそのままではないかもしれないけれども、少なくとも東アジア経済圏という現実、もう一回来年の選挙に向けて急速にクローズアップしてくると思います。いまの防衛大綱の問題とか、沖縄

に三千名陸上自衛隊を配備するとか、あるいは下地島空港に航空自衛隊を入れるとか、こういう議論というのは現実化してきます。おそらく受け入れられないだろうけれど。結果的には、自衛隊の新たな配備ということ、米軍のかみ合わせの仕方ですね。どういう形で、どの時期でおさまるのか、おさまらないのか。それは、台湾の独立、中国の脅威ということ、例えば自民党が、公明党までも加担するというふうに見てくると、全国とちよつと違う、八年目にしても一回出てくるのです。これは避けられない課題だと僕は思う。

佐道 東アジア経済圏、それから防衛大綱の問題、下地島の問題、米軍再編の問題に絡んできますので、あしたもう一度ちよつとお話を伺いたいのですけれども。ちよつと、だいたい沖縄の中の政治を中心にとつて、きょう計画してきたところはだいたいそこらへんくらいまでということなので、明日は、日本と沖縄の関係。きょうのお話と少しダブるところが出てくると思うのですけれども、もちろんダブつてもかまいませんので、そこを中心に。最後に、十五分か二十分、先生の沖縄政治についての総括を言っていたら、それで締めくりしたいと思います。とりあえずきょうはこのへんで。ありがとうございました。(終了)

吉元政矩 オーラルヒストリー

第8回

日 時：2005年1月6日（木）
開始時刻：13時30分
終了時刻：16時30分
開催場所：那覇市・吉元邸

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

佐道明広（中京大学助教授）

■ 難しい市町村合併

佐道 さて、きょうは最後の総括というようなことをしていただきたいと思います。その前に、きのうは先生が県知事選挙に出られるところから始まって、いま現在の沖縄政治の動向というところなどで、沖縄の中の政治の動向を主にお話ししていただいたのですが。それと、先生のかかわりということも含めて。きょうは主に、本土との関係。これはまたアメリカとの関係もありますけれども、日本と沖縄、世界の中の沖縄ということですね。

まず最初は、本土でも進行しておりますけれども、特にいま与那国の問題等々でかなり深くかかわっておりますという自治体の再編の問題。市町村合併ということも含めて、沖縄でもだいたい合併協議会ができて、できては頓挫したりということもありますけれども、本土のほうを見ながら、沖縄はどういう状況になっているのか。それに先生は具体的にどのように係わっておりますのかということから、まずお話しただけだと思います。

吉元 市町村合併というのは、沖縄では戦前・戦後を含めてほとんど進んでいないのです。特に沖縄本島の市町村合併というのは、琉球政府時代にも相当取り組んでいるのです。例えば、嘉手納町と読谷村。これは、小さな川を一つ隔ててつながっていますからね。地元もそういう声が強かった。実は、合併の協議会というのですか、行政同士の話は進んだのに、土壇場で住民の反対でつぶれた。ことごとく、地域性というのですかね。僕たちは「体質が違う」という言い方をするけれども、言葉は沖縄方言で同じだけれども、ちよつと違うんですね。市町村合併というのは琉球政府時代、復帰前もいろいろ取り組まれてきたけれども、結果的にはできなかった。

今回の平成の大合併といわれているこの事態ですけれども、やはり市町村は全国と同じように、この三十年間で地方交付税の仕

組みがちちつと「本土化」されましたし、その他補助金等を含めまして、まったく同じです。加えて沖縄特別法というので、補助率を中心としたかさ上げですよ。ま、そういう優遇措置できた。それだけではなくても一つは、特別な国レベルの催しもの、イベントを入れることによって、遅れた部分を急がそうという形で、一つは復帰直後に海洋博・国際博覧会、それからミニ国体ね。本物の国体を八〇年代に入れるんです。そういうイベントを入れながら、それに向けて国道の整備を基幹に、市町村道、県道の整備とか、地域・市街地の整備をしてきたのです。

結果、道路、港湾、空港は、一応それはもう行き着いている。だいたいやる場所は済んだ。やれないところは、基地問題が残っている。これを壊さんと、ほとんど手が出ないよということですよ。そういう中で沖縄の市町村合併というのがあるんです。だから、中部圏は基地問題抜きに市町村合併を図面上でやっても、なかなかうまくいかない。本来の集落地が基地によって廃止され、外に出されて、へばりついたやつ同士を集めようとしたって、いびつなんです。ここが本土とまったく違うところなんです。似たようなケースでいうならば、例えば、太平洋ベルト地帯——沿岸部と中心市街地、それと山の中にある町村と一緒に合併するといったときに、中山間地の町村がすぐにハイと言うかということ、なかなかいかんのですよ。そういうのと似たような問題が起こるんです。加えて、小さい狭い島ですからね。「なぜこれを合併せんといかんの?」「強いて合併せんでもいいんじゃないの?」と。道路一本で町村名が違うでしょう。生活圈は一体化してしまからね。ですから、住民の中では「合併するべきだ」という声がなかなか出ない。行政は、「効率的な行政のことを考えると、なんとかしなきゃいかん」という対応です。これは琉球政府の時もそう、今日もそうです。いまは少なくとも国絡みでやっていますから、全国一緒に、統一的に、同じような指導の下で図面へ落

としていく。そして、ゴーサインを出してみたが、やっぱりうまくいかない。象徴的なのが、那覇と目の前にある離島です。それは合併寸前までいったんです。那覇市と渡嘉敷村は、すぐ目の前にあるんですね。二十キロしか離れていません。首長同士も、議会同士も、「いいよ」と言った。最終段階でつぶれる。つぶれた理由は、那覇市が、「面倒をみてやるよ」という感じなんです。これはかなり、島の自治体や、そこに住んでいるものにとって、「なんで？」ということになる。歴史的にいうと相当長い、蓄積されたそれぞれのアイデンティティーみたいなやつ、地域性という、そういうものが色濃く残っている。沖縄本島のなかでも、那覇のすぐ側の南風原町とその他三つ、合わせて四つの町村を合併しようと、これはうまくいったのです。実はすごく議論しまして、小学生、中学生、子供議会までつくった。合併協議会も走って、土壇場に来てつぶれた。合併することによって特別な金を国からとって、総合的な建物をつくることを条件に一つの町が出す。合併を条件に赤字を増大することに反対が出る。これがまあ、今の状況なんです。住民から盛り上がるような意味で合併についてどうするかという動きというのは、まずないんです。これが一つの特徴です。

しかし一方で、離島、例えばずっと南のほうの先島とか、宮古郡とか、八重山郡とかね。宮古の場合は、宮古島に四つの自治体があります。これは長いこと、宮古島トライアスロンという世界的にも有名なイベントのために、全部一緒にやる。こういう国際的なイベントをしながら、一体的な地域性をつくりながら、それでも難しいんですよ。何なのかということですね。一つは党派性です。政党の絡みですよ。「あの首長はどの系統か」ということです。ね。「俺たちは元々こう生きてきたんだ。だからあそこと一緒にしたい」という。そういう党派的なものが絡んでなかなかうまくいかなかったが、「もう見切り発車で行こう」という

ことで、「抜けるやつは抜けていいよ」といつてきた。残ったところは議会同士の、首長同士の話がどうにもならん。そこで、自治労ですね。職員の労働組合が積極的に住民に問題提起し、議員との話し合いをやって、本当に単独でやっていけるのかと。宮古島と一つの島については、足りない部分、住民を動かしたのは職員であり、労働組合だった。

まったく違うケースが出た。八重山郡です。石垣市、竹富町、与那国町。これはすんなり任意の合併協議会をつくった。本当にいいのかなと思うほど順調にいった。ところが一つは、与那国のほうが、「これでいいのかな」と疑問を持つ。中核市より遠いところなんです。距離になると百十七キロ。そうすると、船はもろろ二日に一便出ているが、生活物資を運んでいる。ほとんど人間はそれに乗りません。飛行機です。「一つの自治体で、その中を飛行機で移動する行政がある？」という疑問が出てくるんです。「なぜそこまでして合併しなきゃいかんのか」と、純粋な意味で。それで、「やはりこれは無理だよ。大きいところに巻き込まれて、陸続きだったらいいけれども、島の場合は文字通り切り離されている。無視されるんじゃないか」という危機感を与那国島の住民が抱いたんです。だから議会も、合併協に入っているけれども、「どうも噛み合わない」ということで、結果としては「住民投票」に入った。中学生も投票して、圧倒的に「だめ」ということになった。

連動された形で、今度は竹富町。これは石垣市の本当に目の前の離島ですからね。ここもどちらかというと党派的な、政策的な。首長が自民党系だが、この首長は合併反対だった。むしろ、石垣市にある竹富町役場、行政庁舎を西表に移して、竹富町は独立したいと。元々独立しているけれども、行政庁舎は石垣市の中にある。もう長いことそうなっています。生活圈が一体になっている。町長選挙に入った。その前の住民投票では、わずかな差だけで、合

併賛成が多いのです。ところが町長は、「いやだ」という。それで町長選挙に持ち込まれた。選挙の結果、合併派が当選するんです。圧倒的に。ところが、議会は反対派が多い。島々の特性がありますからね。結果的に、去年十二月の議会で、合併協を「法定協」に切り替えるということに「ノー」という結論を出した。いま任意でまだつないでいます。三月までに臨時議会、おそらく一月、今月に招集すると思いますけれども、そこでだめというならば、これは一度ご破算になると思います。

総括すると、もう生活圏は一つになっています。例えば、百三十万の人口の中で、沖縄本島中南部に百十万あります。それをどう区分したって、あまり変わらんだろうという話です。それよりは、やはり基地の問題を片付けないと生活圏の組み合わせがうまくいかんじやないのかという問題も抱えながら、行政は焦って、「赤字だよ。やれないよ。だから合併だ」という。住民からすれば、見えない。

佐道 そうですね。赤字の話が先にありきという感じですからね。吉元 これが合併問題の最大の……。ついこのあいだ十二月に北中城村長選挙があった。争点は、中城村、北中城村の合併です。でも、だめだったんです。なぜかというところ、「村長が勝手にやっておる」というので、住民自体が、「この村長がやろうとしてるのはおかしい」と。じゃあ、住民投票をやればいいんですよ。そこに持ち込んでいないんです。結果として、その村長は負けて、若い村長になった。さあ、これからどうするか。合併反対という政策はつくってないんです。選挙政策が、住民に検討してもらって、住民と共に考えるという方針なんです。「合併ありき」で進んだ人と、「いやいや、皆で一緒に考えよう」という、この差で変わっちゃったという結果が出た。「この村長は長すぎてだめだ。独善的だ。変えよう」というところが出発なんです。裏を話すとね。ですから市町村合併というのは、僕は全国的に細かい動向は

よくわからないが、沖縄では、党派的なものとか、地域性とか、あるいは生活圏があまり変わらんと。なぜそこまで考えなきやいかんのか。行政の焦りと住民の認識とのずれが相当大きいんです。

佐道 まあ、そうなんでしょうね。

吉元 その上でどうするかという問題が、この四月からまた二カ年、合併特例法の新しい法律に基づいてやられる。今度は有無を言わず、知事が審議会を通してつくって、「答申」を受けて、それを市町村に勧告する。受けた首長が議会に出す。議会がノーといつても、住民投票に付す。その結果で合併に持ち込む、ということでしょう。あと二カ年間で新たに動きが出てくるのか。これが現状です。

少し先を見て、おそらく離島はもう終わりでしょう。もう合併するところとところは出てこない。与那国のケースを見た結果。そうするとあとは、沖縄本島の中でどういった形で組み合わせをしながらまとめていくか。中部圏域で成功した例もあります。石川市、具志川市、与那城町、勝連町との四つがね。こういう形に広がっていくのかどうかです。

佐道 宮古は宮古市になるということでもまったわけですね。

吉元 そうですね。「なぜ宮古市か？」といわれていて、公開質問状を突きつけられているんですね。

佐道 島にはそれぞれの事情もあるでしょうし、やはり地続きでいるところとはちよつと違いますよね。

吉元 与那国がある種、全国的にも注目を浴びたのが、住民が判断したということ。行政・議会がその方向で走ったにもかかわらず、住民投票の結果、しかも次代を担う中学生も参加した上で、圧倒的に決めた。それを踏まえて大胆に役場が、「助役をおきません。収入役を廃止します。町長の賃金カット二〇%にします。職員は一〇%です」という形で一歩踏み出した。議会は議員定数

を八名にします。町議員の報酬も下げます。「さて、それですむのか。それでもすまん」というのが、私が支援し関わっている与那国の「将来ビジョン策定協議会」での議論です。役場で持てない仕事、住民にとって必要だと思っている仕事は公民館でやるということなんです。ですから、自治公民館、条例の準備。仕事をどこまで引き取るか。その執行体制を公民館がどう作っていくのかという議論に。かなり細かい検討に入っています。

佐道 具体的なところに入っていると。

吉元 そうです。いつごろからやるうかと。まあ、先取りをあまりしてもしょうがない。住民投票が十月十六日だったかな。一年後、今年の九月議会では整備して、仕事を移してみようかということまでできている。多分、そうなると思います。

佐道 例えば、与那国は人口千八百人くらいの規模ですよ。それで議員の数を減らしたり、給料を減らしたりと、自らの身を削ってがんばるということだと思えますが、元々その財政の赤字の問題というのは、そもそも全自治体が抱えている問題ですね。与那国とか、ほかのところもそうだと思うのですけれども、面積も小さいようなところで市町村合併とか自治体再編ということになると、国の事務を移管するという話も出てきていて、例えば、新聞にも出ていましたが、与那国でも、公務員を減らそうと努力しているところに国の仕事がまた来て、それをどうまかなうのかということも課題になるといふようなところがあると思います。

■「琉球諸島自治政府」構想

吉元 今度の市町村合併は、私は手順として逆だったと思っています。本来ならば、国家機関をどうするかと、政府のあり方を議論すべきだと思うのです。やっとならというけれども、じゃあ、具体的にどの法律の権限を全部自治体に下ろしますと決めただか。権限は持っていて、省庁の統廃合だけでしょう。定数は、年数を

かけて自然減を狙いながら定員削減をしていこうという方向ですよ。それではだめだと思えます。持っている仕事そのものからチェックして、「この仕事は国が抱える必要がない」というような形で、法律に基づく地方公共団体である県・市町村に渡すと。次に、いきなり市町村でないはずなんです。広域行政を担当している都道府県レベルで、どこまで抱えましょうか。単独でできなければ、効率的に九州、道州制ですね。この絵が描かれる。それを踏まえて、より効率的に、今度は市町村に身近な仕事を全部下ろしていくと。それは、ヒトもカネも権限も下ろす。法律も下ろす。この仕組みがきれいに作られていないから、まったく逆だから、こういう混乱が起きているのです。私は、「それじゃあまずい」と言っているのです。

復帰前に、琉球政府があった。もちろん琉球政府というのはアメリカ大統領行政命令によってつくられたから、その中間に琉球民政府というアメリカの機関があった。その管理下に琉球政府がつくられている。これを日本政府だとするならば、復帰前の琉球政府に該当する仕組みで見てもよいじゃないかと。あのときに、司法・行政・立法府を持つておった。日本は、憲法は一つ、法律もワンセット。立法機関ではないなど。条例制定権、それは法律に準じた自治権の保障だね。どこまで保障できるかという議論が必要。行政府としては、いまの県庁の機能でいいのか。国から多くの権限がおりはずだ。行政権が。それを受けとめるべきじゃないのか。そのときに見えるのは、例えば沖縄にある国家機関の組織、権限、法律、予算、全部引き取る。引き取った上で、復帰前の琉球政府の形の姿に全部あてはめていく。そのときに出来上がってくる一つの姿、これを「特別県制」とかつて命名したけれども、今は「琉球諸島自治政府」といつているんです。それを前提して、ブロックとして、八重山圏はどうするか、宮古圏をどうするか。沖縄本島は一つでいいか、二つにするか。はたまた、奄

美大島はどうするかという議論を組み合わせて、これで作る。国の機関をどうするか、法律をどうするか、住民自治をどうするかという議論を先にしなかったところに、この問題のいびつな状況が出た。市町村は追い込まれて、結果的に住民生活は不安な状況に陥れられています。かなり不安に思っていますからね。これは明らかに誤りだと思います。

そういうことじゃないよということ、私たちは復帰段階から「沖縄のあり方」といいますか、独立論も出たが、連邦政府構想もあった。私たち労働組合が提案したのが、ひとつ違う形で「特別県制」という形だった。憲法の許容する範囲で、沖縄だけの法律を作ってもらおう。それは、住民投票を前提にしようということだった。この枠組みはそのまま生かした形で、さらに今日的に、国際都市形成構想、基地問題、そして一国二制度として、東アジア全体における経済振興策。それをワンセットで担いでいく行政組織はどうあるべきかというのが作られたんです。それで県民全体が、経済界や全市町村が「納得」と、いう方向に進めた。最後に表に出すべきだったのが九八年に、大田県政の最後の年、いわゆる行政組織のあり方でした、これが日の目を見ないで終わって、今日に至った。これを前提にして、実は、橋本行革に対して沖縄県はオーケーのサインを出したのです。沖縄開発庁はなくなり橋本総理は言う。沖縄政策協議会を作った。これは残す。じゃあ、沖縄県を「特別県制」に展開する。移行するまでの間は、内閣府の中で沖縄関係のセクションを置いてください。担当大臣を置いてください。「オーケー」という形で進んでいる。これはまだ生きていますと僕は思う。

佐道 生きていますはずですしね。

吉元 それはモデルになると思うのです。

佐道 まさにいま先生がおっしゃったところでは、結局、国家ビジョンについての問題ということなんです。下からの話になっ

て混乱してしまっているというのは、これからの日本の国家像がきちんとあって、それに基づいて中央の役割、地方の役割とうことをきちんと議論しないで、地方の財源の問題をどうするかという問題から入っていつてしまったがために、無用の混乱といひますか。つまりお金をどうするかという話が先に走ってしまった、こんなことになってしまっていると。国家ビジョンがどうなのかということがまるで議論されていない。安全保障の問題もきょうのこの後の話になりますけれども、まさにそういう絡みになると思うのですが。

吉元 そういう意味で、いま与那国の住民が論議していることがもう一つあるのです。役場と公民館の関係、地域自治、住民自治との関係だけではなく、今度は与那国町役場と県との関係、国との関係で、与那国にかかわる仕事は全部とらうじゃないかという話をしているんです。例えば、与那国に空港がありますね。これは県の管理です。それから港があります。漁港もあります。県道もあります。これ全部、与那国がやりましょう。そのかわり、予算を執行するため、管理運営するための法律を与那国町に渡してください。県議会でのための条例を作ってくださいと。知事の権限をこの部分については与那国町に下ろすという条例を作ればいい。もう一つあります。測候所があります。つまり国絡みの仕事です。例えば、登記所があります。どうするんですかと。案の定、出てきたでしょう。空港測候所の仕事は役場で引き取ってくださいと。そういう形でいきますと、国の行政のあり方をきつと論議していないものだから、国のほうの仕事の権限の論議じやなく、定数が削減される中で、組織を小さくするために切り捨てが始まっているんですよ。これが市町村合併ともろにかぶさってきた。だったら、それ全部、与那国町にください。やります。そのかわり、「ヒト」と「予算」と「法律」をくださいと。例えば、県道を維持管理する。それは与那国町の技術屋には無理だと

するならば、育つまでは職員を派遣する。そういう形でしよう。だから、いまその議論をしているのです。

そうすると何が起こってくるかというところ、役場の機能がなくなるだけではない。その事業を誰がやるのか。つまり、下請け・孫請けをやっていた地元の土建業が自立できるんです。年間を通じて、港湾、空港、県道、農道、その他を含めて、公共的施設を管理運営するための年間事業計画の中に、地元の小企業、土建業が計画的にここへ入っていく。年がら年じゅう持続的な仕事、大きくはないけど、続く。そのことの雇用効果は大きい。もっと重要なのは、その金は島外には吸い上げられない。地域循環です。これをいま検討しているのです。これを要求したときに、県はどうするの？国はどうするの？これは問われますよ。そういう意味で実は、冒頭に戻るけれども、今の市町村合併について、県はその種の議論をしたことがあるのですか。やはりやっておかなきゃいけなかった。

佐道 いまの先生の構想がうまくいけば、地域の企業に多くはないかもしれないけれども安定した収入が来て、それで安定した企業経営ができていくということになっていくと思うし、大変いいことだと思います。いまの議論を、例えば、県という広域自治体の役割は何か、基礎的自治体といわれているところの本当の役割はどうかという、それが地方分権という議論の中で議論されなかった。本当はそれがされて、きちんとその上での市町村合併でなければならなかったという、その議論がすっ飛ばされて、市町村合併先にありきで走ってしまったのでおかしくなってしまう。与那国の、先生の関与されているところ、それを問題提起されるとしたら、では、それぞれの自治体、基礎的自治体、広域自治体の役割は何かということを変更して自分で、多分今度には沖縄県なりが考えなければならぬことになるわけですね。一方で、道州制という話の議論が進んでいるわけで、まさにその

沖縄県というものの、広域自治体としての沖縄県というものはどうあるべきかと。これは九〇年代に先生たちはやっておられたわけですが、どうもそれからあとに議論がなくなってしまうって、印象的にいうと、本土の政府と中間媒体的なものにしかなくなって、ないような感じがするのですね。

吉元 政治的に抑えられたと受け止めたほうがいいんじゃないですか。そこまで自覚して、県や市町村が、地方公共団体といわれるところが、沖縄の二十一世紀、沖縄をどうしたらいいかを自ら考えて、学生を含めて、市民を含めてあれだけ論争して、マスクミを入れて、それでつくりあげてきた沖縄の二十一世紀ビジョン。二〇一五年を目標した。それに向けて、「基地をなくしていこう。行政権を行使しよう」という形で汲み上げてくる。それから、東アジア全体で経済圏、共同体を頭に置きながら、そこに向けて、遅れた分を日本の中で一足先に「一国二制度」という仕組みの中で作ってみよう。そして、日本全体が東アジア経済圏にピシッと入ってくる段階では、沖縄が先行したメリットを受けて、格差をほとんどなくす。そうすると、東京から見たらいけば先端つこだけど、東アジア全体を見たら真ん中ですからね。所得の大きさよりは、本当はどこが得か分からんよというふうなね。自らの自覚です。そういうものと行政のあり方というのは、実は一緒なんです。別ではない。経済の話ばかりして、企業誘致ばかりして、雇用の場を作った、これで自立できるとは考えないです。やはり自立するには、こういうことの大事さもあるけれども、もう一つ大事なのは、そこで生きていくための目標ですよ。そのための手段です。そういう意味では、市町村合併も、その次に来る道州制の問題も、です。合併が目的化しちやっつてね。本来的にはこれは手段であるはずなんです。住民の命と暮らしがどうなっていくかというのが目標だったはずなんです。それが非常に残念です。

佐道 その意味では、先生が復帰前から、あるいは復帰後、自治

労の時代も含めてやっておられた沖縄の自立を求める動きというのは、結局、「自分のことは自分で決めさせてください」と。日本の一部ですから、一〇〇%思い通りとは、もちろんそれはどの地方自治体でもできないのですけれども、しかし、少なくとも自分のやりたいことはやらせてくれと。一〇〇%お世話にならないでも生きていけるような仕組みを作りたいというのがかなり大きな目標だったのではないかと思うのですけれども。

吉元 二十七年間、憲法の適用下になかったんです。日本の法律とは違うところだったのです。日本人でありながら。だから私たちは、日本国憲法に入りたかった。入ったんです。入ったら、それ以前よりは不自由を感じたのですね。何だろうと。金はたくさん来る。好景気が始まる。何か分からないけど、産業基盤、生活基盤が整備されていく。あ、良くなるかなと思ったら、それでもないんですよ。あの格差というのは、三〇%の格差というのは今でも残っているんです。

佐道 そうなんですよ。

吉元 それは何なのかということですよ。つまり、そこに生きている人々が何をしたいかという手段と、「やればできるぞ」という一つの目標をきちっと持ちきれない。「とにかく追いつけ」というところだけに特化されちゃった。これが、「ちよつと違うぞ」ということから、大田県政の九〇年代の八年間でやってきた。そこに求心力を集めて、思考を持ってきた。国も、地方分権の話と、さらに行革の話、省庁再編の話、こういう流れの中で沖縄に絡むやつが出てきて、それを前提にしていこうというところまでは政治的には合意した。国は意識した。県民も意識した。それじゃあ、なぜ知事が変わってパーツとなくなるの？ 結局は「そんなことを考えるな」と言われたかもしれないね。やはりそれよりは、国の言いなり。国の言いなりというよりは、東京の政治の言いなりといったほうがいいかもしれない。官僚の言いなりといっ

たほうがいいかもしれない。そういうものに容易に組み込まれていく。ふつふつと湧き上がって、やりたいと思ったことがつぶれていくことに慣れていく県民性ですよ。この二つがあると思う。抑えられて黙っちゃったという県民性もあると思う。ですから、そこで自治が根付いていったかというところ、抑さえられてなくなっていくような、物を言わんようなものは自治ではなかったはずなんだ。そういう意味では自己反省。でも、運動としては継続しておるし、これが現に、琉球大学の中でそれがさらに広がりつつあるし、そこから発信されて、新しい若い連中が集まって動きをつくっているし、引いていかないと思います。あとはどういう形で県民的な理解をもう一度していくのか。どういう仕組みをつくっていくのか。どの時期なのか、ということかもしれませんね。今からあと二年間、合併特例法の中で、「ちよつと待て。このことも検討せんといかんぞ」という形で、沖縄県のあり方を思い切っ前に出すことによつて、市町村合併というのはこんなやり方ではないのかと、もうちよつと明確にしよう。県の仕事をどこまで下ろすか。合併できない離島については、どういう形で県が広域自治体としての役割を果たすか。ここまで具体的に出した上で、この二年間、過去のものは失敗だったことを総括した上で、二度と失敗しない形で、あるべき県の姿を連動させるべきだと思います。

佐道 元々沖縄らしい自治のあり方は何かということでも、例えば、んやつてこられたと思うのですが、一つ気がかりなのは、例えば、いま先生が「突出した」という言い方をされていましたけれども、確かにそういう部分があったとは言えなかったこともあると思うのです。現に、先生を含めて、そういうことをやろうとおっしゃっていた方が県政の中心からいなくなった途端に、日本との一体化のほうが、まったく同じ制度の中でどう生きるのかという流れのほうが強くなってきたってしまっているという現状があるわけですね。一方で、混乱に混乱を重ねている市町村合併という問題が

ある。与那国なんかで、あるべき自治体の役割とか仕組みとかという問い直しをされながら、そのなかで与那国のやるべき仕事とすることを模索しようとされているわけですから、べき論でやると、「沖縄県の仕事はこうあるべきだ。こうあるべきだから、それにしたがって与那国の将来ビジョンはこう」という話でやっていくと、逆に今度は、沖縄県と与那国の温度にギャップが出てしまうという問題もあると思うのですが。

吉元 もっとも大事な部分ですね。特別県制というのは、確かにこれ考えたのは沖縄であるし、作り上げたのも我々だけれども、まったく日本の地方自治の仕組みと、国の機関とを無視して議論したわけじゃない。いつも前提になるのは、許容の範囲ということです。そして、その手段は九十五条ですよ。住民投票です。許容の範囲は何かといたら、憲法ですよ。作られている地方自治法でしょう、それに基づく各種行政関係の法律でしょう。僕らは特別なものを求めてはいないんです。「やるはずだ」じゃなくて、「否定できないぞ。だけど、沖縄だけというのを認めるか認めないか」ということ。そこは、例えば自治省あたりから見ると、なぜ沖縄だけを先にやるのかという話になる。ここは、「沖縄だから」という、だから先行するということを突き合せなきゃいかんでしょう。そこが難しかったというところは一つあります。しかしそれが、九〇年代に入って、橋本行革の中で、しかも一方で進んでいる細川政権の時代に出来上がった分権関係の法律、委員会などを通じて、「あ、これは俺たちの考えと同じだ。許容の範囲だ。むしろこっちのほうが先取りしておつた」ということ。そういう意味でいうならば、あとは先行するかしないかです。

小泉さんは、北海道を自治特区モデルとして、ゴーサインを出した。北海道は一つの単位だからと。沖縄もそうですよね。そこにある国の行政機関は全部北海道庁と合併させると言っている。

僕たちの考えとまったく同じ。なぜ北海道庁に対してゴーサインが出て、沖縄に対して出ないか。これは沖縄県が、いまの県庁がそれを要求しないから。そこに一つある。もう一つは、やはり軍事基地です。いわゆる日米安保との関係です。東アジア情勢、とりわけ台湾問題ですよ。というふうに見ざるをえない。沖縄だけを先行させるということに対していつも抑えてくる問題は、安保の問題、中国との関係、台湾との問題というところに収斂されていくのです。だから、過去にやってきたことについては、行政の理屈じゃない、自治・分権の理屈じゃない、別の理屈が働いている。これをどう突破するかというときに、私はかつて八〇年前後にやった「特別県制」を、九〇年代にした二十一世紀のグラランドデザイン、より具体的なビジョンをつくって、その手段として考えた琉球諸島自治政府構想。今度は、東アジア全体の中でどういう方向が日本を含めて作られつつあるのかというね。ASEANプラス3（スリー）ですよ。「東アジア経済圏」ですよ。そして、将来の「共同体」ですよ。それに対してアメリカがどう言うかとしているのか。これを、従来とは違う形でね。今は行政の場にはないから、そこをものすごく大きく意識しています。

そうなつてくると、もう一回議論できるのは、そうは言ってもあのと私たちは、基地返還アクションプログラムは二十年の計画を作った。二〇一五年という将来の目標が、延ばすのか延ばさぬのかという議論はあったとしても、いまアメリカ自体が在日米軍の再配置の大胆な議論を日本政府としている。ここまできていますからね。全体的な流れからすると、べつに沖縄が特別じゃない。先に走っている。別な問題があるから抑えようというという話にはならんだろうと思う。でも、米軍が引いた場合、あとを今度は安全保障上埋めるという形で、自衛隊の新たな配備を沖縄全体がどう受けとめて、どう理解していくかというのは新たに出てくる。だから、米軍のために、アメリカの戦略のために物を言え

なかった日本政府が、今度は自衛隊の配備のために具体的に物を言ってくる。これと市町村合併の苦しい自治体に対する物の言い方と県のあり方を議論するときに、どこまで沖繩とのかかわりで議論するかというのは、むしろ沖繩側が新しく受けとめるべき課題が出てきたと思うのです。

佐道 米軍再編の問題に入ってお話をされましたが、それはまた改めて詳しくお話を聞きたいと思います。先生が進めておられるような作業がある一方で、やはり大変懸念されるといいますか、私のようないわゆる沖繩部外者から見ると、これは前々から申し上げているところですけども、先生がおやりになっていたところには、例えば特区の話にしても、沖繩が先頭を切って走っていたものが、今は結局どの程度の案を出せばいいのだろうかという周囲を見回しながらやって、先頭ランナーがいつのまにか最後尾についているというのが今の沖繩の状況じゃないかと思うのです。議論されている道州制にしても、これは推進委員会のほうでも盛んに議論されていて、もう具体的などころというか、それにもかなり乗ってくる段階になってくるにもかかわらず、県としての道州制の問題、つまり、まず自らの役割をどうするかについての県のまとまった活動が何もできない。それで、業を煮やした若い人間たちが別個にパーソナルなもので立ち上げるということになってしまっている。そういう状況がいま生じてきてしまって、かなりギャップが出てきているわけです。これは結局、沖繩の将来像というか、沖繩の行き方を自分たちで決めさせてくれというものが、この二十数年、三十年間の先生たちの歩みだったと思うのですけれども、それとはかなりずれてしまっている沖繩の現在があるわけです。確かに、さっきの沖繩県と与那国とずれが出てきませんかというときに、県自体が動かないということもある。基地の問題も、その通りだと思わなければならない。県が要請しないというのは、つまり考えていないというか、考えきれない。沖繩県

政に責任を持っている人が、どうもそこにイニシアチブをとろうとしないというのは、私なんかからするとすごく奇異に見えてしまふのですけれども、そこらへんをどう思っておられますか。

吉元 「歴史の歯車を逆回転している」と僕はいつも言うのです。そういう言葉ですめばいいけど、県民全体の二十一世紀をどうするか、二十一世紀に向けた県民の生き様、生き方、そこに問題を提起していかない。示していない。これは行政のトップ、つまり県民のリーダーとしては許せないですね。そこが実は私が知事選に出ざるを得ないというのにつながった。その考え方はあと二年後にもつながっていく。おそらくそれが争点になるでしょうね。問題は、二年待つわけに行かない。今の状況を変えなきゃいけない。おそらく変えないでしょう。「やったらどうか」と言われても、やらんでしよう。その気がないからですよ。そういう問題意識というよりは、いかにすれば一銭でも沖繩に対する国の財政支援を削られないですむかというところにしか目を向けていないから。その次元でとどまっている。県議会で議論がないわけじゃないんですよ。県議会のたびにこの問題は毎回やられている。とうとう去年の段階で、二月議会ですかね。土壇場まで追及されて、担当部長が、「庁内組織をつくりまします」という発言をして、去年の四月から作ったが、資料集め、整理という形でつないでいるということです。その中で、待っておれないということ県庁の若い連中が立ち上がったのです。

私はいま、『竜馬がゆく』という本を読んでいるんです。二回目ですけど。ずっと昔に読んだのですが、県庁のその動きを見て、ふっと思つたんです。まさに高知、土佐が、あの中で何が起ったのかということですよ。坂本竜馬は武士階級の中で上級の部分ではなかった。まさに城主に会えない下級の武士といえは武士かもしれないけれども。あのエネルギーというのはどこから来たか。県庁の中で若手が立ち上がったというのは、沖繩では過去

に一回しかない。私の記憶では、琉球政府を含めて一回しかない。

一九七〇年から七一年にかけて、つまり復帰を前にして、日本政府と琉球政府が共同作業で復帰のための特別措置を作り上げるのです。一つは、沖縄振興開発特別措置法というやつと、もう一つは沖縄振興開発金融公庫法というやつと、もう一つは沖縄復帰措置法で権利義務を継承した部分なんです。あ、開発庁設置法もありました。この権利義務を継承した部分に私たちは疑問を感じたし、とりわけこの沖縄開発庁設置法にもすごく疑問を感じて、復帰大綱はちよつとおかしいんじゃないのかと。琉球政府の職員、係長クラスを中心にして、私も労働組合の役員でしたけれども、一年間家庭の事情で職場復帰しておいた時代がありましたから、仲間を集めて議論するんですよ。県民の目に見えない形でどんどん進んでいる。「これはいつたい何だ。一回見てみよう」ということで、行政の仲間がおりますから、手に入るやつを全部見てみたら、「どうもおかしい。こんなことをしていたら、何のために復帰運動をしたかわからん」ということになった。これは、実は少しマスコミに感知されて、そのことを今度は復帰運動を進めている復帰協（沖縄県祖国復帰協議会）という組織が知って、そこが呼びかけて、当時の琉球大学、沖縄大学などを含めて、学者、弁護士、研究者、さらには行政職員を集めて、本格的に「復帰のあり方」について沖縄県民の要求書をつくる。これは結果的には、「屋良建議書」という形で出された。それが一回あるんです。これに匹敵するようなものだと僕は言っているんです。その中心メンバー、代表の名前を見てびっくりした。そういうエネルギーが若手に残っている。九〇年代どころでなくなってくると思います。

佐道 確かにそうですね。

吉元 県政のあり方からすると、今いびられているかもしれないけれど、中間報告書ももらいました。私はむしろ、県庁の職員の中で自主的な研究グループが出来上がったというところに、健全

さを感じます。

佐道 県庁組織だけではなくて、いろいろな人を巻き込んでいますから、運動といえますか、動き自体は大変意味があるというか、広がりのあるものに。

吉元 次のステップをどう作り上げるかということも模索しているようですから、おもしろい。

佐道 その意味では、逆にいうと、県庁の中級以上の幹部は若干停滞さみで。

吉元 逆じゃないですかね。やりたくてうずうずしていると見たほうがいいですよ。でも、行政組織として、県庁の流れ、課長クラスを中心にした検討会が発出したので、それがありますと、管理職、課長以上の動きはそのためにとまりますね。管理職である以上、別なものを作るといえるのはありえないですね。だけど、主査クラス、係長クラスの彼らの領域はフリーです。今の県政の特徴の一つに、いろいろな自主研究をやれというのがある。それを逆手にとったんでしょう。

佐道 確かに自主研究の予算を作るという話が出ていましたね。

吉元 県庁のあり方論ではなくて、例えば道州制の、九州から離れますよという程度の話ではなくて、もちろん単独を前提として、市町村との関係、やっている仕事の本身、つまり国との関係ですね。国の出先機関があるわけですから。あれをどうするかという話でしょう。県の持っている仕事、国の機関が持っている仕事、これを含めて市町村との関係でどこまで分権に値する整理の仕方と分権の渡し方をするのか。ほかの県では少ない視点だけれども、離島についてどうするかと。島一つ一つを大事にする。そのためには県がどうかかわるかというところに、今までにない新しい視点を持つべき。

佐道 先生はそう思っておられるし、現実にもそういうことだろうと思うのですが、一方で、与那国なり地域の自治体に沖縄

県の側がいろいろ言わないというのと同時に、今度は政府に向かつてきちんと沖縄のポジションを言わないと。沖縄県の単独での道州というのは、沖縄県の中ではあたりまえに思われていても、よそから見ると、「なんで沖縄だけが」と。島を入れた領域の面積からすると大変広大なものになりますけれども、島々自体の面積とか人口規模からすると、「なぜ九州と一緒にやないのか」という話というのは、普通にすつと出てくる議論だと思っております。ですから、沖縄の中で議論して、それをどうアピールするのかということですが、方法として明確にそれをきちんとしておかないと。

吉元 まったくその通りですね。そこで県庁の若い皆さんも、あるいは、琉球大学の中で自治学会があるようですからそこで検討しているようですが、そこも含めて、少し県の首脳に対する不満が鬱積しているようだ。それに応えようとしないうちに、マスコミもいろいろ言っているし、政党は政党で、そういうことに目を向けていない。県議会も、まあ、関心のある議員がそこを追求するという程度で、そこまですべてではない。市町村議会は、日常的にいうと市町村合併問題ばかりで、この間、迷走して、全体をどうするかということを見ていないようだ。経済界は経済界で、今のほうが安定的に面倒をみてもらえるという安心感を、今の県知事に対して見ているようだ。これが全体の構図でしょう。この流れから見ると、その中でどこまで中身が熟していくか、そういうのが芽生えている。かつてなかったことです。

佐道 例えば、きのうお話しになった吉元塾に来られているような、政治を志しているような若い人たちは。

吉元 それを意識しています。そこに焦点をあてています。だから、その部分の回数が多いですね。

佐道 そこは、これから沖縄の中の自治のあり方を模索する受け皿として機能していく可能性が出てきているということですね。

吉元 どここの市町村におつても、ほかの県におつても勉強できる

ようなことを課題にしていませし、皆さんもここに期待している。県庁の職員もメンバーがおります。市町村議員、県会議員がおりますので、動向はつかめます。自治体の首長の意向をプロックごとに把握できますから、かなり全体を見るという意味ではいい勉強になります。

■与那国「島ごと特区」構想

佐道 もう一つお聞きしたいのは、先生が深く関与している与那国の今後の状況にも関係することです。先生が国際都市形成構想をまとめあげられていくときに非常に大きな問題だったのは、先ほどもちよつとお話しされたのですけれども、日本本土とアジアとの結節点というのが沖縄であると。特に重視されたのが、中国の福建、それから台湾との交流という話で。沖縄で出ている雑誌をパラパラと見ていると、八年、九年くらい前に台湾の投資をたくさん呼び込んで、実務者レベルの協議までいろいろやって、それがいろいろな事情で頓挫してしまつた。またそれをきちんとならなさいいけないんじゃないかというようなことが書かれているものもあつたのです。そういう台湾との関係、中国との関係が沖縄の場合には特に重要になってくると思うのですけれども、その動きですね。与那国の将来ビジョンを含めても大きいものだと思うのですけれども。

吉元 歴史的な総括を棚上げして言うならば、台湾と沖縄との関係、とりわけ台湾と八重山郡、石垣、与那国、竹富との関係というのは、沖縄の中でも突出して関係が深い。その中でも与那国はいちばんつながりも強いわけです。石垣より近いところですから、生まれたらすぐ意識するし、働く場がなければ台湾に行つて働いていた。それは、老いも若きもです。台湾は、自分たちの本当の生活圏だったので。これがいわゆる戦前の与那国との関係、八重山との関係、沖縄との関係です。加えて、戦後しばらくは、二

十七年間はアメリカの支配の中で、国交的な意味で、交流的な意味では自由に往来できるような仕組みが沖縄になかった。それでも、琉球政府の職員は台湾との関係というのをかなり作ってきているんです。農業技術の交流という意味で、研究機関同士の交流というの、私たちが思っている以上に、研究成果が行き来するくらいの状況にあった。復帰後も、沖縄県と台湾との関係ですつとつないでおった。これは私たちの大きな財産ですね。沖縄から台湾を意識する若者というのが多かった。だから、台湾で大学を出る、医学の試験を受け、出てきた、という者もわりといた。戦後の一時期には、沖縄では離島には医者がほとんどいませんでしたから。医介輔制度があっただけで。そのときに台湾から医者を、年配の医師に入ってもらった、という経緯もあるんです。ですから、かなり強い結び方が復帰前・復帰後と持続していたと言っている。

大田県政ができた当時の特徴は、「冷戦の終焉」ですよ。東京サイドで見ると、ソ連との関係です。だけど僕たちから見れば、ソ連との関係もさることながら、次はどうなるのか、という事です。身近な問題として、これだけの米軍基地を抱えて、しかも経済的にはほとんど成長し、つまり年数%の経済成長を続ける、鹿児島と同じ距離にある中国です。十三億人の国がどういう発展をするか。あの国と沖縄との関係というのは、五百年の交流の歴史があり、明治からずっと中断しておった。大田県政になって、この交流を再開しようと提案した。これは、「唐突だ」と皆に言われた。

言われたけれども、経済交流、文化の交流というようなり方をとらなかつた。かつて琉球王国時代に首里から派遣された若者が、北京までどのように行ったのか。那覇港から出て、久米島を経由して、それから北京まで、そのコースがあるはずだ。調べてみよう。そこを歩いてみようから始めた。それを議題にして、

福建省との窓口を作ったのです。福建省の外事弁公室、というところで外務省ですね。歴史書を調べ、現地調査を重ね、コースを確認してもらった。そして、沖縄の若者を派遣し、北京まで歩かせたんです。沖縄県民に今日的に中国福建省をもう一度意識させる。沖縄と中国との関係を、これが二十一世紀に確実に、沖縄にとって身近な、東京より近い存在になる。復帰後、戦後ずっと続いている台湾との関係を前提にした上で、これをやってみて初めて僕たちも分かった。意外と向こうは沖縄を知らないんです。福建省は長崎との姉妹県です。長崎に比べ、「どうなっているんですか」という質問が出るくらいです。僕は、なんで長崎と比較するのかと多少不満。沖縄に来てもらう。沖縄から行こう。その上で、経済交流から始めようと、彼らが言う。だから「経済サミット」を始めた。これが出発です。

台湾との関係というと、中国はものすごく神経質になってくるんです。向こうから言われたのは、沖縄に台湾の旗を立てないようにと。つまり「台湾という国」という捉え方をするなどということですよ。したがって、肩書きのある沖縄県知事が公的に入る。向こうから呼ぶ。これはまずい、ということでしょう。これは阿吽の呼吸です。当然のこととして踏まえた上で、台湾との関係はずつと作っていく。その後も作っています。だから、福建、台湾、沖縄で蓬莱経済圏の構築を前提に経済交流をやっていますからね。それを台湾にも私たちは当然知らせてありますし、私自身も行ったわけですから。そういう意味で、沖縄の一国二制度という仕組みの中で、いちばん早いのは台湾の資本を沖縄に入れる。つまり全県フリーゾーンの場合にね。それは台湾にとつてもかなり大きなメリットがあるということを私たちが調べ直してあります。そういうことで、台湾が中国との関係で沖縄をどういう場として彼らが位置づけるか。私たちは逆に、台湾をかなり近い関係に位置づけることによって、沖縄が福建省とどういう密な関係を

作るか。これは、台湾や中国の、双方にとってもプラスだろうと思つた。そのことがうまくいくならば、沖縄にとつて、東アジア全体の中で、やはり沖縄なくして、台湾・中国の問題を語れんなどというところまでいけるということです。あの構想は間違つていなかったし、今でもそれをやるべきだ。しかし、今の県政は私たちが作つた構想を進めていない。そうになると、どこで？となる。まあ、与那国から求められて……。

去年の六月三日です。町長と議会議長の連名で私に講演依頼が来たのです。とにかくしゃべってくれと。俺たちがどうなるか、ということ。与那国を取り巻く状況について。もちろんこれは沖縄のことがあり、日本のことがあり、隣の台湾のことがあり、中国のことがあり、東アジア全体があるのですね。それで私は、東アジアにおける沖縄・与那国のかかわりという形で二時間近く講演した。その中で共通な認識が出来た。一方で市町村合併は目的ではなくて手段だ、とかねがね私が言っていますから、じゃあ、目的であるべき与那国の将来ビジョンを作ろうと、原点に戻つた。だから、与那国の「将来ビジョン策定協議会」を発足させて、住民参加で始まつた。一方で、町の行政と議会は合併のための協議会に継続して参加した。だから当初は、「なんか町村合併をつぶすためにやっているんじゃないか」と合併協では言われるくらい、冷ややかに見るところもあった。「合併問題は自らが決めてください。私たちは、それは持ち込みません」と。そこから始まるんです。与那国町と台湾の東海岸の花蓮市が姉妹都市です。かつては年一回行き来しておつた。今でもそういう呼びかけをしている。与那国の「世界カジキ釣り大会」というのがあるんです。そこに船を出して来るんですよ。

佐道 それはいつごろやっているのですか。

吉元 九月ですかね。九月か十月でしたか、本土からも参加者がたくさん来ます。大きいのを釣り上げた人もいます。与那国が生

きていくとすれば、隣は国境だと言わずに、隣の地域とは当然、石垣に行くような形で付き合う。二千メートルの滑走路があつたら二年後にできます。花蓮市は国際空港と国際港湾を持っています。そうすると、与那国が特区になれば、空と海のね、生活を含めた「島」と特区」になれば、花蓮とはそっくりそのまま、片道三時間で行つて、六時間あれば帰ってきます。そこまで考えますと、生活の仕組みを、もう目の向け方を変えようと私は言っているのです。それに対してはお年寄りの皆さんはものすごく、若かりしころのことを思い出しながら、「やれるよ」という。

佐道 「昔はやってたよ」と。

吉元 そういうことです。

佐道 国として……、台湾は国じゃないんだといっているのですから、国境でもないはずなので。

吉元 そこまでできますと大事なのは、日本という国の端っこでしょう。国境の島。そこに住んでいる日本の住民に、いちばん近い隣の島。しかも、東アジアの中でもかなりのレベルアップしてきた経済の水準。かつては、台湾にも植民地であった時代から、日本のシステムが根付いている。教育の中でも。だから、留学も頭におきながら。そういう場を与那国に作るならば、それは今でいう小泉特区に該当するだろうと。それを教育特区だけに限定せずに、貿易、ノービザ、そういうテーブルの特区に限定せずに、「島」と特区」にしてみたらどうだろうか、というのが与那国の人々が考えているやり方なのです。「島」と特区」になると、島で生活するすべてにかかわってきます。これはある意味では、私が県庁におつたころのまさに「一国二制度」、全県フリーゾーンと一緒にしよう。だから、島ごとそれを目指してみたらどうかと、逆に地元から突き上げるのです。なぜ全島フリーゾーンと言わんかと。その論議もいかもしれないけれども、私はそれよりは、まずはビジョンを作り、自立するかどうかという自治体の合

併のあり方を決め、決まれば、あとは島が自立するためにどうするかということを組み立てていく。そのときに初めて、今ある日本のいろいろな制度・仕組みを頭において、やれるやつをどんどん取り入れていく。並べていく。それで不十分だったら、ワンセットにして島ごとというような形に持つていこうじゃないか、という言い方をしています。

佐道 先ほどの、「島全体を特区にして、教育だけではなくてもっと幅広い」というのは、その島民の方からの発議ということなのですか。

吉元 そうなんです。石垣島よりも近いのだから。それで、かつては生活圏が一緒だったのだから。向こうで働いていたのだから。

佐道 台湾との具体的な交流といいますが、交渉といいますが、それはもう視野においてやろうとされているのですか。

吉元 もう役場は意識して、町長もそれを意識している。いつその話を向こうに持ち込むかという段階までできています。私は、極端な意見まで出していますよ。那覇から生活物資を入れる。石垣島から生活のための野菜などの生鮮食品を入れている。これを全部やめて、花蓮市から入れてみたらどうか。台湾の農業技術というのはすごい、台湾の人々の生活の水準を含めて、決して沖縄と比べてどうのじゃないですよ。

佐道 そうすると、沖縄の中の島だったのが、台湾の一部になるような感じ。

吉元 逆で、与那国が中心ですよ。与那国が中心で石垣があり、那覇があり、東京があり、与那国が中心で台湾があり、福建省がありということですよ。

佐道 日本列島があつて、アジアがあつて、沖縄が双方を中心でつないでいるというのを、今度は与那国と台湾、沖縄をあわせたという。

吉元 いちばん大事なものは、これはいろいろなところへ行つてみれば分かることですが、例えば、沖縄本島のいちばん南の喜屋武というところへ行つてみると、彼らは自分たちが中心だと思つていますよ。いちばん北の辺戸岬というのがある。そこに奥という小さな港があるんです。その奥の皆さんと話すとき、自分たちが中心だと思つている。与那国はいちばん外国に近いんですよ。

だから港を整備し、ここに入れた物を那覇まで行かせますよという。そういう意味で、それぞれが自分たちを中心軸に、何ができるかを考えているのです。同じことを与論に行つたときにも言われた。与論の皆さんは、「自分たちが沖縄と奄美の接点なんです」と。確かにそうなんです。ですから国境ということ抜きにして考えると、与那国がまさに中心ですよ。那覇は那覇で中心ですよ。同じように石垣市は、市長をあげて、与那国とつながっている花蓮市との間でチャーター便を飛ばす準備に入っています。そこまで来ているんです。だけど（石垣空港の滑走路は）千五百メートルなんです。与那国は二千メートルになるんですよ。与那国に言わせれば、花蓮へ行つたらここへ下ろして、与那国にいさせて、与那国から石垣に渡らすというのです。それはおもしろい。これは沖縄の特殊性かしらん。沖縄は元々そういうふうな、島（シマ）ごとに言葉が違うからね。やはりそういう発想があるかもしれない。

佐道 それは本当におもしろいですね。

吉元 だから、「市町村合併しなくても、自立したほうがいいよ」という発想がポーンと出てくるのは、かつての経験と、つながりと、やれるという可能性と、「合併して何が起ころのか」ということよりは、自分で町長を選べる、議員も作れる、俺たちで意思決定できるというのを選ぶというのは、これは陸続きの沖縄本島とは違う発想でしょう。これは島の発想ですよ。元々日本がそうだったんじゃない？

佐道 確かにそうですね。人口が多いところに飲み込まれて、思ったようなことを決められないということになるよりは、とにかくここでまとまっているのだからいいじゃないかと。それで先生は、与那国にはだいたい月に一度。

吉元 はい。六月に話があり、そこで条件をつけました。この議論は、私が関われるとするならば、あくまでも与那国の、そこに住んでいる千八百名が主体的に自ら考える。これに徹してくれ。「いまの町長が自民党だからいや」と言うのはいい、しかし、これは町長の仕事だから、間違ったことを言えば批判していい。みんなと一緒に歩くならば、今の町長を行政の長として、それを否定しないでいこう。そういうことを約束できますか。同時に、保守・革新、白黒を持ち込まない。これを約束できますか。議会議長も町長も、前町長、前議会議長、島の有力者も全部集めていたところで講演して、交流の場でそう発言した。そのうえで、保革のリーダーに残ってもらい、すぐ隣が町長の家だったから連れて行った。仏壇の前に座って、ここで一杯飲もうと。「それを約束できますか」「約束しよう」と。これで始まるのです。裏はそういう話ですね。それが翌日パワーツと広まった。吉元が来て、そう言っている、何か始まるみたいよ。役場の職員は不安だね。それから、八月にその協議会を立ち上げて、あれから月一回、長いときは一週間、短いときは三日間くらい、産業とか、自治とか、命とか、安全とか、五つのグループをつくって議論に入って、それをまとめて。さらに今度は公民館単位で話し合って。繰り返し、繰り返す。それで、節々で議員全員と話し合いに入ったり、役場の管理者の皆さんと話しに入ったり。先月は、ある意味で最後の仕事として、五人の校長に集まってもらい、三時間くらい徹底的に議論した。学校単位で考えるな。小学校だ、中学だと区別するのでなく。保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、ワンセットで与那国のあり方、教育のシステムを作ろう。その上に、そ

の横に点線で社会教育、生涯学習の場を作ろう。これをワンセットにしよう。この全体をコーディネートするところはどこなんですか。それに対して校長先生、あなたたちはどういう役割を果たすのか。今はないが、高等学校という部門を入れた場合、どういう学科がつくれますか。農業ですか、水産業ですか。私の結論としては、国際学科を作ろうと。台湾との関係。そこを出たら台湾の大学に行かそう。希望すればね。もちろん、与那国の高等学校に進まないで、石垣に行ったり、那覇に行ったり、これはもう自由ですから。その分、留学生を呼ぼうという提案をしました。

佐道 そういふところから生徒を呼ぶという。
吉元 それをちゃんと卒業するまでホームステイさせる。これは台湾の花蓮からも呼ぼうと。

佐道 そうすると、そういう地域との協力体制をいろいろ作ったりということも含めて。

吉元 寮は家庭にしよう、あるものを使おうということですね。

佐道 国際学科のようなものを作るといふと、先生のリクルートというのが必要になりますね。

吉元 そこで、まだ正式には話し合っていない。内々には、琉球大学の教育学部の全面協力をもらって、おそらくこういう仕組みはほとんどないから、それを考えてもらう。与那国の校長と、教育委員会と、有識者と。校長のOBがおりますからね。幸いに中学の免許を持っているOBは高等学校もできます。教員の数が多いいんですよ。与那国に住んでいないというだけですね。だから、呼ばばいいんですよ。高校、中学校の校長をやった連中もたくさんおられます。「枠組み」ができれば、花蓮から教育関係者を呼んで組み合わせてみる。与那国に行けば、その高等学校を終われば台湾に優先的に留学できるという仕組みがある、それは一つの魅力じゃないかということ。その出発は、それぞれの地域、国家というふうな言い方をしますけれど——台湾について国家という問題

問題になるけれども、分かりやすく言えば——「国家、試験、資格は近い将来には共通になりますよ。医療水準についていうならば、与那国の診療所の所長はもちろん日本の国家資格を持つ医者ですけれども、台湾の医師の資格も持っている。ですから、いろいろ考えられるのですね。医療についてはワンセットにできるのではということもある。いま、フィリピンと日本では、介護についてはもうそこまで来ましたよね。ですから、国が与那国をそういう特区に考える場合に、決して無理ではない。

佐道 また、与那国がパイロットケースになっていろいろやれると、おもしろいことができるかもしれない。

吉元 そう思いますね。私は、東京で議論する発想とは違って、島、端っこ、隣は隣の国だというような近さ。そこどう共生していくかという、モデルとしていい。国土保全・国境の管理という視点からいうならば、与那国つまり国境の島、そこに住んでいる人々の新しい捉え方というのですかね、位置づけの一つのモデルとして、むしろ目を向けて欲しい。

■基地問題で問われた市町村長のあり方

佐道 与那国を中心に今後の与那国の将来構想にかかわっておられるという仕事をされている一方で、若干話が出ましたけれども、例えば、その前にやった宜野湾の市長選挙とか、自治体の首長の選挙ですとか、いろいろなことについてもまだかなりご関係されていると。これは基地の問題等とも関係していると思いますけれども。これはやはり、沖縄の自治のあり方ということを含めて、今後の沖縄政治の動向ということを見据えた上で、そういう選挙に係わっておられる、与那国でも係わっておられると。

吉元 まったくそうですね。欲をいえば、二〇一〇年の上海万博が終わるまでは現役に係わっていきたい。もう少し欲を言えば、二〇一五年あたりまでは相談相手になってみたいです。

佐道 先生がアクションプログラムで書かれた、まさにその年限ですから。

吉元 そうですね。欲を言えばきりがありませんけれども、そういう意味では僕には目標がある。そういう構想を作ったというだけではなくて、運動に関わってきたということと、それが二十一世紀ビジョン、与那国につながったということ。それはいま中断しているけれども、それが動き出す段階にきたから。県が黙っておつても、基地を認めるといつても、アメリカのほうで、「いや、動かすよ」と言っている。そういう中で、県政、知事に不満をぶつけるだけじゃなくて、内部でも動きが変わつてきている。県庁の中でも。地域社会も変わつてきているし、公然と何年後を目標に基地を失くさせるという首長まで選挙で出てきた。市民がそれを自覚したということですよ。だからこれは従来の、「大田知事が提案しているからやろう」という意味じゃない。自分たちの生活、そして海兵隊ヘリコプターの事故があり、命がかかっているでしょう。これは加速しますよ。そのときに何を考えているかわからない沖縄県のあり方とか、市町村首長のあり方が問われ始めている。

佐道 まさにその問題なのですけれども、沖縄も、本島の中部と北部のほうでも、かなり色合いが違っていると思うのです。特に北部なんかは、基地の問題もあつて、振興策で県の頭越しにお金を入れられたりということもあつて、私が話を伺った方なんかでも、「いやもう、県庁はいいですよ」みたいなお話をされる首長さんもいらつしやるほどですね。そうすると、独自に自分たちのことを考えようということについてはいいのかもしれないけれども、逆にいうと、沖縄全体ということから考えるとまとまりが弱くなつてくるということもあるんじゃないかと。

吉元 共通の認識をすべきなのは、米軍基地はなくなる、という前提です。彼らはさよならも言わず出て行きますよと、私は言っ

ているのです。だから準備しよう。だから、こちらの準備が整ったところから先に動いてもらう、出て行ってもらう。もうそういうところに来ています。これを言うか言わんかというのが自治体の首長、県の知事であるし、地域政治を担当している議会なんです。その認識をまず基本に、立つべきだ。いまの生活や生産の基盤が弱い、これをどうするか。基地のある間については当然、国に要求しよう。しかし、これはいつまでも続くと思わない。あなただけがずっと首長と思わない、と口酸っぱく言ってきた。この知事がおる間、この知事の継承者がまた同じ系統で出てきたら、おそらく普天間の移設、あれは変わらなくて続くだろうと思ってるのです。その間は、国から頭越しに十年間で一千億の金が支払われているわけですから、まだ続くだろうと思ってる。自治体の職員の中から出ている、議会議員からも出ているんです。なんかあぶく銭をもらって「箱物」を作っている。この維持管理はだれがやるのか。それを首長は選挙で言わない。まあ、それが一般的な首長のあり方ですよ。いま問われているのはそこなんです。ですから、自分たちの任期のうちは何でもとれという、そういう首長と議会の関係ではなくて、市民の中で、県民の中で、本当に米軍基地はどうなっていくのか。どうなるのかと、それが問われてきた。これはこの二年間、三年間でもずっと出ています。普天間基地移設問題については、もう圧倒的に「ノー」と。でも、知事は「いやいや、ベターだ」と。あんな事故が起こってもなぜ「ノー」と言わないのか、ということ。危険を除去する」と言うようになった。分かっていながら、「ノー」と言えないのは何か。北部振興費の一千億円ですよ。なくなるぞという脅しでしょう。

佐道 いちばん大きい問題ですね。

吉元 それは、北部市町村が全部「ノー」と言わんと、知事も言わんでしょ。そういう意味でやはり抑えられているのですよ。

ね。このことを県民は全部見抜いていると思う。見抜いているけれども、選挙の節目節目でどういう反応をしていくかということでしょう。ですから、身近な例からいうならば、二年後の知事選挙。もう一つは、二年後の四月の沖縄市長選挙、あのあたりが宜野湾がそうだったわけですね。沖縄市はどうするかという話でしょう。やはり変わってきたと思います。

佐道 そろそろ基地と米軍再編の問題に入って行きたいのですけれども、まさに普天間で事件が起きた。事件というか、事故というか。本当に人身事故にならなかったのが奇跡としかいいようがないようなことだったと思うのです。私も現場に行かせてもらいましたし、写真等々も見ましたけれども、ヘリのモーターとか、いろいろなところに飛んでいるのです。あんなことがあって、怪我をする人もいなかったのは本当に奇跡だったと思うのです。政府の受け止め方は、最初はやはり九五年のときと同じようにとありますが、非常に甘いもので、県の対応も、知事が帰って来られたりとかして若干軌道修正はしましたけれども、少しブレが出たり。対応についての問題もあとで出てくるのではないかと思います。先生は、あの事件が起きたときに、どこで何をしたらよかったのですか。

吉元 ちょうど家にいました。あれは二時過ぎだったと思います。四時ごろ聞いています。那覇におりました。

佐道 ご自宅にいらっしやう。

吉元 そうです。

佐道 何かその……。

吉元 テレビで、リアルタイムですつとやっているやつですね。最初はビデオでしたけれども、そのあとはずつとやっていましたから。それとラジオですね。二つ。「とうとう」という感じでしたね。二〇〇三年四月に宜野湾市長が誕生、五年以内に普天間の撤去を実現させていくということを公約に当選した。一時期、「何

を言っておるんだ」という冷やかな声が県内から幾つかありました。私はむしろ当然だと思った。二〇〇八年、北京オリンピックですから、当然それまではね。とにかく射程距離になってきた。そう思っていただけに。

佐道 伊波市長の誕生に先生も深く関係されている。

吉元 直接関係はしていない。同じ自治労という組織の、彼は県議員でしたしね。特別執行委員で。私は副知事でした。副知事時代も自治労とは「特別県制」の研究などで、ときどき呼ばれたりしています。伊波さんが県会議員として国際都市、基地返還アクションプログラム、それから全県フリーゾーンなど、どっぷりつかっています。そういう枠組みの中で彼は構想し始めたのでしよう。特に稲嶺さんが誕生した後、やはり普天間の基地が焦点になって、県内移設というのに猛烈に反発して、前の市長の「普天間がなくなるならば、県内移設はやむをえない」という発言に対して、彼ら自身が推薦していた、作り上げてきた市長を批判して、立候補した。そういう意味では、彼の当選は大きな変わり目です。

それは何かというと、二〇〇〇年あるいは二〇〇一年以降、特に同時多発テロの問題以降、基地問題が県民生活、従来からいうと危険とか地位協定の問題にかかわるような意味での米軍基地の「重さ」とか、面積的な問題があったが、あのテロ以降は日常的に危険と同居しているというのを実感させられた。つまり、全国から機動隊が来て、米軍基地を金網の外から住民地域に向かつてガードする。あれは異様な感じですよ。基地周辺で生活している方々から見れば、本当に異常に感じたんじゃないですか。だから、新しい危機意識をあれで持たされたと思うのです。ですから、今の知事の政策である県内移設、これも否定した。そして五年以内ということも政策に掲げた。だからまあ、彼がなぜ五年という数字を掲げたかというのはいろいろ言い方があった。

佐道 事故が起こって、その活動というのはかなり活発で、市民

の立場というのをかなり強調されて、市民の安全を求めるということでもかなり評価されるのだと思います。一方で稲嶺さんも、もちろん知事の立場として、最初は小泉さんに会えないというようなこともあったのですが、アピールを繰り返された。ただ、若干後で批判も出てくるのは、どうしても辺野古移設という問題が絡んで出てきてしまって、そこは現に進んでいない問題ですし、進められない問題ですね。全国でアピールする場が沖縄県知事に与えられているにもかかわらず、アピールしきれなかったという部分が非常に強く、見ている我々からすると印象的に思ってしまったのですけれども、沖縄県の中でも、そういうところがかなりじれつなところがあるのかなと。

吉元 大田県政が県民に問うて、そして合意を得て、国に突きつけた基地返還アクションプログラム、新しい知事はこれを全否定した。じゃあ、何が出てくるのですか。答えきれなかったのですね。ただし、彼を推薦した自由民主党の県議員の中から、SACCOIIを作るように要求すべきだと。そのための提案を沖縄県が出すべきだと。与党から言われても、これさえ言いきれなかった。彼に言わせれば、経済的な問題として捉えた、ということでしょうね。稲嶺さんの体質からいうと。あれを経済的にプラスに転化していくための公共事業として続けていく必要があったでしょうね。それは、幾つかの県内のゼネコンと具体的な提案をしておいたいきさつもあったわけですからね。山を削ると大変だから。選挙のときには、彼は山を削るといったんです。当選してから海になった。公約違反だとまで批判されたが、当選した強みで、それで押し通した。そのときに、「海だったらまずよ」「いや、そうじゃなくて埋め立てだ」と。「あ、それならできる」というのが県内の業者の言い分です。山を削ると環境問題になるということですね。問題は、住民投票をして「ノー」という結論が出た名護市長がどう受けとめるか。彼は、いろいろこぼしたらいいですね。

そういう意味では条件をつけて、安全について、あるいはいろいろな条件の協定をとった上でしか認めんと。だから、埋立てについてゴーサインは出してない。着工については、知事も名護市長も留保したままです。そういう意味でいうと、やはり経済的な側面、つまりそれが県内経済にプラスになる条件として北部振興、つまり北部の海に金をポーンと出す。そういう流れをプラスとして、「いやもう、これしかない。むしろそれでいい」と積極的に受けとめた。それから出てくる結論はもうはつきりしていますよ。自分のほうからはノーと言わない。だから、「閣議決定もしたし、日米で決まったことだから、日米政府で決めてくれ」と言っている。日米政府が作らんと言うのだったら、いいよといっている。そこがいま問われています。県民的な世論調査も、圧倒的に、どのマスコミがやっても「ノー」という結論がポーンと出る。それでも頑張っている。

佐道 しかし本当に、先生がおっしゃるように、沖縄県の知事であれば、「沖縄県はその閣議決定を守れないから変えてくれ」と、違う決定をしてくれ」というのが筋ですけれどもね。辺野古移設は沖縄県の総意としてはないとお考えですか。

■ 沖縄駐留に「くだらないアメリカ軍

吉元 ないと見たほうがいいです。それは、自民党の県会議員たちがそう言っているから、もうないでしょう。それは、アメリカサイド、ペンタゴンからは出ていないけれども、幾つかのシンクタンク、クリントン政権時代の担当者とか、ペンタゴンにいちばん近いシンクタンクあたりからの発言というの、もう沖縄には置けないと。できれば嘉手納に統合してもらえればいいのだけれども、今日的には、沖縄から出すという点では、もう間違いない認識はアメリカ側は統一していると思う。どこに持っていかははまだ日米で合意していないけれども、しかし沖縄から出すことに

ついて、日本政府も「ノー」と言わん。

佐道 その構図があまりにもはつきり見え過ぎちゃっているというところがあると思うのですが。

吉元 沖縄は、日本政府が金を出すといえれば黙ってきた、という流れにまた拍車をかけた形です。

佐道 米軍が、海兵隊については、今の沖縄駐留にはあまりこだわっていきませんよということ自体は、アーミテージ・レポートの中でもSACOの見直しという形で出てきている。

吉元 二〇〇〇年でしたね、十月。そのためにどういう手を打っているかということが問われているので。私は、結論は、オーストラリアの北東部から北西部の三ヶ所に二〇〇七年までに海兵隊の基地をつくる、とアメリカとオーストラリアの協定が結ばれた。そこに海兵隊が移ることについてはほぼ間違いない。そのほうがインドネシア、インド洋には近いし、いちばんプラスなんですよ。もう一つは Guam でしょう。Guam の基地整備を、見てきたマスコミの報告を聞くと、アンダーセン基地は整備が完全に終わって、新しく港湾の整備に入っている。そういう意味では、大西洋のアメリカの空母群も、二つくらいは新たに東アジア、太平洋に回すという。それらしい動きが既に出ている。そういう意味でいうならば、沖縄から海兵隊が兵力を削減するというのは理屈ぬきで当然だと県民は思っています。ただし、全部撤退するのかわるかというのが問われている。それに、どういう段階で、何から減っていくのか。ということでしょう。

佐道 アーミテージ・レポートが出て、海兵隊も再編するようになるぞということがアメリカで前から示されていて、政府の側も実は対応が遅かったのだと思うのです。何も考えずに放っておくというか、考えきれなかったという時間があまりにも長かったんじゃないかなという気もするのですが。沖縄のほうも、やはりそれはそれで、長いこと現状が続くということを前提に物を考え

ていたという節があると思います。

吉元 ありますね。ないとは言いませんね。ただ、私たちは警鐘を鳴らして、事実はそのようになります、と言ってきた。決定づけたのは「ヘリの墜落事故」です。これはもう決定的だった。九五年九月四日の少女暴行事件がSACOに結びついた。その後、もやもやし、沖縄の事情で県内移設という形に持っていかされ、金を持ち込まれて、「けしからん」というやつと、「いいんじゃないか。黙っとけ」というやつと真つ二つに割れた。ある集まりに呼ばれたときに酔っ払った若い連中が怒っていたのは、「人間が死ねば進むのか」という。これは辛い言い方ですよ。ドキッとします。いまの県政のもう一つのずるさは、地位協定にすり替えたことです。地位協定を改正しても基地の被害がなくなるはずがない。基地があるかぎりなくならないのです。うまく工作し、そういう方向で詰め、自民党そのものもその受け皿、研究会を作るといって受けとめながら時間をつないだ。結局、動ききらなかった。防衛族というのですか、ジャパン・ネオコンといわれている若手の連中も、地位協定について勉強会を作る、作ると言っておきながら、結局時間が経っちゃったでしょう。全国知事会に沖縄県が持ち込む。なかなか動かん。そりゃ動かんですよ。それは危機感が違うのだから。日米安保から五十年でしょう。事件・事故もないところと、日常的に何か起きてくるところは違う。全国知事会では決議し、代表が官邸に行きますよ。しかし、日本政府がその気にならない。それを見る、県民は、シラッとする。「すり替え」じゃないかと僕は言いましたけどね。マスコミもそこを指摘しておった。人身事故がないから幸いにしてといつたほうがいいのですが、このことで一挙に本質に迫って、やはり基地をなくせということに立ち戻った。だれかが犠牲にならないといかんのですかね。悲しいですね。

佐道 一ヶ月ずれていたら、今度は大変な被害になっていたこと

は間違いないと思うのです。実際に八月の事件の後でも、沖縄県側からはとにかく、公式には地位協定をなんとかしてくれという話しか出ていません。辺野古の問題がいまネックになっているのですから、そういう問題しか出てこないということでは見えなかったですよ、地位協定も、やはりあれを改めることはやらなきゃいけないと思いますけれども。ただやはり、日米安保体制の中における基地のあり方ということが根本問題ですね。日米安保体制が五十六年にできて、六十年に改定されて、そのままいいのかと。そうすると、基地と自衛隊の交換というのを基本的な性格にしている日米安保体制のままであると、沖縄に七五%も偏在しているというのはどう見てもおかしいということにしかならざるを得ないので、そうすると、せつかく防衛大綱を作り直して二十一世紀の安全保障を考えると、ここに思考が固まってしまっていると思うのです。日米安保体制を維持するということが必要だという議論はそれでいいし、それもあるのだと思うのですけれども、ただ、四十年前、五十年前の枠組みのままのものでいいのかとか、あるいは、もう少し日本の役割をどうすべきかとか、その根本の議論がないまま、現状の枠組みの中でどういじられるかということしか議論がされていなくて地位協定に行っちゃう。

吉元 外務省が沖縄にあれば、そんな議論にならないでしょうね。外務省が沖縄を知らないだけじゃなくて、基地を知らないんです。駐留米軍の実態を知ろうとしない。これはもう致命的だと思えます。そのことは、ある意味では防衛庁も肌で感じていない。対等な付き合いをしていないだけに。外務省に言わせれば防衛庁、防衛庁に言わせれば防衛施設庁。つまり米軍基地の活動、機能を整備している、あるいは提供しているのは防衛施設庁に特化されていた。防衛庁の中の一つのセクションにすぎない、ここが全て。

佐道 施設庁というのは政策官庁ではなくて、実施官庁ですから、

あそこになんかを決めろということ自体、無理な話なんですよ。

吉元 そこにすり替えているんですね。外務省の沖縄事務所というのがある。

佐道 大使がいらつしやる。

吉元 防衛施設局がある。沖縄もそのところをよく知っている。だから大使のところへ行くより、防衛施設局に行くんですよ。そこがすべてを、政治的工作までやる場所だから。外務省は何のために置いたのか。SACOとの関連で、九五年の少女暴行事件で、「これでいいのか。沖縄はそれでいいのか」と言ったときに、橋本さんが沖縄事務所をつくることになった。西銘知事の時に、既に外務省から一人職員をとってあったから。次長クラスの参事という形ですね。

佐道 それは県庁の中に。

吉元 だけど、まったく何をやっているの？ということだった。

佐道 事務所ができて、具体的にはどういう役割を果たしているのかぜんぜん見えないのですけれども。

吉元 設置した直接の目的は、米軍基地の日常的な問題に対して、官邸に正しく沖縄の事情を説明することですよ。事件・事故、この種の問題に対して、きちっと在日米軍、沖縄の責任者に対して抗議して、二度と起こさないようにする役割ですよ。アメリカ大使館の沖縄事務所もある。総領事館もあるわけですから。日本政府の外務省の出先もあって、アメリカ大使館の出先も沖縄にある。日常的には基地司令官が地域の首長から問題のときには抗議を受けたりする。そういう機能を持っていながらうまくいかないうちの何だろうね。

佐道 本間にそう思いますよね。

吉元 結局は、日本全体と言っているのだけれども、沖縄には日本という主権が及んでいないのでしょうか。

佐道 沖縄はどこの主権の中にあるのかという。

吉元 まさにアメリカ合衆国です。もつと分かりやすくいえばペンタゴンですよ。もつと分かりやすくいえば、在日米軍司令官です。この構図は復帰前とまったく変わっていません。それを考えるのは何かというと、平等で対等な日米安保ですよ。そのものを正さんと絶対にだめです。私たちはそれを要求してきた。大田知事が誕生したときも、「安保条約は反対です。将来的には平和条約に切り替えてください。しかし、いまずぐとは言っています。日本全体の中でそういう理解が深まっていくことを望んでいます」と、ずつと言ってきたのです。だから、二〇一五年までの長さで幅をおいたわけですよ。二〇一五年までというと、東アジア全体の中で、ですよ。それを無視するという日本の政治、永田町の政治というのは、これは僕には考えられないですね。日米安保は軍事条約だけではないから、少なくともそれに依存し、その保護の下に居たほうがいいかも。米国に従属してきた戦後の日本の経済、文化のあり方、そういうのを変えようという動きがないですよ。復帰の段階が一つのチャンスだと思っただけですがね。一つのチャンスはいまだと思っています。

■アメリカ軍再編で大きく変化する 沖縄の兵力配置

佐道 まさに、いま米軍再編ということの中で、沖縄から海兵隊が、完全かどうかは別として、沖縄の兵力配置がかなり変わるといことが目の前に来ているわけですね。これは、どう考えても沖縄の政治にかなり大きな影響を与えるのだろうと予測するのですけれども、実際どうなのですか。

吉元 大きいですよ。米軍基地の七四％が減るんです。兵力の六三％近くが減るんです。沖縄本島中南部の都市の米軍基地の中で残るところは、嘉手納基地と、弾薬庫と、グリーンベレー部隊、それにホワイトビーチが基本です。あとは全部海兵隊ですから。

それを考えると、中南部都市大改造ですよ。それが国際都市形成の中心課題です。それを一挙にやらないで、二〇年の長さでやろうと構想したのです。政治、経済、それから県民生活の場そのものに与える影響力はすごいです。私はあの構想の中で、普天間瑞慶覧あたりを含めて特別法をつくって、抜本的に都市構造を変えなきゃいかんというような仕事だ、ということ提案したのです。沖縄の政治に与える影響というのはすごいです。それが、日常的な反基地闘争、平和運動に与える影響も大きいでしょう。与えるかという意味でいうならば、長い長さでいうならば、それは本当に落ち着いた運動として持続していくでしょう。むしろ決してなくならなんでしょう。

佐道 今後は、先ほどの自治体再編の問題とまさに絡む問題になってくるのですけれども、先生がおっしゃるように、これまでは議論であつて、多分こうなるだろうということはもちろんあつたにしても、目の前に来た問題ではなかつたわけですね。基地がどうなるということは、これからはもう、今度はスケジュールの問題と、どこがどうかという非常に具体的なポイントの議論になってくる話が、今年、それから来年ということになってくるわけですね。例えば、基地の存在をあてにして政府からお金をもらつてくるといういまの仕組み自体も通用しない話になってきますし、それこそ、先生が国際都市形成構想で基地の跡地という問題を念頭に置きながら、沖縄の経済構造を変えらるることを計画されていったわけですから、現実の問題として今度はそれを考えざるを得ないという話が目の前の課題として本当は出てきていることではあるのですよね。

吉本 幸いなことには、県の振興計画、十年計画のちようど中間にくるんですよ。あと二年ですね。後期の進行計画のまよめの作業に入っている。一方で、国の計画そのものが全国総合計画の見直しを、次期全総の検討をしています。国土保全とか、国境との

関係を含めて、いわゆる海域を含めて「安全」というものが、国民生活と色々な形で国全体の施策の中に位置付けられてくるでしょうね。そのところで、今まで欠落していた国や、県レベルの計画に、色濃く安全保障を意識した、それはテロとか災害を含めた、そういうポリユームが増えるでしょうね。だけど、沖縄の場合は、まだ文字通り「戦後処理」として、基地の跡利用という、今までにやつたことのない大きさでポイントと出てくる。言えることは、市町村合併にしろ、地域振興にしろ、中期計画の整備にしろ、都市整備にしろ、嘉手納基地は飛行場として跡利用していくという県民的コンセンサスはできていると思います。不動だと思ふ。だけど、それ以外のところは全部元に戻っていく。そのときに、今まで議論していた市町村合併というものはどうなるかという議論は、住民にとつてみれば、地域の人々にとつてみれば、もつと切実に出てくる。分かりやすくなつてくる。

佐道 それが絶対に必要な議論になつてくるのですね。

吉元 そういうことだと思ふます。抽象的な論議じゃなくて、実際の議論が、市町村合併の枠組みとの関連で、自治体の財政問題とか、効率性の問題が出てくる。

佐道 そうみたいです。

吉元 沖縄本島について言うなら、大きいでしょうね。

■自衛隊再配備の問題

佐道 米軍がいなくなるというところで、もちろん全てということではありませんが、自衛隊の再配備という問題が出てきますね。

吉元 予測できる範囲は明らかです。今度の防衛計画を見て、その裏を読み取るとするならば、米軍が撤退しないと、沖縄県の南の先島地域には自衛隊を配備しようとする。撤退すれば、密度が濃くなる。基本的には沖縄本島についてはほとんど変わらんと

見えています。ただ、自衛隊の混成団がおる那覇空港に隣接しているエリアでいいのか、という疑問はあります。私は、基地返還アクションプログラムを議論した段階で、「予測すべきだ」ということを、地域に対しても、県庁のプロジェクトチームにも言っていたんです。あそこに自衛隊をずっと残すことの不自然さというのがありますね。もつたない。あそこをどういうふうに使おうとしたかという点、空港の沖合いにもう一本滑走路を造って、国際的なハブ空港に。同時に港湾の整備。那覇軍港をなくして、民港として、必要な軍の船は入れてもいいから。つまり、港湾と空港をワンセットにして、国際的な人とモノとのセンターにしよう。そのときに、今の自衛隊がおるあのエリアは全部明けてもらう。じゃあ、自衛隊はどこに行くのか。航空自衛隊は、嘉手納にぶち込めばいい。いちばん最後まで残るから。じゃあ、海上自衛隊はどうするのという論議があったから、これはホワイトビーチにぶち込めばいい。これもいちばん最後の撤退だから。そうすると残るのは陸上自衛隊。これは海兵隊があったところで都市地区でないところに押し込める以外にないじゃないですか、という言い方をした。この発言は相当問題になりましたね。マスコミには載っていませんけれども。それを聞いた政党サイドが、大田支持政党サイドから、「自衛隊を認めている。けしからん」と。その時に、私が言ったのは「基地返還アクションプログラムは、米軍基地の返還ですよ。しかし、自衛隊基地といえども、沖縄県民の生活と生産の場に邪魔になるならば、動いてもらう。山を切り開いて、自衛隊基地を新たに作るという話にならないでしょう。であれば当然のこととして、海兵隊基地をどういう形で使わせるか」、これが一つ。もう一つは、新ガイドラインができた時期でもあったのです。九六年の日米共同宣言を踏まえて。ですからそれも頭におきながら、自衛隊基地は日本の緊急事態には米軍が使う場も当然ある。そういう意味でいうならば、キャンプ・ハンセン

ン以外にないだろうという言い方はしたことがある。怒られましたが。沖縄の一県民としてどう捉えるかという問題もあるけれども、行政における者の捉え方としては、そこは「いや」とか「いい」とかという議論じゃないんですよ。日本という枠組みの中で、沖縄であつても、それはまったく周辺の状況と無関係に生きているわけではない。そういう状態が出てくるまでの間はどうかという議論があつていいわけです。

佐道 いま現在の問題からすると、それこそ先生が関わっておられるいろいろな問題とか、中国との関係ということで、陸上自衛隊を配備という話もありますけれども、より重要なのはやはり海・空という問題だと思っておりますけれども。

吉元 石垣島には千五百メートルの空港。これは軍事に使えるはずがない。キャパシティが一杯です。新しい空港として二千メートルのものを別の場所に造ります。しかしこれも、軍事基地として、自衛隊基地として日常化できるようなスペースなり、あるいは、そういう場ではないです。そうなってくると、あと残るのは同じ二千メートルですが、あと二年後にできる与那国空港ですね。ここに軍事基地をつくったって意味がない。隣の地域、国とあまりにも近すぎます。かえって緊張が増すだけで、戦略上は無意味です。あと残るは、二千七百米ある下地島空港です。今は民間パイロットの訓練飛行場として使っている。それ以外使っていませんから。それを入れるとするならば、航空機材のシエルター（格納庫）を作らんといかんし、同時に港湾も作らんといかん

ですね。兵舎も作らんといかんし、場合によっては、家族を含めてね。そうなってくると下地島だけでは収まらん。都市機能がなから。やはり（宮古島との）橋を架けるだろう。これは宮古郡民の悲願です。その架橋を条件に自衛隊に使わせるといっても政治的には出てくると思います。昨年末の郡民大会の決議は、自衛隊といえどもだめだ、と。それは相当大きなボタンのかけ違いを

した節があります。それ以前に、お忍びで入りこんだ自民党国会議員の若手の防衛族といわれている連中が、ごりごり荒らしまわったいきさつがあつたようですね。尖閣との関連で、国の安全のため地政学的な論議をさちつとできるのであれば、そう難しいことではないのですが。それを地域が受け入れるかは、また別の話だけでも。

■基地問題に影響を与える台湾—中国関係

吉元 いちばん問題になるのは台湾問題です。私は、台湾問題はドンパチがあるということと解決するような性質の問題ではないと思つて居るのです。去年の十二月の立法院選挙。陳水扁が、五月の總統選挙で自分が当選した後、この選挙のために煽りたいきさつもあるけれども、二〇〇六年の「住民投票」と、二〇〇八年での立法院で憲法改正をしようと。独立とは書かない、国名は変えない、と言つていたが。後見人である李登輝さんが、住民運動として広げているあの流れは、明確な「台湾独立」への方針を持っていますからね。それに向けて、姑息なやり方だと思つたのだけれども、陳水扁は海外の台湾政府の事務所の名称を変えろということをした。そのことで中国を刺激した。あの選挙の結果は、私は細かく情報を持つていないので総括できる立場じゃないけれども。流れからすると陳水扁總統の与党が多数という見方は否定できなかったけど、結果はそうじゃなかった。やはり住民は「そこまでは」と、そう見るのが常識でしょうね。台湾が批判していた香港の動向、経済が落ち込んでいた香港が、中国政府が本格的に支援したことによつて持ち上がつてきている。一方で、マカオが意外なほど、歴史的に見ると「博打好き」な中国の民衆の遊びの場につながつたし。ちよつと余談だけど、北朝鮮もそうなつてゐるしね。あと、中国の国家の仕組みが共産党一党支配だと。あの「革命の世代」が終り、忠実なその「申し子」が終つて、

まったく新しい世代に入った。WTOにも加盟、オリンピックをやり、万博をやるといふ。私は中国自体が、選挙という仕組みを当然として動いて居ると思つています。これが国家レベルでどこまで、どの時点に出てくるか。一方で、歴史的な教訓から当然のこととして、軍事態勢を強化するのは必然。それは、「ピンチのふた」と言われている米軍、日米安保を容認しておつた中国が、日本の軍事力の強化に対する危機感を言い出している。つまり、日本が言つて居ることと中国が言つて居ることは、ある接点では共通している。それに「台湾の独立」を日本側が支持していると。そういう流れを沖縄がどう見ているかということでしょう。意外と沖縄の若者はそのへんを冷静に見ていますよ。

九六年三月の台湾海峡における中国人民解放軍の演習です。私は、その年の十月末に台湾に行き李登輝さんと話し合つた。あのとき台湾海峡には原子力空母が配備された。今はそれを上回るアメリカの軍事力が。米中の軍事的衝突は考えられない。ましてや、台湾独立を理由にといふのはアメリカは許容するはずはない。そうなつてくると、自衛隊が沖縄にどういう形で関わりうとして居るのか。アレルギーをなくそうと思つてやつたらしいけれども、宮古に三千人、石垣に三千人、与那国に千人を配備するという。陸上自衛隊の定数が削減されるからといつて、そんなにはかな話を出す？そういうことを防衛庁の中からリークする。もつと真面目に、冷静に台湾問題を沖縄がどう見ているのか、中国との関係を沖縄はどう作ろうとして居るのか。県政が変わつても、県民の気質は変わつてない。

■沖縄の「いま」そして「将来」

佐道 だいたい自治体の再編の問題から米軍の再編問題ということも含めてお聞きしたのですけれども、最後に、九九年からお聞きして、一応今回先生のオーラル・ヒストリーの冊子を作らせて

いただくというところで、最後の総括といえますか、これまでの先生ご自身のご経歴ということも踏まえていただいて、若干振り返るようなところもしていただきながら、沖縄の政治というのは、先生がご覧になるところ、基本的性質はどうなのか。それから、いま現在の沖縄についてどう思っておられるのか。それから将来ということも含めて、例えば、沖縄はこうあって欲しい、こうあるべきだと。それから、先生ご自身がこれからさらにこういうことをやっていきたいということを含めて、最後にとりまとめを。

吉元 難しいな、いちばん難しい。結論から先に言うと、かつて沖縄は、琉球王国時代にまさに海洋国家として交易で生きてきた。小さな王国が、中国に進貢船を出し、その保護の下で、南はマラッカ海峡まで行った。もちろんルソン、インドネシアにも。北は、鹿児島から、長崎、博多、そして堺、釜山にも。という大ききで生きてきた。それによって国を作ってきた。武器を持たないと、琉球史の中で言われることだが、決してその周辺の国々を敵視したり、下に見てやってきたのではない。それ以上に学ぶものもそこから求めてきたのでしよう。生活の糧であり、同時に自分の文化を作り上げていく、発展させていくためのものを得てきたということなのですよ。

それが、中間を省略するけれども、薩摩の狙い撃ちにあった。そして収奪されていく。三百年近く。それを考えてみるとやはり沖縄という場は、日本というのですか、薩摩を含めて、そういう軍事的な、非常に野心的な、それでいて海洋国家である日本が生きたる術として、その支配下におかれていく歴史もあつた。私たち県民の歴史に、大きく残っています。それがあつたからこそ、国際都市形成構想というひらめきと同時に、そういう状況を展望し、それが現実化していく道筋をつかめるならば、それを描いてみようかという話につながってきた。それは当然のこととして、戦争のない、軍事力を持たない。つまり、素顔で生きるような沖縄の

あり方でしょう。私たちのアイデンティティーみたいなものですね。米軍基地との関係というのは、沖縄戦との関係だけに置き換えるのは間違いだと思います。じゃあ、沖縄戦がなかったら、自国の軍事力を入れて、周辺国と対峙する場にしていいのか。そうではないはずなんですよね。そこはやはり捉え方を、いまの若い連中に、沖縄戦だけに特化するのではなく、沖縄の「過去を見る」ことの重要性を。

でも、日本という国というのは非常に冷淡ですよ。沖縄を、まさに台湾に対する侵略のための「飛び石」として使ってみたり、加えて、太平洋戦争の末期には「捨て石」にした。拳銃の果てには、日本の独立と引き換えに、講和条約三条で「アメリカに売った」のでしたね。まったくの憲法の適用外でアメリカが自由に使った。朝鮮戦争だけじゃなくて、ベトナム戦争の真つ只中にぶち込まれた。

そういうことを通じて、アメリカは日本という意識を持たなくなったのですよね。だから、戦後の一時期、私たちが「沖縄」と言うと、彼らは、「違う」と言うのです。「琉球」と言えと。「沖縄県」と言ったら、「違う」と言うのです。そういう意味で、県民という言葉も使うなど言わんばかりの、「琉球人と言え」と。確かパスポートがそうだった。それでも、ただひたすら日本国憲法を求めてきたのです。憲法に九条があるからということが大きな理由だけれども、それだけじゃなくて、やはり沖縄は日本だったはずなんです。あれほど沖縄を切り捨てたりした日本だけれどもやはり日本でしょうね。これからもそうでしょう。だったら、今まで日本が沖縄にやったことと、これからは違ふと言ってくれ。これを言ったのが復帰段階での「日本政府の声明」ですよ。尊い人命をなくして、そのことを忘れずに平和を確立していこう。これからは、日本政府は沖縄をそう位置づけると。だけど、日本政府はそうしなかった。

これからの話をする、もう少し自由に沖縄に選ばせてほしい。そのときに、沖縄が独立をすることを、県民は一〇〇%選ばないでしょう。そういう冒険主義的な結論は誰も求めん。だけど、元々「あり方」論からして、独立のほうがいいんじゃないかという声を否定してはいかん。そこが基本だと僕は思う。その上に立つて、沖縄の過去と、今と、これからを、私たちは言っているのですから、「よし、それじゃあ沖縄はその方向で」というような、許容の範囲というのかな。それは、政治の場でも位置づけて欲しいと思います。

北海道を自治特区と言った小泉さん。なんで沖縄は昔から言っているのに、具体的に橋本さんの時代に、開発庁をつぶすときにそういう話までやっているのに、なぜそれを忘れるの？そういう意味で言うならば、やはり安保、米軍基地、国家戦略、これからの中国を見る目、ちよっと最近台湾の問題を意図的にでっち上げすぎと僕は思う。そのことが東アジア全体の中で、おそらく日本のあり方を本質的に問うて、それでいいというならば、それも選択肢かもしれないね。でも、そこまで考えないで、いろいろな危機を煽って、当面の目標を達成するためにやる。日米同盟軍と云ったほうがいいでしょう、自衛隊の役割を求めあまり、沖縄のすぐ側の中国と台湾の問題、そういうものをでっち上げるというのは悲しいね。日本の政治は沖縄に目を向けていない。向ける能力がなければ、せめて東アジアの中の日本というのを自覚して欲しい。

私は、結論ですけれども、アメリカと日本の二国間安保をいまずく否定していません。必要ならば、持っていたままでいいと思います。そのことが駐留米軍を常時認めることにはならんはずなんです。民主党の鳩山さんが言っているのは有事駐留でしょう。そういう方法もあるはずなんです。だから、日米安保を、あるいは米軍の駐留を必要に応じてというのだったら、今のままじゃな

くてもいいはずなんです。私たちは二〇一五年という長さで描いた。二〇一〇年を中途にASEANプラス3(スリー)で目指している「東アジア経済圏」。そしてその上に、二〇二〇年を目標に進めようとしている「東アジア共同体」。最近私は「講演」する時に、決まって最初に発言することがある。過去百年、三回血みどろの大きな戦争をしてきた地域がある。ヨーロッパです。その要因は、鉄とエネルギーです。第二次世界大戦が終わって、もう戦争はやめようということで作られたのがEUの前身で、五カ国の共同管理機構です。だからあれは、最初は石炭と鉄鉱石の管理のための場です。それが今日、まさに共通通貨「ユーロ」を持つまでに。ゆくゆくは、NATOではなく、自らで安全保障の仕組みを作るといふ。加えて、かつてのソ連の衛星国といわれた国々が、その魅力に目覚めて入ってきた。ロシアがどうなるか。アメリカは北米だけじゃなくて、二〇〇五年の十二月まではキューバを除く中南米の全ての国々を含めた一つの経済圏に。アジアは二〇一〇年でしよう。これが歴史の必然と思う。北朝鮮問題は、拉致問題を含めて、国家主権にかかわる問題であり、憤りもある。私も三回行ってきた。決してあの国を一〇〇%信用していい、というふうな気持ちにもなれない。なれないけど、だからといって対決ばかりで片付くのかという問題が一つあって。どっちみち南北朝鮮がどのような形で統一を目指していくか、そのプロセスがこの六カ国協議の延長線上にあるとするならば、それは崩さない形で今の日朝間の問題を解決するアクションを起こしていくのが基本。台湾問題について言うならば、やはり中国のこれからを東アジア全体の中で展望していく。ASEANと中国、韓国、日本のプラス3(スリー)の中で、ここがきちっとまとまるのが絶対に必要と思う。日米安保をいまずくなくせとは言わない。東南アジア諸国連合の友好協力条約に日本も加盟した。アメリカに怒られるかと思いい度は「ノー」と言ったが、アメリカは入れと。

その枠組みに中国、北朝鮮、インドも参加した。考えてみると、今の日米安保を軸として、「不安定な弧」と言われている地域、今いった流れの中で経済圏、共同体というふうな発展していくことを一つの方向として堅持し、それを一つずつ積み重ねていくならば、早い時期に日米の関係というものは軍事的な側面から切り替えていく時期がくる、と思います。

その時まで待つわけにはいかん。今、命とくらしに関わっている日常的な問題である基地の過重な負担をどうなくすか。まず第一段階、当面緊急に普天間基地を沖縄から出してもらう。私は、政党が「国内と言うなと、海外と言え」と言うが、「県外も含めて」と言っているんです。それは本意ではなくて、「海兵隊は必要だ」というのなら、引き取ってください」と言うことですよ。そういう意味で、まず普天間の撤退ありき。次に海兵隊です。早ければ二〇〇八年の（北京）オリンピックまでに抜いて欲しい。ついでに、一〇年あたり、上海万博あたりを目標に、台湾問題は中台で目途をつけて欲しい。

それを前提にしながら、沖縄のこれからについて副知事時代に構想したものをもう一回表に出し、再構築したい。でも、そう変える必要はない。もっと現実的になつてきたのが、市町村合併とか、道州制の問題ですね。ここはあのとときよりはもっと表に出して、分かりやすい形で組み合わせていく。それをやっていくためのエネルギーが県民に残っているかどうかということですよ。悔しいけど、あまり顕在化していない。いろいろなグループがある。私が副知事をしたときより、より見えてきたことがある。復帰前に大学の先生が相当私たちに知恵をつけてくれた。「布令」に対する闘い方とか、いろいろな勉強をしたんですよ。当時の琉球大学、復帰直前の沖縄の大学でね。復帰後、国立大学に移管した琉大との関係はなくなった。しかし、急速に動きが出てきた。この四、五年ですかね。意外なほど、若い研究者が前に出てくる

ようになったの。求められれば、積極的に出てくる。以前は特定の人が。今はそうじゃない形で広がりが出てきた。今度は市町村の職員とか、市町村議員とか、あるいは企業に勤めている若者とか、何か政治の発言をしたいなといった連中が、若い研究者と一緒に議論する研究グループみたいな集まりを持つようになった。そろそろ、それを県民運動を作り上げる段階にきた。そういうコーディネーターをこれからは作らんといかんでしょうね。待つのではないで、積極的に働きかけて、そういう人を前に出していく。これからの私の役割だが、そういう場づくり。そういう人をピックアップしていく、押し上げていくための環境作り。ここに集中していいんじゃないかと思つてます。

後は、政党です。日本全国の流れを見ますと、二大政党という表現をしますでしょう。沖縄でも、国政レベルの比例選挙ではそうなっている。民主党が圧倒的に票をとるようになりました。しかし、その民主党は沖縄ではまったく足腰がないんですね。やつと参議院の全国区で一人出した。県議員はまだゼロですよ。

佐道 アンバランスですね。

吉元 そのところをどう埋めるかというのは、民主党自身が沖縄問題を知らんからなんです。いわゆる日本の東京での議論ばかりに集中するからです。それをよく言えば、「政権交替」と言っているが、足元を見ていないのですよ。例えば、安保の問題。しっかり沖縄の現実、過去と今と、そこを踏まえて日本のこれから、それはアジアとの関係でしょう。もちろん日米の絆は大事にしなきゃいかんし、持続させなきゃいかん。これは否定しない。その上に立ってどうするかの話ですよ。だから、地域的などいうか、丸い地球の中で、特に東アジアに、日本が積極的に参画するかということであって、地球の裏側にあるアメリカと日本が一緒にあって、ここは別だという話ではないんですね。アメリカ自体が決してこれからも過去と同じような「覇権国家」ではないと

僕は思う。財政的にもかなり苦しくなっている。抱えているイラク戦争の問題でも。いろいろな意味でも。結局は、ヨーロッパは米英のパートナーシップで。アジア太平洋は米日のパートナーシップでという、あまりにもわかりやすいアメリカ的構図が基礎だ。すべてこのようなことじゃないはずなんです。イギリスはそれを感じ始めたと思えますよ。だからEUの中でも積極的に発言を申しだし、むしろそれをベースにしてアメリカに物を言っている節さえ見えるようになってきた。求められているのは日本の姿だと思えます。国民の目が東アジア全体に向いていくように目を向けることによつてアジアを見てくれればという気持ちです。だから、地域課題と同時に、もう一つは全国的課題を、いま二つのことをやっているのです。沖縄の中では、過去のつながりです。いろいろな若者関係されるけれども、全国的な関わりは間接的で、呼ばれるところに行つて、そろそろ二年後の選挙に向けて、つめなければと。新しい「パーティー」という話もあるけど、そんな簡単なものではないだろう。ほつたらかすと、二大政党が憲法問題に集約されて、その自身が九条に特化されて、振り返つてみると、日本軍の海外派兵に目的化される。それは私から言えば最悪のシナリオだ。

吉元 沖縄におけるもう一つの地域の運動として、島が多いです。からね。島ごとに「無防備地域宣言」をする。この島は、兵力、兵器、他国に対する攻撃の武器は持っていませんよ。ジュネーブ条約に基づき。そういうのを島ごとに議論したらどうなのかなというのを、年明けから。ただ単に憲法九条を守れという次元の話をしているんじゃない。あの沖縄戦で、離島が攻撃をされないで安全に人々が生きてきたところというのは、日本軍が配置されていないところなんです。そういうことを考えていきますと、国境に近い沖縄だけに、しかも島だけに、軍事力をどう配置して

も、昔と違つて上陸してくるわけじゃないですからね。沖縄の安全とは何か、分かるような気がします。全ての市町村で「斐核地域宣言」を堅持しています。次はもう一つ、武装しない、武力を持たない、そういうところまで踏み込んでいく必要がある。だから、「無防備地域宣言」です。

佐道 これは米軍の再編というか、基地撤去ということとセットになるのです。

吉元 もちろんそうです。

佐道 基地があるところで、非武装地帯といつても、米軍の基地があるのに、なぜ非武装地帯だという話になると思うのですけれども。

吉元 そういうことと言つと、沖縄本島にもたくさん宣言できるところはあるんですね。それはもう既に、自治労という大きな全県組織が動き出しています。去年の九月、講演をした。目の前にある米軍基地をどうするかという運動の、もう一つの質を求めるのです。そこまで行きますと、不幸にして、幸いにしてと言つた方がいいのか、東京から煽りそのかしている台湾の危機とか、中国の危機とか、いろいろ反面教師になります。こんなバカな話があるのかなと思うほど、状況は県民に分かりやすいです。かつての琉球の歴史を振り返つた時、あの平和な王国は何をしていたかということをおい出せばいいんじゃないですか。

佐道 琉球人が描く琉球政府というのを掲げて進む沖縄。

吉元 日本という国は、実は多様な地域だと思つたのです。それを、なんかしらん東京というところに集約されたと思う。それはある種、効率的な政治であつたし、それを通じた経済政策、福祉政策だつたと思います。周辺の国々とは疎遠にし、安全保障をアメリカに委ねた。世界第二位の経済大国になった。これから考えると、そのところは緩やかでいいんじゃないかなと思います。いちばんユニークなのが沖縄だから。奄美も一緒になるか、という

ことですよ。

佐道 道州制という話になると、まさに奄美は元々琉球圏です。

吉元 九九年に私は呼ばれました。「講演」の後、その議論に参加しました。夜、奄美の黒糖酒を飲みながら話し合ったのですが、「沖縄県とは統合したくない、琉球だったらやりたい」と。おもしろい表現だね。最初は分からなかったんですよ。そうしたら、鹿児島をやはり意識しています。一足先に復帰したが、鹿児島県という枠組みの中で、俺たちは何だったの？ どうしてもらったの？ という話だね。遅れた沖縄がなんでここまで発展しておるの？ という。それは、抱えている軍事基地との関係で、金の入れ方が違う、と言えばそれまでだけど。それだけじゃなくて、鹿児島の中で一体的に見られなかった節があるね。行ってみて議論し肌で感じた。

琉球諸島自治政府構想を講演した。鹿児島大学の先生ともその話をしています。今でも連絡をくれる間柄です。おそらく沖縄が九州と違う形で一つの行政体を作るならば、奄美に対して、当然のこととしてその選択の門戸を開く。私が言ったのは、抜けるときは住民投票が必要です。そして、鹿児島県の県議会で決議してもらおう。沖縄県議会でも受け入れますという決議をさせます。そうして後は、政府に届けなければいけません、という話をしたら、「複雑だ」と言っていたね。「奄美出身の県会議員はわずかしかないから、通らんじゃないか」と、ワーワー言っていたけれども、「いやまあ、鹿児島もそのときは考えますよ。かつて搾取ばかりしておったんだけど」といったら、大笑いしておった。でも、僕たちがいうほど軽いものではない。長いこと鹿児島県の中でやってきた経緯がありますから。やっぱり琉球弧を全部一つにまとめてみたい。

佐道 元々それが自然な姿だという感じがしますけれどもね。た

だ、一度切られてしまった行政区分というのは、これは難しいですね。

吉元 長野県が。地元は意思決定しておるんだけど、県議会も決めるというのに、知事が「うん？」と。とうとう折れたみたい。あそこでこだわる理由は、田中知事は、地域を知っていないと思うね。感情的というか、こうあるべきだという姿、信州という。しかし、そうはいったって生活圏がどっちにあるのかで割り切らんと。私は、あれを見て奄美のことを思い出す。インターネットで、望ましいパターンじゃないね。例えば、鹿児島県知事がいいよと言って、議会が「ノー」と言ったらどうするか。奄美はきついだらうなと思う。結局、そこに住んでいる人に選ばせるということなのでしようね。

佐道 選挙区の区割りをいじるのとはわけが違いますから。制度というのは、一度出来上がると、自己運動を始めてしまいますから。

吉元 政党の役割が、さつきも二大政党と言ったけど、地域の動きが二大政党でつかみきれるかという点で不安は残ります。もうちょっと緩やかな形で、二大政党に地域の声が出て行くような仕組みがうまく作れるのか。そこは不安です。北海道は、本州の「合衆国」だから理解できる。沖縄は元々違う別の国だから。だから、健全なローカルパーティーというのがあっていいんじゃないかという気がするんですよ。それは国政に大きな力を持っていないなくても、東アジアの中で沖縄に関する課題を議論し、一つのコンセンサスを作っていく。

佐道 そうですね。中央は二大政党であっても、地方はそれぞれ地方自治の中で、地方議会の役割を。

吉元 まさにそこですね。本来的にいうと、これから作られていくであろう市町村合併とか道州制の問題、本当はそこが問われて

いるんです。幸いに、琉球大学の若いこの種の自治の問題について留学して勉強してきた研究者がおりますので、彼らの知恵を借りながら、沖縄全体の合意形成のため、運動のまとめ方じゃなくて、組み立て方をいろいろ論じて見たいなと思います。地中海の

マルタ島の例とか、いろいろあるようですし。私なんかはプエルトリコの形がいちばんいいと思っているが、いつまでもそういつてられない。

佐道 ありがとうございます。

(終了)

政策研究大学院大学（政策研究院）では、「C. O. E. オール・政策研究プロジェクト」を開始する以前の「政策情報プロジェクト」の時期から、具体的には一九九九年から「沖繩問題プロジェクト」に着手していた。「政策情報プロジェクト」は二〇〇〇年度から開始された「C. O. E. オール・政策研究プロジェクト」のいわば前身的存在で、オールヒストリーの実施とケーススタディの作成を課題としていた。外交官オールや政治家のオールで実績を作りつつあった「政策情報プロジェクト」で、ケースの作成を主眼に、具体的な政策課題を検討する中で浮かび上がったのが「沖繩問題プロジェクト」である。

日米安保体制を中心とする日本の安全保障政策を考える上で、沖繩は極めて重要な位置を占めている。それはすなわち、日米安保条約が「基地と兵隊の交換」を基本的性格としており、沖繩に在日米軍基地の約七五％が集中している現実からきている。それを日本国民全体に知らしめたのが、九五年の少女暴行事件という不幸な出来事に端を発した一連の沖繩基地問題であった。無論、沖繩からすれば、第二次大戦後に米軍の軍政下に置かれて以来続いている問題でもあったのだが、それが日本国民全体、そして政府も沖繩基地問題に真剣に取り組まざるを得ない状況となったことが九五年以来の事態の特徴であった。それは当時の沖繩県政が、大田昌秀知事の下、基地問題に熱心な革新政権であったことも大きく影響している。沖繩県の動向が日米安保体制の安定性を左右するほどの問題となったわけである。

九八年の沖繩県知事選挙の結果、三選を目指した大田知事は敗れ、保守の稲嶺知事が誕生し、二〇〇〇年に沖繩で先進国サミット首脳会談の開催が決定されるなど、九九年になると九五年当時と比べれば沖繩基地問題は沈静化の方向に向かっていくように見えた。政策研究院の「政策情報プロジェクト」では以上のような状況を踏まえて、九五年以来、日米両国政府に多大の影響を及ぼした沖繩政治の実情について、オールヒストリー実施を中心とした現地での資料収集を行うとともにケーススタディの対象とすることにしたのである。九〇年代の日米安保体制強化の問題に関しては、ジャーナリズムも含めて重要な著作も出てはいるが、それは日米両国政府を中心としたものがほとんどであり、日米両中央政府に多大の影響を及ぼした沖繩県の動向に関しては未だ明らかにされていない部分が多岐に思えたからである。そこで政策研究院では、具体的には大田元知事を中心とした県政幹部へのオールヒストリーを実施し、将来のケーススタディを行う準備に着手した。そこで、大田元知事と並んで、われわれの「沖繩問題プロジェクト」においてもっとも重要な対象となったのが、この報告書の吉元政矩元副知事である。

吉元氏は一九三六年、日本最西端の与那国島で生まれ、戦争が終わるまでは台湾で生活をさせていたことである。石垣島の気象台に入ってから、米軍政下であって早くから労働運動に携わった吉元氏はその後、活動拠点を那覇に移して若くして労働運動の中心的存在となる。六〇年代には二〇代で沖縄祖国復帰協議会の事務局長を務め、沖縄が本土復帰した後、県職労の書記長や委員長に就任するなど、文字通り沖縄革新勢力の重要な活動家となる。知事選挙をはじめとした重要な政治活動でも吉元氏は重要な役割を果たしており、大田知事誕生についても、吉元氏の存在が大きかったことはさまざまな方面から指摘されている。したがって、吉元氏の経歴はまさに沖縄戦後史の重要部分に重なるものが多く、このオーラルでも、九〇年代の問題にとどまらず吉元氏のお生まれの時点から順にうかがうという、個人オーラルの方法で進めている。なお、沖縄政治の興味を引かれる問題のひとつに出身地の問題があるが、沖縄保守政界の雄であり県知事を三期務めた西銘順治氏とは同じ与那国の出身であり、しかも実は浅からぬ関係があることを本書で明らかにされている。

「沖縄問題プロジェクト」の中心課題である大田県政期、とくに九五年以降の時期では吉元氏は副知事であり、大田県政のまさにキーパーソンであった。沖縄のあるジャーナリストは、「脚本・演出は吉元、主演が大田」という指摘をしているが、それが実際はどうであったのかは、まさにこの報告書を見ていただきたい。少なくとも、大田知事時代に沖縄県が政府に突きつけた「基地返還アクション・プログラム」「国際都市形成構想」の策定に当たって吉元氏の果たした役割が大きかったことは、この報告書と、すでに刊行されている政策研究院の「大田昌秀オーラルヒストリー」を見ていただければわかっていると思う。吉元氏の副知事再任が沖縄県議会で拒否された九七年末から、大田県政が混迷を深めていったように見えるのは筆者だけではないと思われる。なお、吉元氏は労働運動の活動家であった時代が長く、作家ではない。したがって、まとまった著作というものは二〇〇二年の知事選挙への出馬にあたって、吉元氏が代表を務めるシンクタンク・「沖縄21戦略フォーラム」のホームページに連載したコラムをまとめた『将来を見通す目』が十月に刊行された程度だが、現在もホームページへのコラム連載は続いており、またマスコミへも顔を出されており、メッセーの発信者としての輝きは薄れていない。また、より重要なのは、特別県制構想や国際都市形成構想に代表される沖縄の自立を求めたプランナーとしての側面であり、吉元氏の政策能力は、長期的な政局動向の「読み」を土台にした大変透徹したものであるのは、本報告書をこらういただければご了解いただけると思う。

さて、政策研究院では「沖縄問題プロジェクト」プロジェクト実施に当たって、特に沖縄関係の協力者が最初からいたわけではなかった。私がたまたま知己になった都市経済研究所の上妻毅氏が、実は吉元氏に協力して国際都市形成構想の立案に関与されたことを知ってわれわれ

のプロジェクトに対する協力を要請したところご快諾いただき、吉元氏もご紹介いただいた次第である。上妻氏に心から感謝申し上げたい。また、実は「沖繩問題プロジェクト」の一環として上妻氏自身にもオーラルヒストリーを実施させていただいており、その記録は政策研究院に保管してあるが、それもまた何らかの機会に公刊できればと考えている。

吉元氏のオーラルは、伊藤隆氏（政策研究院教授）と私・佐道明広（当時・政策研究院助教）が沖繩に行ってお話しをうかがうという形で開始した。実は吉元氏へのオーラルは九九年に伊藤氏と私が聞き手になって第一回目を実施した後、二〇〇二年七月～八月に同じく伊藤氏と私で二回目を実施し、本年一月、私のみで三回目を実施した。これは、沖繩というわれわれからすると遠隔地に出かけてオーラルを実施することで時間的制約があり何うべき部分が十分聞けなかったことだけでなく、副知事をお辞めになったあとも吉元氏は沖繩の政治の中で一定の存在感を持ち続け、さらに基地問題を中心とする沖繩問題も、これで解決と言うには遠い状況であり続けたために、吉元氏にお話を伺うべき事項が次々に生じたからでもある。実際、吉元氏は二〇〇二年の県知事選挙に出馬され、落選という結果にはなつたが、基地問題をはじめ沖繩の将来をめぐる問題に関してはいまだに影響力を持っておられ、活動も続けられている。ご多忙中、われわれのオーラルヒストリーに長時間・長期間にわたつてご協力いただいた吉元氏に心から感謝申し上げねばならない。また、吉元氏が代表を務める「沖繩21戦略フォーラム」の方々にも、連絡その他で大変お世話になった。感謝申し上げます。さらに、本年実施したオーラルでは、吉元氏のご自宅にうかがった。快くもてなしてくださった吉元氏の奥様にも感謝申し上げます。

本報告書の編集は、眞板恵夫氏に担当していただいた。眞板氏は琉球大学大学院で学び、西銘順治氏をはじめ沖繩現代政治を研究対象とする気鋭のジャーナリストでもある。眞板氏は大田オーラルではわれわれと一緒にオーラルにも参加していただいている。沖繩政治に不案内な者では困難と思われる本オーラルの編集作業を的確に行っていたことに感謝申し上げます。最後に、面倒な連絡や旅費の件をはじめ事務的手続き一切をやっていたC.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト事務局の方々、とくに、二〇〇二年には記録担当として沖繩まで同行するというご苦勞をおかけした三條薫氏に、心から感謝申し上げます。

二〇〇五年二月

政策研究院客員助教授・中京大学助教授

佐道明広

平成16年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究 (COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2005年3月25日〈無断転載禁〉

政策研究大学院大学 (政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446